IS～RED&BLUE～

甘楽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ～ＲＥＤ&ｐ；ＢＬＵＥ～

【Ｎコード】
Ｎ８６００Ｕ

【作者名】
甘楽

【あらすじ】
オーストラリアに存在する国営企業、モルゲンレーテに所属するＩＳ操縦者が、はるばる日本にやってきた！

ＩＳ学園に入学した、王道から逸れた者。
その学園生活で、何を求め、何を成すのか？そして、その目的とは！？
まあ、難しいことはどーでもいい！
レッドフレームとガーベラ・ストレート。コイツを使って、どんな

困難も一刀両断してみせる！
……と、思ってたんだけどな。レッドフレームは壊されて、修理にはしばらく時間がかかりそうだ。その間、頼むぜ、デルタ！

ＩＳと機動戦士ガンダムＳＥＥＤ　ＡＳＴＲＡＹシリーズのクロスオーバー小説です。

※現在、三日に一度、１６時の定期更新を行っています。

第1話　ここから始まる俺の物語（前書き）

はじめまして、甘楽です。

第一話が完成したので、投稿させていただきます。

では、どうぞ。楽しんでいただけたら幸いです。

第1話　ここから始まる俺の物語

「全員揃ってますねー。それじゃあＳＨＲはじめますよー」

黒板の前でにっこりと微笑む（自称）副担任、山田麻耶。若い。いや、幼い。

下手をすれば同年代にすら見える女性は、元気いっぱいといった様子で仕事をこなしている。

その子供っぽい様子を見て、思わず俺は周りを見渡す。右も左も女子だらけ。空席は一つもない。つまりこの人、本当に教師。

（マジかよ…。東洋の神秘ってヤツか？）

そんなどうでもいいことを考えていると、

「…くん、織斑一夏くんっ」

先ほどまで教壇から聞こえていたはずの声が思いのほか近くから聞こえ、あわてて正面に向きなおる。思わず声を上げそうになったが、なんとかこらえた。

「は、はいっ！？」

呼ばれたのは俺ではなく、俺の目の前に座る男…世界初の男性ＩＳ操縦者、織斑一夏であった。織斑も山田先生の接近に気付いてなかったようで、妙に裏返った声で返事をした。まわりから、くすくすと笑い声が聞こえる。まったく、面白い奴だなぁ。アハハハ…

…危ない危ない。もう少しで、俺も笑われるところだった。

「あっ、あの、お、大声出しちゃってごめんなさい。お、怒ってる

？怒ってるかな？ゴメンね、ゴメンね！でもね、あのね、自己紹介、『あ』から始まって今『お』の織斑くんなんだよね。だからね、ご、ゴメンね？自己紹介してくれるかな？だ、ダメかな？」

ペコペコ頭を下げながら言う山田先生。生徒相手にここまで下手（したで）にでるとは…本当に教師なのだろうか。再びその疑問が頭をかすめる。

「いや、あの、そんなに謝らなくても……っていうか自己紹介しますから、先生落ち着いてください」

「ほ、本当？本当ですか？本当ですね？や、約束ですよ。絶対ですよ！」

がばっと顔を上げ、やおら織斑の手をとる山田先生。…顔、近いですね。

織斑は立ち上がり、こちら…というより、後ろに振り向く。その瞬間、俺に向けられていた視線がすべて消える。彼はこのプレッシャーの中、自己紹介ができるのだろうか？そんな俺の勝手な心配をよそに、言葉が紡がれる。

「えー……えっと、織斑一夏です。よろしくお願いします。」

出だしは上々、緊張はしているが、固まってはいないと見た。

「……」

（……それだけ？）

固まってはいないが、勢いだけの見切り発車であったようだ。

「以上です」

がたたっ。何人かがずっこける音がした。かくいう俺も拍子抜けして、虚空にズビシ！とつっこみをいれる。

「あ、あのー……」

山田先生、涙声だ。隣の女性も、やれやれといった様子で首を振り…って、誰だ！？
女性は手に持った何かを振りかぶり…

バアンッ！と、織斑の頭をひっぱたいた。

「いっ――――！？」

たぶん、「痛い」って言いたかったんだな。馬鹿な奴だ。痛いなら痛いって、言えばよかったんだ……。

じゃなくて。

「げえっ、関羽！？」

バアンッ！２Ｈｉｔ！

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者。」

トーンの低い声。すらりとした長身、よく鍛えられて引き締まったボディライン、鋭い吊り目。なるほど、リンクｓ…もとい、豪傑だ。だが、女性に「関羽」とか言っちゃイカンだろ。関羽といえば髭だぞ、ヒゲ。ヒゲの力は伊達じゃないんだぞ？

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」
「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押しつけてすまなかったな。」
一転して優しげな声。戦いの中ではあれほど過烈だが、このような態度も取れるのか、世界最強。意外だ。
バアンッ！３Ｈｉｔ！
「痛ってぇ！？頭の芯からじわじわ痛む！！」
まさかの飛び火！…というか、何故？
「失礼な視線でこちらを見ていたからだ、馬鹿者。」
「…ゴメンナサイ。」
さすがは世界最強。メガネもなしにスイッチの切り替えを…あ、止めて下さい。振りかぶらないで。
「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠十五歳を十六歳までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな。」
…滅茶苦茶だ。理不尽だ。関羽じゃなくて董卓だ。しかし、周りの反応は異なる。
「キャ――――――！千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」
「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！北九州から！」
「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」
「私、お姉様のためなら死ねます！」

何というカリスマ。周囲の女子が一斉に騒ぎだす。もちろん、俺もファンだが、さっきの痛みが尾を引いてか声が出ない。というか、このノリにはついていけない。

「……毎年、よくもこれだけの馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

本気であきれる織斑先生。…アナタ、世界最強のネームバリューが分かってないよね？あんな戦いを見せられて、魅せられないものはいないと思うぜ？

「きゃあああああっ！お姉様！もっと叱って！罵って！」
「でも時には優しくして！」
「そしてつけあがらないように躾をして～！」

…さっきの言葉は訂正だ。これはうっとうしいわ、うん。

「で？挨拶も満足にできんのか、お前は。」

そう言って、射るような眼で織斑を睨む織斑先生。…ややこしい。

「いや、千冬姉、俺は――」

バアンッ！４Ｈｉｔ！

「織斑先生と呼べ。」
「……はい、織斑先生。」

「え……？織斑くんって、あの千冬様の弟……？」
「それじゃあ、男で『ＩＳ』を使えるっていうのも、それが関係して……」
「ああっ、いいなぁっ。代わってほしいなあっ。」

教室内がまたざわめき始める。よほど、織斑，ｓの関係が衝撃的だったのだろう。
織斑なんて名字、珍しいからすぐに連想できると思うけどなぁ…。

「さあ、ＳＨＲは終わりだ。諸君らにはこれからＩＳの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染みこませろ。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ。」

と、無茶苦茶なようで非常に理にかなったことを言う織斑先生。考えて言ったのか、それとも素か。……おそらくは、後者だ！

それはともかく、

（そろそろ織斑を座らせてやれよ…）

そう、織斑一夏は自己紹介の時からずっと、所在なさげに立っていたのだった。

「席に着け、馬鹿者。」

ようやく座り、前が見えるようになった。さて、これでようやく授業…。授業…？

（……何だろう。何か、大切なことを忘れている気がする。）

自分の自己紹介が済んでいないことに気付いたのは、一時間目の最中であった――

第1話　ここから始まる俺の物語（後書き）

ほとんど原作通りですね。ハイ、主人公。名前どころか性別すら不明です。

まだ一話以降が書きあがっていませんが、近いうちにｕｐします。

第2話　自己紹介。俺の名前は…（前書き）

二話目です。

ようやくセシリアさん登場。若干ギャグ仕様かも。

では、始まります。

第2話　自己紹介。俺の名前は…

一時間目。科目は「ＩＳ基礎理論授業」。授業自体は、予習どおりの内容だったが、俺の手は板書をとっていない。なぜなら……

（自己紹介の機会が…無かったッ！！）

衝撃の事実に気付き、打ちひしがれていたからだ！
あまりの事態に愕然として、上の空で――気が付いたら、授業は終わっていた。
そして今は休み時間。教室も騒がしくなってきたが、妙な空気になっていて、俺の周囲には誰もいない。…いや、いるにはいるが、微妙な距離を保っている。
アレか？自分から話しかけるのは気まずいか？初対面で「やあ名無しの権兵衛くん」とか話しかけたくはないってか！？
……同感だ。俺も、名前を知らない奴に話しかけるのは、苦手だ。

「なあ、ちょっといいか？」

そんな微妙な空気を払って話しかけてきたのは、気軽に話せる唯一の例外――――俺の前に座る、世界初の男性ＩＳ操縦者、織斑一夏であった。

「ん、どうしたんだ織斑。なんか用があるのか？あるんだな！」
「な、なんで断定形なんだよ。と、いうか、近い！顔が近いから！」

…っと、興奮しすぎていたようだ。自重しよう。

「いや、悪いな。周りに誰も知り合いがいないうえに、こんな環境だから、つい…な。」

「ああ、気にすんなよ。その気持ちはよく分かる。すごいよな、女子のパワーって。」

「特に織斑先生が現れた時の騒ぎようといったら…。」

「ファンが多いのは知ってたけど、あそこまでだと軽く引くぜ。…ところで、本当に今更なんだけど、お前の名前は？」

……来た！その質問を待っていた！

すごいぜ、空気が読める男、織斑一夏！よっ、大統領！！

「あ、そういえばまだ自己紹介してなかったっけ。」

まわりの女子の話し声のボリュームが落ちたのが分かる。みんな、俺に興味津々か。そうかそうか。…ならば、期待に応えようではないか！

「俺の名前ｈ……「ちょっといいか？」…」

「え？……箒？」

「廊下でいいか？」

「あ…いや…」

どこか申し訳なさそうにこちらを見る織斑。話に割り込んできた女子は…こっちを睨んでる。しかし、この顔、どこかで――――？

「…あ、篠ノ之　箒？」

ギロリ、とこちらを睨む目つきが鋭さを増す。その様は、まるで抜

き身の日本刀…

「なぜ私を知っている？お互い、初対面のはずだが？」
「もちろん初対面さ。ただ、俺はお前を知ってる。…というか、新聞で見た。
……全国大会で優勝するほどの腕前、一度やりあってみたいと思ってたんだ。」
「ほう、それを知ってなお挑むか。……面白い。」

互いに好戦的な笑みを浮かべ、目線がぶつかり合う。と、そこへ、

「ところで箒、話があるんじゃないのか？」

織斑の一言によって、場の闘気は霧散した。最終決戦的な流れだったのに。空気読め。

「あ、ああ、そうだった。早くしろ。」
「お、おう。」

二人はすたすたと廊下へ向かう。再び、俺は取り残された。

「ちょっと、よろしくて？」

今度声をかけてきたのは、金髪蒼眼、おまけにロール髪の女子だ。
…今にも「おーっほっほ」とか言い出しそうな。あくまでイメージだけど。
微妙な上から目線や、腰に当てた手が、その印象を補強する。

「訊いてます？お返事は？」
「ああ、悪い。考え事をしてた。それより、君は誰？そして用件は

？」

すると、彼女は信じられないようなものを見る目でこちらを見る。気のせいか、その瞳には怒りが見て取れ…そういえば、なんか女子に睨まれてばっかだよな、俺。

「…わたくしを覚えてない？このセシリア・オルコットを？……そうですか。一度負かした相手など、忘れましたか！わたくしはあれから訓練を積み、あなたを叩きのめすことを目標にしていましたのに！！」

「いや、だから、絶対初対面…」

「まだおっしゃいますか！？だいたい、あなたのことは、昔から気に入りませんでしたの。話しかけて差し上げても無口で、無愛想。それが少し饒舌になったと思えば、野蛮な話し方の上に、わたくしを完全無視。なにより許せないのは――」

そこでオルコットは、一拍置いて、告げる。

「こうして、男のまねごとをして、おめおめと学園に現れたことですわ！山代　葵！！」

「え……それ、多分、人違いじゃ」

「見間違えるものですか！その蒼い短髪、黒っぽい碧眼、日本人特有の肌！全て！記憶の通りですわ！！」

「いや、そもそも俺は…」

キーンコーンカーンコーン。

微妙なタイミングでチャイムが鳴り、織斑と篠ノ之が戻ってきた。

「っ……！またあとで来ますわ！逃げないことね！よくって！？」

そう言い残して去っていく（いや、自分の席に戻っただけだが）オルコット。

早く誤解を解いておかないと、面倒なことになりそうだ。

「……何だ、今のは。」

「…さあ？」

教室入り口で立ち尽くす二人。その後ろには、修羅がいた。

パァン！バァン！！２Ｈｉｔ！

「とっとと席に着け。」

「「は…はい、織斑先生。」」

さて、二時間目もおわり、休み時間。

…え、二時間目はどうしたって？特に語る事は無い。強いて言うなら、織斑は少しバカだった、ってところだ。そしてＨｉｔ数が増えた。それだけだ。

話を戻そう。俺は今、追われている。

「機関」のラウンダー？フラッグファイター？違う違う、マイ☆クラスメイツに、さ。

「待って、山代くん！それともさん？」

「さっきのセシリアの話って、どういうこと？」

「山代くん、調べさせてもらうよ～。」

そう言って、手をワキワキさせながら迫るクラスメイトから逃げるため、セシリアとの約束を無視した俺は、間違ってない。…間違いなんかじゃ、ない。
なんで俺が、女に胸を揉まれなきゃいかんのだ。あの目はヤヴァイ。捕まったら犯されそうだ。…捕まらないけどね。

「とうっ！！さらばだ明智くん！！」

掛け声と共に、窓の外へ。そしてパラシュートを展開し、安全な着陸を図る。

「あっ、逃げた！」
「逃がさないわよ、山代くん！」
「弓道部部隊、前へ！！」

「…マジで？」

ぷすり。

「ちょっと、この高さからヘイロージャンプとか、どこのモダンコンバットだあぁぁぁ！？」

……俺が何をした？

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する。その前に…

山代。何があった？」

俺の制服は穴だらけ・土まみれ・傷だらけと三点そろった、ボロボロ状態だった。織斑先生は、ややあきれた表情でこちらを見ている。

「話すと長くなりますけど、いいですか？」

「却下だ。１０文字以下で説明しろ。」

「今日は飛べなかった。」

「意味不明だ。まあそんなことより…」

自分から聞いたのに、そんなこと扱いで流された。

…痛い。心が、イタイ。イタくてイタくて…泣いてしまいそうだ。

泣いても…いいですか？

「再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな。」

クラス代表。簡単にいえば、ジュニアハイスクールの頃のクラスリーダーのようなポジションだそうだ。対抗戦だけでなく、生徒会の開く会議や、委員会に参加する必要がある。しかしそこは実力主義のＩＳ学園。求められるのは真面目さよりも、強さだとか。

「はいっ。織斑くんを推薦します！」

「私もそれがいいと思います―」

「お、俺！？」

ふう、どうやら織斑に決まる流れのようだ。

「織斑。席に着け、邪魔だ。さて、他にはいないのか？自薦他薦は問わないぞ。」

「ちょっ、ちょっと待った！俺はそんなのやらな――――」
「自薦他薦は問わないと言った。他薦されたものに拒否権などない。選ばれた以上は覚悟をしろ。」
ざまあｗｗｗｗ
別に織斑に恨みはないが、ここで贄になってもらおう。
「い、いやでも――――」
「待ってください！納得がいきませんわ！」
突如上がった甲高い声。それから机を叩く音。振り返ると、そこにいたのはオルコット。
「そのような選出は認められません！大体！男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」
おお、修羅場だ。渡鬼だ。
「実力から行けば、代表候補生のわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！わたくしはこのような島国までＩＳ技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」
…アレ？オルコットさん？アナタはイギリス出身では？
ついでに、その言い方だと、世界最強を敵に回しかねないぜ。
「いいですか！？クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！あるいは…」

チラリ、とこちらを見るオルコット。イヤな予感がする。

「ここにいる、オーストラリアの代表候補生、山代　葵が適任ですわ！！」

し――――ん、と、教室が冷えた。途中まで熱血展開だったのに、最後の最後で台無しだ。

まさか……人の名前を間違えるとは。

「…オルコット。」

「はい、なんでしょう。」

織斑先生は、額に手を当て、ハァ…とでも言いたげだ。

そして俺を指さし、決定的な一言を告げる。

「コイツの名前は山代　紅也。れっきとした、男だぞ。」

第2話　自己紹介。俺の名前は…（後書き）

と、いうわけで、主人公の名前が明かされました。

まだすべての情報がそろったわけではないので、おいおい公開していきます。

現在のストックは3話までです。順調ならば、明日も投稿します。

それでは。

第3話　男？女？（前書き）

はい、第三話目です。

今日で一日目は終了です。初めて他キャラ視点を入れてみました。
キャラの口調などまだ安定していませんが、よろしくお願いします。

第3話　男？女？

「山代…紅也（こうや）？」
「ああ、そうだぜ。」
「山代　葵（あおい）じゃ、ない…？」
「別人だな、そいつは。」
「そんな…それではわたくしは…」

オルコットの顔が、真っ赤に染まっていく。だまされた怒りか、間違えた羞恥か。どちらにせよ、被害をこうむるのは俺だ。間違いない。…だけど、一つだけ言わせてほしい。

「人の話を聞こうとしない、お前が悪…」
「うるさいですわ！許しません！男の分際で、このわたくしをコケにするなんて！
　こうなったら…決闘ですわ！！」
「ってオイ、なんでそうなる…。」

決闘？ヤダ。メンドクサイ。そもそも、俺はどっちかというと技術屋であって、戦う者ではない。ゆえに、戦わない。
…そもそもこの学園に来たのも、最先端のＩＳ技術を見るという名目であって、強くなるとかそういう目的じゃない。だから断ろう。
うん。

「…俺は戦わない、技術者だからな。というか、そもそも戦う意味がないな。」
「なんですって！？逃げる気ですの？全く、これだから男は…」
「聞いてなかったのか？お前と戦っても、得るものなんか無いって言ってるんだよ。どうしても戦ってほしかったら、それに見合うメ

リットを提示してみな。」
「…得るものが無い？ずいぶんと傲慢ですわね。いいでしょう。
そうですわねぇ…万が一あなたが勝てたら、このわたくしの、ブルー・ティアーズのデータを差し上げてもよろしｋ…」
「1週間後の月曜だ。逃げんなよ、オルコット。」
まさに棚からぼた餅。なんという僥倖！数奇！運命！！
「いやぁ、オルコットさんは話の分かるお方ですね。傲慢なだけと思っていましたが、いや素晴らしいビジネスマンです。お会いできて良かった。」
「ちょっと貴方、態度が変わり過ぎですわよ！？そもそも、わたくしはビジネスマンでも、ビジネスウーマンでもありませんわ！」
「…で、そっちの条件は？」
「急に素に戻らないでくださいまし！ついていけませんわ！
……コホン。それで、条件とは何のことですの？」
真っ赤になって、ハアハアと息が切れるまで話したと思えば、急にきょとんとした顔になるオルコット。どうやら、本当に何のことか分からないらしい。
「いや、こっちだけにメリットがある取引なんて、成り立たないぜ。そっちも、勝った時の条件を出してくれ。」
「そういうことですか…。……では、あなたが負けたらわたくしの小間使い――いえ、奴隷にしますわよ。」
「その期間は？給料はいくらだ？」
「そんなものあるわけないでしょう！？」
「いや、俺はもう企業と契約してるから、拘束時間が長いのはちょっと…」
「そういうことなら仕方がありませんわね。では…」

「あー、ちょっといいか？」

「何だ？」「何ですの？」

「…俺はどうすればいいんだ？」

まだ立ちっぱなしだった織斑一夏。軽くデジャヴだ。

ていうかゴメン、正直、忘れてた。

「…とりあえず、他に候補はいないな？ならば、この三人でバトルロイヤルを行い、勝者がクラス代表を決定する。それでいいな？」

「ああ、いいぜ。」

「構いませんわ。」

「オラ、ワクワクしてきたぞ！」

……あれ？俺の一言で、クラスが白けたぞ？

「…勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。織斑、オルコット、山代はそれぞれ用意をしておくように。それでは授業を始める。」

織斑先生まで、馬鹿を見る目でこちらを見てくる。…次からは自重しよう。

時は進んで放課後。今日はいろいろ（例えば飛び降りたり、射られたり、下手に出たり）と忙しかったため、非常に疲れた俺は、授業終了と同時に寮に向かっている。
すると、目の前に、プリント片手に歩く私服女子…もとい、副担任の山田先生が現れた。

「山代くん、寮に向かってるんですか？入れ違いにならなくてよかったです。」
「えーっと、何か用ですか？」
「はい。えっとですね、寮の部屋が決まりました。」
そう言って部屋番号の書かれた紙とキーを差し出され、俺はそれを受け取った。
「１０１７室…ですか。何というか…」
「あ、ええ！？不満ですか？ごめんなさい！」
「いえ、そうではなく…って、泣かないで、山田先生！」

「す、すみません…。それで、部屋なんですけど、ちゃんと希望通りになってますよ。」
「ありがとうございます。…入学前から無理言っちゃって、申し訳ないです。」
「ふ、ふぇ！？あ…どういたしまして。」

どこか照れくさそうな山田先生。正直、グッと来た。
…いや待て俺。確かに彼女は同年代に見える。
だが教師だ。
あのミニコンのように、先生は「年増」だと思えば……

……

よし、落ち着いた。

「では、これで失礼します。山田先生、また明日。」

「あ、はい。また明日。」

そのまま山田先生と別れ、俺は寮に向かう。

部屋には誰もいなかった。俺は制服を脱ぎ捨て、そのままベッドに飛び込む。

睡魔は、すぐにやってきた――――

◆

〈ｓｉｄｅ：織斑　一夏〉

時刻は深夜。俺は唐突に目を覚ました。

…今日は散々だった。千冬姉にバシバシ叩かれ、クラスメイトにケンカを売られ、幼馴染には殺されかけた。女子って全員、凶暴なのか？

話を戻そう。

現在、箒は隣のベッドで眠っていて、起きる気配はみじんもない。

安らかな寝顔…とても、俺の命を狙っていたとは思えない表情だ。

それは当然。現在時刻は午前2時。この部屋どころかこの寮の中でも、起きている人間はいないだろう。

（……眠れないな。半端な時間に目が覚めちまった。）

とりあえず、誰もいないうちにトイレでも済ませておこうと思い、俺は部屋の外に出た。トイレは廊下の端っこにあるはずだが、それは女子用。用務員のトイレでも探すか…と考えながら廊下を進むと、

コツ、コツ、コツ……

誰かの足音が聞こえる。背中に汗がつたうような感じがした。だって、こう考えてくれよ。

男が、深夜に、一人で、女子寮を、徘徊。

（…マズイ、こんなことが箒や千冬姉の耳に入ったら――間違いなく殺される！）

と、いうわけで、俺は暗がりに身を隠す。どうでもいいけどこの状況、第三者が見たら通報モノだと思う。

気を取り直して、もう一度廊下に目を向ける。幸い、歩いてきたのは寮監ではなかった。月明かりに照らされ、その姿が露わになる。蒼いショートボブの髪、黒みを帯びた碧眼、日本人特有の、しかしそれでいて十分に白い肌。どっからどう見ても、山代　紅也であった。しかし…

（む…胸!?胸があるだって!?）

昼間と違い、彼の胸には確かなふくらみがあった。

（じゃあ、セシリアの言ったことって、嘘じゃないのか?山代は…女!?）

彼…いや彼女は、こちらには目を向けず、１０１７室へと入っていった。

第3話　男？女？（後書き）

……と、いうわけで、第三話でした。

セシリアと紅也（こうや）のやりとりですが、「リリシア」と「杉崎」のノリになっている気がします。

戦闘まではしばらくかかるかもしれません。次回もよろしくお願いします。

第４話　さあ…バトルしようぜ！（前書き）

第四話、投稿します。
しばらくは毎日、午後８時に投稿していくつもりです。

この話では、前回の伏線回収は一切行わないので、ご注意ください。

では、どうぞ。

第4話　さあ…バトルしようぜ！

「ん…ふあ…あふぅ。……朝か。」

寝ぼけ眼をこすり、頭を振って意識を覚醒させる。…見慣れない部屋だが、ここは…って、

（ああ…そういえば、昨日ＩＳ学園に入ったんだっけ。）

昨日の記憶が一気によみがえる。ちょっとだけ、登校するのがいやになった。

さて、現状を確認しよう。時刻は午前6時。ずいぶんと早く目覚めたものだ。

ベッドの下には制服が散らばっている。穴だらけ・土まみれ・傷だらけで、もう使い物にならない。…今度、モルゲンレーテで改造してもらおう。魔殺商会の覆面タイツ並の強度にしよう。

……どこからか、「訂正しろ、全身タイツだ！覆面タイツじゃない！！」と聞こえた気がしたが、スルー。

隣のベッドは、シーツも布団もきれいで、誰も使っていないかのようだった。ついでにこの部屋、俺の制服とカバン以外のモノがない。部屋番号も昨日聞いたから、ある意味当たり前なのだが。今日中に、荷物を運びこむか。

と、唐突にカバンの中からブザー音が聞こえる。…ああ、そういえば、入れっぱなしだったな、アレ。

カバンから取り出したのは、取っ手のついたアタッシュケースのような外見のコンピュータ。しかしその正体は、ただのコンピュータにあらず。コイツは…

《私を放置するんじゃない、バカヤロウ！》
「あはは、悪ぃな、８（ハチ）！昨日はすぐに寝ちまったんだ。」
《現在時刻６時１２分…驚異の睡眠時間だな。》

コイツは８（ハチ）。音声入力機能をもつ疑似人格型コンピュータである。また、モニターに文字を表示して、コミュニケーションをとることも可能だ。俺が師匠から譲り受けた物で、今となっては頼れる相棒だ。

「早起きを褒めろよ。」
《６時起きじゃ自慢にならん。アイツを見習え！》
「厳しいなぁ、まったくよオ…」
《それより、モルゲンレーテのエリカからメールが届いてるぞ。》
「何！？Ｘナンバー関連か？」
《違うな。…「紅也、部屋が決まったそうね。８から聞いたわ。ホテルにあったあなたたちの荷物、明日には…いえ、これを聞いてるのは明日の朝でしょうから、今日中ね。今日中には届くように手配したから。感謝しなさいよ。じゃ、がんばってね。」だそうだ。》
「部屋？部屋番なんて伝えてねぇが…」
《ＩＳ学園のデータベースから検索した。》
「……」

どう考えてもハッキングだ。こいつ、無駄に高性能である。

◆

ジャージに着替えた俺は、寮から出て外を走っていた。
現在、時刻は６時４０分。朝食には少し早いため、運動がてらあちこちを見学することにしたのだ。さっきまでは、朝練中の生徒やその監督をしてた教師を見かけたが、このあたりには誰もいない。付近には空手、柔道、剣道、弓道などの道場があるが、今日は朝練はしてないらしく、どこも無人だった。

（…勝手に使っても、ばれないよな？）

俺は、剣道場へと足を向ける。

〈ｓｉｄｅ：篠ノ之　箒〉
（…やってしまった。）
昨日。怒りにまかせて、一夏に暴力をふるってしまった。
軽蔑されただろうか？嫌われただろうか？さっきから、そればかり考えてしまう。

（…ああ、もうっ！落ち着かん！こういうときは…）

木刀をつかみ、部屋の外へ。一夏はまだ眠っている。放って行くことに後ろめたさを感じるも、この気持ちが落ち着くまではまともに話せない。だから、向かう。
おそらく無人であろう、剣道場へ。

◆

剣道場に近づくと、違和感を感じた。
声が聞こえるのだ。男の声が。
男。当然一夏ではない。ならば…

（…山代　紅也か。）

自分を知っている、と言ったあの、好戦的な顔を思い出す。ヤツが剣道場にいるのだろうか？……ならば、ちょうどいい。この憂さ晴らしに、付き合ってもらう。
箒の口角は、三日月のように美しく、歪（いびつ）につりあがっていた。

◆

〈ｓｉｄｅ：紅也〉
「はあっ！」
「ふっ！」
「そりゃ！」
「受けてみろ…一刀、両断！！」

……ふう。けっこう、いい汗かいた。
さて、そろそろ退散しようか…なんて考えていたとき、突然気配を感じた。
俺に向けられた、戦闘の意思。だれだか知らないが、ちょうどいい。

少し、物足りなかったんだ。

「…誰だ、出てこい。」

その声に反応して出てきたのは、つり目のポニーテール女子、篠ノ之　箒だった。

闘気を抑えきれないようなその表情を見て、思わず木刀を握り直す。

「ここは、部外者は立ち入り禁止のはずだ。」

篠ノ之は告げる。が、それは口実に過ぎないだろう。ほれ見ろ、闘気が増してるぜ?

「そういうお前は関係者か?悪かったな。じゃあ行くぜ。」

「そうはいかん。お前は不法侵入者だ。こんなことはしたくないが…少し、痛い目を見てもらう。」

嘘つけ。じゃあ、なんでお前は笑っているんだ。鏡を見てみろ。

「剣道勝負じゃなくて、果し合いが望みか?じゃあ…やろうぜ。」

互いに木刀を構えて向かい合う。そして…

「「行くぞ!!」」

同時に相手に向かって走る。正面からのぶつかり合い。力は、こちらが圧倒的に上だ。

勢いに任せ、篠ノ之を押し返す。

「…っ、何が技術屋だ。十分できるじゃないか。嬉しいぞ。」

「そいつはどうも。あんたも、なかなかの力だと思うぜ。」

篠ノ之は、右上段からの袈裟切りを放つ。俺は刀を寝かせてそれを受け、押し返し――はせず、力を受け流し、その勢いでくるりと回る。

相手の右わき腹へ、峰で一撃。威力は抑えたつもりだが、相手からはうめき声がもれる。

「痛いか？悪いな、手加減はしたつもりだったんだが。」

「チッ、舐めるな！！」

篠ノ之は脇を締め、木刀を短く構え直す。そして先ほどとはうってかわって、素早く打ちこんできた。大振りは効かないとわかった上での戦術変更。やはり、筋は悪くない。

だが、それだけだ。当らなければ、どうということはない！！

バックステップで回避しつつ、時計を見る。現在時刻７時５５分。

そろそろ朝飯を食べないと、授業に遅れる。

「おい、篠ノ之。」

「敵に話しかけるとは、余裕だな！その余裕、すぐに崩してやる！！」

「そろそろやめた方がいいぞ。」

「なら、すぐにトドメを刺してやる！！」

聞いてないな。なら、しょうがないか……

先程以上の速さで床を蹴り、高速で壁際まで後退する。そして木刀の先を床に着け、左足を前に。まるで、スタートダッシュをするか

のようなポーズに、篠ノ之は一瞬戸惑う。
その一瞬が、命取りだった。
「空破斬!!」
俺が木刀を振りぬくと、圧縮された空気の刃が飛んでいく。
それは篠ノ之が正眼に構えた木刀に直撃し、手から弾き飛ばした。
勢いに押され、そのまま道場の床にしりもちをつく。
何が起こったか分からず、呆然とした様子の彼女に接近し、俺は木刀を向ける。
「俺の勝ち…で、いいよな?」
◆
「参った…。私の負け、だ。」
篠ノ之は、悔しそうに下を向く。女子とはいえ、全国大会優勝者。剣には絶対の自信があったのだろう。
「太刀筋が素直すぎる…。剣道なら合格だろうが、真剣勝負には不向きだぜ。
……立てるか?」
そう言って手を差し出す。彼女は少しばかり―少しか?けっこう長

々と―迷った後、黙って俺の手をとった。

「よっこら、せっ…と。悪かったな。けっこう強かったから、つい熱くなっちまった。」

「あ、ああ。気にするな。頭に血が上っていたのは、こちらも同じだ。」

「だろうな、あの顔…滅茶苦茶楽しそうだったぞ。今思い出しても…ぷっ、ハハハ……」

「笑うことはないだろう！だいたい、お前だって…」

ピピピピピピピピピピ！！

「な、何だ！？」

「あ、悪い。俺の時計のアラーム機能だ。」

そう言って時計を見せる。時刻は8時。そろそろ戻ったほうがいいな。

「じゃあ、俺は先に行くぜ。篠ノ之、一人でも大丈夫か？」

「…馬鹿にするな。」

「それもそうだな。じゃ、また教室でな！」

木刀を片付けてから、俺は駆け足で寮へと戻った。

第４話　さあ…バトルしようぜ！（後書き）

「偉い奴が強いんじゃねぇ、強い奴が偉いんだ。」

主人公のキャラには合いませんが、いつか言わせたいですね。

次回は、一夏もちゃんと出演します。

第5話　主役交代！？今日は一夏が主人公（前書き）

第五話です。

ここから、オリジナル色が強くなってきます。
あまりＩＳっぽくない流れですが、受け入れていただけると幸いです。

では、始まります。

第5話　主役交代!?今日は一夏が主人公

寮に戻ると、俺を待っていたのは2箱のダンボールだった。

「これは…一体……」

「お前の部屋宛ての荷物だ。」

「もう届いたのか!?」

エリカさん、仕事が早すぎる。そしてどこから現れた、織斑先生。

「と、いうか、織斑先生。ひょっとして先生がここまで運んでくれたんですか?」

「何だ?まずかったか?」

「いえ…結構重たいのに、よく運べたなぁ、と思って。」

さすが世界最強。ブリュンヒルデは伊達じゃない。

パアン!

「礼が先だろう。」

「ありがとうございましたぁっ!!」

「よろしい。

…しかし、私だから何でも出来て当たり前だとは思うなよ?」

「またまたぁ~。生身でＩＳ倒すぐらいはできますよねぇ?」

バアン!２Ｈｉｔ!

「そのしゃべり方、教師を馬鹿にしているのか?」

「申し訳ありませんでした!!」

「フン…いいだろう。まあ私も、さすがに飛ばれたら勝ち目はないさ。」
（地上戦なら勝てるのか……。）
もういっそ、「人類最終」とか名乗ればいいのに。
「では織斑先生、俺はこれを片付けるので、これで…」
「ああ。遅刻はするなよ。遅れたらグランド１０周だ。」
容赦がない。ため息をつき、俺はとりあえずダンボールを持ちあげた。

◆

ガラララッ！！
「ま…間に…あっ……た？」
荷物を開封し、シャワーを浴びたら、始業時間ギリギリだった。バレないように全力疾走し、どうにか教室に着いた。すでに汗だくで、完全にシャワーが無駄になった。
「山代、ずいぶん遅かったな。」
「ああ…あの後寮に荷物が届いててな…。整理してたら、この時間に…」
「そうか。間にあって良かった…あ。」

俺に声をかけた篠ノ之が、突然固まる。まるで、後ろに誰かがいるような…って！
振り返りながら飛びのき、さらに頭を防御する。そこには織斑先生が――いない？

「篠ノ之。織斑先生がいたんじゃないのか？」
「違う。その織斑じゃない。…一夏を起こすのを忘れた。」
「起こす？織斑を？なんでわざわざ……あ、そういうことか。」

なんとなく理由が分かった俺は、自信をもって答えを口にする。

「お前ら、寮の部屋が一緒なのか？」
「な、何を…というか、なぜわかった！？……はっ！」

「えー、篠ノ之さん、おりむーと同室なんだ～。」
「いいなあ、うらやましいなぁ。」
「篠ノ之さん、ずるい。」
「そういえば山代くんって、誰と一緒なの？」
「え？俺は……」

パパパパパパアァァン！！！
１０Ｈｉｔ！Ｎｅｗ　ｒｅｃｏｒｄ！

「何をしている、馬鹿者ども。席に着け。」
「「「は、はーい。」」」
「はい、軍曹。」

ズドォン！１１Ｈｉｔ！ｏｖｅｒｋｉｌｌ！

「織斑先生と呼べ。」
「……」
「返事もできんか、馬鹿者。まあいい、ＳＨＲを始めるぞ。」
ボケに走る余裕がないほど痛い。
「どうした山代、早く席に着け。それから…織斑はどうした？」
「……あ。」
織斑一夏。遅刻決定のようだ。

◆

〈ｓｉｄｅ：織斑　一夏〉
朝日が顔にあたり、眼が覚める。
今日も良い日だ。伸びをしてわずかに眠気を飛ばし、ようやくベッドからでる。
箒はもういないようだ。剣道部って言ってたから、朝練にでも行ったのだろうと自己完結。
シャワーの音がしていないのを確認してから洗面所に入り、顔を洗う。冷えた水が温まった皮膚に当たり、心地よい。さて、今日も一日頑張ろうか、と考えた矢先――
コンコン。
ドアをノックする音。おそらく箒だ。ひょっとして、鍵を忘れたの

か？

「待った、すぐ開けるって。悪かったな、ほう…って、あれ、千冬姉？何で？」

「何でか知りたいか？なら、時計を見てみろ。」

「時計…？」

ケータイを開く。そこに表示された現在時刻と、千冬姉の顔を交互に見比べる。

すさまじいプレッシャーだ。あの赤い彗星でも裸足で逃げ出すに違いない。そのぐらい、恐ろしい、笑顔だった。

「…言い残すことは？」

「遅刻してごめんなさいぃぃぃ！！！！」

「放課後にグランド１００周だっ！！！」

ドゴォォン！！１２Ｈｉｔ！ｏｖｅｒｋｉｌｌ！

そこで、俺の意識は途切れた――――

◆

気が付いたら、二時間目の授業中だった。

（あれ……俺、いつの間に教室に来たんだ？）

分からない。思い出せない。
必死に記憶の糸を手繰り寄せる。最初に思い出したのは…
月明かりに照らされた、蒼いショートボブの髪、黒みを帯びた碧眼、日本人特有の、しかしそれでいて十分に白い肌。それから…胸。

「……あっ！！」

そうだった。山代は、実は女かもしれない。
昨日気付いたその事実。ひょっとして、この記憶のインパクトが強すぎて、上の空だったのか……。

「あ、あの…織斑くん？どうしたんですか？また、どこか分からないんですか？」

でも、なら何で、わざわざ男装して、ＩＳ学園に来たんだ？
理由が分からない。女子が、男装して、女子高に入学するメリットは…？

「織斑くん？聞いてますか？もしもーし…」

もしかして、アレか。百合なのか？
確かにしゃべり方とか男っぽかったし、制服の着こなしも完璧。俺よりも「男らしく」してた。じゃあ、本当に……？

「織斑くん！！」
「ひゃ、ひゃい！！」

気が付いたら、目の前に山田先生がいた。しかも涙目。まったく気がつかなかった。

「織斑くん、私の授業、そんなにつまんないですか?そんなに、分かりにくいですか?
先生は…先生も、一生懸命頑張ってるんですよ?それなのに…うぅ…」
「え、山田先生!あの、その、えと…」
突然の事態に、俺の脳は処理落ち状態だ。
俺が何かしたのか?俺はどうすればいいんだ?
「あーあ、泣かせちまったな。」
おい山代。こちとらお前のことで悩んでるのに、なんだその態度は。
さすがに、少しイラッと来たぞ。お前に対して敵意むき出しだった、セシリアの気持ちがよくわかったぞ。
…ん、セシリア?
『ここにいる、オーストラリアの代表候補生、山代　葵が適任ですわ!!』
葵…あおい。間違いなく、女の名前。ただ名前を間違えたにしては、セシリアの言葉は不自然だ。もしかしたらアイツは、何か知ってるのかもしれない。
後で聞いてみようか……とか考えていると、
「おりむらく〜ん、無視は、ひどいんじゃないですか?うっ、ううう…」
――いよいよ涙を流し始めた山田先生が。その表情に、強い罪悪

感を覚える。

「山田先生！先生は悪くないです！むしろ俺が悪いです！
先生はとっっっても頑張ってます。だから、だから…泣きやんでくださいよぉ！！！」

今日の二時間目は、結局つぶれた。

◆

「まったく、遅刻した上に、授業の妨害をするなんて…。本当に、男はダメですわね！」

休み時間。いきなりやってきたセシリアの、第一声がこれだった。
かなり辛辣な言葉だが、自覚はあるので何も言い返せない。
とはいえ、あっちから来るなんて、本当にラッキーだ。

「邪魔しに来たのでしたら、いっそ…」
「悪い、セシリア。ちょっと話したいことがあるんだ。廊下に来てくれないか？」
「あっ、い、いきなり何をするんですの？」

そう告げるが早いか、俺はセシリアの腕をつかみ、廊下へと行く。
セシリアも嫌々ではあったが、ちゃんとついてきてくれた。

「……それで、わたくしにここまでして話したいことって、何です

の？」

刺々しい物言いで、俺を睨むセシリア。当然、腕を組むのは忘れていない。

「山代のことを聞きたいんだけど…。」

「まあ！敵に敵の情報を聞きに来るとは、貴方、プライドがありませんのね？」

「ＩＳのことじゃないんだ。アイツの…性別のことだ。」

そのことを口に出すと、相手の雰囲気が変わった。馬鹿にした調子から、真面目な雰囲気へ。どうやら、話を聞いてくれるようだ。

「…何が聞きたいんですの？」

「お前、確か、アイツのことを『葵』って呼んでたよな？ちふ…織斑先生は『男だ』って断言してたけど、やっぱり女かもしれない。」

「まあ…根拠を聞いてもよろしいかしら？」

「昨日、夜中に目が覚めた俺は、眠れないんで廊下を歩いてたんだ。」

「…それで？」

「そしたら足音が聞こえて、寮監だったらまずいから、暗がりに隠れたんだ。」

「第三者から見たら、変態的行動ですわね。」

ぐっ…。俺もそう思ったさ。

「歩いてきたのは、パジャマ姿の山代だった。だけど、昼間と違って、その…

胸が、あったんだ。」

「…それだけ、ですの？部屋の番号とかは分かりませんの？」
「バッチリ見たぜ。１０１７室だった。」

その瞬間、セシリアはハッとした顔になった。

「…山代　紅也の部屋は１０１７室だと、誰かが話してましたわ。
では、やはり…」
「ああ、多分…」

山代　紅也は……山代　葵なのだろう。

「織斑さん、協力しませんか？」
「協力？何に？」
「決まってますわ！山代　葵の、化けの皮を、はがすのですわ！」

第5話　主役交代！？今日は一夏が主人公（後書き）

…なんだか、妙な展開に？
次回、山代（やましろ）の秘密に迫ります！

ところで、今までに出てきた「紅也」と「葵」という名前ですが、作者の好きなラノベからとらせていただきました。
あくまで名前だけで、「力場干渉能力」やら「運動停止能力」は使わないのであしからず。

では、また次回で会いましょう！

第6話　本名？偽名？それとも…（前書き）

はい、第六話を投稿します。

今回は少し長いです。ネタ成分も多いです。ついでに、メタです。ちなみに、ひ○らし風に言うならば、今回までが出題編、次回が解答編です。

それでは、どうぞ！

第6話　本名？偽名？それとも…

〈ｓｉｄｅ：織斑　一夏〉

「…で、具体的にはどうするんだ？」

「そんなの、決まっているでしょう？あなたと山代　葵は、世界で二人だけの男性操縦者…ということになっているのですわよ。その立場を利用して、仲良くなるのですわ！」

「なるほど…。でも、何か、騙すみたいで気が乗らないなぁ。」

「甘いですわよ！先に騙したのはあっちですわ！

…そして自然に部屋に上がって、女であることの証拠を手に入れなさい！！」

最後は、高圧的な命令口調。コイツ、かなりヒートアップしてるな。

「まあ、正直俺もかなり気になるからな。やってみるよ。あ、後お前が言ってた山代　葵のことを聞きたいんだけど、」

キーンコーンカーンコーン

「…また後でな。」

◆

〈ｓｉｄｅ：山代　紅也〉

お、織斑たちが戻ってきた。何を話していたかは気になるが、それを聞くのは野暮だろう。
誰にだって、プライバシーは必要だ。
三時間目が始まる。

「というわけで、ＩＳは宇宙での作業を想定して作られているので、操縦者の全身を特殊なエネルギーバリアーで包んでいます。また、生体機能も補助する役割があり、ＩＳは常に操縦者の肉体を安定した状態へと保ちます。これには心拍数、脈拍、呼吸量、発汗量、脳内エンドルフィンなどが挙げられ――」
「先生、それって大丈夫なんですか？なんか、体の中をいじられてるみたいでちょっと怖いんですけども……」
クラスメイトの一人が、不安げな声で尋ねる。…そういうものなのか？俺の機体はいろいろ変わったところが多いからなぁ。

「そんなに難しく考えることはありませんよ。そうですね、例えばみなさんはブラジャーをしていますよね。あれはサポートこそすれ、それで人体に悪影響が出るということはないわけです。もちろん、自分にあったサイズのものを選ばないと、形崩れしてしまいますが――」
そこまで言った山田先生と、織斑の目が合う。そして、突然その顔が朱に染まる。

「え、えっと、いや、その、お、織斑君はしていませんよね。わ、わからないですね、この例え。あは、あははは……」
ごまかしのつもりか、無理やりな笑い声は、教室の空気を微妙なも

のに変えた。
しかし、若干2名、異なった反応をみせた者たちがいた。

（…織斑君『は』？）
（山代　葵については触れませんでしたわね…）

そのようなことを考えていたなど、山代　紅也は知らなかった。

「んんっ、山田先生、授業の続きを。」
「は、はいっ。そ、それともう一つ大事なことは…」

その後、なぜか十代女子による恋愛しゃべり場が始まった。正直、ついていけねぇ…。

◆

「なあ、山代。」

授業終了後、唐突に織斑が話しかけてきた。
昨日も感じたが、気さくな奴だと思う。なんていうか…こう、からみやすい雰囲気を持ってるというか…ダメだ。まとまんねぇ。

「ん、どうしたんだ織斑。なんか用があるのか？あるんだな！」
「軽くデジャブを感じるんだけど！？」
「いや、悪いな。周りに誰も知り合いがいないうえに、こんな環境だから、つい…な。」

「また同じセリフ！？お前はあれか、ＮＰＣか？」

…うん。からみやすい。

「気にするな。ただ、からかっただけだ。…で、何かな？」

「べ、別に用があるわけじゃないけどな、ホラ、アレだよ。せっかく２人だけの男子なんだから、仲良くなっときたいな～、とか思ったんだよ。」

……これはあれか、ネタフリか？いいだろう、乗ってやろう。

「お前、もしかして…コレなのか？」

右手の甲を左のほほに当てる。いわゆる『オカマ』のポーズだ。

「え、うそ、織斑くんって…」

「この環境で、何の反応もしないと思ったら…」

「えー、超ショックー！！」

「でも…イイかも…」

ざわ…ざわ…

周囲がうるさくなってきた。

「ばっ…違ぇよ！何言ってんだよ！」

慌てる織斑。しかし、前回の話で似たようなことを考えていたのを、コイツは忘れたのだろうか？（天の声）

「ふっ…冗談だよ。」

「ふざけんな！シャレになんねぇよ！！」

「え！？…じゃあ、本当に…」

ざわ…ざわ…ざわ…

「うあーーーっ！無限ループか！？」

パァン！

「休み時間とはいえ、騒ぎ過ぎだ、馬鹿者。」

いつの間に　一夏の背後に　出席簿

現れたのは、もちろん織斑先生だ。いつも思うが、実はどこかでスタンバイしていて、騒いだら出てくるようにしてるんじゃないか？どう考えてもコントだ。タイトルは「絶対に騒いではいけないＩＳ学園２４時」ってとこか？

バアン！２Ｈｉｔ！

「山代。私がそんなにヒマに見えるか？」

「申し訳ございません。」

すぐに土下座。ああ、朝のトラウマがよみがえる。

「…で、織斑。おまえのＩＳだが、準備まで時間がかかる。」

「へ？」

「予備機がない。だから、少し待て。学園で専用機を用意するそうだ。」

「？？？」

顔は挙げていないが、織斑が戸惑っているであろうことは良く分か

る。

一方、クラスメート達は、その意味を正しく理解したようだ。

「せ、専用機!?一年の、しかもこの時期に!?」

「つまりそれって政府からの支援が出てるってことで……」

「ああ～。いいなぁ……。私も早く専用機欲しいなぁ。」

専用機を与えられる。それはつまり、世界に４６７個しか存在しない、ＩＳコアを得るということ。本来なら、国家か企業に所属する人間にしか与えられないそれを、織斑は手に入れたのだ。貴重な実験体として、データを取られることと引き換えに。

（よう…首輪付き。）

なんとなく、某古い王様の言葉を思い出した。

アレか?大量虐殺ルートに入るのか?最後は5対2で決戦か?

「あの、先生。篠ノ之さんって、もしかして篠ノ之博士の関係者なんでしょうか……?」

おっと、分からない人のために補足しておこう。

篠ノ之博士。本名、篠ノ之束。

ＩＳコアの製作者であり、今の女尊男卑の世界構造を作った元凶ともいえる人。一度会ったことがあるが、極度の人嫌いらしく、ほとんど会話が成立しなかった。

師匠曰く、「自分の知り合い以外はすべて有象無象」…だそうだ。

…そういえば師匠は、博士にやたらと嫌われてたけど、なんでだろう?

「あの人は関係ない!」

突如、篠ノ之が大声をあげた。どうしたんだ?誰かが、地雷を踏んだんだろうか?
さっきまで話してたのは、篠ノ之博士のことだから…

「……大声を出してすまない。だが、私はあの人じゃない。教えられるようなことは何もない。」
(…ああ、お姉さんが、嫌いなのか)

篠ノ之博士と話した時、唯一成り立った会話が「妹」の話題だった。
俺が話す以上のペースでまくしたて、その話題を振ったことを軽く後悔したが、そのときはっきりとわかったことが一つ。
少なくとも、博士は篠ノ之が大好きだ。

(…やりきれねぇな。)

ここでネタばらしをしても、篠ノ之の態度は変わらないだろう。それが少し、切なかった。

「さて、授業をはじめるぞ。山田先生、号令。」
「は、はいっ!」

先程までの雰囲気を流すかのように、授業が始まる。

◆

「安心しましたわ。まさか訓練機で対戦しようとは思っていなかったでしょうけど。」

またしても織斑の席にやってきたオルコット。かまってほしいのだろうか？

「まあ、一応勝負は見えていますけど？さすがにフェアではありませんものね。」

「？　なんで？」

「あら、ご存じないのね。いいですわ、庶民のあなたに教えて差し上げましょう。このわたくし、セシリア・オルコットはイギリスの代表候補生……つまり、現時点で専用機を持っていますの。」

…その「この私、○○」って話し方。小物っぽいからやめた方がいいと思う。

具体的には、第一期中盤で黒幕っぽくふるまった挙句、パワーアップした主人公にあっさり倒されて、あげくに部下に「器量が小さい」とか言われて裏切られそうだ。劇場版では出番があって良かったな。

「そして、そこの山代も企業に所属してるなら、専用機を持っているはずですわ。

そうですわよね、山代さん？」

「ん、ああ。もちろん。…っていっても、ウチの量産機のプロトタイプだけどな。」

「へー」

…織斑、やっぱり話について来れてないだろ。

「……馬鹿にしてますの？」

「いや、すげーなと思っただけだけど。どうすげーのかはわからな

いが。」
「それを一般的に馬鹿にしていると言うのでしょう！？」
「…初めて意見が合ったな、オルコット。」
無知は罪だ。俺は、そう思う。
「…で、山代さんの専用機…確か、ジンカスタムでしたっけ？
言っておきますけど、今度は負けませんわよ？わたくしの機体は第三世代。アナタの機体はせいぜい第二世代。わたくしが負ける要素はありませんわ！」
「だから、初対面だって言ってるだろ…。それに、ジンはウチで作った機体じゃねぇ。性能テストを頼まれただけだ。」
「まあ、そうでしたの。じゃあ、アナタの専用機って、何ですの？」
その問いには答えず、俺は無言で手を差し出す。
「？　何のつもりですの？」
「…ここから先は有料だ。」
「情報料！？アナタ、どれだけ意地汚いんですの！？」
「金は貰えるときに貰う。…それが企業のやり方だ。」
「決め台詞が台無しですわ！……もう結構です！アナタがたは猿どうし、仲良く群れていればいいんですわ！！」
フン！とこちらを―心なしか、織斑を長めに見ていた―睨んで、踵を返すオルコット。
何がしたかったのだろうか？
「まったく、何だよ、あの態度！こうなったら、ぜってー勝ってやる！
…と、いうわけで山代、協力してくれないか？」

「……まあ、俺が一人勝ちするよりは面白そうだな。いいぜ、無料（タダ）で協力してやる。とりあえず、学食に行こうぜ。」

「ああ。…っと、箒も誘っていいか？ほら、さっきのアレで、若干浮いてるし…」

「いいぜ。人数多いほうが楽しいし、な。

おーい篠ノ之、一緒に学食に行かないか？」

「……私は、いい。」

まだ、さっきのことを引きずっているのだろうか？反応が悪い。どうする？と織斑に目線を送ると、任せろ、とでも言いたげに立ち上がった。

「まあそう言うな。ほら、立て立て。行くぞ。」

「お、おいっ！私は行かないと――う、腕を組むなっ！」

…織斑、パネェ。あそこまで自然に腕を組むなど、呆れを通り越してむしろ感心する。

そういや、篠ノ之は織斑と幼馴染だ、って言ってたっけ。昔からああだったとしたら、きっと周囲からはカップル扱いされてたんだろうな。

――あ、肘関節を決められた。背負い投げ？違うな、アレは…。アレは…。ま、まあ、なんにせよ、見事な投げだ。

「…痛いじゃないか。」

ネタに走るとは、意外と余裕だな、織斑。ＡＳとＩＳの違いはあるが。

「見事なもんだな、篠ノ之。」

「ふ、ふん。この程度、誰でも出来るわ。」
…お。照れてるのか？面白れぇなぁ。
「まあ、時間もないし、行こうぜ。俺、朝飯食ってないから腹ペコなんだ。」
「む、やはり朝餉を抜いていたのか。」
「俺もな。」
「織斑、お前は自業自得だ。」
「…なあ、その織斑っての、止めてくれないか？なんかこう…距離を取られてる気がするというか。嫌なんだよ。」
「何だって！？お前…やっぱりコレなのか？」
「何ぃ！？許さん、そこに直れ、一夏ぁ！！」
「だからぁ、違うっての！！」
うんうん、非常にカオスだ。にぎやかでいいねぇ。
「じゃ、先に行くぜ～。」
「あ、コラ山代！誤解を解いていけ！！」
「待て、逃げるな、一夏ァ！！」
事態の収拾？そんなの、する気はないね。
◆

食堂。
「すみません、日替わり定食3つ、お願いしまーす。」
「コラ、何事もなかったかのように原作の流れに乗るんじゃねぇ。」
「？　一夏？何を言ってるんだ？」
「いや、なんか言いたくなってな。」
メタな発言をしている織斑は、取りあえず無視だ。
「まあまあ、結果として、篠ノ之はついてきたんだし、良いじゃねぇか。
…名付けて、鮎の友釣り作戦。ミッションコンプリートだ。」
ちなみに、友釣りは、釣ろうとしている野鮎の縄張り内に、釣り人が用意したオトリの鮎に掛け針をつけた状態で進入させ、それに対して野鮎が攻撃してきたところを引っかける技法であるから、ネーミングは間違ってない。
「俺はオトリか！？」
「まあ、原作のように、手をつないで引っ張ってくるよりはいいだろ。」
「さっきからお前たちは何を言ってるんだ？」
「はい、日替わり3つお待ち。」
「あ、どうも。…ほら、自分の分は自分で持ってけ。」
「おう。」「ああ。」
空いてる席を探し、そこに座る。
しばらくは黙々と食べていたが、やがて、織斑が口を開く。

「なあ、山代。」
「紅也、でいいぞ。一夏。
…べ、別に勘違いするなよ！お前がどうしても、どうしても名字が嫌だって言ったから、そう呼んでやるだけだからな！」
「ツンデレ乙。で、教室での話の続きなんだが、俺にＩＳの操縦を教えてくれないか？お前も、専用機持ちなんだろ？」
「そうだぜ。でも、教えるっていっても、まずはお前のＩＳの特徴がわからなければ教えられないぜ？」
「ギブ　アンド　テイクか？さっき、無料で教えてくれるって…」
「そうじゃねぇよ。例えば、お前の機体が砲戦仕様なのに、格闘戦を教えてもしょうがないだろ？って話だ。」
味噌汁をすする。うーん、日本人好みのうす味なんだろうが、ちょっと物足りないな。
オーストラリアの料理って、割と濃い味だったし。
「ってことは、紅也って接近戦型の機体なのか？」
「…俺としたことが、タダで情報をくれてやることになるとは。
ああ、そうだ。でも、ちゃんと遠距離武器も持ってるから、接近戦寄りの万能機、ってとこだな。」
「やはりそうか。どうりで刀の扱いがうまいわけだ。」
と、今まで黙っていた篠ノ之が口をはさむ。食事は米粒ひとつ残さず完食されており、箸も揃えられている。まさに、日本人の理想形。
「え？箒は紅也と試合したことがあるのか？」
驚く一夏。いつの間に…とか、思ってるんだろうな、多分。
「朝に、剣道場でな。時間が無くなりそうだったから無理やり終わ

らせたけど、あのまま続けてたら結構いい勝負になったと思うぜ。」
「どの口がいうか。私を圧倒していたくせに。
…そうだ、あの時は聞き忘れていたが、アレは一体何だったのだ？いきなり木刀を吹き飛ばされたんだが。」
「ああ、アレ？ただの必殺技だよ。」

「「ひ、必殺技！？」」

「…？何だ？今どきのバトルマンガの主人公なら、必殺技くらい持ってるのは当たり前だろ？」
「なんだそりゃ！？」
「さて、ごちそうさまでした…っと。
とりあえず、機体のことを織斑先生に聞いてこいよ。そしたら、放課後に特訓だ！」

そう言いながら、食器を片づける。善は急げ、ってやつだ。
早いうちにアリーナの使用許可と、練習機のレンタルをしておかないと…。

第6話　本名？偽名？それとも…（後書き）

ちなみに、没タイトルは、「セシリアと一夏のともだち大作戦！」でした。

私としては、こういったネタだらけの話は書きやすいです。

第7話　織斑のなくころに～種明かし編～（前書き）

第七話です。

紅也か？葵か？
主人公の正体が、今明らかに！！

っていうほど大げさな内容ではありませんが、よろしくお願いします。

主人公の専用機も登場です。

第7話　織斑のなくころに～種明かし編～

放課後、アリーナにて。

「さて、ここにありますは2機の練習機。向かって右がラファール・リヴァイヴ。デュノア社が開発した射撃型第二世代機。
左は、打鉄。日本が開発した、接近戦型第二世代機だ。…さて、一夏。お前の機体はどんな機体だ？」

芝居がかった口調、大げさな動作。似合わないのは自覚してるが、やってみたくなったのだ。

「俺の機体の名前は白式。まだ完成してないから現物はないけど、武器は近接ブレード一本。完全な接近戦型だって。」
「ブレオンか…それに白式とは…。男心をくすぐられる機体だな。」
「そういうものなのか？」

上から一夏、俺、篠ノ之。現在アリーナにいるのは、この三名だけだ。

「じゃあ、お前が使うべきは、この打鉄だ。早速装着してみろ。」
「あ、ああ…。やってみる。」

一夏は、打鉄に体を預ける。すると、機体が体を包み込んでいき――装着された。

「（…本当にＩＳが使えるんだな。）じゃあ、俺も行くぜ。…８！」
《合点承知！レッドフレーム、展開！》

俺の持つ8が光に包まれ、俺の体に纏わりつく。
同時に脳に膨大な量のデータが流し込まれていくような感覚。そして高揚感。

《レッドフレーム、展開完了》

8のディスプレイ上の文字が、脳に直接知覚される。久々の展開だったが、何一つ不具合は無い。

「ふ…全身装甲(フルスキン)…。」
「カッコイイだろ?特に顔とか。」

親指で、自身の顔を指さす。俺と同じ緑色のデュアルアイに、真っ赤なVアンテナ。それらが白いフェイスをド派手に彩る。装甲色は白と赤のツートンで、胴体部分のみ黒を基調としている。そして、この機体の最大の特徴は――

「その腰にあるのは…日本刀か!」
「ああ!銘はガーベラ・ストレート!こいつに切れないものはないぜ!!」

鞘から抜き放つ。その刀身は、光を浴びて輝いた。
この刀は、師匠がかつて名のある刀工に弟子入りし、一から作り上げたものだ。
こいつに切れねぇモンはねぇ!とは師匠の弁。実際にビームを切り裂いたときは、正直驚いた。

「なんて…なんて美しい刀だ。」
「ありがとよ、篠ノ之。…さて、おしゃべりはここまでだ。空へ上

がるぞ、一夏！」

背部のフライトユニットに点火する。これは元々はＭ１用の装備だが、改造して使用している。その際プロペラントタンクを二基追加したため、稼働時間は従来の倍以上。しかも、全ての燃料を一気に燃やせば、超高速移動も可能となる優れものだ。

「ま、待て！飛ぶっていっても、どうすりゃいいか…」
「エレベーターに乗ってるときを思い出せ！あの浮遊感！それから、ジェットコースターに乗ってるイメージだ！そうすりゃ飛べる。」
「お、おう。…おお、浮いた！浮いてるぜ！！」

文字通り浮かれる一夏。だが、本番はここからだ。

「よし、じゃあ次は武装の展開だ！手の中に刀を出現させるイメージで、いくぞ！」
「いや、そんなの、急には思い浮かばな…」
「じゃあ、篠ノ之を思い浮かべろ！」
「……おお、すぐに出てきた！！」
「ちょっと待て！山代、一夏、どういうことだ！」

「「いや、すぐに木刀を持ちだすから…」」

「…降りてきたら覚えてろよ。」

ハイパーセンサーはすごいな。睨む篠ノ之の目まで、はっきり見える。

《怒》

（…いや、8。見ればわかる。）

「じゃあ、いよいよ模擬戦だ。…ついて来れるか？」

「おう、やってやるぜ！！」

互いに刀を、正眼に構える。いざ、戦闘…開始！！

◆

「…なにか言い訳は？」

「……」

「「一夏！！」」

結論を言おう。互いに正面から刀をぶつけ、続いて放った俺の胴への一太刀は、あっさりとシールドエネルギーを奪い去った。

やったぜ、いえーい。

・一夏３０秒撃破
・一夏ノーダメージ勝利
・一夏孤独戦闘勝利

を同時に習得だ。

「これは…ＩＳ以前の問題なんじゃないか？」

「奇遇だな。私も同じ意見だ。」

「……ゴメンナサイ。」

「なあ、篠ノ之。お前の話では、一夏はお前と同門なんだよな？」
「…箒でいい。少なくとも、私が転校した小学四年生までは続けていた。
一夏。どうしてここまで弱くなっている！？」
「受験勉強してたから、かな？」
「……中学では何部に所属していた。」
「帰宅部。三年連続皆勤賞だ。」
「で、本当のところは？」
「……」

まあいいや。どうせ、なにか事情があったんだろう。

「じゃ、せっかくアリーナ借りたんだから、今日はＩＳの訓練をやろう。
箒もラファールを使えよ。飛ぶだけなら、そんなに変わらんだろ。」
「お、おう…」「ああ。」

その後俺達は飛行、降下、回避などの基礎訓練を、使用時間ぎりぎりまで続けていた。

◆

ＩＳの訓練を切り上げた俺達は、剣道場に集まっていた。

「すみませんね、無理言ってしまって。」
「そんなに気にしないで、山代くん。私たちも、もう練習止める時

間だから。
それに、キミたちの実力も、見てみたいしね～。」

俺は剣道部の人に頼んで、部活動終了後の剣道場を借りることにした。
理由はいわずもがな、一夏の強化である。現在、防具を装備した一夏と箒が、竹刀を構えて相対している。

「では、いざ尋常に～始め！」

審判役の女子が、どこぞの奇策師みたいな合図をすると、二人が動き出す。
互いに竹刀の先端を軽くぶつけ合い、様子見をする。時折、箒の竹刀が一夏の竹刀を横にいなし、ペースを崩そうとする。だんだんと一夏の竹刀のブレが大きくなっていき…
突然。竹刀を寝かせた一夏が走り出す。明らかな胴狙いだ。

「やぁぁぁ！どー……「めーーーん！！」」

バシン！

「面、一本！勝者、篠ノ之　箒！」

鮮やかに一閃。両者の実力差は明らかだった。

「織斑くんてさあ」
「結構弱い？」
「ＩＳほんとに動かせるのかなー」
「いや、最後のは関係ないと思いますよ、先輩。」

「やはり……だいぶ弱くなったな。」
「ああ…。そうみたいだ。」

一夏は、かなり悔しそうだ。多分、昔は箒の方が弱かったんだろう。しかし、希望はある。一夏の目には、やる気が宿っているように見える。今の敗北が、いい刺激になったんだろう。…こういう奴は、必ず強くなる。

「よし、じゃあ、明日からは特訓だ！修行編に突入するぞ！」
「うむ、私も賛成だ。これから毎日、放課後三時間、私が稽古をつけてやる！」
「ちょ、なんで二人ともそんなにやる気なんだよ！というか三時間って…」

どうやら、一夏もやる気になったようだ。「なってないからな！？地の文ねつ造するなよ！」

「よし、じゃあ、今日はここまでにしようぜ。剣道部のみなさん、ありがとうございました！」
「いえいえ～」
「また来てね～、織斑くん、山代くん。」
「篠ノ之さんずるい」
「また明日ね～。」

皆さん、良い人たちだった。嫌な顔一つせず、俺達の特訓に付き合ってくれた。

「ここまでされて、期待に応えられなかったら男じゃないぜ、一夏！」
「そ、それもそうだな。――――よし、やろう。」

「うむ、その意気だ。」
「じゃ、そうと決まれば作戦会議だ。俺の部屋とおまえたちの部屋、どっちにする？」

◆

〈ｓｉｄｅ：織斑　一夏〉
…あれ、これってもしかしてチャンスじゃないか？
半分忘れてたけど、これで紅也の正体がわかる。
「では、わたｓ「じゃ、じゃあそっちの部屋に行かせてもらうぜ。」
…一夏。」
「ああ、分かった。俺の部屋は１０１７室だから、また後でな！」
紅也は手を振りながら去っていく。その姿が完全に見えなくなったところで、箒は話しかけてきた。
「一夏。どうしたんだ？私たちの部屋のほうが楽だろう。」
ぐっ…なんでそんなにケンカ腰なんだよ。正直心臓に悪い。
「いや、その、あれだ。他の奴の部屋ってどうなってるのか、気になってな。」
うん、嘘は言ってない。気になっているのは別のことだが。

「…そうか。なら、いい。しかし…紅也のルームメイトに迷惑をかけるなよ。」
「あ、そういうことか。」
すっかり失念していた。俺と箒が同室なように、あいつだって女子と一緒に住んでるんだろう。多分。
「まあ、あいつもいいって言ってたし、そこまで騒がなければ大丈夫だろ。」
「そういうことを言ってるのではない！…ハア。」
なぜかため息をつく箒。幸せが逃げるぜ？
…しかし、紅也のルームメイト、どんな奴なんだろうか？

◆

「紅也、いるか？」
「ああ、お前らか。開いてるぜ。」
「おじゃましまーす、と。」
「失礼する。」
入って早速だが、部屋を見渡す。ハンガーには、さっきまで着ていたであろう制服と、かつて制服だったはずのものがかかっていた。
床には、開封済みのダンボールと、未開封のダンボールが一つずつ。
荷物の整理中だったのだろうか？

「悪いな、まだ片付いてなくてよ。」

キョロキョロしていた俺を見たのか、紅也が苦笑している。

「そんなことは無いと思うぞ。」

「ありがとな、箒。二人とも、座ったらどうだ？隣のベッドが空いてるからな。」

《まあ、楽にしろ。》

紅也と8に勧められるがままに、俺達はベッドに腰掛ける。見たところ、使用された形跡のない、完全な空きベッドだった。

「しかし、いいのか？お前も、誰かと同室なのだろう？悪い気がするが…」

「ああ、あいつはそんなこと気にしねぇよ。だから大丈夫だ。」

「へぇ…。」

とりあえず、これでルームメイトがいることは確定だ。

「じゃ、本題に入ろうか。明日からの練習だが…一夏、基礎体力は十分か？」

「お、おう。もちろん。」

人並みにはあると思う。

「じゃあ、篠ノ之との稽古は三時間でいいな。」

「うむ。」

「待てぇい！『うむ』じゃねぇよ！長いっつうの！！」

《一夏、努力に勝る王道なし、だ！》

8にまでダメ出しされる始末。というかコイツ、本当に機械(メカ)か？

「ついでに、空いてる時間に、私にあの技を教えてほしい。」

「空破斬のことか？別にいいけど、一朝一夕で身につく技じゃないぜ？」

「空破斬？なんだ、その名前！？箒、紅也、一体朝に何があったんだよ！？」

ホントに気になる。二人とも、気が付いたら意気投合してるし。

…と、主に俺がヒートアップしていると、

唐突に、それはやってきた。

ガチャリ、と鍵を開ける音。ドアが開くと、そこにいたのは――

女子の制服に身を包んだ、山代　紅也だった。

「――誰？」

少女は問いかける。しかし、箒も俺も動けない。

予想外の邂逅に、場が止まったかと思われたが。

「おう、お帰り。なんだ、思ったより早かったな。」

雰囲気を変えたのは、やはり紅也（男）だった。

「今日は短いの。それより…誰？」

「ああ、こいつらか？この二人は――」

《世界で唯一ＩＳを動かせる男、織斑一夏と、そのルームメイトの

篠ノ之箒だ。≫
「……って、８！俺のセリフを――」
「そう。ありがと、８。で、何故？」
「何故って、今度クラス代表を決めることになってな。それで、一夏が代表候補生と試合するんだ。その作戦会議。」
「…紅也がやればいい。」
「俺は忙しーの。」

俺達をおいてけぼりにしながら話す二人。意を決して、俺は口を開いた。

「で…君は、誰なの？名前は？」
「……」

少女は、紅也のほうをチラ、と見た。

「自己紹介しなさい。」

再び俺達を見る。その瞳は、あの夜見たのと同じ、吸い込まれるような緑で――

「山代　葵。紅也の、双子の妹です。」

今ここに、謎は解けたのであった……。

第7話　織斑のなくころに～種明かし編～（後書き）

答え：この作品は、紅也と葵のW主人公で進めていきます。

ようやく葵を出せました。オーストラリアの代表候補生にして、専用機持ち。

そんな彼女の専用機とは？…当分出せそうにありません。

次回は、説明回＋シリアスになります。設定が甘いところもありますが、これが限界でした…。

第8話　そんなに似てるか？じゃあ、こうしよう。（前書き）

第八話です。

予告どおりの説明会です。企業名はエースコンバット5から借りてますが、設定は別物なのであしからず。

第8話　そんなに似てるか？じゃあ、こうしよう。

〈ｓｉｄｅ：織斑　一夏〉

「ブッ…アハハハハハハ！じゃあ何か？一夏ァ、お前は俺が女だと思ってたのか？
ひゃひゃひゃひゃひゃ！あー、腹痛ぇ！！」
「…失礼。」

あの後、俺が部屋に来た本当の目的を話すと、紅也と山代は何とも対照的な反応を返してくれた。箒も白い目で見てくるし、最悪だ。

「しっかし、そんなに似てるか？オルコットも間違えてたし。」

「…そっくり。」
「私も、かなり似てると思うぞ。」
「俺だって、ホントに本気で分からなかった。」
《一致率９９．７％。ほとんど同一人物だ。》

俺を含めた全員がツッコム。自覚がないのか、コイツは。

「まあ、意識して似せてたわけじゃないが、…そうだな。確かに不便だ。」

そう言うが早いか、紅也は立ち上がる。

「え、急にどうしたんだよ。」
「ちょっと買い物！悪ぃな、二人とも。今日はここまでにして、また明日話そうぜ。」

「ここまで、って…。まだ何も決まってねぇだろ！」
「いいや、私と一夏の特訓は決まったぞ。」
「箒！？マジか」

とかやってるうちに、紅也は部屋から出ていった。ドタドタドタ…バアン！と足音が遠ざかっていく。…最後の音は何だろう？
後に残されたのは、俺達二人と、この部屋の主である、もう一人の山代。

《私もいるぞ。》
「……」

その山代は、こちらをじっと見つめるだけで、何のアクションも起こさない。

「あー…俺達、帰った方がいいか？」

俺の問いに、山代はコクリ、とうなずく。

「む、では。世話になったな、山代。」

今度は箒が話しかけるが、やはりうなずくのみ。…無口な子なのか？
立ち上がり、どこか気まずい雰囲気を背に受けたまま、ドアの方へと体を向ける。すると唐突に、紅也のベッドに腰かけていた山代が立ち上がる。

そしてひらひらと手を振り、

「また、明日。」

確かに、そう言った。
その言葉で、なんだか嬉しくなった俺達も、笑顔で手を振り返すのであった。

◆

〈ｓｉｄｅ：山代　紅也〉

「ただいま～っと。待たせたな、葵。」
「大丈夫。あんまり待ってない。」
「そいつは良かった。」

いつもの無口・無表情だが、その顔が嬉しそうだとわかるのは、やはり双子だからだろうか？

「あの二人。」
「一夏と箒のことか？どうした？」
「悪い人じゃないみたい。」
「そっか。…良かったな。」
「ともだちに、なれるかな。」

…驚いた。葵の口からそんな言葉が聞けるとは。
普段は無口で、必要なこと以外は話さない葵。そんなこいつにも、オーストラリアではたくさんの友達が居た。しかし、ここは日本。俺以外、誰も葵を知らない土地。
…やはり、さみしいんだろう。

「大丈夫。二人とも、友達になってくれるよ。」

ポンポン、と葵の頭に触れる。昔から俺とこいつの背丈はあまり変わらないが、俺は葵を撫でるのが好きで、葵もそうされるのが好きだった。

「――――うん。」

嬉しそうに見えた表情を、完全に笑顔に変化させ、彼女はそう言った。

「…で、それ。何？」

「ん、コレか？これはな……」

◆

翌日。時刻は朝7時。

やはり葵はもういない。ベッドは几帳面に片付けられ、最初から誰もいなかったかのようだ。

今日の散歩は止めておこう。アレをしてたら、おそらく時間が足りなくなる。

誰もいないことを確認し、部屋の鍵をかけてからシャワーを浴びる。

ふと、鏡の中の自分と目があった。

『意識して似せてたわけじゃないが…』

一夏と箒に言った言葉。あれは嘘だ。
俺は昔からモルゲンレーテに所属し、レッドフレームのテストパイロットをしていた。

◆

レッドフレーム――――
オーストラリアの国営企業、モルゲンレーテ。そこでは日夜、最新製品の開発が行われている。衣類から建築、自動車、果ては――――兵器まで。
モルゲンレーテが、オーストラリアのＩＳ開発を請け負ったのは、当然の流れだった。
そこで設計されたのが、第二世代の汎用的全身装甲型ＩＳ、メイン・バトル・フィギュア。
しかし、各国が第三世代機を求める中、モルゲンレーテは出遅れていた。そこで取った作戦が、他企業との連携である。彼らはその技術力を背景に、時には金で、時には脅しで、次々と協力を取り付けていった。
ある日。アメリカの大企業、「ノース・グランダー・インダストリー（Ｎ．Ｇ．Ｉ）」から、共同開発の提案が持ちかけられる。願ってもなかったチャンスに、モルゲンレーテは飛びついた。
通称「ＧＡＴ計画」――携行型ビーム兵器を搭載した、特殊素材性全身装甲のＩＳを開発するための計画であった。
ビーム兵器。まだどこも開発に成功していないそれを、すでにＮ．

G．Ｉは完成させていた。その技術は徹底的に秘匿され、どこにも―協力者であるはずのモルゲンレーテにすら―公表されなかった。ならば、なぜ共同開発など持ちかけたのか？

…彼らの狙いは、モルゲンレーテの技術者と、全身装甲型の運用ノウハウであった。Ｎ．Ｇ．Ｉは、圧倒的な資金力を背景に技術者たちを買収した。『円滑な技術の交換のため、技術者の移動は自由とする』という、契約文の一つが仇となった。

相手の人材を奪ってやろう、という考えがありありとうかがえる一文。――モルゲンレーテは、Ｎ．Ｇ．Ｉの資金力をナメていたのだ。

自分たちが得意としていた手法で、自分の首が締められる。なんという皮肉だろうか。

しかし、モルゲンレーテもただでは転ばない。スパイを放ち、金をばらまき、なんとか情報を得ようとする。そしてようやく、その努力は報われた。

ビーム発信器。工作員の一人が、そのデータの持ち出しに成功したのだ。

モルゲンレーテは、それを元手にビーム兵器の開発を始める。同時に、性能試験のための運用機には、メイン・バトル・フィギュアが選ばれる。ビーム兵器運用のため、設計が見直され、再制作されたその機体。Ｎ．Ｇ．Ｉから盗まれた技術で作られた、歴史の陰に存在するＩＳ。王道から逸れた者――その名は、ＡＳＴＲＡＹ。

その試作機として、異なる設計コンセプトの元で、数機のプロトタイプが制作された。そのうちの2号機が、現在の紅也の乗機、レッドフレームである。

さて、こうして生まれたレッドフレームであったが、一つの問題が

あった。
レッドフレームは、表向きは量産機のプロトタイプであったが、その実態は、特定の人物にしか動かせない機体であったのだ。それが、あるモルゲンレーテの協力技術者の弟子―山代紅也（男）であった。この存在が明らかになったら、どうなるか――。紅也とレッドフレームはＮ．Ｇ．Ｉに奪われ、今度こそモルゲンレーテは全てを失うだろう。
苦肉の策として、彼らは紅也の隠蔽を開始した。Ｎ．Ｇ．Ｉとの協力関係を破棄し、紅也と葵の存在は秘匿された。両親は、共にモルゲンレーテ社員であったため、説得は容易だったと聞いている。
それでも、レッドフレームまでは隠せない。そこで、全ＡＳＴＲＡＹは第二世代機として公表され、その完成披露が行われることになった。

その前日、葵は、長かった自分の髪を、紅也と同じ長さまで切り落とした。
「これで、バレても大丈夫。」そう、言って。
こうして、完成披露は無事に行われた。表向きの操縦者は、山代葵ただ一人。しかし…

◆

世界初の男性ＩＳ操縦者、織斑一夏が現れたのは、それからしばらくした後だ。
俺は隠れる必要がなくなり、こうして表舞台へと出てきた。
同時にレッドフレームも、本来の第三世代武装を解禁される。これ

は、もう一つの事件がきっかけなのだが…まあ、機会があれば語ろう。

（もう、似せる必要は無い…。もう、葵も、俺になる必要なんて、無い…。）

鏡に映った、俺であり葵でもある顔に、笑顔を向ける。
もう、コイツは、必要無い。

「…じゃあな。」

鏡に背を向ける。少し名残惜しい気もしたが、その感傷も水滴と共に振り払う。
さて、今日からが、俺の本当の高校生活だ。

◆

「おっはよう！」

先程までのブルーな気分を振り払うように、わざと大声で挨拶する。
俺の姿に気付いた奴らがこちらを見て…その目線が固まった。

「ん？無視された。…俺、嫌われてたっけ？」

入り口の近くにいた女子に話しかける。その子は「アハハ…」と乾いた笑いをもらし、目線をそらした。

「なんだよ、何なんですかァ、一体。」
「……そのセリフ、そっくりお前に返すよ。」
最初に話しかけてきたのは、やはりというか、一夏だった。
俺の中では、「ボケなのかツッコミなのか、判断に困る人物ランキング」でぶっちぎりの第一位の男である。

「…何か、すげえ不愉快なことを思われた気がするんだが。」
「そうでもないぞ。で、なんであんなことを言ったんだ?」
「胸に手を当てて…いや、鏡を見て考えろ!!どうしたんだ、その髪!!」

周りの女子も、「うんうん」とでも言うかのように、一斉にうなずく。
――俺の髪は、燃えるような赤い色に染まっていた。

「どうしたって言われても…イメチェンだけど?」
「イメチェン?なにかあったのか?」

…一夏ァ。

「テメェが!妙な!勘違いを!するから!だろうがッ!!」

右。左。右。蹴り。アッパーで怒涛の連撃。…もちろん、じゃれあいレベルまで手加減してるぜ?

「……ああ!」
「何『今ようやく思い出しました』って顔してんだよ!
ったく…。これで、ややこしいことにはならねぇだろ。」

そう言って自分の席へ…は行かず、そのままアイツのところへ向かう。

「…セシリア・オルコット。」

「な、何でしょう？」

いきなり話しかけたからか、それともこの髪のせいか、キョドるオルコット。面白いからもう少し続けたいが、ここは真面目な話だ。

ガマンしろ、俺。

「俺は山代　紅也だ。葵じゃない。

これだけははっきりさせておくぜ。もしお前が、葵へのリベンジのつもりで俺と戦うつもりなら、俺はどんなメリットがあっても戦わない。俺は一人のＩＳ操縦者として、お前と戦うつもりだ。

葵と戦いたいなら、葵に挑めばいい。でもな、俺と戦う気があるなら…」

互いのプライドを賭けて、全力で勝負だ。

俺は葵の影じゃないし、葵も俺の影じゃない。俺達は…別々の人間なのだから。

第8話　そんなに似てるか？じゃあ、こうしよう。（後書き）

と、いうわけで、紅也の見た目を変更しました。

作者の中でのイメージは、こんな感じです。

紅也：「スターオーシャン3」の主人公、フェイトの赤髪バージョン

葵：同じく「スターオーシャン3」のマリアの、ショートボブ版

次回は、いよいよセシリアと対決です。

第9話　戦え、紅也！学園がリングだ！（前書き）

はい、第九話です。

セシリアとの戦闘なのですが…。正直、滅茶苦茶になってしまいました。

どうか、寛容に受け入れてくださいな。

第9話　戦え、紅也！学園がリングだ！

週が明け、月曜日。今日は、俺と一夏とオルコットによる、クラス代表決定バトルロワイヤルが行われる。

「場所は第三アリーナ、開始時刻は放課後です！気になる対戦カードは…第一試合！セシリア・オルコットＶＳ山代紅也！！第二試合！オルコットＶＳ織斑一夏！！第三試合！山代ＶＳ織斑！！見どころは第三試合！史上初の、男性ＩＳ操縦者対決です！」

「「「「えーっ、見たーーい！！」」」」

「そう言うと思っていました！ここにありますのは、数量限定の観戦チケット！」

「「「「いいなぁ、欲しいなぁ。でも…高いんでしょ？」」」」

「ご安心ください！今なら第一試合、第二試合の観戦チケットを５００円、第三試合の観戦チケットを７００円、三枚セットで１６００円と格安で販売いたｓ…」

ズドン！！パパパァン！５Ｈｉｔ！

「勝手に売るな、馬鹿者。そしてお前ら、なにをやっている。」

「えー織斑先生。」

「山代くんがぁ」

「サクラやってくれたら～」

「明日のお昼をおごってくれるってぇ、言ってくれたんですよ。」

一斉に俺を見つめる元・共犯者たち。…おのれ、暴力に屈しおって。

「見たい奴は勝手に見に来ればいい…。と、いうわけだ。並んでる

奴らも解散しろ！」

「「「「やったぁ♪」」」」

「そ、そんなぁ…殺生な…織斑先生…。」

いい小遣い稼ぎになると思ったのに。無料公開なんて、ヒドすぎる！！

「やまぴ～。」

そんな中近付いてきたのは、サクラを頼んだうちの一人、布仏さんだった。

その朗らかな笑顔や態度に、思わず癒される。何だい？慰めてくれるの？なんて優しい…

「サクラやったんだから～、約束は守ってね～。」

ドン、と先ほど叩かれた以上の衝撃が、俺を襲った気がした。

仲間だと思っていた少女は、最初から敵だったのだ…。

◆

今度こそ放課後。

場所は第三アリーナのＡピット。こっちには俺のほかに一夏・箒・葵がいる。

「――なあ、箒、紅也。」

「何だ、一夏。」「ん、何だ？」
「気のせいかもしれないんだが。」
「そうか、気のせいだろう。」「もったいぶるなよ、何だ？」

「ＩＳのことを教えてくれる話はどうなったんだ？」

…あー。忘れてた。俺は箒への指導と、レッドフレームの調節。箒は、予告どおりに剣術特訓…。正直、ＩＳのことなんて忘れてた。大事なことなので二回言いました。

「…し、仕方がないだろう。お前のＩＳもなかったのだから。」
「初日みたいに、打鉄を借りればよかったじゃないか！」
「いや、こう考えろ。初日にＩＳの練習はやったから、それで十分…。どうだ、二人とも。」
「うむ、そうだな。」「足りねぇよ！」

息ピッタリなのは分かったが、内容は真逆だった。

「つーか、訓練機なら、一夏が借りれば良かったじゃねぇか。箒ばっかし責めんなよ。」
「…男らしくない。」
「ぐうっ！？」

一夏が俺達―特に、葵の言葉―にダメージを受け、胸を押さえる。
…葵は、口数が少ないうえに、毒舌なのだ。だけど、時折見せるひまわりのような笑顔や、眼をそらしながら「頑張って」と照れくさそうに言う姿は――たまらん。

……ああ、シスコンで悪いか！こちとら、昔っから二人で力を合わせて頑張ってきたんだ。シスコンにもなるさ。

「…しかし、まだ来ないのか。一夏のＩＳは。」

そう、用意されるはずだった専用機は、一週間たった今でも到着していない。

…まさか、あの四機のように強奪されたか？ありえない話ではないな。

「…時間。」

葵が呟く。そろそろ、第一試合が始まる。

「紅也。準備は大丈夫か？」

先程まで一夏と口論していた箒も、それに気づいてこちらを向く。

一夏は……ダメだ、まだダメージが残っているようだ。

「大丈夫だ、問題無い。」

「…フラグ。」

え、負けるって？じゃあテイク２。

「一番いいのを頼む。」

「意味がわからんぞ。」

確かに、文脈を完全無視していたな。では、テイク…

「山代。開始時間だ、早くしろ。」

「……」

織斑先生に急かされ、レッドフレームを展開する。

《もう話さなくていいのか？》

「ああ、じゃあ一言だけ。」

８に言われた俺は、皆の方に向き直り、フェイス部分を収納した。

「じゃあ、楽しんでくるぜ！」

笑顔で、一言。

正直、俺はこの戦いを楽しみにしていた。

山代紅也としての、初の戦い。葵以外のＩＳとやりあうのは、これが初めてだったりする。それに、このレッドフレームが、表舞台に立つことができる。ＡＳＴＲＡＹ（王道ではない者）が、花道に立つ。それが何より……嬉しい。

「ああ…行って来い。」

「おう、頑張ってな。」

「…瞬殺希望。」

三者三様の応援を受け、俺はフライトユニットに点火する。一瞬の加速の後、俺の体は空にあった。

◆

「全身装甲とは…珍しい機体を使いますのね。」

「そうか？俺の所属してる所じゃ、むしろメジャーなんだが。」

オルコットは、既に空にいた。その目は、相変わらずこちらを見下したようであるが、しっかりと俺の目を見据えている。

「…改めて聞くぜ。お前の相手は、誰だ？」

「決まっていますわ。今の私の敵は、目の前にいるアナタ――山代紅也だけですわ！」

ライフルの銃口が、こちらを向く。既に光が集まっている銃口。不意打ちではない。これは…開戦を告げる一発だ。

「上等ォ！！」

フェイスを展開し、バーニアに再点火。相手の足下にもぐりこむように動き、レーザーから身をかわす。

《回避成功。敵武装、レーザーライフルと断定。次弾充填中！》

（わかってるよ！！）

左右に機体を動かし、真上からのレーザーを回避する。着弾地点から土埃が立ち上り、こちらの姿を覆い隠していく。

「くっ、ちょこまかと…。」

《敵操縦者は短気。ああいうタイプには、挑発が有効だ。》

（それは知ってる。でも、やらないぜ？）

なおもレーザーの雨は降り注ぐ。葵よりも、はるかに雑な射撃。射線が見えなくても、余裕で避けられる。…おそらく、こちらを見失ったな？

（…8。左右燃料タンクのエネルギーを、半分推進に回せ。突撃するぞ。）

《飛行可能時間が減るぞ？いいのか？》

（大丈夫だ、なんとかなる！）

瞬間、背中に突き上げるような衝撃。装甲が無ければ、体が砕けるほどの空気抵抗が俺を襲う。この瞬間、俺は一発の弾丸となっていた。

「！？下方向に熱量を感知？…ッ！早い！！」

ライフルがこちらを向くが、もう遅い。俺は、一秒以内にオルコットにたどり着く。

「うおりゃあ！！」

ガーベラを一閃。ライフルを両断する。そして、返す刀で本体を…両断しようとして気付く。

（…アレ？速すぎたか？）

そして、体に衝撃が走る。

「うおおおお！？」

「いやあああぁぁぁ！？」

俺とオルコットは、密着したまま仲良く上空へ飛んでいった。

◆

この急加速の中、普通にしゃべるオルコットには恐れ入る。こっちと違って、顔がむき出しなのに…。ＩＳのデタラメさを、改めて思い知った。

現在、両者のシールドエネルギーは残ってはいるが、あまりの急加速に絶対防御が働いたのか、みるみる減っている、という状況だ。

「も、もうわたくしの負けでいいですわ！早く、早く止めて下さいな！！」

「さっきから減速してる。だけどよ、加速度が大きすぎたんだ、止まらねぇ！！」

《…だから、いいのか？と言ったんだ。》

「ハチィィィ！！」

《…が、手はある。》

「何！？どうするんだ？」

《…耐えろよ。》

――警告、フライトユニットが排除（パージ）されます。

フライトユニットが、背部からパージされる。そして俺達を追い抜き、反転してからオルコットの後ろに回り込む。

そして――残りの燃料全てを使い、地面へと加速し始めた。

「いやあああぁぁ！！つぶれる！つぶれてしまいますわ！！」

オルコットは、背部からの急な加速に苦しみだす。

「悪い、耐えてくれ！お前も、スラスターで加速するんだ！」

「ううっ…。何であなたの言うことなんか…」

「このままじゃ、マジで死ぬ！ＩＳが解除される前に、早く！」

オルコットのエネルギーは、既に二桁になっていた。しかも今なお、フライトユニットのせいで減り続けている。

「た、確かに、ここでいがみ合っていても仕方がありません…。ブルー・ティアーズ！！」

オルコットの背中から青いパーツが分離し、機体を押し始める。

「現在速度３０…１０…５…０！停止したぜ、オルコット！！」

「ええ…。ブルー・ティアーズ、停止！」

互いの背中に、あるべきパーツが帰ってくる。

「８、燃料残量は？」

《残量１０％未満…。ギリギリだったな。》

「た、助かりました…わ。」

そう言うと、オルコットの体が光に包まれ…って、マズイ！！

《セシリア・オルコット、シールドエネルギー残量ゼロ。ＩＳの稼働限界だ。》

「分かってる！クソ！安心して集中力が切れたのか？気絶してるぜ。」

あわててオルコットを抱きとめた。その顔にはうっすらと汗が浮かび、体はぐったりとしていた。

「…8。足と胴体以外の全エネルギーをフライトユニットに回せ。それで足りるか？」

《ギリギリだな。まあ、後は根性で何とかしろ。》

「…ハハッ、お前…本当にメカかよ。」

レッドフレームから腕が、脚が、顔が消えていく。残ったのは姿勢制御バーニアのある足と、フライトユニットと連結した胴体のみ。

「レディがいるんだ…。ゆっくり下りるぜ。」

《合点承知だ。》

セシリアを抱きかかえたまま、俺はアリーナへと降りていく。

◆

〈ｓｉｄｅ：セシリア・オルコット〉

――――夢を、見ていた。

それは、昔の記憶。懐かしい、そしてもう二度と会うこともない、

家族の記憶。
名家に婿入りした父と、強い母。父は、母の顔色ばかりうかがう人だった。そんな父が、母はどこか鬱陶しそうだった。
そんな二人だ。結婚生活は、そう長くは持たなかった。
父と母はやがて、別々に暮らすようになった。セシリアは、情けない父親よりも、母と共に暮らすことを望んだ。そして、あの日がやってくる。

三年前のある日。事故が起こった。
越境鉄道の横転事故。死傷者は１００人を超え……その中には、自分の両親の名もあった。
あの日、一言「出かけてくる」とだけ言った、母の笑顔は今でも覚えている。
なぜ、私を置いていくのか。待ってほしい。そう思い、手を伸ばし――

「待って……はっ！？」

目が覚めた。白い天井。そこに伸ばされた右腕は、何もつかんではいなかった。
遅れて、自分が横になっていることに気づく。消毒薬の臭いがするから、ここは保健室なのだろう。

「気が、ついたか。」

唐突に声が聞こえる。誰かに見られていたという事実に、顔が赤みを帯びる。
それを隠すようにして、声の方に顔を向けると。そこには、先程まで戦っていた男、山代紅也がいた。

《脳波その他のバイタルサインは正常。完全な覚醒状態だ。》

彼の脇に置かれた端末に、そのような文字が表示される。それを見た山代さんの表情には、隠しきれないほどの安堵が浮かんでいた。
その表情に、セシリアは形容しがたい感覚を感じる。

「…わたくしは、どうなりましたの？」

覚えているのは、自分が打ち上げられたこと。そして、その速さを相殺するため、ブルー・ティアーズを使ったこと。――そのあとの記憶は、もやがかかったようにあやふやだ。

「速度をゼロにしたのは良かったんだが、お前の機体が解除されてな。お前自身も気絶してたみたいだったから、こうして保健室まで運んできた…ってわけだ。」
「そうでしたの…。では、わたくしは……負けたの、ですね。」

この男が私を助けたということは、彼のエネルギーは残っていたのだろう。
初めて、男に負けた。その事実から逃げるように、セシリアは顔を伏せた。

「いや、ありゃあ引き分けだ。はっきりいって、あんな戦い方をするつもりはなかった。まあ…事故だ、事故！だから、無効！織斑先生にも、そう言ってきた。」

だが、彼の言葉は予想外であった。こちらを慰めようとしているのか？男に、情けをかけられるなんて……このわたくしが！？

「…このわたくしに、情けをかけたつもｒ……」

「言っておくが！」

睨むようにわたくしの眼を見る山代さん。その目には、まぎれもない怒りの色が混ざっていた。

「言っておくが、情けをかけたつもりはねぇ。あんな結果、俺だって納得できないんだよ。」

「……」

その真剣な眼差しに、わたくしはただただ圧倒される。

「それになぁ…あそこでお前を斬って！落として！ガーベラを突き付けてフィニッシュ！っていうのがカッコよかったのに、どうしてくれんだよ！」

「は……。ええっ！？わたくしのせいですの！？」

真剣な表情から一転。子供のように拗ねた顔をして、理不尽な文句を言い始める。

…そのギャップに、思わず笑いそうになってしまう。

「ああーっ！笑ったな！！

ふーんだ、オルコットなんて、もう知らないぞ！じゃあな！！」

端末の取っ手をつかんで、勢いよくドアへと向かい――ちら、とこちらを見てから、

「ホントに、本当に帰っちゃうぞ？」

なんて言っている。

「え、ええ、帰ってもよろしくってよ？」

わたくしがそう言うと、彼はガックシと肩を落とし、今度こそ出ていった。

――――部屋に、静寂が戻ってくる。

「…あら？」

ふと、おでこに感じた違和感。そこには、よく冷えたタオルが置かれていた。

続いて、外を見る。夕暮れだった空は、すでに真っ黒になっていた。

（まさか……今までずっと看病を？）

そして思い出す。

薄れる意識の中で、自分を抱きとめた、優しい、そして暖かい腕のことを。

そして、フェイスマスクの下から現れた、慈愛に満ちた笑みを――――

（ああ…。敵いませんわね。）

戦っている相手までも気遣うその余裕。それを思い出し、セシリアは初めて、男に負けを認めたのであった……

第9話　戦え、紅也！学園がリングだ！（後書き）

…と、いうわけでした。
気がついたら、打ち上げてしまった後でした。

第三世代兵装のお披露目は、まだ先になりそうです。

次回は、織斑ＶＳセシリアです。いつもと違う感じになっています。

…ここからは宣伝です。
今回の試合のＩＦバージョンを、明日の朝６時に投稿します。
タイトルは、「ＩＳＶ～ＲＥＤ＆ａｍｐ；ＢＬＵＥ外伝～」です。
どうか、そちらもよろしくお願いします。

第１０話　さあ、始まりました。セシリアＶＳ一夏。実況は私、山代紅也がお送りします。

さて、第十話…ですが、今回はいつもと雰囲気が違います。

会話文メイン・ネタ多しの、ラジオ風味でお送りします。

戦闘シーンの詳細は、原作を参照してください。

第１０話　さあ、始まりました。セシリアＶＳ一夏。実況は私、山代紅也がお送りします。

翌日、再び放課後。俺は再びピット内にいた。

昨日は遅くまで起きていたため、少し寝不足だ。まあ、自業自得って言われればそれまでなんだが、やりたいことをやったのだから、後悔はしてない。

……授業中に何度も舟を漕いでは、織斑先生に怒られたのはお約束。正直、まだ頭が痛い。

そんなわけで休み時間は全て睡眠に使い、一日を無駄にした後、昨日の続きをやりに来たってわけだ。

今、俺の目の前には、白式を纏った一夏がいる。昨日届かなかった専用機がようやく届いたため、現在フォーマットとフィッティングの最中だ。この作業は８がやっているため、俺はただ見てるだけ。つまりヒマだ。

「いやぁ、すごいですねぇ、山代くんのＩＳ。」

ヒマなのは俺だけではなかったらしい。一夏と箒と織斑先生の会話に置いていかれた山田先生も、沈黙に耐えかねて話しかけてきた。

「まさかＡＩを積んでる上に、自動でＩＳの整備までできるなんて…。さすがはモルゲンレーテ、ってところですね！」

なんだか、妙にテンションが高い。やはり、これからの試合を楽しみにしてるんだろうか？

…まあ、俺も楽しみだけどな。

「ハハ、モルゲンレーテがすごいんじゃなくて、８が特別なんですよ。

昔、師匠が宇宙で拾ったらしいんですけど、中身は完全なブラックボックスで、解析不能らしいです。」

「宇宙って…。なんだか、神秘的ですねぇ。」

「同感です。誰が作ったのか、どこから流れてきたのか…。いつか、探しに行ってみたいなぁ……。」

「……／／／／」

山田先生は黙っている。…やべぇ、俺、結構恥ずかしいこと言ってたかも!?

すると唐突に、８からブザー音が鳴る。正直助かった。こんな微妙な雰囲気のまま、待たされるのは御免だ。

「どうした、８？」

≪フィッティングエラーだ。原因は不明だが、おそらくは操縦者が男性であることが原因だと思われる。

時間がかかりそうだが…継続するか？≫

「いや、時間はない。山代、継続はするな。織斑、残りの作業は実戦でやれ。できなければ負けるだけだ。わかったな。」

「了解です、織斑先生。…だ、そうだぜ一夏。やれるか？」

「やるしかないんだろ？じゃあやるさ。」

８と白式をつなぐケーブルを回収する。白式が起動し、一夏が立ち上がる。

「ＩＳのハイパーセンサーは問題なく動いているな。一夏、気分は悪くないか？」

一夏、と――名前で呼んだ織斑先生。物言いはキツイが、やはり心配なのだろう。

「大丈夫、千冬姉、いける。」
「そうか。」

二人が交わす言葉はそれだけ。しかし、それで十分に気持ちは伝わるのだろう。
……だが甘い！俺と葵なら、目線だけで完全にやりとり出来るぜ！！

「箒。」
「な、なんだ？」
「行ってくる。」
「あ……ああ。勝ってこい。」

先程まで、声をかけるかどうか迷っていた様子の箒だったが、一夏の方から話しかけられたようだ。箒も表情が晴れ、一夏を送り出す。
…いい笑顔だ。

白式がピット・ゲートへ進んでいく。一夏の意識は、既に戦闘に向いているはずだ。
――それを確認し、俺は8に、あるものを実体化するように指示を出す。

「……山代。何だ、それは。」

織斑先生の呆れた声。どうやら、殴る気はないようで安心した。

「見てのとおり、実況席ですよ。織斑先生、良かったら解説役をお願いします。」

俺の前には、白い長テーブルと、２つのマイクが置かれていた。

◆

「さあ、始まりました第二試合、セシリア・オルコットＶＳ織斑一夏！実況は私、山代紅也と。」

「解説の織斑千冬だ。…まったく、なぜ私がこんなことを。」

「以上のメンバーでお送りします！…ホラ、本物のＩＳの動きを見せる、良い機会だと思いますよ。授業だと思ってやってください。」

「本物の…？何か引っかかる言い方だな。まあいい。やってやる。」

「ありがとうございます。さて、織斑先生。試合開始は告げられたものの、両者動きがありませんねぇ。何をしているんでしょうか？」

「さあな。大方オルコットが織斑に、降伏勧告でもしているのだろう。」

「そうですか。あっ、レーザーライフルが光を――放った！一夏、直撃だぁ！」

「不意打ちとはいえ、あの程度はかわせるだろう。全てはあいつの未熟さゆえだな。」

《バリアー貫通、ダメージ４６。シールドエネルギー残量、５２１。実体ダメージ、レベル低。戦闘に影響は残らないだろう。》

「…８。すげぇ悪いんだけど、コレ、音声のみ発信中だから、お前が解説しても無駄だぜ？」

《な……なんだと！？》

「実況に戻れ、馬鹿者。試合が動くぞ。」

「さあ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲(ワルツ)で！」

「ふん、何をカッコつけているか、小むｓ…」

「ドラグーン！？ウチでも実用化されてないのに！…あ、そういえば、織斑先生。昨日の試合、やっぱ俺の勝ちにしてくれませんか？勝てばデータくれるって約束だったんですよ！！」

バアン！

「うるさい！男が一度決めたことを、簡単にひっくり返すな！！」

「冗談なのに…。まあ、それは置いといて。あの特殊兵装…いえ、ファングとでも言っておきましょうか。そういえば、あの国連大使もあんなしゃべり方でしたね。最終決戦では同じ武器を使ってましたし。金ぴかだったけど。そういえば、ウチで作った試作機にも金ぴかはあるんですがね、そっちに似合うのは円舞曲(ワルツ)というよりはむしろ輪舞曲(ロンド)って感じで…」

「うるさい馬鹿者。アレの正式名称は『ブルー・ティアーズ』。パイロットのイメージによって動く半自立稼働式の砲台だ。」

「え、やっぱりファ○ネルですか！？じゃあオルコットはニュータイプ？空間把握能力者？」

「知らん。が、ＢＴ兵器の適性はあったんだろうな。」

「あ、今度は白式に動きが！近接ブレードの『月光』を展開しました。」

「変な名称をつけるな。アレは、今はまだ無銘の剣だ。」

「…『今はまだ』？織斑先生、何かご存じなんでしょうか。」

「まあ、黙って見ていろ。そろそろ、白式が目を覚ますぞ。」

「……！最適化(フィッティング)処理ですか。

さあ、白式、ブレードを持ってブルー・ティアーズに迫る！しかし、さすがと言うべきか、ブルー・ティアーズ！敵を間合いに寄せ付けません！！」

「この試合のカギは、織斑がＢＴ兵器の弱点に気付くかどうか、だな。あれをどうにかせねば、オルコットの勝ちは揺るがんだろう。」

「おやぁ、織斑先生？ずいぶんと一夏に肩入れしてますねぇ。」

バアン！２Ｈｉｔ！

「格上への挑戦では、格下の立場で実況するのがセオリーだ。」

「俺はディフェンディングチャンピオンも好きですけどね。――おっと、また被弾した。」

「シールドエネルギーが１００を切ったか…。さて、どうなるか見ものだな、山代。」

「さて、オッズはオルコットが１．１倍、一夏が１５倍……え、すみません織斑先生。聞いてませんでした。」

ズドン！３Ｈｉｔ！

「謝ったのに…。っと、ブルー・ティアーズがブルー・ティアーズを…ああ、めんどくさい！エルメスがビットを呼び戻しましたね。トラブルでしょうか？」

「両方の名称を変更する必要はないだろうが。…この行動はおそらく、ただの余裕のあらわれだろう。わざわざ右腕をかざして攻撃宣言とは、やれやれ…」

「歴代の艦長は、だいたいみんなやってますね、あの動作。…おっと、ビットが白式を挟み込む！回避成功――と、言いたいところだが、ライフルが狙っているぞ！」

「狙いは左足だな、悪くない。あれでは絶対防御が発動して、白式はエネルギー切れだ。」

「さあ、どうす…おおっと！白式、エルメスに突っ込んだ！昨日の俺のパクりか！？そして、同じ手を二度もくらうのか、オルコット！？」

「どうやらオルコットは、接近戦は苦手らしいな。完全に予想外だったのだろう。銃口が逸れた。」

「白式、首の皮一枚でつながったぁ！…っと、オルコット、また手を振ってます。ビットの追加入りましたぁ！ハイ、喜んでぇ！！」

「どこの居酒屋か、馬鹿者。…む、ビットを切り裂いただと！」

「2機目も！どうやら、まぐれではないようです。…なんてセンスだ。ソルディオスをブレードで斬るなんて。」

「織斑の勝機が出てきた…と、言いたいところだが、あの馬鹿者。浮かれているな。」

「そりゃ、勝ち目が見えたら浮かれもしますよ。ですよね？山田先生？」

「えっ！？ひゃ、ひゃい！そこで私に振るんですかぁ！？

…それにしても、織斑先生。どうしてわかったんですか？」

「さっきから左手を閉じたり開いたりしているだろう。あれは、あいつの昔からのクセだ。あれが出るときは、大抵簡単なミスをする。」

「へぇぇぇ……。さすがご姉弟（きょうだい）ですねー。そんな細かいことまでわかるなんて。」

「ま、まあ、なんだ。あれでも一応私の弟だからな……」

「あー、照れてるんですかー？照れてるんですね―？」

「妬けちゃいますねー、ひゅーひゅー♪」

「……」

がしっ！×2。ぎりりりっ。

「「いたたたっ！！」」

「私はからかわれるのが嫌いだ。」
《実況はどうした！一夏が動いたぞ！！》

「おっと、試合は急展開。織斑が、さらに二機のビットを無力化しました！そして、オルコットに急接近！！」
「これで障害は無い――と、考えているのだろうな、あの馬鹿者は。」
「…お、おおっ！！エルメスがさらに二機を展開！『このままでは殺られる…わけ無ぇだろ！！』のパターンです！ビットが白式に命中・、爆発したぁ！！ハワード・メイスン！！！」
「一夏っ……！」
「箒、待て！今実況中だから、静かにしてろ！！」
「さあ、煙が晴れてきたぞ…白式は、どうなってしまったのか！？」

「――ふん。機体に救われたな、馬鹿者め。」

「煙が吹き飛んだ！白式、健在です！！しかも、姿が変わっています。装甲が割れ、赤いラインが走り、さらに角が割れてV字のアンテナに…」
「状況を捏造するな。フォーマットとフィッティングが完了しただけだ。」
「実体ダメージも消えていますね。ようやく、一次移行（ファースト・シフト）ですか。」
「オルコットのやつ、ずいぶんと狼狽しているな。」
「それはそうでしょう。いままで、初期設定だけの機体にやられていたんですから。彼女のライフはもうゼロです。」
「シールドエネルギーなら、まだ残っているぞ。」
「……ハア。このネタが通じませんか。それより、月光の形が変わりましたね。織斑先生、あれは？」
「――あの剣の銘は『雪片弐型』。それだけ言えば十分だろう。」
「…なるほど、『雪片』ですか。だいたい分かりました。おっと織

斑選手、なにやら語り始めました！音声を出してみましょう。――じゃあ、俺はこの辺で。」

「何だ、最後まで見ていかないのか？」

「…『零落白夜』。アレを使えば、勝負は終わりです。俺は、次の試合の準備を始めます。」

そう、この遊びはここまでだ。次は――俺の出番だ。

俺は今いる場所とは反対、Ｂピットへと急ぐ。

第１０話　さあ、始まりました。セシリアＶＳ一夏。実況は私、山代紅也がお送りします。

今回の話で、とうとうストックがなくなりました。

ＡＳＴＲＡＹの小説なのに、やたらと００（一期）のネタが多いです。

作者はガンダム大好きです。

第１１話　ＶＳ白式！うなれ、ガーベラストレート！（前書き）

さて、第三試合、レッドＶＳ白式です。

見物料は７００円！早いもの勝ちですよー。

え、織斑先生？なんでこんなところに…

第11話　VS白式！うなれ、ガーベラストレート！

第三アリーナ、Bピット。
次の試合に備え、俺はここまでやってきた。

「――試合終了。勝者、セシリア・オルコット」

アナウンスが響く。ああ、一夏のやつ、負けたのか。原因は、零落白夜によるエネルギー切れだろう。あれは、PS装甲以上に燃費が悪い。実体ダメージは回復しても、エネルギーは戻らないから、長時間の展開はできなかったはずだ。

キィィィィン……

音が大きくなっていく。オルコットがピットに戻ってきたのだろう。アリーナの方を向き、エルメス――もとい、ブルー・ティアーズに手を振る。すると、それに気付いたのだろうか？オルコットは速度を落とし、俺のそばに着地した。

「よう、オルコット。これで一勝一引き分けだな。」
「あんなの、勝ちとは――って、あ、あら、紅也さん。どういたしましたの？…まさか、わたくしを出迎えるために！？」
「『紅也さん』？」
「え！？いえ、あの、別に…」
「そうか…。ようやく、俺が俺だと認めてくれたか。染めた甲斐があったかな？」
「え？か、髪は関係ありません。その…昨日は、ありがとうございましたわ。目が覚めるまで、看病をしていただいたようですし…。」

そう言って、顔をそむけるオルコット。…ああ、アレか。敵に情けをかけられて恥ずかしいってか。

「気にするな。あれは、俺がやりたくてやったことだ。それによ、元々俺のせいであんなことになったんだ。人の厚意は、素直に受け取るもんだぜ？」

「こ…好意…／／／」

「そう、厚意だ。代表候補生だからって、変に肩肘張らずに、たまには人を頼ってもいいんだぜ？俺に出来ることなら、出来る限りやってやるからな。」

「で、では！わた、わたくしのことも、その…名前で呼んでいただいてもよろしいですか？」

そんなことでいいのか？「名前で呼んで」って…。友達いなかったのか、お前。

「…セシリア。これでいいのか？」

「ええ。今は十分です。これで…」

目を閉じ、うつむくセシリア。何か、感じたものがあったのだろうか。だとすれば、俺が会いに行った意味もあったのだろう。

「じゃあ、俺はそろそろ行くぜ。」

「あら、どちらへ行かれますの？」

「決まってんだろ。第三試合だよ。互いに近接型の機体だ、面白い試合になるぜ。」

レッドフレームを展開。ガーベラ・ストレートを抜き放ち、両手で正眼に構える。

「では、わたくしも応援しますわ。がんばってくださいね、紅也さん。」
「さんきゅ。じゃあ、行ってくるぜ！」
《ＭＢＦ－Ｐ０２　レッドフレーム、スタンバイ！！》
機体が浮く。昨日、徹夜でメンテしたため、状態は十全だ。
ゲート解放まで、後、３、２、１…
「レッドフレーム、行くぜ！！」
フライトユニットに点火…はせず、そのままアリーナへと降り立つ。
対して一夏は、飛び上がって来ない俺に対し、けげんな表情を浮かべている。
「一夏。連戦だが、大丈夫か？」
「安心しろ、そんなにヤワじゃねぇよ。そっちこそ、早く来いよ。トラブルか？」
「いや。お前はブレオンだって分かってるんだ。だったら、地上の方が断然戦いやすいぜ。近づいてきたら、コイツで一刀両断だ！」
ビシッ、とガーベラを一夏に向ける。そして、試合開始の合図が鳴った。
◆
……。

「どうした、来ないのか？」
「へっ、カウンター狙いの奴に、好き好んで近づくやつがいるかっての！」
「じゃあ、俺からいかせてもらうぜ！！」
ガーベラを右手一本で持ち、地面に刃を向ける。そして、一夏へ向け、切り上げを放つ。
当然、刃は届かない。しかし……
「なっ！？エネルギーが減った！？」
そう、斬撃は届く。それが、俺の空破斬だ。そういえば、一夏は初見だったな。おお、かなり動揺してる。
「続けていくぜ！その名も、無限・空破斬！！」
連続で空破斬を放つ。不可視の斬撃の群れが一夏を襲い、シールドを食い荒らす。
しかし、やがて斬撃はかわされ、あるいは防御されていく。斬撃そのものは不可視でも、刀は実体であるため、刀を見れば方向が分かるのだ。もし、刀自体が不可視ならば見切りに時間がかかるだろうが、あいにく俺に風王結界は無い。約束された勝利の剣も持ってないし、全て遠き理想郷の代わりはチャチなシールドだ。
「うぉおお！！」
一夏が迫る。雪片弐型を構え…レーザー刃を形成。零落白夜だ。あれはヤバい。シールドエネルギーを奪われた俺を守るのは、この脆弱な装甲のみだ。食らったら、俺は文字通り死ぬだろう。

…当れば、な（ニヤリ）

（8、フライトユニット分離（パージ）だ。独立飛行させて一夏をけん制する。）

《了解。ついでに、燃料タンクも排出、爆破しておこう。》

（ああ、それでいい。じゃあ、スタート！）

バクン！！

背から離れたフライトユニットは、一夏の頭の上へと飛んでいく。

そちらに注意を向ける一夏。降ってきた燃料タンクを、反射的に切り裂いた。

…計画通り。

閃光、爆発。相当なダメージを負い、おそらく視界も失っているであろう一夏を追撃するため、脚部バーニアを点火。ガーベラを上段に構え、一気に振りおろす！！

「これが俺の…」

「何、正面ッ……」

「赤い一撃（レッドフレイム）だ！！」

遅い。刀が一夏の体に当たり、絶対防御が発動する。

白式が地に墜ちた。そして光となって消えさる。

「白式、シールドエネルギーゼロ。試合終了、勝者、山代紅也。」

着地し、刀を鞘に納める。フライトユニットを背に戻してから、俺はピットへと戻るのだった。

◆

「見事な試合でしたわ、紅也さん。」
「……」
俺を出迎えたのは、まだ残っていたセシリアと、無言でサムズアップする葵だった。
「よう、葵、セシリア。今度は、納得のいく試合をしてきたぜ。」
「…『セシリア』？何で、名前？」
「ああ。そう頼まれたし、そっちの方が仲良さげで、いいだろ。」
むすっ、と不機嫌な表情になる葵。あれか？嫉妬か？…かわいいやつめ。
「…セシリア・オルコット。表に出ろ。」
「なっ、なんですの、いきなり！？山代さん？」
やばい。嫉妬なんてかわいいものじゃないぜ、あれ。目が本気（マジ）だ。
このまま第四回戦を始めかねない勢いだな。
「葵。いいじゃないか、名前で呼ぶくらい。そんなことで怒らないでくれよ。お前は、笑顔の方がかわいいんだからよ。」
「…。うん、わかった。」
自分でも言ってて恥ずかしかったが、これで無用な争いは避けられた。
葵とセシリアに、必要以上の溝を作ってほしくは無い。セシリアも、

根はいいやつだからな。葵とも、きっと仲良くできるはずなんだ。

「…妹って、得ですわね。」

ぼそっと、セシリアが呟く。こいつも、構って欲しかったのか？

「悪いな、セシリア。俺にとって、葵はやっぱり特別なんだよ。でも安心してくれ。俺は、お前のこと、嫌いじゃないぜ。」

「へ？え、ええ！ありがとうございますわ！！わたくしも、あなたのことは、その…

ま、前ほど嫌いではありませんわよ。」

ぱあっと、笑顔になるセシリア。その笑顔を見ると、思わず抱きしめたくなるが…自重。

「……このお人よし。」

言うな、葵。やっぱり、みんな笑顔でいてほしいんだよ。

◆

「で…山代さん。」

「…何？」

「さっきの話ですけど、わたくしはいつでも挑戦を受けますわよ？

わたくしも、あなたとはもう一度勝負したかったんですの。」

「…もう一度？初対面なのに？」

「なっ、初対面!?アナタ、前に一度会ってますでしょう?イギリスで!!」
「あー、葵。ジンの評価試験の時だと。」
「…忘れた。雑魚に興味は無い。」
「な、なんですってえぇぇぇぇ!!!!!」

第１１話　ＶＳ白式！うなれ、ガーベラストレート！（後書き）

と、いうわけで、この話のメインは葵とセシリアの初邂逅（違）

空牙刹那さん、いつも感想ありがとうございます。
次話は未完成です。鈴は出せるかな…？

またしても宣伝です。
皆さん、「白寿」って、何歳のお祝いかご存じでしょうか？
９９歳のお祝いだそうです。「白」は「百」より一が少ないので。
こんな思いつきから書いた番外編を、また明日投稿します。内容は…微妙なんですが、まあ、興味があったら見て下さい。

第１２話　クラス代表、キミに決めた！（前書き）

はい、十二話です。

感想にて、葵の出番が少ないとの指摘を受けました。W主人公なのに…。

葵の本領は戦闘なので、もう少し我慢してください！

第１２話　クラス代表、キミに決めた！

代表決定戦後。寮内１０１７号室にて。
紅也と葵は、８に表示されたデータを見ていた。
そう、本日ロールアウトした一夏の専用機、白式のデータを。

「…一夏には、悪いことをしたかな。」

白式の初期化と最適化処理を行ったとき、８は白式のデータを吸い上げていた。
男がＩＳを動かせる理由（ワケ）を調べるために。そして、モルゲンレーテの発展のために。

「お兄ちゃんは悪くない。これは、私たちの仕事。」
「…そうだな。割り切らないと。」

モニターが切り替わり、戦闘時の映像を表示する。

「一次移行（ファーストシフト）…そして単一仕様能力（ワンオフ・アビリティ）。しかも零落白夜。…ったく、規格外だな、コイツは。」
「単一仕様能力。通常、二次移行後に発現。同じ能力は発現しない…はず、だった。」
「まあ、能力には謎が多いからな。そういうこともあるだろう。問題は…８、スペックデータを表示だ。」

再び画面が切り替わり、白式のカタログスペックが表示される。

「ここだ。見ろ、葵。こいつのコアナンバー…」
「Ｎｏ．００１…。…フシギダネ？」

「…ここでボケるなよ。シリアスが台無しだ。」
「…白騎士。」
「そう、白騎士のコアナンバーと同一だ。コイツは、とっくに行方不明になったハズなのにな。しかも、８でも解析できない部分があった。…これ以上は、開発者にしか分かんねぇだろうさ。」
「篠ノ之…束…。」

しーん…。部屋が、再び静寂で満たされる。

「…今日は、もう寝るか。」
「…うん。」
「よし…。８、とりあえず、このデータを暗号化して、モルゲンレーテに送信してくれ。俺達は、もう寝るからよ。」
《機械使いの荒い奴だ。》
「おやすみ、８。」

明りを消す。８のディスプレイも消える。
とりあえず、明日はどうしようか…とか考えながら、俺は眠りに就いた…。

◆

翌日、教室にて。

「おはよう、セシリア。」
「あら、おはようございますわ、紅也さん。どうかなさいましたの

？」
「ああ。クラス代表なんだけどな、俺、辞退しようと思ってんだ。」
「まあ、どうしましたの？あなたなら、適任だと思ってましたのに。」
本気で分からないのか？この間、話しただろ。
「理由は二つ。一つは、俺は技術者だってこと。専用機持ちとはいえ、戦いは苦手だからな…。だから、あんなミスをする。」
「一昨日のような、ですか？でも、結果的には勝ったのですから…」
「だから、あれは引き分けだって。
で、二つ目。てか、こっちがメインなんだけどな。俺は、モルゲンレーテっていう企業のテストパイロットだから、基本的にはそっちが優先なんだよ。だから、拘束時間が長そうな、クラス代表は無理だ。」
「そう言えば、そんなことも言ってましたわね。」
うんうん、とうなずくセシリア。こいつも、なんだか角が取れてきたな。良い傾向だ。
「で、お前はどうする？やってくれるか？」
「いえ…。実質わたくしは2敗だったのです。それで代表を引き受けるなど、言えたものではありませんわ。」
「…お前も、なかなか頑固だな。」
ハア、とため息をつく。どんな過程でも、どんなにギリギリでも、勝てたなら誇っていいのに。ホント、急に謙虚になったな。
ともかく、これで一夏が代表だ。…俺としては、願ったり叶ったりの状況になる。

「じゃあ、俺は織斑先生にそれを伝えてくるぜ。また後でな。」
「ええ、後で。」

さて、織斑先生、まだ職員室にいるかな？

◆

「では、一年一組代表は織斑一夏くんに決定です。あ、一繋がりでいい感じですね！」

山田先生を始め、クラスの女子も大いに盛り上がっている。暗い顔をしているのは一夏だけだった。…あ、なんか手を挙げてる。

「先生、質問です。」
「はい、織斑くん。」
「俺は昨日の試合に負けたんですが、なんでクラス代表になってるんでしょうか？」
「それは――」

俺は、チラリとセシリアを見る。それに気付いたセシリアは、ガタンと音を立てて立ち上がる。

「それはわたくしと――」
「俺が――」
「辞退したからさ（ですわ）！」

思い思いのポーズを取る。セシリアは腰に手を当て、俺はギ○ュー特選隊のファイティングポーズだ。…どっかーん、と、背後で爆発が起こったような錯覚を覚える。

（……決まった。）

「…で、何でまた。」

流すなよ、一夏。これじゃ、俺達、痛い子じゃないか。

「まあ、わたくしとの勝負はあなたの負けでしたが、しかしそれは考えてみれば当然のこと。なにせわたくしセシリア・オルコットが相手だったのですから。それは仕方のないことですわ。…それで、まあ、わたくしも大人げなく怒ったことを反省しまして、一夏さんにクラス代表を譲ることにしましたわ。」

「それは、ありがた迷惑というか、俺もやりたくないというか…」

「おっとぉ、勘違いするなよ一夏。あの日、あの時、あの場所で、君に…じゃなかった。織斑先生がなんて言ったか、一字一句違えず思い出すんだ。」

確かに、こう言っていた。

『…とりあえず、他に候補はいないな？ならば、この三人でバトルロイヤルを行い、勝者がクラス代表を決定する。それでいいな？』

「セシリアと俺は一勝一引き分け。お前は二敗。俺とセシリアがお前をクラス代表にするなら、これは決定事項だ。」

「なん…だと…」

崩れ落ちる一夏。ホント、からみやすい性格だ。

「と、いうわけでみんな、いいかなー？」
「「「「いいともー！！」」」」

「いやあ、セシリアもわかってるね！」
「そうだよねー。せっかく世界で二人だけの男子がいるんだから、同じクラスになった以上持ち上げないとねー。」

おおう、今の奴、結構上から目線だな。…二人だけ、じゃないけどな。ネタばらしはいらないだろう。

「私たちは貴重な経験を積める。他のクラスの子に情報が売れる。一粒で二度おいしいね、織斑くんと山代くんは。」
「ちょっと待て！最近、俺の利益が減ってると思ったら、勝手にそんなことしてたのか！？こうなったら決闘だ！本気紅也で相手してやる！！」
「へへーん、山代くん。独占は良くないよ！独占禁止法って、知ってる？」
「フッ、ここはＩＳ学園。日本であって日本でない、治外法権エリアだ！！」
「こら、勝手に人を商売に使うなっつーの！」
「「黙れ、客寄せパンダ。」」
「ひどっ！？」

一夏は黙っていろ。これには、俺の生活がかかってるんだ。
…あの四人、奢りだからってあんなに食べやがって。

「そ、それでですわね。」

コホン、と咳払いをして、あごに手を当てるセシリア。なにか、言

い出しにくいことでもあるのか？

「わたくしや紅也さんのように優秀かつエレガント、華麗にしてパーフェクトな――」

「俺はそんなんじゃないけどな。」

「――パーフェクトな人間がＩＳ操縦を教えて差し上げれば、それはもうみるみるうちに成長を遂げ――」

無視か。俺の意見は無視か。

バン！と机を叩いた音が響く。おそらく箒だろう。ああ、言ってやれ。一夏の教官は自分一人で足りていると――

「あいにくだが、一夏の教官は足りている。私たちが、直接頼まれたからな。」

…『私たち』？あなたと、誰？何となく想像はつくけど……。

殺気すらこもっている視線で、セシリアを射抜く箒。これは修羅場か？一夏を盗られると思った、箒の嫉妬か！？俺を巻き込むな！

「あら、あなたはＩＳランクＣの篠ノ之さん。Ａのわたくしに何かご用かしら？」

セシリアァァァ！！火に油を注ぐな！…というか、どうして他人のランクを知ってるんだ。

「戦闘力５か、ゴミが」っていうような目で見るなよ！！誰だよ、角が取れてきたなんて思った奴は！

「ら、ランクは関係ない！頼まれたのは私だ。い、一夏がどうしてもと懇願するからだ。」

歴史が歪んだな。頼まれたのは俺だった気がするが。
…ひょっとしてアレって、俺が女だという証拠を集めるために頼んできたのか？だとしたら傑作だ。お互い、相手を探るために近づいたんだから。

「ハハハハッ…！」
「な、紅也！？」
「なにがそんなに可笑しいんですの！？」
「ああ、声に出てたか、悪いな。（…やばい、ごまかさねぇと。）いや、あのだな、二人とも得意分野が違うんだから、二人で一緒に教えたらどうだ？せっかく決まった代表様なんだ。出来る限り鍛えたいじゃないか。」

ふう。これでいいだろう。
さっきのごまかしもできたし、俺も蚊帳の外。急場の機転にしては、なかなかじゃねぇか。

…と、思っていた時期が俺にもありました。

「そ、そうですわね。では、わたくしたち三人で…」
「う、うむ、やむを得んだろう。紅也、オルコット、よろしく頼む。」
「あ、あるぇ、俺は、君たち二人に頼みたかったんだけどナー。」

何ということだ。どんな世界線でも、俺が教官になるという状態に収束するのか。
これも運命石の扉（シュタインズゲート）の選択だとでもいうのか。
認めん。認められるか、こんな…。

ばしん、ばしん、パァン！３Ｈｉｔ！

「座れ、馬鹿ども。」

出た、ダースベイダー。もとい、織斑先生。
俺達はあわてて席に着く。ここで逆らっても、良いことは一つもない。

バシン！４Ｈｉｔ！

「その得意げな顔はなんだ。やめろ。」

安心してくれ、みんな。叩かれたのは俺じゃない。一夏だ。
なぜ叩かれたのかは知らん。まあどうせ、なにか良からぬことを考えていたのだろう。

「お前たちのランクなどゴミだ。私からしたらどれも平等にひよっこだ。まだ殻も破れていない段階で優劣を付けようとするな。」

そりゃ、あなたから見ればひよっこでしょうよ。
フリーザ様から見たヤムチャみたいなもんでしょう。俺？クリリンぐらいじゃない？
一撃ぐらいは当てられる…はず。

「代表候補生でも一から勉強してもらうと前に言っただろう。くだらん揉め事は十代の特権だが、あいにく今は私の管轄時間だ。自重しろ。」

山田先生の時間ならいいのか。ひどいな。

バシン！５Ｈｉｔ！…また一夏だ。

「……お前、今何か無礼なことを考えていただろう。」
「そんなことはまったくありません。」
「ほう。」

バシンバシン！７Ｈｉｔ！

「すみませんでした。」
「わかればいい。」

…本当に、何を考えていたんだろうか？気になるが、気にしたら叩かれる気がする。

「クラス代表は織斑一夏。異存はないな。」
「「「はーい！！」」」

「かくして、一年一組のクラス代表は、織斑一夏に決定したのだ。
しかし…これが、あの悲劇の始まりになるとは、この時点ではまだ、誰も知らなかったのであっ　た…。」
「ちょ、不吉なナレーションを入れるなぁ！！」

バアン！×２　９Ｈｉｔ！

第１２話　クラス代表、キミに決めた！（後書き）

どうでしょうか。

次回から鳳編に入ります。まだ書きあげてませんが、期待に応えられるように頑張ります。

第１３話　イメージするのは、常に最高の状態（前書き）

お待たせしました、１３話です。

私事ですが、昨日の投稿でＰＶが５０００を超えました。いつもありがとうございます！

しかし、これから少し忙しくなるため、そろそろ更新ペースが落ちそうです。（汗）

また、Ｆ〇ＴＥの攻略動画を見ながら書いていたためか、すこし作風が違います。

では、どうぞ。

第１３話　イメージするのは、常に最高の状態

四月の下旬。今日から、いよいよ実習が始まる。
クラスに三人だけ（いや、十分多いのか？）の専用機持ちだ。みんなの前で見本を見せたり、めんどくさい仕事が多くなるだろう。

「…と、いうわけで俺、今日は休むから。」
「却下。働け。」

コンマ以下での即答。こういうところって、兄妹（きょうだい）ならではだと思う。

「えー、だってさぁ、ウチのクラスって、専用機持ちが三人しかいないんだよ！！」
「三人もいる。私、一人だけ。」
「じゃあ逆に、三人もいるんだから、一人くらい楽してもいいんじゃない？」
「…紅也、サボるの？私、出るのに。」

ジト目で睨む葵。…目を見なくても分かる。
「妹に仕事させて、兄は休むのか、鬼畜め。」と言いたいんだろう。

「ゴメンナサイ。俺も頑張ります。」
「……」

とたんに得意げな表情になる。…ああもう、可愛いなぁ！！
さて、今日も一日、頑張ろう！！

◆

「ではこれよりＩＳの基本的な飛行操縦を実践してもらう。織斑、オルコット、山代。試しに飛んでみせろ」
「え、織斑先生。俺、ホントにこれ以上持ってないっす。勘弁してほしいっす。」

素早くＩＳを展開した二人と違い、俺はその場でピョンピョン跳ねていた。
織斑先生が青筋を浮かべ、出席簿に手を伸ばす。

（が…甘い！８、レッドフレーム展開！全速上昇！！）
《了解だ。無茶させやがって。》
「誰がカツアゲなんかするか、馬鹿者！！」

ヒュン！Ｍｉｓｓ！！

「はい、飛びましたよ。」

なんとか回避したが…風圧でシールドエネルギーが減っている。…ええい、奴は化け物か？
――違う、俺は悪魔だ！！

…冗談だ。

「くっ…。なかなかの展開速度だ。よし、お前ら二人も飛べ。」

織斑先生、悔しそうだ。…降りた後が怖そうだが。

あ、セシリア、こっちに来た。レッドフレームよりも速いな。まあ、全力出せば負けねぇが。次いで一夏もやってくるが、その速度は、お世辞にも速いとは言えねぇな。白式の潜在能力は、もっと高いはずだが。…しょうがない。

フライトユニットに再度点火。いつのまにか並走していたセシリアと一夏に接近、隊列に加わる。

「お、紅也。紅也も教えてくれよ。セシリアにも聞いたんだけど、空を飛ぶ感覚自体があやふやなんだよ。」

「何で浮いてるか、ってか?そんなの、考える必要はねぇだろ。お前、飛行機に乗ってるときに、なんで飛べるのかわざわざ考えるのか?真面目だな。」

「むっ…た、確かに…。」

「でも紅也さん、仮にも技術者が、『考える必要ない』っていうのは、ちょっと…」

一夏は納得したが、セシリアは怪訝そう。…みんな、頭が固いなぁ。

「だってよぉ、例えば自動車メーカーの技術者が、生物の研究に興味持つか、っていう話だよ。分野が違うんだ。」

「紅也さんの専門はＩＳですわよねぇ!?どう考えても守備範囲でしょう?」

「あーもー。飛べてるんだから、それでいいじゃないか。それよりも、飛ぶ感覚の話だろ?」

「お、おう。そうだな。」

一拍置いて、今度は真剣な調子で語る。

「いいか、イメージするのは常に最強の自分だ。おまえにとって戦

う相手とは、自身のイメージに他ならない。」
「…いや、俺は、飛ぶ方法を聞きたいんだが。」
「だーかーらー、自分が飛んでる様子を思い浮かべるんだよ！どうしても無理なら、セシリアを見ろ！飛んでるだろ？イメージしやすいだろ？」
「わ、わたくしですか！？そ、そんな、一夏さん、恥ずかしいですわ…。」

これらの会話、すべて飛行中に行っている。今飛べてるから、十分だと思うんだけどな。

「一夏さん、よろしければまた放課後に指導してさしあげますわ。紅也さんも、その、付き合っていただけますか？」
「ああ、別にいいぜ。参考になるかは分からんが――」
「一夏っ！いつまでそんなところにいる！早く降りてこい！」

通信回線（オープンチャンネル）から響く怒鳴り声。箒か？

《拡大…やはり篠ノ之だ。》
（はぁ…。いくら一夏の幼馴染とはいえ、独占欲が強すぎだろ。）

葵ならこのぐらい、軽く流すだろう。不機嫌にはなるが。
……最近、箒と葵を比べることが多い気がするな。

「全く、箒のやつ…。
　にしても、ＩＳのハイパーセンサーってすごいな。２００ｍも下の様子が見えるなんて。」

これは一夏。ちなみに下では、山田先生がインカムを奪われておたおたしている。やり過ぎだ、箒。

「ちなみに、これでも機能制限がかかっているんでしてよ。元々ＩＳは宇宙空間での稼働を想定したもの。何万キロと離れた星の光で自分の位置を把握するためですから、この程度の距離は見えて当たり前ですわ。」

セシリアも饒舌だな。最初に会ったときとは大違いだ。口調やポーズは直ってないが、ずいぶんと好感が持てる。

「…それなのに、宇宙開発は遅々として進まず、ＩＳは地上で運用される。俺はイヤだね、こんな状況。」

「…紅也？」

…ダメだな。つい感情的になっちまう。

「織斑、オルコット、山代、急下降と完全停止をやって見せろ。目標は地表から十センチだ。」

「了解です。では一夏さん、紅也さん、お先に。」

すぐに降下していくセシリア。その姿はどんどん小さくなり、そして、停止。

「うまいもんだなぁ。」

「じゃあ、次はどうする？俺が行こうか？」

「…いや、アイツの真似してやってみるよ。」

背中の翼にエネルギーを集める一夏。そして、一気に地上へと向かう！それこそ、まるで偽・螺旋剣（カラドボルグ？）のように…

…翼って、かっこいいよな。俺も、あんなフライトユニットが欲しいな。

（8、設計頼めるか？）
≪ＯＫ。だが、まずは現実を見ろ。≫

予想通り、一夏は墜落していた。
浮遊はできてたのに、なまじ飛べたから、墜落することになるんだ。
お前は浮遊して、ここから俯瞰するのがちょうどよかったんだよ、多分。
…俺も下りるか。

◆

「大体だな一夏、お前というやつは昔から――」
「大丈夫ですか、一夏さん？お怪我はなくて？」
「あ、ああ。大丈夫だけど……」

安全第一で地上に下りると、そこでは修羅場が展開されていた。
一人の男をはさんで争う二人の女…言うまでもなくセシリアと箒だ。

「お前が言うか。この猫かぶりめ。」
「鬼の皮をかぶっているよりマシですわ。」

おっと、この場合の修羅場っていうのは、『修羅が二人いる場』っていう意味だったようだ。君子危うきに近寄らず。こんな争いに武力介入したら、コーラサワーでも死ぬだろう。
…が、ＩＳ学園にはそれ以上の兵（つわもの）がいる。

箒とセシリアの頭を押しのけて現れる、阿修羅をも凌駕する存在。
その名も、グラハｍ…もとい、織斑千冬といった。

「おい、馬鹿者ども。邪魔だ。端っこでやっていろ。
織斑、武装を展開しろ。それくらいは自在にできるようになっただろう。」
「は、はあ。」
「返事は『はい』だ。」
「は、はいっ」
「よし、では始めろ。」

その鬼教官っぷりが、今日ほど頼もしく思えた日は無い。
一夏が右腕を突き出し、左手で握る。

――形だけでなく
――創造の理念を
――制作に及ぶ技術を
――成長に至る経験を
――蓄積された年月までをも複製し
――あらゆる工程を凌駕しつくし――――

……という手順を踏んだかどうかは知らないが、雪片弐型は出現した。
ホント、ＩＳってデタラメだな。これを利用すれば、投影魔術師ごっこができる。
さて、無事に武装展開を終えた一夏だが、「０．５秒で出せ」と怒られていた。
やはり鬼教官。ビリー隊長も真っ青だ。

「次は山代だ。やってみろ。」

ひぇぇぇ、こっち来た。

逃げられるわけもなく、俺は腰を落として右手を左の腰に。居合の構えをとる。

瞬間、腰に鞘が出現。刀を一気に抜き放ち、両手で正眼に構える。

「なるほど、専用機持ちの面目躍如、といったところか。山代、射撃武器を展開しろ。」

「え！？…イヤです。」

ガキン！シールドエネルギー、減少。

「何故だ。」

「一応機密なんで、むやみやたらと晒すわけには…」

「やれ。いいな？」

一睨み。視線に力があれば、レッドフレームに穴が開きそうだ。

「…了解。」

ガーベラを収納（クローズ）。右手を突き出し、左腕を下げ、武装を展開（オープン）する。

《ＡＳＴＲＡＹ、通常装備を展開。》

８のサポートもあり、そこまで時間はかからない。

光が像を結び、俺の右手にはビームライフルが、左腕にはシールドが装備された。

「よし、合格だ。しかしその武装…モルゲンレーテの量産機、Ｍ１

アストレイと共通なのだな。」

う、見る人が見れば分かるか…。

「俺のは、Ｍ１の試作機ですから。コイツの正式名称は、アストレイ試作２号機です。」

試作２号機といっても、核なバズーカは持ってないが。

「ほう、なるほどな。ならば、それはやはりビームライフルか？…いや待て、あれはデータ上の装備。それが手元にあるとなると、時期がおかしい。確か、現在のビームライフル搭載機は先日Ｎ・Ｇ・Ｉが公表した５機のみのはず…。それが既に存在していたとなると……」

「織斑千冬。それ以上は、この場で話すことではありません。これは我々の機密事項。いくらあなたといっても、それ以上は越権行為です。」

口調を強くする。この瞬間、俺はＩＳ学園の生徒ではなく、モルゲンレーテのテストパイロットだった。

「織斑先生と…。いや、いい。失言だったな。」

「…いえ、こちらこそ申し訳ありません。授業を続けて下さい、織斑先生。」

頭を下げる。場に張りつめたわずかな緊張感は、ようやく霧散した。

「…いや、時間だ。今日の授業はここまでだ。織斑、グラウンドを片付けておけよ。」

手伝う気はない。今日は、帰らせてもらう。

…慣れないな。こういう、仕事モードは。師匠ほど純粋でもいられないし、エリカさんほど黒くはなれない。どちらの蒼にも染まらず漂う白鳥の如く、半端であるが故に傷つく。

俺は誰とも会話せず、寮へと戻る。

第１３話　イメージするのは、常に最高の状態（後書き）

…「有限の剣製」だったらできそうじゃない？

外伝でやりたいけど、よくあるネタなので自重。

たぶん１５話でストックが切れます。定期更新もここまでかも…。

第１４話　中国　からの　刺客（前書き）

…アニメの方で見たら、飛行訓練は昼間にやってますね。

ってことは、前回の紅也は、授業をフケた…！？

次からは、アニメの方も活用すべきだと思いました。

でも、このままの流れで話を進めます。

第１４話　中国　からの　刺客

コンコン。
ノックの音が、静かな部屋に響く。
「…紅也さん？いらっしゃいますか？」
ドアの外から聞こえる声の主は、おそらくセシリアだ。
「ん、何か用か？」
なるべく平静を装う。まだ、先程の自己嫌悪からは立ち直っていない。正直、今は誰とも顔を合わせたくなかった。
「大丈夫ですか？今日の練習には参加していなかったので、皆さん心配してましたわよ。」
そういうお前が、一番心配してたんじゃないか？声に出てるぜ？
「大丈夫だ、問題ない。」
「…山代さんが、『アナタがそう言うときは大丈夫じゃない』って言ってましたわよ。」
「…そうかい。」
葵め。よく見てるな。
「ホントに大丈夫だって。で、ホントに何の用だ？」
「そうでしたわ。これから、一夏さんのクラス代表就任パーティーをやるそうなので、そのお誘いに来ましたわ。」

「そっか。悪いけど、俺は――」

行かない、と言いかけ、少し言い淀む。

ここで行かなければ、クラスの全員に不信感を与えるかもしれない。

それは、一夏にとっても同様だ。それは、やはり、少しばかりマズイ。

「――少し支度をしてから、行くよ。悪いけど、先に行っててくれ。」

「本当ですか？それでは、先に行ってますが…」

足音が遠ざかっていく。それを聞き、思わず安堵のため息をもらす。

顔をパン！とはたき、洗面所で顔を洗う。…少しだけ、マシな顔になった。

「…行くか。」

制服を再び着込み、俺は廊下へと足を踏み出す。

◆

「というわけでっ！織斑くんクラス代表決定おめでとう！」

「おめでと～！」

ぱん、ぱんぱーん。

クラッカーが乱射される。俺が着いたときは、すでにパーティは始

まっていた。
…一夏、暗いぞ。主賓なんだから、もっと明るくしろよ。俺も、人のことは言えないが。

「いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がるねえ。」
「ほんとほんと。」
「ラッキーだったよねー。同じクラスになれて。」
「ほんとほんと。」

…いや、こんな子、クラスにいたっけ？
よく見ると、明らかにうちのクラス以上の人間がいる。葵も呼んでやればよかったかな？

「人気者だな、一夏。」
「…本当にそう思うか？」
「ふん」

一夏と箒はいつも通りだな。あいつらにも迷惑かけたよな、絶対。
謝った方がいいかねぇ？

「よう、いｃｈ…」
「はいはーい、新聞部でーす。話題の新入生、織斑一夏君に特別インタビューをしに来ました～！」
「……」

…まあいい。俺も大人だ。これぐらいじゃ、怒らんさ。みんな盛り上がってるしな。それが一番大事、だ。

「あ、私は二年の黛薫子。よろしくね。新聞部副部長やってまーす。はいこれ名刺。」

某ストラップの人と比べて、ずいぶんおしゃべりだ。友達は多いか、うざがられて少ないか、どっちだろうな。

「ではではずばり織斑君！クラス代表になった感想を、どうぞ！」
「えーっと……まあ、なんというか、がんばります。」
「えー。もっといいコメントちょうだいよ～。俺に触るとヤケドするぜ、とか！」
「自分、不器用ですから。」
「うわ、前時代的！」

どっちもどっちだと思うが。…と、まゆっち…もとい黛先輩はこちらを向く。

「おっと、こっちはもう一人の男性操縦者、山代紅也君！コメントもらっていいかな？」
「『俺に触るとヤケドするぜ！』」
「あー、『』つけなくていいから。真面目によろしく。」
「あんたが言うか。じゃ、『どんな困難も、この刀で切り開くぜ！』ってのは？」
「いいね、決定！でも、刀をこっちに向けないで。怖いから。」

そう言われ、人間サイズの日本刀を収納（クローズ）。演出って大事だよね！

「じゃ、最後にセシリアちゃんもコメントちょうだい。」
「わたくし、こういったコメントはあまり好きではありませんが、仕方ないですわね。」

どの口が言うか。さっきから、俺の後ろに控えてたじゃねぇか。
…こうしてツッコミをいれていると、いつもの調子に戻っていくか

ら、不思議なものだ。

「コホン。ではまず、どうしてわたくしがクラス代表を辞退したかというと、それはつまり――」

「ああ、長そうだからいいや。写真だけちょうだい。」

「さ、最後まで聞きなさい！」

「いいよ、適当にねつ造しておくから。よし、織斑君に惚れたからってことにしよう。」

「なっ、な、ななっ……！？」

顔を赤くするセシリア。なにうろたえてるんだ。たとえ図星でも、軽く流せばいいものを。

「何を馬鹿なことを。」

そう、一夏のようにな。こいつの場合は自然体だけど。

「え、そうかなー？じゃあ、山代君に？」

「えっ、なっ、あの…」

チラチラとこちらを見るセシリア。だから、からかわれたくらいでうろたえるなよ。俺だって、そんなに気にされたら、意識しちまうじゃねぇか。

「まあ先輩も、からかうのはその辺にしましょうよ。セシリア、完全にテンパってますよ。」

「わ、わたくしは…い、いえ、別に嫌いではないですよ、お二人とも。し、しかしですね、その、あの……」

さっきから虚空に向かって話すセシリアは、パッと見、かなり危な

い人だ。

「あー……やりすぎたちゃったか。」

「ウブですねぇ、セシリアは。…で、先輩。コレ、元に戻せますか？」

「なあ、紅也。さっきからセシリアは何やってんだ？」

一夏、少しは空気を読め。

◆

「はい、じゃあ三人で並んでね。写真撮るから。」

「よし、じゃあ、誰が真ん中に写るか、じゃんけんで決めようぜ！」

「…いや、代表なんだから一夏が真ん中だろ常考。」

「それも良いですが、しかし…わたくしを挟んで両隣りに…ブツブツ。」

セシリア、まだ直ってない。ＢＪ先生、助けて！！

「織斑君が真ん中、二人は両隣ね。それでいい？」

「ああ。」「よくなー」「かまいませんわ。」

ハイ決定。並んで並んでー。

「じゃ、三人とも手を重ねて…うん、ＯＫ！」

あんたはＯＫかもしれないが、一夏を見る箒の視線が怖い。…うわっ、俺まで睨むなよ。

「……なんだよ、箒。」
「何でもない。」

「ああっ、わたくしは、今…」
「ハイ、セシリア。これ終わったら休もうなー。」

妙にソワソワする一夏に、モジモジが止まらないセシリア。そしてそんな二人を出来る限り無視する俺。…カオスが大きすぎる。修正が必要だ。

「それじゃあ撮るよー。３５×５１÷２４は～？」

奇数×奇数÷偶数。少なくとも偶数じゃない。

「え？えっと……２？」
「ぶー、７４．３７５でしたー。」

今の、意味あったの？
とか呆けてる間に一枚パシャリ。撮影終了。
しかしすごいな。示し合わせたかのように、全員が写真に入ってきた。この団結力、与党も見習うべきだと思う。

「あ、あなたたちねぇっ！」
「まーまーまー」
「セシリアだけ抜け駆けはないでしょー」
「クラスの思い出になっていいじゃん。」
「ねー。」

やっぱり凄いぞ団結力。そんな中、俺は…

「で、先輩。この写真、全員分焼き増ししてもらえますか？」
「うーん、全員分となると、ちょっと費用がなぁ…」
「なら…俺が独占してる織斑一夏の情報、アナタに優先して回すようにしますよ。」
「え！？一年の情報を仕切ってたのって、君だったんだー。ふーん、なかなかやるねぇ。」
「じゃあ、交渉成立ってことで。」
「ええ。ククククク…」
「フフフフ…」
「「あーっはっはっはっは！」」

「なにをやっているのだ、お前たちは…。」

そんな俺達を、箒は呆れた目で見ていたとさ。

宴は、まだまだ続く――

◆

「で？」
「『で？』とは？」
「私は？」
「…ゴメンな、急に聞いたから、知らせられなくて……。」

「ケータイ。」
「うっ！？……スマン、騒ぎすぎて連絡忘れてた！！ゴメン、葵！！」
「…ふん。」

時刻は午後１０時過ぎ。昼間の気分を吹き飛ばす勢いで騒ぎ、すっかり満足して部屋に戻った俺を待っていたのは、怒り心頭といった感じの葵であった。

「じゃあ、えっと、アレだ。明日、久々に一緒に昼飯食おうぜ。…奢るよ。」
「…しょうがない。許す。」
「ゴメンな。」

どうやら、許してくれるみたいだ。食べ物で釣るようなマネをして、非常に情けないが。

「…そういえば。」

ベッドに入った俺に、葵が話しかけてくる。

「二組に転校生。」
「…へぇ、この時期に？」

何で最初から入って来ないんだろう？こんな時期に転入なんて、某団長が喜びそうだ。

「で、何でそんなことを知ってんだ？」
「案内した。」
「へえ、珍しいな。葵が自分からそんなことを…」

「捕まった。すごく強引。ああいうの、苦手。」
「…ああ～」

どうやら謎の転入生は、よっぽどお転婆と見えた。
葵に、三文節もしゃべらせるなんて、驚異的だ。

「…内偵、かもな。俺か一夏の。」
「だと思う。一夏見て、声かけようとしてた。かけなかったけど。」

そいつは、ちょっと注意が必要かな…と考えながら、電気を消す。
一夏を探りに来た。この答えは、ある意味正解、ある意味ハズレだと気づくのは、まだ先のこと――――

◆

翌日。

「山代くん、おはよー。ねえ、転校生の噂聞いた?」

席に着くなり話しかけてくる女子。よっぽど、この話題が気になるんだろう。

「噂じゃない、事実だよ。二組だってさ。妹から聞いた。」

隠すことでもないので、ありのままを話す。すると…

「「「「えー！！妹！？」」」」

教室中が大騒ぎに。何だ、噂よりもそっちに食いつくのか！？

「おはよう…って、何だこの騒ぎ。」

一夏が教室に入ってきたのはそんな時。さっきまで俺と話してた女子が、すぐに一夏の方へと向かう。

「織斑くん、おはよー。ねえ、二組の妹の噂、聞いた？」

「おーい、混ざってるぞ。」

訳の分からない噂になってしまった。が、彼女は続ける。

「なんでも、転校の代表候補生なんだってさ。」

「転校代表！？なんだそりゃ？」

俺だって知らねぇよ。だからこっち見るな。セシリアか箒に聞きなさい。

「違う違う、妹の代表候補生だよ！」

「妹代表！？ホントに何なんだ？」

惜しいけど。確かに、俺の妹、代表候補生だけど。

「…で、ホントはどういうことなんだ？」

隣の席の女子に質問する。

「うーんとね、中国の代表候補生が、二組に、転入してくるんだっ

て。」
「ああ、なるほど。」
ようやく理解。ホント、情報伝達のミスって恐ろしい。
「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら。」
ここでセシリア登場。が、それは無いと思う。狙いは織斑一夏だろう。
…しかし、中国か。老師、元気にしてるかなぁ。
「このクラスに転入してくるわけではないのだろう?騒ぐほどのことでもあるまい。」
箒も参戦。何だ、寂しいのか?
「何者、なんだろうな。目的は…」
「む……気になるのか?」
「…ああ。こんな時期に転入ってのは、不自然すぎるぜ。何か、裏がある…」
「それはもちろん、このセシリア・オルコットの…」
「あ、悪いなセシリア。今、シリアスパートなんだ。そういうのはまたの機会にやってくれ。」
「まさかのギャグ要員扱い!?」
なぜか涙目のセシリア。…え、まさか、本気で言ってたの!?
「まあ、箒の言う通り、現時点での影響は少ないはずだ。無視しても大丈夫だろう。」
「そ、そうか?そうだろう、うんうん。それよりも、今考えるべき

は、来月のクラス対抗戦だ。」
「そ、そうですわ、一夏さん。」

急に話を振られた一夏が、こちらにやってくる。
「妹…代表…シスプリ…」とか呟いてるあたり、まだ混乱中だろう。
キーの実を食え。

「クラス対抗戦に向けて、より実戦的な訓練をしましょう。ああ、相手ならこのわたくし、セシリア・オルコットが務めさせていただきますわ。なにせ、専用機を持っているのはまだクラスでわたくしと一夏さんと紅也さんだけなのですから。」

『だけ』じゃない。3人もいる。って思ったが、軽くデジャブを感じる。
…ああ、朝にそんな会話をしたっけ。

「まあ、やれるだけやってみるか。」
「やれるだけでは困りますわ！一夏さんには勝っていただきませんと！」
「そうだぞ。男たるものそのような弱気でどうする。」
「実際弱いのに、気持ちで負けてたら勝てないぞ。せめて負けないイメージは持っておけ。」
「織斑くんが勝つとクラスみんなが幸せだよー」
「おい、紅也！おまえだけヒドイな！？」

ちなみに、上からセシリア、箒、俺、布仏さんだ。…しかし、会話が進むにつれて、どんどん人が集まってくるな。あっという間に、囲まれてしまった。

「織斑くん、がんばってねー。」

「フリーパスのためにもね！」

ちなみに、クラス対抗戦で優勝すると、そのクラスには学食デザートの半年フリーパスが配られる。デザートってあたりに、女子校らしさを感じるな。

「…でも、今年は専用機持ちのクラス代表が3人。ウチと、3組と、4組…。頑張らないと厳し…」

「――その情報、古いよ。」

ふと、聞きなれぬ声。教室の入り口の方に目を向けると、見たことのない人物がいた。

小柄な体躯に、特徴的なツインテール。イメージはちっちゃい遠坂。

そんな子が、腕を組み、片膝を立ててドアにもたれかかっている。

…こいつが、転校生――？

「2組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから。」

「鈴……？お前、鈴か？」

驚いた。名前まで凛とは…。というか、一夏の知り合いか？

「そうよ。中国代表候補生、凰鈴音（ファン・リンイン）。今日は宣戦布告に来たってわけ。」

「何格好付けてるんだ？すげえ似合わないぞ。」

「んなっ……！？なんてこと言うのよ、アンタは！」

…どうやら、メッキの薄さは遠坂以上だったようだ。こっちが地か？

そんな転校生に興味を持ったクラスメイトたちは、俺から離れて少

女の方へ向かう。
そして、取り巻きのいなくなった俺と、転校生の目が、合った。

一秒、二秒…沈黙が続く。少女の表情に驚愕が混ざっていくのが、見て取れた。

「な…」

それは、まるで、ありえないモノを見たような――

「なんでアンタがここにいるのよ、紅(ホン)！！」

少女の大声が、教室に響く。

第１４話　中国　からの　刺客（後書き）

さて、凛…否、鈴が登場です。

彼女と紅也の関係は？

次回に続きます。

第１５話　オレオレ詐欺に引っ掛かる気持ちがよくわかる。（前書き）

第十五話です。

これでストックはなくなりました。明日投稿できるか、非常に不安です。

では、どうぞ！

第15話　オレオレ詐欺に引っ掛かる気持ちがよくわかる。

あいつと私が出会ったのは、一夏と別れて中国に戻った直後だった。
ある日見かけた、学校のそばの剣道場。一夏のことを思い出した私は、そこに入っていった。皆、一心不乱に竹刀を振り、汗を流していた。
が…その中に…いや、その外に、異質な存在がいた。

道場の外で一人、体の倍以上はある長さの丸太を振っていた男の子。
私は、その子に興味を持った。

「ねぇ、アンタ、何をやってるの？」
「刀を振る練習だよ。」
「刀？じゃあ、なんで丸太を振ってるの？」
「これが練習になるんだ。大きな刀を振るから。」
「ふーん…変なの。」

少年は、再び丸太を振る。私はそれが気になって、しばらくそいつを見ていた。

「おい、紅（ホン）！丸太はもういい。次は儂（ワシ）と試合じゃ。」
「はい、老師。…じゃ、バイバイ。」

名前に合わない見た目だな…と思った私は悪くないと思う。
次の日、再び道場を訪れても、彼はいなかった。なんでも、あの少年とおじいさんは、旅をしながら刀の修行をしているそうで、夜のうちにここを去ったとか。
そんな人いるんだ…と、妙に感心したのを覚えてる。その日の記憶は、ちょっと変わった出来事として、私の中で眠っていた。

◆

〈ｓｉｄｅ：山代紅也〉

…誰だっけ？この子。

なんか、俺のことを知ってるみたいなんだけど、見覚えがない。

ほら、小学校で一緒だった人と、高校の通学路で偶然出くわしたけど、こっちは相手を覚えてない、そんな気まずい感じ。

「あなた…紅よね？どうして、ＩＳ学園に？」

その呼び方…俺を紅と呼んでいたのは、記憶の中でただ一人…

「キミ…蘊老師の知り合いか？」

「え？誰？」

「蘊・奥だよ。刀鍛冶で、剣豪の。俺を紅って呼んでたのは、あの人だけだったんだが。」

「…ああ、アンタと一緒にいた、あの厳ついおじいさん？」

「それ、本人の前で言うなよ…。」

ヤバイヤバイヤバイ！誰だ、ホント！？老師を知ってるなら、中国で会ったってことだ。ってことは去年に会った？あの時は武者修行の最中だったから、旅先で会った人なんて、いちいち覚えてないぞ！？

「おい。」

「なによ！？」

バシンッ！

…どうやら、凌ぎ切ったようだ。タイムアップ。安心した。

「もうＳＨＲの時間だ。教室に戻れ。」

「ち、千冬さん……」

「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ、そして入り口を塞ぐな。邪魔だ。」

「す、すみません……」

すごすごとドアからどく少女。完全にビビって、委縮してる。

両者の絶対的力関係が垣間見える図だ。…まあ、織斑先生相手に強気に出れる相手って、いるんだろうか？初期からアビリティ「威圧」持ちだから、性格が「普通・強気・弱気」だと太刀打ちできないもん。

「また後で来るからね！逃げないでよ、一夏、紅！」

「さっさと戻れ。」

「は、はいっ！」

反転、そしてＢダッシュ。アクティブな子だな。

「っていうかアイツ、ＩＳ操縦者だったのか。初めて知った。」

一夏が呟く。どうやら知り合いらしいから、後で話を聞こう。…と、言っても――

「……一夏、今のは誰だ？知り合いか？えらく親しそうだったな？」

「い、一夏さん!?あの子とはどういう関係で――」

俺が聞かなくても、こいつらが勝手に尋問してくれるだろう。

ただ、今聞くのは避けた方がいいと、山代さんは思うのですよ…。

バシンバシンバシンバシン！５Ｈｉｔ！

出席簿による乱打。織斑先生の前で、雑談したのが運の尽きだ。

◆

時は進んで昼休み。

セシリアと箒は、終始落ち着きが無かった。授業中は上の空で、山田先生に注意５回、織斑先生に３回叩かれていた。歴代２位のＨｉｔ数。

ちなみに俺も、山田先生の授業中に中国修業時代のことを回想していたため、板書は一夏頼みだったりする。そして今。

「お前のせいだ！」

「あなたのせいですわ！」

「なんでだよ……」

二人は一夏に絶賛八つ当たり中だ。俺は、その矛先がこっちに向いてはたまらないため、口をつぐんでいる。

「まあ、話ならメシ食いながら聞くから。とりあえず学食行こうぜ。

」
「む……。ま、まあお前がそう言うのなら、いいだろう。」
「そ、そうですわね。行って差し上げないこともなくってよ。」
二重否定は強い肯定。そんなに行きたいのか、セシリア。
「俺も行くぜ。アイツが誰なのか、教えてほしいからな。」
「む？紅也の知り合いではないのか？」
「…いつ会ったのか、心当たりがない。」
「で、でも。仲良くお話していたではありませんか！」
「…こっちは、ボロが出ないように必死だったんだよ。
ああいうタイプの奴は、自分が覚えてることを相手が忘れてたら、理不尽に怒るタイプだ。」
ガンドとか、ガンドとか、ガンドでな。…いくらなんでも、ＩＳで攻撃してくることはないだろうが。
「だから、ボロが出ないように協力してくれ、一夏。」
「あ、ああ。…確かに、昔っから理不尽に怒る奴だったよ。」
「助かる。…あ、そうだ。今日、葵も一緒でいいか？」
「おう。」
クラスメイト数名を連れて移動する一夏たちと別れ、俺は３組の教室に向かう。
◆

「あ、来たわね、紅。逃げたかと思ったわよ！…と、アンタは、昨日の紅っぽい人！昨日は助かったわ！」

昼食を受け取り、席を探す俺たちを呼ぶのは、大きなテーブルに集まっていた転校生だった。

今なら、アイツが葵に声をかけた理由が分かる。俺と間違えたんだろうな。

「よう、お前も来てたんだな。」

「……」

空いてる所に二人で座る。どうやら俺を待っていてくれたようだ。

ありがたいぜ。

「鈴、いつ日本に帰ってきたんだ？おばさん元気か？いつ代表候補生になったんだ？」

「質問ばっかしないでよ、一夏。アンタこそ、なにＩＳ使ってるのよ。ニュースで見たときびっくりしたじゃない。」

早速会話が始まる。やはり二人は、かなり仲のいい友人同士らしい。

「一夏、そろそろどういう関係か説明してほしいのだが。」

「そうですわ！一夏さん、まさかこちらの方と付き合ってらっしゃるの！？」

除け者にされた箒とセシリアも、攻撃的な口調で問い詰める。尋問の時間だ。

「べ、べべ、別に私は付き合ってる訳じゃ……」

「そうだぞ。なんでそんな話になるんだ。ただの幼馴染だよ。」
「……」
「？　何睨んでるんだ？」
「なんでもないわよっ！」

…ああ、またこのパターンか。片思いのような何かか。

「幼なじみ……？」
「あー、えっとだな。箒が引っ越していったのが小四の終わりだっただろ？鈴が転校してきたのは小五の頭だよ。で、中二の終わりに国に帰ったから、会うのは一年ちょっとぶりだな。」

そこまで話し、ふと何かに気付いたような表情をしてから、再び一夏は話しだす。

「で、こっちが箒。ほら、前に話したろ？小学校からの幼なじみで、俺の通ってた剣術道場の娘。」
「ふうん、そうなんだ。初めまして。これからよろしくね。」
「ああ。こちらこそ。」

互いに挨拶を交わすも、対抗意識が消えてない。…あれだな、「幼なじみ」という名の縄張りを巡って、争ってる感じだな。

「ところで、俺からも聞きたいんだけどさ。鈴と紅也って、どうやって知り合ったんだ？」

…一夏、グッジョブ！！ここでその質問に持っていくさりげなさは、高評価だ！

「紅也って…紅（ホン）のこと？」

「おいおい、俺の名前、知らなかったのかよ…。」

その発言に、俺はやれやれと肩をすくめ――おい、お前ら。その「どの口が言うか」って顔はやめろよ。悟られる。

「しょうがないじゃない！紅って名前だって、道場の人が呼んでたのをたまたま聞いただけだったし、話したのも二言三言だったし、アンタ、ずっと丸太振ってたし…。」

…ん、道場？それって確か、久しぶりに人里に下りて、老師が路銀を稼ぐために雇われた所じゃ…。それに丸太っていうと、あの訓練をしてたのは四月ごろだったから――

「…ああ、あの時の。飼い主とはぐれた子犬みたいな子か。」

「な…なんですってえぇぇぇ！！」

「いや、覚えてるよ。日本語で話しかけられたから、印象的だった。でも、俺はアンタの名前を聞いてなかったな。へへっ、道理で覚えがなかったはずだぜ。」

「こ…子犬って、アンタねぇ…」

おおう、怒らせちゃったか？ツインテールが逆立ってる。サイヤ人みたいだ。

「…そこまで。八つ当たりは駄目。」

そんな少女を宥めたのは、今まで黙っていた葵だった。意外だ。苦手って言ってた相手に話しかけるなんて。

「べ、別にそんなんじゃ…。と、いうか、アナタは何者なのよ。まだ、名前聞いてなかったわよね？」

「…葵。山代　葵。妹。」
「言葉足らずで悪いな。ちなみに、双子だ。」
「ふーん、へーえ…」
そう言いながら、俺と葵を交互に眺める凰。そしてひとり、納得したかのようにうなずく。
「なるほどね。髪の色以外はそっくりじゃない。」
「まあな。入学したときは髪も同じだったから、見分けがつかないくらいだったぜ。
現に、一夏とセシリアなんか…」
「ちょっと、紅也さん!?」
「…失礼。でも傑作。」
「山代さんまで!?うう…」
涙目になるセシリア。…ああ、ちなみに、葵とセシリアは、別に仲が悪いわけじゃない。ただ、葵が少し毒舌なだけだ。
念のため言っておくけど、決闘騒ぎも無かったよ?
「…そういえば、アンタは誰なの?」
凰は、思い出したかのようにセシリアに問う。
「まあ、ご存じない?わたくしはイギリス代表候補生、セシリア・オルコットでしてよ!よろしくお願いしますわ、中国代表候補生の凰鈴音(ファン・リンイン)さん。」
「へえ、そうなの。ま、興味ないけど。」
「な、な、なっ……!?い、言っておきますけど、わたくしあなたのような方には負けませんわ!」

プライドを折られた揚句、投げ捨ててそこらの狗にでも食わせたかのような凰の態度に、セシリアが怒る。

「そ。でも戦ったらあたしが勝つよ。悪いけど強いもん。」

凰も大した自信だ。…やばい、こう言う奴、大好物だ。すごく戦いたい。

全力出したら怪我するのは分かってるけど、やっぱり戦いたい。

「紅也。自重。」

分かってるよ。余計な戦いは避けろ、って言いたいんだろ。

「一夏。」

もはやセシリアに興味を無くした凰は、ラーメンをすする合間に一夏に話しかける。

「アンタ、クラス代表なんだって?」

「お、おう。成り行きでな。」

「ふーん……」

どんぶりを持ち、男らしくごくごくとスープを飲む凰。なかなか見ごたえはあるが、ちょっと汚いぞ。

「あたしも、クラス代表なのよ。…あ、あのさぁ。ＩＳの操縦、見てあげてもいいけど?」

「そりゃ助か――」

ダンッ！２Ｈｉｔ！…あ、間違えた。今のはノーカンで。
箒とセシリアが机を叩き、勢いそのまま立ち上がる。

「一夏に教えるのは私の役目だ。頼まれたのは、私だ。」
「あなたは二組でしょう！？敵の施しは受けませんわ。」

そこで二人は、クルリ、と俺の方を向く。
その様子は、まるでホラー映画のワンシーン。背中を、嫌な汗が伝う。

「「紅也（さん）も何か言ったらどうだ（ですか）！」」

巻き込まれた。女子怖い。

「あー、別に教えてもらってもいいんじゃないか？こっちも、相手の情報が得られるんだし。…そしたら、ウチの葵の一人勝ちだしな。（ボソッ）」

「スパイを発見。捕えろ。」
「「「「イエッサー！！」」」」
「ちょ、やめ、お前ら、一度ならず二度までも裏切るか！？」
「先に裏切ったのはー、やまぴーの方でしょ？」
「裏切ってなどいない！俺は、最初から葵の味方だぁぁぁ！！」
「みなさん、やっておしまいなさい！！」
「…恥ずかしい。」

俺はなすすべもなく、女子の群れに捕まる。くそっ、俺は間違ったことは言ってない！恐怖のあまり、本音が出ただけだ。そしたら布仏が出てきたけどな。

「そういえば、紅の妹の…葵っていったっけ？ひょっとして、アンタもクラス代表？」
「……（コクリ）」
「専用機持ちなのよね？ドコの所属？」
「…オーストラリア。」
「ふーん、クラス対抗戦、ちょっとは面白くなりそうね。」
「…そうでもない。多分、私が勝つ。」
「なっ、大した自信ね！いいわ、吠え面かかせてあげるから、覚悟してなさい！！」
「必要ない。負ける要素がないから。」
「――――――！！」

ちらっと見ただけだが、あっちもあっちで修羅場だ。まあ、人と関わろうとしてるだけマシかな。

「あら、山代さんもクラス代表でしたの？さすがはわたくしのライバルですわ。」
「…同格扱いしないで。」
「きいいいぃぃ！！なんでこんなのが紅也さんの妹なんですの！？」
「こら、葵。いちいち相手にケンカを売るな。」
「そのつもりはない。全部本当。」
「「なんですって！？」」

…誰か、こいつらを止めてくれ。

第１５話　オレオレ詐欺に引っ掛かる気持ちがよくわかる。（後書き）

中途半端ですが、ここまでで区切りとします。
次回は、少し場面を飛ばす予定です。早く代表戦を書きたい…。

第１６話　二人の幼なじみ（前書き）

投稿できました、１６話です。いつもより早く上げました。

鈴音回と見せかけて、実は…。

では、どうぞ！

第１６話　二人の幼なじみ

「…と、いうわけで、俺と箒とセシリアで一夏を鍛えることになったわけだが。」
「誰に、何を説明しているのだ？」
「気にするな。」

俺達四人はアリーナに集合している。箒も、訓練機の「打鉄」をレンタルていたため、この場には四機ものＩＳがそろっていることになる。
ちなみに葵は、「フェアな勝負にしたい」という内容の言葉を残し、練習への協力を拒否した。俺に関しては、一夏のデータなど知り尽くしているので、今更外れても関係ない、という判断がなされた。
葵を仲間はずれにするようで気が進まないのは確かだが、本人の希望ならしょうがない。一夏ら三人も、ゴメンと謝る葵に対して、口々に「気にするな」と言っていた。
鳳は、セシリアと箒の猛反対、および同じクラス代表の葵が辞退したことを受け、筋を通すためにと辞退した。…意外と、律儀な性格なんだな。

「くっ……。まさかこんなにあっさりと訓練機の使用許可が下りるだなんて……。」

セシリアはセシリアで、なんだか悔しそうだ。そんなに箒が加わるのが嫌だったか？
確かに、近接格闘は俺一人で足りるかもしれないが、俺の剣技はガーベラの切れ味まかせなので、一夏の…というか、普通のＩＳのスタイルとは違うのだ。そこを箒が補ってくれれば、一夏もそこそこレベルアップし、初戦突破くらいはできるだろう。葵と当らなけれ

ば、な。

「では一夏、はじめるとしよう。刀を抜け。」
「お、おうっ！」

双方、刀を抜いて対峙する。空気が張り詰め、戦闘状況特有の緊張感が満ちていく。

「では――参るっ！」

…が、神はシリアスが嫌いであるようだった。戦場に不釣り合いな、甲高い声が響く。

「お待ちなさい！一夏さんのお相手をするのはこのわたくし、セシリア・オルコットでしてよ！？」

セシリアが、箒と一夏の間に割って入る。その銃口を箒に向けて。
…一夏の相手をするんじゃないのか？

「ええい、邪魔な！ならば斬る！」
「訓練機ごときに後れを取るほど、優しくはなくってよ！」

そして戦闘を開始するバカ二名。既に目的を見失っている。

「…じゃ、一夏と俺で近接格闘の訓練な。ホラ、こっち向け。」
「お…おう。だけど、いいのか？あの二人を放っておいても。」
「任せろ。…おーい二人とも。勝った方が一夏と訓練だ。異論はないな～？」

返事はない。その代わり、戦闘は激化した。

「…よし！」
「いや、全然良くねぇからな！！」

つっこむ一夏を無視し、俺は刀を構えて振りかぶる。
一夏も、ようやく刀を構え、戦闘が始まる。

…その後、戦いは４機のＩＳが入り乱れる乱戦となったが、気が付いたら１ＶＳ２の戦いとなっていた。さて、逃げたのは誰でしょう？

◆

「ようし、そこまで！！そろそろ止めないと、一夏が死んじゃうぞー。」

外部スピーカーを使い、三人に呼び掛ける。すると三人は戦闘を中断し、ここまで下りてくる。

「ハア…ハア…。死ぬかと思った。」
「ふん、鍛えていないからそうなるのだ。」
「あら、このくらいでバテていては、先が思いやられましてよ？」

三者三様。一夏は疲労困憊し、箒とセシリアはそうでもない。…鍛え方の問題ではなく、２対１はキツイと思うが。レッドラム＆スタルカ撃破のように。いや、アレは実質１対１か。

「…というか紅也！途中からいなかったよな！？」
「ああ、巻き込まれたくなかったからな。」
冗談抜きで死ぬし。
「何をしている、早くピットに戻れ。」
「お、おう。……って、箒？なんでこっち側に来るんだ？」
「私もピットに戻るからだ。」
「いや、セシリアの方に――――」
「ぴ、ピットなどどっちでも構わないだろう！…あ、紅也はどうする？」
とってつけたように箒が言う。…俺はお邪魔かな？
「いや、一つのピットにＩＳ三機はキツイだろ。セシリアがぼっちになっちまうから、俺はあっちに行くぜ。じゃあな、お二人さん。」
そう言って踵を返し、セシリアのいるピットへと向かう。
…この時、一夏のピットについて行っていたら、今後の展開は変わっていたかもしれない。
◆
…バシン！…バシン！
一夏の特訓後、俺は弓道場に来ていた。今日は刀のノルマはこなしたので、弓の練習をしている。昔から俺は、刀と弓の練習を続けて

いた。これは師匠や、老師から言われたことがきっかけであるが、今となっては習慣化している。腕前は上々。的の中心に当て続ける、なんて神技はできないが、的から外さない程度の腕前はある。

第三世代兵器は、イメージが命だ。弓とビームライフルは違うが、「狙い、当てる」というプロセスに差はない。…欲を言えば、弓型の武器があればよいのだが、現行技術じゃ無理だ。ビームを、矢の形で留めるなど…。

まあ、無い物ねだりはしない。このビームライフルだって、死ぬ思いで手に入れたんだから、これ以上の贅沢は言えないさ。

弓道部の方々に礼を言い、俺は寮の部屋へと戻る。この時間なら、葵と夕食が食えるかもしれない。…昼間はグダグダだったからな。あれじゃ、葵も不満だろう。

「ただいま。葵、夕飯まだなら一緒に――」

「あ、おかえり紅（ホン）。悪いわね、夕食ならもう――」

バタン。ドアを閉じる。

目をこすって部屋番を確認。…うん、間違いなく１０１７室。

じゃあ…なんで凰がいたんだ？

「…おかえり。」

ドアが開き、出てきたのは葵。コイツと凰が一緒にいる、という事実に違和感を覚える。確か、凰は苦手だ、って言ってたよな？

「ああ、ただいま。それより葵、どうして凰がここにいるんだ？」

そう言うと、チラリ、と凰の方を見る葵。凰がうなずくと、葵は俺

の目を見つめ、一言。

「泣いてた。」

「泣いてた？何でまた…っと、これは聞かない方がいいかな？」

俺も凰の方を見る。凰は肩をすくめ、「大したことじゃないわよ」と強がって見せた。

それを確認し、俺は再び葵に質問する。

「で、もう凰は落ち着いたのか？」

「…多分。」

頼もしい答えだ。俺は部屋の前での問答を中断し、ようやく部屋へと入る。俺のベッドに腰かけていた凰を、シッシと手で追い払うジェスチャーをし、俺が座るスペースを確保する。

「…で、何かあったのか？」

改めて、今度は、凰に問いかける。葵が凰をほっとけなかったのはよく分かった。問題は、あの見た目打たれ強そうな凰が、泣くほどの原因だった。ひょっとしたら、何か、とんでもない危険が潜んでいるかも――

「一夏よ！」

「……ハイ？」

「全部一夏が悪いの！あんな女と同居だなんて！しかも、幼なじみだからいいなんて！」

「ちょ、落ち着…」

「アンタは黙って聞いてなさい！酢豚を奢るだぁ！？アイツ、女の子にたかる気かっての！しかも、乙女の純情を弄（もてあそ）んで！！だいたい

アイツは昔から…」

鳳は語り続けた。同じ話を、何度も何度も。それこそ、耳にタコができるくらいに。俺も葵も、もううんざりした目で鳳を睨んでる。彼女の話を総合すると、ピットで一夏と話した時、箒と同室だと知った。それを一夏が『幼なじみならいい』と言ったため、なら部屋を変わってもらおう、と思ったそうだ。

…コイツは、二組のクラス代表の座もかっぱらったらしい。欲しいものは奪う！を地で行ってる奴だな。とんでもない！

――まあ、俺も、モルゲンレーテも、そんなことは言えないがな。

話を戻そう。そして荷物をまとめて一夏の部屋に向かい、ひと騒動あったらしいのだが、ただの痴話げんかなので割愛。その際、一夏が昔の約束を間違えて覚えていたらしく、それがショックで泣いて出ていったところ、葵と会って部屋に招かれたそうだ。

ちなみにその約束の内容を聞こうかと思ったが、葵に「女の子同士の秘密。」と言われては黙るしかなかった。

「…で、葵。俺はこの問題に関わっていいのか？」

まだ話し続けてる鳳を無視し、葵に話しかける。

「本人の問題。話、聞いてあげるだけでいい。」

「その、話を聞くのが少しイヤなんだが…。」

「…私も。少し後悔。」

まるで、老人の昔話を聞いているようだ。現に今は、今日のケンカの話ではなく、小学校の思い出話を延々と語り続けている。…佐藤さんの気持ちがよく分かるな。誰か、胃薬を。

◆

結局凰は、話し疲れ・泣き疲れで、そのまま倒れるように眠ってしまった。しかも、俺のベッドで。

「…なあ葵。凰の部屋って分かるか？」
「…知らない。」
「…どうする？」
「泊める。」
「織斑先生に引き渡――」
「泊める。」
「…それしかないか。」

ため息をつきつつも、俺は凰に布団をかける。制服がシワになりそうだけど、そのくらいは自業自得でいいだろう。

「これでよし…っと。じゃあ葵、悪いけど、そっちに入れてくれ。」
「構わない。」
「悪いな、ホント。ちょっと狭くなるけど、俺は寝相はいいほうだから、まあ心配はするな。」
「知ってる。私も、寝相はいいもん。」

互いにさっさと寝巻に着替え、同じベッドに入っていく。
今更気恥かしさなどない。昔は、よくこうしていたものだ。

「鈴音（リンイン）。」
「ん？どうしたんだ。」
「うるさいけど、嫌いじゃない。」
「そうか。俺もそんな感じだ。」
「…羨ましい。」
「……何が、だ？」
「どんなことも全力で取り組んで。泣いて、笑って。…恋をすると、あんな風になるの？」
「それを俺に聞くなよ…。」

俺だって、恋愛などしたこともない。女の子を見てかわいいと思うことはあるが、同時に、やはり住む世界が違うとも思ってしまう。…俺が付き合えるのは、おそらく、俺のように多少裏について知っている人物だけだろう。
レッドフレームの完成形が世に出回るようになれば、状況は変わるだろうが…。

「羨ましい。あんな風に、熱い思いを持てるなんて…」
「葵…。」

葵は、かなり冷めた人間だ。事実を端的に言い、感情が読めない（もちろん俺には分かる）。
しかし実際は、コミュニケーションが苦手なだけ。葵自身にも自覚はないだろうが、コイツの心の奥底には、強い思いがある。それを、表に出すのが苦手なだけだ。

「葵。ここは学校だ。分からないことがあれば、学べばいいさ。『人間らしくない』って思ってるかもしれないけど、そうやって悩む時点で、十分だと思うぜ？」
「お兄ちゃん…ありがとう。」

「じゃ、電気消すぜ。おやすみ。」
「うん、お休み。」
部屋から、音と光の一切が消えた。

第１６話　二人の幼なじみ（後書き）

葵、だんだんと周りに溶け込んでいます。

３組で出番は少ないけど、頑張らせたいです。

次話は……まだ執筆中です。

第17話　同情するなら愛をくれ（前書き）

十七話の投稿です。
話があまり進みません。

が、久々にスラスラと書けたので、作者的には満足です。

第17話　同情するなら愛をくれ

――朝。
まだ外が暗い時間に、凰鈴音（ファン・リンイン）は目覚めた。

（うーん…あれ、あたし、いつの間に寝てたんだろう。）

まだ寝ぼけた頭で、そんなことを考えながら起きあがる。そして、自分が制服のまま眠っていたのだと気づいた。

（あー、シワになっちゃうわね、コレ。とりあえず、着替えを…）

まだ薄暗い部屋を見渡す。ハンガーにかかっていたのは、自分のものではない、男物の制服が二着…。

（…ってあれ、男物!?…そうだ、昨日は一夏の部屋に行ったんだっけ。）

だんだんと目が覚めてくる。だが、恋する乙女の頭は、誤作動を起こしていた。

（じゃああたし、あの暴力剣道娘を追い出して、一夏と同室になったんだ!!）

まるで夢の中にいるような感覚。それを不安に感じつつも、頬をつねってみる。…痛い。
その痛みが、これはまぎれもなく現実なのだと教えてくれた。

「ふふっ♪」

十人中十人が上機嫌だと判断する顔で、凰は小躍りを始める。気分はｔｈｅ・有頂天。我が世の春が来た～、とでも言いたげな様子だ。…が、その笑顔は、すぐに不機嫌なものに変わる。自分が寝ていた、その隣。もう一つのベッドには、不自然なふくらみが二つもあったのだ！

（もしかして、あの女、戻ってきた挙句同じベッドに…！！）

許せない。憤怒の表情にトランスフォームし、デストロイモードとなった凰は、ずかずかと布団に歩み寄り、勢いよく布団をはがす。そこで寝ていたのは――

目を開けたまま天井を向き、まったく同じ姿勢で眠る、赤と青の男女だった。

まったくの予想外。凰は、フリーズしたかのように止まっている。…と、不意に男の目が動いた。上下左右に激しく、高速で。ギョロギョロと、辺りを見回すかのように…

「ひっ……ぎゃあああぁぁぁぁぁ！！！！」

１０１７室に、甲高い悲鳴が響き渡った――

◆

「うるせぇ、ブチ殺すぞ、クソ虫が！！……ってあれ、俺、起きてるのか。
お、おはよう、凰。どうした？まだ気分が悪いのか？」
見たことのない機体でセシリアをフルボッコにする夢をみていたら、大声によって目が覚めた。そして目の前にいたのは、青い顔をした凰。…状況がよく分からないな。
「な…なんでアンタがこの部屋にいるのよ！！」
「…うるさい。」
再び大声を上げる凰の頭に、目ざまし時計が直撃する。葵も今のので起きたようだ。
「…にしても、凰っていつもこんなに早起きなのか？代表候補生ってのはスゲェな。」
時刻は午前四時。葵の普段の起床時間の一時間も前だ。
見ろ。生活リズムを崩された葵が、超不機嫌な顔してる。…ふつうに感情が出てるじゃねぇか。昨日の話は何だったんだろうな？
「あ、これは、たまたま目が覚めて――
じゃ、なくて！どうしてあんたがこの部屋にいるのよ！」
「そりゃ、ここが俺達の部屋だからだ。何言ってんだ、お前？」
「え、嘘？じゃあ、一夏と同室になったのは…」
「夢。もしくは妄想。リアルブートしてみろ。」
葵、まだ不機嫌だ。正直、俺でも見たことがないくらいに。
で、当の凰はというと…混乱してる。ブツブツと、なにやら呟きな

がら。正直、どん引きするほど不気味だ。

「と、とりあえず鳳。お前、昨日一夏の部屋に行ったのは覚えてるな？」

「え！？あ、うん。行ったわよ。」

「…で、泣きながら部屋から出て、葵に保護されたのは？」

「……あ、そうだ！一夏の奴…！！」

うわあ、怒りが再燃したようだ。哀れ一夏。だけど助けない。

「で、俺達の部屋に来て、愚痴を言いまくって、疲れて眠っちまったんだ。」

「…ガキ。」

「ちょ、葵！？その言い方はヒドイわね！」

「事実。」

「ぐっ…。」

そういえば、二人ともいつの間に名前で呼び合うようになったんだ？部屋で話してた時か。

「…で、何であんなに大声出したんだ。近所迷惑だ。」

「…寝不足。」

「し、しょうがないじゃない！アンタたち二人とも、目を開けて寝てて、しかも紅（ホン）なんか、ギョロギョロ目を動かして！すごく怖かったんだから！！」

夢の中だったからな。レム睡眠中の急速眼球運動が起ったんだろう。

…しかしあの夢。俺、セシリアに恨みでもあるんだろうか？あるいは、ただのストレス？

「じゃあ、現状は理解したな？部屋に戻れよ。」
「え？でも、同室の子もまだ寝てるし、あたしもヒマだから、この部屋に…」
「あー、別にいいが、俺も葵もすぐいなくなるぞ？」
「え！？何でよ？」
「鍛練。」
「そゆこと。まあ、もう習慣化してるし、目も覚めちまったからな。幸い時間も早いから、久々に本物を振ってくるぜ。」

俺はジャージ片手に洗面所へ。すぐに着替えて戻り、ベッド脇に置いた刀――菊一文字を手に取る。そのころには葵も運動着に着替えており、外へ出る準備を終えていた。

「ど、どこへ行くのよ！」
「俺は剣道場。葵は…」
「射撃場。」
「…ってわけだ。またな。」
「ま、待ちなさいよ！！あ、あたしも…」
「来るの？シワだらけの制服で？」
「う…た、確かに…。」

凰も、ようやく自分の格好を理解したようだ。

「…一夏にだらしないとこ、見られるかも。」
「そ、それはイヤね…。うん、わかった。とりあえず部屋に戻るわ。」

葵の説得（？）により、凰も分かってくれたようだ。

「じゃ、行くぞ。」

「…また、学校で。」

凰に別れを告げ、俺達は互いの目的地へと向かう。

◆

朝。

刀を振って、弓を射り、ついでに手の空いてた葵とハデに戦闘訓練（ただし一方的）をした俺が玄関前廊下に行くと、なにやら張り紙がしてあった。

「んーと…クラス対抗戦（リーグマッチ）日程表…一回戦は一組対二組…ってことは」

「一夏対鈴音…。」

「…で、お前は四組と対戦か。」

「そう。二回戦は二人のうち、どちらかと戦う…。」

「珍しく饒舌だな…。楽しみか？」

「うん。」

即答かよ。この間は雑魚扱いしてたのに。

「…ようやく、デビュー。」

「あ、そういうことか。」

俺もセシリア戦では、同じことを考えたなぁ…とか思い出した。

「あ、おはよう紅、葵」

「お、凰。おはよう。」
「…おはよう。」

制服を着替えた凰がやってきた。その顔には、覇気が戻っているように見える。一晩休んだおかげで、だいぶ元に戻ったようだ。

「あ、一回戦の相手、一夏じゃん。ちょうどいいわ！ボッコボコにしてやるんだから！！」

…訂正。戻ったどころかパワーアップしている。瀕死から回復すると強くなる野菜人みたいだ。ガンバレ、一夏。でも、応援はしないぞ？自業自得っぽいから。

「…二回戦、楽しみ。」
「葵…。そうね！そのときは、思いっきりやりましょ！言っておくけど、昨日の発言、必ず後悔させてやるから！じゃあね！」

言いたいことだけ言って去っていった。元気な奴だ。

「…嵐。」
「ま、まあ…元気があっていいんじゃねぇか？…にしても、ずいぶんと気に入られたな。」
「紅也のおかげ。」
「……？俺、何かしたか？」
「直接的には、何も。」

まあ、何にせよ、うまくやっているなら何よりだ。うん。

「お、紅也、山代。おはよう。」
「お前たち、ずいぶんと早いな。」

今度は一夏と箒、二人揃って登場だ。凰、いなくてよかったな。いや、いた方が面白いことになってたと思うけどよ。

…と、不意に葵が一夏の前に立ち――

一夏の脛を蹴り飛ばした！

「痛ったぁ！？いきなり何だ！？」

「…女の敵。」

そう言い捨て、葵は去っていった。あえて言おう…よくやった。

見ると、箒もなにやらうなずいている。そういや、昨日の騒ぎの当事者なんだよな、こいつも。

「なあ、紅也？」

「ん、一夏。どうしたんだ？」

「どうしたも何も…俺、何か山代に嫌われることしたか？」

知らぬは本人ばかり。…こいつ、昨日何で凰が怒ったのか、泣いたのか、理解してないな？

「葵本人には何もしてない、とだけ言っとくぜ。後は自分で考えてくれ。」

「……？」

本気で考え始める一夏。こいつは、死ななきゃ…いや、死んでも治らないな。

「なあ、箒？分かるか？」

「自分で考えろ。」

…どうやら箒も、葵と同意見らしいな。え、俺？俺が葵の敵になると思うか？

「…ハア。それより二人とも、これを見ろ。」

「……ん？ああ。ってこれは…」

「クラス対抗戦…日程表…」

「そうだ。ちなみに一夏の相手は凰だ。むこうは、昨日の復讐するって、気合い入れてたぜ。」

「え？昨日って…ていうかお前、鈴と会ったのか？」

ああ、そう言えば話してなかったな。

「ああ。葵が連れてきた。アイツ…泣いてたってよ。女の子泣かせちゃダメだろ？」

「……やっぱり、か。…でも俺、泣かせることは一つも…！！」

「で、箒。本当のところは？」

まあ、全部知ってるけどな。

「こいつは死ななきゃ治らん。」

「まったく完全１００％同意見だ。じゃ、教室行こうぜ。」

「うむ。…一夏、お前はもう少し敏感になれ。」

革新したって鈍いヤツはいるけどな。いっそのこと白式を、フル・サイコフレームにすればいいんじゃないか？篠ノ之博士、サイコフレームとか作れないかなぁ？

◆

時は進んで放課後。

「さあ、どっからでもかかってきなさい、紅！！」

俺と凰は、第二アリーナでＩＳを展開し、向かい合っていた。

……どうしてこうなった！？

第17話　同情するなら愛をくれ（後書き）

さて、皆さんお待ちかね？の紅ＶＳ鈴です。

ムリヤリな気もしますが…。戦闘が書きたかったんです！

第１８話　紅也ＶＳ鈴！赤い機体はダテじゃない？（前書き）

第十八話です。
すこし短いですが、久々のＩＳ戦です。

第１８話　紅也ＶＳ鈴！赤い機体はダテじゃない？

――前回までの、ＩＳ～ＲＥＤ＆ａｍｐ；ＢＬＵＥ～

「…女の敵。」
「犬に噛まれて死ね！」
「馬に蹴られて死ね。」
「こいつは死ななきゃ治らん。」

「さあ、どっからでもかかってきなさい！」

◆

はい、脳内モノローグ終了。
目の前には、相変わらず凰が立っている。しかもＩＳを展開して、臨戦態勢だ。
そして横。俺の横には、ＩＳを展開した葵が立っている。…ん、通信？

（早くやれ…）
（…ホント、どうしてこうなった…。）

◆

――――今よりちょっと前

放課後、第二アリーナ。
今日は、一夏との特訓はナシだ。箒が怒ってた上に、昨日の顛末を聞いたセシリアも機嫌を悪くし、一夏には指導者がいなくなってしまった・・・。
じゃあ、今日は久々に休みにしようぜ、と提案したら、全員が了承。
放課後の予定が空いた俺は、葵とＩＳのトレーニングをすることにした。
そして今。

「はっ、ふっ、どりゃあ！！」
「甘い。落とす！！」

目で見る前に刃を受け、気付かれぬ間に振り下ろす。
アリーナの上空で、俺達は接近戦をしていた。俺はガーベラで、葵はビームサーベルで。
もちろん、出力は装甲が切れない程度まで下げてある。…戦闘モードの出力なら、レッドフレームなどたやすく両断されてしまうからだ。
しかし…互いに得物は一本のみだが、こちらは両手、相手は片手。葵の素早い攻めに、俺は翻弄されている。重さのないビームサーベルならではの戦い方だ。そして…

葵が、唐突にビームサーベルの刃を消した。

宙を斬るガーベラストレート。葵はその峰を蹴り、俺の懐に飛び込

む。そして取りだしたのは二本のナイフ――アーマーシュナイダーだ。

絶え間ない格闘攻撃。気が付いたら俺のシールドエネルギーはゼロになっていた。

「…私の勝ち。」

「ああ…。ちくしょう、完敗だ。」

《やはり、私のサポートを切ると、勝負にならないな。》

「でも、最初の居合は、直撃した。」

「あれは俺の必殺だからな…。最初に使うもんじゃねぇんだよ、本来は。」

地上に下り、先程までの反省点を話し合う。

今回俺は、８のサポートを切った状態で練習していた。そして結果は惨敗。俺自身の強さは、まだまだであることが証明された。

《…まあ、この機体では永遠に葵には勝てまい。一応、追加装備は発注しておいたが、完成はまだ先だ。》

「そうかい…。ああくそっ、情けねぇなぁ…」

「何が、情けない、よ！！」

唐突に響いた第三者の声。俺達がそちらに意識を向けると、そこには凰の姿があった。

「葵は葵で化け物じみた強さだったし、それを持ちこたえてる時点でアンタも十分強いわよ！！」

「…でもよ、俺は師匠や老師に比べると、まだまだ……」

「あーもう！謙虚すぎるとそれはそれでムカツクのよ！！」

がーっ、とうなり、ツインテールを逆立たせる凰。…どうなってるんだろうな、コレ。

「鈴音、どうしたの？」

「アンタがこっちに向かったって聞いたから、訓練見てたんだけど…。スゴイわね。あたしも格闘戦向きの機体だけど、あんなに接近されたら勝てないわ。」

「…当然。」

褒める凰に対し、葵は……照れてる。珍しいこともあるもんだ。凰は人を褒めるタイプには見えなかったし、葵もクールキャラが定着してたのに。

「…で、紅！そういうわけだからアタシと戦いなさい！！」

「…何故？」

いきなり飛び火してきたうえに、話が全く繋がっていない。

「だって、今のあたしじゃ葵には勝てなそうだし、紅になら勝てるかな？って思ったんだけど。」

「……そうかい。」

◆

そして、現在に戻る。

けっこう疲れてるんだけどな、俺。
まあ、コイツとは一度戦ってみたかった。そう考えると、これは悪い申し出じゃあない。

「いいぜ。シールドエネルギーを補給したら、すぐにでも始めようか。」
「…じゃあ私は、立会人になる。」

ピットへ引き返す俺。そしてシールドエネルギーと燃料を補給し、戦闘準備を整える。
相手は格闘型の機体らしい――武器はガーベラでいいだろう。
ガーベラストレートの状態をチェック。ビーム（低出力）と切りあったが、刃こぼれ一つない。熱によるダメージもゼロ。戦闘に支障はないようだ。

（よし…いくぜ、8！）
《今回はサポートするぞ。》

フライトユニットに点火、空へと機体を押し上げる。
凰は、すでに上空にいた。赤紫（マゼンタ）の機体に、肩の横に浮いた棘付き装甲。そして、何よりも目を引くのが連結した巨大な青竜刀だ。それを片手で構えている様子を見ると、なるほど、確かにパワータイプの機体だ。
…このレッドフレームでは、力負けする。

「来たわね、紅！！さあ…行くわよ！！」
「異論はないぜ！！」

正面から激突。振り下ろされる青竜刀を、俺はガーベラで受け流す。

…が、刃は一つじゃない。回転した青竜刀の、反対側の刃が、レッドフレームを掠める。

《実体ダメージ小…が、あれはなかなかキツイぞ。》
（ああ…。まともに打ち合うわけにはいかねぇな。）
《…ビーム兵器を使うか？》
（いや、あれはギリギリまで隠したい。こんな遊びで使うもんじゃないからな。）

ラッシュはなおも続く。俺はバレルロールやＡＭＢＡＣを駆使して回避し、どうにか距離を取る。
……が、それは悪手だったようだ。

《空間に異常圧力を確認！何か来るぞ！！》
（何かって…どわあ！？）
《シールドエネルギーにダメージ！何らかのエネルギー兵器と推定！》
（くっそ、不可視の砲弾か？まるでミラージュコロイドだな！）
《…どうする？》
（なら、こっちも不可視の斬撃だ！！）

姿勢を崩したふりをして、地上に下りる。そして地面に刀を突き立て、放つのは俺の得意技――

「空破斬！空破斬！無限・空破斬！！」

ズガガガガン！！

「えっ？まさか、衝撃砲！？この甲龍（シェンロン）以外にもあるなんて……」
「シェンロン！？…の、割には全然龍っぽくないな。」

ドラゴンハングもトライデントスピアも、火炎放射も無さそうだ。

「うるさいわね！じゃあ…こっちも容赦しないわよ！！」

不可視の砲弾の数が二倍になる。おそらく、両肩から撃ってきているのだろう。

発泡金属の装甲が削られ、操縦者である俺にダメージが通っている。

…このままでは、少しばかしマズいな。空破斬は、ただの技。対するミラージュコロイド砲（仮）は兵器。威力は相手の方が上で、しかもだんだんと空破斬が見切られている。

（8……煙幕弾をバズーカに装填、具現化準備だ。）

《ずいぶんと急だな。2秒で済ませる。》

普段は使わない兵装。そのため、自力での展開は難しいのだ。

その間にも不可視砲（仮）は俺を撃ち続ける。回避はするも、かわせない部分が少しずつ被弾していく。

「くっ…この、ちょこまかと！！」

凰はいい感じで焦ってきたようだ。これなら、勝機が見えてくる。

《セット完了！》

（サンキュー！！）

右手を前に突き出し、バズーカを展開。

スラスターを使って反転した後、砲弾をばらまく。

「何よ、遠距離武器もあるじゃない！…でも、そんなの効かないわ

よ！」

ドオン！ドオン！

直撃コースだった二発を迎撃される。すると、弾頭から煙があふれ、鳳の視界を覆い尽くした。

遅れて、外れるコースの弾頭も起爆する。アリーナは、黒煙に包まれた……。

「ケホッ、ケホッ……。これ、ただの煙じゃ、ない……？」

「そうだ！煙幕にチャフを混ぜた、特性撹乱弾だ！…欠陥兵器だから、実戦じゃ使えないけどな。」

「欠陥兵器…？」

「……こっちからも見えねぇんだよ。

つーわけで、ここは一つ引き分けってことで…」

「納得、するかぁ！！」

無差別にインビジブル・バレット（仮）を撃ち始める鳳。…奴め、まだエネルギーが残っているとは。第三世代のくせに、ずいぶんと燃費がいいな。

このままでは、鳳のエネルギー切れよりも先に、煙が晴れてしまう。

…じゃあ、当初のプラン通りにやるか。

「…展開。」

レッドフレームの両腕の間に、武装が出現する。

それは、いつもの日本刀（ガーベラストレート）ではない。とてつもなく巨大で、とてつもなく長い、鉄塊のような――

◆

「鈴音、シールドエネルギー、ゼロ。勝者、紅也。」

アリーナに、葵の声が響く。

煙は両断され、その中心で凰のＩＳ、甲龍（シェンロン）があおむけに倒れていた。

「はあ、負けちゃった。」

「いや、俺も正直ギリギリだった。いい試合だったよ。」

互いにＩＳを解除する。倒れたままの凰に手を伸ばし、握手をした後、引っ張り上げる。

「…にしても、紅！あんた、一体どんな手品を使ったの？あれだけあった甲龍のエネルギーが、一瞬でゼロになるなんて。」

興味津々、といった様子の凰。それに対し俺は、こう答える。

「企業秘密、って奴だ。一つ言うとすれば…俺の機体もパワータイプだった、ってとこかな？」

「何よそれ！答えになってないじゃないの！！」

「悪いな、答えられなくて。お詫びといっちゃあ何だが、ＩＳのメンテをしてやるよ。多分今ので、結構ガタが来てるハズだからな。」

「う…なんかはぐらかされた気がするけど、もういいわ。企業所属なら、そういうこともあるでしょ。じゃ、お願いするわ。」

こうして俺達３人は、仲良くピットへ戻っていった…。

第１８話　紅也ＶＳ鈴！赤い機体はダテじゃない？（後書き）

…今回、レッドフレームはある武装を使いました。
「ＡＳＴＲＡＹ－Ｒ」を読んだ人はすぐわかりますよね。

ついでに、ちゃっかり甲龍のデータもゲットしてます。

次回は、新しい出会いがあります。

第１９話　もう一人の代表候補生（前書き）

第十九話、投稿します。

この話が投稿される頃、私はＰＣが使える環境にはいないと思われます。

そのため、感想等への返信ができないことをご了承ください。

うまくいけば、一週間ほどで戻ってきますので、それまでお待ちください。

今回はタイトル通り、新たな出会いがあります。

第19話　もう一人の代表候補生

――夜、第二アリーナ。

「まったくもう、アリーナの見回りなんて…面倒ですね、織斑先生。」

「言うな、これも仕事だぞ。クラス対抗戦が近いんだ。使用期限をオーバーしようとする者や、片付けない者がいたら困るだろう。」

歩いているのは二名の教師――織斑千冬と山田麻耶である。二人は、アリーナの利用規則を破っている人間がいないかどうか、こうして見回っているのだ。

「はい、ここですねー。消灯よし、ステージは…って、あれ？これは、地割れ…でしょうか？」

「まったく、どんな暴れ方をしたらこうなるのやら…。それにしても、これは…」

「？　織斑先生？」

織斑千冬は気付いた。これは、衝撃によって地を割ったものではないと。

しかし、妙だ。いや、馬鹿な話だ。

地面を切断できる武器など、あるはずがないではないか――

◆

「…で、8。状況は？」
《アレを使ったせいで、両腕にガタが来てるな。早急に修理が必要だ。》
「…はあ、やっぱりか。」

前回の戦闘で使った、未完成の切り札。実戦で使えるかどうか、軽く試してみるつもりだったのだが…。
機体の出力不足だった。
一応、構えることはできた。
振り下ろすこともできた。
ただ、止めることができなかった。軽く当てて終わらすつもりが、地面に叩きつけてのオーバーキルになってしまった。
師匠……何であんなものを作ったんですか…。

《『材料が手に入ったから、全部使ってみた』と言ってたぞ。》
「ハハハ……あの人らしいや。…しょうがない！今夜は徹夜覚悟でメンテだ！8、予備パーツは足りるか？」
《腕の予備は4本。まだ後一回は壊せるぞ。》
「壊さねぇよ。」

と、漫才を繰り広げていると、シャワー室から葵が出てきた。

「紅也、次。」
「あー、悪い。これから整備室まで行ってくるから、シャワーはまだだ。遅くなるかもしれないから、今日は先に寝ててくれ。」
「…腕、やっぱり壊れた。」
「うーん、いけると思ったんだけどなぁ。」
「でも、紅也の腕は、無事。なら、それでいい。」

「そっか、ありがとよ。…おやすみ。」
「おやすみ。」

作業着に着替え、８を持ち、俺は寮を後にする…。

◆

ＩＳ整備室。
本来なら二年生からはじまる『整備科』のための設備であり、その名の通りＩＳの整備を行う施設である。…そう、整備。間違っても、修理に使うところではない。
が、そんなことを気にも留めない男が、ここにはいた。
言わずと知れた主人公、山代紅也である。

「えーと、整備室は…こっちか？」
《そこから3番目のドアだ。この時間なら、誰にも気づかれないはずだ。》
「おっけー。いち、に、さん…っと、ここだな。」

ドアをサーチ。鍵はかかってないようだ。
静かにドアを開ける。予想通り、中には誰も……いや。

（誰かが隠れてるな…。）

どこかから視線を感じる。俺を見ている、というよりは、誰かが来たから様子をうかがっている、といった感じだ。…何でわかるかっ

て？８が熱源サーチして、データを俺に送ってるからだよ。
すぐに視線の主も…ホラ、そこだ。見つけた。

「なあ…勝手に入って悪かったとも思ってるけどさ、教えてくれ。
アンタ…誰だい？」

ビクッ！と動く影。しかし、それ以上の動きは見せない。
一秒、二秒、三秒……延々と沈黙が続くかと思ったが。

「…バレてる？」
「ああ、バレバレだ。」
「……」

暗がりから現れたのは、同学年の女子生徒だった。
それも、会ったことはないが、見たことはある顔である。

「…更識（さらしき）簪（かんざし）。」
「……私を、知ってるの？」

おお、驚いてる。そりゃそうか。知らない人（しかも男子）に、名前を知られてたら。俺も、凰に話しかけられたときはそんな感じだったと思う。

「そりゃ知ってるさ、四組のクラス代表さん。」
「……」

また沈黙。人と話すことが苦手なのか、単純に暗い子なのか…。葵は前者で、この子は後者かな？
とりあえず、電気を付ける。更識は、一瞬眩しそうに目を細めるも、まだこちらを見ていた。

「……私に、何か用？」
「いや、違うんだ。ここの整備室を使おうと思ったんだが、まさか先客がいるとはな…。
ここ、借りても大丈夫かい？」
「……私も、無断使用。別に……構わない。」
「そうかい。じゃ、遠慮なく…」

8から、レッドフレームを呼びだす。今回は戦闘モードじゃないから、8はそのままの状態で残っている。

「……！専用機……。」
「ん、ああ。俺は企業の操縦者なんだ。専用機くらい持ってるさ。」
「……あなた、一体……。」
「そういや、名乗ってなかったな。俺は山代紅也。一組の生徒だ。」
「……山代？もしかして、三組のクラス代表と……」
「ああ、あいつの兄だ。っていっても、双子だけどな。」

話しながらも作業を継続。ううん、フレームが歪んでるし、電気系統もスパークしてる。やっぱり、総取り換えが一番早いな。よし。

「8。フレキシブルアームズを展開する。補助を頼む。」
《了解だ。》

俺の背中にパーツが装着される。菱形のボックス。その各辺から四本のアームが飛び出たようなユニットだ。

「……何、それ。」

更識は、先ほどよりも興味深そうな声で聞いてくる。

「作業用の補助アームだ。修理には必須だぜ。…それより、いいのか？自分の作業は？」
「……そうだった……。」
更識は空中投影ディスプレイを呼び出し、キーボードを叩き始める。
「よし、一番、二番アーム起動！右腕固定！三番でボルトを外して…っと。」
レッドフレームの右腕が、本体から分離する。それを慎重に地面に下ろし、次に予備の右腕を実体化。空いた拡張領域（バススロット）に壊れた右腕を格納する。
そして、逆の手順で右腕を装着。最後に、四番アームでドリンクをつかみ、口元に持ってくる。これで、作業は半分終了だ。
「……器用。」
「そうか？俺じゃなくて、コイツが優秀なんだよ。」
そう言って8を指さす。8も《ハイテクだからな》と、自慢げな様子だ。
「え！？……疑似人格コンピュータ？」
「そうだぜ！それも、とびきりハイスペックだ！」
《なぜお前が自慢する。まあ、否定する気は無いが。》
「……ちなみに、今の作業……あなたがやっていたのは……どの部分？」
「……四番アームの操作だ。」
ドリンクを振って見せる。一方で、一から三番は、その辺にあった

ジャンクパーツでお手玉をしている。…8め、よっぽど自慢したいらしいな。

「くすっ……」

「あ、こら、8！テメェのせいで笑われたろうが！」

《お前がヘボいからだ。自業自得だ。》

「なにおぅ…」

「くすくす……ご、ごめん、ちょっと……可笑しくって……」

先程までの、どこか陰のある表情から一転、更識はわずかに笑みを浮かべていた。

「へへっ、ようやく笑ったな。」

「……え？」

更識は、一転してきょとん、とした顔になる。

「いや、さっきまでのお前って、なんか、暗かったからよ。そっちの方が似合ってるぜ。」

「へ？に、似あ……あう。」

顔を赤くして照れる更識を見て、思わず笑みがこぼれる。

…葵も、こんな時期があった。俺が師匠に弟子入りして、葵が一人ぼっちになったとき、ずいぶんと暗い性格になってしまった。……いや、そりゃ、人付き合いが苦手なのは元々だけど、あの時はもっとひどかった。なにせ、俺にすら笑顔を見せなくなったのだから。そういえば、その頃からだったな。葵が、俺を名前で呼ぶようになったのは……。

「よし、作業再開だ。左腕、固定！」

《合点だ。さっさと済ませるぞ！》

◆

「よし、修理完了！」
「早い……！」

目の前には、新しい腕を装備したレッドフレームが。現在、８が伝導ケーブルに異常がないか、サーチしているところだ。

「ところで更識。お前の作業は進んだのか？」
「……え、うん、まあまあ……」
「そっか、まあまあか。悪かったな、邪魔して。」
「……別に。」

そう言って、更識はすっと目をそらした。

《駆動系、及び油圧系、オールグリーンだ。》
「よし、じゃあ、テスト行くぜ！」

レッドフレームに体を預け、機体を纏っていく。両腕への違和感はほとんどない。予備パーツとはいえ、なかなか完成度の高いものを選んでくれたようだ。

「完了・・・っと。違和感はほとんどない。さて、機能は…」

右手から、エネルギー供給用のコネクタが現れる。そこに、軽くエネルギーを流し込むと、黄色いエネルギー球が形成された。

「よし、エネルギー循環も正常。耐久性も大丈夫そうだ。」

エネルギー球でお手玉をしながら、可動性もチェック。支障なし。完全に元通りだ。俺はレッドフレームを解除し、カバンの状態へと戻す。

「じゃ、俺は帰るけど……あんまり遅くまで無理すんなよ。」

「……あ、待って……」

帰ろうとする俺を、更識は呼びとめる。

「ん、どうしたんだ？」

「……せっかくだから、手伝って欲しい。」

「…何を？」

「……私の、専用機作りを……！」

そう言った更識の目に、最初のおどおどした雰囲気は無かった――――。

第１９話　もう一人の代表候補生（後書き）

さて、紅也に手伝いを頼む簪。ちょっと強引かもしれませんが、こんな流れで行きます。
次話は未完成です。今日中に書けたら投稿予約をしておきます。

第２０話　初仕事（前書き）

はい、第二十話です。

これが投稿される頃には、もう8月ですか？早いものですね。

二十一話は未完成のため、連続更新はここで終わりです。

一週間以内に戻ってきますので、その時はまた、よろしくお願いします。

第２０話　初仕事

専用機作りを手伝って欲しい。
目の前の少女は、確かにそう言った。
しかし――――
俺に依頼する。その意味を、正しく理解しているだろうか？

「…更識　簪。」
「……え？」
「お前は、俺に『専用機制作』を依頼することがどういうことか、正しく理解しているか？」
「……」

更識は無言だ。おそらく、俺の言った意味を考えているのだろう。

「…俺は、オーストラリアの国営企業、モルゲンレーテに所属している。つまり、俺に依頼をするということは、モルゲンレーテに依頼すること…ひいては、お前の専用機を作った組織と、モルゲンレーテが提携する、ということになる。それでも……いいのか？」
「……！！」

ようやく思い至ったようだ。驚愕というか、目に見えて動揺している。
…更識の名を持つ少女だが、どうやらまだまだ不足のようだ。
長い沈黙のあと、更識は再び口を開く。

「……それは、困る。……でも、手伝って欲しい……。」
「組織の利益を優先したのは合格だけど…。それじゃあ、俺にメリ

ットがねぇだろ？そのへん、どう考えてるんだ？」

再び更識を睨む俺。…さあて、どう出る？互いの得になるプラン、提案できるか？

「……機体運用データの、あなた個人への譲渡……。私は、モルゲンレーテじゃなく……山代紅也に依頼する……！」

紅い瞳が、俺をまっすぐに射抜く。その眼に迷いはなく、ただただ、強い光が宿っていた。

「……ふう。どうにも、弱いねぇ…。」

こんなに純粋で、ひたむきな奴に頼まれたら、断れないだろ。

「……じゃあ……」

「追加の条件だ。機体データだけじゃなく、武装データも要求する。…俺個人に依頼するということは、モルゲンレーテの特許技術は使えない。それでもいいのか？」

「……構わない。一人で続けるより……そっちの方が、いい。」

「…そうか。なら……交渉、成立だ！」

右手を差し出す。更識も、おずおずといった様子で、右手を出し、握手をする。

「改めて自己紹介だ。俺は、フリーの見習い技術者、山代紅也だ。紅也と呼んでくれ。」

「……私は日本の代表候補生、更識簪（さらしきかんざし）……。更識って呼ばれるのは……好きじゃないから……その……。」

「わかった。じゃあよろしくな、簪。」

「……うん。」

◆

「…で、まずは、お前の機体を見せてほしい。本体は完成してんだろ？」

「……うん。おいで……打鉄弐式（うちがねにしき）……」

簪の体が光に包まれていく。展開された打鉄弐式は、打鉄とは別物の機体であるようだった。

まずは肩部ユニット。打鉄ではシールドが装備されていたが、それが大型のウイングスラスターと、小型のジェットブースターに換装されている。次に目につくのは、機動性重視の独立ウイングスカート。また、腕部装甲も、打鉄よりもスマートな形をしている。

「へぇ…。防御型じゃなくて、機動型なんだな。コンセプト自体は、俺のレッドフレームとよく似てるぜ。」

「そ、そうなんだ……。紅也、くんも……機動型なんだ……。」

「ああ。特殊な軽量金属を使っててな、とにかく攻撃を喰らわず、敵の懐に入って、ズバッ！と斬る機体だ。…で、コイツはどうやって運用するんだ？」

「あなたとは……正反対。武器は……マルチロックオンシステムによる高性能誘導ミサイル……。それと、荷電粒子砲……。」

マルチロックに荷電粒子砲。面制圧に向いてそうだな。ＯＩＧＡＭＩとか搭載したら、鬼畜使用になりそうだ（撃ち負けはしないだろ

う、当るのであれば…）。
しかし、荷電粒子砲、ねぇ…。ウチの陽電子砲と、どっちが強力かな？案外、いいデータが取れそうな気がするぜ。で、マルチロックは、確かＮ．Ｇ．Ｉの次世代機に搭載される予定だったハズだ。完成させれば、ヤツらと取引も可能だろう。そうすれば――彼女を、こちらに引き込める。
……まあ、青写真を描いていても仕方がない。今は、打鉄弐式に集中だ。

「まず、第一に。俺が企業と無関係に使える技術ってのは、そんなに多くない。だから、打鉄弐式を完成させることはできない。」
「……」
「だけど、代わりの武装を搭載して、戦えるようにすることはできる。今は、それでいいか？」
「いい……今は……それで……。」

さて、俺が使える技術といえば……
・白式の零落白夜
・ブルー・ティアーズの全データ
・甲龍の全データ
の三つか……。

……
……
……

全部、盗んだモンじゃねぇか！！

「ま、まあ、ミサイルの誘導システムは、ブルー・ティアーズを参考にするとして、弾頭は……八式弾を使うか。荷電粒子砲は……技

術は持ってるが、これは公開できない。悪いな。」
「……気に、しないで……。そういうことも、ある……。」
「そう言ってもらえると嬉しいぜ。…よし！これで方針は決定だ。
とりあえず、今日はここまでにしとこうぜ。」
「……うん。」

俺と簪は、整備室を後にする。
さて、明日からは、忙しくなりそうだ。

◆

翌日からは、嵐のような日々だった。
朝。いつもの特訓を行う。
昼。時に一夏たちと、時に鳳や葵と昼食を取る。まだ、修羅場中であるようだ。
夕方。一夏の訓練。その後、部活。
夜。8と簪とともに、武装の設計とシステム構築。
……俺、よく体を壊さなかったな。

そんな日々が数週間続き、本日、ようやくマルチロックミサイルの試作品が完成した。

「――と、いっても、同時にロックできる本数は、本人の能力次第、しかも誘導兵器の適性が必要な欠陥品だけどな。」
「……じゃあ、私には……難しい……。」
「かもな。だから、コレを使う。」

そう言って俺は、一枚のディスクを取り出す。

「……それは……？」

「8と同じ、疑似人格データだ。これをＩＳのＡＩとして組み込んで、マルチロックと誘導の補助をする。…まあ、俺が組んだプログラムだから、完成度はそこまで高くないけどな。」

ディスクをコンピュータにセットする。後はこのケーブルを打鉄弐式にセットし、インストールをすれば、ＡＩが起動するはずだ。

「どうする？使うか？」

まっすぐに簪の目を見る。ずいぶんと顔が赤いな。きっと、完成の瞬間が近いから、興奮してるんだろう。

「え……えと、使う……。」

「ＯＫ！そうこなくっちゃな。じゃあ、この書類にサインしてくれ。」

それは契約書。こういうことをしっかりしておかないと、モルゲンレーテに迷惑がかかる。

主な内容は、以下の通りだ。

・手助けは俺の一存であり、企業は関与しない。
・機体、および武装の運用データは、全て俺個人にも譲渡される。
・疑似人格のインストールによる不具合には、一切の責任を負わない。
・当方に、打鉄弐式を接収する意思は無い。

まあ、以前の口約束を、書面にしただけのものだ。追加したのは三行目だけ。ちょっと無責任な気もするが…。まあ、しょうがないだろ。自信が無いんだから。

「わかった……。」

二枚にサインをし、一枚は俺が、もう一枚は簪が持つ。ここに、契約は完了した。

「じゃあ…ＡＩのインストールと武装の量子変換、両方進めるぜ！」
「……お願い……します。」

ケーブルをセット。データ送信！

「……今更、だけど……」
「ん？」

ＡＩのインストール中の空き時間。唐突に、簪が話しかけてきた。

「どうして……助けて、くれたの……？」
「どうして、って…。あのとき、ちゃんと言っただろうが。『君が何者だっていい！必要だって言ってくれ！』…ってな。」
「……そんな台詞、聞いてない……」
「冗談だよ。…でも、ま、俺個人が必要だって言ってもらえて、嬉しかったから、かな。俺自身は、まだまだ半人前だから、頼られる機会なんて、無いんだよ。」

葵は別だが。戦闘以外では、頼りにしてくれてるが。

「……そ、その……あの……あ、ありがとぅ。」

「…その言葉は、完成した時までとっておいてくれよ。」
「……うん。」
再び沈黙。やがてインストールが完了するまで、俺達は固唾を呑んで見守っていた。
「よし、インストールは完了だ。簪、起動してくれ。」
さて、と…。うまく動いてくれよ！
「打鉄弐式、起動……。……これは。」
《初めまして、私は、戦闘支援用ＡＩです。名称未設定…名前を設定してください。》
空間に投影されたディスプレイに、文字が浮かび上がる……成功だ！！
「よし、成功だ！そいつに名前を付けてやれ。今日から、そいつが簪の相棒だ！」
「相棒……私、の……」
そう、相棒だ。
この数週間、簪を見ていて気付いた。
……こいつは、なんでも一人でやろうとする。
あのとき、協力を求めてきたのは、きっと奇跡的な出来事だったのだろう。
それはさておき、このまま一人で背負い込み続けたら、後々困難にぶつかったとき、きっと足を止めてしまうだろう。そうなればただでさえ閉鎖的な簪が、より暗い性格になって、心を閉ざすかもしれない。

…俺がいなかった時の葵が、どんどん暗くなっていったように。
だからこそ、思う――コイツには、唯一無二の相棒が必要だ。一人でできなくても、二人ならできる。そう、信じさせてくれるような……。

簪は、きょろきょろと周りを見渡している。…と、不意に俺と目が合った。

「……クリムゾン……あなたの名前は、クリムゾン……。」

クリムゾン、真紅。俺の、今の髪の色だ。

「…おい、いいのか？そんな、思いつきで決めても。」
「思いつきじゃ、ない……。あなたは、私を……助けてくれた……。……だから、あなたも……紅也くん、も……私にとっては……」

相棒、と。そう言いたいのかな。

《了解。クリムゾンを、名称登録…。初めまして、マイスター。あなたのお名前は？》
「……更識　簪。」
《簪……すてきな響きです。今後とも、よろしくお願いします。》
「……うん、こちらこそ……」

そう言った簪の顔は、とてもきれいな笑顔だった。

「よし、じゃあ後は、クリムゾンが火器管制を出来るかどうか、アリーナでテストしよう。幸い、使用許可はとってあるからな。すぐに行こうぜ！」

そう言って向かうのは第二アリーナ。この時間なら、まだ葵が使っているはずだ。なら、葵にも手伝ってもらえるだろう…。

――とか考えていた紅也は、非常に甘かったと言わざるを得ないだろう。

第２０話　初仕事（後書き）

次回、初めての葵視点です。

葵と簪、相容れるのか無理なのか……。そんな話にする予定です。

第２１話　葵、怒る。（前書き）

お待たせしました。第２１話です。

ようやく帰ってこれました。しかし、ストックはないので、厳しい状況です。

流れはできているので、投稿は続けていきますから、安心してください。

第２１話　葵、怒る。

――女性というものは、本当に分からない。
俺が技術者であり、仕事を請け負ってる以上、そちらを優先するのは仕方がない。
多少、葵に迷惑をかけることは承知だった。
葵も、納得しているはずだった。
それなのに……目の前の光景は何だろうか？

「…立て。紅也の作品は、この程度じゃないはず。」

打鉄弐式は地に倒れ、空には、フル・ウェポン装備の青い機体が浮いていた……。

◆

〈ｓｉｄｅ：山代　葵〉

…最近、出番が少ない。
じゃなかった。最近、紅也が冷たい。

昼はよく一緒に食べるけど、夕方は一夏の特訓にかかりきり。たまに、私と模擬戦もするけど、やっぱり、その頻度は少ない。
問題は、夜。最近、紅也の帰りが遅い。
気になって聞いてみると、

「仕事を請け負った。」

とのこと。仕事なら、しょうがない。そう、思っていた。

――依頼主が、四組の代表だと分かるまでは。

四組の代表は、更識　簪。代表候補生なのに専用機が無い、可哀想な子。

そして……私の、対戦相手。

何で？何故、敵の手助けをするの？

私が嫌いになったの？――いや、それはありえない。何があっても、私たちは対立しない。

じゃあ、「一回戦はスルー」と考えていた私を、戒めるため？――紅也も相手をナメてた。

私の当て馬にする気？――迷惑だ。そんなことより、一緒にいてほしい。

じゃあ、相手に興味を持った？――有り得る。紅也は、そういうタイプだ。

興味があることは何でもやってみて、気が付いたら全力で取り組む。利害について発言するようになったのも職業意識からで、実際はそんなもの抜きに引き受けるお人よし。

そんな紅也は、彼女に乞われたのだろう。

――専用機を作ってほしい、と。

…ということは、その機体は、紅也が初めて、一人で組み上げたＩＳとなる。

それは許せない。お兄ちゃんは、約束してくれた。いつか、私の専

用機を作る、と。
なのに、他の女の専用機を先に作る？
そんなの、許せない。
――いや、認められない。

◆

ある日の訓練中。
例によって、私は一人だった。空中にターゲットを投影し、撃ち、切り、時には蹴り飛ばす。いつもの練習。が、今日はいつもと違っていた。

「お、良かった、まだ開いてるな…。おーい、葵！いるか？」

それは、間違いなく紅也の声。８を通じて、私の機体に通信が来る。アリーナの入り口の方へ降下。まだ紅也は出てこない――今出てきた。私に、手を振っている。私も、片手をあげて合図を返そうとすると……

あの女が、現れた。

「おーい、葵！悪いな、急に押しかけて。」
「…いい。何？」

思わず、険のこもった返し方をしてしまう。仕事なのは分かってる

けど、この女が紅也と私を引き離した、と考えると、胸がざわつく。
――そう、昔、紅也があの人に連れていかれたときのように。

「そ…そんなに怒るなよ。…っと、そうだ、その前に…簪、自己紹介。」
「……初めまして。わ……私は、更識　簪……。あなたの……対戦相手です。」
「…知ってる。私は、山代　葵。紅也の、妹。」
「よし、じゃあ、本題に入ろう。
葵。さっき、コイツの機体が完成したんだけどな。新開発した戦闘支援ＡＩを組み込んだから、そのテストをしたいんだ。…頼めるか？」

新開発。コイツのために、紅也はそこまでやったのか。
ずるい……。私には、そんなことはしてくれなかったのに。

ああ、認めよう。紅也は、これに、使える技術を全て使ったのだと。
これは、紅也の最高傑作。私以外に与えられた、紅也が作ったワンオフ機。
なら、証明してもらおう。

「いい。受けて立つ。」
「……よ、よろしく……お願い、します。」

最高は、最強に届くのか。
もし、戦うに値しない、不完全なモノだったら、こんな機体は……
いっそ――

◆

〈ｓｉｄｅ：山代　紅也〉

「じゃあ、今回の趣旨を確認するぜ。
メインは、ＡＩによる火器管制システムの動作確認。あとは打鉄弐式の実戦テストだ。…葵、やりすぎるなよ。」
「…大丈夫。様子は、見る。」
「…と、いうわけだ。簪、展開してくれ。」
「……わかった。おいで……打鉄弐式……」

簪の体に光が張り付き、装甲を形成していく。
見た目は、初めて見たときと変わらない。だが、頭脳たるＡＩを搭載したことで、その性能は飛躍的に上昇した。……理論上はな。

「それが…あなたの機体？」
「……そう、です。名前は……打鉄弐式。倉持技研……日本製の、第三世代機。あなたの……ＩＳは……」
「…ブルーフレーム。モルゲンレーテ、第三世代相当機。…早く。」

葵は、ブルーフレームを上昇させる。遅れて簪も、上空へと飛んでいった。
うん、スラスター正常。クリムゾンから送られてくるデータも、すべて想定内の値だ。
もう、事故ったりはしないだろう。

……と、ここで葵の機体について説明しておこう。
正式名称はＭＢＦ－Ｐ０３、アストレイ試作三号機だ。型番から分

かるように、俺のレッドとは色違いの兄弟機。性能、基本武装は共通だ。
特化した能力はないが、その莫大な拡張領域に納められた武装により、様々な距離に対応できる万能機だ。
…ちなみに、三号機だからといって暴走事故を起こしたことは無い。念のため。新劇場版の方が救いがありそうだね。
一番の特徴は、武装だけでなく、装甲すらも換装できる点だろう。
機体の能力と相まって、どんな相手とも有利に戦える。

葵と簪は、空中で向かい合う。互いの眼を見て、来るべき時に備えている。

「では、模擬戦開始！」

開戦を告げる。と、同時、簪と葵は同時に距離を取り、円軌道で銃口を向け合う。
簪はミサイル発射管を、葵はバズーカを――ビームライフルは使用禁止だ――向け、隙をうかがう。
――なるほど。葵は相手を待ってる。普段は、こんな闘い方はしていないし。
簪は――クリムゾンと相談中か？データを見ると、ミサイルの軌道データを入力しているようだ。センサーに、９つの軌道が浮かび上がっている。
これぞ、射殺す百頭（ナインライブズ・ブレイドワークス）……って、アホか。

「行け……！！」

先手を打ったのは簪。ミサイル発射管から、９発のミサイルが、異なる軌道で放たれる。

…が、葵は後退し、頭部のバルカン砲、イーゲルシュテルンで撃墜する。

――油断したな、葵。それは、ただのミサイルじゃない。

「…っ！散弾！？」

撃墜したはずのミサイルから、無数の鉄塊が飛び出し、ブルーフレームの装甲を穿つ。

八式弾。ミサイルの中に入れた散弾を、爆破によって打ちだす特殊弾頭だ。

「まだまだ……！！」

今度は１５発。同時制御は問題ない。ブルーフレームは高速移動し、回避を試みる。急加速、のち急減速。７発が目標を見失い、壁へと激突する。

残りは大回りの軌道ではあるが、誘導を継続…。うん、いい性能だ。静止した葵に襲いかかる魔弾。しかし、ブルーフレームは突如自由落下を始め、ミサイルを回避した。…ＰＩＣを切ったのか？

同時に発射されるバズーカ。ミサイルの行き先に先回りしたそれは、全てのミサイルを巻き込んで爆発する。

…否。一発だけ、被害を免れた。クリムゾンのコントロールではない。簪が動かした一発。

それが葵の回避先に回り込み、あわや命中と思いきや――

キンッ！

軽い金属音。ミサイルの軌道が不自然に逸れ、ブルーフレームの後方で爆発する。

「……嘘！？」
「……」
簪が絶句する。
無理もない。
ナイフ一本で、ミサイルの軌道を逸らす、など。
《簪、次は４８発、同時発射を試すぞ。》
「……うん。あの人……強い……。」
今度は４８発全て。…焦っているのか？誘導するのは２０発に絞り、残りは広域に拡散させるようだ。当然、葵はミサイルの檻から逃れ、狙いの雑な外へと向かう。…が、急激に外の精度が上がり、葵を追い詰める。
成程、コントロールを切り替えたのか。うまい手だ。
「このまま……墜ちて……！！」
「……」
今度は八式弾だけじゃない。スタン、スモーク、チャフ、ナパームなど、多種多様な弾丸が爆発する。簪が、葵の視界を完全に奪った。スモークの中へ突入するミサイル群。これは、葵でもダメじゃないのか？
爆発。爆発。爆発。
煙の中で爆炎が上がる。…アレ、打鉄弐式にあんな弾頭あったっけ？あれって…確か、ジンの強襲装備にあったミサイルでは……？ってことは！

煙の中から飛び出す、青い流星。その両足には、空になった3連装ミサイルポッド。
右手にバズーカは既になく、握られたのは両刃の剣。左手のマシンガンからは、光が放たれ続ける。それを認識した時、簪に避ける術は残されていなかった。

「くっ……！！」
「……」

簪は近接武器である薙刀、夢現（ゆめうつつ）を展開するが…

ガン！

剣が、薙刀を払いのける。胴ががら空きになると、今度は二本のナイフが、薙刀を、装甲を、そして操縦者を襲う。
地に落ちる簪を、葵は追撃する。ナイフを投げつけ、高速移動。重力を乗せた蹴りを加え、簪を地面に叩きつけた。

「…立て。」

葵は、空から静かに告げる。簪は答えない。否、答えられない。
クリムゾンから送られるデータが示している。簪は、操縦者保護機能によって、既に気絶している。

「紅也の作品は、この程度じゃないはず。」

無慈悲にバズーカと、マシンガンを構える葵。その顔は見えないから、どんな表情かは分からない。

「…この程度？なら、そんな欠陥品は――」
「待て。そこまでだ、葵。」
レッドフレームを展開し、いつでも止めに入れるようにする。
「まだ、こいつは未完成だ。…言っただろ、実戦テストだ、って。だから、壊すな。俺の、最初の作品なんだ。」
――頼む。言外にそう匂わせて、葵に告げる。
「…約束、覚えてる？」
ぽつり、とつぶやいた一言。レッドは、それをしっかりと拾ってくれた。
はて…どの約束だろうか？この場合、機体の話だよな？
「専用機のことか？…俺が、一人前になったらの話だ。こいつは、プロトタイプってことで、妥協してくれ。」
「…わかった。」
銃口を下げる。武器が、光に変わっていく。
葵は、わかってくれたようだ。ゆっくりと下りてきて、こちらに向き直る。
「…ごめん。」
その言葉は、誰に向けられた言葉だったか。
葵は、静かにアリーナを去っていった……

第２１話　葵、怒る。（後書き）

…はい、賛否が分かれそうな内容でしたね。

ブルーフレームをようやく紹介。ですが、まだまだ明かさない部分もあります。

次回は…代表戦の予定です。

第２２話　「レッドフレーム、黒いイレギュラーを排除する」（前書き）

はい、二十二話です。

ようやくだ…！ようやく書きたかった話です。

代表戦の開幕です。

第２２話　「レッドフレーム、黒いイレギュラーを排除する」

夜。
簪を保健室に運んだ紅也は、整備室に来ていた。

「…で、調子はどうだ、クリムゾン。」
《同時制御は３０発が限界だ。それも、簪にかなりの負担がかかる。先程の気絶も、その負荷によるものが大きいな。》
《…と、なると、現在のシステムでは不完全か…。どうする、紅也？》
「うーん、戦闘時に８とリンクさせれば完全稼働できそうだけど、そこまで肩入れはできねぇな。今は、最大発射数を２４発に設定しておこう。それでいいか、クリムゾン、８。」
《異論は無いな。》
《まあ、いいだろう。》
「よし。…じゃあ、修理を始めるぞ。」

やれやれ……今夜も長くなりそうだ…。

◆

時は流れ、クラス対抗代表戦の当日。
…あの後、一夏と凰は大ゲンカをして、一言も話していないそうだ。
何でも、一夏が凰に「貧乳」と言ったらしい。

――それはいかんだろ。男として。

さておき。

二人はアリーナの上空で滞空し、睨みあっている。実況？今回はナシだ。

次の試合が葵ＶＳ簪なんでな。葵が「応援はいらない」と言ってたので、今の俺は簪のピットにいる。……お兄ちゃんは寂しいぞぉ！

「あの……紅也、くん。……いいの？山代さん……放っておいても……。」

「ん…。本人が、こっちに行けって。

『自分の作品ぐらい、最後まで責任持て』って、言われたよ。」

ああ、あの後、簪と葵は和解したぞ？もっとも、仲良くなったわけじゃないけどな。葵も、熱くなったことを反省してた。それで、三人で練習を続け、今日まで調整を続けてきた。

「くすっ……。山代さんらしいな……。」

簪も、笑顔が増えた。

距離を取らずに接してくれる友達。そしていつも一緒の相棒。それらが、彼女の心の氷を溶かしたのではないだろうか？

《で…自信はあるのか、簪？》

「正直……敵わないかも。でも、負ける気は……無いから。……サポートよろしくね、クリムゾン。」

《大丈夫だ。簪は、大船に乗ったつもりで行け。》

「……うん、頑張る……！」

「よし、その意気だ。…俺も、応援してるぜ。」

「う……うぁ……うん。」

うん、いい感じに気合が入ってるな。これなら、いい勝負ができるはずだ。
勝てるとは思わないけど。…いや、イヤミじゃなくて、本当に。

「さて、じゃあ、試合を見てようぜ。」
「……え!?そ……そうだね!」

試合開始まで、後１０秒――

◆

〈ｓｉｄｅ：アリーナ内部〉

「一夏、今謝るなら少しくらい痛めつけるレベルを下げてあげるわよ。」
「雀の涙くらいだろ。そんなのいらねえよ。全力で来い。」

簪と紅也が話していた頃、こちらでも舌戦が行われていた。

「一応言っておくけど、ＩＳの絶対防御も完璧じゃないのよ。シールドエネルギーを突破する攻撃力があれば、本体にダメージを貫通させられる。」

鈴音が、一夏を脅す。これは、殺さない程度にいたぶる、という宣言。つまり、「一夏殴ッ血ｋｉｌｌ」宣言であった。

『それでは両者、試合を開始してください。』

開戦を告げる、ブザー音。互いに突撃し、刃をぶつけ合う。
瞬間、白式は吹き飛ばされるも、すぐに体勢を立て直す。

「ふうん。初撃を防ぐなんてやるじゃない。けど――」

再び甲龍が猛追。縦横無尽に駆け、襲いかかる刃に対し、白式は防戦一方であった。
状況は好転し得ない。ならば、と白式は距離を空けようとするが…

「――甘いっ！！」

甲龍の肩アーマーが開いたと思うと、白式は見えない砲弾に殴り飛ばされる。
これぞ、中国が誇る第三世代装備、衝撃砲――正式名称「龍咆」であった。

「よくかわすじゃない。龍咆は、砲身も砲弾も目に見えないのが特徴なのに。」
「へっ…。前に、不可視の剣技を見たことがあるからな！」

かつて一夏が戦った相手、山代　紅也。彼の技である「空破斬」も、不可視の刃を飛ばすというものだった。
しかし今回、刀身（砲身）は見えない。そのため、回避しきれず、白式にはダメージが蓄積されていく。しかもこの衝撃砲、砲身斜角に死角がないらしく、どこへ行っても撃ってくるのだ。唯一の弱点は、砲弾はまっすぐにしか飛ばないことだが……。
一方、一夏に勝機がないかといえば、そんなことはない。

雪片弐型。そしてその能力、零落白夜。この一撃を決めれば、相手のＩＳに致命傷を与えることが可能だ。そのために、相手の懐に入れれば、あるいは……。

「鈴。」
「なによ？」
「本気で行くからな。」

一夏が、雪片を構える。どうやら、攻勢に出るようだ。

「な、なによ……そんなこと、当たり前じゃない……。とっ、とにかくっ、格の違いってのを見せてあげるわよ！」

鈴音もまた、両刃青竜刀を構え直す。すると――

一夏の姿が、掻き消えた。

いや、そう見えた。
瞬時加速（イグニッション・ブースト）。ＩＳの出力を加速に回し、一瞬で最高速度まで加速させる、奇襲技である。
一度見切られたら使えない。まさに一撃必殺。そのカードを切ったタイミングは、間違いなく最良だった。

――が、戦いは、唐突に終わりを告げる。

ビキュウゥゥゥゥン！！！

緑の光が一条、天から降ってきた。
光は、アリーナの遮断シールドを貫通し、ステージの中央を溶解させる。

蒸気か、土煙か…。それらが混ざったものが立ち込め、乱入者の正体を隠す。

「な、なんだ？何が起こって……」

「一夏、試合は中止よ！すぐにピットに戻って！」

混乱する一夏と、緊張する鈴音。

状況は不明――が、彼らのＩＳは、いち早く状況を理解した。

《ステージ中央に熱源。所属不明のＩＳと断定。ロックされています。》

「なっ――――」

「一夏、早く！」

「お前はどうするんだよ！？」

緊急事態。だというのに、二人の行動は遅かった。

当然だ。彼らは実戦など未経験であるし、このような事態の対処方法など、知るすべを持たないのだから。

「あたしが時間を稼ぐから、その間に逃げなさいよ！」

ゆらり。

煙の中の影の、右腕が彼らに向く。

「逃げるって……女を置いてそんなことできるか！」

かちり。

砲身固定。ロックオン。砲身に、光が集まる。

「馬鹿！アンタの方が弱いんだからしょうがないでしょうが！」

『いい加減にしろ！馬鹿はお前ら両方だ！！』

突如、アリーナに響く大音量。
そして不明機から放たれる、緑色の光線。
アリーナの遮断シールドを貫通するほどの威力を持つそれは、まっすぐに甲龍に向かい…

射線上に割り込んだ何者かによって、防がれた。

「…鈴音！油断、禁止！！」
「あ…葵！？アンタ、なんでここに…？」
「無駄口を叩くな！とっとと逃げろ！」
「紅也！？お前まで、どうして…？」

乱入するは、赤と青。紅也のレッドフレームと、葵のブルーフレームであった。

「一夏、凰。お前らじゃ、あのＩＳには絶対に勝てない。だから、早く逃げろ。」

紅也は、冷酷に宣言する。

「なっ…！そ、そんなの、やってみないとわからな――」
「やる前から、勝負はついてる！！」
「――葵？何よ、アンタまで…」
「お前ら、一度しか言わないからよく聞け。アレに、実体兵器は通用しない。」

紅也は語る。その言葉の、真意を。

「あの機体には、ＰＳ装甲が採用されている。ビーム以外の兵器では、傷一つつけられねぇ。」
「ぴーえす……？何だ、それ？」
「話してる暇はない。早く、逃げて。」
二射目。再び放たれたビームを、ブルーフレームはシールドで受け止める。
「何よ！実体兵器が効かないなんて、反則じゃない！何なのよ、あの機体は！！」
叫ぶ凰。そして、そのとき煙が晴れ、敵の姿が露わになる。
黒を基調とし、胴体と肩に赤いパーツを持つ、全身装甲。頭部の黄色いＶアンテナは、山代兄妹のＩＳとどこか似通っている。特徴的なのはその右腕で、黒と赤の、巨大な楯を装備している。どうやら、ここからビームを撃っているようだ。左腕のクローも、どこか凶悪な印象を持っている。
そして紅也は、唐突に、敵の正体を告げた。
「アイツの正式名称は、ＧＡＴ－Ｘ２０７…。開発コード、『ブリッツ』だ。」

第２２話　「レッドフレーム、黒いイレギュラーを排除する」（後書き）

…アレ、ゴーレムは？と思った方。ごめんなさい。
感想がけっこうたまっていて、驚きました。

また、ユニークアクセスも１００００を超えてました。いつも、ありがとうございます。
次回、ブリッツＶＳアストレイです。

そうそう、外伝の方を更新しました。本編の過去話です。
よろしかったら、そちらもどうぞ。

第２３話　消えるＩＳ（前書き）

はい、第２３話を投稿します。

少しあっけない気もしますが、一巻はここで終了です。

では、どうぞ！

第２３話　消えるＩＳ

――襲撃時、ピット内。
唐突に降り注いだ光。アレは間違いなく、ビームだった。
…やはり来たか、アンノウン！狙いは、やはり織斑一夏か？

レッドフレームを展開。今回は、ガーベラストレートを展開せず、代わりに取り出したのは、標準武装のビームライフルとアンチ・ビーム・シールドだ。

（…紅也！）
（…葵か！あの機体……）
（うん…。間違いなく、Ｘナンバー！！）

ビーム搭載機は、現在、この世に８機しか存在しない。
うち３機はモルゲンレーテが、５機はＮ．Ｇ．Ｉが所有していたが、それは過去の話。
Ｘナンバーと呼ばれる、ＧＡＴ計画によって作られた５機のうち４機は、起動テスト時に何者かに強奪されたのだ。

（よし……思ったより早く、回収できそうだ。
アレは、どの機体だ？）
（ビームの出力、バスターやイージスより低い…。なら…）
（ブリッツか、デュエルか…。いずれにしても、脅威にはちげぇねぇな。）

「簪！ちょっと行ってくる。ここを動くなよ！」
「……え！？何を……」

腰にスライドした、通常のバックパックから、白い棒を引き抜き、構える。
俺が刃をイメージすると、ピンク色の光が飛び出し、刃となった。
――これが、ＡＳＴＲＡＹの第三世代兵器、ビームサーベル。

「さあて、行くぜ！！」

ビームサーベルを突き立てると、ピットの扉はバターのように溶け始める…！！
無人機は、凰に銃口を向けている。が、既に葵が向かっているようだ。
俺も、急がねぇと……！

◆

そして現在。俺は敵の前にいる。
敵はブリッツだった。戦闘能力自体は低いこのＩＳ。２機がかりならどうにでもなるが、問題は――

「だから、俺も戦う！雪片弐型なら、ダメージを与えられるハズだ！」
「あたしだって、時間稼ぎくらい……」

この二人だ。こんな状況下で、足手纏い二人を守りながらは戦えない。
ブリッツには、戦闘能力こそ（比較的）低いが、面倒な能力がある

んだよ……！！

「早く！奴が見えるうちに、安全なところに逃げて！」

葵が、苛立たしげに叫ぶ。俺も同感だ。早くしないと、一夏が奪われる！

状況を理解しようとしない二人に、強硬手段に出ようとしたその時…。

「織斑、凰。早く避難しろ。山代の言っていることは全て事実だ。お前らは、足手纏いになる。」

再び響く、凛とした声。……織斑先生か！ありがたい！！

「…と、いう訳だ。ここは、俺達が引き受ける。
８！パワーを上げるんだ！」

《了解！レッドフレーム、バトルモード！！》

ビームサーベルが、輝きを増す。…これなら、ＰＳ装甲を斬れるはずだ。

「…わかった。それじゃあ…って、あれ？ブリッツはどこに行ったんだ？」

「ホント…。レーダーにも映ってないわね。」

…何！？しまった！！

「葵！コンプリート・センサーに換装！索敵しろ！！」

「了解！」

ブルーフレームの頭部パーツが変化する。見た目には、V字アンテナが無くなっただけ。しかしこの頭部パーツは、通信能力とセンサーが大幅に強化されている。

「…いた！白式より六時方向！」

「…え！？うわあぁぁぁ！！」

白式が、突然妙な機動をする。まるで、見えないナニカに引っ張られたような…

「迂闊だぞ、一夏！！」

高速移動。一夏の行き先に先回りして、ビームサーベルをふるう。確かな手ごたえ。一夏の動きが止まった。…よっしゃ、成功だ！！

「…敵は、姿を消せる。私にしか、見えない。だから…」

「…ええ。悔しいけど、撤退するわ。一夏！」

「あ、ああ。山代、紅也。迷惑かけて悪かった！！」

そう言い残し、一夏と凰は、葵が空けた穴へと逃げる。…これで、心配事はなくなった。

「さて…『ミラージュコロイド』、いつまでも通じると思うなよ――！」

「すぐに…堕としてやる！」

◆

ここから始まるのは、試合じゃない。殺し合いだ。
…少なくとも、相手はそのつもりだろう。

ブリッツの真骨頂は、その名の通りの電撃作戦である。
コロイド粒子を装甲表面に吸着させ、可視光線やレーダーを屈折することで、肉眼はもちろん、あらゆる探査装置から姿を消す完全なステルス装備――ミラージュコロイド。
これを用いて奇襲、破壊工作を行うという、いかにもテロリストが好みそうなＩＳだ。
しかし、ミラージュコロイドには弱点がある。一つは、ＰＳ装甲を切らないと、使えないという点。もう一つは、コロイド粒子は時間と共にはがれ落ちる、という点だ。

ＰＳ装甲。これも厄介だ。
特殊な金属に、一定の電圧の電流を流すことで、装甲を相転移させ、強度を増す。それにより、レールガンすらも無効化する、最強の対物理装甲だ。
つまり、一秒間に1のシールドエネルギーを消費することで、ビームよりも弱い攻撃を無効化するのだ。確かにエネルギーは食うが、それを補って余りあるメリットである。
ミラージュコロイド中はコレが解除されるから、相手も迂闊な攻撃はできない。逃げに徹するようなことがあれば、こちらからは手出しができない。
…そこで、弱点その2を利用する。

コンプリート・センサーの高い電算能力を使い、「モノが消えた」場所を割り出すのだ。
そうすれば、見えないモノの通り道が分かる。…ならば、取るべき

作戦は――――

「葵！ミサイル発射だ！」

６発のミサイルが、地上に向けて放たれる。辺りに砂埃が舞い、作戦の準備が整った。

「観測開始…。」

シールドを構えながら、油断なくビームライフルを構える葵。俺は、そんな葵と背中合わせになり、シールドとビームサーベルを構える。

――ライフル、苦手なんだよ。

《ブルーフレームと、データリンク…成功。こちらは私が処理しよう》

「お願い、８。」

――が、ここで敵は予想外の、しかしありがたい行動に出る。

ビキュウゥゥゥゥン！！！

虚空から放たれる緑の光、ビーム。

しびれを切らしたブリッツは、先制攻撃を選んだようだ。

「「散開！！」」

二人同時に叫び、宙域を離脱。余裕を持ってビームを回避する。

葵は、即座にビームを発射。その光は、直撃はせずとも、ミラージュコロイドの一部を剥ぎ取った。左肩の、赤い部分が、空に浮かんでいる。――今だ！

訓練用のペイント弾を連射。アリーナがカラフルになっていくが、気にしない。
だって――ホラ。敵の姿は、空中に浮かびあがっている。
ミラージュコロイドの弱点その3。コロイド粒子は、黒以外には吸着しづらい。

浮かび上がったシルエット。敵も観念したのか、ミラージュコロイドを解いてPS装甲を展開する。左腕のピアサーロック、グレイプニールは既に失われ、右腕の攻盾システム、トリケロスは――ん、ランサーダートが無い？発射された形跡もないし…。まさか、ここに来る前に誰かと交戦したのか？
だが、そんなことはどうでもいい。敵の武装は、ビームサーベル、およびビームライフルのみだ。――これならば、鹵獲できる。

「やるぞ、葵。」
「…うん。」

二機で並んで突撃。ビームの砲塔がこちらを向く。
葵がシールドを構える。俺はその影へと隠れ、減速せずに突き進む。
発射。着弾。ダメージなし。
レッドが飛び出す。砲塔が再びこちらを向く。
が……それは発射されない。葵が、ビームサーベルで、右腕の関節部を切り裂いたのだ。
絶対防御によって、操縦者の右腕は残ったものの、トリケロスが落下していく。
それをレッドフレームでキャッチし、8で解析。そのデータを、ブルーフレームへと送る。

「くっ……舐めやがってえぇぇ！！」

聞き覚えのない声。おそらく、敵の操縦者だろう。
…そんな、三下っぽい台詞を吐くなよ。やられ役。

「さて、投降する気は…ねぇよな。じゃあ…！」

トリケロスを葵に投げつけ、ビームサーベルを二本構える。
我武者羅に繰り出された蹴りを回避し、足を斬りつける。次いで左腕、胴体に斬撃を刻む。
全身装甲の利点は、装甲を使うことで、シールド・バリアーの展開を抑えることだ。逆に、装甲の下は生身のため、装甲さえ斬れば絶対防御が発動する。

「ぐあああぁぁ！！」

シールドエネルギー、ゼロ。ブリッツは消え、操縦者は落ちていく。

「フン…。元々こっちの技術だ。弱点なんて、知り尽くしてるんだよ。」

突入してきた教師に捕縛された操縦者に、俺はそう言い捨てた。

◆

――深夜。ＩＳ学園の一室にて。

「失礼します。」

コンコン、とノックの音がする。その後入室したのは、サラサラしたブロンドヘアーの、背の高い美人であった。

「ふむ…貴様が、連絡のあったN・G・Iの操縦者か。」

応接室らしきその部屋の、いすに座って彼女を迎えたのは、織斑千冬である。彼女に座るように勧め、互いに向かい合ったところで、話し合いが始まる。

「初めまして。私は、エイミー・バートレットです。
ふふっ、こんなところであの『ブリュンヒルデ』に会えるなんて、光栄だわ。」

「…その様子だと、自己紹介の必要はないようだな。」

あたりさわりのない会話。しかし、そんな儀礼はすぐに終わり、本題が始まる。

「早速ですが、今回、IS学園襲撃に使われたIS――ブリッツと、その操縦者を、引き渡してください。」

「…理由を聞いても?」

「あれは、元々我々の開発した機体ですわ。…恥ずかしながら、強奪されてしまいましたけど。」

「フン…。その程度の理由で、受け入れられるとでも…」

「いいえ、受け入れざるを得ないはずですわ。そのための根回しも、既に終わっています。
…そろそろ眠いので、このお話、終わりにしませんか?」

くぁ…と、本当にめんどくさそうにあくびをするエイミー。そんな

彼女を見て、千冬からは思わずため息が漏れる。

「…そうだな。話は終わりだ。……私だ。奴を連れてこい。」

電話をかけて数分。犯人が運ばれてくるまで、二人は言葉を交わさなかった。

「この件に関する、我々の責任はここまでだ。後は、何があってもお前の責任だ。」

引き渡し後、千冬が告げる。その口調は、あくまで事務的だった。

「冷たいですわね。
さて、ブリッツの状態は…あら？」

モニターに表示された情報を見て、エイミーはこてん、と首をかしげる。

「…ねえ、コイツを鹵獲したのは、コウくんだったかしら？」

「コウ…？ああ、山代　紅也だ。」

「やっぱり。…ふふっ。相変わらず、手癖の悪い子ね。」

まるで、いたずらっ子を叱る母親のような雰囲気で、彼女は微笑む。

月明かりに照らされたその姿は、どこか神秘的ですらあり――

「織斑さん。コウくんには、気をつけなさい。でないと…」

大事なものを、盗まれちゃいますよ。

その一言は、さながら神託のように響いた。

第２３話　消えるＩＳ（後書き）

…と、いうわけで、Ｎ．Ｇ．Ｉの人が登場しました。
紅也とも面識があるようですが……？さて、誰でしょう？

外伝ですか？今回は書きません。
だって…原作では、レッド改でネブラ４機を瞬殺しましたから。無理ゲーです。

第２４話　みんなもＩＳ　ゲットだぜ！（前書き）

はい、二十四話を投稿します。
今回の話は、前話の後日談。まだ二巻ではありません。
では、どうぞ！

第２４話　みんなもＩＳ　ゲットだぜ！

――草木も眠る丑三つ時。
撃墜したブリッツから戦闘ログを奪った紅也は、ＩＳ学園近海に潜っていた。
その身には、ブルーフレーム用の水中用装備、スケイル・システムが装備されている。

（８？反応はこの辺か？）
《もう少し下だ。そこから、微弱なコア反応がある。》
（…まったく。連中、面倒なことをしやがって。大方、一夏を奪取した後に回収する予定だったんだろうが…。甘かったな。）
《…これだ。コアナンバーは…解析不能。未登録だ。》
（へぇ。本当に無人機とはな。…どこから来たのやら。）

海底に沈んで――否、磔にされていたのは、異形のＩＳだった。
Ｘナンバーとも、ＡＳＴＲＡＹとも違う、全身装甲。深い灰色をしたそのＩＳは腕が異常に長く、脚よりも下まで伸びている。しかも…ビーム砲口が二つずつ、両腕についている。これは、明らかなオーバーテクノロジーだ。しかし、今やその両腕と頭部には、三基のランサーダートが刺さっていた。

（機能は…停止してるな。よし、じゃあコアを取り出すぞ。）

黒い海の中、カチャカチャという音が、静かに響いていく……。

◆

「以上が、今回のブリッツとの交戦の顛末です。」
「そう…分かったわ。そうそう、送ってくれたパーツだけど、彼、喜んでたわよ。
で、あのコアのことなんだけど…起動は難しいわ。反応してくれないのよ。」
「…無人なのに。変なの。」
「そうですか…。引き続き、研究をお願いします。うまくすれば、俺もＩＳに乗れるようになるかもしれない。」
「そうね…。織斑くんのデータももらってるけど、あまり進展ないし。
…やっぱり、解剖を」
「じゃ、さよならエリカさん。」

ぶつっ。通信を切る。
モルゲンレーテへの報告が終わり、ようやく、日常が戻ってきた。
同時に、俺たちの仕事も一つ減る。

仕事の一つは、織斑一夏のデータ集め。そしてもう一つは、強奪機体の回収だ。
かつて、Ｎ．Ｇ．Ｉから強奪された４機のＸナンバー。その全てにＰＳ装甲が搭載されているため、ビーム兵器持ちのＡＳＴＲＡＹか、Ｎ．Ｇ．Ｉの彼女でないと対抗できない。
そこで俺達は、織斑一夏を狙って集まる（かもしれない）Ｘナンバーを鹵獲するため、ついでに、そいつらのデータ（さすがに本体は無理だ）を横取りするため、ここに入学したのだ。
…改めて考えると、けっこう打算的な理由だな。

さて、そのためにブルーフレームに搭載された機能。それが、武装へのハッキングだ。
ＩＳの本体から離れたパーツなら、何であれ、使用許可を書き換え、自分の武器にしてしまうことができるのだ。
…何でレッドにはないかって？拡張領域を埋めるほどの、かさばる武装があるからだよ。
昨日は、それを使ってトリケロスを強奪し、ブリッツ本体は学園に引き渡した。そのうち、Ｎ．Ｇ．Ｉの関係者が引き取りに来るだろうが…奴らの悔しがる顔が目に浮かぶぜ！！

「ふふふふ……あーっはっはっは！！」
「…うるさい。」

なんやかんやで、訪れた平穏を満喫する山代兄妹であった。

◆

あの事件にかかわった俺、葵、一夏、凰。それから箒とセシリア（一夏のピットにいたそうだ）、簪（結局、逃げずに見ていたそうだ）には、箝口令（かんこうれい）がしかれた。
…ＩＳ学園ではなく、国からの圧力だ。モルゲンレーテか、Ｎ．Ｇ．Ｉか…。まあ、そんなことを考えても意味はねぇけどな。

ブリッツを奪取し、学園を襲撃した組織も、正体不明だ。だけど、師匠が言うには、古くから存在する、一枚岩の組織に違いないとのこと。今のところはこちらからアクションを起こす必要は無い、と

説得された。

さらに不気味なのが、無人のＩＳだ。おそらく、一夏の襲撃に来たのだろうが、ブリッツと交戦して行動不能にされた。――全く情報のない、第三軍が動いている。しかし、この技術を入手できたなら、試作１号は完成に近づくだろう。早く解析してほしい。

……さて、状況説明はこんなものでいいだろう。今、俺の部屋には――

「で、紅（ホン）？アンタ、何者なの？」

「紅也。結局、あのＩＳは何だったんだ？」

「ビーム兵器なんて、なんでそんなものを持っているんですの？」

「あの光の剣は何だ？見たこともないぞ。」

「……ＰＳ装甲って、何？」

件（くだん）の関係者が全員集まり、俺を質問攻めにしていた。

…葵？こいつらが来る直前に、危険を察知して逃げたよ。

「まあ待てよ。俺は聖徳太子じゃないんだ。ひとりずつ頼む。」

俺の言葉で、全員が互いの顔を見合わせた後、セシリアが手を上げた。

「では、わたくしから…。ビームライフルは、現状ではアメリカのＮ．Ｇ．Ｉの独占技術ですが、それを何故紅也さんが持っているんですの？」

「禁則事項です。」

セシリアからジト目で睨まれる。…が、次。箒くん。

「紅也と山代が持っていたあの剣は、何なのだ？」

「禁則事項です。」

ジト目が増えた。じゃあ次。

「……ＰＳ装甲って、何……？あんな強固な素材、見たことない……。」

「禁則事項…だけど、一つだけ。アレには、ビーム以外は通用しない。見かけたら、絶対に戦うなよ。」

「……わかった。」

簪の質問は、セーフだ。この程度なら、技術漏えいにはならない。

「じゃ、次は俺が…。結局、あのＩＳは何者で、どんな目的だったんだ？」

「……まあ、少しは話せるか。

あれは、アメリカの大手企業Ｎ．Ｇ．Ｉが極秘開発した試作機で、名前はブリッツ。詳しくは言えないが、特殊なステルス機能を持ってる。」

「…じゃあ、そのＮ．Ｇ．Ｉってのが、襲撃を！？」

一夏が、今にも飛び出しそうな勢いで立ち上がる。

「それなら話が早いんだけどな…。その機体、強奪されたんだよ。

……結構、有名な話だと思うんだけどな。」

ジト目組が増える。もちろん、加わったのは俺だ。

「一夏さん…。ニュースぐらい、見るべきだと思いますわ。」
「…確か、お前がＩＳを動かしたと発表されたのと、同じ時期だったが。」
「あー…。その頃、テレビに映ってるのが恥ずかしくて、ニュースとか見てなかったよ。」

セシリアと箒につっこまれ、うなだれる一夏。…哀れだ。

「……強奪されたのは、４機……の、はず。」
「ええ、確かにそのような内容でしたが…。…と、いうことは…」
「まさか……！」

「…そうだ。強奪した組織は、最大であと3機を持ってる。」

「……あんな機体が、３機も……。」
「…って、紅也？『最大で』ってのは、どういう意味だ？」
「Ｎ．Ｇ．Ｉの試作機は5機あったんだ。奪われなかった残りの一機が、機体の回収のために動きまわってる。…アイツはばかみたいに強いからな。1機くらい回収してても不思議じゃないぜ。
…で、敵の狙いは…お前だ、一夏。」

びっ。
人差し指を一夏に向ける。対する一夏は、口をあけたまま、マヌケ顔で固まってる。

「……え、俺？」

ようやく発した一言には、緊張感のかけらも感じられない。…ハア。
この鈍感男め。

「お前は、自分の重要性を何一つ理解してねぇな。世界でただ一人、ＩＳを使える男としての価値を。」
「いや、紅也さんもそうでしょう？」
「……。俺は所属がはっきりしてるから、いいんだ。」
…あぶねぇ。墓穴を掘るところだった。セシリア、ツッコミの腕があがってやがる。

「……あなたは……特別。政府が……代表候補生への専用機開発を打ち切ってまで……支援するほどに……。」
簪が長台詞とは、珍しい。…ああ、そういえば白式は、倉持技研の管轄。
打鉄弐式が未完成だったのは、一夏が間接的な原因だったのか。

「で…そろそろいいかしら。」

今まで黙って目を閉じ、腕を組んで話を聞いていた凰が、唐突に口を開く。

「紅…。そんな情報を知ってて、存在しないはずのビーム兵器を持っていて、そして何より、あたしを足手纏い扱いしたアンタは、何者なのよ！」
核心に触れる話。そして、この場にいる誰もが思ったこと。
ここまでの機密を知る、山代　紅也とは、何者なのか……？

「何者って…。じゃあ、語らせてもらうぜ。」

そして、紅也は語りだす。己の人生を。

◆

俺の名前は山代紅也。モルゲンレーテのエージェントだ。
事の発端は数か月前。俺は上司に呼び出され、作戦司令室に来た。

「コウヤ、聞いてくれ。N・G・IのXナンバーが、何者かに強奪された。」

回収を命じられた俺に迫る、組織の魔の手。
味方に裏切られ、同僚を失い、愛する妻と娘も人質にとられる。

それでも、俺は戦う。忠誠を誓った国のために。愛する者を守るために。

――事件は、リアルタイムで起こっている。

◆

「「「「「ストップ！！」」」」」

全員がハモる。…何だ、まだプロローグなのに。

「いや、どこのバウアーさんだよ！明らかにパクってるじゃねぇか！」

「シリアスを期待したわたくしが、ばかみたいではありませんか！」

「…いや、セシリアにだけは言われたくないセリフだな。」

「なっ…。それは、どういう意味で…」

やはり、セシリアにはボケが似合う。そういう意味だ。

「…じゃ、なくて！真面目に話しなさいよ！！」

ツインテールを逆立たせる凰。…って、指鉄砲を向けるな！何を撃つ気だ？俺には、強化すら使えねぇぞ！！

「わかった、わかった。真面目に話すよ。俺の…正体は――」

全員が息をのむ気配が伝わってくる。

「――禁則事項です？」

…だって、箝口令にひっかかるもの。

「「「「「ふ…ふざけるなぁ～！！」」」」」

ＩＳ学園は、今日も平和でした。

第２４話　みんなもＩＳ　ゲットだぜ！（後書き）

…久々にギャグっぽいものが書けました。

ネタが入るとスラスラ書ける。そして簪と葵の書き分けができないから、葵は休み。ごめんなさい。

次回から二巻です。

第２５話　気になる噂？嵐の予感（前書き）

はい、今日から原作２巻に入ります。
シャルとラウラの立ち位置は、まだ未定…。３巻のプロットはあるのに。

それと、お気に入り登録数が９９件になってました！ありがとうございます。

では、始まります。

第２５話　気になる噂？嵐の予感

「――ってことがあったんスよ。」
「へえ、大変なんですね、ＩＳ学園も。そんなに、年増がいっぱいで。」
「…いや、そこっスか？注目するとこ。」
「……変態。」
「な…俺は変態じゃない！ただ、小さいものが好きなだけです！！」
「いや…。だから、そういう所が…」

久しぶりの休日。俺は、よく行く近所のファミレスに来ていた。
今話してるのは、ここのバイトの小鳥遊さん。去年の冬からバイトを始めたそうで、現在は高校２年生だ。何度かここに来ているうちに、顔見知りとなった。

「小鳥遊、仕事しろー。」
「あっ、すみません。…とにかく、俺は変態じゃ…」
「…注文。急いで。」
「～～～！以上でよろしいですね！それでは。」

オーダーを取り終えた小鳥遊さんが、厨房へと向かっていく。
…葵。お腹すいてるのは分かったから、あんまり急かすなよ。

「コーヒーお持ちしました～。久しぶりね、紅也くん。」
「あ、八千代さん。いつもお疲れ様っス。…相変わらず、いいものを持ってますね。」
「ふふ、わかる？」

そう言ってウエイトレス――轟　八千代さんは、腰に下げた刀を抜

く。

「うわ～。きれいな刃紋ですね。かなりの業物だと思うんですけど…。どこでコレを？」

「知り合いの刀鍛冶さんから貰ったの。切れ味抜群よ。」

「へぇ…。じゃあ、今度勝負しませんか？早斬り対決とか…。」

「…物騒。」

そうかな？日本刀持ってる人が二人集まれば、こういう流れになりそうだが。

少なくとも、師匠と老師（師匠の元師匠だそうだ）は、よく真剣で試合してる。

「八千代ー、腹減ったー。」

「…あ、杏子さんが呼んでるから、そろそろ行くわね。」

「あ、ハイ。今度は、刀買いに行きますね～。」

「…お仕事、頑張って。」

かちゃかちゃ、と刀を鳴らしながら去っていく八千代さん。…絶対、邪魔だよなぁ、あれ。

「お待たせしました、ハンバーグランチと、クレイジースパイシーカリーです。」

「あ、ありがとうございまーす。…じゃ、食おうぜ、葵。」

「…いただきます。」

今日も、何でもない毎日が過ぎていく。

あれから一週間。季節は移り、そろそろ六月になろうとしていた…。

◆

六月。
この月には、忘れてはならない重大イベントがある。
――学年別個人トーナメント。
１クラス３０人、４クラス合わせて１２０人ほどでＩＳのトーナメントを行い、一週間かけて学年最強を決める。優勝者には名誉と、ＩＳ・ザ・ＩＳの称号が与えられ…嘘ですごめんなさい。
さておき。
一年生ではまだ訓練が始まっていないので、実質は先天的才能評価であるのだが、今年は専用機持ちが６人もいる。…実質、その６人の戦いになるだろう。
セシリア、凰、一夏には一度勝ってる。問題はないだろう。
簪の装備は知り尽くしてるから、まあ、負けないはず。
問題は……葵。
接近すれば切り刻まれ、逆に距離を取れば問答無用で撃ち落とされる。
何か、不意をつけるような装備を作らないといけないかな……。例えば、複合武器とか。
（…８、例の翼のフライトユニット、完成状況は？）
《８０％だ。もうすぐ完成だが…どうした？》
（アレに、可変機能をつけて、武器に変形するようなギミックをつ

けたい。できるか？）

《…今更何を言うか。》

（例えば、連射の効く射撃武器……ガトリングを内蔵するとか…。）

《いや、どうせお前は接近戦しかできん。剣の方がいいんじゃないか？》

（うーん……。…両方、は？）

《それはいくらなんでも…。いや、案外いけるかもしれん。図面を制作するから、しばらく待ってくれ。》

おや、冗談のつもりだったけど…なんとかなるのか？

……一旦中断するか。そろそろ、夕食の時間だ。

「…と、いうわけで、今日はここまでだ。」

「はあっ…。くっ、無念……。」

目の前には、息を切らして道場に倒れる、箒。

ナニしてたか、って？

木刀を使って、打ち合いをしてたんだよ。途中から考え事してたけど。

こいつとは、こうやってときどき稽古をしている。本気で、空破斬の習得を考えているようだ。俺としては、「竜破斬」の方が好きだけど、使えないしな。

「シャワーを浴びたら、晩飯食いにいこうぜ。葵も誘ってくるわ。」

「はあ…よ、余裕だ、な……。」

「なあに、鍛え方が違うんだよ。」

――俺は、何度も死線を越えてきた。

トラから逃げ、クマと戦い、パンダに襲われ、迫るＩＳから身を隠し……

……って、アレ？ほとんど師匠（もしくは老師）のせいだな。なんだか泣けてきた…。

「…おい、紅也。どうした？涙が……」

「な…泣いてなんか、ないんだからね！これは汗だから！！心の汗だから～！！！」

走り去る俺。その目には、光るものがあったとかなかったとか。

「……いや、だからそれは、涙では？」

一人残された箒の声は、道場にむなしく響くのだった。

◆

食堂。

夕食時、ここが騒がしいことはいつものことだが……。今日は、いつも以上に賑わっていた。

「ねえ、聞いた？」

「聞いた聞いた！」

「え、何の話？」

「だから、あの織斑君と、山代君の話よ。」

「いい話？悪い話？」

「最上級にいい話。」

「聞く！」

「……。」
「まあまあ落ち着きなさい。いい？絶対これは女子にしか教えちゃダメよ？女の子だけの話なんだから。実はね、今月の学年別トーナメントで優勝した人は…、二人のうちどっちかと付き合えるんだって！！」
「えええっ！？そ、それ、マジで！？」
「……。」
「マジで！」
「うそー！きゃー、どうしよう！」

奥の方で密集する十数名の女子。そこから、きゃいきゃいうるさい声が聞こえてきた。
気になったので葵に様子を見に行ってもらったが、戻ってきた葵は…なんていうか…ちょっと不機嫌だった。

「…で。何の騒ぎなんだ、アレ。」
「…まずは、ご飯。」

すたすたと、食券を買いに向かう葵。俺と箒は顔を見合わせたあと、黙ってついていくことにした。

「な……なんだと！本当なのか、それは！！」
「う…うん。みんな言ってる。」
「な、なぜこのようなことに……。」

カラン、と箸を落とし、頭を抱える箒。…俺も同じ気分だ。

何だよ。「俺と付き合う」って。根も葉も…種すら無い噂だ。
そもそも…。俺が優勝したら、どうなるんだ!?
嫌だ!!俺は一夏と違って、そんな趣味はない!!
…じゃあ、俺がワザと負けると……。
葵の優勝!?そして一夏と交際!?　そんなの…そんなの……

「おにーちゃんは許しませんよ!!」
「うわっ!?い、いきなり叫ぶな!!」
「落ち着け。」

スパン!と葵にはたかれる。どうやら、口に出していたようだ。
いやあ、失敗失敗。

さて。

「まったく…。こんな根も葉もない噂、どっから出てきたんだろうな?」
「……!さ、さあ。だ、誰が言いふらしたのかさっぱり…。」

…ん、『言いふらした』?なにか、引っかかりを感じるな。

「「……」」

葵と二人、無言で箒を睨み続ける。
箒は夕食をとりつつも、ちらちらとこちらを見て――箸を置き、
観念したかのように、ため息をついた。

「じ、実は…。あの日の夜……。」

◆

襲撃事件の当日、私と一夏の同居生活は、唐突に終わりを告げた。

「部屋の調整が付いたので、今日から同居しなくてすみますよ。
えっと、それじゃあ私もお手伝いしますから、すぐにやっちゃいましょう。」

山田先生から告げられた、引っ越し宣言。
当然…あ、いや、一夏が寂しがると思ったからだ。だから私は反対した。
…だが、あの馬鹿は違った。

「そんな気を遣うなって。俺のことなら心配するなよ。箒がいなくてもちゃんと起きれるし歯も磨くぞ。」

〜〜！私がこうまで気にかけているのに、あの馬鹿は――――！！
私は怒りにまかせて、そのまま部屋を移った。

新しい部屋に着いた後で、私は後悔した。
怒りにまかせ、まともに言葉も告げずに去った。…別れの印象は、おそらく最悪だ。
このままではいけない。そう思い、一夏の部屋へと向かう。
ノックしても気付かなかったようなので、少し強めにノックすると、一夏が飛び出してきた。……うんうん、そんなに私に会いたかったのか。

「お、箒。なんだ？忘れ物か？」

…目の前に一夏がいる。

今まで当たり前だったことが、明日からは特別なことに変わってしまうのだと思うと、何とも言えない気持ちになる。

「どうかしたのか？まあ、とりあえず部屋入れよ。」

「いや、ここでいい。」

戻ったら、また未練が出てしまう。そう、思ったのだ。

…しかし、何と言おう？「今までありがとう」か？――これでは、別れの挨拶ではないか！

「また、教室で。」か？――なんだか、私のキャラではない気がする。

それとも――

「……箒、用がないなら俺は寝るぞ。」

「よ、用ならある！」

待て、今帰られたら、それこそ未練が残る！！

何か……何か、話題は……そうだ！

「ら、来月の、学年別個人トーナメントだが……。」

さて、ここからどう続けようか。

――と、唐突に、一夏と凰の会話がよみがえる。かつて交わしたという、将来の約束。

…あんな女に、遅れを取ってたまるか！！

「わ、私が優勝したら――つ、付き合ってもらう！」

◆

火種はお前か、箒。

「で、それから一夏の態度は変わったか？」

「いや、いつも通り…だと、思う。」

……そうか。じゃあ、多分。

「それ、誤解されてる。」

「……は？」

葵も気付いたようだ。箒一人が、ピンとこない顔をしている。

「考えてみろ。幼なじみのかわいい子に告白されて、ドギマギしない男がいるか？

もしいたら、そいつはその子を何とも思ってないんだろうな。」

「か、かわいいだと！？わた、私がか？」

「？　ああ。

…話を続けるぞ。いくら一夏でも、そこまで鈍くは無いはずだ。

なら、なぜ反応が無いか？それは――」

「一夏にとって、それは当たり前の事だから。」

「――って、葵。話をかぶせるな。…とにかく、一緒にどこか行くのに『付き合う』とか、そう思われてるぜ。」

「な、なんだと！ううむ、一夏め…。」

いや、紛らわしい言い方をした、お前も悪い。
しかし一夏…　愛されてるな～。

「…箒。一夏、好きなの？」
「すっ……？そ、そんなことが、あああるわけないだろう！
一夏のことなんぞ、何とも思ってないわ！！」

分かりやすく動揺し、叫ぶ箒。しかし、タイミングが最悪だった。

「あー、そうか。
どうりで、話しかけても反応しなかったし、俺を避けてたわけだ。
…悪いな、箒。お前の気持ちに気付けなくて。」

ぎぎぎ、という擬音が聞こえた気がした。
箒が振りかえったその先には、トレーを持った一夏と凰がいた。
…それにしてもこのセリフ、状況が違えば嬉しく思うんだろうなー、
とか、考えたり考えなかったり。

「じゃあ、俺は邪魔みたいだから…。行こうぜ、鈴。」
「ええ。じゃあね～。三人でごゆっくり～。」

反転し、去りゆく二人。

「ご……誤解だあぁぁぁ！！」

後に残されたのは、涙目で叫ぶ箒と、静かに食事を続ける俺達二人
だけだった。

第２５話　気になる噂？嵐の予感（後書き）

箒は、自爆すると面白いキャラだと思います。

いきなり誤解、そしてすれ違い…。箒の明日はどうなる！？

第２６話　ふたりは転校生（前書き）

はい、第二十六話です。

タイトル通り、あの二人が登場しますが…。

若干のギャグ回です。ごめんなさい。

第２６話　ふたりは転校生

箒と一夏の誤解は解けぬまま夜が明け、翌日。
そろそろ、ＩＳスーツの注文日が近付いているためか、教室は騒がしかった。

「やっぱりハヅキ社製のがいいなぁ。」
「え？そう？ハヅキのってデザインだけって感じしない？」

ハヅキ…葉月ねぇ。
危険な香りしかしないね。ドリルとか、チェーンソーとか、サングラスとか。

「そのデザインがいいの！」
「私は性能的に見てミューレイのがいいかなぁ。特にスムーズモデル。」
「あー、あれねー。モノはいいけど、高いじゃん。」
「そういえば織斑君のＩＳスーツってどこのやつなの？見たことない型だけど。」
「あー。特注品だって。男のスーツがないから、どっかのラボが作ったらしいよ。えーと、元はイングリッド社のストレートアームモデルって聞いてる。」
「そうなんだー。山代君のは？」
「ん？ア○ブレラ社の、ウェ○カーモデルだ。」
「「嘘だっ！！！」」」
「うおっ、怖っ！」
「そもそも、全身装甲型にも、ＩＳスーツって必要なの？」
「そりゃもちろん。なんてったって…」

「ＩＳスーツは肌表面の微弱な電位差を検知することによって、操縦者の動きをダイレクトに各部位へと伝達、ＩＳはそこで必要な動きを行います。もちろん、全身装甲だろうと同じ事です。また、このスーツは耐久性にも優れ、一般的な小口径拳銃の銃弾程度なら完全に受け止めることができます。あ、衝撃は消えませんのであしからず。」

長いセリフを、すらすらと噛まずに言いきってみせたのは、副担任の山田麻耶先生だ。

見た目はアレでも、伊達に教師はやってないというわけか。

ちなみに先日、ファミレスでこの人の話をしたら、未だに研修バッジをつけた子がやたらと興味を持っていた。山田家がどうのこうのと言ってたけど…。

「山ちゃん詳しい！」

「一応先生ですから。……って、や、山ちゃん？」

『一応』って、オイ。南海か。あるいはおっはーか。…レイモンドって、今どこで何してるんだろう？少し気になる。

「山ぴー見直した！」

「今日が皆さんのスーツ申し込み開始日ですからね。ちゃんと予習してきてあるんです。えへん。……って、や、山ぴー？」

藍沢耕作か。それとも矢吹丈か。あだ名多いな。

「あのー、教師をあだ名で呼ぶのはちょっと……」

「えー、いいじゃんいいじゃん。」

「まーやんは真面目っ子だなぁ。」

「ま、まーやんって……」

4号か。…っと、アレはパー○ンか。

「あれ？マヤマヤの方が良かった？マヤマヤ。」
「そ、それもちょっと……」
「もー、じゃあ前のヤマヤに戻す？」
「あ、あれはやめてください！」
「じゃあヤマやん、で。」
「山代くんまで！？と、とにかくですね。ちゃんと先生とつけてください。わかりましたか？わかりましたね？」

「「「「「はーい、ヤマやん先生！」」」」」

みんな、ノリがいいな。
そんなクラスメイトが俺は好きだ！愛している！！

がららっ！！

「諸君、おはよう。」
「お、おはようございます。」

担任、織斑千冬の登場により、クラスは一瞬で鎮まった。
この威厳、副担任とは雲泥の差だ。山田先生がパチリスなら織斑先生はバンギラｓ…

パアン！きゅうしょにあたった！！

「痛いか？次はもっと痛いぞ。」
「…ごめんなさい。」

織斑先生は教卓へと戻っていく。そういえば、このやりとりも久しぶりだ。

「今日からは本格的な実戦訓練を開始する。訓練機ではあるがＩＳを使用しての授業になるので各人気を引き締めるように。各人のＩＳスーツが届くまでは学校指定のものを使うので忘れないようにな。忘れたものは代わりに学校指定の水着で訓練を受けてもらう。それもないものは、まあ下着で構わんだろう。」

爆弾発言キターーー！！

しかし、下着姿＋ＩＳ…。これはなかなか……

む、殺気？正面…教壇からか！なんてプレッシャーだ！やはりお前も…ドミナントｔ…

バシン！２Ｈｉｔ！

「次は狩るぞ？」

「…肝に銘じます。」

危険だ、この力。…大きすぎる。修正が必要だ。

「では山田先生、ホームルームを。」

「は、はいっ。」

これ以上俺に構うのは時間の無駄と判断したのか、織斑先生はＳＨＲを始める。

というか担任。仕事しろよ。

「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！しかも二名で

す！」
「え……」
「「「「な…なんだってーー！！」」」」
寝耳に水だ。こんな情報、聞いてないぞ！？
わざわざ一組に、二名。十中八九、どこかの国の回し者だ。くそっ、
警戒レベルを引き上げないと。
とりあえず、本社に連絡を……。
「じゃあ、入ってきてください！」
「失礼します。」
「……。」
その姿を見て、クラスに更なる衝撃が走る。
一人はいい。長い銀髪と、左目の眼帯。あの頃の葵のような雰囲気
を纏った、鋭く、しかしどこか壊れやすそうな少女。前に箒を刀に
例えた事があったが、この少女はさながら「薄刀・針」のようだ。
問題は、もう一人。
首の後ろで束ねられた、濃い金髪。華奢な体に中性的な顔立ちの―
―男子であった。
◆

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします。」

――しかも、デュノアだと!?欧州一の斜陽企業が、直々に送り込んできた刺客か。

…まあいい。こいつは本物か?それとも、俺と同じ偽物か?

どちらにせよ、しばらくは警戒しないといけないな。

「お、男の娘……?」

「? はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を――」

笑顔で返事をするデュノア。その表情に、邪気は見えないが……。

「きゃ……」

「はい?」

「「「きゃあああああ――――――っ!」」」

くっ、音波攻撃!?どこの喜界島さんだ、お前ら。

窓がビリビリ震えてるぞ。

「男子!三人目の男子!」

「しかもうちのクラス!」

「美形!守ってあげたくなる系の!」

「そして男の娘…。じゅるり。」

「地球に生まれて良かった~~~~!」

そろそろ、クラス内の変態を特定したほうがいいと思う。

「あー、騒ぐな。静かにしろ。」
「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんから～！」
二人の教師の反応は、正反対のものだった。
しかし、それらは確かに効果があったようで、クラスは再び静寂に包まれる。
「……」
誰も――転校生すら――言葉を発しない。…いや、もう俺たちのターンは終了してるから。君、自己紹介しなさい。
「……挨拶をしろ、ラウラ。」
「はい、教官。」
どうやら、織斑先生とは知り合いのようだ。
それも、ただの知り合いではない。教官という言葉といい、今の敬礼といい、間違いなく、軍関係者。
「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ。」
「了解しました。」
再び敬礼。…かなり固い感じだな。こいつも、色モノか。
しかしこの関係、まるでジンネマンとマリーダだな。……まさか、コイツも強化人間！？
――なんてな。戯言だよ。
「ラウラ・ボーデヴィッヒだ。」
「……」

再び沈黙。何かを期待して待つクラスメートの姿に、軽くデジャヴを覚える。
一夏のときと同じだ。この流れなら、多分――
「あ、あの、以上……ですか？」
「以上だ。」
今度はずっこけない。そんな柔らかい空気じゃない。
空気が張り詰めている。そんな中、唐突に。
ボーデヴィッヒが動く。
つかつかと、早足で、一夏の方へ。
「！　貴様が――」
…この剣幕、普通じゃない。
何かが起こる。そんな気がして、俺は直感的に一夏の頭を下げさせる。
ヒュン！
予感的中。ボーデヴィッヒの平手が、さっきまで一夏の顔があった空間を通り抜ける。
「……貴様。」
赤い右目が、俺を睨む。その目に宿っていたのは、間違いなく憎悪の感情だった。
俺はそれを無視して、一夏に声をかけることにする。

「無事か、一夏？」
「『無事か？』じゃねぇだろ……。無茶苦茶痛いわ！何しやがる！！」
…一夏は、今ので思いっきり机に頭をぶつけたようだ。
ぱっと見、ぶたれた方がダメージが少なかったんじゃないか？ってくらい、おでこが赤い。
「織斑一夏…。私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか。」
そうとだけ言い残し、空いている席へと座るボーデヴィッヒ。一方の一夏は、めまぐるしく変化する状況に、理解が追い付いていないようだ。
「あー……ゴホンゴホン！では、ＨＲを終わる。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同でＩＳ模擬戦闘を行う。解散！」
こうして、波乱だらけの一日が、始まることとなった……。

第２６話　ふたりは転校生（後書き）

えー、なかなかシリアスで終われない作者です。

次回は…まあ、完全なギャグ回になってしまいました。

第２７話　示される力！もうヤマヤなんて呼ばせません！！（前書き）

タイトル詐欺です。

基本的にギャグ路線を突っ走ってます。

それでも良い方は、どうぞこのまま。

第27話　示される力！もうヤマヤなんて呼ばせません！！

　曰くつきの二人が登場したＨＲは、織斑先生の一言で終了した。
　一夏も平手打ちのダメージから「オイこら捏造するな」立ち直り、三人目の男子と友誼を深めようとしていた……。

「おい織斑。デュノアの面倒を見てやれ。同じ男子だろう。山代、お前も逃げるな。」
「君が織斑君？初めまして、僕は――」
「ああ、いいから。とにかく移動が先だ。女子が着替え始めるから。」

　そう言うと一夏はデュノアの手を取り、教室を飛び出す。
　俺も８の取っ手をつかみ、早足でその後に続く。

「とりあえず男子は空いてるアリーナ更衣室で着替え。これから実習のたびにこの移動だから、早めに慣れてくれ。」
「う、うん……」

　デコが真っ赤の状態で先輩風（せんぱいかぜ）を吹かせる一夏は、正直、かなり滑稽だった。対するデュノアは、モジモジして、妙に落ち着かなそうだ。
　その仕草は、妙に女っぽい。
　だが男だ。

「トイレか？」
「トイ……っ違うよ！」
「そうか。それは何より。」

二人は階段を下りていく。…む、そろそろ他クラスのＨＲが終わってもおかしくない時間だ。
俺は手近な窓を開け、外へと飛び出す。
８から具現化させたのは、真っ赤な翼のハングライダーだ。

「アイ・キャン・フラーーイ！！」

窓枠を蹴り、空へ。目指すは第二アリーナだ。

「ああっ！転校生発見！」
「しかも織斑君と一緒！」
「そういえば、山代君は？」
「いた、あそこ！！空飛んでる！！」
「ええい、性懲りもなく！弓道部部隊！！」

校舎から聞こえる声。…が、同じ手が二度も通じると思うなよ！！

弓矢は飛んでくるが、俺は回避しない。
ハングライダーに命中。ダメージなし。
制服に命中。穴は開かないし、痛くも痒くもない。

「目標（ターゲット）、健在！！」
「そんな！矢が効かないなんて…」

フハハハハ！！
説明しよう！前回の教訓を得て、俺の制服は防弾・防刃・防レーザー加工を施してあるのだ！！むろん、ハングライダーも同じ材質。
この程度では終わらんよ！

「貸しなさい。私がやります。」

「あ、名護屋河先輩！お願いします！！」

…は？「名護屋河」って…弓道部の部長じゃねぇか！

マズい！あの人の矢は、４０ｍ先の的を、木端微塵にするほどの破壊力があんのに！！

「くっ……。シールド展開！！」

校舎に向けて楯を構える。その判断は正しかった。

ズドオォォォン！！

砲弾でも直撃したかのような衝撃を受け、俺は体勢を崩し、地面へと落ちていった…。

◆

〈ｓｉｄｅ：織斑　一夏〉

群衆に捕まる前に校舎を脱出した俺達は、少しペースを緩めて走っていた。

そしてもうすぐ第二アリーナの入り口…ってところで、信じられないモノを見た。

「よォ……。遅かったな、二人とも……。」

更衣室の脇の壁にもたれかかり、息も絶え絶えの人影。それは、いつの間にか姿を消していたはずの、紅也であった。
見るものにインパクトを与える赤髪は、いまは泥まみれで見る影もなく。
額と唇が切れ、うっすらと出血していた。
それなのに、全くダメージのない制服だけが、妙にミスマッチだった。

「山代君!?一体、何が……?」

シャルルが恐る恐る、といった感じで接近し、ハンカチで血を拭き取ろうとする。
しかし紅也はそれを手で制すると、俺達二人を見回す。

「へっ……。二人とも、無事だったか。良かった…。」
「ば…馬鹿やろう!他人の心配より、自分の心配を……」

俺は、思わず声を荒げる。

「いや、いいんだ…。自分の体のことは、自分が一番よく分かってる……」

ずるずる、と。
山代の体が壁をすべり、尻もちをつく。俺達を見上げるその瞳は、やや虚ろだった。

「…なあ、一夏。最後に一つ、頼まれてくれないか?」
「っく、何だよ…。最後だなんて、言うなよ…。」
「こ…これを…。」

そう言って紅也は、懐から四角い箱を取り出し、俺に押しつける。

「一本だけ…。一本だけでいいんだ。これを、俺の口に……。」

俺はその箱から、小さな円柱形の物体を取り出し、紅也にくわえさせた。

サクサクサク…という音が響く。

――紅也が取り出したのは、じゃ○りこだった。

「ふう…ありがとよ……。

…早く行け。俺は…少し…眠く…なってきた…。」

瞼が閉じていく。もう、俺達の言葉は、彼には届かない。

「くっ……。行くぞ、シャルル！コイツの犠牲を無駄にしちゃ、いけないんだ！！」

「え、えっと。ただ寝てるだけだと思うんだけど…？」

「いいから行くんだ！俺達まで遅刻したら、紅也に申し訳がたたねぇ！」

渋るシャルルの手を引き、俺は更衣室の扉をくぐる。

もう、後ろは振り返らない。

◆

〈ｓｉｄｅ：山田　真耶〉

あ、初めての私サイドですね！いいんでしょうか、織斑先生より先に…。

さて、朝から散々生徒にからかわれた私ですけど、今日は一味違いますよ！

今の私は、ＩＳを使ってます！名前は「ラファール・リヴァイヴ」！！デュノア社製の第二世代機です。

さて、何でＩＳを使っているかというと…。

今日の模擬戦闘、私が戦うんです！実は私、昔は日本の代表候補生だったんですよ！！

ここで活躍すれば、生徒たちも私を見直すはず！そうすれば、変なあだ名じゃなくて、山田先生って呼んでくれるはずです！！

……と、そんなウキウキした気分で飛んでいたのですが、センサーが何かを発見しました。

望遠機能で拡大してみると、アレは…。オーストラリアの第二世代機、「メイン・バトル・フィギュア」のシールドですね。しかも、表面が陥没してます！

この武装を持っているのは、ＩＳ学園内では二人だけ…。

…いえ、カラーリングは赤ですから、山代くんのものでしょう。

……えええっ！！じ、じゃあ、山代くんに何かあったんでしょうか？シールドを拾い上げた後、山代くんの姿を探してみると…。いました！更衣室の入り口に！

し、しかも…。倒れてます！大変です！！

あわてて接近し、バイタルチェックを行うと、どうやら意識を失っ

ているようです。
一体、何があったのでしょうか？

「山代くん、目を開けてください！山代くん！！」
「え…あ…。やまだ…せんせい？」
「！　山代くん？気が付いたんですね！良かった～。」

うっすらとですが、目を開けてます！
私はそれが嬉しくて、思わず彼を抱きしめました。

――そう、ＩＳを装備していることを忘れて。

「さあ、ちょっと遅れてますけど、アリーナに行きましょう！大丈夫、織斑先生には、私から説明しますから！」
「ありがどうござ…ぞれより、ぐるし…」
「じゃあ、このまま飛びますよ！！」

山代くんが何かを言いかけてたけど、もう時間がありません。
さあ、私の活躍が始まりますよ～！！

◆

〈ｓｉｄｅ：アリーナ内〉

「…む？そういえば、山代はどうした？姿が見えんが。」

セシリアと鈴音を叩いた千冬は、ようやく紅也の不在に気付いた。

「あー…山代君は……」

シャルルは、あれをどう説明したものか…と、考え込む。

実際、シャルルも何が起こったか把握しているわけではない。

「まさか、サボりか？いい度胸だ…」

「ま、待ってくれ千冬姉！これには、深い訳が…。」

バシーン！４Ｈｉｔ！…あ、これ以前の３Ｈｉｔ分は原作参照ね。

「織斑先生と呼べ。…で、どんな事情があるんだ？くだらないものだったら…」

そう言って、素振りを始める千冬の姿に、一夏は冷や汗を流した。

「えっと…その……」

シャルル同様、説明に困る一夏であったが、救いの声は、空から降ってきた。

「織斑先生！それは、私が説明します！！」

唐突に聞こえたその声に、一同は上を見上げる。

そこにいたのは一機のＩＳ――ラファール・リヴァイヴだった。

「山田君か、早かったな。」

「ええ、急ぎましたから…。」

ゆっくりと地上に下りる真耶。その両腕で抱えられていたのは、話題の張本人、紅也であった。

「紅也さん!?どうしたんですの?」

「ちょ、紅!大丈夫なの?」

近くにいたセシリアと鈴音が、そのぐったりした姿に驚愕する。

それを千冬は一睨みで黙らせ、麻耶に説明を求める。

「……で?なにがあった?」

「私も詳しくはわかりませんけど、更衣室の前で倒れてました。さっきまで意識があったんですけど、気が付いたら、また……。」

そう説明した真耶の目は、涙目だった。

「…はあ。山田先生。更衣室からここまで、どうやって来た?」

「それは、急いで飛んで…あ。」

その場にいた全員が、麻耶に白い目を向ける。

「生身の人間が、そんなGに耐えられるわけないだろう。」

「ご……ごめんなさーい!!」

実際は、飛ぶ前に胸で窒息したことが原因なのだが…。それを知るものは、この場には一人もいなかった。

第27話　示される力！もうヤマヤなんて呼ばせません！！（後書き）

紅也は二度死ぬ。

次回は主人公不在なのか？どうなる！？

第２８話　リッスン！レッスン！ＩＳ実習（前書き）

２８話を投稿します。

ストックがなくなってきました。最近、読み専でしたから…。

あ、主人公は復活したので安心（？）してください。

第２８話　リッスン！レッスン！ＩＳ実習

気が付いたら、アリーナにいた。
…いや、どうして？俺は、更衣室の入り口で…限界を迎えたはずなのに。

「…お。意識が戻ったぞ。」
「大丈夫、山代君？」
「一夏…と、デュノアか…。」
「シャルル、でいいよ。一夏もそう呼んでるし。」
「…俺、は。」

体を起こそうとするが、なかなかうまくいかない。

「おい、無理すんなよ。ＩＳの飛行時のＧをモロに受けたんだ。少し休んでろ。」
「……え？」
「山田先生が、君を運んできたんだよ。」

そうか……。
あの後、俺は山田先生に起こされて…。その、あの胸で…。

ブハッ！

「おい、ホントにどうしたんだ！？」
「しっかりして！」

…やばい！今思えば、恥ずかしすぎる！

「だ…大丈夫だ、問題ない……。」
「…そう言ったときは大丈夫じゃない、って葵も言ってたｚ…」
「貴様ぁ！いつの間に葵を呼び捨てにするようになった！！」
「ええ！？復活した！？」

おっと、シャルルが驚いてる。…いけないいけない。

「目が覚めたようだな、山代。動けるか？」
「ええ、まあ。」
「では、八人グループになって実習を行う。各グループリーダーは専用機持ちがやること。いいな？では分かれろ。」

◆

「あの…。私の活躍は……？」

割愛しました。

「ううう…ひどいです。どこぞの番組の不定期ミニコーナーじゃないんですから……。」

あるいは、錆白兵ＶＳ鑢七花。そんなもんです。

◆

……予想はしていた。
俺達は、世界でも珍しい男性ＩＳ操縦者。
――ワイルド系、織斑一夏
――守ってあげたい系、シャルル・デュノア
――そして、非常に不本意だが、「かまってほしい系」こと俺、山代紅也
そんな３人に人気が集中するのは、ある意味予想通りで…。
「織斑君、一緒にがんばろう！」
「デュノア君の操縦技術を見たいなぁ。」
「山代君、私の専用機を作って～。」
…いや、最後の奴。実習関係ないだろ。
「ん～、作ってもいいけど、その代わりにこの契約書にサインを…」
取り出したのは、モルゲンレーテの専属契約書（常に５枚は持ち歩いてる）。
いつでも、「僕と契約して～」を実行できるように。
「ほら、ここにサインするだけだから。え、印鑑持ってないの？しょうがないなぁ。じゃあ、拇印でも…」
スパァン！

「この馬鹿者どもが……。出席番号順に一人ずつ各グループに入れ！順番はさっき言った通り。次にもたつくようなら今日はＩＳを背負ってグラウンド百周させるからな！

それから山代！学園内での契約は禁止だ！契約書は全て没収する！！」

「そ、そんな！？　今月中に５件以上の契約取らないと、俺、クビになっちゃいます！」

「貴様はどこのセールスマンだ！」

とかなんとかやってる間に、班ができていた。

「最初からそうしろ。馬鹿者どもが。」

ため息をつく織斑先生。

…いや、自由な班決めなんかやったら、だいたい人気者のとこに集まるから。修学旅行の班決めとか、特に悲惨じゃないか。ホント、

「最初から、こーすれば良かったんだぁぁぁ！」って感じだな。この虫野郎！！

あ、誤解しないでくださいね。決して、織斑先生に暴言を吐いたわけではありませんから。

「……やったあ。織斑君と同じ班っ。名字のおかげねっ……」

「……うー、セシリアかぁ……。さっきボロ負けしてたし。はぁ……」

「……凰さん、よろしくね。あとで織斑君と山代君のお話聞かせてよっ……」

「……デュノア君！分からないことがあったら何でも聞いてね！ちなみに私はフリーだよ！……」

「……山代君、技術者なんでしょ。ＩＳの裏話とか聞きたいから、放課後、私の部屋に……」

「……」

一部の班を除き、どこもにぎやかだ。これが女子の会話力か。

あと、君。悪いけど、今日は部活があるんだ。また今度な。

「ええと、いいですかーみなさん。これから訓練機を一班一体取りに来て下さい。数は『打鉄』と『リヴァイヴ』が三機ずつです。好きな方を班で決めてくださいね。あ、早い者勝ちですよー。」

今日の山田先生は、いつもと違う。なんだか堂々としていて、いつもより大人びている。

さっきの模擬戦で、自信を持ったのか。

そ、それとも…俺との一件で、ヒ〇テリアモードになったとか!?

嫌過ぎるぞ、そんな設定。

「…で、みんなはどの機体がいいんだ?」

「んー、そだねー。」

「山代君って、刀得意だよね。」

「ああ。でも、今日は武装展開はしないぜ。」

「じゃ、どっちでも同じかなぁ。」

「……とかなんとか言ってる間に、もう残り一機になってるけどな。」

「あー、ホントだー。」

残っているのはラファールが一機。残念、時間切れだ。

それを取ってきて、さてどうするかと考える。周りを見ると、どの班もＩＳの装着を始めていた。――オープンチャンネルで指示を受けたのかな?こういうとき、レッドフレームは少し不便だ。

「じゃ、とりあえず番号順に並んでくれ。これから、一人ずつ装着

作業に入るぜ。」
「「「「「はーい！！」」」」」
そう言うと、みんな一列になり、元気よく返事をする。
はっはっは…。元気良すぎだろ。耳きーん、だ！
「山代君山代君、どうやればいいの？」
「ああ。まずＩＳに座るように……って、これ前の授業でやってるよな？」
「えー、いいじゃんいいじゃん。手とり足とり教えてよ！」
「あ、ミヨずるい！山代君、私も！！」
「わたしもー。」
……参ったな、すごい熱気だ。
シャルルと一夏の所も、似たり寄ったりの状況で――あ、鬼神に叩かれた。
「…怒られる前に、さっさとやろうぜ。」
「「「「「り、りょうかーい！！」」」」」
圧倒的な力を前にした班員の団結力は、半端なく強かった。
「はい、じゃあ装着したら起動！そしたら歩いてみて！」
一人目、飯田さんがＩＳを起動。何事もなく立ち上がる。
「コイツ、動くぞ！！」
「立った！クララが立った！！」
「いいぞ、ジョー！！」

皆さん、ノリがいいことで。

歩行、しゃがんでから装着解除。こうしないと、ＩＳに乗れなくなっちまう。

一夏の班みたいにな。

「じゃあ次、グローリーさん。同じようにやってみてくれ。」

「はーい。こんなの、お茶の子前よ！」

「いみわからん。」

起動、装着、そして歩行。ここまでは良かった。

「あー、織斑君がお姫様だっこしてるー！」

「いいないいなー。」

騒ぎがしたので一夏の班を見ると、立ったままのＩＳに乗せるため、クラスメイトを白式で運ぶ一夏の姿が。

「…フフン！」

なにやら、ラファールから妙な声が。嫌な予感がする。

「おっと！うっかりＩＳをしゃがませるのを忘れちまいました！」

そう言って、立ったまま装着解除したＩＳから飛び降りるグローリーさん。…俺にも、あんな恥ずかしいことをやれと？だが断る！

ＩＳの脚部に接近。８を使って制御系に干渉し、停止中のＩＳをしゃがませる。

「ああー！ニコの努力がー！」

「山代君、ひどいよひどいよ！」
「空気？読みませんが何かぁ？ハイ次ぃ！」

◆

〈ｓｉｄｅ：篠ノ之　箒〉

何をやっているのだ、あいつは！
山田先生の胸を見たり、女子と密着したり…デレデレしすぎではないか！

と……とはいえ、次に…その、一夏に抱いてもらえるのは、順番的には私だ。
そこだけは、あいつに感謝してやってもいいな。

「あー……また俺が運ばないといけないのか。えーと、次は誰？」
「私だ。」
「え…。お、おう。」

…なんだろうか？どこか、ひっかかる反応だったな。
と、唐突に一夏は私に背を向け、白式をしゃがませた。

「…何だ？」
「いや…。箒は、俺が踏み台になったほうがいいんだろ？ほら、早く乗れよ。」

う……。た、確かにそう言ったが、あれは、一夏が他の女を抱くのが嫌だっただけで、決して踏み台になってほしかったわけでは…。とか思っていると、一夏はさらに続けた。

「ほら、早くしろよ。俺のことなんか、踏み台程度にしか思ってないんだろ。」

――昨日の食堂でのことは、ただの照れ隠しだった。
今の一夏の発言も、おそらくは売り言葉に買い言葉の状態だからだろう。
でも。
それでも。
この一言は、私には相当こたえた。

「……」

無言のまま、思わずうつむく。
この馬鹿は、本当に、どこまで、私の心をかき乱せば気が済むのだ!?

感情に任せて一夏を踏み台にし、私はＩＳへと乗り込む。
とにかく今は、なにか行動していないと、どうにかなってしまいそうだった。

第２８話　リッスン！レッスン！ＩＳ実習（後書き）

続く誤解。この先、どうしよう？

話が進まなくて、申し訳ないです。

第２９話　いや、ネタ振りのつもりだったんだが…。（前書き）

はい、２９話です。
ちょっと更新が難しくなってきました。次話投稿はおそらく遅れます。

第２９話　いや、ネタ振りのつもりだったんだが…。

「では午前の実習はここまでだ。午後は今日使った訓練機の整備を行うので、各人格納庫で班別に集合すること。専用機持ちは訓練機と自機の両方を見るように。では解散！」

織斑先生の合図で実習は終了。ＩＳをカートに乗せ、レッドフレームで押して運ぶ。なぜか一夏は生身でカートを押してたが。

しかし、シャルル人気はすごいな。女子が率先して訓練機を運んでた。さすが「守ってあげたくなる系」。庇護欲をそそるオーラでも出てるんだろうか。

確かに、見た目は華奢で、とても力仕事に向いているとは思えないだが男だ。

まあ、それはそれとして。

現在、一つ気になっていることがある。

実習前と比べて、箒が明らかに落ち込んでいるのだ。

一夏との仲直りができなかったのか？それとも、さらにこじれたか。

原因の一端は俺にあると言えなくもないので、少し心配だ。

「紅也、シャルル、着替えに行こうぜ。俺達はまたアリーナの更衣室まで行かないと…って、紅也？いつの間に着替えたんだ？」

そう。俺の姿は、既に制服だった。

「はあ。そもそも、ＩＳスーツに着替えてないんだから、当たり前田のクラッカーだぜ。お前、俺がどうやってここまで来たか、もう忘れちまったのか？」

「…あ、そっか。山田先生に運ばれてきたもんね。エネルギーを使

ってスーツを展開したんでしょ？」
「正解だ、シャルル。褒美として、黄金のファラ男を一つプレゼントだ。」
「？　何、それ。」
「知らないならいいや。…と、いうわけだから、ＩＳを解除すれば自動的に制服に戻るんだよ。悪いけど、二人で着替えててくれ。」
「……あ！僕はちょっと機体の微調整をしていくから、先に行ってて着替えててよ。時間がかかるかもしれないから、待ってなくていいからね。」
「ん？いや、別に待ってても平気だぞ？俺は待つのには慣れ――」
「い、いいからいいから！僕が平気じゃないから！ね？先に教室に戻っててね？」
「お、おう。わかった。」

…今のシャルルの動揺っぷり、半端じゃなかったな。
やはり、何かを隠しているのか？
――せっかくのチャンスだ。少し、探ってみるか。

「なあ、シャルル？」
「ん？どうしたの？紅也も先に行っててていいよ。」
「そうじゃなくてだな…。お前、髪型変える気はないか？」
「え、な、何を急に？」

まずは、会話から糸口を探る。かのシャーロック氏も、そんなことを言っていた。

「せっかくシャルルって名前なんだからさ、貴族みたいなクルクルロールにしてみるとか。皇帝っぽくていいんじゃね？」
「…ひょっとして、僕がフランス出身だからって、からかってる？」
「いや、某９８代皇帝と名前が同じだからな。」

神聖ブリタ〇ア帝国の。

「？　そんな人いたっけ？」

「文化の違いか。知らないならいいや。」

さて、いきなり会話がすべった。これ以上、話が続かないな。今度は、葵も交えて食事に誘うか？

「じゃあ、先に行くぜ。また授業でな、シャル子よ。」

「！　う、うん。」

……？

「だが男だ」つながりでからかっただけだが、妙に反応してきたな。……マジか？マジでＤメール送っちゃった系か？

男じゃなくて、女なのか？

だが、確かめる術は無い。「このＨＥＮＴＡＩ！」呼ばわりされたくない。

とりあえず、この疑問は保留だ。今は、別の問題を片付けようか。

◆

「よう、まだいたのか、箒。」

「！　…何だ、紅也か。悪いが、今は一人に…」

「知ってるか？悩みってのはな、一人で抱えるとドツボにはまるんだぜ。

…と、いうわけで、一緒に昼飯食いに行こうぜ。誰誘う？」
「いいと言っているだろう！私に構うな！」

格納庫でうなだれていた箒を発見し、話しかけた俺だったが、相手は聞く耳持たずだった。
…こういうとき、一夏だったら強引に連れてくんだろうが、生憎俺はそんなことはできない。俺はただ、説得するのみだ。

「まあ、そう言うなよ。さっきのあれは、どう考えても一夏が悪いぞ。」
「……見てたのか。」

いや、見てない。
ただ、相手に賛同する様子を見せると、人は簡単に心を開く。

「まあ、あんなことをされたら、普通はヤキモチ焼くよな。誤解の方も、まだ解けてねぇんだろ？」
「う、うむ。じつは、そうなのだ…。」

見るからにしゅんとする箒。…もう一息か。

「あの一件は、俺達にも責任がある。とりあえず、飯にしようぜ。気持ちが下降気味の時は、食べるのが一番だ。」
「……太るぞ？」
「運動すりゃいいさ。」
「ふっ……。そうかもしれんな。」

ようやく誘いに乗ったか。やれやれ、手間のかかる子だ。
さて、せめて愚痴くらいは聞いてやろう。誰か、学食行く奴いないかなー？

◆

食堂は、いつも以上に混んでいた。

「なあ、葵。なんでこんなに混んでんだ？」

「…転校生。」

「なるほど、シャルル目当てで集まってんのか。…簪、四人席、確保できそうか？」

「……あそこ、空いてる……。」

「おっけ。じゃあ、とりあえず席だけ確保してくるから、三人とも先に注文してきてくれ。…あ、葵。俺はカレーうどん、単品で。」

「…わかった。」

セシリアと凰は弁当を持ってきたため、今日は来ていない。大方、一夏を誘って食事中だろう。ご愁傷さまだな。

実はセシリア、料理はかなり下手なのだ。まあ、死人が出ないだけ姫〇さんよりマシだと思うけど、それと比べるのは間違ってる気がする。何で、味見をしないんだろうな。

……え、俺か？チャーハンくらいしか作れないぞ。

主人公が全員、料理うまいと思うなよ！！

まあ、メタ発言はこのくらいにしておこうか。

そういうわけだから、ここに来たのは俺、葵、箒、簪の漢字一文字女子たちだ。

シャルルは、一夏に誘われてたけど、ここにいたら食事にならなかっただろうなぁ。いい判断だったと思う。

「…おまたせ、カレーうどん。」
「さんきゅ。はいお金。」
「い、妹をパシリに使うとは…。」
「……仲良し、だね……。」

さて、これで4人そろった。さあ、食事を始めよう。

かちゃかちゃ。
しばらく、食器の奏でる音だけが響く。

「そういえば…。」

焼き魚を呑みこんだ箸が、ふとこちらを向く。

「紅也は山田先生に運ばれてきたが、何があったんだ?」
「…? 運ばれてきた?」
「ああ。遅刻したと思ったら、山田先生と一緒に来たんだ。…意識を失った状態でな。」
「……それって、かなり……大事(おおごと)、だよね。」

三人の興味深そうな視線が、一斉に俺に向く。うどんを咀嚼し終えた俺は、あの状況を言葉にまとめようとするも、なかなかうまくいかない。

「あー。撃墜されて、意識失って、それから…。…気が付いたら、

アリーナにいた。」
「…何か隠してる。」
鋭すぎるぞ、葵。
「む、山田先生の話では、意識はあったと聞いているが。」
「……嘘、ついてるの？」
箒！？無駄な記憶力を発揮するな！そんな、どうでもいいことに！
「いや、意識不明の同級生が運ばれてくる、というのは『どうでもいいこと』ではない気がするが。」
「話して。」
「紅也……くん？」
な、何だ？このプレッシャーは！震えているのか、私が？
「あー……。うー……。…ダメだ。朦朧としてたから、よく覚えてねぇ。
ところで箒、そろそろ本題に入っていいか？」
不自然な言い訳に、不自然な話題転換。不自然だらけだが、今はそれでもいい。
もともと、そんな話をするために集まったわけじゃない。
「さて…。一夏と、何があったんだ？」
「……話さないと、ダメか？」
「別にいいが、話した方が楽になるぜ。」
そう俺が薦めると、箒は顔を上げ、口を開き……

「……少し、いい……かな？」

唐突に、簪がそれを遮る。

「この人……誰なの？」

……。

そうか。考えてみれば、簪と箒が会ったのは一回だけだ。

あの時は、二人とも俺への質問で手いっぱいだったし、自己紹介してないんだな。

「一組の篠ノ之　箒だ。」

「……四組、更識　簪……。」

終了。他に話すことないのか。

「話が進まない。」

「同感だ。じゃあ箒、どうする？」

「…話そう。」

今度こそ、箒は重い口を開き、語り始める。

「葵はあの場にいたな？あの時の誤解が、まだ解けていないのだ。」

「一夏、喧嘩中？」

「…そうだ。それで今日の授業中、一夏に踏み台になれと言ってしまったんだ。」

「「「…はい？」」」

ちょっと待て。脈絡なさすぎだろ。

踏み台って何だよ。ＳＭか？アブノーマルすぎるだろ。

「補足説明を求める。理解不能。」

「……山代さんに、賛成。」

「俺も分からんが…。詳しく話してくれ。」

「あー、うむ。変な意味ではなくてだな。実習中にＩＳを立たせたままにした者がいてな、そいつを、一夏が、その……抱いて運ぶことになったんだ。」

「……よくある。」

「へえ、けっこう初歩だと思ったんだけどな。四組でも、そんなミスをする奴がいたのか。」

「三組にも、いた。」

「そ、そんなことはどうでもいい！それで…。とにかく、一夏が他の女を抱くのが嫌で、思わずそんな一言を……」

最後の方、超小声だったな。

……なんだ、ただのヤキモチか。

「…続きは？」

…葵？この話は、もう終わりじゃないのか？

「こんなの、いつものこと。ここまで落ち込まない。」

「言われてみれば、確かに…。」

「……私、帰って……いい？」

相変わらず、一夏の話題が嫌いなようだな、簪は。

「そ、それでだな。私の時も一夏に運んでもらおうと思ったんだが…。『箒は、俺が踏み台になったほうがいいんだろ?ほら、早く乗れよ。』『ほら、早くしろよ。俺のことなんか、踏み台程度にしか思ってないんだろ。』…などと言って!人の気も知らずに!!」

そう言って机を叩く箒。周りの注目が、俺達に集まる。

「あー、これは…。」
「どっちも悪い。」
「……フォローできない。」

タイミングが悪かった。それだけで、ここまで人間関係がこじれたのか。

「…箒。今回のは、お前も悪いぞ。」
「!　な、何を根拠に…。」
「一つ。昨日のうちに誤解を解かなかった。
二つ。まあ、いつものことだが、一夏に対してきつ過ぎだ。これじゃ、嫌われてるって思われても無理はない。」
「だ、だが…」
「喝っ!話を聞け。
三つ目!素直に謝っとけばよかったんだ。両方が変な意地張ってたら、そのうち手遅れになるぞ!」

そう。何かあったら、時間をおかずに謝った方がいい。
葵と簪も、ケンカ（ただし一方的）はしたけど、嫌いあってるわけじゃない。
ほら。こうやって一緒に食事とってることからも、分かるだろ?

「…ただ、三つ目は、一夏も同罪。」
「……紅也くんと違って……子供っぽい……。」

二人とも、ほぼ同じ意見のようだ。
だが、簪。俺が大人っぽいのは、仕事モードのときだけだぜ。

「謝る……？私が、か？」
「そうだよ。…幼なじみは二人いるんだぜ？こんなところで脱落したいのか？」
「そ、それは！…困る。」

おおう、必死だな。恋は盲目って奴かな。

「……織斑くんの愚痴くらいなら、聞いてあげる……。」
「がんばって。」
「そういうことだ。次の時間、頑張れよ。」

「みんな…。うむ、なんだかすっきりした。ありがとう、紅也、葵、更識！」

答えは得たようだ。きっと、これから頑張ってくれるだろう。

「…じゃあ、俺達の責任は、ここまでってことで。」
「後は、自己責任。」

席を立ち、俺達は食堂を後にする。
…これで、変なしこりが残らないといいけどな。

第２９話　いや、ネタ振りのつもりだったんだが…。（後書き）

えー、これと並行して起こっている一夏のイベントは、原作参照で。

削るには惜しいイベントでしたが、流れの上では仕方ないです…。

第３０話　男？女？　紅也ｓｉｄｅ（前書き）

とうとう３０話です。
お盆で実家に帰るため、しばらくは投稿できません。
おバカな作戦が始まります。では、どうぞ！

第３０話　男？女？　紅也ｓｉｄｅ

さて、午後の授業はＩＳ整備だ。
どっちかというと、こっちが俺の専門分野。
葵と別れた俺は、第一アリーナの更衣室へと向かって走っている。
前回の授業でスーツを着なかったため、今回は予め着替える必要があったのだ。
…正直、かなり面倒だ。エネルギーで変換できるんだから、それでいいじゃないか。
でも、ＩＳスーツで集合って言われてるからなぁ。はあ…。

まあ、今回着替えるのには、別の意味もある。
…シャルルは女かもしれない。それを確かめるのだ。
この時間なら、まだ誰も着替えに来てないはず。早めに着替えて、物陰に隠れていれば、きっとばれずに監視できる。

と、いうわけで、着替えをさっさと済ませた俺は、ロッカーの中に隠れているんだが…。
入ってきたのは、一夏のみ。シャルルはどうしたんだ？

「まったく…。鈴もシャルルもずるいよな。まさか、スーツ着たままだなんて…」

お、なんてタイミングのいい独り言だ！知りたいことが全部分かったぞ。
スゲエよ、空気の読める男。
じゃ、シャルルが来ない以上、ここにいてもしょうがない。さっさと出るかな。

バタン！

ロッカーを勢いよく開ける。そして……

「オーールハイル！ブリタアァァァニアァァァァァ！！！」

「ぎゃあぁぁぁぁぁぁぁ！？」

そのとき、正体不明の絶叫が、校舎まで届いたそうな…。

◆

「いや、あの時の一夏は傑作だったな、イヤ、ホント。」

夕食時。俺と一夏とシャルルは、揃って食堂に来ていた。

ＩＳ学園に３人だけの男子が集まれば、当然、騒ぎになるわけで。

俺達三人、特にシャルルは質問攻めにあっていた。

やれ、「生まれはどこ」だの、「好みのタイプは」だの、「一夏と俺ならどっちがいいか」だの…。最後の質問をした奴は、アームを展開してくるくる回してやった。このくらいは許されるだろ？

質問の波が引いたところで、ようやく、静かな夕食の時間がやってきたというわけだ。

「そりゃ、誰もいないところから人が出てきたら、普通は驚くって。」

「アハハ…。あの叫び声、一夏だったんだ。」

思惑は外れたものの、共通の話題としては上々のものが手に入ったから、まあいいか。

「そういや、シャルルは、いつからＩＳが使えることが分かったんだ？」

「え、えーっと…。一夏が使えるようになったから、男でも適性試験を受けるようになって、それから…かな。山代君「紅也でいいよ。」…紅也はいつから？」

「実をいうと…だいぶ前だな。ＩＳが開発された頃には、もう乗れてたぜ。」

「え！？そ、そんなに前から……。」

「おいシャルル！どう考えても嘘だって！」

「……いや、そこはつっこむところだろ？」

シャルルは、なかなか真面目な性格のようだ。

最近ＩＳに乗れるようになった奴が、専用機を持って転校できるわけないだろ？今日の操縦を見る限り、ずいぶん前から訓練されてたと分かる。

…やはり女か？ちょっとカマをかけてみようか。

「まったく、シャルルは真面目だな。いい嫁さんになりそうだぜ。」

「よ、嫁！？そんな…僕は…。……って、ぼ、僕は男だよ！」

「紅也…。お前、コレなのか？」

「なっはっは！ジョークだよ。メキシカンジョークだ。」

「めきしかん……？」

「だから、深く考えるなって！」

……隠す気あんのか？ここまであからさまだと、逆に罠のような気がするが。

って、罠って何だよ。誰得だよ（笑）。

あー、もうこの話題はいいや。

「そういや一夏。箒とは仲直りしたのか？」

「……箒？」

うわ、急に不機嫌になった。選択肢を間違えたか？ロードし直すべきだろうか。

…が、正直このまま放っておくと、良くないことが起こる気がする。

ここで誤解を解くための仕込みをした方がいいだろう。

「ああ。昼間一緒にメシ食ったんだけどな。なんか、一夏に心ないことを言ったって、スゲェ落ち込んでたぞ。なんだか分からんが、昨日の『何とも思ってない』発言が原因か？」

「…ああ、それもあるけどな。

午前中のＩＳ実習で、ＩＳを立たせっぱなしにした子がいたんだけどな。あいつ、俺が踏み台になって運べばいいって言ったんだぜ。ふざけるなって話だよ。

…で、実際自分は俺を踏み台にして…。ホント、俺が嫌われるようなことしたか！？」

ふうん。お互い、見事にすれ違ってるな。

二人の意見を聞いてるだけで、隠してることが見えてくるぜ。

「…で、そのとき一夏はどうするつもりだったんだ？」

「？　そのとき、ってのは？」

「だから、ＩＳを立たせっぱなしにした、その後の子だよ。俺には、だっこして運んでるように見えたけどな。」

「あ、それ、僕も見てた。」

「み、見られてたのか…。」

頭を抱える一夏。そんなことより。

「で、その子の後が箒だろ？一夏は、同じようにだっこして運ぼうとしたのか？」

「う……。それは……。」

明らかに言い淀む。後ろめたいことでもあったのか？

まあ、全部知ってるけど。

「何か心当たりがあるなら、早いうちに謝っとけよ。大部分は箒が悪いとしても、お前にも非はあるぜ。」

「そ、そうか？納得できないけどな…。」

「じゃあ、謝った後でそう言え。たまには、本音で語り合ったらどうだ？」

「紅也……。分かった、後で箒と話してみるよ。」

そう言った一夏の表情は、さっきまでと異なりやや明るかった。その様子を見て、もう大丈夫かと思い食事を再開しようとするも――

「…ふふ、紅也って、何か先生みたいだね。」

今まで会話に参加してこなかったシャルルが、ようやく声を上げる。

「…は？先生？俺が？」

尤も、言ってる内容は理解不能だったが。

「うん。なんか、みんなのことをよく見てて、悩みを解決する手助けをして…。なんか、かっこいいよ。」

そう言って、キラキラした目で俺を見るシャルル。

やめて！そんな純粋な眼で俺を見ないで！
みんなをよく見てるのは、情報を取り逃さないため。
悩みを解決するのも、自分のミスの尻拭いと、友好度アップのため。
そんな、打算だらけの人間なんだからぁ～！！

「さて、ごちそうさま。俺は先に行くよ。」
「お、行って来い！思い立ったが仏滅、とかよく言うからな。」
「いや、それを言うなら『吉日』、だろ。とにかく、ありがとな！シャルルも、また部屋で！」
「あ、うん。一夏も頑張ってね。」

ひらひら。
手を振る俺とシャルルを置いて、一夏は去っていった。

「…そういやシャルル、一夏と同室なんだな。」
「うん。一夏の部屋、一人で使ってたみたいだから。そういえば、紅也は誰と同じ部屋なの？さっき言ってた、箒って人？」
「いいや？一人部屋だぜ。どうしてそう思ったんだ？」
「うーん…。なんか、妙に肩入れしてた気がしたから、かな。」

まあ、半分くらい俺達の責任だったから、とは言わない。言う必要がない。

「俺は、目の前の問題を放っておけないタイプなんだよ。それだけだ。」
「ふふ…。ホントに先生みたいだよ。」

だから、そんな立派な存在じゃないって。

だって。

「そうかな。じゃあ、シャルルも何か悩みがあったら、いつでも相談しに来てくれよ。俺の部屋、１０１７室だから。」

こんなふうに、君がボロを出すのを待ってるんだから。

◆

「……と、いうわけで。転校生は男装女子かもしれねぇ。」

「…怪しい。」

１０１７室。俺と葵は、今日の転校生について話し合っていた。

ボーデヴィッヒの身元はすぐに判明。ドイツ軍の特殊部隊に在籍する、現役の軍人だった。

問題はシャルル。

今までどんなデータベースにも、デュノア社社長の息子なんて存在しなかった。

これについては、社長の隠し子であると仮定すれば、説明が付く。

彼（彼女？）が言っていたように、ＩＳ適性試験をすぐに受けられたのも、これで説明できる。

だが、問題は、その経歴だ。

シャルルの経歴は、小中と私立の学校へ行き、高校に入ってから急にＩＳ学園に編入、というものだ。学校の卒業生名簿にも載ってい

たし、卒アルにも写真がある。
しかし――。
モルゲンレーテの情報網を使って、その学校の卒業生に連絡を取ったところ、その学校でシャルルを見たことがある人は、ひとりもいなかったのだ。
姓が違うわけではない。写真を見ても否定するのだから、彼は確かにいなかったことになり。
つまりは、企業による情報操作が行われた可能性もある。というのが現状だ。

だから、罠をはった。
四月に起こった出来事。セシリアと一夏による誤解を、再現する。
一人部屋と聞いていた俺の部屋。そこに女物の下着と、男性用の制服があったら？

――シャルルは誤解するだろう。
「山代　紅也は、実は女である」、と。

「名付けて、木下秀吉大作戦！…てな訳で葵。協力してくれるか？」
「本気？」
「ああ、本気（マジ）で成功すると思ってるぜ。」
「…まあ、いい。」

しぶしぶ、といった調子だが、葵の賛同も得られた。

「よし。とりあえず、お前は女子の制服を隠して…。あ、これは変装用のカツラだ。部屋にいるときは、これをつけといてくれ。シャルルが訪ねてきたら、俺はバスルームに隠れるから。後は…。女子用制服は、クローゼットに隠しておいてくれ。あくまで、一人部屋だと思わせるんだ。」

「…ノリノリ。」

おい葵。何で頭を押さえてるんだ。
俺の完璧な作戦の、どこに不備があるんだ？教えてくれ。

「…やるだけやる。」
「そうか、じゃあ、後は監視カメラの設置と～。」
「…一夏の部屋に仕掛ければいいのに。」
「ん～、何か言ったか？」

転校生の来た夜は、こうして更けていくのであった……。

第３０話　男？女？　紅也ｓｉｄｅ（後書き）

誤解も解きつつ、シャルルも探る。
ラウラは…マジ空気です。今は。

第３１話　では…ミッション・スタートだ（前書き）

タイトル通り、作戦が始まります。
さて、何が起こるのか。

今回は、葵の出番も多めです！

第31話　では…ミッション・スタートだ

で、翌日。朝の教室にて。

「おはようございます、紅也さん。今日はずいぶんと遅かったですわね。」

「ああ、久しぶり…。いや、そうでもないか。おはようセシリア。いや、いつもは早く来すぎてたからな。今日からはゆっくりでもいいかな、と。」

「つまり、「何となく」ですわね。」

「まあ、そういうことだ。」

とりあえず、作戦の一環として、葵と一緒にいるのを見られないようにすることから始めた。俺は食事の時間をずらし、鍛錬も一緒にはやらないことにした。

葵は乗り気ではなかったが…。俺と離れるのが嫌だった、とか？そうだったら嬉しいんだが。

「お、おはよう紅也。」「紅也、おはよう。」

「よう、一夏、シャルル。朝からさわやかだな。」

噂の二人が登場だ。食事の時間をずらしたのは、やはり正解だったらしい。

「おはようございますわ、一夏さん、デュノアさん。相変わらず、仲がよろしいことで。」

……ん？セシリアから、良くないオーラが出てるぞ。

何かしたのか、一夏？が、当の本人はそんなことには気づかず。

「はあ、部屋が一緒だし、同じ男子だからな。当たり前だろ。」

と、実にさわやかに返答する。

「…やはり、油断なりませんわね。」

ぼそっ、と。小声でつぶやくセシリアに危険を感じた俺は、即座に話題を転換する。

「そ、そうだ！お前ら、昨日は一緒に昼飯食ったって聞いたけど、どこにいたんだ？」

「昼…？うん、屋上で食べたよ。」

「食堂なんか、かなり混んでたんじゃないか？」

「ああ。シャルル目当てのお客さんで満員御礼！…って感じだったぜ。」

「そ、そうでしたの。でしたら紅也さん、今度、わたくしがお弁当を作って差し上げますわ！よろしければ…。」

「お、ありがとな、セシリア。楽しみにしてるぜ。」

「！　そ、そうですか。楽しみに…。

では、期待に応えるとしますわ！！」

ガッツポーズをするセシリアと、「やっちまった」的な表情の一夏が、妙に気になった。

…大丈夫、セシリアだって、進歩してるはずだ。前のはたまたまマズかっただけ…の、ハズ。

「はーい、みなさん揃ってますね。ＨＲを始めますよ。」

山田先生も到着だ。今日も一日が始まる。

◆

〈ｓｉｄｅ：山代　葵〉

昨日、紅也が発案した、シャルルを探る作戦。
はっきりいって、ナメてるとしか思えない。
相手は一応、訓練を受けた工作員。簡単にはボロを出さないし、こちらの情報くらい、持っていても不思議じゃない。

――当然、私のことも知っているだろう。

本来だったら、監視なり尋問なりを行って聞きだすべきだろうが、学園内でそんなことをしたら、国際問題に発展しかねない。
しかし…。だからといって、こんな猿芝居をする必要は無いと思う。
まったく、何でこんな作戦を思いついたのか……。

――そういえば、授業前に意識を失った、って言ってたっけ。

きっと、そのショックで、頭が動作不良を起こしているんだろう。
そうに違いない。

私がしっかりしなくちゃ…。

◆

〈ｓｉｄｅ：山代　紅也〉

ん？どこかで、非常に不本意な評価を受けた気がする。
それはそうと、今は昼休み。今日も、購買に行くのは止めておいた方がいい、という俺の判断で、いつものメンバー＋シャルルは教室で食事をしていた。

「そういえばさ。」

餃子をほおばる凰が、唐突に話しかけてくる。

「今朝、葵に元気がなかったんだけど、紅に心当たりはある？」

ぶほっ。
思わず噴き出しそうになった俺は、それを必死でこらえつつ、ごまかす手段を考える。
…そうだ、あれを使おう。

「ああ。なんか、自分のせいで一夏と箒がケンカしたんじゃないか、って気にしてたから、それかも。あの後、仲直りは…できたようだな。」

一夏と箒を見る。箒は、自分の弁当にあった唐揚げを、一夏に分け与えてる最中だった。

「まったく、もう少しあのままでも良かったのに。」

「ええ、本当に。見てると、なんだかイライラしますわ。」
「あー…。それは同感だな。リア充爆発しろ。」

そう言いながら、ジト目で一夏を睨む凰、セシリア、俺。シャルルは、「爆発…？」とか言いながら、何かを考えているようで。

「まあ、お互いに悪い所があったからな。今回は、おあいこってことで。な、箒。」
「う、うむ…。紅也にも…その、なんだ。迷惑をかけたな。」

まあ、この様子を見れば、どう考えてもミッション成功だろう。サクサク、とカツサンドを咀嚼する。うん、脂っこすぎなくていいな。

「なら良かった。これで、一夏も安心して訓練ができるな。」
「？　どういう意味だよ。」
「だって、ケンカ中だったら、訓練が本気の試合に変わりかねないからな。そうなったら、ケガのリスクは倍増だぜ。」
「む。私は、そのようなことはしないぞ！」

声を荒げる箒は無視して。

「そうだ、シャルルも一緒に訓練しないか？個人トーナメントもあるし、お互いに磨き合おうぜ。」
「え？いいの？」

シャルルを勧誘し、了承も得る。
…作戦は、順調に進行中だ。

「ちょっと紅！今回は、私も参加させてもらうわよ！」

「ああ。もちろん。凰も、一緒にやろうぜ。…負けねぇぞ。」
「ふん、こっちこそ！」

そういや、凰は前回仲間はずれだったか。今思うと、悪いことをしたかな？
まあ、そのおかげで葵と仲良くなったんだから、よしとするか。

「それにしても…。ずいぶんすごいメンバーが集まったよな。」

ぽつり。

一夏が、唐突につぶやく。

「む？どういう意味だ？」

箒が尋ねるも、ほかの全員は意味がわかっているようで。

「箒さん、よく考えてくださいな。ここには、専用機持ちが４人。遠距離型のわたくしと、近・中距離型の鈴さん。そして二人を守る騎士（ナイト）である、近距離型の一夏さんと紅也さん。完璧な布陣ではなくて？」
「下手すりゃ、戦争が起こせるよな。どうする？ラーズグリーズ隊とでも名乗るか？」
「紅。なによ、そのセンス…。そういえば、シャルルのＩＳって、どんな機体なの？やっぱり近距離型？」
「ふふ、それは後のお楽しみだよ。」

そのまま話題は、今日の一夏の特訓内容へと移っていく。葵の話題は、完璧に消滅したようだ。これで、ひとまず安心だな……。

◆

〈ｓｉｄｅ：山代　葵〉

お昼休み。
紅也と鉢合わせしないように、今日も私は食堂へ行く。
あいかわらずの混雑で、席を見つけるにも一苦労。でも、よく見ると、隅っこの席に、不自然に空いている一角がある。

――ちょうどいい。

カルボナーラと味噌汁、酢豚を注文し、その席へと向かう。
当然のように、そこには先客がいた。昨日写真で見た、銀髪眼帯女。
たしかドイツの代表候補生、ラウラ・ボーデビッヒだっけ。

「…失礼する。」
「……」

返事はない。まあ、最初から返事を聞く気はないけど。
ラウラはその態度が気に入らなかったのか、顔を上げて…。

――？　私の顔を見ている？なんで？

視線を迎撃するかのように、私も顔を上げる。
翠と紅の瞳が、交錯した。

「……」
「……」

互いに無言。…用があったんじゃないの？
酢豚とカルボナーラを一緒に混ぜ、一口サイズにして放り込む。
……？気のせいかな？視線がそれた気がする。

ぐちゃぐちゃ。もぐもぐ。

無言で食事を続ける。おいしいな。

「……お前。」

どれくらい沈黙が続いただろう？
唐突に、ラウラが話しかけてきた。

「私は、お前を見たことがある。」
「……」

そんなことを言われても、私はコイツを知らない。

「お前は…。昔、ドイツにいたな。」
「…知らない。」
「とぼけるな。昔、お前の資料を見た。」
「奇遇。私も、アナタの資料を見た。」

……。

三度（みたび）の沈黙。ただし、今回は、目を逸らさないままに。

「お前は、私と同じ存在だ。」

はっきりと。

ラウラは私にそう言う。あくまで淡々と。事実を告げるかのように。

「…そうかもしれない。」

私は、目的のために、命じられるままに戦う者だ。目の前のラウラも、軍人ならば、おそらくそうだろう。

でも。

「でも、格が違う。アナタは、空っぽ。」

私には、紅也がいる。鈴音もいるし、ついでに、簪もいる。

目標とする母がいる。尊敬する父がいる。

だけど。

コイツには、何もない。

一緒に食事する友達もいない。親の顔も知らない。

それは、とても悲しいことだ。だから、同じような存在である（と、考えた）私に話しかけたのか？

「っ！　何だ…。何だ！その目は！！」

こちらを睨みつけるラウラに、もう興味はない。

じゃあね。

縁があったら、また話そう。

第３１話　では…ミッション・スタートだ（後書き）

ラウラと葵の会話。
今の時点では意味不明だと思いますが、ここでもすれ違ってます。
ネタばらしは、いずれラウラｓｉｄｅで。

第３２話　紅也の悪癖！？とりあえず撃ってみよう。（前書き）

ほとんど原作通りの、第３２話です。
没タイトル、「はじめてのしゃげき」。そこがメインじゃないんですけどね。

では、始まります。

第３２話　紅也の悪癖！？とりあえず撃ってみよう。

作戦開始から、５日がたった。
あの後も、何度かヒヤリとする場面はあったが、その度にハッと気づき、阻止し続けたため、葵の存在はバレてない。
後はシャルルを部屋に連れ込めば、ミッション・コンプリート。

…こうして書くと、何だか変態みたいだ。

ともかく、この作戦が成功すれば、俺は晴れて「奇策士・こうや」を名乗れる。
さて、今日こそ頑張るぞー！ちぇりお！

◆

「ええとね、一夏がオルコットさんや凰さんに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を把握していないからだよ。」
「そ、そうなのか？一応わかっているつもりだったんだが……。」

土曜日。
いつものメンバー（一夏、箒、セシリア、凰、シャルル）でアリーナを使い、実習を行う俺たち。今は、一夏とシャルルが手合わせをして、その反省会の最中だ。

「うーん、知識として知っているだけって感じかな。さっき僕と戦

ったときもほとんど間合いを詰められなかったよね？」
「うっ……、確かに。『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』も読まれてたしな……。」

え？アレ、読まれてないとでも思ってたのか？
相手が撃ち終わった直後に使用、って…。バイハのボス戦かよ！って、思わずつっこみそうになったぜ。

「一夏のＩＳは近接格闘オンリーだから」
「ブレオンと言え。高尚に。」

あいにく、そこは譲れない。

「…だから、より深く射撃武器の特性を把握しないと対戦じゃ勝てないよ。特に一夏の瞬時加速って直線的だから反応できなくても軌道予測で攻撃できちゃうからね。」

うわお。流された。
シャルルのスルースキルは、数日のうちに相当上がった。そのへん、俺たちに溶け込んできたと言えるだろう。

「直線的か……うーん。」
「あ、でも瞬時加速中はあんまり無理に軌道を変えたりしない方がいいよ。空気抵抗とか圧力の関係で機体に負荷がかかると、最悪の場合骨折したりするからね。」
「……なるほど。」

しかしシャルルのやつ、教えるのが上手いな。俺よりよっぽど「先生」らしいじゃないか。
一夏のやつ、また腕を上げるな。何せ、いままでの教官は…。

一番！非理論的擬音語で説明する女、箒。
二番！理論理解実践主義、セシリア。
三番！感覚主義者、鳳。

だったからな。優秀かもしれないが、師匠には不向きだな。
ちなみに俺の師匠は、習うより慣れろ、見て覚えろの古典主義者だった。
そのせいか、俺も一夏と箒に対しては同じスタンスをとってたぜ。

「ふん。私のアドバイスをちゃんと聞かないからだ。」
「わたくしの理路整然とした説明の何が不満だというのかしら。」
「あんなにわかりやすく教えてやったのに、なによ。」

三人の教官は、そんな一夏に不満タラタラであったようだ。

「まあ、落ち着けよ。教官が優秀でも、すべてが伝わるわけじゃねぇんだ。
だから、『君たちは悪くない。』」
「う、うむ。そうか…。」
「優秀ですか？そうですか…。」
「…って、紅！なに括弧つけてるのよ！」

む、鳳にはバレたか。
まあ、全部嘘って訳じゃないんだが…。

「一夏の白式って、後付武装（イコライザ）がないんだよね？」
「ああ。何回か調べてもらったんだけど、拡張領域（バススロット）が空いてないらしい。だから量子変換（インストール）は無理だって言われた。」
「たぶんだけど、それって――」
「ワンオフ・アビリティーに容量を食われてるんだよ。」

「――紅也、割り込まないでよ。」
「うるせぇ。さっき無視した罰だ。…話を戻すぜ。
前に話したような気もするが、ワンオフ・アビリティーってのは、第二形態（セカンド・フォーム）から発現するものなんだよ。…ここからは俺の推測なんだがな、白式には、第一形態からアビリティーを使用できるようにするプログラムが入ってるんじゃないか？それが、拡張領域を減らしてると思うんだ。」
「うーん、僕は、零落白夜自体の容量が原因だと思うけど…。」
「…まあ、ここで話したって、答えなんて出ねぇよ。これに答えられるのは、不思議の国の兎さんだけじゃないか？」
「うさぎ……？」

「まあ、今は考えても仕方ないだろうし、そのことは置いておこうぜ。」
「むう…。そうだな。」
「それもそうだね。じゃあ、射撃武器の練習をしてみようか。はい、これ。」

そう言ってシャルルは、手にした５５口径アサルトライフル、〈ヴェント〉を一夏に手渡した。

「え？他のやつの装備って使えないんじゃないのか？」
「普通はね。でも所有者が使用許可（アンロック）すれば、登録してある人全員が使えるんだよ。」

そのルールをぶっ壊すのが、ブルーフレームだよな。
改めて思う。理不尽な能力だと。

「――うん、今一夏と白式に使用許諾を発行したから、試しに撃ってみて。」

「お、おう。か、構えはこうでいいのか？」

銃器にビビったのか、一夏はへっぴり腰で、脇は大きく開き、目線はキョロキョロしている。シャルルも、少しあきれ顔だ。

「えっと……脇を締めて。それと左腕はこっち。わかる？」

一夏に近づいたシャルルは、手取り足取り（文字通り、体を動かして）指導している。

「火薬銃だから瞬間的に大きな反動が来るけど、ほとんどはＩＳが自動で相殺するから心配しなくてもいいよ。センサー・リンクは出来てる？」

「銃器を使うときのやつだよな？さっきから探しているんだけど見あたらない。」

「うーん、格闘専用の機体でも普通は入っているんだけど……。」

「欠陥機らしいからな。これ。」

「１００％格闘オンリーなんだね。じゃあ、しょうがないから目測でやるしかないね。」

「…って、待て！そりゃ、いくらなんでも無理だぜ。」

「ん？やれないことはないと思うんだけど…。」

「わたくしも、そのくらい簡単だと思うのですが。」

そりゃ、そうだろうよ。二人とも射撃は上手いからな。

「ん？もしかして紅也、射撃が苦手なのか？」

……一夏ェ。

「ん～？　何？紅って、射撃苦手なんだぁ。」
「言われてみると、確かに射撃をしている描写は、今まで一度もなかったな。」
「箒！メタ発言禁止！」

凰はニヤニヤと、箒は腕を組んで、そう発言する。
くそう、鬼の首でもとったような顔をしやがって！！

「へぇ…。じゃあ、紅也も練習しないとね。」

シャルルぅ！なんでそんなに楽しそうなんだ！

「ほら、射撃武器を展開しなよ。」
「……ホイ。」

レッドフレームとガーベラを展開。空破斬の構えを取る。

「それ、刀だよね。銃は？」

にこにこ。
シャルルの笑顔が怖い。

「…持ってない。だから撃てｎ…」
「はい、これ。アンロックしてあるから。」

有無をいわさず、もう一丁のヴェントを手渡される。これで、逃げ道はなくなった。

「じゃ、二人とも。とりあえず撃つだけでもだいぶ違うから、やっ

てみてよ。」
「おう。じゃあ、行くぞ。」
「…へいへい。」

バンッ！！

「うおっ！？」

響く、火薬の炸裂音。一夏は、ずいぶん驚いてるようだ。

「ほら、次は紅也も…。…紅也？」

シャルルがナニカイッタ気がするが、俺には聞こえない。
アサルトライフルを腰だめに構え、体と一体化させるようにして、
トリガーを引く。

パパパパパパパパパァン！！

何発かまとめて発射。銃弾は、アリーナの地面をえぐる。
うん、いい性能だ。次は、何かウゴクモノに当ててみよう。

がちゃり。一夏に向け、ライフルを構える。

「お、おい。紅也？」

頬がひきつった一夏は、気にしない。あれは、タダノマトだ。

パパパパパパパパ……

「ハハハハハ！これで終わりだ！消えろ！消えろ！消えろォ！！」

連射。マトは回避行動をとるも、その手足に弾丸が吸い込まれていく。

「ちょ、紅也。ストップ！」

「動けぬようにして、パイロットは引きずり出して…」

パパパ…カチッカチッカチッ。

「…あれ、俺は何を？」

上空には、怯えた様子の一夏。近くには、銃身をつかむシャルル。
そして地上には、どこか呆然といった様子でこちらを見る三人娘が。

「…もしかすると、紅也は。」

「乱射狂（トリガーハッピー）？」

「銃が苦手な理由が、よくわかりましたわ…。」

そんなことを言っている。
…ああ、やっちゃったのか。

「てへっ☆　やっちゃった。」

「『やっちゃった』じゃ、ねえだろ！！マジで怖かったぞ！」

「あ、アハハ…。」

紅也に銃を持たせるのはやめよう。そう誓った一同であった…。

◆

「ねえ、ちょとアレ……」
「ウソっ、ドイツの第三世代型だ。」
「まだ本国でのトライアル段階だって聞いてたけど……。」

一夏の射撃指導が終わったころ、急にアリーナ内がざわつき始めた。ドイツ、という言葉にひっかかりを覚え、皆と同じところに視線を移すと、そこには、やはりボーデビッヒがいた。

「いや、ボーデヴィッヒだよ。」
「ｖとｂの発音なんて、どうでもいいんだよ。」

「……」

無言で接近してくるボーデヴィッヒは、ＩＳの開放回線（オープン・チャンネル）で一夏に呼びかけたようだ。白式に接近し、８を介してＩＳネットワークに干渉し、通信を聞き取る。

「……私と戦え。」
「イヤだ。理由がねえよ。」
「貴様にはなくても私にはある。
貴様がいなければ教官が大会二連覇の偉業をなしえただろうことは容易に想像できる。だから、私は貴様を――貴様の存在を認めない。」

教官。大会二連覇。
おそらく、織斑先生関連だろうな。あの崇拝っぷりは、異常だと感

じた。
…そういえば葵も、接触を受けたと聞いた。何でも、『オトモダチになりたくてやって来た』とか言ってたけど。意味わからん。

「また今度な。」
「ふん。ならば――戦わざるを得ないようにしてやる！」

おっと、こりゃまずいか！？

ちゃき。抜刀。ガーベラを正眼に構え、二人の間に割り込む。
そしてボーデヴィッヒのＩＳの左肩に装備された大型砲塔――《Ｎ．Ｇ．Ｉ製レールガン〈シヴァ〉に類似、直撃注意》と警告が表示される――が、火を噴いた。

「どうりゃ！」

一刀両断。加速された弾頭は、二つに分かれて後方に飛んでいった。
ガーベラ・ストレートは無傷。しかし、弾頭は頭部ヘルメットを掠め、ダメージを受けたパーツが量子化する。
バイザー越しではない。ボーデヴィッヒと俺は、直接顔を合わせる。

「…その眼。その眼で…私を、見るなあぁぁぁ！！」

激昂。手から刃を発生させた黒いＩＳは、俺に襲いかかろうとするも。

「そこの生徒！何をやっている！学年とクラス、出席番号を言え！」

スピーカーから響く、教師の声。私闘を止めに来たのだろう。いいタイミングだ。

「……ふん。今日は引こう。」

ボーデヴィッヒは、あっさりと戦闘体制を解除し、アリーナゲートへ去っていく。

「…一体何なんだ、あの情緒不安定女は。ひょっとして、今日はあの日…」

「「「「ストップ！下ネタ禁止！！」」」」

女子一同からツッコミを受ける。

…ん？今、絶対シャルル混ざってたよな？

第３２話　紅也の悪癖！？とりあえず撃ってみよう。（後書き）

ラウラ、山代兄妹を嫌う、の巻。
タッグマッチ、どうしようか…。一夏と戦わせなきゃいけないけど、
アストレイズとの戦闘も書きたい…。

第３３話　どんな理由であれ、立派な変態行為です。（前書き）

３３話です。
とうとう、シャルルの正体が――？
そのとき、一夏は、紅也は、そして葵は、どう動くのか！？

では、始めます。

第３３話　どんな理由であれ、立派な変態行為です。

「…あーあ、頭部小破。修理しないとな。じゃ、俺はもう上がるから。」
「僕もあがるよ。どのみちもうアリーナの閉館時間だしね。」
「おう。じゃあ、俺も。あ、銃サンキュ。色々と参考になった。」
「それなら良かった。えっと……じゃあ、先に着替えて戻ってて。」

俺がシャルルを疑う点、その3。シャルルは、俺たちと一緒に着替えようとしない。
いつもわざとらしく、何やら強引な理由をつけて、タイミングをずらすのだ。

…結局、あの後作戦に進展はなく、シャルルの正体を暴くことはできていない。
そろそろ、俺も我慢の限界だ。葵分が足りていない。

「たまには一緒に着替えようぜ。」
「い、イヤ。」
「つれないことを言うなよ。」
「つれないっていうか、どうして一夏は僕と着替えたいの？」
「というかどうしてシャルルは俺と着替えたがらないんだ？」

おお、一夏が押してる。
いいぞー。もっとやれー。そして後ろで燃えてる三人にボコられろー。

「どうしてって……その、は、恥ずかしいから……。」
「慣れれば大丈夫。さあ、一緒に着替えようぜ。」

「いや、えっと、えーと……」

言い訳切れか？もう一押しだ…と、言いたいところだが、時間切れだな。

凛がガントを連射すべく、魔力全開で迫ってきている。

ここは俺がフォローして、シャルルからの「頼れる度」を上げるべきだろう。

「そこまでだ、一夏。そんなに着替えをしたがるなんて、お前はやっぱり…」

「わー！ストップ、ストップ！！

こんなに女子がいるところで、そんなことを言うな！そもそも、前の誤解だって、解くのにどれだけ苦労したか…。」

「はいはい、誤解されたくなかったら、さっさと着替えに行きなさい。引き際を知らないやつは友達なくすわよ。」

凰が一夏の首根っこを掴み、俺を見る。

――ナイス、紅！

――グッジョブ、凰！

一瞬のアイコンタクト。凰はＩＳを足に部分展開し、ずるずると一夏を引きずっていった。

ＢＧＭはもちろんドナドナだ。本当は歌詞を書きたいが、作品を消されたくないので割愛。

「…なあ、シャルル。一夏のことで困ったことがあれば、愚痴ぐらいは聞いてやるぜ。」

「う、うん…。ありがとう、紅也。」

はにかむシャルル。その姿は、美少年というよりむしろ…。

「こ、紅也さん。もし、今の一夏さんと一緒に着替えるのがお嫌でしたら、そうですわね。わ、わたくしが一緒に…」

「行くぞセシリア。大丈夫だ、紅也は強い。」

「ほ、箒さん！自分で歩けますわ！離してくださいませ！」

一緒に…何だろう。すごくいい話な気がするが、聞いたら後悔しそうな気もする。

「…じゃあ、シャルル。俺、先に行くから。」

「うん…。じゃあ、後でね。」

◆

「はー、風呂に入りてえ……。」

俺が更衣室に入ったときの、一夏の独り言がそれだった。

何だ？シャルルに振られたから、今度は女湯を覗こうってか？

俺の中での一夏の評価は、一気に変態の域にまで落ちた…。

「いきなり覗き宣言とは。お前、ギャルゲー主人公の友達のアホキャラみたいだぞ。」

「うわぁ！？…紅也か、脅かすなよ。」

今の一夏はパンツ一枚。なんか、漢の最終装備って感じだな。

「さっさと着替えろ。俺も、今のお前と一緒に長居はしたくないんだ。」
「どういう意味だよ!?俺はノーマルだからな!!」
「なら、まずはその格好をやめろよ。」
その言葉で、一夏は着替えを再開。俺も、ＩＳスーツを脱ぎ始める。
「しっかし、紅也のスーツって、変な感じだよな。」
「あん?どこがだよ。」
「どこ、って…。なんつーか、全身タイツ?」
そう。俺のＩＳスーツは、首から下、手の先から足の先までをすっぽりと覆っている。
これは、全身装甲の特徴とも言える、稼働時の摩擦軽減のためだが…。説明メンドクサイ。
「よし、着替え終わり。紅也は……時間かかりそうだな。」
「うるせえ。今日は無理な姿勢で刀を振ったから、腕が痛いんだよ。普段は三倍早く着替えられるっつーの。」
背中のジッパーに手が…手が…届かない。
「あのー、山代君と織斑君とデュノア君はいますかー?」
「はい、えーと、織斑と山代はいます。」
…ん?この声、山田先生かな。
あの人のことだ。ノックせずに入ることくらいやりかねない。
こそこそと、ロッカーの中に入り、隠れる。

「入っても大丈夫ですかー？まだ着替え中だったりしますー？」
「ああ、ちょっと待ってください。俺はともかく、紅也は…」
「もう隠れてるから、大丈夫だ。」
「…だそうです。入ってください。」
「そうですかー。それじゃあ失礼しますねー。」

バシュッ、と圧縮空気が抜ける音がして、ドアが開いたことを教えてくれる。

「山代君…はどこかにいるんですよね。デュノア君は一緒ではないんですか？今日は織斑君と実習しているって聞いてましたけど。」
「あ、まだアリーナの方にいます。もうピットまで戻ってきたかもしれませんけど、どうかしました？大事な話なら呼んできますけど。」
「ああ、いえ、そんなに大事な話でもないですから、織斑君から伝えておいてください。ええとですね、今月下旬から大浴場が使えるようになります。結局時間帯別にすると色々と問題が起きそうだったので、男子は週に二回の使用日を設けることにしました。」
「本当ですか！」

一夏の声のトーンが、急に上がった。
風呂、入りたがってたもんなあ。じゃあ、しょうがないよなあ。
でも、手まで握る必要はないよなぁ…。

「嬉しいです。助かります。ありがとうございます、山田先生！」
「い、いえ、仕事ですから……。」
「いやいや、山田先生のおかげですよ。本当にありがとうございます。」
「そ、そうですか？そう言われると照れちゃいますね。あはは……」

前から思ってたんだけど、一夏って、けっこう強引だよな。
…新聞部に、情報売っちゃおうかな。そしたら、明日の一面は差し替えだ。
タイトルは、「教師と生徒、夕暮れの更衣室で密会！」ってところか。

「……一夏？何してるの？」

来た！シャルルだ。
あぶねぇ、もう少しで飛び出すところだった。

「まだ更衣室にいたんだ。それで、先生の手を握って何してるの？」
「あ、いや。なんでもない。」

一夏が、山田先生から手を離す。二人とも、どこか恥ずかしそうだ。

「一夏、先に戻ってって言ったよね。」
「お、おう。すまん。」

む、これはプレッシャー！？シャルルか！

「喜べシャルル。今月下旬から大浴場が使えるらしいぞ！」
「そう。」

シャルルはＩＳを解除し、タオルで頭を拭き始める。ごしごし、と。
やっぱり、機嫌が悪そうだ。そのせいで…。

シャルルは、俺の存在を忘れている。

「ああ、そういえば織斑君にはもう一件用事があるんです。ちょっ

と書いて欲しい書類があるんで、職員室まで来てもらえますか？白式の正式な登録に関する書類なので、ちょっと枚数が多いんですけど。」

「わかりました。――じゃあシャルル、ちょっと長くなりそうだから今日は先にシャワーを使っててくれよ。」

「うん。わかった。」

「じゃ山田先生、行きましょうか。」

二人分の足音が遠ざかる。これで更衣室に残っているのは、俺とシャルルの二人だけ…。

「……はあ。何をイライラしてるんだろ、僕…。」

ため息をつくシャルル。その姿は、まるで恋する乙女のようで…。

だが男（？）だ。

もうすぐ分かる。シャルルは男か、女か。

今分かった。俺の正体を探ってた時の一夏やセシリアは、こんな気持ちだったんだろう。

だが、俺は奴らとは違う。下手な失敗はしない。

なにせ俺は、かつてイギリスのＩＳ訓練施設や、Ｎ．Ｇ．Ｉの研究施設に潜入した実績を持つ、凄腕のスパイだ。まあ、後者は母さんに手伝ってもらったけど。

シャルルは、ＩＳスーツに手をかける。いよいよだ。いよいよ、シャルルの秘密が明かされる――

……後になって思う。このときの俺は、変態一直線だった、と。

◆

結論を言おう。
シャルルの胸部には、がっちりとしたコルセットがはまっており、そこから溢れるたわわな胸が、はっきりと見えた。
下を脱ごうとしたあたりで、俺は目線を逸らした。
胸は、直接見なかったからセーフだ。うん。

そして今、俺は――

「…言い訳は？」
「あれは、調査であって、覗きでは…。」
「問答無用。…ド変態。」
「うわあぁぁぁぁぁ！！！」

自分の部屋で正座を強いられ、葵に頭を踏みつけられていた。

あの後、葵と連絡を取って部屋で合流した俺は、意気揚々と、戦果を報告した。
当然、見てきたことすべてを語ったため、シャルルのセミヌードを見たことがばれ…。今に至る。

「…あ、でも。」
「？　言い訳は聞かな…」
「胸は、たぶん葵と同じくら…」
「死ねぇぇぇぇぇ！！」

あー、葵の絶叫なんて、久しぶりに聞いたな…。
結構レアだよな。葵は、感情を表に出すタイプじゃないのに…。
あー、景色がスローモーションだ。迫る蹴りや、足の根元に存在する下着まではっきり見える。
とりあえず黒じゃなくて、お兄ちゃんは安心だぞー。
どぐし。

◆

〈ｓｉｄｅ：シャルル・デュノア〉

…とうとう、バレてしまった。
同室だった一夏が、シャワールームにボディーソープを置きに来たとき、その…裸を見られてしまった。当然、いつものコルセットを外してあったため、女の部分を見られてしまった。
当事者である一夏は、すでに外に出ている。おそらく、混乱の只中にいることだろう。

（あーあ。これで僕は終わりだ。真相がばれたら、本国に強制送還されて、身柄を拘束される。デュノア社は…。まあ、どうでもいいや。）

今の僕にとっては、何もかもがどうでも良かった。
一夏と紅也の情報を探れと言われ、失敗したことも。
これによって自分の未来が、永遠に閉ざされることも。

二度と、皆に会えなくなることも――――

イヤだ。

それはイヤだ。
もっと、ここにいたい。
もっと、皆と一緒にすごしたい。
もっと、一夏と一緒に……。

（…そうだ。紅也なら、何て言うんだろう。）

『何か悩みがあったら、いつでも相談しに来てくれよ。』
『…なあ、シャルル。一夏のことで困ったことがあれば、愚痴ぐらいは聞いてやるぜ。』
『私は２４時間３６５日、誰からの相談でも受け付ける！』

紅也の言っていた言葉を思い出す。…アレ、最後のは違うような…？

でも。

（相談に乗る、って言ってくれたもんなぁ…）

あのときの紅也の顔。とても真剣だった。
本当に何でも聞いて、受け入れてくれる。そんな気がした。

（…よし。）

コルセットを取り付け、その豊満な胸を隠す。
今はまだ、女だってことまでは言えないけど。
まずは、話してみよう。

◆

と、いうわけで、１０１７室の前に来たんだけど。

「死ねぇぇぇぇぇ！！」

「そげぶっ！？」

…なにやら、お取り込み中のようだ。

アレかな？「ふらぐ体質」って奴かな。一夏と同じで。

どうしよう。帰ろうかな。そんなことを考えていると…。

がちゃり。

ドアが開いた。僕の存在に気づいたのか、それともたまたまか。

どちらにせよ、もう「逃げる」という選択肢は取れない。

「ん、シャルルか。どうしたんだ？…まさか、一夏に襲われたとか？」

紅也の声がする。本人としては冗談のつもりだろうが、微妙に当たってるから笑えない。

どうしよう。緊張して、紅也の顔が見れない。

「…何か、あったんだな。とりあえず、入れよ。」

茶化すような態度から一転、まじめな声音になった紅也。
場の雰囲気が明らかに変化し、静かな廊下に緊張感が張り詰める。

「――紅也。」

意を決して、僕は顔を上げ――――そしてフリーズした。

紅也の目の上には、それはそれはきれいな青たんができていた。

――ああ、神様。
あなたは、シリアスが嫌いなんですね？

第３３話　どんな理由であれ、立派な変態行為です。（後書き）

覗きは犯罪です。許されるのは、マンガやギャルゲーの中だけです。

「はっ、こうなったら俺一人でロリロリハンターズを旗揚げしてみせるぜ！」

「ド変態。」

…と、こんな話でした！

…ちなみに、作者は今年で（２１）になりました。

第３４話　明かされる事実　崩れた計画（前書き）

はい、第３４話です。

タイトルの意味。崩れたのは、誰の計画なのか！？

では、始まります。

第３４話　明かされる事実　崩れた計画

「死ねぇぇぇぇぇ！！」
「そげぶっ！？」

葵に顔面を殴られた俺は、ごろごろと床を転がる。
ううぅ…目が痛い。こりゃ、絶対腫れてるな。まさに、目の上のたんこぶ。

《全く笑えないぞ。それより、客だ。》

転がった先にあった８のモニターに、こう表示されていた。
…客？こんな時間に来るとは、凰か？
とりあえず、確認してみるか。

がちゃり。

そこにいたのは予想外、しかし待ちわびていたはずの、シャルル・デュノアその人だった。

「ん、シャルルか。どうしたんだ？…まさか、一夏に襲われたとか？」

冗談めかしてそう問いかけるも、シャルルはうつむき、無言のまま。
――こりゃ、真剣（マジ）な話だな。意識を、仕事モードに切り替える。

「…何か、あったんだな。とりあえず、入れよ。」

少々大げさに、部屋へと招くポーズをとる。しかし、それにもシャ

ルは無反応で。

「――紅也。」

唐突に彼女は顔を上げ、俺と目をあわせ――その動きを止めた。
何だ?俺の顔に、何かついてるのか?

「…ぷっ。」

笑った?あのシャルルが、人の顔を見て笑った、だと?
やっぱり、顔にごはんつぶでもついてたか?

ぺたぺた。

自分の顔を触ってみる。そして、その手がまぶたに当たったとき――

「痛たたたたたたたぁ!?」
「ぷっ…あっははは!」

そうだ!腫れてるんだ、顔が!
こら、シャルル。笑うな。シリアスが台無しだ。

「はは、笑ったな?ちょっとは元気でたか?」
「え?あ、ごめん、笑っちゃって。
――うん。少し、元気がでてきた。入っていいかな?話したいことがあるんだ。」

俺とシャルルは部屋の中へ。葵は、すでにベッドに座っていた。
…って、待て!葵の存在がバレたら、作戦は失敗――
いやまて私。もうミッション・コンプリートしてるから、別にバレ

ても…。

「君が、オーストラリアの代表候補生の山代さん？始めまして。」
「…山代　葵。よろしく、シャルル。」
「いきなり呼び捨て？」
「…紅也が、そう呼んでるから。」

「――って、ちょっと待て！何で葵を知ってるんだ！」

葵のやつ、まだ名乗ってないよな！？

「え？だって、モルゲンレーテのＨＰに、普通に情報載ってたし…。」
「しまったあぁぁぁぁぁぁ！！」

迂闊だった！シャルルが俺を探りに来たなら、俺の周りを調べないわけねえだろうが！
じゃあ、俺の完璧な作戦は、最初っから破綻してたのか！？

「…馬鹿。」
「ひどいぜ、葵！」

◆

カチャリ。

「…で、シャルル。話って何だ？なんなら、葵は外させようか？」
「いや…。せっかくだから、一緒に聞いてよ。」
「…分かった。」
「それでいいなら、話してくれ。」
「うん。じゃあ、話すね。
実は、僕はずっと、隠し事をしてたんだ。それがさっき一夏にバレて、どう接すればいいか、分からないんだ。…今までどおりには、接することができないと思う。
僕は、どうすればいいかな？」

シャルルの悩み。
…どう考えても、一夏に、女であることがバレたんだろうなぁ。
シャワー室でばったり会って…とか？それ何てエロゲ？

「じゃあ、俺から質問をひとつ。…これは、結構ヤバい話か？」

自分で聞いといてなんだが、どんだけ白々しいんだよ！と思う。

「…うん。下手すれば、転校することになるかも。」

転校じゃなくて、強制送還だろ。よくもまあ、うまい言葉を選ぶもんだ。

「それは、穏やかな話じゃねぇな。転校、あるいは退学ともなると…スパイ行為でもしたのか？」
「！　…はあ。紅也に隠し事はできないね。
そうだよ。僕は、一夏と紅也のデータを盗むために、転校してきたんだ。父親の命令でね。」

そこは認めたか。やはり、相当追い詰められてるようだ…。

「それが、隠し事か？」
「…うん、そうなんだ。」

アハハ…。と、いつもと違う、乾いた笑みを浮かべるシャルル。
…こいつも、もう限界だったのかもな。バレても、バレなくても、いつか告白しただろう。
元々、こんなことには向かない、やさしい性格の子だったんだ…。

「嘘だっ！！」
「！」

カナカナカナカナカナ……

「まだ、『話したりない』って顔をしてるぜ。」
「……」

シャルルは再び俯き、沈黙。
…ネタに走っただけなんだが、ビビリすぎだ。
まあ、最初にあのシーンを見たときは、俺もビビったが。

「実は…。僕は…、男じゃ、無いんだ…。」

カチッ。

「…録音終了。」
「よし、よくやった、葵。
はー、疲れた。まったく、慣れないことはするもんじゃねぇな。」
「…え？　え？　えええぇぇぇ！？」

状況の変化についていけないシャルルは、混乱しているようだ。

「シャルルの肉声。自白。デュノア社社長の関与。
全部、証拠。」
「よっしゃ、じゃあ、任務完了だ。こっからはオフレコで話そうぜ。」

そう言って、まだ混乱中のシャルルの肩を両手で掴み、目を合わせる。

「シャルル…。」
「え!?　こ、紅也?」
「…すまなかった!!」
「…へ?」

頭を下げる。
思えば、俺はシャルルに対して、ひどいことをしてきた。
最初からスパイと疑ったり（まあ、間違ってなかったけど）。
打算ありきで接近したり（まあ、お互い様だったけど）。
変な作戦でハメようとしたり（最初から破綻してたけど）。
全部、俺に非があると言える。

「俺は、お前を疑ってた。最初から、スパイだと思ってた。
笑顔の裏で、どう正体を暴こうか考えてた。友達やってるフリをして、ずっと……。」
「紅也…。」

動揺した目で、こちらを見るシャルル。その目には、うっすらと涙

が浮かんでいた。

「だから…。ゴメン。」

「……何だ。紅也も、いっぱい嘘ついてたんだ。」

その顔は、ひきつっていて。でも、どこか笑っているようだった。

「アハハ…。おあいこ、だよ。僕のウソと紅也の嘘で、おあいこだ。でもね。一つだけ聞かせて。僕は、紅也のこと、友達だと思ってる。…紅也にとって、それは、『友達やってるフリ』だったの？」

「…いや。俺は…。俺も、お前は友達だと思ってる。」

「ふふ…。それだけ聞ければ、十分だよ。」

今度は、完全な笑顔で笑うシャルル。その表情に、俺も釣られて笑顔になる。

「……」

葵は何か言いたそうだが、頼むから今は何も言わないで。

◆

「…で、聞いてもいいかな。どうして、僕の秘密が分かったの？」

感動の和解から一段落した後、俺たちとシャルルは、改めて話し合っていた。

「スパイって点は、最初から疑ってた。」
俺もそうだもん。
「女だってことは、たまたま気がついた。まず見た目。一夏に手を握られたときのしぐさ。一夏と着替えない。シャル子と呼んだときの過剰反応。嫁さん発言への反応の遅さ。それから……」
「も、もういいよ！とりあえず、バレバレだったって事は、よく分かったから！！」
シャルル、再び涙目の巻。
「…それだけじゃない。」
「…あ、葵さん？」
あれ？葵が、何か怖いよ？
ひょっとして、アレを言っちゃう気？やめてよ。
もういいじゃん。これで、お互いに隠し事はないことになってるんだよ。
握手して、別れて、また明日、で。それでいいじゃん。
「決定的だったのは、紅也が着替えを――」
「わー！わー！わー！」
知らない知らない知らない！
聞かない聞かない聞かない！
「？　着替え？」
「覗いた。」

「！　…いつ？」
「さっき。」
「……誰が？」

びっ。
葵の、ほっそりとした白い指先が、俺を指差す。

「…見たの？」
「……」

ニコニコした、しかし先ほどとは種類の違う笑顔のシャルルを前に、俺は無言を貫き通す。
目の前にいる、コイツは誰だ？本物のシャルルは、どこへ行った！？

「言い訳は？」

むう、この私を怯ませるとは…。なんというプレッシャーだ！
ヤバイ。ここで返答を間違えたら、デッドエンド&タイガー道場直行コースだ。
虎竹刀で叩かれる！ロリブルマになじられる！
そして、新たな世界に目覚めてしまう――！！

「…コルセットを見ただけだから、セーフ……」
「「アウト！！」」

葵は右、シャルルは左の頬を、それぞれはたく。この顔は、まるで…。

「アッチョンブリケー！！」

「…紅也のえっち。」
その言葉が、俺のピュアな心にざっくり刺さった。

◆

「さて、シャルルの悩みはよく分かった。」
「…紅也、変な顔。シリアスが台無し。」
「お・ま・え・の・せ・い、だろうが！つーか、そのセリフ、根に持ってたのか！？」
「…そんなことない。」
「うーそーだ！今、間が空いてたぞ。」
「ふふっ、二人とも、仲がいいね。」
「「当然！」」
「…そこは、普通は『なんだって！？』っていうところだよね…。」
話が脱線しすぎだ。時間ないから、巻いていこう。

「さて、シャルルの悩みはよく分かった。」
「そこからやりなおすんだ…。」
「この件が明るみに出たら、本国に強制送還されるんだろ？シャルル自身は、どうしたいんだ？」
「僕は…。
僕は、ここで、みんなと一緒にいたい。今のまま、学園生活を続けたい。」

そう言いきったシャルルの顔は、迷っていながらも、確固たる決意を秘めている。
…答えは得た、か。なら、早速商談に入ろうか。

「シャルル。俺は、その願いを叶えることができる。
…だけど、タダで聞いてやるわけにはいかねぇ。俺は、企業の人間なんだ。」
「…条件は、何？僕は、この願いを叶えるために、何でもやるよ。」

「いい返事だ。じゃあ…。

俺と契約して、モルゲンレーテの操縦者になってよ！！」

第３４話　明かされる事実　崩れた計画（後書き）

明かされる事実＝？シャルルは女、？葵を知ってた

崩れた計画＝？シャルルのスパイ行動、？木下秀吉作戦

と、いうことでした。

次回、悪魔の契約に対し、シャルルは――

第３５話　契約（前書き）

はい、第３５話です。

書きあげるのに思ったよりも苦戦し、字数も少ないです。

――まあ、相棒（劇場版？）と刀語を見てたせいなんですけどね！

では、始めます。

第35話　契約

「俺と契約して、モルゲンレーテの操縦者になってよ!!」

企業人としての顔で、俺はシャルルに語りかける。

「えっと…。それは、僕を引き抜きたいってこと？
…でも、僕はデュノアの呪縛からは逃げられない。そもそも、ＩＳコアの譲渡・取引は禁止されて――」

シャルルがごちゃごちゃ言ってるが、俺は気にしない。

かちゃり。

先ほどの会話を録音したものを、無言で再生する。

『僕は、一夏と紅也のデータを盗むために、転校してきたんだ。父親の命令でね。』

『僕は…、男じゃ、無いんだ…。』

「…これで、僕を脅迫する気？」

シャルルから発せられるのは、まぎれもない怒気。

それを受け流しつつ、俺は肩をすくめる。

「惜しいな。脅迫するのはシャルルじゃない。――デュノア社だ。」

このときの俺は、かなり悪い顔をしていたと思う。

◆

「――つまり、この音声を使って、デュノア社と『合併』する。」
「ふふ…。それじゃあ、『吸収』だよ？」
「人聞きの悪いことを言うなよ。」
「…事実。」

そう言いながら、俺は8をセッティングし、モルゲンレーテ本社へと通信をつなげる。

《よし、エリカに繋がったぞ。モニターに映す。》
「サンキュ、8！」
「…エリカさん、聞こえる？」

葵が呼びかける。画面にはまだノイズが走っているが、音声が聞こえてくる。

「……ケロ…の最適…は済んだ…ら、後はマガ…イ……チの調節を…
…あら、葵ちゃん。どうしたの？ブルーフレームの強化装備なら、順調に製造中よ。」

映し出されたのは、格納庫。奥の方で、黒い機体が整備を受けていた。

「今日は、それじゃない。紅也が。」
「ん？ああ、紅也。どうしたの？」

「エリカさん。実は、例のスパイの件で、進展がありました。」

スパイ、という言葉に反応し、シャルルがびくり、と肩を震わせる。が、それを見なかったことにして。

「本人から自白がとれました。デュノア社の社長の差し金であるとの証言も出ています。

…俺としては、彼…。いえ、彼女を保護、引き抜きしたいのですが。あちらとの交渉をお願いできますか？」

「…へえ。彼女、ＩＳ操縦者よね。ＩＳコアの取引は、禁止されてるけど？」

「ＩＳコアの共有は、可能ですよ。」

「ふふ、言うようになったじゃない。

…いいわ！データを寄越しなさい。――ユン、わたし、ちょっとフランスに行ってくるから、この子の整備、頼むわね。」

「ええ！？ちょっと、しゅに～ん！！」

ブツッ。

通信が切れた。

「…さて、これでこの件は大丈夫だ。

デュノア社とモルゲンレーテは合併して、操縦者であるシャルルは、モルゲンレーテに『出向』することになる。」

「…そうしたら、モルゲンレーテが守る。」

「二人とも…。」

「この件の責任は、すべて社長に被ってもらおう。なあに、子供を守るのは、親の義務だぜ。」

ククク。

やっぱり悪い笑みを浮かべ、おれは小さく笑う。
葵も…笑いをこらえるような表情。そんなにツボにはまったのか？
「…はあ。紅也はすごいね。僕の悩みを、こんなにあっさり解決するなんて。」
「気にすんな。こっちとしても、得るものは大きいんだ。
豊富な武装データに、優秀なＩＳ操縦者。お互いの利益が一致した結果だぜ。」
「ふふ、そういうことにしておくよ。」
その笑顔に、もう影はない。
精神的にも、肉体的にも、完全に開放されたのだ…。

◆

あの後、シャルルは自分の部屋へと戻っていった。
シャワー室で一夏と鉢合わせた後、何も説明せずにここまで来たのだそうだ。
早めにフォローをいれておかないと、面倒なことになるぞ。
「さて、遅くなったけど、飯でも食いに行こうぜ。」
「…うん。」
俺たちは食堂へと向かう。
これで問題が一つ片付いた。今日は、おいしく夕食が食えそうだ。
さて、何を頼もっかな～？今日くらい、奮発してもいいかな～？

そして、食堂にたどり着くと、ちょうど一夏と箒とセシリアの三人が食事をとっていた。
…ありゃ、シャルルとは入れ違いか？ミスったな。

「…こんばんは。」
「よう。お前らも、今飯だったのか。」

「うむ、そうだ。」
「まあ、箒さんは四食目ですが…。」
「シャルルは…胸が…ブツブツ。」

――はあ。一夏が壊れてる。このままだと、余計な情報が漏れかねねぇな。

「葵。」

コクリ、と頷き、葵は一夏の背後に立つ。
そして。

ゴスッ！

一夏の後頭部に、重い手刀を喰らわせた。

「あ、葵！一体何を…」
「葵さん！一夏さんに何てことを…」

二人が騒ぐが、大丈夫。別に、ケガさせたいわけじゃないからさ。

「…テレビと同じ。」
「「……は？」」
「叩けば直る。」
「…それは、ブラウン管テレビの話ではなくて？」
「今は、全てデジタルテレビだろう。」
「そう決めつけるなよ。世の中には、ブラウン管をこよなく愛する中年おじさんがいるかもしれないだろ？」

…と、そんな会話をしてる間に、一夏は目を覚まし。

「…は！？こ、ここは？何で俺は食堂にいるんだ！？」
「…ほら。」
「コイツは、今のテレビ以下の性能（スペック）なのか…。」
「い、一夏！そんなことより…」
「わたくしたちと食事に来たことを、覚えてませんの！？…あんなに、がんばりましたのに…。」

目に見えて落ち込み始める箒とセシリア。何か…あったんだろうなぁ。

「ほら、何があったかは知らんが、とりあえず食おうぜ。食事中に余計なことは考えるなよ。」
「ん？なーんか、思い出しそうなんだけど…。ま、いいや。」
「…知らなくていいこともある。」

そうそう。
今騒がれても困るから、しばらくはおとなしく飯を食ってくれ。

「…で、一夏にどんな色仕掛けをしてたんだ？おふたりさん。」

「い、色…。そ、そんなことするわけないだろうが！」
「そ、そうですわよ、紅也さん！そんなはしたない女だと、思わないでくださいな。」
「…挙動不審。」
ある意味いつも通りに、今日という日が終わっていく。

◆

「ハーイ、こんにちは。モルゲンレーテの技術主任、エリカ・シモンズよ。」
「…デュノア社社長、アルベルト・デュノアだ。ナメられたものだな。このような取引の場に、技術主任ごときをよこすとは。」
「あら、モルゲンレーテは国営企業ですわ。民間企業の社長ごときと、対等に考えないでくださいな。」
両者の間に、火花が散る。

――ここはフランス某所、デュノア社、応接室。

「…そもそも、なぜ今更、合併などという話を持ち出したのだ？知っての通り、わが社には第三世代の技術などない。そんな企業と提携するメリットなどなかろう？」

「あら、何を勘違いしてらっしゃるの？」
「…何？」

エリカは、懐から何かを取り出し、再生する。
それは、紅也と葵が録音した、シャルルの証言データであった。

「あなたの会社にはＩＳコアがあり、娘さんは優秀な操縦者。吸収する理由など、それだけで十分ですわ。」
「なん…だと…。」
「そもそも、あなたは私とですら対等ではありませんわ。この場ではどちらが上か。その程度も理解できないのですから、経営危機などに陥るのです。…まだ、犯罪者にはなりたくないでしょう？」
「ぐうぅぅぅ…。」

密約は進んでいく。

「では、こちらからの条件を出します。
？デュノア社保有のＩＳコアを、モルゲンレーテと共有すること。
？テストパイロットの出向およびテストデータの譲渡。
？現デュノア社経営陣の変更。
…以上ですわ。もちろん、呑んでいただけますよね？」
「ふ、ふざけるな！これでは、まるで占領ではないか！第一、このような条件が表に出れば、貴様らとてただでは…」
「ご安心ください。今日のような交渉など、我々にとっては何度も通った道ですから…。」

何も特別なことではない。
モルゲンレーテの歴史は、買収と脅迫の繰り返し。
今日の取引もまた、取るに足らない出来事であるのだ……。

第３５話　契約（後書き）

…さて、こんな引きで申し訳ありませんが、ストックが切れ、そろそろ休暇も終わるので、ここから先は不定期更新となります。

一週間に一回は更新するつもりなので、次話はしばらくお待ちください。

第３６話　葵とボーデヴィッヒ。　クールキャラかぶり（？）対決！（前書き）

お久しぶりの、第３６話です。
今回、葵のキャラが崩れます。紅也の妹だから、こうなってもしょうがないか…？

第３６話　葵とボーデヴィッヒ。　クールキャラかぶり（？）対決！

（――山代　葵。そして、山代　紅也…）

暗い闇の中、モニターからもれる光だけが、部屋を照らす。

（あの目…。見たことがある…。）

モニターに映されたのは、ドイツ軍の極秘資料。
そこには、「極秘」と書かれた資料と、葵そっくりの女の写真があった。

（やはり同じだ…。『最初の一人』と…。）

彼女は、その顔を睨みつける。自分と同じ、造られた存在でありながら、自分を見下したその顔を――

◆

翌日、教室にて。

「ねえねえ、知ってる知ってる？あの噂。」
「飯田さん？何の話ですの？」
「それがねそれがね、とびっきりのいい話でね。」
「何よ！もったいぶらないで言いなさいよ。」

「実は実は、月末の学年別トーナメントで優勝したら織斑君か山代君と交際できるらしいよ。」
「そ、それは本当ですの！？」
「う、ウソはついてないでしょうね！？」
「いーや。ウソはついてねぇけど、本当ではねぇな。」
「「きゃあぁぁぁぁぁ！？」」

セシリア、凰、飯田さんが叫ぶ。
少し脅かすつもりだったが、どうやら予想以上に効果があったようだ。

「こ、紅也さん？い、いったいいつから…。」
「そ、それより紅！あんた、今の話…」
「聞いた、っていうより知ってたよ。一万年と二千年前から。」
「え！？そ、そんなに前から…。」
「いや、落ち着きなさいセシリア。ただのネタだから、真に受けちゃダメよ。
要するに、ずっと前から知ってたってことよね。」
「正解だ、凰。スーパーひとし君をあげよう。
…まあ、俺に関しての噂は否定するが、一夏の噂については知らないな。多分、本人も知らないだろうな。」
「じゃあ、本当に、一夏とつきあえ――」
「俺がどうしたって？」
「「きゃあああっ！？」」

ひょこっ、と。
シャルル（男装）と共に現れた一夏が、会話に乱入する。
俺の時より、驚きが少ないな。…勝った！！

「で、何の話だったんだ？俺の名前が出ていたみたいだけど。」

「う、うん？そうだっけ？」
「さ、さあ、どうだったかしら？」

凰とセシリアは変に焦っているせいで、かなり怪しい。
…が、そこは鈍感一夏。どこまで聞いていたかは知らないが、真相にたどり着くことは無く。

「じゃ、じゃああたし自分のクラスに戻るから！」
「そ、そうですわね！わたくしも自分の席につきませんと。」
「……なんなんだ？」
「さあ……？」

ぎこちない動きで去っていく二人の女子を見て、首をかしげる二人の男子が残された。
……ああ、俺？もうとっくに撤退してるよ。

◆

一時間目が終わり、休み時間。
俺は、いきなり箒に襟首を掴まれ、廊下へと連れて行かれた。
…何だ？部活を作るのに協力させられたりするのか？文芸部は廃部寸前じゃないぞ？

「…どういうことだ？」
「どういうことが、どういうことなんだ？」
「ふざけるな！あの噂のことだ！何で、一夏と付き合えるというの

を、否定しなかったんだ！」
「いや、だってよ、本当のことを知ってるとしても、言えないって。」
だってよ、あの『余計なことを言ったら、コロス』って意思をこめた視線に晒されたら、逆らえないって。
「そもそも、それがお前と一夏の約束だと知れたら、お前、闇討ちされるぜ？」
「む、確かに…。だが！」
「それに、だったらお前が勝てばいい。」
「私が…？だが、私はＩＳランクも低いし、専用機も…。」
「だったら、ウチと契約して…」
「いや、いい。」
ぺちん。
差し出した契約書は、俺の手を離れ、廊下へと落下する。
「そんな！今月中にあと４件以上契約を取らないと、俺はクビだっていうのに！」
「知るか！前にも聞いたわ！！」
さて、気を取り直して。
「…そういえば紅也は、何で自分の噂は否定したんだ？」
「ん？そりゃ、事実無根だったし、そもそも…。」
「そもそも？」
「葵が優勝して、禁断の兄妹愛が始まったら、どうすんだ！」
「始まるか！ええい、このシスコンめ！
そもそも、お前を選ぶ保証などないだろう！？もしかすると一夏

を…」

「ヨシ、イチカコロス。」

教室を覗く。ガーベラは０．１秒以内に実体化可能。

右手を左の腰に。最速の、抜刀の構え。さあ、テメエの罪を数え……

「…って、あれ。一夏は？」

「気づいてなかったのか？授業後すぐに教室を出ていったぞ。」

「ちっ…。命拾いしたな。」

「……本気だったのか？」

刀は持ってないが、血のりを払うような動作をしてから、体を戦闘モードから通常モードへ。…もっとも、落ち着いてはいないが。

そういや今日も、一夏の訓練があったな。なら、葵を呼んで、目の前で一夏を…。ぐへへへへ。

「……はあ。私は戻るからな？」

箒は教室へと戻る。俺は――

「みなさーん！俺の噂はデマだけど、一夏のはホントですよー！！」

嫌がらせを実行。せいぜい困れ、一夏。そして大観衆の前で、俺に倒されろ。

この情報を聞いて、やる気をなくした女子が４組にいたとかいなかったとか。

◆

さて、時は進んで放課後。
俺は葵を呼ぶため、３組の教室に行ったのだが。

「あ、山代君。山代さんなら、第三アリーナで練習するって言ってたよ。」
「２組の凰さんが誘いに来てました。」
「ねえねえそれより、あの噂って…」
「そっか、ありがとな。」

退室。
どうやら、先に行ってしまったようだ。じゃあしょうがない。一夏達と話して、今日の練習は第三アリーナでやるように提案してみよう。

◆

〈ｓｉｄｅ：山代　葵〉

「「あ」」

鈴音と一緒に第三アリーナへ行くと、そこには先客――セシリア・オルコットがいた。
声をあげたのはセシリアと鈴音。お互いの存在が意外だったのか、思わず声が出たみたい。

「奇遇ね。あたしはこれから月末の学年別トーナメントに向けて特訓するんだけど。」
「奇遇ですわね。わたくしもまったく同じですわ。」

二人の間に火花が散る。私のことは頭から抜け落ちているみたいで、ちょっと寂しい。
…でも、普段は（一夏以外のことでは）仲が良さそうな二人が対立するなんて。…ってことは、原因は一夏に違いない。多分、例の噂を聞いたんだろう。
それにしても、セシリアは紅也狙いかも、と思ってたけど。警戒レベルを下げてもいいかな？

「ちょうどいい機会だし、この前の実習のことも含めてどっちが上かはっきりさせとくってのも悪くないわね。」
「あら、珍しく意見が一致しましたわ。どちらの方がより強くより優雅であるか、この場ではっきりとさせましょうではありませんか。」

二人は、それぞれメインウェポンを呼び出し、それを構える。
…ん、これは少しまずい。二人とも、頭に血がのぼってる。

「…そこまで。」

ブルーフレームを展開。空を見る。

「なによ葵！邪魔しないで！」
「そうですわよ！戦いに介入するなど、なんて無粋な…」
「…お客さん。」

アーマーシュナイダー、実体化。飛来する何かに対し、水平に構える。

キンッ！

飛んできたのは砲弾。その軌道をナイフでなぞり、直撃コースから受け流す。
この程度は、造作もない。

「「！？」」

やっぱり、二人とも気付いてなかったみたい。侵入者の、無粋なドイツ人に。

「……シュヴァルツェア・レーゲン。」
「ラウラ・ボーデヴィッヒ……。」

セシリアの表情がこわばる。二人の間に、何かあったのかな？
まあ、紅也から聞いた話だと、クラス中から浮いてるそうだし、私に電波発言してきたり、嫌な相手だってのは分かるけど。

「……どういうつもり？いきなりぶっ放すなんていい度胸してるじゃない。」

鈴音は衝撃砲を準戦闘状態へとシフトさせ、連結した大剣、月牙天衝を構える。

「双天牙月よ。」
「…そうだった。」
それはそうとして。
「中国の『甲龍』にイギリスの『ブルー・ティアーズ』、それにオーストラリアの第二世代機か。……ふん、データで見た時の方がまだ強そうではあったな。」
…へえ。なかなか活きがいいじゃない。
うん。気にいったわ、これ。でも……。
「何？やるの？わざわざドイツくんだりからやってきてボコられたいなんて大したマゾっぷりね。それともジャガイモ農場じゃそういうのが流行ってんの？」
「あらあら鈴さん、こちらの方はどうも言語をお持ちでないようですから、あまりいじめるのはかわいそうですわよ？犬だってまだワンと言いますのに。」
どうやら、二人の方が戦いたいみたいだ。
それにしても、『テメェ…。今、狗って言ったか？』…と、言いたい。でも、私は空気が読める子。みんな、話を続けて。
「はっ……。貴様らはふたりがかりで量産機に負ける程度の力量しか持たぬものが専用機持ちとはな。よほど人材不足と見える。数くらいしか能のない国と、古いだけが取り柄の国はな。」
――空気が凍る。
……マズイ、二人が武器の安全装置を外した。どうやら、もうキレ

てしまったみたい。
しょうがない。コイツは、二人に譲ってあげよう。
「それに、脱走兵の試作型（プロトタイプ）など、完成された私の敵ではない。」
ボーデヴィッヒはこちらを向き、そう言う。
…私は、確かに試作機使ってるけど、脱走した覚えは無い。何の話をしてるんだろう？
そして何より、許せないのは――
――私より強い、なんて。言ってくれるじゃない。アンタじゃ多分、紅也にも勝てないよ。
「――いいわ、やってあげる。」
「ちょっと、葵さん!?あの人はわたくしが……」
「そうよ!そもそもあんたが出たら、すぐ決着ついちゃうじゃない。ここはじゃんけんで――」
「はっ!三人がかりで来たらどうだ?下らん種馬を取り合うようなメスに、この私が負けるもの――」
キン!
何?
三人がかり?笑える。
この程度の攻撃に、反応できないのに。自分と私の実力差も、分からないのに。
「……何をした?」
ボーデヴィッヒのＩＳ、シュヴァルツェア・レーゲンの背部のユニ

ットには、４本のナイフが刺さっている。当然、投げたのは私。
……まったく、一本くらい防いでよ。はあ。やる気が無くなっちゃった。

「よ、４本同時……。」
「そんな…。一発分の音しか聞こえなかったわよ。」

……え？ちゃんと、ずらして投げたんだけど。

「……よくも！私に、傷を！！」

怒るボーデヴィッヒだが、私に言わせてもらえば、あんなのは避けられない方が悪い。
そもそも、人を挑発（？）しておいて、やられる覚悟がないって。
ありえない。

っていうか。

ムカつく。

「アンタ、自分が散々挑発しておいて、何勝手に怒ってるの？
あの程度を直撃なんて、自分が弱かったせいじゃない。」

「…んなっ、あ、葵が……！」
「葵さんが……」
「「まともにしゃべった！！」」

「……貴様ぁ！！」
「言っておくけど、私が本気なら、アンタは7回死んでる。生きてるだけマシだと思いなさい、欠陥品が。上には上がいるものよ。」

そう。
私なんて、まだまだだ。全盛期の母さんに比べたら、ひよっこもいいところ。
それを知っている。それだけで、強くなれるのに。
こいつは。

「……欠陥品、だと!?面白い。ならば、さっさとかかってこい!返り討ちにしてやる!!」
「態度がなってないわよ。戦って下さい、でしょ?私がそんな物言いを許してるのは、紅也だけなの。だから、戦ってあげない。
どうしても戦ってほしかったら…。そうね、セシリアと鈴音、二人と戦って勝ってみなさい。そうすれば、戦ってあげなくもないわ。」
「ち、ちょっと葵さん!?何を勝手に……」
「まあいいじゃない。葵!あんた、分かってるわね。
…そういうわけだから、私たちが相手よ。かかってきなさい!ドイツ女!!」

「くっ…。ならば、貴様ら二人、同時にかかってこい!!」
「「上等!」」

戦闘が始まる。
ボーデヴィッヒが負けるなら、それでいい。勝ったら勝ったで、私のおもちゃになってくれれば、それでいい。
私に損は無い。紅也的に言うなら、ギブ&テイクだろうか。
さあて。

ショーの始まりだ。

第３６話　葵とボーデヴィッヒ。　クールキャラかぶり（？）対決！（後書き）

葵が少しキレました。
ちょっと七実っぽい、天才肌な彼女ですが、ナメられることを嫌います。

草が！！

…なんてね。

第３７話　前座の役目はここまで。ここからは、私がやる。（前書き）

第３７話です。

タイトルと違い、葵は戦いません。

鈴＆セシリアＶＳラウラ、決着です。

第37話　前座の役目はここまで。ここからは、私がやる。

「一夏、今日も放課後特訓するよね？」
「ああ、もちろんだ。今日使えるのは、ええと――」
「第三アリーナだ。」
「「わあっ！？」」

一夏とシャルルが並んで歩いているところに、箒が横に並び、突然話しかけた。
気付けよ、幼なじみ＆スパイ。

「……そんなに驚くほどのことか。失礼だぞ。」
「お、おう。すまん。」
「ごめんなさい。いきなりのことでびっくりしちゃって。」
「あ、いや、別に責めているわけではないが……。」
「不責（せめず）。俺は驚かすつもりだからな。」
「「わあっ！？」」

いつの間にか一夏の背後に立った俺は、某　不忍（しのばず）をまねて登場する。

「これぞ相生拳法・背弄拳。…なんてな。」

…そこ。ただ後ろに立っただけとは言うな。

「まあ、ちょうどよかった。今日は、葵が第三アリーナにいるんだ。一緒に行こうぜ。」
「う、うん。じゃあ、行こう。ほら、一夏と箒も！」
「お、おう。」
「うむ。」

ふっふっふ……
一夏め。何も知らずについてくるとは、愚かな。
公衆の面前で完封して、ぼっこぼこにしてやんよ！！

「なあ、箒。俺、なんだか嫌な予感がするぞ。」
「奇遇だな、一夏。私もだ。」
「僕もそう思うな。だって…」
「「「紅也があいう笑い方をするときは、たいてい悪だくみしてるときだ！」」」

◆

……おかしい。
なんだか、アリーナの方が騒がしい気がする。
――いや、気のせいじゃない。
確実に、人が増えている。

「なんだ？」
「何かあったのかな？こっちで先に様子を見ていく？」

シャルルは、観客席へのゲートを指す。確かに、そっちの方が手っ取り早く事態がわかるだろう。でも、もし葵が何らかのトラブルに巻き込まれてたら、ピットに行った方が早い。

……待てよ。避難警報が出ないレベルの戦闘系のトラブルなら、葵の心配はいらないか。

「……そうだな、行こう。」

「紅也。なんとなくだが、後で葵に謝った方がいい気がするぞ。」

最近鋭いですね、箒さん。

「誰かが模擬戦をしてるみたいだね。でもそれにしては様子が――」

ドゴォンッ！

「「「「！？」」」」

突然の爆発音。俺をはじめ全員が、音の発生源に目を向ける。

もくもくと立ち上るその煙の中から、現れた者は――

「鈴！」

「それに、セシリアか！」

二人とも、苦い表情だ。爆発の中心をにらみ、武器を構えている。

その爆心地に立っていたのは、漆黒のＩＳ、シュヴァルツェア・レーゲン。操縦者は銀髪の人形、ラウラ・ボーデヴィッヒだった。

「――ふう、葵じゃなくて良かった。」

「よくねぇよ！二人を見ろ！」

凰とセシリアの機体は――あーあ、ヒデェや。修理が必要かな――かなりのダメージを受けていた。シールドエネルギーの残りは知らねぇが、実体ダメージは大きい。

それに比べてボーデヴィッヒは損傷軽微だし、葵は安全地帯にいるから当然無傷……

……って、葵!?何で、見てるだけなんだ?まさかボーデヴィッヒと組んだのか?

まあ、それはないか。むしろ、3対1でも嬉々として戦いそうだ。

「何をしているんだ?――お、おい!」

一夏の声で、俺は二人へと注意を戻す。

凰とセシリアは目配せをした後、再びボーデヴィッヒへと向かっていく。

――ん?葵から通信?

(紅也。あのISのデータを収集して。)

(あの、ドイツ軍のISか?)

(そう。私の勘では、面白いものを積んでる。)

(レールガン以外の…。第三世代兵装か?)

(うん。さっきから、不自然な状況が何度かある。鈴音たちが負けるまでに、解析しておきたい。)

(……負けるのは確定なのか?)

甲龍の肩が開き、衝撃砲が放たれる。しかしボーデヴィッヒは回避行動をとらず、右手を突き出した。

《空間圧、消失――!》

(衝撃砲を打ち消した?…いや、防いだ!?アレはまさか、熾天覆う七つの…)

（違う。…でも、それほど違わない。アレで、衝撃を止めたのよ。）
（……その話し方。お前、興奮してないか？）

ヤバイ。葵のやつ、ひょっとして暴走してるのか？
もしや、二人をボーデヴィッヒにけしかけたのは――

（それよりアレ、光波防御帯に似てない？）
（…なるほど。応用できるってことか？）
《原理によっては可能だろう。なら、早速観測&解析だ。》

通信終了。ブルーフレームから、リアルタイムの戦闘データが送られてくる。

ボーデヴィッヒのＩＳの両肩から、刃が射出され、凰へと迫っていく。
本体とワイヤーで繋がったそれは、凰の迎撃を複雑な軌道で回避しながら、甲龍の右足を捕らえる。

いいな、あの武器。アレにビーム発信機をつけて、ビーム刃やビームを発射できるようにしたら、優秀な兵器になるだろう。

……っと、セシリアが射撃をして凰を援護する。同時にビットを射出するが、動きが鈍い。やはり、まだ同時制御は無理か！？
ボーデヴィッヒがまたも両腕を突き出す。すると、その方向にあるビットの動きが……止まった！？

《……なるほど。》
（！　何か分かったのか、８！）
《あれは、物体の慣性を……いや、ベクトルそのものを打ち消している！》

（なるほど。だから、衝撃やビットが止まったのか。）

セシリアのレーザーと、ボーデヴィッヒの大型レールカノンの射撃が激突、相殺される。

が、レールカノンは単発なのに対し、ライフルは連射がきく。即座に第二射を放とうとするセシリアに、拘束されていた凰がぶつかる。さしずめ、ワイヤー版ジャイアントスイングか。運動エネルギーがたっぷりと乗せられたその一撃は、二人の体勢を崩すには十分すぎた。それを好機とみたボーデヴィッヒは、中距離の間合いから一気に距離を詰める。アレは、確か……

「瞬時加速（イグニッション・ブースト）――！」

一夏が叫ぶ。

そうだ。一夏の得意技。そして、レッドフレームの不意打ち技だ。

凰は双天牙月の連結を解き、二天一流の構えをとる。ボーデヴィッヒも両手首のパーツからプラズマ刃を展開し、つばぜり合いが始まる。

…が、突撃の勢いを保つボーデヴィッヒに対し、凰は防戦一方で、後退中だ。攻守の逆転は不可能。しかも、数を６つに増やしたワイヤーが、再び襲いかかる。

――６つのワイヤー付き誘導兵器による同時攻撃。このコンセプトは、何かに生かせるかもしれない。うん、覚えておこう。

凰はそちらにも集中力を割かねばならず、剣筋が乱れる。

そして、再び肩のパーツが開くが……

この状況で、起動に時間がかかる兵器を使うのは、悪手だ。

衝撃砲が爆散する。ボーデヴィッヒの実弾攻撃が、肩を射抜いたのだ。凰は大きく体勢を崩し、追撃のプラズマ刃がその身に届かんとするも――

それを遮る影。セシリアのライフル、スターライトｍｋ？が、剣線をそらす。同時にミサイルを放ち……って、自爆かよ！？スゲェ覚悟だ。

セシリアと凰は床に叩きつけられる。しかし、ボーデヴィッヒは――

無傷、だった。

再び瞬時加速。凰を蹴り、セシリアに砲撃。さらにワイヤーブレードで二人を拘束。拳による乱打が、二人に叩きこまれる。

《シールドエネルギー、急速減少！このままだと操縦者生命危険域（デッドゾーン）へ行くぞ！》

（ここまでだ。葵！止めろ。）

（極めて了解。）

通信とほぼ同時に、ブルーフレームは飛翔する。三機の間に割って入り、ビームライフルをボーデヴィッヒの顔面に付きつける。

……うわあ、容赦ねぇ。

「…そこまで。勝負はついた。」

「フン……。」

シュヴァルツェア・レーゲンに、ワイヤーが戻っていく。その間に、セシリアと凰はのろのろと離脱していった。

……あのダメージじゃ、予備パーツなしでの修理は難しいだろう。

アイツ、少しやりすぎだ。

「で？ようやくお前か。さっきの二人よりは楽しませてくれるのか？」

「言ったでしょ？口のきき方には気をつけなさい。さっさとシールドエネルギーを補給して、戻ってきなさい。」

「くっ……。」

葵とボーデヴィッヒの会話が、８を通して聞こえてくる。あちゃあ、やっぱり熱くなってるな、葵のやつ。

シュヴァルツェア・レーゲンはピットへと戻っていく。俺たちも、二人が退避したピットへと急いだ。

◆

「う……。一夏、紅……。」

「無様な姿を……お見せしましたわね……。」

ブルー・ティアーズと甲龍はボロボロだったが、二人の操縦者は無事だった。

「まったく、何があったんだ？…まあ、アイツがケンカを売ってきたんだろうけど。」

「う、うん……。大体、そんな感じ。」

「大体？鈴はともかく、セシリアはやすやすと挑発に乗るタイプじゃないだろ。」

「一夏！それ、どういう意味よ！！」

一夏のうっかり発言に、凰が噛みつく。そういうことしてるから、挑発に乗りやすいって言われるんだ。

「……で、セシリア。何で葵がキレてたんだ？」

「……やっぱり、怒ってるのですね。おそらくは、自分が侮られたことが原因でしょう。

そういえば、あの女が気になることを言ってましたわ。『脱走兵の試作型（プロトタイプ）など、完成された私の敵ではない』……と。」

脱走？試作型？

ボーデヴィッヒがそう言ったのか？

アイツはドイツ軍人だ。軍のデータベースを見る機会もあるだろう。

『脱走兵』というのが俺の思った通りの人物なら、ボーデヴィッヒの正体も、葵につっかかってきた理由も説明がつく。

……また、めんどくさい誤解が生じてるようだ。

「それ、関係ないんじゃないか？

そんなことより、なんで葵は見てるだけだったんだよ。」

ああいう状態の葵なら、乱入しそうだったが。

「ああ、それは葵さんが、『そうね、セシリアと鈴音、二人と戦って勝ってみなさい。そうすれば、戦ってあげなくもないわ。』と言って、わたくしたちを……。」

「……ああ。試験扱いか？」

「ま、まあ、わたくしとしても、あの女と決着をつけたかったので、引き受けたのですが。」

そうか。三下扱いされたのか。本人は気付いてないけど。

「なあ鈴、調子悪いなら保健室に……」
「いいわよ！それより、葵の試合を見に行くわよ！アイツがボコボコになるところを見ないと、気が済まないわ！！」
「凰は平気そうだけど、セシリアはどうする？一緒に来るか？」
「紅也さんと一緒に……。え、ええ！もちろん！！」

おう！？セシリアのやつ、急に元気になったな。
大丈夫か？空元気じゃないといいけどよ。

「よし、じゃあ箒とシャルルも……。ってオイ、二人とも！？」
「ううう……。どうせ私は、空気だ。」
「一緒にいたはずなのにね……。アリーナに着いてから、セリフが一言も……。」
「……なんかゴメン。」

◆

再び観客席。

アリーナの空に浮かぶは、青と白の全身装甲、アストレイ・ブルーフレーム。
そして今ゲートから飛び出したのは漆黒のＩＳ、シュヴァルツェア・レーゲン。

両者共に万全の状態。レールガンとビームライフルを互いに向け、静止状態を保っている。

「貴様……。顔ぐらいみせたらどうだ？」

「断る。これは、装備の一部。

……そもそも、アンタの言うことなんて、聞く訳ないじゃない。」

「フン、挑発など無駄だ。」

舌戦が繰り広げられるも、すぐに終わる。

互いに、多くを語る者ではない。二人は戦闘者。語るよりも、戦いで多くを示す者。

「……そのようね。うん、冷静になってきたじゃない。

いいわ。すごくいい。これなら――」

――少しは楽しめそうね。

葵の気配が変化する。

冷たく冷たく、氷のように。

鋭く鋭く、刃のように。

「フン、それは――

こちらのセリフだ！！」

――――本気の戦闘が、今、始まる。

第３７話　前座の役目はここまで。ここからは、私がやる。（後書き）

――次回に続く！！

明日の１８時に投稿します。

第３８話　敵は倒せるときに倒す。それの何がいけないの？（前書き）

はい、３８話です。戦闘シーン多めです。

そういえば、ユニークアクセス２５０００人突破しました。ありがとうございます。

これからも、速いペースで投稿していきます。

第３８話　敵は倒せるときに倒す。それの何がいけないの？

戦闘開始。

レールガンとビームライフルが発射され、黄色と緑の閃光が交差する。

音速を超える弾丸は、しかし光速には勝てず。

競り勝ったビームは、レールガンの本体へと向かう。

が、ボーデヴィッヒも大したものだ。レールガンの発射直後に降下し、直撃を避ける。結果、ビームはシュヴァルツェア・レーゲン本体をかすめ、背部ユニットの一部を溶かすにとどまった。

外れたビームはそのままアリーナのシールドに直撃し、完全に消滅する。

「ほう、ビームとはな……。大した威力だ。」

「あなたの目は節穴なの？これでも、十二分に威力を落としてるのよ。」

「ほざけ！！」

◆

〈ｓｉｄｅ：山代　葵〉

へえ、やるわね。初見でビームをかわすなんて。

まあ、今のはこちらの実力を見せつけるのが目的だから、別にいいのだけど。

「まさか、弾頭を撃墜されるとはな……。」

「紅也も同じことをやったわよ。つまりこの程度、誰でもできるわ。」

「……っ！」

ああ、焦ってる焦ってる。

この子、自分より格上の子と戦ったこと、ないのかしら？もったいない。

じゃあ、私が最初の一人になってあげる。

「……どうしたの？来ないの？」

「言われなくてもっ！！」

今度はワイヤーブレード。いきなり6本全てを使ってくるあたり、油断はないようだ。

私も右手のライフルを相手に向けたまま、円軌道を描いて回避する。

さすがにまっすぐ追ってくるような馬鹿ではないようね。

ワイヤーブレードはランダムな軌道で私に追いすがり、あるいは先回りしようとする。

なるほど、セシリア以上に上手いわ。

直撃コースにあるもののみをナイフで、あるいは蹴りで迎撃する。

脚部ダメージ軽微……。

ダメね。装甲の強度が足りないから、どうしてもダメージを受ける。

いっそ、脚にナイフでも追加しようかしら？

急停止。自らワイヤーの檻に飛び込み、ワイヤーを切断する。一本、二本、三本。
それを見たボーデヴィッヒは、ニヤリと口を三日月の形に歪め……
――っ！体が、動かない！
「かかったな！！」
ＡＩＣ。正式名称、アクティブ・イナーシャル・キャンセラー。慣性を停止させるという、第三世代兵装。
なるほど。確かに強力だ。実弾や不可視の弾丸、しかもＩＳ本体まで停止できるなんて。
だけど。
「終わりだ！」
「アンタがね。」
ビーム発射。何のために、銃口をアンタに固定してたと思ってんの？
反応が遅れたボーデヴィッヒは、ビームを直撃。即座に絶対防御が発動し、シールドエネルギーを大幅に減少させる。
すると、ＡＩＣによる拘束が外れた。どうやら、集中力が切れたみたい。
動揺しすぎよ、ウサギちゃん。
「な、何故だ……。体どころか、引き金を引く指まで固定したはず……。」
「引き金？ああ、これ。ただの飾りよ。」
これは嘘。この引き金は、ビームライフルの故障時、マニュアル射

撃をするためのものだ。
普段のビームライフルは、エネルギーをこめるだけで発射できる。つまり、どんな状態であれ、私が生きていれば発射可能。それに気付けなかったのは痛かったわね。

「……じゃ、次はこっちの番。」

脚部にミサイルポッドを展開。右手のビームライフルはそのままに、左手はマシンガンに変更。
まずはミサイル。左右合計6発を、ボーデヴィッヒを囲むように発射。
同時にマシンガン。これは直撃コースだ。
そして私は加速開始。わずかに右へ動くボーデヴィッヒへけん制のビームライフルを放ちつつ、ジンの実体剣を具現化。回避先を読まれたボーデヴィッヒは、ＡＩＣを使ってミサイルの一発を停止させるが、ミサイルを遠隔起爆させてダメージを与える。そして剣を投げつけ、私は急降下。

――シュヴァルツェア・レーゲンは、既に檻に囚われた。

真下から、ナイフ二本を投擲。狙いはもちろん、装甲のない部分。
そして瞬時加速によって背後へ接近。ビームサーベル二本を抜き放ち、エネルギーをこめる。

背弄拳＆断罪炎刀？何それ。

煙が晴れる。剣をＡＩＣで止めたボーデヴィッヒは、それに集中するあまり、ナイフに気付くのが遅れた。剣をプラズマ手刀ではじき、ナイフを残りのワイヤーで迎撃する。
そのタイミングで、外れたミサイルが全同時起爆。爆風が、ボーデ

ヴィッヒの銀髪をはためかせた。
――もう彼女には、私が見えない。
無防備な背中。小さい、きれいな背中。
私は、それを。
X字に斬りつける。

「あああああああっ！！！」

絶叫。威力を弱めたから傷は残らないけど、焼けるような痛みが走ったに違いない。
でも、私の心は痛くない。

背中を蹴り飛ばし、ボーデヴィッヒを地に落とす。今のは鈴音とセシリアの分。ボーデヴィッヒは、ぴくりとも動かない。
……あ、まだエネルギーが残ってる。とどめを刺さないと。
ビームライフルを構える。
じゃあね、未熟者。心と体とＩＳと、全てを鍛えて出直しなさ……

「やめろおぉぉぉぉ！！」

…高エネルギー反応！？横から？
意識をそちらに向けると、そこには雪片弐型を構えた白式の姿。
止めろ、って。何を？今は試合中よ。

「止めろよ、葵。もう、勝負はついてる。」
「……何勝手に名前で呼んでるの？
まあいいわ、許してあげる。それより、まだ試合中なんだけど。
シールドエネルギーが残ってるから、まだ『勝負はついてない』わ。

」
「でも、いくらなんでもやり過ぎだ！さっきの悲鳴を聞いただろ！？」
「…わかったわ。」
ブルーフレームを降下させる。私はシュヴァルツェア・レーゲンを乱暴につかみ、ゲートへと放り投げた。
――シュヴァルツェア・レーゲン、シールドエネルギーゼロ。
ボーデヴィッヒはそのまま倒れこむ。が、ピット内の赤いＩＳの腕が、それを起こして、引きずって行く。
「これで、私の勝ちね。」
「『これで』、じゃねえだろ！確かに、ラウラはやり過ぎた。でも、葵も――」
「…また。まあいいわ。その度胸に免じて、名前で呼ぶのを許してあげるわ、一夏。」
まったく。
弱いくせに乱入して、偉そうに説教して。
まるで、紅也みたい。
「……馬鹿騒ぎは終わったか？」
「…織斑、先生。」
「千冬姉！？」
そんなときに乱入してきたのは、一組の担任の織斑先生だった。
現役を引いたとはいえ、ブリュンヒルデ。母さんを倒したその実力を、ぜひ見てみたいものだ。

「模擬戦をやるのは構わん。――が、アリーナのバリアーまで破壊する事態にならられては教師として黙認しかねる。」

バリアー……？

あ、一夏。ゲートから入ってきたわけじゃなかったんだ。

「このような事態が、そう何度もあってはかなわん。そこで、学年別トーナメントまでの、私闘の一切を禁止する。…異論は無いな？」

「…構わない。」

「あ、ああ……。」

「教師には『はい』と答えろ。馬鹿者。」

「は、はい！」

では解散！と一言言って、織斑先生は去っていく。

再び静寂。残されたのは、私と一夏だけ。

「……なあ。なんであそこまでやったんだ？全部の攻撃で、絶対防御が発動してたぞ。」

「…ＩＳを壊さないため。」

「え！？そのために、操縦者だけを？それじゃ、本末転倒じゃないか。」

「何が？命に別条は無いし、ＩＳのダメージレベルも低い。あのくらいなら、紅也が修理できる。トーナメントには出れる。

…でも、セシリアと鈴音は多分、もう……。」

「…そっか。でも、やっぱりやり過ぎだ。次からは、もうやめてくれよ。」

「…考えとく。」

考えとく、なんて。

普段なら、そんなこと絶対に言わないのに。

「よし。じゃあ、二人の見舞いに行こうぜ。一応、保険室で検査してもらうんだってさ。」

「…そう。じゃあ、行く。」

「お、普段の葵に戻ったな。」

いや、戻ってなんかない。多分、今の私は、少しおかしくなってる。

◆

〈ｓｉｄｅ：山代　紅也〉

……え、ようやく出番？俺、主人公なのに。

ああ、葵も主人公だっけ。そりゃ失礼。

さて、一夏がアリーナに乱入した後、俺はボーデヴィッヒの使っていたピットへと走っていた。

葵は、たとえ一夏が止めても、ボーデヴィッヒにとどめを刺すだろう。そのときＩＳが解除されてればいいが、そうでなければ外してやって、すぐに保健室へと運ばなければならない。

まあ、妹のアフターケアは、兄の義務だ。このくらいはやるさ。

……とまあ、これが表向きの理由。

ピットに到着……って、のわあ！？

漆黒のＩＳ、シュヴァルツェア・レーゲンが俺の近くに落ちてきた。
葵め……。投げたな？
まあいい。レッドフレームを展開し、機体を運んでいく。ボーデヴィッヒは気絶してるな。操縦者保護機能が働いたか。ちょうどいい。
（じゃあ……データの吸い上げ、開始しますか。）
《もはや犯罪行為になんのためらいもないな。お前。》
（犯罪？仕事と言え。）
ＡＩＣ、ワイヤーブレード、レールガン。有用なデータが、次々に吸い上げられていく。
プラズマ手刀、ＶＴシステム……って、ＶＴシステムだと！？
（８！コレは本気でヤバイ！削除できるか？）
《いや、出来ないことはないが。やったらお前がデータを吸い出したことがバレるぞ！》
（それは困る！じゃあ、放置！放置だ！）
《やむをえまい。》
そうだ、やむを得ない。その代わり、何かが起こったら、俺が責任を持って対処しよう。
（じゃあ、次はＩＳの解除だ。コイツを運ばねぇと……。）
ＩＳ本体は、驚くべきことに、ほぼ無傷だった。
おそらく、壊さないようにと葵が配慮した結果だろうが……。
なんだろう。その配慮は、かなりずれてる気がする。
《シュヴァルツェア・レーゲン、解除……。》

８のモニターにそう表示されるや否や、ボーデヴィッヒの姿が露わになる。その表情は苦悶で固まり、左目からは一筋の涙が垂れていた。

――敵とはいえ、その姿は、ひどく哀れで。

「…悪かったな。今は、ゆっくり休んでくれ。」

そうでも言わないと、罪悪感に押しつぶされそうだった。

第３８話　敵は倒せるときに倒す。それの何がいけないの？（後書き）

紅也、ＶＴを見逃しました。

まあ、ここで捕まって、余罪（覗き）が追及されれば、死刑（リンチ）は免れません。……主人公が犯罪者って、どうなんでしょうね？

次話は、たまには違う時間に投稿します。１２時くらいかな？

第３９話　タッグマッチ？俺の相棒は……（前書き）

タイトル通り、タッグマッチの相棒を決めるだけの話です。
話の進みが遅くて、すこし悩んでます。

では、どうぞ！

第39話　タッグマッチ？俺の相棒は……

あの激戦（ただし一方的）からしばらく後。
凰やセシリアとは別の保健室にボーデヴィッヒを運んだ俺は、ようやく見舞いに行くことができたのだが……。

「……」
「……」

打撲の治療を受けたセシリアと凰は、むすっとした表情のまま、こちらに目を合わせようともしない。
部屋の中には一夏と葵。…ひょっとして、セシリア達を前座扱いしたから、気まずいとか？
いやいや。あるいは葵を止めたせいで、一夏と葵がケンカ中とか…？

「別に助けてくれなくてよかったのに。」
「あのまま続けていれば勝っていましたわ。」
「…無理。ああなったら、私でも負ける。」
「お前らなあ……。無理すんなよ。」

…なるほど。葵に中断されたのが、情けなくて怒ってたのか。
なら、あえて言おう！

「不勝（かてず）。あのままでは、二人とも大怪我だ。」
「…もう、驚かねぇぞ。」

む。背弄拳、失敗か。さすがに同じネタは通じないな。

「今だって、結構痛いだろ？今は無理せず休めよ。」
「なによ紅！こんなの怪我のうちに入らないたたたっ！」
「そもそもこうやって横になっていること自体無意味――つううっ！」

二人とも、かなり痛そうだ。葵も、どこか申し訳なさそうな表情をしている。

「バカってなによバカって！　バカ！」
「一夏さんこそ大バカですわ！」

うおっ！？いきなり何だ？誰も、何も言ってないぞ！！
――は！これが噂の「地の文読み」か？一夏のモノローグが読まれたのか！？

「好きな人に格好悪いところを見られたから、恥ずかしいんだよ。」
「ん？何か言ったか、シャルル。」
「一夏。シャルルは『格好悪いところを見られたから、恥ずかしい』って言ったんだ。」
「そうか。そりゃそうだよな。」

両手に飲み物を持って、シャルル入室。……この言葉が聞こえてたら、また大きな騒動になってたかもな。でも、一夏のことだから、「俺も好きだぜ」とか言いそうだけど。

――が、これを聞いた二人は大きく動揺。

「ななな何を言ってるのか、全っ然わかんないわね！ここここれだから欧州（ヨーロッパ）人って困るのよねぇっ！」

「べべっ、別にわたくしはっ！そ、そういう邪推をされるといささか気分を害しますわねっ！」

俺達二人をちらちら見ながら、顔が赤くなっていく二人。
まったく、そんな態度だったら、一夏に好意を持ってるのがバレバレだぜ。

「…鈍感。」
「確かに、そうだよな。見てて滑稽になるくらい。」
「……。」

ん、葵？何故に目をそらす？

「はい、ウーロン茶と「加藤」茶。とりあえず飲んで落ちついて、ね？」
「ぶっ！！」

あ、凰のやつ吹き出した。この程度のギャグに引っかかるなよ。

「ち、ちょっと、紅！ヘンなこと言わないでよ。笑っちゃったじゃない！」

おお、先程とは違う理由で顔が真っ赤だ。

「まあ、冗談だよ。マーシャンジョークってやつだ。」
「まーしゃん……？」
「だからぁ」
「深く考えるな、って言いたいんでしょ？分かってるよ。」

前にもあったな、こんなやりとり。シャルルのスルースキルは、確

実に上昇してるみたいだ。それがいいことなのかは不明だが。

「ま、まあ、ウーロン茶、もらうわ。」
「では、わたくしは「加藤」茶を……。」
「ぶふっ！」

凰、アウトー。
「てんどん」は、お笑いの基本だぜ？こんなんじゃ、２４時間叩かれっぱなしになるぞ。

「ち、ちょっと、鈴さん！？汚いですわよ！」
「うるさい！い、今のは、葵が悪い！！」
「…ごめん。」
「？　妙に素直ね……」
「…まさか、この程度の低レベルなネタで笑うとは思わなくて…」
「うがーーっ！」

鈴、暴走。
私のツインテールは天をも穿つ！…って感じに、髪が逆立ってる。
隣で優雅に紅茶（ただしペットボトル）を飲むセシリアと対比すると、妙にシュールな光景だ。

「ま、先生も落ちついたら帰っていいって言ってるし、しばらく休んだら――」

ドドドドドドドドドッ……！

「！　地震か！？」
「…こんな音はしないはず。」
「な、なんだ？何の音だ？」

地鳴りのような音と、激しい震動。それは、だんだんと大きくなり、近づき……

ドカーン！

保健室のドアが、あろうことか吹き飛んだ。

――あるぇ？ドアって、ああいう使い方するんだっけ～？

さながら雪崩（アヴァランチ）のように保健室に侵入したのは、ＩＳ学園の女子生徒達だった。人の波が、保健室を埋め尽くす。広かったはずの部屋は、あっという間に埋め尽くされてしまった。

「織斑君！」

「デュノア君！」

「山代君！」

あー。うー。

バイハのゾンビの如く殺到する女子たちは、俺達男子へと手を伸ばす。

逃げるか？…いや、これ、ウェスカークラスの身体能力が無いと無理ゲーじゃね？

まあ、幸い我々人類には、「対話」という名の英知の結晶がある。話が通じれば、ＥＬＳとだって分かりあえるんだ。ここは、それに頼ろうではないか！

「な、な、なんだなんだ！？」

「ど、どうしたの、みんな……ちょ、ちょっと落ち着いて。」

「ま、待て！話せばわかる！」

…自分で言ってて思ったが、これだと瞬殺されそうだな。

「「「「これ！」」」」

どうやら、言葉は通じたようだ。「所詮は獣だ」状態だったら、人の言葉も解さない奴ら相手に、5対2どころの話じゃない戦いを強いられたはずだから、危なかった……。

それはそうとして。

女子一同が差し出してきたのは、学内の緊急告知文が書かれた申込書だった。

「へぇ。『今月開催する学年別トーナメントでは、より実戦的な模擬戦闘を行うため、ふたり組での参加を必須とする。なお、ペアが出来なかった者は抽選により選ばれた生徒同士で組むものとする。締め切りは』――」

「ああ、そこまででいいから！とにかくっ！」

手っ！

暗闇から、手が！手が！手がっ！

俺達を……。この、暗闇に引きずりこもうとするっ！

――と、福本先生的な描写をしてみたが、なんのことはない。

「私と組もう、織斑君！」

「私と組んで、デュノア君！」

「……紅也、君。私と……」

女子が、俺達をパートナーにするため、無数の手を伸ばしているだけだ。

……が、俺は。

「ふっ。ふふふふふふ。ハハハハハ！！」

彼女たちの声は聞かず、こみ上げてくる笑い声を抑えずに放つ！

「お、おい、紅也……？」

「どうしたの、紅也？」

ああ、これが笑わずにいられるかってんだ。

俺は、勝ちたかった。そして、葵以外には勝つ自信があった。

唯一の懸念はボーデヴィッヒだったが、あの戦闘、データを解析した後では、何の脅威にもならん。――つまり！俺が組むべき相手は……！！

「残念だったな。俺、葵と組むから。」

「「「「えええーっ！」」」」

ざわ……ざわ……

「まあまあ、予想できたことだし……。」

「でもー、やっぱりー、ざんねーん。」

「……とても、残念。」

…と、なると。残るターゲットは一夏とシャルルに絞られるわけだが……。

シャルルと一夏が顔を見合わせる。シャルルは困り顔。

ああ、そっか。女だってバレる可能性があるからな。

「悪いな。俺はシャルルと組むから諦めてくれ！」

しーん……。

一夏の声が響き、部屋に静寂がもどる。まるで、部屋全体に「サイレント」をかけたような……。って、まあそれはどうでもいいか。
当面の問題は解決した。

「まあ、そういうことなら……」
「他の女子と組まれるよりはいいし……」
「男同士っていうのも絵になるし……ごほんごほん。」

最後の奴。ちょっとこっち来なさい。１組の人だよね？ＯＨＡＮＡＳＨＩしようぜ。

が、そんな心の声に反応する子は一人もおらず。
女子たちは一人、また一人と帰って行き、やがて完全に姿を消した。

「……ってことだけど、いいよな、葵。」
「…望むところ。」

ふっ……。これで、俺の勝ちは固い。

「くそ…。厄介なペアが誕生したな。」
「そうだね…。紅也はともかく、山代さんはとても強い。」
「まったく。紅はともかく、葵に勝てる気はしないわ。」
「葵さんをどうにかしなければ、勝ち目はありませんわね。」
「…ってコラ！お前ら！何好き勝手言ってるんだ！！
特に凰とセシリア！お前ら、俺に負けてるだろうが！」
「だって、あの時は『葵の前座』程度にしか考えてなかったし。」
「わたくしに勝ったのも、事故のようなものでしょう？今度は油断なくためらいなく、殺される前に殺してさしあげますわ！」
「物騒だな、オイ！」

そもそもそのセリフ、見た目的にはボーデヴィッヒの方が合ってるだろ！

…いや、セシリアも貴族つながりで、まあ正解っちゃあ正解なんだが。

閑話休題。

「一夏っ！」

「一夏さんっ！」

凰とセシリアがベッドから飛び出す。痛みはいいのか？

「あ、あたしと組みなさいよ！幼なじみでしょうが！」

「いえ、クラスメイトとしてここはわたくしと！」

…この二つの条件を同時に満たす箒って、有利だよなぁ…。ネックは、専用機持ちじゃないところか？でも、あの人の妹なんだから、専用機くらいちょちょいのちょい……。

「ダメですよ。」

「「「「「うわあっ！」」」」」

葵以外、全員が驚く。これは…背弄拳！？まさか、見稽古持ちだったのか、山田先生！

……あ、いや、影が薄いだけか。

「山代君、ひどくないですかぁ！？

…コホン。おふたりのＩＳの状態をさっき確認しましたけど、ダメージレベルがＣを超えています。当分は修復に専念しないと、後

々重大な欠陥を生じさせますよ。ＩＳを休ませる意味でも、トーナメント参加は許可できません。」

あーあ。やっぱり、大ダメージだったか。

二人とも代表候補生だ。この説得には応じざるを得ないだろうな。

「うっ、ぐっ……！ちょっと紅！修理とか出来ないの？」

「そ、そうですわ！技術者なのでしょう？」

う、こっちに飛び火してきたか。

まあ、無理もない。二人とも、藁にもすがる思いだろうから。

「あー。予備パーツがあれば直せるが、なければ無理だ。そもそも俺は、他国の技術者。それが国のＩＳに手を出したとなれば、国際問題になりかねないからな。」

まあ、簪の時みたいに、俺個人の技術の範囲での修理はできるが。ブルー・ティアーズや龍咆の製造は、個人じゃ無理だ。ゆえに不可能。

「もっとも、俺が持ってるパーツで代用すれば、直せなくはないが。」

「え！？な、なら――」

「欠けてるパーツを、全部ドリルに換装――」

「あ、やっぱいいわ。」

「ええ。わたくしも辞退します。」

何故？ロマンを感じないか？…女だから、天元突破のロマンは分からないか。

まあ俺も、あの某ドクターほどのドリル愛はないが。

「わかってくれて先生嬉しいです。ＩＳに無理をさせるとそのツケはいつか自分が支払うことになりますからね。肝心なところでチャンスを失うのは、とても残念なことです。あなたたちにはそうなってほしくありません。」
「はい……」
「わかってますわ……」

どうやら、話がついたようだ。自分のＩＳに、無理はさせちゃいけねぇよ。メカにだって、魂があるんだ。

「しかし、何だってラウラとバトルすることになったんだ？」

一夏が、ふとした疑問を投げかける。まあ、確かにそうだ。俺も、葵がキレちゃった理由が知りたい。もし、ボーデヴィッヒにナニカサレタヨウダったら、切り札使ってでも叩き潰してやる。

「え、いや、それは……」
「ま、まあ、なんと言いますか……」
「馬鹿にされた。」

「？　ふうん？」

ああ……。一夏がらみの何かで挑発されたんだろうな。葵は、弱くみられた事に怒ったんだな。なんか納得だぜ。
シャルルも何か気付いたようで、発言しようとするが――

「シャルル、ストップだ。馬に蹴られて死ぬぞ。」
「え？あ、そっか。アハハ…。」

◆

夜。１０１７室。

「…で、ドイツのデータは？」

「ああ、バッチリだ。…ただ、ＡＩＣと光波防御帯は全く別の技術だ。俺としては、ワイヤーブレードの方が気にいったな。」

「そう。じゃあ、エリカに送る。」

《了解だ。そうそう、デュノア社の併合は、うまくいったそうだ。良かったな。》

「ああ。これでまた、ウチは大きくなる。また一歩、宇宙（そら）に近づいた。」

「…良かった。他に報告は？」

《ああ、天（アマツ）の完成度は８０％。葵の新型パーツは、ほぼ完成だ。》

「ありがと。」

「……ちょっと待て。俺のバックパックは？」

《…ああ。全員天にかかりきりだったからな。完全に後回しだ。》

「そんなぁ！じゃあ、トーナメントには……」

「…間にあわない。」

「ちくしょおぉぉぉぉ！！トリケロスなんて、回収するんじゃ無かった！」

「そう言わない。これで、ＰＳ装甲が製造できるようになった。」

「ぐっ…。ま、まあ、そうだな。これなら、レッドフレームの弱点を補える…。」

駒は揃った。学年別トーナメントが、いよいよ始まる――

第３９話　タッグマッチ？俺の相棒は……（後書き）

…と、いうわけで。新型バックパックのお披露目は、次章に持ち越しです。

いよいよ、学年別トーナメントを始めます！

第４０話　開幕！学年別トーナメント！（前書き）

はい、第４０話です。

今回は少し長いですが、後半部分はほぼ原作通り…。

情けないです、はい。

第４０話　開幕！学年別トーナメント！

六月も最終週に入った。
つまりそれは、ＩＳ学園において、学年別トーナメントが始まったことを意味する。
試合の直前までこうして関係者が走り回っているほど、慌ただしい現状だ。
そんな中、俺はというと……

――ＩＳ学園内、整備室。

「ハーイ。久しぶりね、紅也、葵。」
「エリカさん。来てたんですか？」
「ええ、そうよ。…って言っても、アナタたちを見に来たんじゃないの。３年生をスカウトに来たのよ。後は…あの子、シャルロットちゃんの様子見よ。」
「…シャルロット？」
「ああ、ここじゃ、シャルルって名乗ってたわね。あのフランスの子よ。」

そうか。シャルルって、男の名前だもんな。本名はシャルロットか。
――シャル子って呼んどけば間違いないだろ。

「…で、パーツは？」
「もう！つれないわね、葵ちゃんは。ここよ。」
「…これが…！」

エリカさんのブレスレットが輝く。光が収まると、俺達の目の前に

は、オレンジ、白、青の三色から成る肩アーマーと、2本の大型アーマーシュナイダーがあった。

「これが葵の新装備か…。俺の注文そっちのけで開発された……。」
「ハイハイ、拗ねないの。そっちも鋭意制作中だから。…そもそも、遅れの原因は、可変機能の追加が原因なのよ?自業自得じゃない。」
「ぐっ……。何も言い返せない…。」

それを言われると弱いな。実際、当初の予定では完成してるはずのものなんだから。

「…紅也。装着をお願い。」

気が付いたら、葵はブルーフレームを展開していた。
俺は元の肩アーマーを外し、さらに両脚部にあるハードポイントを開放する。そしてフレキシブルアームズを展開し、新しい肩アーマーの装着作業に入る。

「そういえば。これはどんな装備なんだ?」
「…増加スラスター。これ一つで、バックパックと同等の推力が得られる。」
「は!?それって、ヤバくねぇか?」
「…大丈夫。リミッターはつけておく。」
「ならいいけどな…。脱臼すんなよ。」
「…うん。」

ほい、っと。装着完了。後はハードポイントにアーマーシュナイダーの鞘をマウント。これで、最適化を行えば、これらの装備はブルーフレームの一部となる。

「じゃ、元のアーマーは持って帰るわね。…そうそう、紅也には予備の腕パーツを渡しとくわ。もう壊さないでよ。給料から引いとくからね。」
「そ、そんな!?シャル子の一件でチャラにしてくれよ!」
「考えとくわ。…じゃ、そろそろ試合が始まるわよ。早く着替えなさい。」
「はいはい。…っと、エリカさん。」
「ん?何?」
「着替えるから、出てけ。」

◆

着替えを終えた俺達は、一夏と合流するべくアリーナへと向かう。
…そろそろ、トーナメントの組み合わせも発表されるころだろう。
一夏は、ボーデヴィッヒとの対戦ばかり気にしていたが、俺にとっては、誰と当っても関係ない。どんな奴が来ても、勝ってやる。たとえ箒や簪、シャル子と当っても、手加減などしない。

――そして、この手でＩＳ・ザ・ＩＳの称号をつかんでやるっ!

「ねぇよ、そんな称号。」
「…一夏、シャルル。」
「紅也、山代さん、遅かったね。」
「ああ、本国から新造パーツが届いてな。インストールしてたら遅刻した。
――で、組み合わせは?」

その質問に対し、一夏は笑みを浮かべて答える。

「俺達は一回戦第1試合、対戦相手はラウラだ。」

「へぇ、そりゃ…」

「…出来過ぎ。」

「でしょ?僕も、そう思うよ。」

「ところで、俺たちの対戦相手を知らないか?良かったら、その試合時間も。」

「あー、悪い。俺、自分の分しか見てなかったわ。」

「やっぱり。僕が見たから安心して。紅也たちは一回戦第12試合、対戦相手は棗さんとグローリーさんのペアだよ。」

「…雑魚。」

「言うな。専用機持ちは、ほとんどいないんだから。」

ちなみに、棗とグローリーは、IS実習の時に俺が指導したやつらである。クラスは一組。語尾に「―」をつけて話すのが棗で、変な日本語を使うのがグローリーだ。

「ありがとな、シャルル。…っと、そうだ。これ、ウチからのプレゼントだ。

試作武装で、しかも弾数は3発だけだが、AICに対抗するための切り札だぜ。」

そう言って俺は、シャル子にある武器を渡す。

「これは……。」

「まあ、契約の特典だとでも思ってくれ。じゃ、俺は行くからな。

…葵。」

「うん。二人とも、頑張れ。」

「ちょっと待った！契約って、一体…」
「後でシャル子に聞けよ。じゃーな。」
「『シャル子』って…。紅也！お前、まさか……」

一夏の声を背に受けながら、俺達は歩く。
１２番目か、ずいぶんと後だな。とりあえず、観客席から観戦させてもらおうか――

「山代兄妹、話がある。」
「え？」
「…織斑先生。」

◆

〈ｓｉｄｅ：織斑　一夏〉

「…え？じ、じゃあ、紅也達は…」
「うん。実はバレてたんだ。僕が、女だって。」
「そうだったのか……。」

あの日。シャワー室にボディソープを置きに行った時、裸のシャルルと鉢合わせした。
あの時はなにがなんだか分からず、しかもシャルルは逃げるように部屋から出ていったため、状況が分からなかった。
その後、いろいろな話を聞いた。シャルルは、俺の情報を探りに来たスパイで、会社の広告塔で、そして――愛人の子だと。

「あのとき、『ここにいろ』って言われたのは、正直嬉しかった。でも、同時に、申し訳なかったんだ。だってあの時、もう問題は解決してたから。」

「申し訳ない、なんて言うなよ。答えが見つかってよかったじゃねぇか。

…で、紅也のやつ、どんな解決方法をとったんだ？」

それは、すごく気になった。同じ学生なのに、俺には思いつかなかったことをあっさりとやってのけた。一体、どんな手品を使ったのやら――

…って、アレ？シャルル？何で、そんなに遠い目をしてるんだ？

「…いつもの悪い笑い方をして、デュノア社を占領しちゃった。」

「……は？」

はい？占領？

「ああ、もちろん力ずくじゃないよ！…でも、ある意味力ずくというか…。少なくとも、軍事力には頼ってない、かな。」

びっくりした。俺はてっきり、葵あたりがデュノア社を滅ぼしたんだと思ってた。

…まあ、よく考えてみれば、たった1機のＩＳが、企業を破滅させるなんてことはないか。

「…アナトリアの傭兵じゃないんだから。」

「何だ、それ？」

「知らない。なんか、紅也がそう言ってた。

ともかく、まあ、平たく言えば父……社長を脅して、モルゲンレ

ーテの傘下に入れちゃったんだ。僕は、所属をモルゲンレーテに移されて、保護された。」
「そっか。それが『契約』ってやつか。じゃあ、その武器は…。」
「うん、モルゲンレーテの作品。試作品って言ってたけど、ちょっと出してみようか。」

そう言って、シャルルはそれを実体化させた。すると、一緒に紙が出現して、ひらひらと俺の方へ落ちてくる。

「えーっと…『このたびは我がモルゲンレーテの商品をお買い上げいただき』…決まり文句だな。中略…『なお、この武器は試作品につき、3回に1回は暴発し、IS本体を巻き込んで爆散する恐れが』…って！なんじゃこりゃ！！」
「試作品というより、欠陥品だね。」

さすがのシャルルも、顔が引きつってる。

「でも、良く考えれば、それだけ高出力なんだろ、これ。」
「…一夏は前向きだね。うん、これは本当にほかの手段がなくなったとき、使おう。」
「そうだね。じゃ、作戦の確認をするよ……。」

◆

〈一回戦　第一試合〉

「一戦目で当たるとはな。待つ手間が省けたというものだ。」
「そりゃあなによりだ。こっちも同じ気持ちだぜ。」

アリーナに、４機のＩＳが浮かぶ。織斑一夏の白式、シャルル・デュノアのラファール・リヴァイヴ・カスタム?、ラウラ・ボーデヴィッヒのシュヴァルツェア・レーゲン、そして一機だけ場違いな、篠ノ之箒の打鉄。

「いや、事実かもしれないが！わざわざ言うことか！?」

試合開始まで、あと5秒。各々が、心の中でカウントする。
４秒、３秒、２秒、１秒――

――――始め！！

「「叩きのめす。」」

一夏とラウラは同時に言葉を放った。白式は瞬時加速を行い、ラウラへと肉薄する――！！

「おおおっ！」
「ふん……。」

が、ラウラはそれを見切り、右手を突き出す。
――そう。ＡＩＣだ。これを破るべく不意打ちを選択する、という一夏の奇策は、敵に読まれていたのだ。
腕が、胴が、足が、白式の全てが、ＡＩＣという名の網に囚われる。
…同じ突撃狙いでも、せめて、一夏が『杜若（かきつばた）』でも使えれば、回避できたかもしれないが。あいにくそんな技は誰も教えていないし、

そもそもこの歴史にその流派は存在しない。

「くっ……！」

「開幕直後の先制攻撃か。わかりやすいな。」

「……そりゃどうも。以心伝心で何よりだ。」

「ならば私が次にどうするかもわかるだろう。」

シュヴァルツェア・レーゲンの肩に搭載された大型レール砲（カノン）が、発射態勢を整える。この直撃を受ければ、いかなＩＳも無事ではいられまい。

――が、忘れてはいけない。この戦いは、チーム戦であるのだ。

「させないよ。」

シャルルが一夏を飛び越えて出現。手にした六一口径アサルトカノン〈ガルム〉が火を噴き、ラウラに爆破弾（バースト）が降りそそぐ。

「ちっ……！」

レールカノンの砲身が白式からずれ、弾頭は空を切る。さらに、シャルルはそのままラウラに攻撃を続け、追い払う。

この援護により、一夏はＡＩＣから解放された。

「逃がさない！」

シャルルは突撃体制へと移り、左手にアサルトライフルを呼びだす。すると一秒以内に銃が出現し、銃弾を放ち始める。

――これこそ、シャルルの固有技能、『高速切替（ラピッド・スイッチ）』である。

そう。シャルルは普通の人間でありながら、葵と同様に、リアルタイムの武装呼び出しが可能なのだ。
銃弾が、ラウラに迫る。しかし、繰り返すようだがこれはチーム戦。

「私を忘れてもらっては困る。」

箒の打鉄が出現。実体シールドを展開して銃弾をはじき、そのままシャルルへと斬りかかった。が、シャルルは余裕の表情。箒が弱いから？量産機だから？
――否。

「それじゃあ俺も忘れられないようにしないとな！」

シャルルの背後に、瞬時加速を行った一夏が迫る。ぶつかる直前に、シャルルは宙返りをしてポジションチェンジ。一夏と箒の近接ブレードが、衝突して火花を散らした。

キン！ガキン！

白式はスラスター推力を上げながら、何度も打鉄に斬りかかる。箒も全てを防いではいるものの、勢いに押されてじりじりと後退していく。

「くっ！このっ……！」

このままではマズイ。焦れた箒は、刀を上段に構え、振りかぶる。
そう――彼らの狙いどおりに。

「シャルル！」
「うん！」

左手を峰に添え、一夏は雪片弐型を寝かせて構える。完全な受けの太刀。

その刹那、一夏の背後に隠れていたシャルルが両脇から手を伸ばす。その両手に握られた武器は六二口径連装ショットガン、〈レイン・オブ・サタディ〉。

この距離なら、たとえ黄河が逆流しても外さない。

箒の顔が青ざめる。一連の動きは、全てコンビネーションだったのだ。

フォーメーションＳ３２。あの時は剣を持った方が後ろにいたが、その逆バージョンというわけだ。

チームワークがなければ、成立しない戦い方。箒とラウラでは、成し得ない戦術。

シャルルが引き金を引く。放たれた散弾は、しかし虚しく宙をきる。そう、箒が消えたのだ。

「邪魔だ。」

箒をワイヤーで投げ飛ばしたラウラが、無理やり入れ替わり急接近する。

助けたわけではない。ラウラの独断による行動。その証拠に、箒は地面に叩きつけられ、わずかにダメージを受けている。

が、ラウラはそんな箒を気にもせず、一夏たちへの攻撃を始める。プラズマ手刀を用いて、斬撃、突撃、刺突とバリエーション豊かな乱打を繰り出す。

一刀ＶＳ二刀――。

「数の差で私が有利だな。」
「たかが二倍じゃねえか！」

一方、シャルルも同時展開された６本のワイヤーブレードに阻まれ、うまく援護ができないでいた。

（シャルル、無事か？）
（一夏こそ。すぐにサポートに入るからね。）
（いや、いい。このまま例の作戦で行こう。）
（……。わかった。）

ＩＳのプライベート・チャネルによる短いやりとり。ラウラを相手にするため、新たなる策が発動する。
シャルルはラウラの射程から逃れ、箒へと肉薄したのだ。

「相手が一夏じゃなくてゴメンね。」
「なっ……！？バカにするなっ！」

激昂する箒は、近接ブレードでシャルルに襲いかかる。シャルルも武器を近接ブレード、〈ブレッド・スライサー〉に変更し、受け止める。
一刀ＶＳ一刀。しかし、シャルルには銃があった。
レイン・オブ・サタディ発砲。打鉄の装甲が、鉄塊によって削られていく。

「くっ……！」

唇を噛む箒。剣で、銃で、自在に攻撃を繰り出すシャルルに、箒の

勝ち目は少なかった。
ゆえに、箒は地上へと向かう。

「逃がさないよ！」

シャルルの追撃をかわし、防御しながら、打鉄はその二本の脚で、大地に立った。

「これで、お前の攻撃の自由度は半減した！不本意だが、時間稼ぎをさせてもらうぞ！」

奇しくもそれは、箒の指導者である紅也が、好んで使う戦法であった。

「なるほど、いい手だね。でも……箒の腕じゃ、僕に射撃は当らないよ！」
「ふっ…。遠距離攻撃が、銃だけだと思うな！」

ザクリ！
箒は、刀をアリーナの地面に突き刺す。
シャルルは、紅也との交戦経験がない。ゆえに知らない。この技は――――

「先に片方を潰す戦法か。無意味だな。」

一方のラウラは、シャルルに向けていたワイヤーブレードを全て一

夏へと向け、手数で圧倒していた。一方の一夏は、反撃など考えず、全ての力を防御に回す。
そう。一夏の選んだ戦略も、時間稼ぎであった。
ただし、距離はとらない。この間合いから離れたら最後、もう一度食らいつくのは不可能に近いからだ。
剣は刀で、ワイヤーは足で蹴り続ける。驚異的な集中力で、被弾を最小限に抑えることに成功していた。

「貴様の武器はそのブレードのみ。近接戦でなければダメージを与えられないからな。」

ラウラも、一夏の意図に気付く。しかしあくまで自信があるのか、間合いはそのままに剣舞を続けていた。

「うおおおおっ！」

零距離。すでに「とっつき」の間合いで行われる高速戦闘。…が、そんな戦いに飽きたのか、ラウラはプラズマ手刀を解除。ＡＩＣを起動して、白式を拘束する。

「では――消えろ。」

６つのワイヤーブレードが、一夏へと食らいつく。

「くそおおっ！」

斬。
斬。
斬。
斬。

斬。
斬。
白式の装甲は３０％以上削られ、シールドエネルギーも半分持っていかれる。
が、攻撃は終わらない。一夏の右手は二本のワイヤーに拘束され、そのまま床へと叩きつけられた。
「がはっ！」
肺が圧迫され、空気が漏れる。
そんな無防備な一夏に、ラウラは照準を合わせる。レールカノン起動。光が臨界し、砲弾が放たれる。
「とどめだ。」
弾種は、対ＩＳアーマー用特殊徹甲弾。当りどころによっては、一瞬で勝負が決まってしまう。もはや一夏に、回避するすべは残されていない。
――――そうだ。
一夏は、紅也を思い出す。あいつの刀は、かつて砲弾を切り裂いていた。
やるしかない。雪片弐型を握る手に力がこもり、右腕を動かす。
しかし。
その右手に、先程のワイヤーが絡まっていた。これ以上、手は動かせない。
万策尽きた。一夏がとれる手段は、もう何一つ残っていない。

そう、一夏にできることは、ない。

「お待たせ！」

ガキン！

シャルルのシールドが、迫る砲弾を防いだ。そして絡まったワイヤーを切断し、白式を解放する。

離脱。

「シャルル……助かったぜ。ありがとよ。」

「どういたしまして。」

「箒は？」

「思ったより苦戦したけど、お休み中だよ。」

そう。箒の放った空破斬は、まだ未完成。ヴェントを破壊したものの、紅也が放つほどのダメージは発生しなかったのだ。そしてシャルルに間合いを見切られ、善戦するも、撃破されてしまった。

今は、アリーナの隅で膝をつき、うつむいている。

「さすがだな。」

「その言葉はこの試合に勝ってから、ね。」

残された一丁のマシンガン、ヴェントを投げ捨て、シャルルは武装を展開する。

「ここからが本番だね。」

「ああ。見せてやるとしようぜ。俺たちのコンビネーションをな。」

これで2対1。試合はまだまだ、加速していく――――

第４０話　開幕！学年別トーナメント！（後書き）

さて、次回！

本来の過程と、微妙に異なる状態で進む試合！
このズレは、どんな形で修正されるのか！？

一夏ＶＳラウラ、中編です。

第４１話　俺たちの戦いはこれからだ！（前書き）

えー、打ち切りとかではないので、安心してください。

一夏ＶＳラウラ、中編…ですが、主役はシャルルです。

第４１話　俺たちの戦いはこれからだ！

「ふあー、すごいですねぇ。二週間ちょっとの訓練であそこまでの連携が取れるなんて。
やっぱり織斑君ってすごいです。才能ありますよね。」
「ふん。あれはデュノアが合わせているから成り立つんだ。あいつ自体は大して連携の役には立っていない。」
「そうだとしても、他人がそこまで合わせてくれる織斑君自身がすごいじゃないですか。魅力のない人間には、誰も力を貸してくれないものですよ。」
「まあ……そうかもしれないな。」

ここは観察室。教師のみが立ち入りを許されたこの部屋で、千冬と真耶は第一試合を見ていた。

「それにしても学年別トーナメントのいきなりの形式変更は、やっぱり先月の事件のせいですか？」
「詳しくは聞いていないが、おそらくそうだろう。より実戦的な戦闘経験を積ませる目的で、ツーマンセルになったのだろうな。」
「でも、一年生は入学してまだ三ヶ月ですよ？戦争が起こるわけでもないのに、今の状況で実戦的な戦闘訓練は必要ない気がしますが……。」
「そこで、先月の事件が出てくるのさ。――あのＩＳの所属は不明だが、山代曰く、今の狙いは織斑だそうだ。だが、今年の新入生には第三世代兵器のテストモデルが多い。万が一を考えると…。」
「――あ！つまり、自衛のため、ですね。」
「そうだ。各々が自衛して、時間を稼げれば、我々は直ちにあの二人を出撃させる。
――残念ながら、ここのＩＳではＰＳ装甲には対抗できないから

な。」

◆

「これで決めるっ！」

一夏は、零落白夜を発動。形成されたエネルギー刃が、ラウラへと迫る。

「触れれば一撃でシールドエネルギーを消し去ると聞いているが…それなら当らなければいい。」

ラウラのターン。ＡＩＣを起動。不可視の網が、白式を捕らえんと次々に展開していく。

が、一夏は急停止・転進・急加速を繰り返すことで、なんとかかわしていく。

――これは、ひとえに訓練の賜物であった。

『いい、一夏？ＡＩＣも衝撃砲も同じような原理だから分かるんだけど、使うには、相当な集中力が必要なの。』

――鈴が。

『イメージをまとめるのに重要なのは、ポーズをとることですわ。

例えば、そちらに手を向けるとか、目で見るとか、そういった動作があげられますわね。』
――セシリアが。

『射撃回避？そんなの、銃口を見ればいい。所詮、どんな武器も直進しかできないからな。』
――紅也が。

『等速運動は、読みやすい。緩急をつけ、ジグザグに動くだけでも、狙いはつけにくい。』
――葵が。

いろいろなことを、教えてくれた。
全ては、今日、この日のために。

ラウラの右手、左手、目線の動きに注意しながら、俺は回避を続けた。

「ちょろちょろと目障りな……！」

とうとうワイヤーブレードの間合いまで接近。攻撃が、さらに激しさを増していく。
それを補うのは、支援役のシャルルの射撃だった。

「一夏！前方二時の方向に突破！」
「わかった！」

ラウラへの牽制と、一夏の防御。たぐいまれな器用さでそれらをこ

なすシャルルのおかげで、1＋1は3にも4にもなる。

「ちっ……小癪な！」

とうとう、一夏は自分の間合いにラウラをとらえる。後は、一撃入れれば、全てが決まる。

――が、それを許すほど、ラウラは甘くは無い。

「無駄だ。貴様の攻撃は読めている。」

「普通に斬りかかれば、な。――それなら！」

一夏は構えを変える。刺突の構え。

確かに読みやすいかもしれないが、最速の構え。斬撃とは、スピードがまるで違う。

これで、腕の軌道を捉えにくくするのが、一夏の狙いだったのだが。

「無駄なことを！」

白式が停止する。ＡＩＣだ。

腕に限定せず、全体を拘束。これで、一夏は動けない。

――が、思い出してほしい。彼は、一人じゃない。

「ようはお前の動きを止められれば――」

「……ああ、なんだ。忘れているのか？それとも知らないのか？俺たちは――ふたり組なんだぜ？」

「！？」

そう。この瞬間、ラウラの意識からシャルルが消えていた。

目の前での刺突。その動作が、ラウラの注意を一夏だけに向けさせる罠。

――ミスディレクション。

シャルルは、すでに零距離射撃を行っている。
連射されるショットガン。それはシュヴァルツェア・レーゲンの大型レールカノンを撃ち抜き、爆散させる。
――この瞬間ラウラは、遠距離への攻撃手段を失った。

「くっ……！」

これにより、一夏の拘束が再び解ける。
先程もそうだったが、ＡＩＣは『停止させる対象に意識を集中させないと、効果を維持できない』という弱点がある。この条件を考えると、自らを2対1の状況に追い込んだラウラの選択は、愚かだったと言える。

「一夏！」
「おう！」

再度、雪片弐型を構え直す一夏であったが、そのエネルギーは、急速に消滅していく。

「なっ！？ここにきてエネルギー切れかよ！」

そう。
零落白夜の弱点は、その燃費の悪さ。
ラウラの攻撃によって、エネルギーを減らしすぎたのだ。

「残念だったな。」

すかさずプラズマ手刀を展開したラウラは、一気に一夏の懐へと飛

び込んだ。
手刀をクロスさせ、振り抜こうとする。
痛みとともに刻まれたあのX字を、ラウラは忘れていなかった。
――そういえば、あの時、誰かが乱入したのを見た気がする。誰かが、私を助けてくれたのだろうか？…それに、私を保健室まで運んだ人物は――
ふと頭をよぎった疑問。が、戦闘中のラウラは、すぐにそれを忘却する。
「限界までシールドエネルギーを消耗してはもう戦えまい！あと一撃でも入れれば私の勝ちだ！」
その通り。白式のエネルギーは、残りわずか。だが、零ではない。
一夏は、その『わずか』を守り続ける。
「やらせないよ！」
「邪魔だ！」
援護を試みるシャルルへ、ラウラはワイヤーブレードを放つ。しかも、剣を振るう手は少しも緩まない。さすがは軍人、といったところか。
そしてとうとう、シャルルに限界が訪れる。
「うあっ！」
「シャルル！くっ――」
「次は貴様だ！墜ちろっ！」
「ぐあっ……！」

被弾するシャルル。それに気をとられた一夏は、プラズマ手刀の一撃を受けてしまう。
そのまま力を失った白式は、ゆっくりと床へと落ちていった。

「は……ははっ！私の勝ちだ！」

早くも勝利宣言をするラウラ。――が、それは油断だった。
どんな強者でも、満身は即、敗北につながる。現に、かの英雄王ですら、それが原因で苦い敗北を経験している。

驕れる者は久しからず。

それは、歴史が証明している。

誰が言ったか。「人は、勝利を確信した時こそ油断をする」――！

「まだ終わっていないよ。」

ラウラに迫る、超高速の影。それは、先程被弾したはずのシャルルであった。

「なっ……！瞬時加速（イグニッション・ブースト）だと！？」

それは、シャルルが使えるはずのない技術だった。ラウラの表情に、驚愕と狼狽が浮かぶ。
それは、一夏も同じ。彼もまた、その事実を知らなかったのだ。

切り札は、隠すことに意味がある。
「こんな手が来るわけない」と思わせた時点で、切り札は必殺とな

る。
かの泥門の司令官も、そう言っていたではないか。
「今初めて使ったからね。」
「な、なに……？まさか、この戦いで覚えたというのか！？」
そう。シャルルは戦いの中で、瞬時加速を自分のものとして体得したのだ。
まさに見稽古。彼女は、また少し強くなった。
「ふっ……。だが私の停止結界の前では無力！」
ラウラは手をかざし、ＡＩＣの発動体制に入る。
――が、そこでまたしても邪魔が入った。
ガガガッ！
「！？」
真下からの、アサルトライフルの斉射。それを放ったのは、一夏の白式が手にした、シャルルのライフルであった。
――そう、この作戦は二段構え。シャルルが捨てたのは、かつて使用許可を出したあのライフルだったのだ。
「これならＡＩＣは……って、しまった！」
唯一の誤算は、その弾数が、思ったよりも少なかったこと。
箒の善戦が、思わぬ結果を引き起こしたのだが、ラウラはそれに気づかない。

「こ、のっ……死に損ないがぁっ！」

――これで、白式の攻撃手段はなくなった。

しかし、気を逸らすには十分だったようで。

「これで、間合いに入ることができた。」

「それがどうした！第二世代型の攻撃力では、このシュヴァルツェア・レーゲンを墜とすことなど――」

そこで、ラウラはある情報を思い出す。

秘密裏に行われたという、デュノア社とモルゲンレーテの提携。

そしてモルゲンレーテの第二世代機が持っていた、必殺の武装を。

（まさか――ビーム兵器！？）

慌ててラウラは後退。…が、少し遅かったようだ。

ラファールの楯が吹き飛ぶ。被弾の衝撃ではなく、内側からの爆発で。

そして、隠された兵装が、姿を現した。

――六九口径パイルバンカー、灰色の鱗殻（グレースケール）。通称、盾殺し。

これが盾のなかに隠れているとは、なんという皮肉だろうか。

「「おおおおっ！」」

シャルルとラウラ、二人の声が重なる。しかし、瞬時加速によって勢いをつけたシャルルは、止まらない。

ズガンッ！！

一発目。

ＡＩＣは間に合わず、ラウラは杭を直撃する。

絶対防御が発動。シュヴァルツェア・レーゲンのシールドエネルギーが、大幅に減少する。

「ぐううっ……！」

殺しきれない衝撃が、ダメージとなってラウラを襲う。

――しかし、ラウラは安堵していた。

ビームじゃない。あの一撃ほど、痛くはない！！

ズガンッ！

即座に二発目。その衝撃で、ラウラは弾き飛ばされる。

そう、灰色の鱗殻の範囲外へと。

「！　しまった！」

焦るシャルル。が、もう遅かった。

「停止結界！」

ＡＩＣが、シャルルを拘束する。対するラウラのＩＳは、まだシールドエネルギーを残していた。

「今のは驚いたぞ…。が、貴様の奇策もここまでだ！」

距離をとり、ワイヤーブレードでとどめを刺しにかかるラウラ。
確かにこの状況では、シャルルの詰みだろう。
――もし、武器が灰色の鱗殻だけであれば。
ラウラのＡＩＣは、シャルルの体だけを拘束していた。よって、腕は自在に動く。
（こんなの――。本当は、すごく恥ずかしいんだけど…。）
しかし、これは、さっき登録したばかりの武器。いつものようには呼びだせない。
だから、シャルルは呼ぶ。
「ビーム・マグナム！！」
瞬間。
シャルルの右腕には、パイルバンカーに負けず劣らず凶悪な鉄塊が出現していた。
（これはギャンブル……！）
引き金を引く。するとカードリッジが取り込まれ――
ビキュゥゥゥゥン！！！
暴力的な、ピンク色の閃光が、銃身から飛び出した。
その熱量は凄まじく、すでに銃身が融解し始めている。

「なっ！？」

さすがにラウラも驚き、回避行動をとる。おかげで、直撃を避けることはできたが――

「ぐううううっ！？」

かすっただけ。それなのに、シールドエネルギーは大幅に減少し、しかも――

（ひ…引きずり込まれる！！）

今だ放射され続けるビームは、その中心へとラウラを引きずっていく。

黒いＩＳは、ゆっくりと、光の中に呑み込まれていった。

「あああああああああっ！！！」

爆音。

やがて、光は消滅した。アリーナの壁からは、煙がもくもくと立ち上っている。

ラウラの姿は見えない。

「い、生きてる……よな？」

「た、多分……。」

ＡＩＣから解放されたシャルルは、一夏のそばへと降下する。

二人とも、想像以上の破壊力を見せつけられて、冷や汗をかいている。

特にシャルル。下手すれば、人を殺してしまったかもしれないのだ。

その内心の葛藤は……推して知るべし。

◆

（何も……見えない。）

煙のせいでも、光のせいでもない。
いつの間にか、ラウラは闇の中にいた。

（私は……ここを知っている。
そうか……。また、戻ってきたのか……。）

これは、ラウラの心象風景。自分の心の闇。
思い出すのは、あの日。私に「ヴォーダン・オージェ」が施された、あの日。

常にトップだった私は、あの日から『出来損ない』の烙印を押され、蔑まれてきた。

ある日、研究所の一人が、こんな事を言っていた。

「まったく。これでは、第一号同様、処分するしかないか……。」

その言葉に、私は震えた。
第一号。かつてドイツで行われた『人間の後天的強化』の実験において誕生したという、遺伝子強化試験体。最初の一人。

彼女は高い能力を持っていたが、従順さに欠けていたため、秘密裏に廃棄されたという…。
――私も、殺されるのか？

死の恐怖に怯え、今まで以上に必死に訓練を積んでいた私は、そのころ、教官と出会った。
強く、凛々しく、堂々としたその姿に、私は惹かれた。

あの人のおかげで、私は強くなれた。
あの人の近くにいるだけで、力があふれてきた。

それなのに。
あの人は、日本に帰ると言っていた。

「私には弟がいる。」

そう言って、教官は話し始めた。弟の話を。
そのときのあの人の顔は、普段と違い、とても優しげで……。

私には、そんな顔が――いや、教官にそんな表情をさせる存在が、許せなかった。

（だから、敗北させると決めたのだ。あれを、あの男を、私の力で、完膚なきまでに叩き伏せると！）

――ならば、負けられない。
こんなところで眠っているヒマなど、ないのだ。
まだ、ヤツは生きていた。早く、トドメヲササナイト…

（力だ…。力が、欲しい。）

ドクン！
闇の深い所で、何かが脈打つ。
『――願うか……？汝、自らの変革を望むか……？より強い力を欲するか……？』
ああ、もちろん。
どんな力であろうと、使ってやる。
私の体を使え。この身は、所詮空っぽの器だ。
『馬鹿な奴だ。まだ、懲りてなかったのか。あんなに葵にボコされといてよ。』
先ほどとは違う、しかしどこかで聞いたような、男の声がする。
――うるさい。何だ、お前は。
『まあ、いいや。続きは現実世界で。
ただし、役者は代えるぜ。……俺の蒔いた種だ。刈らせてもらう。』
声が、途切れる。
Ｄａｍａｇｅ　Ｌｅｖｅｌ……Ｄ.
Ｍｉｎｄ　Ｃｏｎｄｉｔｉｏｎ……Ｕｐｌｉｆｔ.

Certification……Clear.

《Valkyrie Trace System》……boot.

そして戦いは、最後のステージへと移る。

第４１話　俺たちの戦いはこれからだ！（後書き）

ＶＴシステム起動！

…っていうか、初めての紅也不在回かも。

そんなわけで、次回に続きます。

第４２話　世界最強（前書き）

はい、一夏ＶＳラウラ、決着編です。

主人公交代？紅也、いらない子です。

第４２話　世界最強

「あああああああああっ！！！」

煙の中から、絶叫が聞こえる。ラウラの声だ。
とりあえず生きていたことに安堵しつつ、何かが起こっている事に対し緊張する。

「一体、何が……？」
「煙が、晴れるぞ。」

煙が晴れ、ラウラの姿を探した俺は、とんでもないものを目にする。
そう。そこにいたのは、シュヴァルツェア・レーゲンではなかった。

煙の中から現れたのは、漆黒の騎士だった。
ボディラインは、ラウラのそれをそのまま表面化したような感じ。
そして最小限のアーマーが、腕と脚についている。そして頭部はフルフェイスのアーマーに覆われ、目の個所には赤いラインアイ・センサーが輝いている。

問題は、その武装。
ビデオで何度も見て、そして最近になって自分が振るうようになったその剣の名は。

「雪片……！」

そう。千冬姉が使っていた、そして俺に受け継がれた、最強の刃。
それを、なぜ、こいつが……。

「一夏、来るよ！」

シャルルの声で、現実に引き戻される。
ほぼ無意識の行動だった。中段に刀を構え、敵の突撃を防ぎにかかる。
すると黒い敵は、居合いの要領で刀を振るい、俺の雪片弐型を弾き飛ばす。

「ぐうっ！」

まずい。俺を守るものは、もうない。敵は、上段の構えをとり、そのまま俺を両断しようとする。
あれは、千冬姉の戦法。やろう、武器だけじゃなく、戦い方まで…！！

とっさに後方退避。その判断は正しく、刃は左腕を、皮一枚斬り裂くにとどまった。…が、エネルギーが底をつき、白式が解除され、光となって消えてしまう。

…くそっ！ふざけんな！
俺は、まだ終われねぇ！この、ふざけた偽物をぶっ壊すまで、終われねぇ――――！！

「ＩＳが無い？それがどうしたあああっ！」

今の俺の武器は、己の拳一つのみ。それでも、あいつだけは、許せねぇ……。

「良く言った、一夏！」
「…後は任せて。」

俺が突撃を敢行しようとしたとき、ラウラのピットの方から、見覚えのある二機が現れた。

◆

『山代兄妹、話がある。』
『え？』
『…織斑先生。』
『今回のトーナメント、いつ再び襲撃が起きるかもわからん。…もし、またＸナンバーが出てきたら、お前らだけが頼りだ。そこで、非常事態に備えて、いつでも出れるようにしておいてくれ。』
『…なるほど。襲撃に備えて、タッグマッチにしたんですね。』
『…引き受ける。』
『そうか。では早速、第一試合だが――』

◆

「あの申し出は好都合だったな。おかげで、間にあった。」
「…間一髪。あのままじゃ、一夏は死んでた。」
「結果的に間にあったんだから、いいだろ。
――しっかし、ＶＴが発動したか。一応、リミッター―はかけたん

だけどな。」
「…バレない程度。弱すぎる。」
「それもそうだな。…じゃあ、試合開始だ！」

ヤッホウ！前話では出番が無かった紅也だ。
あの時、織斑先生から指示を受けた俺達は、ＶＴシステムの発動を警戒してボーデヴィッヒのピットで待機してたのさ。
ビームマグナムの爆音が響いたときは、死人が出たかと焦ったが、出てきたのはニセブリュンヒルデだった。
――８もＶＴの起動を知らせてくれたから、生きてるのは分かっていたんだが……本当に、暮桜そっくりだな。

「注意しろよ……。偽物とはいえ、ブリュンヒルデ。母さんに勝った相手だ。」
「分かってる。油断しない。二人でやる。」

俺は刀を、葵はビームライフルを、それぞれ構える。
――が、予想外の事態は、俺達の後方で発生した。

「待ってくれ！アイツは……アイツだけは、俺にやらせてくれ！」
「！？　一夏！？」

ＩＳを失い、左腕に傷を負った一夏が、ＶＴ－ＩＳに向けて飛び出そうとしていた。
それを、打鉄を展開している箒が、必死に抑えている。

「ちぃっ、こんなときに。葵！少し、一人で相手しててくれ！」
「了解。…すぐ戻ってきて。」

ブルーフレームがビームを発射し、ＶＴ－ＩＳを遠ざける。その間

に俺は一夏の元へ行き、話を聞くことにした。

「一夏！さっきも言ったように、ここは俺達が任されてんだ。お前の助けはいらねぇ。」

「うるせぇ！あいつ……あれは、千冬姉のデータなんだ。それは千冬姉のものだ。千冬姉だけのものなんだよ。それを……くそっ！」

「お前は……いつも千冬さん千冬さんだな。」

「それだけじゃねぇよ。あんな、わけわかんねぇ力に振り回されてるラウラも気にいらねぇ。ＩＳとラウラ、どっちも一発ぶっ叩いてやらねぇと気がすまねえ。

とにかく、俺はあいつをぶん殴る。そのためにはまず正気に戻してからだ。」

成程、一夏の言い分は分かった。自分の意思で、自分の手で、あのＶＴ－ＩＳを排除したいんだな。…でも、今の一夏に、それを許可することはできない。

「……そんな感情論で、何ができる。」

「！　紅也、てめぇ！」

「現実を考えろ！白式のエネルギーはゼロ。お前は手負い。そんな状態で出ていったって、殺されるぞ！」

「ぐっ……。」

先程からアリーナ内では、非常事態警報が鳴り響いている。俺は続ける。

「そもそも、鎮圧を任されたのは、俺達だ。具体的な策もなしにつっこんできたら、今度は無理やりつまみ出すぞ！！」

話はそれで終わり。俺は戦闘宙域を目指し、バーニアを吹かす。

◆

〈ｓｉｄｅ：一夏たち〉

「待てよ紅也！話はまだ――」
「落ち着け、一夏！」
「そうだよ。紅也の言葉を思い出して！」
「？　紅也の？俺には戦う力が無いから、ひっこんでろってことだろ！」
「違う！紅也は、出てくるなと言ったんじゃない。『具体的な策』を用意してから出てこいと言ったんだ！」
「……え？」
「箒の言うとおりだと思う。だって紅也、一言も『出てくるな』とは言ってないよ。」

シャルルにそう言われ、一夏は紅也の言動を思い出す。

――そうだ。『出ていったら殺される』、『つっこんできたらつまみ出す』。でも、『出てくるな』とは、一言も言ってないじゃないか。

「落ち着いたか？」
「あ、ああ……。」
「感情的な所も収まったかな？これで、いつもの一夏に戻った。」
「悪い、箒、シャルル。心配かけた。」

冷静になった一夏のその言葉に、箒とシャルルは笑顔を返す。

「…で、後は『具体的な策』なんだけど。たぶん、僕のリヴァイヴならコア・バイパスでエネルギーを移せると思う。」

「本当か!?だったら頼む!早速やってくれ!」

「けど!

けど、約束して。絶対に負けないって。」

シャルルにしては珍しく、その言葉は強く、有無をいわせぬものだった――

◆

〈ｓｉｄｅ：戦闘組〉

「墜ちろ!」

葵はビームを放ち、ＶＴ－ＩＳを一夏たちから引き離していた。さらにマシンガンやミサイルを呼び出して牽制するが、マシンガンはかわされ、ミサイルは斬られ、とどめに放ったビームも、機体を掠めるのみに終わる。

（くっ……。偽物とはいえ、流石はブリュンヒルデ…世界最強!）

武器は近接ブレード一本。それなのに、未だかつて感じたことの無

いほどの力を、葵は感じていた。

（でも…変。威圧感は、あんまり感じない…。）

そう。確かに、目の前の相手の強さは伝わってくる。それでも……母や、前のラウラ、さらには鈴音やセシリアからさえ感じた、気迫と呼べるものが、全く伝わって来なかった。

――それゆえ、彼女は目の前のＶＴ－ＩＳを、脅威とは見れなかった。

ビームライフルを収納し、右手にマシンガン、左手にバズーカを構える。

そして葵は弾速の遅いバズーカを、敵に向けて発射。同時に敵の進行方向にマシンガンを連射し続けた。

これは、昔自分が編み出し、母さんを驚かせた攻撃法。進行方向へ弾を放つことで、バズーカを避けた敵にダメージを与える、必中の攻撃。

だけど、これにはいくつか攻略法があった。コイツは、どんな対処をするのか…

ＶＴ－ＩＳはバズーカを回避せず、刀で迎撃した。マシンガンの弾は虚しく宙をきり、壁へと着弾する。

――確実な迎撃。しかし、それは反撃のための動作ではない。

もし、本当に「勝ちたい」と思っている人間が相手ならば、そのまま瞬時加速で突っ込んでくるなり、ライフルで弾と私を同時に狙う、といった奇襲をしてくるはずだった。

所詮は紛い物。そう思ったとき、葵は一気にやる気をなくした。

そんな時。

「待たせたな、葵！反撃、行くぜぇ！」

疑似的な瞬時加速を行うレッドフレームが接近し、棒立ちするＶＴ－ＩＳに斬りかかる。

推進剤を惜しみなく使用した、爆発的な加速。しかしＶＴ－ＩＳはそれに見事に反応し、居合のように刀を抜き放つ。

「イアイフォームだと！？甘いぜ！！」

が、紅也は両手で構えたガーベラ・ストレートで刃を受け止め、そのまま体当たり。

予想外の攻撃でＶＴ－ＩＳは吹き飛び、アリーナの壁に激突した。

それを見届けた葵は、すかさず紅也に接近する。

「フン！ウイルス程度に、人間様が負けるかっての！」

「…紅也。アイツ…」

「ああ。期待して損したぜ。これじゃ、まだボーデヴィッヒの方が強かった。」

「…同感。あれには、心がない。だから、弱い。」

「そうだ。一夏は、そんなものが姉のコピーだと考えると、許せないんだとよ。

……時間を稼ぐ。葵、くれぐれもトドメを刺すなよ。もちろん、お互い怪我をしないように、な。」

「…極めて了解。私はアレを壊さないし、紅也と自分を守る。」

煙の中から、ＶＴ－ＩＳが現れる。先程の体当たりでのダメージは、ほとんどないようだ。

「さあて、行くぞ！…慎ましく、な。」

ＶＴ－ＩＳは刀を振りかざし、紅也に狙いを定める。だが紅也は急制動、急旋回、急加速を駆使して、敵を間合いに入らせない。時には空振りした敵に急接近して蹴りを入れ、再び距離を置いていた。一方、葵はビームを封印し、マシンガン二丁で援護射撃を行う。そのせいでＶＴ－ＩＳは紅也に接近できず、装甲に傷を増やしていった。

ＶＴ－ＩＳは葵に狙いを変更。刀を上段に構えて瞬時加速を行うも、ミサイルの弾幕に阻まれる。その一瞬の硬直の間に紅也にシールドで殴られ、大きく体勢を崩す。

紅也を狙えば葵が。葵を狙えば紅也が。一夏達を狙えば両方が。隙のないコンビネーションを前に、ＶＴ－ＩＳはどんどんダメージを蓄積していく。

それがまだ残っているのは、ひとえに、手加減されているからであった。

――そして戦闘に、最後の役者が登場する。

「待たせたな、紅也、葵！」

「颯爽登場、ってか？」

「…待ちくたびれた。」

右腕と雪片弐型のみを展開した一夏と白式が、舞台の上へあがってきた。

「行くぜ偽物野郎。零落白夜――発動！」

ヴン……。

雪片から、エネルギーの刃が現れる。しかもそれはだんだんと形を変え、細く鋭く収束していく。最後に残ったのは、まるで日本刀のような刃。

（それが、お前の意志か……。）

（きれいな……光……。）

前座の出番は終わり。

一夏に道を譲り、紅也と葵は静かに退場する。

「紅也、葵、ありがとな。こいつは…俺が倒す！」

一夏は居合いの構えをとる。それは、先程までのＶＴ－ＩＳの構えと同じ。

当然だ。一夏と千冬は、兄弟であるのだから。

それは、『一閃二断の構え』。

千冬が、箒が、一夏へと教え込んだ構え。

腰を落とし、右手を背中へ。腰がねじれ、そこに力が集約されていく。

一夏の双眸は、敵をまっすぐに見据え、それのみに意識を集中する。

イメージするのは、波一つ立たない、穏やかな水面。

そこに、一滴の水が落ちた。波紋が広がる。ゆっくりと、同心円状に……。

心に映った水の雫と、刀を構える敵の姿が、重なった。

ＶＴ－ＩＳが接近する。太刀筋は、速く鋭い袈裟斬り。しかしそれは、機械的に振り下ろされた、もっといえば、プログラムされた動作。そんなものは――

「ただの真似事だ！」

横一閃。

刀が弾かれる。最初の攻防とは立場が逆。ＶＴ－ＩＳの頭が、がら空きになる。

これが本物の織斑千冬ならば、そのまま体を流し、距離をとった上で再び攻めるだろう。

しかし、ＶＴ－ＩＳは、その場で機械的に体勢を立て直す。

もちろん、一夏はそんな隙を見逃さない。

大上段に刀を構え、相手を縦に断ち斬った。

これぞ、一閃二断。一足目に閃き、二足目に断つ。

「ぎ、ぎ……ガ……」

ＶＴ－ＩＳに紫電が走り、真っ二つに割れる。まるでサナギから蝶が羽化するかのように、ラウラの姿が現れた。

二人の目線が交錯する。そして気を失ったラウラを、一夏はそのまま抱きかかえた。

「……まあ、ぶっ飛ばすのは勘弁してやるよ。」

――こうして長かった戦いは、一夏の勝利で幕を閉じたのだった……。

第４２話　世界最強（後書き）

なんか、一夏が明鏡止水の境地に。

「引き金は……お前が引け。」

…っていうセリフも入れたかったけど、残念ながらカット。

この戦いのＩＦ編を、明日あたりに割り込み投稿します。そちらもよろしくお願いします。

第４３話　いいか！お前に足りないものそれは情熱思想理念頭脳気品優雅さ勤勉

第４３話です。休みもあと少しで終わりなので、更新ペースを落とします。
そうそう、外伝を更新したのですが…。割り込み投稿だと、更新通知が出ないんですかね？どうすればいいのか…。

ラウラメインの話です。タイトルは…ノリでつけました。

第43話　いいか！お前に足りないものそれは情熱思想理念頭脳気品優雅さ勤勉さ

強さとは――なんなのか。

『強さっつーのは心の在処。己の拠り所。自分がどうありたいかを常に思うことじゃないかと、俺は思う。』

……そう、なのか？

『そりゃそうだろ。自分がどうしたいかわからねーやつは、強い弱い以前に歩き方を知らないもんだろ。』

……歩き、方……。

『どこへ向かうか。どうして向かうか、さ。』

……どうして向かうか……。

『つまり、やりたいことはやったもん勝ち。つまんねー遠慮とか我慢とか、損するぞ？
やりたいようにやらなきゃ、人生じゃねぇよ。』

――では、お前は……？お前は何故強くあろうとする？どうして強い？

『強くねえよ。俺は、まったく、強くない。
けれど、もし俺が強いっていうのなら、それは――』

――それは……？

『強くなりたいから、強いのさ。』

――。

『それに、強くなったら、やってみたいことがあるんだよ。』

――やってみたいこと……？

『誰かを守ってみたい。自分の全てを使って、ただ誰かのために戦ってみたい。』

――それは、まるで……あの人のようだ。

『そうだな。だから、お前も守ってやるよ。ラウラ・ボーデヴィッヒ。』

そう言い残して、男の姿は掻き消える。

そして瞬きした瞬間、周りの風景は、ＩＳ学園の教室へと変化していた。

『あーあ、やっぱりこうなったか。』

誰かが、後ろから歩いてくる。振り返ると、そこにはＩＳ学園の制服を着た、男子生徒が立っていた。

聞き覚えのある声。意識を闇に呑まれる前、確かに聞こえた声。しかし、その顔が分からない。まるで、闇に隠されているかのように、見えなくなっているのだ。

『分かったか？本当の強さってやつがよ。借り物の力じゃ、本物に

は勝てないぜ。』

――お前は。

『ん？』

――お前にとって、強さとは、何だ？

『俺にとっての強さ、か。うーん、俺はあんまり強くないからな。』

――あいつと同じ事を言う。

『あいつ、ってのが誰のことかは分からんが……。……そうだな、俺の知っている、強い人の話をしよう。それでいいか？』

――ああ、構わない。

『――ある島に住んでいた感情を持たぬ男は、一人の女に惚れたことで、彼女を守る刀となることを誓った。彼女の死後も、彼女のことを思い続け、彼女のためだけに国と戦った。』

――守るものがあるものは強い、と？

『そこは自分で考えてくれ。

――またある男は、望まぬ争いに巻き込まれたが、自分の理想を貫くためにがむしゃらに戦い続けた。そして戦いの果てに自らの可能性を撃ち破り、茨の道を進むと決めた。』

――目標がある者は、強くなれるのか？

『――またある女は、自分の半身を失って絶望したが、そんな弱い自分を殺した。その後も心の闇と向き合い続け、それに呑まれることなく、自らの未来をつかみとった。』

――闇と、向き合う……。

『まずは、周りを見渡してみろ。お前が拒絶しているものに、目を向けてみろ。
…そうしなきゃ、何も始まらないぜ?』

――だが、もう遅い。私は、いろいろなものを置き去りにしてきた。今更、何かが見つかるわけがない。

『それも『拒絶』だぜ。
挨拶するだけでもいい。笑顔を向けるだけでもいい。
それも無理なら……そうだな、現実世界の俺の所に来いよ。きっと、何か得るものがあるだろうよ。じゃあな、ボーデビッヒ。』

――待て!私は……

◆

「ボーデヴィッヒだ!」
「……。」
どうやら、夢を見ていたようだ。

私は、ベッドの上に寝かされている。……前にも見たことのある天井だ。

ふと、近くから気配を感じる。そちらに顔を向けると、教官が椅子に座って、私の顔を見ていた。その表情には、隠しきれない驚愕が浮かんでおり――

「……第一声がこれとは、脳の検査をした方が良かったか？」

「ち、違います教官！これは、その……。」

わたわた。

両手を振って否定しようとするが、突然走った痛みに思わず顔をしかめる。

「――っ。そうだ……私は……？」

「全身に無理な負荷がかかったことで筋肉疲労と打撲がある。しばらくは動けないだろう。無理をするな。」

「何が……起きたのですか……？」

痛む身体を無理やり動かし、上半身を起こして教官の顔を見る。この様子では、私が忘れている何かが起こったのであろうことは、容易に想像がついた。そして、教官がそれを話したがっていないことも。だが、聞かなければいけない。そんな気がした。

「ふう……。一応、重要案件である上に機密事項なのだがな。」

そこで、教官は一旦言葉を切る。その様子から、ここで話したことは他言無用だと、ひしひしと伝わってくる。

「ＶＴシステムは知っているな？」
「はい……。正式名称はヴァルキリー・トレース・システム……。過去のモンド・グロッソの部門受賞者（ヴァルキリー）の動きをトレースするシステムで、確かあれは……。」
「そう。ＩＳ条約で現在どの国家・組織・企業においても研究・開発・使用すべてが禁止されている。それがお前のＩＳに積まれていた。」
「……」
「巧妙に隠されてはいたがな。操縦者の精神状態、機体の蓄積ダメージ、そして何より操縦者の意志……いや、願望か。それらが揃うと発動するようになっていたらしい。現在学園はドイツ軍に問い合わせている。近く、委員会からの強制捜査が入るだろう。」

操縦者の、願望……。
無意識に、シーツを握りしめる。もう、教官と目を合わせてはいられない。
だって。

「私が……望んだからですね。」

あなたに、なることを。

「ラウラ・ボーデヴィッヒ！」
「は、はいっ！」
「お前は誰だ？」
「わ、私は……。私……は、……。」

何故だろう。
自分は、ラウラ・ボーデヴィッヒだ。それなのに……そんな、簡単なことが、言葉にできない。

「誰でもないのなら、ちょうどいい。お前はこれからラウラ・ボーデヴィッヒになるがいい。何、時間は山のようにあるぞ。なにせ三年間はこの学園に在籍しなければいけないからな。その後も、まあ死ぬまで時間はある。たっぷり悩めよ、小娘。」

「あ……。」

意外だった。

教官は、強く厳しい人だった。

あのとき、廊下で話した時に、嫌われたかと思った。

それが…まさか、自分を励ましてくれるなんて。

教官が席を立つ。私はその姿を、ただ茫然と見送るしかなくて。

「ああ、それから。

お前は私にはなれないぞ。アイツの姉は、こう見えて心労が絶えないのさ。」

それだけ言い残し、教官は部屋から去って行った。

「ふ、ふふ……ははっ。」

なぜか、急に笑いがこみあげてきた。

そうだ。確かにあの二人は姉弟（きょうだい）だ。ふたり揃って言いたいことだけ言って、そのままいなくなるところなんか、特にそっくりだ。

しかもあそこまで言っておいて、結論は自分で考えろというのだから、ズルいことこの上ない。

――そういえば、もう一人。

自分の言いたいことだけ言って、揚句自分の名前を間違えて、それで去って行った奴もいたな。
最初に現れたのは、織斑一夏で間違いない。体験するのは初めてだったが、おそらくあれが相互意識干渉（クロッシング・アクセス）というものなのだろう。
ならば、消去法で考えると、浮かぶのは一人のみ。

山代紅也だ。

ＶＴシステムの起動前にも、あいつの声を聞いた気がする。
奴とは大した接点も、因縁もないはずだが、どうしてあの場に現れたのか？
断言はできないが、どうも相互意識干渉とは違う感じだった。まるで、通信機越しに話しているような、そんな感覚。

――現実世界の俺の所に来いよ。

……とりあえず、名前を訂正して。
それから、話してみるか。

◆

〈ｓｉｄｅ：山代　紅也〉

「遅いわ！！」
「…何が？」

事情聴取の後、俺と葵は合流して、保健室へと向かっていた。
ちなみに、俺達は予め有事の際の対応を任されていたので、聴取といっても簡単な報告のみだったのだが。

「何が、って……。俺、主人公だよな？最近、ポっと出の奴らに出番盗られ過ぎじゃないか！？特に前話！完全に一夏メインじゃねぇか！」
「…第一章では出ずっぱりだったから、文句言うな。」
「ハイゴメンナサイ。」

葵から真っ黒な何かが迸るのを見た俺は、「クスクス…」とか笑いだされても困るので、この話題を止める。

「…で、何でアイツと会うの？」
「ん？　まあ、アフターサービスってやつ、かな。」

シュヴァルツェア・レーゲンにハッキングし、ＶＴシステムを発見したあの時。
消去するのは（俺が）危険、と判断した俺は、せめてもの対抗策として、発動前に確認を促すという、最低限の安全装置（リミッター）を取り付けた。
それはＶＴシステムの一部に、自分から作った疑似人格データを埋め込むというものだったので、そのへんのことを覚えているかどうか、確認しに行くのだ。

「…何で、私も？」
「……だって、アイツ怖いじゃん。噛みつかれたらどうしよう。」
「…犬か。」

とかグダグダやってるうちに、保健室に到着。
早速ドアを開け、入室するも……

「ははっ……。くくく……。」

何か、笑っていらっしゃる。
ＶＴの影響で、精神崩壊しちゃったのだろうか？
これは、俺じゃ修正してやれない。劇場版では精神崩壊しなかったから、そっちで幸せになってくれ。
……でも、ＵＣにマリーダがいる以上、正史では精神崩壊決定だよなぁ。

「くくく……。
……はっ！？」

あ、目が合った。

「……。」
「……。」

沈黙。ここで俺が取るべき行動は……？

「ご、ごゆっくり？」
「ま、待て！違うんだぁぁ！！」

ボーデヴィッヒが叫ぶ。が、すぐに痛みが走ったようで、表情が歪んだ。

「お、おい。大丈夫か？無理すんなよ。」
「大丈夫だ……。心配するな。」

！？

まともな返事をした!?あの、ボーデヴィッヒが?

「?　どうした?何を驚いている。」

「あ、いや……。てっきり、いつもみたいに冷たくされると思ったからな。」

「……いつも、か。それが、拒絶だったのだな。」

何かを考え込むようなボーデヴィッヒ。

何があったんだろう?憑き物がおちたような表情だ。

「…怪我の具合は?」

「貴様は…。

筋肉疲労と打撲だそうだ。大したことは無い。」

「…そう。」

俺と葵は、近くから椅子を引っ張ってきて、それに腰かける。

…ん、まだ温かい。誰か来てたのか?

「…一つ、聞いていいか。」

椅子に座った所で、俺はボーデヴィッヒに声をかける。

「…何だ。」

その返答に、いつものぶっきらぼうさはない。それを聞いて、少し安心した俺がいた。

「あのとき……。ＶＴシステムが発動した前後のことを、お前は覚えてるか?」

「ああ、思い出した…。その声だ。」

答えになってないが…。
成程。俺の意識データと会話をしたのは、間違いないようだ。

「どこまで話したっけか？」
「私が『拒絶』したものに、もっと目を向けてみろ、と言っていたな…。
後、私の名前はボーデヴィッヒだ。ボーデビッヒじゃない。」

……？　さっぱり分からない。

「…あー、その話って、ＶＴに呑まれる前？それとも後？」
「？　後に決まっているだろう。」

……あり？
おかしいな。俺のシステムトラップは、ＶＴ発動前に起動するはずだったのに。

「…話？紅也、コイツと何を話したの？」

お、ナイスフォローだ、葵！
『ちょっと怒ったような口調で兄を問いただす妹』の演技をして、ラウラから話を聞き出すのか。

……演技、だよな？

「強さについてだ。織斑一夏と話した後、お前が現れた。」
「…どんな話？」
「そうだな。例えば……」

ラウラ説明中……

なるほど。

どうやら俺の意識データの残滓のようなものが、ＶＴシステムからＩＳコアに漏出して、そいつと話したようだ。

しかし聞けば聞くほどメタな発言が多い。コピーとはいえ、俺は俺か……。

「…で、これから私は、どうすればよいのだ？」

「オイオイ。散々『自分で考えろ』って言われてたのに、いきなり人に頼っちゃダメだろ。」

「む……。しかしだな……。」

どうやらボーデヴィッヒは、指示を聞くこと、頼ることになれているため、自分で何かをすることが苦手なようだ。

「じゃあ、少し考えてみようか。

ラウラ・ボーデヴィッヒ。何を求める？」

「……強さだ。教官やあの男のような、本当の強さ。」

「ラウラ・ボーデヴィッヒ。どこに求める？」

「……自分の、心の内側に。」

「ラウラ・ボーデヴィッヒ。どこを目指す？」

「……それが、分からない。」

……ふむ。

今のボーデヴィッヒに必要なのは、目的か。

これを考えさせるためには、さて、どうするか……。

「…あなたは、私より弱い。」

「…葵？」

唐突に、葵が呟く。
この状況で挑発か？……有り得ない。
おそらく、何か伝えたいことがあるのだろう。そう思い、俺は放っておくことにした。

「目的がないなら、まずは私を目指せばいい。」
「――お前、を？」
「…そう。でも、これは仮の目標。
その間にいろんな人と関わって、自分で新しい目標を見つけること。」
「…見つかる、のか？」
「…知らない。
…でも、これで、あなたは私と関わる理由ができた。」

――葵、成長したな。

そう。大事なのはきっかけだ。例えば葵と凰が友達になったのも、偶然会ったという「きっかけ」から生まれた事象。今まで周りから距離を置いてきたラウラは、葵と関わるきっかけを与えられた。そして葵という接点から、俺達と関わることができる。

「…いいのか？私は……。」
「…あの戦いは、お互い様。私も、やり過ぎた。」

うん。正直、あれはオーバーキルもいいとこだったと思う。
――とか考えてると、葵に睨まれた。以心伝心、恐るべし。

「まあ、そういうことだ。俺達二人が、お前にとって最初の友達だ。
――もっとも、お前なら、すぐにみんなに溶け込めると信じてる

ぜ。」
「最初の……。
そうだ。一つだけ、お前たちに聞きたいことがある。」
「…何？」
「答えられる範囲で、答えよう。」

その言葉に、ラウラは一度眼を閉じ、ややあって再び目を開く。
眼帯を外しているため、露わになっているオッドアイが、俺達二人を見つめる。

「お前たち……。『最初の一人』……アインス・イェーガーを知っているか？」

第４３話　いいか！お前に足りないものそれは情熱思想理念頭脳気品優雅さ勤勉さ

次回、作中でたびたび触れられてきた「最初の一人」について語ります。

第４４話　最初の一人（前書き）

はい、第４４話です。
今日から更新ペースを落とします。投稿時間も不定期になるかも。
最低でも一週間に一回は上げます。
では、どうぞ。久々のギャグ回です。

第４４話　最初の一人

――昔話をしよう。

まだ、戦闘機が軍事力の主だった時代。ＩＳが生まれる前の時代。
ドイツ軍は、秘密裏にある研究を行っていた。
――第一計画。

当時盛んだった遺伝子技術だけでなく、薬物投与や人体改造も含めた、強化人間の製造。

被検体となったのは、年端もいかぬ少年少女たち。皆名も分からない孤児であった。
過酷な環境や、強烈な拒絶反応により、一人、また一人と被検体は減っていく。

そんな中で、たまたま全ての処置に適合し、『成功作』となった者がいた。
彼女に与えられた名は、アインス・イェーガー。ドイツ製強化人間の、最初の一人であった……。

完成から数年。アインスは、与えられたノルマを順調にこなし、研究者たちの予想以上の能力を得ていた。この結果に軍部は歓喜し、研究所には多額の予算が与えられた。
これにより、研究は新たな段階へと進む。アインスのような後天的な強化素体ではなく、先天的に強化された素体を生み出す研究――

遺伝子強化素体製造プロジェクトが、始動した。
このプロジェクトに必要な、人工子宮の開発が難航したため、研究所は引き続き『後天的強化』の実験を続けた。

――そして、事件は起こる。

アインスが１４歳になったある日、研究員に反発し、脱走を企てたのだ。
最も多感な時期であるため、そういうこともあるだろうと考えた研究員は、警備体制の見直しのみを上申し、事件を隠した。
が、脱走騒ぎは繰り返され、とうとう、研究員に負傷者が出てしまった。

――事件が、表に出てくる。

上層部の決定は、「研究の凍結」および「アインスの処分」であった。
一部の研究員は反対したが、研究所の存続のために、結局は首を縦に振った。

こうしてアインスは拘留され、秘密裏に処分される。
そして研究所は第一計画を放棄。遺伝子強化素体製造プロジェクト専門の施設として、生まれ変わったのであった……。

◆

……とまあ、これが表の歴史。
実はこの話には、続きがある。

ドイツ軍関連施設に幽閉されたアインス。しかしアインスの処分に反対した研究者の一人が、この情報をある企業にリークしたのだ。

他国が作った、強化人間。
それを求めた企業は、アインス強奪のために、ある男を派遣した。

彼の名は――ユウヤ・ヤマシロ。

……ここまで話したら、もう分かるんじゃないか？

◆

「…うーん、知らねぇな。」
「とぼけるな。お前はともかく、こいつの髪や目、肌の色はアインスと同じだ。これが偶然だと？」

葵を指さすボーデヴィッヒ。元気になって何よりだが、しおらしい方がかわいかったぜ。

「…嘘はついてない。私の知り合いに、アインス・イェーガーなんて名前の人はいない。」

葵の言うとおり、俺の周りにそんな名前のやつはいない。

「…では、お前たちの母親の名を聞いても？」

ちらり、とこちらを見る葵。つられて、ボーデヴィッヒも俺を見る。

う……。なんつーか、すっごく興味津々な感じだな。

「ヒメ・ヤマシロだ。オーストラリアの国家代表なんだが…。知らないのか？」

「ああ、聞いたこともない。」

「…第一回モンド・グロッソの、準優勝者。」

「何だ。教官に負けたのか。」

……そうだよ。

エネルギーを無効化し、絶対防御を発動させるという「零落白夜」に、母さんは敗れた。

――この出来事が、シールドエネルギーに頼らないＩＳ、つまり全身装甲型の開発のきっかけである。

「まあ、興味があったら調べてみろよ。すぐ分かることだ。」

「む。それもそうか……。」

「じゃあな、お大事に。

俺の言った意味も、考えておいてくれよ。」

「…挑戦は、いつでも受ける。」

俺達は、保健室を後にする。

正直、これ以上話しているとぼろが出そうだったし、腹も減ってきた。

「…母さんの写真。」

「ん？ＨＰにも載ってるし、別に構わないだろ。」
「…でも、見る人が見れば……。」
「なに、カラコンも眼鏡もつけてるし、そうそうバレないって。」

母さんの写真は、髪の色こそ葵と同じだが、目にはオレンジのカラーコンタクトをはめた状態で撮ってある。
なんでも目を隠さないと、網膜の血管パターンを読み取られ、正体がばれる可能性があるらしい。…難儀な話だ。

「それに、万が一バレても、今のドイツ軍にはどうこうできないよ。」
「…ＶＴシステムのせい？」
「そういうことだ。さあ、飯にしようぜ。」

◆

「……あ。紅也、君。……それに、山代さん……も。」

食堂に行くと、見知った顔を見つけた。簪とは、なんだか久しぶりに会った気がする。

「…簪。」
「……前から、聞きたかったんだけど……。山代さんは……どうして、私を……呼び捨てで呼ぶの？」
「…紅也がそう呼んでるから。」
「じゃあ……私も、名前で……いい？」

「…別に、いい。」

――なんだか、今日は葵に驚かされっぱなしだ。
何と言うか…友好的というか、人間的に成長したというか。
いつもだったら、「…何故？」とか言って突っぱねるところなのに。
あのＶＴ－ＩＳとの戦いで、何か思う所があったのか？

とりあえず、席に着く。と、同時に、周りに座っていた女子たちが、一斉に聞き耳を立てる気配が伝わってきた。

「あの……さっきの試合のとき……何で、出てきたの？」

簪から問いかけられた疑問。その答えを、聞くために。

「ああ…簡単なことだ。不測の事態…ホラ、あの時みたいなのに備えろ、って。織斑先生が。」
「…異常鎮圧、あるいは時間稼ぎを頼まれた。」
「ああ……。二人とも、強い……から。」

……ううっ！
不覚にも、目がしらが熱くなってきた！
だって、セシリアや凰、シャル子といったら……。いつものメンバーの中での俺の味方は、剣の修行につきあってやってる箒だけだと思ってたけど。

「…ありがとう。」
「？　……紅也、君？」
「簪だけだよ。俺が『強い』って言ってくれるのは。」

「何か……あったの？葵さん。」

「…うん。」

まあ、俺のトラウマの話はどうでもいいとして。

「そういえば、結局トーナメントって、どうなるんだ？あれって一応、全員のデータをとるためのものなんだろ？」

「……分からない。」

「…多分、そのうち指示がある。」

「ま、それもそうか。」

そう言って一旦会話を切り、食事を続ける。

トーナメントの話はもう終わり。その後は他愛のない会話をして、なかなかに楽しい食事だった。

「じゃあ、ごちそうさま……。先に……行くね。」

「ああ。またな、簪。」

「…バイバイ。」

先に食べ始めていた簪は、空になった食器を持って去っていく。

…そういやあいつ、誰と組んだんだろう？

「…あ、一夏。」

「ん？よう、葵に紅也。早かったな。」

「まあ、こっちは元々教師側の依頼で動いてたからな。報告もすぐ済んだんだ。」

「なるほどね。こっちは事情聴取で、けっこう大変だったんだよ？」

次に現れたのは、一夏とシャルルだった。二人ともすでに食器を持ち、席を探していたようだった。一夏は麺類なのに、よくそんなギャンブルをする気になったな。

「まあ、立ち話もなんだから、座れよ。」
「それもそうだな、じゃ、失礼するぜ。」

一夏は俺の隣に、シャルルは葵の隣に、それぞれ座る。
俺と葵はデザートを食べながら、なんとなく静かにテレビを眺めていた。

『トーナメントは事故により中止となりました。ただし、今後の個人データ指標と関係するため、全ての一回戦は行います。場所と日時の変更は各自個人端末で確認の上――』

そんなテロップが画面上に現れる。

「ふむ。シャルルの予想通りになったな。」
「そうだねぇ。あ、一夏、七味取って。」
「はいよ。」
「ありがと。」
「「…夫婦か！！」」

思わずつっこみ。しかも葵とW（ダブル）で。

「ふ、夫婦って！ぼ、僕と一夏は別にそんな…。」
「そ、そうだぞ！何言ってやがる！」
「…動揺しすぎ。」

葵の言うとおり。

「少し落ち着け。男同士でそんな態度とってたら、学園中の腐った女子が興奮するぞ。」

とりあえず、こう言っておけば、シャルルへのフォローにはなるはず。

…まあ、別に今更女だってバレたところで、気にする人もこの学園にはいないはずだ。妄想するやつは多そうだが。

「腐ってない！これは新しい文化よ！」

「そうです！美春とお姉様の関係を、否定するというのですか！」

「アナタは今、学園生徒の半分を敵に回したわ！」

「外野は黙ってろ！半分もいるか！あと真ん中の奴、絶対違う学園の生徒だろ！」

具体的には（自主規制）学園の。

騒ぎは止まらない。わいわいがやがやと。

こうなったら……あの方法を使うしかないか。

「いいから、食事中くらい静かにしてくれ！あんまりうるさいと、もう一夏の写真を売らねぇぞ！」

「うっ…ズルイわ！山代くん！」

「卑怯な……。でも、仕方が無い。」

「ここは引くわ。覚えてなさい！」

女子の一団が去っていく。ふう。これで一件落着――

「してねぇよ！何だよ、俺の写真って！」

む、今度はこっちがうるさい。

「…一夏、食事中は静かに。」
「そうだよ。そんなことはいいから、早く食べようよ。」
「二人の言うとおりだ。麺が伸びるぜ。」

ちなみに一夏のメニューは、海鮮塩ラーメン。まだ半分以上残ってる。

「いや、『そんなこと』じゃねえからな、シャルル！おい紅也――」
「あ、箒だ。あんな所で何やってんだろな？」
「話を逸ら――」
「…おや、箒の様子が……」
「山代さん、それだと進化しそうなんだけど。」
「――わかった！この話は後で聞かせてもらうからな！」

一夏、撃退。呆然と立ってる箒の方へ、すたすたと歩いていく。
俺はシャルルと葵に対し、ぐっ、と親指を立てる。

「…で、シャルル。今週の分は？」
「はい、これ。今回のは寝起きや出撃前の写真もあるから、ちょっと高いよ？」
「元は取れるから別に構わねぇよ。」

一夏に見えないように、メモリーカードとお金を交換する。
…そう。実は俺とシャルルは、グルだ。
元々、俺は一夏の写真や情報などを（学生相手に）売って、小遣いを稼いでいた。しかしシャルルが同室になってからは、同室ならではの写真をこっそり撮ってきてもらい、それを売っている。シャルルには写真データ代と利益の3割を渡し、互いに良い関係を築いている。

ちなみに今一番の売れ筋商品は、訓練後の一夏がシャルルからタオルを受け取る写真。これは、シャル子にも気づかれないように撮ったものだ。

まあ、それはどうでもいい。

箒は、なんであんな状態になってるんだろう。

魂が抜き取られたかのような落ち込みよう……って！いきなり一夏を締め上げ始めたぞ！

「ほ、ほ、本当、か？本当に、本当に、本当なのだな！？」

「お、おう。」

あ、手を放した。何をあんなに…。

箒の顔は赤く、腕組みをして、照れ隠しのようにコホンコホンと咳払いをしている。

ピロリロリン！閃いた！！

例の、一夏との約束の話か。たしか、トーナメントに優勝したら、付き合うとかいうやつ。

あのとき既に展開は読めてたけど、さて、どうなるか……。

「な、なぜだ？り、理由を聞こうではないか……」

「そりゃ幼なじみの頼みだからな。付き合うさ。」

「そ、そうか！」

「買い物くらい。」

「……」

箒の表情がこわばった。一夏は、地雷を踏んだことに気付かない。

「……そんなことだろうと思ったわ。」

そう言った箒は、肩を落とし、うつむいた表情で俺の方へ……って、俺!?

「紅也!」

「は、はいっ!?」

思わず背筋を伸ばし、姿勢を正す。

今の箒……いや、箒さんからは、織斑先生に通じる何かを感じる。

「ちょっと付き合え。」

「へい……。ど、どこに?」

「剣道場だ。」

「さ、さいですか……。」

嫌な予感しかしない。

「行くぞ。」

「へ、へい……。葵、デザートあげるから、食器下げといて。」

「分かった。…骨は拾う。」

妙な覇気をまとった箒さんに逆らうことはできず。

俺は、ずるずると連行されたのであった。

第４４話　最初の一人（後書き）

そろそろ二巻も終わりです。
でも、まだヒロインズの立ち位置が未定。どうしよう？

第４５話　俺と混浴と最後の事件（前書き）

間が空きましたが、投稿します。

お詫びと言ってはなんですが、ちょっと長めです。

第４５話　俺と混浴と最後の事件

「はあっ！ふうっ！はああっ！！」
「やっ！とっ！甘いぜ！」

剣道場にて。
俺は現在箒の鍛錬（やつあたり）に付き合わされ、木刀を振っていた。
目の前の箒も、最初のころは力任せの剣筋が目立ったが、数回打ち合ううちに冷静さを取り戻し、きちんと打ち合えるようになってきた。

「まったく、一夏の、奴は！」
「だから、言った、じゃねぇか。」

カン！カン！カン！

他に誰もいない剣道場に、木刀の音だけが響く。

「残念だった、な！せっかく勇気を振り絞って告白したのによ。」
「なっ！別に、残念とか、そういうことでは…」
「ハイ、隙あり。」

バシーン！面一本。

お互いに向かい合い、一礼してから正座。
互いに木刀を置き、面を外す。

「どうだ？少しはスッキリしたか？」
「…まあ、気は晴れた。」

「なら、付き合った甲斐があったってもんだ。
…にしても、今日の試合。驚いたぞ。まさか、『空破斬』とは。」
そう。未完成だったとはいえ、あれは俺の技。
才能って奴かねぇ。いいなあ。
「…だが、失敗だ。あんなものでは、完成には程遠い。」
「そんなに簡単に習得されたら、俺の立場がないっての。」
「ふ……。それもそうか。」
互いに笑い合う。箒も、ずいぶんと良い顔で笑うようになった。
もう、迷いはないようだな。うん、安心した。
「？　どうした、紅也。」
「ん？何、いい笑顔だと思ってな。」
「な！？何をいきなりそんな……。」
「ハハハ、照れるなって！」
「照れてなどいないわ！ええい！もう一勝負……」
「あ！山代君、見つけましたよ～。」
再び戦闘態勢に入った箒を遮ったのは、突如現れた山田先生だった。
俺を探してたのかな？でも、よくここが分かったな……。
「織斑君とデュノア君から聞きました。二人とも、トーナメントが
終わったばっかりなのに、精がでますね～。」
「はあ。どうも…。」
言えない…。ただの箒の八つ当たりだなんて、言えない。
「…で、探してたってことは、何か用があるんですよね？どうかし

ましたか？」
「はい。実は今日、男子の大浴場の使用が解禁されました！」
「へえ…。汗かいてたから、丁度良かったですよ。」
「しかし、今日はボイラー点検の日では？」

通常モードに戻った箒が、山田先生に疑問を投げかける。山田先生は、「それはですね…」と前置きをしてから、話し始める。

「もう点検自体は終わったので、せっかくだから男子に使ってもらおうということになりました。」
「なるほど……。って、男子？」
「？　はい。山代君と織斑君とデュノア君。男子全員です。」
「…この話、もう一夏達には……。」
「もちろん、話しましたよ。とくに織斑君は、すごい喜びようで…。二人とも、もう脱衣所の前で待ってると思います。」
「そうですか。」（…葵、いるか？）

さりげなく8に手を伸ばし、通信開始。

（…何？今、忙しい。）
「ほら、あんまり待たせたら、二人に悪いですよ。」
「うーん、ここから寮まで、ちょっと遠いんですけど…。」（一夏とシャルルが部屋にいるか、見てきてくれないか。）
「なら、急いでくださいね。私、先に行って鍵をあけておきますから。」
（…鈴音が部屋にいるから、抜け出すのは難しい。）
「じゃあ凰も連れていけ。」（わかりました。じゃあ、また後で。）

……。

ま……間違えたあぁぁぁぁ！！

（何で丁寧語？分かった。後で見てくる。）

「や、山代君！？何で、凰さんを連れていく必要があるんですか？だ、ダメですよそんな！」

「おい、紅也！何を言ってるんだ！！何で鈴なんだ！」

「ああもう！どうしてこうなった！！」

◆

「ただいまー。」

「あ、紅。お邪魔してるわよ。」

山田先生と箒を適当にごまかして、部屋に戻ってきた俺を出迎えたのは、凰だった。

「お前のせいでえぇぇぇ！！」

「ちょっ！？何よ、いきなり？訳わかんないわよ！！」

「お前さえいなければ――ぐふう！？」

ボガッ！

「…鈴音をいじめるな。」

振りかえると、そこには菊一文字（もちろん鞘付き）を持った葵が。

その目は、ボーデヴィッヒを睨んだとき以上に冷徹な光を宿してい

て……。

「ごめんなさい、凰さん、葵さん。」

土下座。

ああ、なんか今日の俺、女の子に屈服してばっかだなぁ…。

「…で、何なの？アンタがここまで取り乱すってことは、なんか異常事態があったワケ？」

「え？　え～っと、それは、だな、その……。」

言えるか！！

コイツ、一夏に気があるんだよな？

それなのに、一夏とシャルルが一緒に風呂に入るなんて言ったら…。

……アレ？凰はシャルルが男だと思ってるから、問題なくね？

「そう、今日大浴場が使えるみたいだから、着替えを取りに来たんだよ。だけど、お前がいるせいで、持っていけねぇんだ。」

「何よそんなの！勝手に持っていけばいいじゃない。」

「恥ずかしいわぁぁぁ！」

「それこそ今更じゃない！アンタと私の仲でしょ？」

「ただの友人関係だろうが！」

「まあ、そうなんだけど。でも、葵に会いに来ると大体散らかってるから、下着くらい…」

「うわあぁぁぁぁぁん！！」

確かに、『今更』だった！

元の目的、ごまかすことは成功したけど、代わりに藪から何かが出

てきた！

「ふーんだ、凰のバカー！知ーらない！」
「なっ！？子供か、アンタは！」

タオルと下着を袋に入れて、ついでに8も持って、俺は部屋を出る。

「何よ、アイツ。ねえ、葵。…葵？」
「…マズイ。」
「ん？何が？」

◆

（…紅也。）
（葵か？どうした？）
（…二人とも、部屋にはいない。つまり…。）
（……さすがに、一緒に入ってはいないよな？）
（……）
（…とりあえず、山田先生をごまかしてくる。）

大浴場に向かっている最中。葵から通信が入ってきた。
葵はシャルルの正体を知っているので、俺の意図を理解し、行動してくれたのだろう。ありがたい話だ。

大浴場に到着。
山田先生は……いた。まだ入り口にいる。

「山代君、遅かったですね。」
「いや、すみません。タオルがなかなか見つからなくて…。」
「まあ、そんなことよりも、早く入ってくださいね。二人とも、もう先に入ってますよ。」
…遅かったか。

「そうですか。お待たせしちゃってすみませんね。…と、そうだった。よろしかったら、鍵は俺が閉めときますよ。」
「え!?で、でも、これは私の担当なので……。その……。で、でも、山代君は織斑先生に信頼されてるみたいなので、大丈夫かなぁ…。あ、な、無くさないでくださいね!絶対ですよ!」
……信頼、ねぇ。
織斑先生に頼まれたときの、あの態度。あれは俺達を信用した、というよりはむしろ……

――目に届くところに置いていたい、といったところか。

「大丈夫ですよ。子供じゃないんですから…。
あ、鍵は管理人室に返しておけばいいですか?」
「は、はい。お願いしますね。」

去っていく山田先生。…よし、一件落着。
念のため8で周囲をサーチ。脱衣所内に一人、浴場に一人……。よし、どうやら最悪の事態にはなってないらしい。

「入るぞー。」
「え、ちょ、紅也!?」

お、残ってたのはシャル子の方か。まあ、一夏の奴はあんなに風呂に入りたがってたしな。大方、気を使って脱衣所で時間つぶしを――

……。

アレ、何で下着姿？

「…シャル子。」

「へ！？紅也！これは、その……。」

「…とりあえず、服を着ろ。」

「う、うん……。」

ドアを閉め、後ろを向く。

がさごそ……と、服を着る音が流れる。それが収まったのを確認して、俺はシャル子の方を向いた。

「…で？何であんな姿だったんだ？一夏、中にいるんだろ？」

「へ？い、一夏なら、もうお風呂を出て……」

「ないよな。浴場の中に、一人分の生体反応があったぞ。」

「う……。」

気まずそうに、目を逸らすシャルル。なかなかレアな様子だが、いつまでも見てる訳にはいかねぇよな。

「…そんなに一夏と風呂に入りたかったか。」

「え！？これは、ぜんぜん、そういうのじゃなくて、ね。」

顔を真っ赤にしながら否定しても、全然説得力がないぞ。

「…惚れたのか？」
「ふえぇぇぇぇぇ！？」
「そうかそうか。」

ニヤニヤ。
へー。まあ、長いこと同室だった上に、タッグパートナーだったもんなー。

「じゃー、入ってこいよー。俺は出てくからさー。
あ、鍵は俺が持ってるから、二人とも出たら連絡しておくれー。」
「う……。また、その顔だ……。」

返事を聞かずに、俺は脱衣所を後にする。
ふーん、混浴かぁ。憧れるシチュエイションだなー。

……許さん。

一夏。それからシャルル。
明日は……ちょっと大変だぞ？

◆

深夜。某所にて。

「…で、こんな所に私を呼び出して、何の用かな？」
「黛先輩……。コレを。」

「…これは？」
「…実は今日、男子が大浴場を使いまして。これは…」
「え！？ウソ、二人の写真？」
「いえ、それはさすがに…。俺が行ったときには、もう二人とも入ってたので。仕掛ける時間が……。」
「ふーん。じゃあ、コレは何なの？見たところ…ただの空の脱衣所の写真だけど。」
「…いずれ分かります。とりあえず、預けますよ？」

◆

同じく深夜、保健室にて。

「クラリッサ、私だ。」
「た、隊長！？どうなさったんですか、こんな時間に？」

こんな時間…。ドイツにおいて、今はちょうど夕食の時間であるのだが…ラウラは気付かない。

「そ、その、だな……。お、男の気を引くにはどうしたらいい……？」
「は、ハイ？今、なんと……？」
「だ、だから！男の気を引くにはどうしたらいいのか、と聞いているのだ！」
「…わかりました。分かりましたが……何故そのようなことを？」
「そ、その……だな。…気になる男がいるのだ。」

「え!?隊長に……。ど、どんな方なんですか?」
「う、うむ。その男は、私の友になってくれると言った。力におぼれそうになった私を、何度も助けようとしてくれた。それと、強さの意味も……これは、自分で考えろと言われたな。…ここまで私のことを考えてくれたのは、教官とあの男だけだ。」
「…その男の名前は……いえ、聞くのは野暮でしょうね。…それで、強さの意味、とは?」
「ああ。私は、強さとは力だと思っていた。だが、それは違うらしい。そのことを、何人かの例を挙げて、伝えようとしていたな。」
「…参考までに、その例とやらを聞きたいのですが。」
「ああ。ただし、答えは自分で出す。余計なことは言うなよ。…一人目だが、確か『惚れた女のために刀となり、国を相手に戦った』とか……」
「七花――!!ちぇりおーーー!!」
「?
…で、二人目だが、『望まぬ争いに巻き込まれたが、理想のために戦い、自らの可能性を破った男』…」
「シローーーウ!!体は剣で出来ている!!」
「……さっきから、何を言っているのだ?
最後の一人は、『半身を失いつつも、弱い自分を殺し、心の闇と向き合い続けた』……」
「両儀……式ーーー!!」
「な、なんなのだ!さっきから!!」
「いいですねー。わかってますねー、その人!隊長、今度ぜひぜひ紹介を――」
「だ、ダメだ!あいつは――」

◆

さて、翌日。
シャル子は、なぜかＨＲに来なかった。
…まさか、一夏と何かあったとか？混浴以上の何かが？
だとしたら、一夏を斬る。
そういえば、ラウラもいないが……。さすがにあの怪我じゃ、今日は休むか。
「み、みなさん、おはようございます……。」
……ん？山田先生、なんだかお疲れですね。
そういえば、俺が風呂に入った後（もちろん一人）に鍵を返しに行ったら、パソコンとにらめっこしてたけど……。仕事で寝不足かな。
徹夜した中学生みたいな顔になってる。
「…山代君が失礼なことを考えてる気がしますが、当らずとも遠からず、って感じです。はあ…。」
やっぱり睡眠不足ですか。眠眠打破ありますよ。飲みますか？
「今日は、ですね……みなさんに転校生を紹介します。転校生といいますか、既に紹介は済んでいるといいますか、ええと……。」
……え？また転校生？聞いてないよ？
情報少ないよ！オーストラリア情報局、何やってんの！

「じゃあ、入ってください。」
「失礼します。」

――ああ、納得。
いつまでも男じゃいられない、隠す意味もないと。そういうことか。
現れたのは、女子の制服に着替えた――――

「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めてよろしくお願いします。」

ぺこり、と頭を下げる。
とうとう、シャル子はその真名を明かした。ついでに、その正体も。
名は、その存在を示すもの。それが偽りだったなら、その存在もまた偽物である。
昔、大佐と同じ声の人がそう言っていた。お前にだけは言われたくねぇよ！と思ったが、とにかくそう言っていた。
シャル子は、本物として存在することを決めたのだ。

「ええと、デュノア君はデュノアさんでした。ということです。はぁぁ……また寮の部屋割りを組み立て直す作業が始まります……。」

ドンマイ、山田先生。きっと、多分、メイビー、いつか良いことがあるさ。

「え？デュノア君って女……？」
「おかしいと思った！美少年じゃなくて美少女だったわけね！」
「って、織斑君。同室だから知らないってことは――」

あ、一夏のやつ、顔が青くなってる。

ザマミロ。男の夢を一人占めした罰だ。だけど……この程度で済むと思うなよ？

ガタン！突然、教室のドアが開く。

「はいはーい、新聞部でーす。話は聞かせてもらったよ。ふーん、昨日のアレって、そういうことだったんだー。

…と、いうわけで織斑くん、女子と混浴した感想は？」

…凰だと思ったか？黛先輩だよ！

「混浴、って…。俺とシャルロットは別々に……」

「とぼけても無駄だよ～？この写真が証拠だぁっ！！」

「えー？なになに？」

「ただの脱衣所の写真じゃ……」

「あ！見て見て！男子の制服が二着！」

「……あ、ああ、それは俺と紅也の……」

「あれ？織斑君とデュノアさん、一緒に脱衣所に入りましたよね？」

山田先生、ナイス！！

シャル子はあうあうしてるだけで、会話を訂正する気力は無いようだし、一夏の負けだ。

だが、駄目押ししたほうがいいか……？

「一夏ぁっ！！！」

教室のドアから飛び込んでくる、小柄な人影……。凰だ。

「昨日の紅の慌てよう……こういうことだったのね！

とりあえず……死ね！！！」

ＩＳアーマーを展開、衝撃砲、起動（アクティブ）……って、これはヤバイ！！

（８！）

《レッドフレーム、シールド展開！》

レッドフレームを身にまとい、俺は射線上へ。

…確かに一夏に痛い目に会ってもらいたかったが、ペディグリーチャムになってほしいとは思ってない。今の凰には、加減が効かないだろうから、とにかく防がないと……。

ズドドドドオンッ！

「ふーっ、ふーっ、ふーっ。」

…そこは「うーん、カ・イ・カ・ン？」じゃないのか？じゃ、なくて。

（８？ダメージは？）

《実体ダメージなし…。いや、命中なし。》

（…何？）

ありえない。代表候補生だぞ？この距離で外すわけが……。

「……間にあったか。」

…ボーデヴィッヒ？なるほど、ＡＩＣか。

それよりあのＩＳ、しばらく直らないと思ったんだが。

「助かったぜ。ありがとな。……それよりお前のＩＳ、もういいのか？ダメージレベルはＤ以上だったと思うんだが。」
「……コアはかろうじて無事だったからな。予備パーツで組み直した。」
「へぇ。よくそんな時間があったな。」
「まあな。……そ、それより、もうＩＳを解除してもいいぞ。」
「お、それもそうだな。よいしょ――――！？」

――――反応できなかった。
レッドフレームを解除し、顔が、体があらわになった時点でボーデヴィッヒに胸倉を掴まれ。そして……

キス、された。

……は、ハアアァァァ！？

何で？どうしてこうなった？
ＨＱ！ＨＱ！状況を教えてくれ！
――こちらＨＱ、それは出来ない。自分の力でどうにかしてくれ。

…と、絶賛パニック中の俺に対し、ボーデヴィッヒはさらなる追い打ちをかける。

「お、お前は私の嫁にする！決定事項だ！異論は認めん！」

…ハイ？それ、男が女（主に二次元美少女）に対して言うセリフだよね？

――まあ、冷静に考えられるのはここまでだった。
その後何があったのか、俺は覚えてない。何か、気が付いたら校庭

であおむけに寝ていて、性格が少しキツそうな赤い髪の女の子に声をかけられたような気がしたんだけど……。

忘れた方がいい気がする。うん。ゼッタイ。

第４５話　俺と混浴と最後の事件（後書き）

〈オマケ〉

「う……ここは……？」

「気がついたのね？いい、よく聞いて。あなたは死んだの。」

「…は？」

では、次話で2巻は完結です。

7日のこの時間に投稿します。

第４６話　幕間のお茶会（前書き）

４６話。二巻総集編です。
次話投稿は未定……。すみません！！

第４６話　幕間のお茶会

気が付いたら、時刻は放課後。

俺は自分の部屋で、ベッドに横になっていた。

幸い制服がボロボロだったり血まみれだったり、ハルバードを持った男が隣に立ってるなんてこともなく、いたって普通の状況だ。

…うん、帰ってきた。

なぜだか、そう思えた。

「…あ、気が付いた。」

「…あおい？」

顔を上げると、最初に見えたのはヒエピタを持った葵の姿だった。

うーん、ボーデヴィッヒにキスされた所までは覚えてるが、それ以降のことは思い出せな……いや、思い出したくない！？

記憶にプロテクトでもかかってるのか？

まあ、それにしたって熱は出ないはずだから、ヒエピタはいらないぞ、葵。

「…良かった、気が付いた。」

「おいおい、大げさだな。別に、打撲程度で死にはしな……」

「何か、『天使』とか『死んだ世界』とか言ってたから、てっきり……」

「前言撤回だ。あやうく戻れなくなる所だった。」

あぶねぇ。この小説が強制終了して、新しいクロスオーバー作品が始まる一歩手前だったようだ。葵には感謝を。下手人には鉄槌を。

「…具合、どう？」
「ん、ああ。もう起きれる。大丈夫だぜ。」
「…じゃ、着替えてから一夏の部屋に来て。先に行ってる。」
「え？あ、パジャマか……。
じゃ、なくて！一夏の部屋？待ちなさい、葵！あいつ、女の子と混浴するようなケダモノなんだよ！おにーちゃんは許しませんよ！！」

あ、葵の奴、行きやがった！
くそっ！あいつらを二人きりにしていられるか！
間違いが起こる前に、さっさと追いかけないと……。

◆

「…で、これは一体どういう状況？」

一夏の部屋に着いた俺を待っていたのは、葵や一夏だけでなく、箒、セシリア、凰、シャル子、それになんと、ボーデヴィッヒだった。
なんかこんな状況、前にもあった気がする。あのときは、確か、そう……

「じゃあ早速、今回の件について知ってることを話してもらうわよ、紅（ホン）！」

俺を対象とした、大尋問大会が開かれたんだっけか。

「…って、待て！この章ではXナンバーは登場してないし、俺が関わった事実も無い！！」
「とぼけるな。ニュースでやっていたぞ？モルゲンレーテとデュノア社が合併すると。」
へ？ようやく公表したんだ。しかし、何でそれだけの理由で俺を疑うかね、箒は。
「シャルロットから聞いたけど、紅也、シャルロットが女だって知ってたらしいな。」
「そ、そうなんですの！？こ、紅也さん！そこのところを詳しく話していただきますわ！」
「う……わ、分かった。了解だ。」
セシリア、すごい迫力だ。一夏は……その無数の傷は何だい？みんなにやられたのかな？
「えーと、シャル子の件だな。簡単にいえば、『シャル子を男と偽って転校させた』とバラされたくなければ、モルゲンレーテと合併しろ…って取引したんだ。」
「…そして、モルゲンレーテの操縦者として保護。これで、フランス政府も手を出せない。」
「そういうわけだから、僕も正体を明かすことにしたんだ。…もう、みんなに嘘はつきたくなかったから…。」
なるほど。シャル子が正体を明かしたのは、そういう理由だったんだな。
「大体の事情は分かったわ。

…じゃあ次、昨日の混浴について、詳しい話を聞かせなさい！」
「そ、そうだ！あの写真、お前が撮ったんだろ！？」

「一夏、そういう問題ではないぞ。お前は当事者なのだからな。」
「…不潔。」
「貴様、それでも教官の弟か。」
「見そこないましたわ。」

女子勢の言葉を受けて、一夏は撃沈。シャル子もあたふたしてる。
…さて、何を話すかな？

「あー、まず、俺が箒と剣道やってた時、山田先生が呼びに来た。」
「ああ、それは覚えてるぞ。
…そういえばそのとき、鈴がどうのと言ってたが、あれは何だったのだ？」
「それも含めて話す。シャル子と一夏が一緒に入るのはマズい！と思った俺は、葵に通信して二人が部屋にいるか確かめてもらおうと思ってたんだ。」
「…それで？」
「それを山田先生と話してる最中にやってたから、通信と会話の返答を入れ替えちまったんだよ。」
「あー、要するに、私と葵が一緒にいて、葵が抜け出せないから『じゃあ凰も連れていけ』なんて言ったのね。…そういえば紅！アンタ、いつまであたしを凰って呼ぶ気よ。みんなみたいに名前でいいわよ。」
「では、鈴（りん）と。…ふむ、この響きは実に君に合っている。」
「なっ……／／／」
「…ネタ自重。」
「オーライ。じゃあ区別が難しいから、俺は鈴音と呼ぼう。」

何か鈴音が照れてるな。さすがはフラグメーカーの言葉。こうかはばつぐんだ！

「…コホン。そろそろ、話を戻してくださいませんか？」

「悪いな、セシリア。

…で、なんやかんや言って遅れて風呂に行った俺だけど、そのとき既に二人とも風呂に入っててな。で、ちょっとした悪戯心が芽生えた俺は、二人が一緒に風呂に入っているという証拠写真を撮って、風呂から退散したわけだ。」

「ちょっと、紅也、肝心なところが抜け――」

「要はシャル子の抜け駆けだ。…さて、判決は？」

「デュノア、そこに直りなさい！」

「ゆ、許せませんわ！一夏さんと…こ、混浴なんて！！」

「仕置きが必要だな。」

俺にとって余計なことを口走ろうとしたシャル子は、一夏ラヴァーズによって取り囲まれた。……計画通り（ニヤリ）

「…私からも、一ついいか？」

「ん、ボーデヴィッヒか。何だ？」

「ラウラと呼べ。キスまでした仲だろう？」

「ひどく一方的だったけどな……。まあ、悪い気はしなかったが。」

ギリギリギリ。

葵につねられた。地味に痛い。

「わかった。悪かった、葵。

…で、何だ？『最初の一人』については、何も知らんぞ。」

「その話はもういい。嫁の母親の顔は確認したからな。

ＶＴシステムに呑まれる前、確かに嫁の声を聞いた気がするのだが、何故だ？一夏との間に起こった相互意識干渉（クロッシング・アクセス）とは、また別の感じがしたのだが。」

…おお、その辺の説明を忘れてたな。

てっきり昨日の話でうやむやになったと思ってたが、まだ覚えてたか。

「ああ。葵のＩＳには敵の解析機能がついててな。それがＶＴを発見して、俺の機体に知らせたんだ。…で、俺はお前を保健室まで運んだ後、システムを解析した。

…一歩間違えば犯罪だったが、勝手にリミッターをつけさせてもらった。その、なんだ、危険な目に合わせたくなかったからな。」

俺自身を危険な目に合わせたくなかった。うん、間違ってない。

この話、嘘はついていないがホントのことも言ってない。我ながらひどい話だと思う。

「…答えになってないが。」

「まあ聞け。そのリミッターってのが、俺の意識データをトレースしたものでな。本来の役割は発動前の説得だったんだが……どういうわけか発動後も残留したみたいだ。お前と会話したのは、おそらくそれだろうな。もう消えてるはずだが、どうだ？」

「……ああ、もういないな。

これで理由はわかった。その…私の事を気遣ったというのなら、データを解析した件は不問にする。」

「助かるぜ、ラウラ。」

よし、言い訳終了。これで今回の件で犯罪者扱いされることはない…はず。

え、覗き?調査だよ、あれは。

「こ、紅也さん!何でボーデヴィッヒさんと仲良くしてらっしゃいますの!」

「セシリア、滅茶苦茶言うな!」

「そうだぞ。嫁と仲良くするのは当然だろう。」

「ラウラも、油を注ぐな!」

「…不快。」

「葵まで!?」

とりあえず最低限の言い訳は済んだが……。

この騒動を治めるには、どうすればいいんだろうな?

◆

「まあ、全員納得したようだな。」

「…良かった。」

あの後少し騒ぎがあったが、みんな聞きたいことは聞いたのか、一息ついてから去っていった。俺としても、納得させるだけの説明はしたので、今回の件から派生した騒動は、全て終結したと考えていいだろう。…これで、平和な日常が戻ってくる。

「ラウラに母さんの正体を感づかれたのは焦ったが、別人だと思ってくれたみたいだし。」

「…コンタクトが効いたんだと思う。」

「そうだな。見た目がそっくりな人なんて、結構いるし。ほら、簪だって髪の色、青だろ。」
「…キャラかぶり。」
「イヴさんみたいなことを言うな。…髪伸ばせば、ずいぶん違う感じになるだろ。ほら、もう肩まで伸びてるし。」
「お互い様。紅也も、一週間に一回は染め直してる。」
「…強化ってのも、考えものだな。」
「…うん。」

俺達の母は、ドイツにいた頃に遺伝子強化を受けていた。
その影響からか、俺達二人は父さん由来の遺伝形質をほとんど発現しておらず、母さんそっくりの見た目になっている。
それは、成長面にも影響を与えているようで、髪が伸びる速度も異常に早いのだ。身長は……母さん、そこまで大きくないからな。
で、でも！そのうち、きっと、もっと伸びる……はず。

「次の行事は…臨海学校か。」
「…うん。」
「……何も起こらないといいな。」
「……」
「黙るなよ！」

第４６話　幕間のお茶会（後書き）

と、いうわけで、次回からは3巻の内容に入ります。

実は、最も書きたかったのは、3巻の内容です。急展開などもあるかもしれませんが、ご容赦ください。

（追記）

次回更新は１０日の１６時です。

第４７話　危険な二人！紅也は眠れない！？（前書き）

はい、４７話です。
まだちょっと忙しいので、投稿ペースはこんな感じで。

では、新章開始です。

第47話　危険な二人！紅也は眠れない！？

――その日から、俺の平和は崩壊した。

俺は狙われている。

食事中だろうが、入浴中だろうが、着替え中だろうが、就寝中だろうが。

奴は、そんなことには構わない。

俺の心は、体は、限界を超えていた。

やはり、俺には無理だったのだと。

俺は、こんな役目を引き受けるべきではなかったのだと。

何度も後悔した。

しかし――

俺は、ここで生きていくしかない。

◆

…と、いう壮大なプロローグで始まったものの、そこまでシリアスな状況ではない。

あの日――というか学年別トーナメントの日から、ラウラに付きまとわれているというだけの話だ。

いくらこっちが強化人間（偽）で、一通りの訓練を積んでいるとは

いえ、所詮は一企業のエージェント。訓練を積んだ軍人（しかも強化人間（真））に本気で狙われたら、逃げ切ることなどできない。…だって、気配の消し方俺よりうまいし、背弄拳は完全にコピーされたし。もう無理。

そして、今は――

ガキン！ガキン！

部屋に、軽快な金属音が響く。

この音が、最近の俺の目覚まし代わりだ。空気を切り裂く音と、それに付随する濃密な戦場の気配が、汗たっぷりの爽やかな目覚めを提供してくれる。

奏でるのは二人の乙女。

つまり……何が言いたいかというと……。

「お前ら、朝っぱらから何やらかしてくれとんじゃあぁぁぁぁ！！」

最近の俺は、とにかく寝不足だ。

「む、葵。お前が抵抗するから、嫁が目を覚ましてしまったではないか。」

「…うるさい。お前が攻めてきたからだろう。」

元凶である二人――葵とラウラは、まったく悪びれた様子がない。というか二人とも、早くナイフをしまいなさい。危ないから。

「ラウラ！何で毎日俺の部屋に来るんだよ！」

「む、当然ではないか。夫婦ならば、寝食を共にするのは当然だろう。
それに、こうして葵とも手合わせできるからちょうどいい。なにせ、葵は私の目標なのだからな。」
…ああもう。ラウラのお守なんて、引き受けるんじゃなかった。
「…話は終わった？じゃあ続きを…」
「するな、葵！」
この二人、戦ってると周りが見えなくなるタイプだから、ホントに危ないんだよ！
「…嫁よ。どうやらまだ目が覚めていないようだな。どれ、ここは私が目覚めのキスでも……。」
「ただの寝不足だっ！！」
「紅也、大丈夫？…待ってて、すぐに原因を排除……」
「やるのか？ならば…」
……ぶちっ。
「ここから……出ていけえぇぇぇぇ！！！」
レッドフレームを部分展開。葵とラウラを、文字通り部屋からつまみ出す。
さらば、騒乱。こんにちは、平穏。
外から聞こえる鉄の音は完全に無視し、俺は二度目の眠りについた……。

◆

〈ｓｉｄｅ：篠ノ之　箒〉

真剣を振る。

実家から緋宵が届いた日から、ずっと続けている鍛錬。学年別トーナメントの前後までは紅也も一緒にやっていたが、最近はもっぱら一人でやっている。

そのことに一抹の寂しさを感じつつも、ひたすらに型の練習を続ける。元々一人でやっていたのだ。それが元に戻った程度で、そこまで感傷は感じない。

剣を振り、迷いを断つ。

……と。

……ン！…キン！ガキン！

鉄を打ちつけ合う音が響く。

誰かが、鍛錬でもしているのだろうか？こんな時間から？

興味を覚えた私は、音の方へと向かう。

近づくごとに音は大きくなり、息遣いまで聞こえてくるようになった。

そして、茂みの中からこっそりと様子をうかがう。すると――

それは、神話の再現だった。
青い装束に身を包んだ、赤い槍を持つ男。
相対するは、黒と白の双剣を操る、赤い外套の偉丈夫。
そこで繰り広げられているのは、本物の殺し合い……

などでは決してなく、二人の少女がナイフで戦っていただけだった。
…いや、良く考えれば、十分な異常事態だったな。
しかもその二人ともが、私の知り合いだ。
一方の青い、肩までかかる髪の持ち主は葵。腰までかかる銀髪の眼帯少女はラウラだ。
その二人が、本気の戦いを繰り広げている。原因は……まあ、紅也だろうな。
葵は紅也にべったりだし、ラウラは…人前でキスまでしていたのだ。
あの時は、顔を赤くした紅也に何となくムカついて、鞘で殴ってしまったが…。まあ、セシリアたちも同じことをしてたし、私だけじゃないはずだ。

「…む！」
「…誰？」

キン……

音が止む。どうやら、気付かれたようだ。
…私も、まだまだ未熟ということか。

元々隠れていたわけではないので、すぐに姿を現す。

すると二人とも警戒を解き、ナイフを下ろした。

「…何だ、箒か。」
「…訓練？」
「そんなところだ。…ところで、お前たちは何を？」

そうそう、あの事件の後から、ラウラは周囲と積極的に関わるようになった。
なんでも、紅也にそう言われたらしいが……。話をするヒマなどあったのだろうか？謎だ。

「見ての通りだ。」
「…殺し合い。」
「…何があった？」

帰ってきたのは、物騒極まりない答え。
二人とも元々…その、ぶっ飛んだところのある人間なので、気にしたら負けな気もするが…。こんな答えが返ってきたら、やっぱり気になるだろう。

「…コイツが、私の部屋に。」
「紅也に会いに行っただけだ。」

ああ、やっぱり原因はアイツか。
聞けば、ここ数日はずっとこの調子らしい。こいつらが騒ぐから、紅也も朝練に来れないのだろう。

「…はあ。ほどほどにしてくれ。紅也が困るぞ。」
「う…それは、嫌だな。」
「…分かった。」

「よし。じゃあ、シャワーでも浴びてくるか。この時間は、部室棟の先生が、シャワー室を開けてくれるのだ。」
「む、それは良いことを聞いた。」
「じゃあ、明日はこの時間に……」
「こら！少しは大人しくしてやれ！」

まったく……。この二人は、どうしてこう物騒なのだ！
このままではいずれ紅也のやつは、気苦労で死ぬのではないか？

◆

「じゃあな、行ってくる。」
「待って！どうして行っちゃうの？」
「どうしてって……俺は、強くなりたいし、世界を見たいんだ。そうしていつか、師匠みたいに、自分の信念ってやつを見つけたい。だから…」
「そんなの、関係ない！何で、一人で行っちゃうの？何でお兄ちゃんは、私を置いて行くの！？」
「それは…お前に…」

◆

〈ｓｉｄｅ：山代　紅也〉

「うあああああああ！！」

失態だった。

久々に静かに、深ーく眠りについていた俺は、どうやらセットした目覚ましの音にも気付かなかったらしい。現在時刻８：４０。言い訳の余地も無く、完全に遅刻だ。ちなみに今の目覚ましは、予鈴の音だった。

朝食を１０秒でチャージしながら着替え、レッドフレームを部分展開。ただしコアの起動信号は出さず、展開もバックパックのみ。これで、目視されない限りは気付かれまい――！

８の生体センサーを使って生体反応をサーチしながら、騒音が発生しない程度のスピードで廊下を飛ぶ。

……よく「廊下は走るな」って注意されるけど、これってセーフだよな？

とか考えてる間に、教室のある３階に到着。本鈴間近であるためか、廊下は無人。俺はバックパックをしまい、それと同時に脚にローラーブーツを展開。これはレッドフレームの武装ではなく、フレキシブルアームズのように、作業に便利だからとインストールしているものだ。

ローラーが地をつかみ、慣性のまま俺は滑る。そして１組と書かれたプレートにワイヤーをひっかけ、勢いを殺して減速する。本鈴はまだ鳴ってない！……勝った！

……とか思ってた時期が、俺にもありました。

ぺきん。

何か、そんな感じの音がした。
次に感じた違和感は、伸びきっていたはずのワイヤーが、完全にたわんでいるという事実。そして減速してない身体。

からん。

ナニカが落ちた音がした。妙に軽く、うすっぺらい、プラスチックが落ちたような音。
そう、例えば、さっきワイヤーを引っかけた、プレートのような……。

勢いは止まらない。ニュートンさんをナメちゃあいけない。
目の前には、反対側の階段。このまま行ったら、手すりに激突して、そのまま俺は落ちるだろう。そうなったら、きっと、かなり痛い。
二重の意味で。

――が、どうやら俺の悪運も、捨てたものじゃあないらしい。

唐突に、運動が止まる。この感覚は知ってる。前に寝てるときに金縛りにあった。そのときと、まったく同じだ。こんな現象を引き起こせるのは、ただ一人。

「助かったぜ、ラウラ。」
「当然だ。嫁を助けるのに理由がいるか？」

そう。何故だか知らないが、今更教室にやってきたラウラのＡＩＣであった。あ、葵と箒も一緒だ。三人そろって遅刻か？情けないねぇ。

「…寝坊よりマシ。」
「誰のせいだ、誰の！」
「…自業自得？」
「……もういいです。」

葵め。きょとん、とするなよ。かわいいじゃねぇか。
…で、ラウラは何で、唇を突き出してこっちに向かってくるんだ？
俺、動けないんだけど。

「なあラウラ、何を――」
「助けたのだから、キスぐらいいいだろう。」
「「よくないわ！」」

箒がラウラの首根っこを引っ張り、俺から引き離す。と、同時にＡＩＣが解除され、体の自由が効くようになった。
…ナイフを持った葵の瞳が、蒼っぽく輝いてたのが気になったが。
ＡＩＣを「殺した」とか？まさかな。きっとあれだ、光の反射とか、そういうもののせいだ。

「とにかく、助かった。早く教室に入ろうぜ。」
「うむ。」
「教官に悟られぬようにな。」

後ろのドアを開き、コソコソと侵入。幸いなのかどうなのかは知らないが、なぜかＩＳを展開しているシャル子と、その手を握る一夏に、教室中の注意は釘付けだ。
こら、一夏。こっちを見るな。バレちゃうから。

「本学園はＩＳの操縦者育成のために設立された教育機関だ。そのためどこの国にも属さず、故にあらゆる外的権力の影響を受けない。

がしかし――」

すぱぁんっ！

シャル子が叩かれた。これってもしかしなくても、初めてのことだよな？

優等生のシャルロットが規律違反。これにはクラスメイツもびっくり仰天しているようだ。

まあ、意外と腹黒かったりするのを、俺は知ってるが。

「敷地内でも許可されていないＩＳ展開は禁止されている。意味はわかるな？」

「は、はい……。すみません……。」

これは当然の規律だと思うが、今更な気がする。特に鈴音なんか、しょっちゅう展開してるし。もちろん起動したらコアの反応ですぐにバレるので、こっそりやっても無駄だ。

まあ、この規律のせいで、俺は展開時にはけっこう気を使わなきゃいけない。うっかり起動信号を出し忘れたら、さすがに学園に不信がられる。

「デュノアと織斑は放課後教室を掃除しておけ。二回目は反省文提出と特別教育室での生活をさせるのでそのつもりでな。」

「「はい……。」」

しょぼん、と二人が肩を落とすのと同時に、チャイムが鳴る。よく間にあったよな、俺。

「今日は通常授業の日だったな。ＩＳ学園生とはいえお前たちも扱いは高校生だ。赤点など取ってくれるなよ。

それと、来週から始まる校外特別実習期間だが、全員忘れ物などするなよ。三日間だけだが学園を離れることになる。自由時間では羽目を外しすぎないように。」

そうか、もうそんな時期か。

そろそろ買い物とかしとかないと、当日あたふたすることになりそうだな。とりあえず、次の休みの日にでも行くことにするか。

初日は自由時間だから、ビーチボールとか、サンダルとか、水着とか、ゴムボートとか、双眼鏡とか、カメラとか、それからそれから……

「ではＳＨＲを終わる。各人、今日もしっかり勉学に励めよ。」

そう言って織斑先生が教室を去る。…が、すぐに教室内へと戻ってきて、叫んだ。

「教室のプレートを叩き割った馬鹿者は、どこのどいつだ！！」

……俺、知らね。

第４７話　危険な二人！紅也は眠れない！？（後書き）

「…ったく。直しゃあいいんだろ。」
「…そういう問題じゃない。」
ある休み時間のひとコマでした。

第４８話　サブジスタンスを極めた蛇（前書き）

はい、４８話です。
最近、３日に１回投稿が定番になってる気がします。
若干のギャグ回ですが、どうぞ！

第４８話　サブジスタンスを極めた蛇

そして週末。日曜日がやってきた。
天気は快晴。絶好のお出かけ日和だ。

「…暑い。」
「文句言うな。雨よかいいだろ。」

出がけに買い物に行くことを葵に話したら、「…私も行く」とごり押しされてしまった。
うーん、ついでに本屋で漫画の立ち読みでもしようかと考えてたけど、今回は断念するかな。
ちなみに葵の格好は、白のワンピースに麦わら帽子という、シンプルなものだった。まあ俺も、タイガーストライプのハーフパンツと黒のＴシャツだから、人のことは言えねぇほどシンプルだけどな。
あ、８はリュックの中に入れてるぜ。

「しっかし、日本の夏も暑いけど、長袖着なくていいのはありがてぇな。」
「…同感。でも、日焼けしそう。」
「あー。お前、肌白いもんな。日焼け止めも買っておくか。」

そんな話をしながらも、街を歩く俺達。
基本的にＩＳ学園にこもっている俺達にとって、日本の街を歩くというのは結構新鮮だ。
…お、またコンビニ。狭いエリアに何件あるんだよ。あ、魚屋がある。野良猫がしゃけを狙ってるぞ。いいのか、店主。

いろいろなものがあり、和洋合わさった街並みは、いつ見ても飽き

ないものだ。

…ん、あれが噂の「ダガシヤ」か。子供がアメを買ってる。…って、良く見たら種島さんか。ちっちゃいから、小学生かと思った。まあ、日曜日だからな。知り合いに会うこともあるだろ。探してみたら、案外誰かが近くにいるかもしれない。例えば……さっきから後ろにいる、銀髪の少女とか。

俺程度が気づいたんだ。葵もとっくに気づいてる。害意がないから放置してるんだろうが…どうにも落ちつかない。

「…撒くか。」

「……（コクリ）」

何気なく路地裏に入り、８のナビを受けながら右へ左へ。やがてラウラの視界から逃れることに成功したため、俺の脳内警戒レベルを〈ＡＬＥＲＴ〉から〈ＥＶＡＳＩＯＮ〉に下げる。そして再び大通りに戻ると、気付けば駅の近くに来ていた。

俺の視界に、駅前のショッピングモールが映る。ついでに、見知った背中が二つ。

黒髪とブロンドの二人組。一夏とシャル子だ。…シャル子のやつ、よく他の奴らを出しぬけたな。流石、と言わせてもらおう。

ガサガサッ！

っ！近くの茂みに何かいる！？

何だ、この黒いオーラは！こんなものに、この俺が気付けなかっただと！！

茂みから何かが飛び出す。影は二つ。躍動的なツインテールに、くるくる巻いたブロンドヘアー。……って。

「…鈴音。」
「それに、セシリアか。何やって…って、見ればわかるが。」
「シャルロットの奴、ポッと出のくせに……」
「ただでさえ欧州かぶりですのに、あんなに接近して……」
ダメだ、聞いてない。
「しかも……あれ、手ぇ握ってない？」
「……握ってますわね。」
セシリアは引きつった笑顔を浮かべ、持っていたペットボトルを握りしめる。無機物ながら、かなり痛そうだ。ミシミシと音を立て…
…あ、フタが飛んだ。
「そっか、やっぱりそっか。あたしの見間違いでもなく、白昼夢でもなく、やっぱりそっか。――よし、殺そう。」
おお、これがヤンデレか。衝撃砲を部分展開してるあたり、その本気度がうかがい知れる。
――そろそろまずいかな？
「そこまでだ、鈴音。」
「…セシリア、どうどう。」
「なによ紅(ホン)！人の気も知らな……い……で……。」
「葵さん！わたくしは別に馬で……は……。」
反射的に答えたのか？ゆっくり振りかえるその顔は、驚愕で目が点になっていた。

「「な、何で!?」」
「「買い物。」」

セリフがハモる。この二人、最近仲いいよな。

「…で、一夏をつけてたのか。」
「…シャルロットが気になったの?」
「な、ななな何の話よ?」
「べ、別に一夏さんのことなんて気にしてませんわ!」
「なるほど。一夏とシャル子の様子が気になって、後をつけていたと。」

完全に自爆だった。そんなコトして、何が楽しいのやら。
…まあ、ただの買い物よりは楽しそうだ。ちら、と葵の目をみると、葵も頷いた。

「面白そうだな。俺も混ぜてくれよ。」
「…はあ。」

こら、ため息つくなよ。どうせ買うもの決まってるんだから、ちょっとぐらい寄り道してもいいじゃんか。

「え?な、何で……。」
「ん、面白そうだから。」
「…まあ、それはそれで…。鈴さんがいなければもっと…。」

二人とも、とりあえず賛成のようだ。
よし、じゃあ……ミッション・スタートだ!!

◆

《…と、いうわけで、今後は無線を利用して目標を追う。各自、常にチャンネルを開いておけ。》
《はあ……分かったわよ、紅。好きにしなさい。》
《こら、タンゴ！俺のコードネームは「スネーク」だと言っただろ！》
《まったく……。せっかく、紅也さんと一緒に行けると思いましたのに……。》
《…こちらメビウス。目標発見。ショッピングセンター2階、水着売り場。》
《な！？水着ですって！！行くわよ、セ……オメガ！》
《わかりましたわ、タンゴ！》

…と、いうわけで俺達4人はばらばらになって一夏を捜索していた。せっかくの無線連絡だから、コードネームをつけてみたんだが、なぜか全員微妙な顔をしていた。
遊び心って、大事だと思うんだけどなぁ……。

《こちらタンゴ！メビウスと合流したわ。》
《オメガ、合流ですわ。…あ、ターゲットが二手に分かれましたわ！》
《何だと！じゃあ俺はターゲット1を追う。》
《1ってどっちよ！ちょっと、スネーク？》
《…1は、一夏。私は、目標2を追う。》
《では、わたくしも1を……》

≪あ、こら、オメガ！抜け駆けは許さないわよ！！≫

…案の定、俺の方に二人来たか。そういや、男が女性用水着売り場には入りにくいが、女が男性用水着売り場にずかずか入れるのは、なんでだろうな？

≪こちらスネーク。ターゲット1が水着を購入。何の面白みもない、ネイビーのトランクスタイプだ。≫

≪え！ち、ちょっと早くない？≫

≪わたくしたち、まだ合流してないのですが……≫

≪男の買い物なんてそんなもんだ。ターゲットが集合場所に戻る。オメガ、タンゴ。現在位置を報告せよ。≫

≪女性用水着売り場の前よ。…メビウス、そっちに動きは？≫

≪目標2は、候補を絞ったものの、未だに選択中。…あ、あれ可愛い。≫

≪スネーク了解。今そちらを捕捉した。合流する。≫

そして物陰にいたセシリア達と合流し、一夏の様子をうかがう。…あいつ、ためらいなく女物の売り場に入っていった。スゲェな、勇者だ。

≪…目標2、目標1を発見。水着を手に取り接近中。≫

≪なっ！？なんて露骨なアピールですの！ゆ、許せませんわ！！≫

≪うわっ！？オメガ、乱心！タンゴ、手伝え！≫

≪わかったわ、スネーク。ここで出ていかれたら台無しよ！！≫

≪は、はなしてくださいな！！これ以上は、もう……あら？≫

≪…オメガ、どうした？≫

≪一夏さんが女性に絡まれてますわ。≫

≪…確認した。目標2も気付いてる。≫

≪じ、じゃあ放っておいても……って、メビウス？何出ていってる

のよ！》

《あー。葵は、ああいうふうに女だからって威張る人間が嫌いだからな。しょうがない。

メビウスは任務失敗。今後はオメガ、タンゴ、スネークのみで続行する。オーバー。》

◆

〈ｓｉｄｅ：山代　葵〉

無線を切り、トラブルが起こった方へ向かう。シャルロットは成り行きを見守っているようだけど、まだ私には気づいていない。

「……でだよ。自分でやれよ。人にあれこれやらせるクセがつくと人間バカになるぞ。」

その意見には全面的に同意する。現に、特殊部隊の指揮官をやってるラウラは、馬鹿だし。

…え？ちょっと違う？…まあ、いいわ。

「ふうん、そういうこと言うの。自分の立場がわかってないみたいね。」

…警備員でも呼ぶつもりかな？なら、介入するのはこのタイミングが一番だと思う。

「…何をやってるの？」
「え、葵？」
私の存在が意外だったのか、一夏が声を上げる。
「誰？あなた、この男の知り合い？まったく、躾くらいしっかりしなさいよね。」
相変わらず高圧的な態度を改めない女だ。正直、腹が立つ。
人を犬かなにかみたいに扱って……。そんな奴がいるから、母さんは……。
「…黙りなさい、人間。劣等種風情が、誰の許可を得て口を利いてるの？」
…言ってから「しまった」と思った。いつもは紅也がストッパーになってくれるけど、今はいないことを忘れてた。
「…何？あなたも、ずいぶんな態度ね。自分が選ばれた人間か何かだと、勘違いしてるのかしら？」
「それはあなたも同じじゃない？女だって理由だけで、男より偉いと勘違い。
…いい？ＩＳを使えるか使えないかで、人の優劣は決まらないの。それなのに、社会の風潮に流されて、自分は調子に乗って……。恥ずかしくないの？」
ああ、言葉が止まらない。
別に、この人が悪いわけじゃないのに。母さんを実験動物扱いしたのは、この人じゃないのに。
――私は、八つ当たりしてる。

「な、何よ！今の時代、女が男より偉いのは当然じゃない。それに、いつだって、年上にそんな口を利いちゃいけないって、教わらなかったの？」

「ええ。むしろ、無能な奴には何を言ってもいい、って言われたわ。…まあ、どうせ言葉は通じないと思うけど。」

「ふうん。あなたの父親って、ろくでもないわね。」

…へえ。こういう発言をしただけで、男が言ったと思いこむんだ。

末期ね、この人。壊（なお）してあげようかしら？

でも、父親がろくでもないっていうのは……その……外れてはいない。

だって、父さんが母さんを助けて、一目惚れしたのって、２０歳のときだし。

……うん、そんなことを考えてたおかげで、いくぶん余裕が戻ってきた。

「…今のは母さんが言った言葉よ。そういうちゃんとした女もいるってこと、覚えておきなさい。」

「くっ……さっきから偉そうに！あなた、何様のつもりよ！！」

……言ったわね？そのセリフを言ったわね！？

私は懐から、身分証を取り出す。そして女の前に掲げて、宣言する――！！

「私は山代　葵。オーストラリアの国家代表よ。」

「……え？」

「……は？」

呆然としている。目の前の女も、一夏も。

「こ……国家代表!?し、し、失礼しましたぁ!?」

いきなり頭を下げ、走り去っていく女。まったく、私じゃなくて一夏に謝りなさいよ。

まあ、権力に弱い女なんて、こんなものかしら。

「あ……葵って、国家代表だったのか?スゲーな。代表候補生より上じゃねえか。」

「ああ、ただのハッタリよ。これは母さんの身分証。」

ひらひら、と身分証を揺らす。一夏はそれを見て、「そっくりだな……」と感想を漏らす。あなただって、ブリュンヒルデの若いころにそっくり……

……ゾクリ。

――殺気が飛んできた気がする。

私の人生と経験と魂を込めて断言する。ここにいたら、大変なことになる。

「じゃあ、私は行くわ。…またね、一夏。」

普段の私に戻り、早足でその場を後にする。できるだけ遠くへ、早いうちに逃げないと。

◆

〈ｓｉｄｅ：織斑　一夏〉

「行っちまったな……。」

そういえば、お礼を言いそびれた。

それにしても葵って、普段は無口なのに、あんなに堂々とふるまうなんて。まるで、千冬姉みたいだったな。

「あ……一夏。ごめんね、やな思いをさせちゃって。」

「ん、シャル。別にシャルのせいじゃないだろ。それに、葵もたまたまいたし、助かった。」

「……たまたま、ね。」

「？　どうしたんだ？

それにしても……格好良かったな、葵。」

思えば同年代で、あそこまで堂々としてる奴はいただろうか？みんな、話してるときに急にしどろもどろになったり、あたふたしたりってことが多いもんな。

「ううう……手ごわすぎるよ……。そ、それより……一緒に水着を選んでくれない？さあ、さあ！」

え、ちょっとシャル？押すなって！

◆

《一夏めぇ……うちの葵に色目使いやがって……！！》
《スネーク、ストップ！あんたまで暴走してどーすんのよ！》
《放せ！はなせ！ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＥ！》
《スネーク！落ち着いて下さいな！！》
《…あ！シャルロットのやつ、何をやって……》
《あちらはたしか、試着室がありましたわ！》
《えええ！？そんな！…オメガ、追うわよ！》
《言われなくても！》

唐突に、手足に自由が戻る。
暴れていた俺は不意に手に入れた自由に戸惑い、勢いのまま通路へ飛び出してしまう。
そしてそのまま二、三歩よろめき……

ドン！！

何かにぶつかった。

「痛たたた……。まったくあいつら、いきなり何を……。」
「――それはこちらのセリフだ、大馬鹿者。」

……聞き覚えのある声。
ぎぎぎ、と緩慢な動作で顔を向けると、そこには仁王立ちした織斑先生が。
どうしてここに？…いや、当然買い物なんだろうけど。
あ、山田先生、こんにちは。どうして涙目なんですか？どうして後ずさるんですか？
それで……どうして俺から眼をそむけるんですかぁ！？

「いきなり飛び出してきて、人にぶつかって、謝罪の言葉もなしか。」
「え？いや、その……」
「しかも、『若いころ』だと？私はまだ２０代前半だが？」
「え？ホントに、何の話……」
「……問答、無用だっ！！」

ズドォォォォン！！

な……なんて威力だ……。宇宙が見える……。
……あ、おじーちゃん。久しぶりー。え？この川を渡ればいいの？
６文？何それ？俺、円しか持ってないんだけど。カード使える？

《な……なんですの、今の音は。》
《スネーク？どうしたのよスネーク！スネェェェェク！！！》

第４８話　サブジスタンスを極めた蛇（後書き）

……思考が混線したようです。

そして無線のコードネーム。相変わらずあのゲームのネタです。

セシリアをオメガにしたのは……よく落ちるから？

第４９話　ここが最後のセーブポイント（前書き）

はい、第４９話です。

とぎれとぎれの更新ではありますが、結構長く続いたなぁ……。

もちろん、打ち切りはしません。ご安心を。

第４９話　ここが最後のセーブポイント

（ううっ、勢いでこんなことしちゃったけど、どうしよう……）

シャルロットは悩んでいた。

水着を見てもらおうと思った。ここまではよかったのだが、さっきから自分をつけまわしている三人を撒くために、思わず一夏を試着室の中に連れ込んでしまったのだ。

（でも…葵も、鈴も、セシリアも、全員がコアを潜伏モードにしてるっていうのは、おかしいよね…。現に葵は測ったようなタイミングで出てきたし、他の二人も……。）

間違いなく、尾行しているだろう。

（ん～……。三人とも諦めて帰ってくれないかなぁ。）

居残り掃除を課せられた放課後、シャルロットは一夏に「付き合ってくれ」と頼まれた。その言葉は期待していた意味ではなかったけど、間違いなくシャルロットだけを誘ったものだった。

つまり、これは、デート。

少なくともシャルロットは、そういうふうに考えていた。

（で、でも、さすがに同じ個室で着替えはやりすぎたかなぁ……。）

少しの後悔と、羞恥で顔を赤く染め、シャルロットは一夏の姿を見やる。一夏は、天井の隅を見つめたり、目を閉じたりと、非常に落ち着かない様子だ。きっと、ものすごく動揺してるに違いない。

（し……しょうがない！せっかくここまでやったんだから、覚悟を決めて――）

そう思ってブラジャーに手をかけたそのとき――

「織斑！デュノア！何をやっているか！！」

試着室のカーテンが開き、修羅が現れた。

◆

〈ｓｉｄｅ：織斑　千冬〉

む、ようやく私ｓｉｄｅだと？

第三章になるまで一切無かったとは。許せんな。

何より許せんのは、山田くんよりも後になったことだが……。

まあ、それはいい。

さて、何故私が原作より早く一夏たちを発見できたのかを語るために、少し時間を戻すとしよう。

＊

《スネーク？どうしたのよスネーク！スネェェェェェク！！！》

山代への指導を終えた私は、奴のヘッドセットから漏れる音声に気付いた。
声の主は凰……。それに何か良からぬものを感じた私は、ヘッドセットを奪い取った。

《何の騒ぎだ、馬鹿者。》
《ぎゃあああ！ザ・ボスが出た！紅のやつ、ラスボスに負けたのよ！！》
《落ちついてください、鈴さん！これはむしろチャンスですわ！》
《オルコットまでもか……。何をやっている？》
《ええ、実は、先程たまたま一夏さんを発見したのですが……》
《一夏の奴、シャルロットと一緒に試着室に入っていったのよ！…じゃ、なかった。入っていったんです！》

な…何だと？
あの大馬鹿者め！何をやっているのだ！

《場所を教えろ。すぐに向かう。》

＊

と、いうわけで私は、間違いが起こる前に到着した。
山代の持っていた端末も、「急げ」と一言放っただけで詳細な地図を表示したため、大いに役立った。《命だけは……》と表示されていたのが気になったが、些細なことだ。

「まったく、男女ふたりで試着室に入るとは、感心せんな。」

「「は、はい……。」」
「平気でそんなことをするとは…。織斑、お前はデュノアを女として見ていないのか？」
「ええ！？そ、そんな……。」
「ま、待て、シャル！俺はちゃんと、お前を女として見て……」
「ほう、ずいぶんなセリフだな、織斑。それを承知で中に入ったと。」
「ち、違うんだ千冬姉！俺は……」
「そうなの？僕を異性として意識してないの？」
「だから、シャルは……」

ふっふっふ。混乱しているな、馬鹿者め。どっちつかずの態度をとり続けるからこうなるのだ。

「…あ、そういえば織斑先生。ソレは……？」

一夏の言葉で涙目だったデュノアが、私の右手を見ている。つられて一夏もこちらを見ているが……。
ああ、そういえばあったな。こんなものも。

「そこで拾った。なあに、気にすることは無い。」
「拾った、って千冬姉……。それ、どうみても紅也じゃ……。」
「し、しかも、白目剥いてますけど……。」

何だ。さっきから静かだと思ったら、気絶していたのか。だらしのない奴だ。

「気にするな。私に逆らった者の末路だ。」
「「……」」

青ざめ、沈黙する二人。自分の未来を想像したのだろうか？すっかりおびえている。

「…って、あれ？紅也のコアの反応は、ＩＳ学園から出てるんだけど……。」

「何？奴のＩＳの待機状態は、この端末のはずだが…。」

《その信号はダミーだ。本体である私は、潜伏モードで起動中だ。》

ダミーの信号だと？そんな技術、聞いたことも無いぞ。

…やはり、山代は何かを隠している。

「あ、織斑先生。ようやく追いついたぁ……。」

小走りでこちらに来たのは、山田君だった。姿が見えないとは思っていたが、まさかついてきていなかったとは。体力不足だな。

「ところで山田先生と千冬姉はどうしてここに？」

一夏。話題を逸らそうとしているのがまる分かりだ。

「私たちは水着を買いに来たんですよ。あ、それと今は職務中ではないですから、無理に先生って呼ばなくても大丈夫ですよ。」

まったく。山田君も律儀に答える必要はないだろう。それにしても……

「そろそろ出てきたらどうだ？」

そう。私に情報を流（リーク）した二人が、まだ物陰に隠れている。

「そ、そろそろ出てこようかと思ってたんですよ……。」
「え、ええ。タイミングを計っていたのですわ。」
凰とオルコットが姿を現す。その視線は、あからさまにデュノアを敵視しており、厳しい表情だ。……恋する乙女もいいが、大概にしておけよ、小娘ども。
「何だ、鈴たちも来てたのか。葵と紅也がいたから、もしかしたら…とは思ってたけど。」
「『何だ』って何よ！あたしがいちゃ悪い！？」
「わたくし達は…そう、紅也さんに誘われたのですわ！一夏さんを尾行するから、一緒に来ないか……と。」
「ふうん。…で、紅也は千冬姉に見つかって、こうなったと。」
嘘をつくな。絶対にお前たちの発案だろう。そして一夏。あっさり信じ過ぎだ。
「…ならばちょうどいい。コイツを持ちかえれ。お前らの管轄だろう？」
右手の物体を、オルコットたちの方へ放り投げる。しかし二人はそれに反応できず、山代は床に落ち、前衛的なオブジェに成り果てた。
「…あ、あー。私ちょっと買い忘れがあったので行ってきます。えーと、場所がわからないので凰（ファン）さんとオルコットさん、ついてきてください。それにデュノアさんも。」
む、山田君。何を……。
「え？山田先生、何を買い忘れたんですか？」

「えーっと……包帯、とか？」
「……あー。」
それに納得したのか、ぞろぞろと去っていく一同。
その場に残されたのは、私と一夏と…ただの屍のみ。
「……まったく、山田先生は余計な気を遣う。」
「え？」
「ふぅ……。言っても仕方がない、か。一夏。」
「な、なんですか？織斑先生。」
…織斑先生、か。さっきまでは名前で呼ばれていたが、ようやく訂正したか。しかし…
「今は就業中ではないからな、名前でいい。私たちはこの場ではただの姉弟（きょうだい）だろう。」
「わ、わかった。」
さて、姉弟として過ごす、久しぶりの休日だ。少しは楽しんでもばちは当たらないだろう？

◆

〈ｓｉｄｅ：山代　紅也〉

……ヒドくない？ねえ、ヒドくない！？

一夏はともかく、織斑先生は絶対気付いてたよ、俺が目覚めたこと。
なのに無視？放置プレー？
そんなに弟と過ごす時間が大事かぁぁぁ！！

まあ、俺も葵と過ごす時間が少ないと死ぬけどな！

それはさておき、まずは現状把握。
頭から床に叩きつけられ、犬神家状態。８に表示されたバイタルデータをチェックすると、血圧、心拍ともに正常の範囲。意識レベルはやや低め。…うん、大丈夫だ。
一旦体を倒し、立ち上がろうとするも……頭に血がのぼってるせいか、上手くいかない。
とりあえず何かにつかまって、ゆっくり立ち上がればいいか…。
そう考え、虚空に手を伸ばすと、不意に、誰かに手を掴まれた。

「大丈夫か？」
「…らうら？たすかるよ。」

どうやら、とうとう発見されてしまったようだ。だが、葵のいないこの状況では、非常にありがたい。

「ごめん。てをひっぱってくれるか？ひとりじゃたてないんだ。」
「嫁を支え、助けるのは当然だろう。…せーの！」

華奢な外見からは想像できないような強い力で、俺は強制的に立たされる。
やぱり、軍人なんだなぁ……と、改めて確認した瞬間だった。

「ありがとう、らうら。おかげで、助かったよ。」

ああ、ようやく調子が戻ってきた。まだ頭は痛いけど、この程度なら一人で歩ける。
…しっかし織斑先生。身に覚えのないことで殴りやがって。許すまじ！
こうなったら、夜道で背後から襲いかかって……襲いかかって……。
……。

返り討ちにあうところしか想像できない……。

「ど、どうしたんだ？立ち上がったと思ったら、いきなりｏｒｚとは…。やはり、まだ調子が悪いのか？」
「ああ、大丈夫だ。ちょっと、現実が嫌になっただけだから。」

ああ、ラウラは優しいな。無愛想だけど気遣いができて。物騒だけど繊細で。ぜひ、家に嫁に来て欲し……。

はっ！？いかん！それではラウラの思うつぼだ！！

「な、なんでもない！なんでもないぞ！
…そうだ！お礼がしたいんだが。ラウラ、なにか俺に出来ることはあるか？」
「礼か……。ふむ。では、私の水着を選んでほしい。今まで、こういったものとは無縁の生活だったのでな。何を着ていいのかわからん。」
「そっか。そんなんでいいなら、付き合うぜ。
葵と一緒に来ることもあるから、こういうもんには詳しいんだぜ、俺。」

げしっ。なぜか蹴られた。

「わ、私といるときに、他の女の話をするな！」

そんなこと言っても、葵は妹だし。別カテゴリーにいれてくれてもいいじゃんか。

……そういや、葵はどこに行ったんだろう？

◆

「さて、包帯は～。って、山代さん？こんなところで、どうしたんですか？」

「…包帯と湿布。必要になる気がした。」

「そ……そうなんですか。双子ってすごいんですね～。あはは……」

「…そう。私たちの結び付きは、とても強い。」

◆

「…あ！そういえば、結局まだ水着を買ってないや！」

「後にした方がいいわよ。あの二人、なんだかんだですごく仲がいいから。」

「…わたくしとしては、もっと思い出すべきことがある気がするのですが……。」

◆

こうして、各々が準備を進める週末。時間はあっという間に過ぎていく。

穏やかな日常。変わらない生活。

しかし。

変化の刻は、確実に迫っているのだった……。

第４９話　ここが最後のセーブポイント（後書き）

お気に入り件数、２００件を超えました。ご愛読、ありがとうございます。

なんか不吉な引き方ですけど、まあ、雰囲気づくりのためだと思ってください。

次回、いよいよ海へと向かいます。

第５０話　夏だ！海だ！サマージャ○ボだ！！（前書き）

とうとう５０話です。思えば、遠くへ来たものだと思います。

今日から臨海学校編。それに伴い、連続更新を再開します。

何日続くかはわかりませんが、楽しんでいただけたら幸いです。では、どうぞ！

第５０話　夏だ！海だ！サマージャ○ボだ！！

トンネルを抜けたら、海だった。

……なーんて、川端康成のような書き出しで始めてみたが、なんのことはない。

今は臨海学校初日で、俺達はバスで移動中。ただそれだけのことだ。

「ふう、日本の海も、なかなか綺麗だな。」

「そ、そうですわね。」

「青い空、白い雲。絶好の海水浴日和だぜ。」

「そ、そうですわね。」

「……なあ、セシリア。」

「そ、そうですわね。」

「……泣けるぜ。」

俺の隣にはセシリアが座ってるんだが、さっきからまるで会話にならない。

普段はけっこう仲良くしてるつもりなんだけどな……。無視されてるんだろうか？

「嫁の雰囲気が普段とは違うからな。照れているのか？」

「……そ、そんなことはありませんわ！！」

うわあ、断言。

しかも、ラウラには返事するのかよ。ちょっと傷ついたぜ。

「まあ、確かに、ずいぶんといつもと違うな。髪型を変えたのか？」

「いや、ただの寝ぐせだ。今日はかなり寝坊して、直すヒマがなか

ったからな。」

そう、俺の髪型は今、某赤い弓兵のような感じになってる。
昨日は遅くまで眠れず、ベッドで何度も姿勢を変えていたせいか、気が付いたら寝ぐせ直しでもどうにもならないほど、カッチリとセットされていたのだ。
……葵に「こいつ、誰？」的な視線で見られたのには、かなり傷ついた。

「……もしかして、楽しみで眠れなかった、とか？」
「そんなわけないだろうが。シャル子、廊下に立ってなさい。」
「ここ、バスの中だよ。」
「つーか、マジなのかよ、紅也。」
「子供のような奴だな。」

う…一夏と箒がいじめるよぅ。助けて！ドラ○もーん！！

「うー！うー！うー！」
「こら！その泣き方は止めろ！！」
「おい！これから海に行くんだぞ！？シャレにならんわ！！」
「？　貴様ら、なにをそんなに慌てているのだ？」

ラウラには通じなかったらしい。まあ逆に、知ってたら怖いが。
だって、ドイツの特殊部隊の軍人さんがねぇ。日本のサブカルに精通してるなんてねぇ。そんなマンガみたいなこと、あるわけないじゃないっすか！なあみんな！

◆

「ハックション！！」
「副隊長（おねえさま）、風邪ですか？」
「いや……おそらく、誰かが私の噂をしているのだろう。」

◆

「そういえばシャル子、今日はなんだか上機嫌だけど、そのブレスレットと何か関係あるのか？」
「えっ、あ、うん。まあ、ね。えへへ。」

そう言ってまた、手元に目線をやるシャル子。確か、一夏からのプレゼントだったか。
ここが女学園でよかったな、一夏。もし男の方が多かったら、黒い覆面＆頭巾の集団が、お前を異端審問していたと思うぞ。
それにしても、この場に鈴音がいなくて良かったな。もしいたらお前、衝撃砲で撃たれてるぞ。

「やるじゃないか、一夏ぁ。本命はシャル子か、このこの～。」
「な、何の話だよ！つーかそれ、昨日も千冬姉に言われたんだけど！？」
「な…なんだと、一夏！許さん！そこに直れ！！」
「い、一夏さん！ブロンドヘアーはシャルロットさんだけではなくってよ！…で、でも、一夏さんだけでなく、わたくしには紅也さん

も……。」

あっという間に修羅場を形成。さすがは一夏だ。
にしても、セシリアはボソボソ言ってて聞き取れなかったんだけど、何て言ったんだろうな？

「そろそろ目的地に着く。全員ちゃんと席に座れ。」

織斑先生の一言で、騒がしかったバス内が急に静まる。相変わらずの影響力だな、オイ。
まあ、ここに着くまでは自由にさせてたんだから、なんだかんだで優しい所もあるよね。

そろそろ、というのは本当だったようで、5分もしないうちにバスは目的地に着いた。
まずは俺の乗る1号車。ついで残り3台のバスが到着し、中からわらわらと生徒が飛び出してきて、組ごとに整列する。

「それでは、ここが今日から三日間お世話になる花月荘だ。全員、従業員の仕事を増やさないように注意しろ。」
「「「よろしくおねがいしまーす。」」」

全員で挨拶をする。なんか小学生みたいだけど、これぱっかりは定番だからね。
すると着物姿の女将さんが丁寧にお辞儀をした。

「はい、こちらこそ。今年の一年生も元気があってよろしいですね。」

今年の……と、いうことは、毎年ここに来ているのだろうか？どう

りでお互いに手慣れてる感じがすると思ったぜ。
そんなことを考えながら女将さんを見て、ついでに「日本人って若く見えるからなー。実年齢いくつなんだろう？」とか考えてると、ばっちり目が合ってしまった。

「あら、こちらが噂の……？」
「ええ、まあ。今年は男子が二人いるせいで浴場分けが難しくなってしまって申し訳ありません。」
「いえいえ、そんな。それに、いい男の子じゃありませんか。しっかりしてそうな感じを受けますよ。」
「感じがするだけですよ。」

織斑先生と女将さんが話す。そして唐突にこちらの方を向いたけど……。
ああ、そっか。挨拶しろってことか。

「拙者、山代紅也と申す。三日間世話になる故、よろしくお頼み申す。」
「普通にせんか。…お前も挨拶をしろ、馬鹿者。」

織斑先生が片手を上げながらこっちに向かってくる。
ヤバイ！いきなり叩かれる！！
……とか思っていたが、先生は俺を素通りし、一夏の元へ。そして一夏の頭に手を置くと、無理やり頭を下げさせた！

「お、織斑一夏です。よろしくお願いします。」
「うふふ、ご丁寧にどうも。清州景子です。」

そう言って女将さんは、また丁寧なお辞儀をする。その動作に気負った感じは無く、あくまで自然な感じだった。

…いやぁ、プロってスゲェな。

「不出来の弟でご迷惑をおかけします。」
「あらあら。織斑先生ったら、弟さんにはずいぶんと厳しいんですね。」
「いつも手を焼かされていますので。」

いつも……？前に一夏が、織斑先生はほとんど実家に帰らないと言ってたけど、その度に一夏が何かしてたとか？それとも、女性関係の苦労？
絶対後者だな。一夏、節操ないし。

「それじゃあみなさん、お部屋の方にどうぞ。海に行かれる方は別館の方で着替えられるようになっていますから、そちらをご利用なさってくださいな。場所がわからなければいつでも従業員に訊いてくださいまし。」

女子一同は、はーいと返事をするとすぐさま旅館の中へと向かう。荷物を置いて、すぐに着替えて、早く海に行きたいんだろう。俺もそうだ。

「じゃあ一夏、お先。俺、先に荷物を開けてくるから。」

そう言って、走る女子たちを追いかける。ちなみに俺の荷物は、８だけだ。今日という日に備え、普段は拡張領域に入れている予備パーツを外に出し、代わりに荷物を入れたのだ。おかげでわざわざ重いカバンを持つことも無く、すいすいと進むことができる。

正面入り口から入って、廊下を左に。部屋番号を見ながら、ごそごそと「たびのしおり」を取り出す。えーと、俺の部屋は、俺の部屋

は……

〈ｓｉｄｅ：織斑　一夏〉

「行っちまった……。」

確か俺達の部屋、どこにも書いてなかった気がするんだけど。

「ね、ね、ねー。おりむ～。」

◆

ぐあ、この呼び方はまちがいなくのほほんさんだ。振り向くと、例によって異様に遅い移動速度でこっちに向かってきていた。

「おりむーって部屋どこ～？一覧に書いてなかったー。遊びに行くから教えて～。」

その言葉で、周りにいた女子が一斉に聞き耳をたてるのがわかった。しかし、俺の部屋なんか聞いてどうするんだ？

「いや、俺も知らない。廊下にでも寝るんじゃねえの？」

「わー、それはいいね～。私もそうしようかなー。あー、床つめたーいって～。」

いやいや、冗談だって。

俺達の部屋はちゃんと、女子とは別に用意されるらしいんだけど……。どこになるかは聞いてないんだよな。

「織斑、お前の部屋はこっちだ。ついてこい。」

おっと、千冬姉がお呼びだ。早く行かないと。

「じゃ、また後で。」

「うん、またね～。」

のほほんさんに別れを告げ、千冬姉の方へと向かう。

「えーっと、織斑先生。俺の部屋ってどこになるんでしょうか？」

「黙ってついてこい。」

う、いきなり言論封殺された。ちなみに旅館の中はかなり広くてキレイだった。さすがは一学年四組全てをまるまる収容できる規模。ＩＳ学園御用達というのも頷ける。

内装は、歴史ある装飾と最新設備を調和させ、さらに旅館らしく縁側や中庭まであるという徹底ぶりだ。庭には鯉の泳ぐ池や、ししおどし、さらにテントまで完備されていて、純和風の庭園の様相を呈して――――

……ちょっと待て。何かがおかしい。

何だ、あの真っ赤なテントは。違和感あり過ぎだろ。

「……何をやっているんだ、あの馬鹿者は。」

お、千冬姉には何か心当たりがあるらしい。ずかずかとテントに歩

み寄り、いきなり入り口を開ける。
中にいたのは、潜水服を着た、正体不明の人間だった。
だ、誰だ？不審者？何で「シュコー。シュコー。」とか言ってるんだ！？

「……山代。何をやっている？」

…え？紅也？
怪人は潜水服の頭を取る。そこにいたのは、まぎれもなく先に行ったはずの紅也であった。

「…いやあ、部屋が書いてなかったんで、『野宿しろ』ってことかと思って、コレ持ってきたんですけど。」

おお、その発想は無かった。
でも、普通、テントまで持ってくるか？

「にしても、いい場所ですよね、ここ。ワンセグ入るし、日当たりいいし。食料調達も容易だし。」
「こ、紅也？鯉を食うのか？」
「ああ。なんか前に見たアニメで、用務員のおじいさんがおいしそうに食ってたから、気になってな。」

そのアニメではその後、事実を知ったおじいさんが、チェーンソーを持って主人公を追いまわす展開になってた気がするけど。

「…はあ。お前の部屋はこっちだ。ついてこい。」
「あ、良かった。ちゃんとあるんですね。じゃあ、これ片付けてから行きますから、少し待って――」
「いいからさっさと来い！！」

紅也は千冬姉に襟首をつかまれ、ずるずると引きずられていく。…
潜水服姿のまま。
何てカオスなんだ……。

◆

〈ｓｉｄｅ：潜水服姿の怪人物〉

え、ちょっと待て！好きでこんな格好のまま引きずられてる訳じゃないっつーの！
放してください！周りの視線が痛いです！！
こら、一夏！他人のフリをするな！口笛で「ドナドナ」吹くな！！

――と、唐突に織斑先生は手を放し、受け身を取り損ねた俺は、頭を床に打ち付けた。

「～～～～～！！」

じたばた。ごろごろ。

「ここだ。」
「え？ここって……。」

一夏の言葉が気になり、俺は涙目のままドアを見る。そこには、『教員室』という張り紙がされていた。

「最初は個室という話だったんだが、それだと絶対に就寝時間を無視した女子が押しかけるだろうということになってだな。結果、私と同室になったわけだ。これなら、女子もおいそれとは近づかないだろう。」

「そりゃまあ、そうだろうけど……。」

誰が好き好んで熊の巣穴に入るか、って話だよ。俺だって、「伽藍の洞から人形盗って来い」って言われたら、いくら積まれても拒否するね。

「一応言っておくが、あくまで私は教員だということを忘れるな。」

「はい、織斑先生。」

「それでいい。」

そうして、二人は部屋に入っていく。俺を廊下に残したまま。

この服、重すぎて一人じゃ起き上がれないんだよ！しかもこの下、海パン一丁だし。こんなところで脱げないっつーの！その上、テントに8を置いてきちまったし……。

どうする、俺!?

「あ、山代君！何をやってるんですか？」

…この声は、山田先生。そうか、ここ教員室の前だもんな。助かったぁ～。

「ちょうど良かったです、山田先生。ちょっと起こして……」

「？　どうしました、山代君？」

さて、ここで読者のみなさんも考えてくれ。俺と一緒にシンキング・タイムだ。

俺の姿勢を覚えてるか？――仰向けで、廊下に寝ている。
山田先生の服装は？――いつもスカート穿いてますね。
山田先生の立ち位置は？――俺のそばに、しゃがんでます。ええ、顔のそばに。

理解していただけただろうか、俺の状況。

「……ところで山田先生。俺の部屋ってどこですか？」

忘れよう。気を逸らそう。俺は思考を放棄した。

「あ、織斑先生から聞いてませんか？私と同じ部屋です。」

――おい、マジかよ！夢なら覚め……

「そうなんですかー。わかりましたー。」

予想外の事態の連続で、俺の思考回路は完全にショートした。
機械的に返事をし、山田先生の手を借りて起き上った俺は、案内されるがままにふらふらと歩くのであった……。

第５０話　夏だ！海だ！サマージャ〇ボだ！！（後書き）

…ラッキースケベ。

そんな紅也には、次回で不幸が待ってます。いや、降ってきます。

では、また明日。

第５１話　天災襲来（前書き）

久々の連続更新、５１話です。
そろそろ、ネタばらしを始めたいところですが……まだギャグ回を続けたいですね。

※この話には、ギャグ補正が多分に含まれています。「普通死ぬよね？」とか思うことがあっても、春原を思い出して我慢してください。

第５１話　天災襲来

「ふー。さっきはとんだ失態を晒しちまったな。」

部屋の位置を確認した俺は、再びテントへと戻り、泳ぐ支度を整えていた。

ちなみに潜水服を持ってきたのは、ただ単にみんなを驚かせたかったから。織斑先生は無反応だったけど、一夏はギョっとしてたし。効果はありそうだ。

「さて、他に持っていくものは……っと。」

キィィィィィン……

……？

何だ？何か聞こえるな。

まるで、何かが高速で接近しているような音。どこかで聞いたことのある音。

「ま、まさか……ＥＬＳの襲ら……」

ドカ――――――ン！

何かが、テントのそばに落ちた。俺はテントの入り口から吹き飛ばされ、無様に宙を舞う。

想定外の事態。こんなとき、どうすればいいのか？

「たっ……大佐ぁ～～！！」

…とりあえずネタに走ってしまった自分に、今更ながら嫌気がした。
どうしても、生存フラグを立てたかったのだ。

◆

〈ｓｉｄｅ：織斑　一夏〉

――時間は、少し遡る。
海へ行こうと思い立ち、別館へ向かった俺は、中庭のところで立ちすくむ箒を発見した。
目線の先には、例の真っ赤なテント。…ああ、気になるのかな？

「箒。」
「！　な、なんだ。一夏か。脅かすな。」
「別に脅かしたつもりはねぇんだけど。」

普通に話しかけただけだし。なにをそんなに慌ててるんだ？

「と、ところで、聞いてくれ！実はあの中に、不審者がいるのだ。」
「不審者……？それってもしかして、潜水服を着た……」
「ああ、そうだ。テントから出てきて、アンテナを立てたと思ったら、私に向かって手を振ってきたんだぞ！？」

あ、ほんとだ。アンテナが増えてる。そういえばさっき、ワンセグがどうとか言ってたから、その関係だろ。

「あれ、紅也だぞ？」
「……は？」
「だから、紅也。さっき顔見たから、間違いないって。」
「……なんでまた、あんな格好を……。」
「さあ？」

潜水服だから、海に潜るためじゃないか？知らんけど。

「……はあ。警戒していたのが馬鹿みたいだ。私は行く。」

そう言うや否や、箒はすたすたと歩き去ってしまった。後に残されたのは、俺とテントとウサミミだけ。……って、ウサミミ？
箒は気付かなかったみたいだけど、ご丁寧に「引っ張ってください」という張り紙までしてある。
これって、間違いなく、あの人の仕業だよなあ……。
ってことは、この下に埋まってるのか？となると、さすがに放置はできない。

俺は中庭におり、ウサミミをつかむと、力を入れて一気に引き抜いた。

「のわっ！？」

引き抜いたのは良かったんだが……そこにあったのはウサミミだけだった。想定外の軽さに、俺はそのまま尻もちをついてしまう。

「いてて……。」
「何をしていますの？」
「お、セシリアか。いや、今このウサミミを――あ。」

後ろから聞こえた声に反応し、振り向いた俺が目にしたのは……セシリアのスカートの中だった。

「!?　い、一夏さんっ！」

俺の視線に気づいたセシリアは、ばばっとスカートを押さえて後ずさる。レースのついた白い下着は、ばっちり俺の脳内に記録されていた。……俺の馬鹿。

「す、すまん。その、だな。ウサミミが生えていて、それで……」

「は、はい？」

セシリアは素っ頓狂な声で訊き返す。そりゃそうだ。俺だって、人からそんな説明を受けたら、理解できないに違いない。…よし、ここは分かりやすく説明しよう。

「いや、束さんが――」

キィィィン……。

う？なんだ、この、何かが高速で向かっているかのような音は――って、うお！？

ドカ――――ン！

謎の飛行物体は、盛大に地面に突き刺さった。それはいい。いや、よくない。

その飛行物体――デフォルメされたにんじんだった――が突き刺さった場所。それは、あの赤いテントが数秒前まで存在していた場所

だった。

「こ……紅也ぁぁぁぁぁ！！」

いや、コレ、ヤバいって！

すっごく土煙が上がってるし！なんか、赤い切れ端がひらひら舞ってるし！

しかも、箒の話が正しければ、今のあいつの装備はただの（？）潜水服。いつもの魔改造制服でもなければ、レッドフレームでもない。

……マジで死んだかも。

「に、にんじん……？と、いうか、紅也さんと何の関係が？」

セシリアがそう漏らす。

すると、それを聞きつけてかどうかは知らないけど、にんじんは二つに割れ、中から一人の人間が登場した。

「あっはっはっ！引っかかったね、いっくん！」

その人物の格好は、不思議の国からやってきたような青と白のワンピース。奇妙奇天烈かつ他者の追随を許さないセンスの持ち主だとわかる。その謎の人物の正体とは……驚くなかれ、ＩＳの開発者である、篠ノ之束その人である。

「やー、前はほら、ミサイルで飛んでたら危うくどこかの偵察機に撃墜されそうになったからね。私は学習する生き物なんだよ。ぶいぶい。」

そんな事を言いながら、俺の手からウサミミを受け取る束さん。一

人不思議の国のアリスかなにかだろうか。懐中時計は持ってないのかな？

そして「あれー？束さんの懐中、壊れちゃった……」とか言って。

……やめよう。なんか、つらい三週間を過ごすことになりそうだ。

「お、お久しぶりです、束さん。」

「うんうん。おひさだね。本当に久しいねー。ところでいっくん、箒ちゃんはどこかな？さっきまで一緒だったよね？トイレ？」

「えーと……」

バッシャアアアアン！！！

「……そうだ、紅也！

束さん！着地地点見てなかったんですか！？人がいたんですよ！？」

「んー、あの子？あの子はねー、箒ちゃんを怖がらせたから……死刑！！」

「ちょっとぉぉ！！」

確信犯か！わざと狙って、着陸したのか？

「まあ、直撃はしてないし、体も丈夫だから、大丈夫でしょ！…あ、そんなことより箒ちゃん探さないと！じゃあねいっくん。また後でね！」

そう言って束さんは、すったたーと走り去っていく。その速度は無茶苦茶速い。さすがはＩＳの開発者。いや、関係ないか。

……それにしても、何か、話してるときに違和感があったような？

「い、一夏さん？今の方は一体……。」

「束さん。箒の姉さんだ。」
「え……？えええええっ！？」

◆

〈ｓｉｄｅ：シャルロット〉

早めに着替えを済ませた僕は、先にビーチに行って一夏を待とうと思い、手早く水着に着替えた。
あの試着室での騒動の後、一夏が選んでくれた水着。それを着て一夏の反応を見るのは、正直かなり楽しみだ。今の僕の足取りは軽く、僕の心はこの青空のように澄み渡って……
……青空？雲一つないけど、何かが飛んでいる。数は２。大きいものが一つと、小さいものが一つ。小さい方はだんだんと大きくなって……って！危ない！！

慌てて後退。すると目の前の砂浜に、カバン大の何かが突き刺さった。

バッシャアアアアアン！！！

次いで、大きいものが海に落下し、そのまま沈んでいく。奇怪な見た目をしてたけど……人のような形だった。何で空から？
まあ、それはさておき。

「何だろう……これ？」

《その声……シャルルか。》

突如カバンに光が灯り、ディスプレイに文字が浮かぶ。こんなモノを持ってるのは、僕の知り合いの中では一人だけ。紅也だ。

「えっと……8、だっけ？」

《いかにも。ところで、紅也はどうした？》

「どうした、って……あ！」

分かった！さっきの人影、たぶん紅也だ！なんで空から降ってきたかは知らないけど、まだ浮かんでこない。早く助けてあげないと！！

《紅也は……海の中か。

状態：気絶　バイタル：正常

……心配不要だ。》

「え？そうなの？」

《どうせ、すぐに戻ってくる。それよりシャルル、私を水から遠ざけてくれ。塩水は苦手なんだ。》

ふーん。ＩＳなのに、変なの。

……ところで、さっきから周りのみんなが何かひそひそ話してるんだけど、何かあったのかな？

――――あ！第三者的な目線で見ると、今の僕って、一人で誰かと話してる、変な子みたいだ！！

ううう……恥ずかしいよぅ。

◆

〈ｓｉｄｅ：葵〉

……海。日本に来てからは、初めての、海。
日差しに十二分に警戒する必要があったオーストラリアと違い、この太陽はどこか柔らかい感じがする。
だけど、油断は禁物。日本の夏の日差しは、かなり強いと聞いてる。まずはパラソルを立てて、日焼け止めを塗って……いや、先に海に入ろうかな？みんな、楽しそうに遊んでるし……。
そう考えながら海を見る。光を反射し、キラキラと輝く海。その様子はまるで、私を誘っているかのようだった。

「あ、織斑君だ！」
「う、うそっ！わ、私の水着変じゃないよね！？大丈夫だよね！？」
「平気平気！まいよりはマシよ！」
「ミヨー！それってどういう意味ー？」

にわかに周囲が騒がしくなる。邪気が……じゃなかった。一夏が来たみたい。

「わ、わ～。体かっこい～。鍛えてるね～。」
「織斑くーん、あとでビーチバレーしようよ～。」
「おー。時間があればいいぜ。……あちちちっ。」

サンダルを履いてこなかったのかな？火傷するよ。

「――ん、葵？早いな。」
「…そう？ところで、紅也は？」

一夏が私に気付き、話しかけてくる。そこで私は、先程から気になっていたことを聞いてみることにしたのだ。
――さっきから、紅也に通信が繋がらない。反応を見る限り、間違いなく砂浜に来てるはずだけど……見当たらない。
……どうしたの、一夏。顔が青いわよ？

「…紅也は「い、ち、か～～～～～っ！」――――って、のわっ！？」

突然現れ、一夏に飛び乗った小柄でスレンダーな人影は、鈴音のものだった。

「……何か、失礼なことを考えなかった？このナイスバディーは。」

気のせい。絶対気のせい。

「……で、一夏。葵と何話してたのよ。ていうか紅は？」
「それを話そうとしてたんだよ。紅也はさっき……」

「ねえ、何あれ？」
「え？サメ？」
「ちょっとちょっと！ヤバくない？」

……？

海の方が騒がしい。そちらに視線を向けてみると、海の中に影のようなものが見えた。
その黒い影は、砂浜に向かい、ゆっくりと近づいてくる。

「よく見やがりなさい！あれはサメじゃねぇわ。」
「ニコール～？相変わらず変な日本語使うよね～？で、その根拠は～？」
「脚があるわ。」
「あ～。ほんとだ～。」

やがて、海から何かが姿を現す。
丸い頭部に、スモークのかかったレンズグラス。確か、紅也の荷物に入ってた潜水服だ。
…まさか、このためだけに海中でスタンバってたのかな？我が兄ながら、ぶっとんでる。

「……Ａｒ（アァ）……Ｕｈ（ァ）……。」

しかもそんなうなり声を上げ、右手を突き出し、ゾンビのような格好で女子生徒に迫っていく。……変態か。

「いやあああああっ！？」
「宇宙人だ～。」
「おまわりさーん！変態です！極めて特殊な変態がここにー！！」
「ＵＲＲＲＲＲＲＲッ！！」
「こっちに来たぁ！？」

……何て言えばいいんだろう。阿鼻叫喚の地獄絵図？

「何よ、アイツ！ちょっと行ってくるわ！！」
「あっ！鈴！……行っちまった。」

この様子を見るに、鈴音はアレの正体に気づいてなくて、一夏は気づいてるみたい。

「来なさい、変態！アンタの相手は、このあたしよっ！！」
「■■■■■■■■■■――！！」
「なっ！見かけによらず、やるじゃない！！――いいわ、こうなったら、本気で相手してあげる！！」

あっ、衝撃砲。あれってただの潜水服だから、紅也、死んだかも。

「なっ！？これをくらってまだ立てるなんて……。」
「あっ、ヘルメットが取れた！」
「あ～。やまぴーだ～。」
「……紅。なんのつもり？」
「……Ａｒ（アー）……ｔｈｕｒ（サー）……。」
「あたしは凰鈴音よっ！！」

……何？狂化してるの？しかも第四次。
手に持ってるワカメは、宝具化してるんだろうか？

「……なあ。」
「…何？」
「いいのか、あれ。放っておいても。」
「…楽しみ方は、人それぞれ。」

「何故……？それほどまでに、あたしが憎かったの？紅！！」
「■■■■■■■■――――！！」

「まあ……楽しそうではあるな、二人とも。」

一夏の言葉に、無言でうなずく。
臨海学校は、まだ始まったばかり。それに、どうせ本格的に動くのは明日。
なら、今日ぐらい遊んでも、いいんじゃない？

第５１話　天災襲来（後書き）

「ワカメ」は慎二くんではありません、念のため。

第５２話　海といったら…何しよう？（前書き）

はい、５２話。日常編です。
狂化した紅也は？それに挑む鈴は？そして聖杯を手にするのは誰なのか――？

※これは、ＩＳの二次創作です。

第52話　海といったら…何しよう？

「待って、紅！」
「……鈴。葵を頼む。知ってのとおり、頼りないやつだからな。」
「……紅……。……うん、分かってる。あたし、頑張るから。きっと、あいつが自分を好きになれるように頑張るから。だから、あんたも……！」
「……答えは得た。大丈夫だよ鈴音。俺もこれから、頑張っていくから……。」

◆

……どうやら、俺にかかっていた狂化の呪いは、鈴音に倒されたことで解けたらしい。
正直、助かった。あのままだったら、せっかくの自由時間を楽しむことはできなかったはずだからな。

「心残りはそっちなんだ……。」
「ん、シャル子。いたのか。」
「最初から見てたよ……。はい、これ。」
《よう、相棒。まだ生きてるか？》
「あ、８。一緒に飛ばされてたのか。」

海から上がり、潜水服（すでに全壊）を脱ぎ捨てる。そしてシャル子から８を受け取ると、量子化していたタオルを取り出し、体を拭

く。……ああ、気持ちいい。

「……で。一夏、葵。ちょっとこっちに来てくれ。」

ちょいちょい、と手招き。葵がとことことこちらにやってきて、一夏はその後ろについてくる。その様子から一瞬カルガモの親子を思い浮かべてしまい、少し笑いがこぼれそうになるのを我慢する。

「…何？」

「言っておくけど、俺は止めたほうがいいって言ったからな？」

「葵はあんまし関係ない。ちょっと一夏に質問があるんだが……。」

『止めたほうがいい』って、さっきの鈴音からのリンチのことだろうか？あれに関しては、あんまり気にしてない。最後の方なんか、俺もあいつもノリノリだったし。

ま、そんなことより、聞きたいのはそのきっかけ。俺が空を舞ったときの話だ。

「お前、あの時テントの前にいたよな？何があったんだ？」

「……あー。非常に説明しにくいんだけど……。」

そう前置きをしてから、一夏は話し始めた。

降ってきたにんじん。四散するテント。空飛ぶ潜水服。現れたアリスもどき。終始空気のセシリア。

断片的な情報だったが、何となく状況はつかめた。

「……つまり、篠ノ之博士が俺を殺しに来た、と。」

「全然伝わってねぇ！？」

いや、大事なのはそこだけだろう。命狙われたんだぜ？任侠的に考

えて、報復あるのみだ。
ギャグ補正がなければ、間違いなく死んでた。シリアス回じゃなくて、本当によかった。

「…メタ発言、自重。」

葵に指摘される。そういや、ずいぶん前に自重することを決意したはずだったけど……臨海学校だからネジが緩んでたか？反省反省っと。

「…絶対懲りてないでしょ。」
「いや、懲りた。だから、今度はもっと対空設備を充実させたテントを……」
「ベクトルが違う！！」

鈴音に怒られた。つられて他の４人も苦笑い……って、４人？

「セシリア、いつの間に？」
「一夏さんの説明中にはいましたわ！！」

おおう、空気だったから気付かなかった。ごめんな、セシリア。

「…ってことは、空気云々っていう発言も……？」
「ええ、しっかり聞かせてもらいましたわ、一夏さん。」

にっこりとほほ笑むセシリア。その表情はよくできた絵画のように美しい。
惜しむべきは、その額に複数の青筋が浮かんでいることだが。

「あ……あの～……セシリア、さん？」

「一夏さん、大事なお話がありますから、一緒に来てくださいませんか？」
「一緒に……って。こら！引きずるな！そっち岩場で、何もないから！！」

ＯＨＡＮＡＳＨＩだよな。間違いなく。
一夏終了のお知らせ。織斑先生の次回作にご期待ください！

「じゃあ、遊ぶか！！」
「…うん！鈴音とシャルロットも…来る？」
「え、ええ。」
「じゃあ、行こうかな～……。」

そう言って、俺達４人は歩き出す。案外薄情な連中だった。

◆

遊ぶとはいったものの、特にアテがあるわけではない。
なにせテントは吹き飛ばされ、そのとき展開していた遊び道具やカメラや双眼鏡は、全て壊れてしまった。特にゴムボート。あれで漂流するのを楽しみにしてたのに、破裂してしまった。泣きたい。びょーびょー泣きたい。

「…じゃあ、スイカ割りは？」
「そもそも、スイカを用意してないな…。」
「…別にスイカでなくてもいい。例えば…」

そう言って葵が指さしたのは、サッカーボールと同じくらいの大きさの岩だった。

「なるほど。スイカが食べたいんじゃなくて、そんな感じの遊びがしたいわけね。」

「…そう。」

「僕はいいと思うけど。」

「じゃ、決まりかな。」

意見がまとまったところで、俺はその岩を拾い上げ、適当な所に置く。岩は砂にめりこみ、程よく固定された。

そして準備は完了。棒の代わりに木刀を、目隠しの代わりにテントの切れ端を用意し、皆の所に戻ろうとすると、唐突に声をかけられた。

「嫁よ、何をやっている?」

「遊びの準備だよ、ラウラ。遅かったけど、何かあったのか?」

「うむ。中庭で爆発騒ぎがあったようなので、調査をな。」

「……。」

俺のせいでした。いや、俺のせいじゃないけど、俺が関係してるし……うーん。

「悪ぃな、ラウラ。…そうだ、ラウラも一緒にどうだ、スイカ割り。」

「スイカ割り?何だ、それは?」

「…まあ、見たほうが早いな。来いよ。」

俺は説明をしないまま、ラウラを先導して歩く。鈴音はラウラに対

して思う所があるようだが、とりあえず追い返す気はないようだ。
ちょっと安心だな。

「…と、いうわけでこの5人でスイカ割り…もとい『いわくだき』をやろうぜ！」
「砕けるかっ！」「砕けないよっ！」

いきなり二人に反対された。
だけど葵とラウラは無言。無言は肯定とみなしまーす。
と、いうわけで多数決で決定！

「ルールは簡単！この目隠しをつけて、くるくる回り、周りの声を頼りに岩まで向かい、そして木刀で叩く！当れば勝ちだ。」
「な、何だ…。砕かなくてもいいのね。」
「それなら参加しようかな、うん。」

今度は全員の賛成を得られた。じゃあ、楽しい楽しいスイカ割り、始めるとしようか！！

～一巡目・一人目：紅也～

「ほーら、回りなさい！」
「いやぁ！やめてください、お代官さまぁ～。」
「よいではないか、よいではないか～。」

「鈴、楽しそうだね。」
「…紅也も。」
「嫁にそんな趣味があったとは……。」

「違うからな！！」

とういわけで１０回転したあと、ふらつく頭をおさえつつ木刀を構える。…軽いなぁ。やっぱ真剣じゃないと、しまらねぇなぁ。
最後に確認した位置は、俺の左前方、二十歩くらい先だったはず。
記憶を頼りに歩き出すも……。

「紅也！僕の方に来てどうするのさ！岩はあっちだよ！」
「右よ右！ああもう、行き過ぎ！！」
「…まっすぐ。」
「１１時の方向、距離８だ。」

…ごちゃごちゃうるせぇ！！
『あっち』ってどっちだ！見えねぇよ！
鈴は的確だけど、右に歩けばいいのか右を向けばいいのかどっちだ！
葵は声が小さい！聞こえないぜ。
ラウラ！１２時の方向って、どっちだ！距離の単位は何だ！？

「そこだよ、そこ！」
「今度は左！…そっちじゃないわよ！」
「…後ろ。」
「６時の方向だ。近いぞ。」

とりあえず、近くにあることはわかった。
だが、距離がわからん。…こうなったら――

「空破斬！！」

斬撃を飛ばして、叩き斬ってやる！！

「きゃー!?パラソルが!」
「海が裂けた!?」
「何なにナニ〜!?」

……外したか。

「何やってんのよこの馬鹿は〜!!」

腹部に衝撃。声からして鈴音だろう。痛い。
そのまま後ろに倒れた俺は、頭を岩にぶつけ、悶絶することになった。

〜一巡目・二人目：シャルロット〜

「うう……目が回るよぅ……。」
「我慢しなさい!元・男でしょ?」
「そういう誤解を招く発言はやめてくれないかなぁ!?」
「…勝った。」
「私は負けたようだ。」
「なあ、何で俺は参加しちゃだめなんだ?」
「あんた男でしょうが!!女の体に触りたいわけ?」
「……ちっ。」

だって、なぁ。回してる最中に胸とか触っちゃっても、アクシデントで済むよなあ?葵とラウラなんか、露骨に大きさ比べてたし。

「…GO。」

葵の号令で、シャル子が歩き出す。その足取りはおぼつかなく、生まれたての小鹿のようにプルプル……じゃない、フラフラしてる。俺もあんな感じだったのか？

「真っすぐ歩けー。右に行ってるぞー。」
「もうちょっと左ー。そこで止まって！」
「…そのままっすぐ。」
「5時の方向、距離3だ。」

さすがはシャル子といったところか。皆の声を聞き、すぐに岩の前までたどり着いた。
…でも、ここですんなり終わったら、面白くねぇよなぁ。
鈴音とアイコンタクト。奴もニヤリと笑う。
…作戦開始だ。

「まだ距離あるぞー。」
「真っすぐ走りなさい！」
「…止まって。」
「近すぎる！やめろ！」

スイカ割りの真骨頂。声をかける人間が、必ずしも正しいとは限らない。
見てる方には、見てる方の楽しみ方があるのだ。

「〜〜〜痛ったあ！？」

シャル子、失敗。岩に脛をぶつけてしまった。

ちょっと痛そうだけど……傷は残らないし、大丈夫だろ。

～一巡目・三人目：葵～

「右回転！」
「次は左回転！」
「あはは…やりすぎじゃない？」
「…目が、回る。」

葵は、平衡感覚がハンパない。そこで念には念、いつもより多めに回しておりま～す！！

「…目、回った。」
「ふ、ここまでだな。」
「じゃあ、スタート！」

シャル子の声を合図に、葵が歩き出す。足取りはしっかりしているが、向かっているのは見当違いの方向だ。回すついでに、スタート地点も変えさせてもらった。これで、そう簡単にはいかないだろう。

「左……と見せかけて後ろだ！」
「実は上よ！」
「二人とも、真面目にやったら？」
「7時の方向だ。間違えるなよ。」

唯一信頼できそうなラウラの情報をもとに、葵は歩き始めた。…が、そっちは海。
どうやらラウラも、だんだんと楽しみ方が分かってきたらしい。

俺の方を見て、「ふふん」とでも言いたげに胸を張っている。張るほどないのが残念だけどな。

「…１２時の方向、距離３０。全力で振り抜け。」
「ストップ！それは岩じゃなくて、俺の位置だ！！」
「何言ってんのよ。岩の位置でしょ？」
「嘘は良くないよ、紅也。」

なんてこった！
女性陣が、全員敵になっちまった！
まるでパルヴァライザーを倒した後、いきなりＩＦＦが切り替わったような衝撃が、俺を襲う！！

「葵！信じてくれ！そこにいるのは……」

そこまで言って、反射的に頭を下げる。遅れてヒュン！と風を切る音がした。
…葵のやつ、木刀を投擲しやがった！！

「…外した。」
「何で残念そうにするかなぁ！？」

～一巡目・四人目：鈴音～

「ああもう、みんな、情けないわね！アタシが手本をみせてあげるわ！！」
「よし、回してくれ。」
「…了解。」

「いいよ。」
「嫁のためだ、悪く思うな。」

三人の言葉を皮切りに、鈴音が高速回転を始める。
遠心力でツインテールが横に伸び、コマみたいだ。しかも足下からは砂埃があがってて、その様子から俺はネオドイツのガンダムファイターを連想した。

「止〜め〜て〜！！」
「…ゴー・シュート。」
「スピニングコング？」
「いや、シュトゥルム・ウント・ドランクだろう。」

三者三様の言葉で、回転する鈴音を送り出す。その勢いは一向に衰えず、鈴音は人間ベイブレードと化したまま、一直線に岩へと突き進んだ。
そして、激突。
木刀は岩に命中するも、鈴音の螺旋力をまともに受けたためか、真っ二つに砕けてしまった。

「ああ！王刀が！！」
「…ただの木刀。」

…とはいえ、木刀が折れたら、もう『いわくだき』はできない。

「悪いな、ラウラ。お前の番まで回せなくて。」
「気にするな。私は十分に楽しんだ。機会があれば、また『スイカ割り』をしてみたいものだ。」
「そう言ってくれるとありがたいぜ。」

…そういえば、ひょっとして俺は、ラウラに間違った『スイカ割り』を教えちまったんじゃないだろうか？
今更ながら、少し不安になった。

第５２話　海といったら…何しよう？（後書き）

と、いうわけで、ただ遊んでるだけの話でした。
鈴ファンのみなさん、ごめんなさい。

それと煌　焔さん、いつも感想ありがとうございます！

第５３話　たまにはこうして、普通の学生のように。（前書き）

今日も投稿できました！第５３話です。
そういえば、ユニークアクセスが４万を超えていました！ありがとうございます。記念に外伝を投稿しようかと思うんですけど、時間がないです！

全編通して海のお話。そしてある意味修羅場？
では、どうぞ！

第５３話　たまにはこうして、普通の学生のように。

さっきまでやってた『スイカ割り』の結果、鈴音がダウンしてしまった。
そのため今は葵のパラソルの下で休ませ、俺達も一時休憩することにした。

「…疲れた。」
「まあ、ある意味疲れたよ、俺も。」
「あはは……。でも、まあ……」
「ヤツよりはマシだろう。」

「だれのせいだとおもってるのよぅ……。」

四人の視線の先にいる鈴音は、氷の入った袋をおでこに乗せ、ぐてーっと仰向けに倒れている。あれしきのことで情けない…とは言わないさ。ちょっとやりすぎた。ゴメン。

「じゃあ、次は泳いじゃうか？葵、どうする？」
「…私、休む。」
「そっか。日焼け止め塗ろうか？」
「…お願い。」

シートを一枚実体化。すると葵はそこに横たわり、水着を外して背中を晒す。
肌には気をつけているのか、白くすべすべとした、きめ細やかな背中だった。

「な、葵!?何をやっているのだ！」

「そうだよ！いきなり水着をとるなんて、なんて大胆な……。」
「…何か、まずいことでもあったか？」

ぬりぬり。
パラソルの下にあった日焼け止めのボトルをとり、自分の手に垂らす。日光でほどよく温まったそれは、手になじんでとても気持ちいい。十分に広げた所で葵の背中に、腰に、尻に、ふとももに…とクリームを塗りつけていく。

「…気持ちいい。」
「そいつはなによりだ。後は自分で出来るか？」
「…うん。」

葵が胸の部分の水着をつけ直したタイミングを見計らい、ボトルを手渡す。それを受け取った葵は立ち上がり、手の届く範囲にクリームを塗り、再び横になった。

「な……なんて自然な動作……。」
「さすがは、私の目標だ。」

…？　何を言ってるんだ、こいつらは。

「あら、みなさん。お揃いで。」
「お帰り、セシリア。ずいぶん長かったな。」
「つもりにつもった話がありましたので……。」

ちらり、と一夏を見る。
セシリアの後ろについてきていた一夏は、うつむいたままぼーっとしている。

「なあ、一夏。一体何が――」
「…畜生。持っていかれたッ……」
「――なんでもないよ。」

深くつっこまないほうが良さそうだ。
とりあえず一夏はもうだめな感じがするので、さらにシートを一枚出したうえで、鈴音の隣に寝かせておく。それに気付いてわたわたしている鈴音の様子は、かなり滑稽だった。

「これでよし、っと。…で、次は何する?ビーチバレーでもするか?」
「うーん、僕は休んでようかな?…一夏が心配だし。」
「わたくしは……日光浴でもしようかしら?紅也さん、さっき葵さんにしていたみたいに、サンオイルを塗ってくださいませんか?」
「ならば私が塗ってやろう。ほら、横になるがいい。」
「ちょっ、アナタ!何を……」

言うが早いかセシリアを横倒しにし、サンオイルを垂らすラウラ。
…嫌がらせか?イジメは良くないぜ。

「ひゃっ!冷たっ!そんな所まで……。ひゃうっ!?」
「どうだ、これで満足か?」
「っ!アナタ、いい加減に……」
「どうした?体はこんなに反応しているぞ?」

……会話だけ聞いてると、かなりヤヴァイな、これ。
某ムッツリーニなら、鼻血で失血死してるレベルだ。この状況を第三者が見たら、きっとこう思うだろう。

「何をやっている、貴様ら。」

……と。
間違いない。だって、実際にそう言ってる人間がやってきた。
我らが担任様が。

「き……教官！」

ラウラが敬礼する。最近、学校で軍人らしいしぐさをすることはなかったんだけどなぁ…。気が動転してるのか？

「見ての通り、ラウラとセシリアが仲良くしてました。」
「そうか、スキンシップはほどほどにな。」
「ち、違います、教官！わた、私は、このどっちつかずのメス豚に……」
「なっ！？言うに事欠いてアナタは……」

そう言って織斑先生そっちのけで展開される、ラウラとセシリアのケンカ。
俺もシャル子も、止める気は無い。先月みたいな武力行使に比べたら、こんなのはじゃれあいのようなもの。ラウラが周りに溶け込むには、こういうことも必要だろう。織斑先生もそう思ったのか、迷惑そうにこめかみをおさえてはいるものの、介入は一切していない。

…それにしても織斑先生、スタイル滅茶苦茶いいな。
いや、モンド・グロッソ見たときからわかってたけど、普段のスーツ姿に慣れてたから、すっかり忘れてた。出る所は出ていて、しかしすらっとしている身体。背が高く、手足もしゅっとしていて、まるでモデルのようだ。しかも水着は黒のビキニ。

……いい……センスだ……。

ぎりっ！×２

「痛たたたぁ！耳がぁ！！」

両耳をつねられた。痛い！地味に痛い！！
若干涙目になって下手人を見る。右にセシリア、左にラウラか……。
さっきまで喧嘩してたのに、なんつーチームプレイだ！

「紅也さん？鼻の下が伸びてますわよ。」
「嫁よ、浮気は許さんぞ。」
「ほう？この私にときめいていたのか？この間は年増扱いしていたのに、現金な奴だな。」

鼻の下が伸びてる？確かにそうかもしれない。
だが、後二人は否定させてもらおう！ラウラ、残念だが、俺とお前が交際している事実はねぇ。そして織斑先生。前も言ったけど、年増扱いした事実はありません。年増扱いしそうな人物に心当たりはありますが。それから、『ときめく』は違う人のキメ台詞です。まあ、確かにあなたは日本最強どころか、世界最強の剣士ですけど。
とりあえず助けを求めて、葵を見る。……目を逸らされた。
じゃあ、一夏。助けろ。そう思ってそちらを見るも……

「……一夏、鼻の下伸びてる。」
「なっ……！？しゃ、シャル？何を言ってるんだよ。ははは……」
「見とれてたくせに。」

……ダメだ。あっちはあっちで修羅場だ。
え、鈴音？あいつはまだダウン中だから、戦力外だ。

さて、どうしよう？

たたかう――――無理。

どうぐ　――――ねぇよ、そんなもん。

ポケモン――――いや、控えのポケモンとか、持ってないから。

と、なると、取れる手段は一つだけ。『にげる』だ。

「あ～、俺、なんだか無性に腹が減ってきたっす。ちょっとランチに行ってきます！」

不意を突いて拘束から抜け出し（耳がとっても痛かった）、一目散に宿へと向かう。

今の俺は、通常の三倍は速く動けてる。感動した。俺の体って、こんなに速く動くのか。

「くくく、からかい甲斐のあるやつだ。

そら、お前たちも食堂に行って昼食でもとってこい。」

「先生は？」

「私はわずかばかりの自由時間を満喫させてもらうとしよう。」

そんな声が、ドップラー効果で遠ざかっていった。

◆

「さて、今度こそ泳ぐか！」

時刻は午後2時。砂浜は灼熱し、昼食も消化した。絶好の水泳日和ってやつだ。
準備運動もしないまま、海へと猛烈ダッシュ。そのまま飛び込み姿勢をとり、足に力をこめて飛び上がらんとするも――

「へぶっ！？」

砂に足を取られ、転んでしまった。中途半端な飛び込み姿勢であったため、俺は受け身も取れず、顔面から砂浜に突っ込んでしまう。
幸い痛みは無かったが……

「熱い熱いあついいぃぃぃ！！」
「…ま、砂浜で踏ん張ればそうなるよな。」

後から来たはずの一夏が俺を追い越し、そのままざぶざぶと海へと入っていく。

「うっかりしすぎね、紅。」

そこへ追いついてきた鈴音にそんな言葉をかけられ。

「…かっこわるい。」

ゆっくり近づいてきた葵にそんなことを言われた。

――だから……俺は……！

「よーし、見てろよ、葵。次はお兄ちゃん、ここから飛び込むぞー。」

気が付いたら、目に見える中で一番高い岩の上にいた。
下の方では波が寄せては返し、白いしぶきを上げている。
さらにその下には、サメの牙のように鋭い岩がずらりと並んでおり
――――

「「「早まるなー!!」」」

三人の叫び声が、やや遠くから聞こえる。
『早まる』？なんのことやら。俺はただ、高い所から飛び込んで、
みんなの関心を引きたいだけなのに。

「いや、ある意味関心引いてるよ？みんな見てるし。」

シャル子の言葉に反応し、俺は辺りを見渡してみる。
ビーチに出ていた女子全員が、俺の一挙一踏足に注目しているようだ。

「そうか…。みんな、期待してくれるのか？こんな俺でも、やればできるって！」
「「「「「ちっがーう!!」」」」」
「そうか、俺にはできないと思ってるのか…。鬱だ。死のう。」
「「「「「まさかの逆効果!?」」」」」

こうして世界から見捨てられた可哀想な俺は、崖と空との境界線へと近づいていく。

「ああもう！扱いづらいなぁ、紅也は!!
……そういえば、セシリアとラウラはどこにいるんだろう？こういうとき、真っ先に止めそうなんだけど…。」

◆

「よし、ここで良いタイミングで飛び出して嫁を救えば、私に惚れるに違いない。」

「あーら、それができると思ってるのかしら、このドイツ人は。それはこのわたくし、セシリア・オルコットの役目ですわ！」

「……やるのか？」

「……いいでしょう。どちらが紅也さんを助ける資格があるのか、教えて差し上げますわ！」

◆

「マジで誰も止めてくれねぇ……。」

いや、最初は冗談だったんだよ？

だって普通、あそこの場面だったら、「ダメェェェ！！」とか言って、抱きついてでも止めるだろ？

なのに、ふたを開けてみたら、みんな遠巻きに見てるだけで、誰もかまってくれない。特に、シャル子にスルーされたのには傷ついた。

そうは言っても、今更歩みを止めるわけにはいかねぇ。

ここで止めたら、本格的に笑い者だ。せめて、「誰かに強制的に止められた」という状態になりたい。そうしないと、俺の沽券にかかわる気がする。

海が近付いてきた。
ああ、時間がゆっくりと流れていく。今なら、波の一粒一粒だって正確に見えそうだ。
誰か、止めろよ。後数歩進むだけで、俺、死んじゃうよ？

さらに一歩。
崖の下が見えた。セシリアとラウラを発見。
なぜかＩＳで戦ってる。まさか、この間の決着をつけようとしてるとか？
何でこんなときに……。これで、助けてくれそうな人はいなくなった。
はあ……。もう、飛ぶしかないな。８は持ってきてないから、便利アイテムは出せない。ここからは、完全に人任せになりそうだ。

さらに一歩。もう、止められない。
いや……でも……もう少し待ったら、誰か来るかも……。

ピキュウゥゥン！

近くで、そんな音が聞こえた。次いで、急な浮遊感。俺の体は、すでに陸から離れて空にあった。

「「「あ。」」」

それは、誰の声であったか。
岩塊と共に落下する俺に、それを確かめる術は無かった。

◆

「おい、貴様！なんということを……。」
「あ、あなたねぇ！！《ブルー・ティアーズ》の射線をずらしたのはアナタじゃありませんこと！？」
「と…とにかく嫁を……む！？」
「どうしましたの！？……あ、あれは……。」

◆

……。
……。
……。

いつまでたっても、水面に激突しない。
そういえば、周りの岩塊が落ちた音は聞こえたけど、俺は落ちてない。
そこで、誰かに抱きかかえられていることに、ようやく気付いた。
――葵か？
いや、これは全身装甲（フルスキン）の腕ではない。生身の人間の腕だ。

「……大丈夫……？」
「簪……？あ、ああ。大丈夫だ。」

驚いた。
まさか、ここで簪が出てくるとは。最近出番がないから、存在を忘れかけてた。

「だけど、助かった。ありがとな、簪。」
「……え！？う、うん……。どう、いたしまして……。」

そう言って簪は、白い肌を朱に染める。こんなことで照れるなんて、褒められ慣れて無いのか？ぼーっとした顔で俺を見ていた簪は、やがてはっとしたかのようにフルフルと顔を振り、急に厳しい顔で俺を見た。

「……でも。」
「で、でも？」
「……もう二度と、こんな……危ないことは、しないで。」
「あ、ああ……。悪かった。ゴメン。」

珍しく怒り顔の簪に、俺は委縮してしまう。
…この子、こんなに感情を表に出すタイプの子だったっけ？

「や……やられましたわ……。」
「と、いうか、誰だコイツは。」

遅れてやってきたのは、ブルー・ティアーズとシュヴァルツェア・レーゲン。そういやラウラは、簪とは初対面だったっけ？

「ま、まあ、とりあえず下ろしてくれよ。さすがにいつまでもこの体勢っていうのは、正直恥ずかしい。」
「～～～～～～！！」
その言葉に、簪が慌てだす。
と、いうか、自覚は無かったのか？簪が、俺を『お姫様だっこ』してることに。
……っていうか、普通は逆だと思うんだよなぁ……。
そんなことを考えながら、俺は浜辺へと戻されていった。
そういえば、箒の姿が見えなかったな。どこにいるんだろうか？

第５３話　たまにはこうして、普通の学生のように。（後書き）

まさかの簪登場です！

いやあ、どこかで出したかったんですよ！福音の前に！

第５４話　旅館といったら和食じゃない？（前書き）

サブタイ決めに苦労しました。第５４話です。

話が進みません。

第５４話　旅館といったら和食じゃない？

さて、あんなことがあった以上、まともに泳ぐことが出来なかった俺は、そのまま浜辺でだらだらしていた。

う～ん、水着って、いいよねぇ。

きゃいきゃいとはしゃぐ女子を見ていた俺は、気が付いたら眠ってしまい、目が覚めたら夕方だった。少し損した気分ではあったが、まだ初日なんだから、と自分を励まし、遊びから戻ってきた葵たちと共に旅館へと撤収した。

……手抜き、とか言うなよ？実際、延々と睡眠描写したって、面白くねぇだろ？

◆

昼の時とは異なり、全員一緒の夕食。今日の料理は和食だ。

「うん、うまい！昼も夜も刺身が出るなんて豪勢だなぁ。」

「そうだね。ほんと、ＩＳ学園って羽振りがいいよ。」

そう話してるのは、俺の向かいに座っている一夏と、その隣にいるシャル子。前は箸が苦手だったはずのシャル子は、いつの間にやら使い方をマスターしたようで、話しながらも器用に山菜をつまんで

いる。一方、その反対側、つまり一夏の左に座っているセシリアは、正座がつらいのかなかなか食事が進まない様子。そんなに一夏の隣をキープしたかったのか？

……でも、おかしいなぁ。あの席は、たしか愛姫（あいひめ）さんが買ったはずなんだけど。転売したのかな？次からは転売禁止にしておこっと。

くいくい。

不意に、浴衣の左の袖を引かれた。

…何故浴衣？と思う人のために説明しておこう。

なんとこの旅館、『お食事中は浴衣着用』という、読者サービｓ…

…げふんげふん。もとい、なんとも奇妙な決まりごとがあるのだ。

そのため、現在の俺はもちろん浴衣。

一夏も浴衣。シャル子も浴衣。周りの女子も全員浴衣。

――これぞ、固有結界『浴衣天国（ユカタ・イン・ヘヴン）』！！

いやあ、眼福眼福。

閑話休題。

で、浴衣の袖をつつましく、いじらしく、かわいらしく引っ張ったのが誰か、って話だったよな？俺の左隣に座っている、その手の主は、葵だ。

「…紅也。」

「ん？何だい？」

「…苦手。」

……なっ……！？

このとき俺が受けた衝撃は、どう表現すればよいだろうか。
最愛かつ相思相愛（に違いない）の妹が、わざわざ何を言うのかと思ったら、いきなり『苦手』宣言とか。
これが反抗期か？
いや、それよりも。
何でだ？俺、何か嫌われるようなことをしたか？
心当たりは……ある。それも、海での出来事だけに絞っても、３つほど。
その３つ。たった３つの失敗が、兄妹の絆を引き裂いてしまうとは――――ッ！！

……俺の人生は、何だったのか。

ちくしょうっ……あんまりだッ……。こんなのって、ねぇよ……。

「…だから、苦手。」
「まさかの追い打ちキタ――（。∀。）――！！」

ひどすぎる。鬼か？いや、鬼畜王だ。
ここで追撃とか、どんだけＳなんだよ、葵。
そんなにお兄ちゃんが嫌いか？俺の評価は、そこまで低くなってたのか？
何が悪かったんだ！？教えてくれ！葵！！

そんな俺の内心を知ってか知らずか、葵は俺の皿の方へと箸を伸ばし――って、箸？

「…お刺身、苦手。あげる。」

ぽとり、と。
俺の皿の上に、生魚の切り身を置いたのだった。

「…えーと、苦手って、刺身のことか？」
「…？他にあるの？」
「……いや、ねぇよ。」

最後の方、思わず憮然とした返事になっちまった。
なーんだ、俺の勘違いか。よかったよかった。
そうだよな。葵が俺のこと、嫌うはずがないもんな！うんうん。

…と、いうことは、こんな誤解をした俺は、葵のことを信じ切れていなかったとでもいうのか？馬鹿な！
ああ、恥ずかしい！穴があったら埋まりたい！！

「じゃあ、貰うぜ。なんか欲しいおかずはあるか？」
「…わさび。」
「刺身が無いのにわさびだけって、どうするんだよ……。」

そうは言いながらも、俺はわさびの山を箸でとり、葵の皿へ運ぶ。
そして箸に付いた残りを刺身に塗りつけ、しょうゆに浸してから口に運んだ。

…食べたことのない、独特な歯ごたえだ。何の魚かは分からねえけど、とりあえず一言。

うますぎるぅ！！もっと食わせろ。

いやぁ、生の魚がこんなにうまいなんて、大発見だ。
この味に出合えただけでも、日本に来て良かったと言える。

だって、ピラルクーとかアロワナなんて、食べごたえはあったけど身が硬くて、まずいったらありゃしなかった。最初に刺身を頼んだときは『覚悟』を決めたこともあったけど、今となってはあの日の自分を笑ってやりたいね。

で、俺からわさびを受け取った葵はというと、わさびと山菜を混ぜ合わせ、味噌汁につっこんでいる最中だった。赤みがかっていた汁が、なんとも形容しがたい色に変わっていく。

「……和食を……ナメてる……。」

そう発言したのは、現在俺の右に座っている簪だ。昼間助けてもらったお礼をしようと提案したら、隣の席で夕食が食べたいと言ってきたため、確保したのだ。…これってお礼になるのか？気を使われただけのような気がするんだよなぁ……。

「しょうがないさ。葵の味覚は、ちょっと変わってるんだ。」

「……『ちょっと』？」

「……ああ、『ちょっと』だ。」

頑張れ、俺！さっき、葵を疑ってしまったんだ！今度こそ、信じてやらなくてどうする！？

残ったわさびの山を、おいしそうに食べる葵を見ながら、俺はそう決意した。

「っ～～～～～～！！」

突然、シャル子が鼻を押さえる。こころなしか、その目には涙が浮かんでいるような気もする。…まさか、葵の真似をして、わさびを食べたのか？

ダメじゃないか！ちゃんと、『良い子はマネしないでください』って言っただろ！？

……え、言ってない？　今言ったからいいの！

「だ、大丈夫か？」
「ら、らいひょうぶ……。」

無理して笑うな、シャル子。すげぇ痛々しい顔してるぞ。

「ふ、風味があって、いいね……。お、おいしい……よ？」
「…シャル子、もういい。しゃべるな。」

ええい、どんだけ優等生なんだ、コイツは！アレか？Ｎｏと言えない日本人って奴か？
…いや、シャル子はフランス人か。

と、ここで一部始終を見ていた葵が唐突に手を伸ばし、箸を持つシャル子の右手を両手でがっちりとホールドした。
その瞳は、心なしかきらきらと輝いているようで……。

「…同志。」
「……え？」
「…あげる。」

ホールドを解いた葵は、まだ残っていたわさびを箸でつかみ、シャル子の口元へと運んでいく。多分、さっきの発言を字面通りに信じた結果の行動だろうが…。相手の顔を見てやれよ。滅茶苦茶嫌そうだぜ？

「遠慮はいらない。」
「いや、遠慮とかじゃなくてね、えーと……」
「…私は十分味わった。」
「ぼ、僕も十分かなー、なんて……。」

箸を伸ばす葵と、やんわりと断ろうとするシャル子。が、無駄だ。
そんな控えめな『拒否』じゃ、今の葵には通じないぞ～。

「……いいなあ。」
「何が？」

ぽつり、と呟く簪に、俺は思わず返事を返す。
あれがよさげに見えるのであれば、俺は眼科の受診をお勧めしたい。
…とか考えていたのが伝わったのか、はたまた独り言を聞かれたことが恥ずかしかったのか。簪は急に両手をパタパタと振り、話し始めた。

「……えと、あの……なんでもな……なんでもあるの。」
「とりあえず落ち着け。混乱しすぎで日本語が意味不明だぜ。」

そう言ってやると簪は手を止め、目を閉じて軽く深呼吸――軽いのか深いのかどっちなんだ――としてから、再び話し始めた。

「あ……あの……『あーん』ってやるやつ……。仲が良さそうで……。」
「羨ましい、とか？」
「う、うん……。」

そう言って、照れくさそうに目を伏せる簪。……何この可愛い生き物。

「そっか。じゃあ……ハイ。」

そう言いながら、俺は手をつけてなかったお新香を箸でつまみ、箸の口元へと運ぶ。
反射的な行動だったのか、箸は小さく口を開け、それを受け取った。

「……！！」
「どうだ？」

そう問いかけるも、反応は無い。…いや、咀嚼は続いてるものの、どこか上の空というか、何というか……。ちょっと不意打ちすぎたかな？

《…クリエイター、あまりマイスターを困らせないで下さい。》

８の回線を通して、クリムゾンが呼びかけてきた。
久しぶりの登場だな、お前。正直、作者も忘れかけてたよ。お前の存在。

「あ～！やまぴーがかんちゃんに『あーん』してた～。」
「いいなぁいいなぁ。私にもやってー！」
「悪いけど、それは無理だ。これは箸に助けてもらったお礼みたいなもんで、特別サービスだから。」
「！　……と、特別……。」
「え～。ざ～んねん。それにしても……くふふ～。」

間延びした口調で話す布仏さんが、なんだか意味ありげな視線を箸へと送る。…なんだろうな？

《……クリエイター。わざとやっているのですか？》
《狙ってやれるほど器用じゃないさ、紅也は。》

◆

……ピシリ。

「あ、葵？箸、割れそうだけど……。」
「…気のせい。」
「シャルの言うとおりだ。取り替えてもらった方が……」
「…うるさい。」

ひょいっ。ぱくっ。

「～～～～～～！！」
「い……一夏ぁ～！！」
（……何をやっているんだ、あいつらは。）

◆

そんなこんなで食事もひと段落。
あの後、床をのたうちまわる一夏が織斑先生に叩かれたり、箸が走

り去ったり、左隣から正体不明の殺気をたたきつけられたりと、まあいろいろあったが、それはこの際置いといて。

俺は久しぶりに、自分が使う部屋である、山田先生の部屋へと戻ってきていた。

先程テントのあったあたりへ行ってみたが、「Ｅｉｎｔｒｉｔｔ ｖｅｒｂｏｔｅｎ！」と書かれたテープが張られており、近づくことができなかった。まあ、一夏の話を聞く限り、俺の持ち物が残っている可能性は低いんだけどな。

でもなあ……９９％は、１００％じゃないぜ？

とはいえ、現場に落ちてたものはラウラか教師が回収しただろうから、後で聞いてみようと思い、戻ってきた次第である。

（…でも、山田先生どころか、織斑先生までいないとは……。）

どこに行ったのかは分からないが、山田先生と織斑先生は部屋にいなかった。かといって他の教師を訪ねる訳にもいかず、またわざわざラウラの部屋に行く勇気など持っていない俺は、とりあえず今持っている荷物を展開することにした。

幸い、海で使うものはダメになったが、日用品や着替えはまだ８の中で量子変換されている。それらをひとつひとつ展開し、自分の記憶と照合しつつ、手早くまとめていった。

そしてその作業がひと段落した頃、唐突に８から「ブー！」と音が鳴った。

《向かいの部屋に反応２。教師が部屋に戻ったようだ。》

浮かんだ文字は、織斑姉弟の帰還を示すものだった。

いいタイミングでの連絡だ。ひょっとしたら、作業が終わるまで待ってくれたのか？機械（メカ）のくせに、気が効くじゃねぇか。

「おっけ。じゃ、ちょっと行こうぜ。」

《ああ、それと……》

8を片手に、部屋の外へ。

空いた右手でドアノブを回し、内開きの扉を引っ張ると――

「「……」」

そこには、俺が予想していなかった光景が広がっていた。

《ドアの前に生体反応2。知ってる奴らだ。》

「見りゃわかるよ……。」

織斑部屋のドアの前。そこに箒と鈴音の二人が張り付いていたのであった……。

第５４話　旅館といったら和食じゃない？（後書き）

次回、うら若き乙女たち＋１によるガールズトーク回です。

え？やだなぁ、織斑先生。先生も充分お若いですよ。

…はぁ！？まだ「年増」発言を根に持ってるんですか？だから、そんなこと俺は言ってないって何回言ったら

第５５話　これは「女子会」ですか？　はい、エロゲ展開です。（前書き）

な、なんと！過去最長の９０００字オーバーです！

いつも、短く区切るように心掛けてたんですけど……。ごめんなさい。

では、第５５話、始まります。

第55話　これは「女子会」ですか？　はい、エロゲ展開です。

織斑姉弟の部屋に張り付き、聞き耳を立てる二人の美少女……。
うん、かなりシュールな絵だな。

……それにしても。
二人のうち一人は、仮にも代表候補生。それが背後で開いたドアにも気付かないなんて。
一体、この部屋の中で何が行われているのだろうか？

「…何してんだお前ら。」
「「（きゃあぁぁぁぁ！！）」」

俺の声に反応し、小声で絶叫するというありえない高等技術を披露する二人。今の、どうやったんだ？

「（こ、紅也！脅かすな！）」
「（そうよ！一体、どこから……）」
「（普通に部屋からだけど？）」

ひそひそ話を継続する俺達。しかも箒と鈴音は、話しながらもしっかりと聞き耳を立てている。…これが『分割思考』ってやつか？アトラス院の奥義を無駄使いすんなよ。

「（それはそうと、紅也。ちょっと聞いてみてくれ。）」

ちょいちょい、と箒が手招きする。言われるがままに箒の隣に立った俺は、そのままドアに張り付き、聴力に全神経を傾けた。

『よっ……と。ずいぶん固くなってるな。』
『最近、あまりやっていなかったからな。こうもなるさ。』
『たまには自分でやったらどうだ？そういう道具もあるし……。』
『馬鹿を言うな。お前にやってもらうからいいんだ。』

「「「……」」」

沈黙。
一体この中で、ナニが行われているというのか。

「（お、同じように兄妹がいる身として…どう思う？）」
「（……き、兄妹でも越えちゃいけない一線は守るっつーか何つーか……）」
「（あーもう！あたしが聞きたいのは、そんな一般論じゃなくて……）」
「鈴さん？それに紅也さんに箒さんまで…そ、そんなに密着して、何を――」
「シッ！！」

突然現れたセシリアが話しているのを、鈴音が止めた。口をふさがれたセシリアは、わけがわからないといった表情で俺を見る。その視線を受け、俺は人差し指を自分の唇にあてた。そして頷くセシリア。一瞬で意思疎通を終えた俺達は、そのまま盗聴を続行する。

『千冬姉、久しぶりだからちょっと緊張してる？』
『そんな訳あるか、馬鹿者。――んっ！す、少しは加減をしろ……。』
『はいはい。んじゃあ、ここは……と。』
『くあっ！そ、そこは……やめっ、つぅう！！』
『すぐに良くなるって。だいぶ溜まってたみたいだし、ね。』

『あぁぁっ！』

「「「「……」」」」

「（こ、こ、これは、一体、何ですの……？）」

「（……ここから先は、追加料金が必要だぜ……。）」

「（紅！否定しなさい！頼むから！！）」

「……。」

四者四様の反応。全員の共通項はといえば、お通夜の如き雰囲気のみだ。

『じゃあ次は――』

『一夏、少し待て。』

二人の声が途切れる。すると箒、鈴音、セシリアはドアにぴったりと耳を寄せ、さらに聞き耳を立て始めた。

一方、俺はだいだい次に起こることが予想できたため、足音を消しつつ部屋へと戻る。そして、俺が自分の部屋の扉を閉め終わるか終わらないかのうちに、向かいのドアが勢いよく開く音が聞こえた。

「「「へぶっ！！」」」

花の十代女子とは思えぬうめき声をあげる3人。ドアに殴られなかったことよりも、彼女たちの顔を直視せずに済んだ安堵の方が大きかった。

『何をしているか、馬鹿者どもが。』

『は、はは……』

『こ、こんばんは、織斑先生……』

『さ……さようなら、織斑先生っ！！』

バシバシッ！ドタン！

『盗み聞きとは感心しないが、ちょうどいい。入っていけ。』

……捕まった、か。

そろそろ頃合いだろうと判断し、何食わぬ顔でドアを開く。

「あ、織斑先生。もう戻られていたんですね。」

「白々しいぞ、山代。さっきまでお前もいただろうが。」

「なぜそれをっ！？」

「気配でわかるわ、馬鹿者。」

「…さいですかー。」

気配、と来たか。気配は消していたつもりだったんだけどな。

…『むしろどうして生きているくせに気配が消せるなどと？』とか言わないでくれよ。

「うー、紅。一人だけ逃げるなんて……。」

「武士の風上にも置けんな。」

「……ずるいですわ。」

「盗み聞きをしていた分際で、何を言うか。

ああ、そうだ。ついでに他の三人――ボーデヴィッヒとデュノア、それから山代妹も呼んで来い。」

そう言うがはやいか織斑先生は、箒と鈴の首根っこを開放した。

「「は、はいっ！」」

二人は鎖から放たれた犬のような機敏さで、脱兎のごとく駆けだした。

……しかし、このメンバーの共通点、ねぇ……。一夏と関わりのある専用機持ち、ってことか？簪は呼ばれてないし。

考えているうちにセシリアも浴衣から足をどかされ、自由になった。

涙目になって俺を見ている気がするが……あえて無視した。

「どうした？入らんのか？」

「ああ、いえ、お邪魔しますわ。」

「え？俺も…っすか？」

「何だ？用があったから出てきたのだろう。」

「まあ、そうなんですけどね…。」

連れだって３人で部屋に入る。中には浴衣姿の一夏がいて、ベッドに腰かけていた。

織斑先生同様、着衣に乱れはなし。どうやら（当たり前だが）１８禁展開ではなかったようだ。

「……で、山代。用は何だ？」

部屋の中を見回していたのが気に障ったのか、若干イライラした口調の織斑先生が、俺に声をかける。

「ああ、俺のテントのことなんですけど。あの……その……」

ちらり、とセシリアに視線を向ける。すると、その視線の意味に気付いた一夏が、俺に向け話してきた。

「セシリアならあの場にいたから、束さんのことは話しても大丈夫だぞ。」

「そういや、そんなこと言ってたな。セシリアが空気だったとか……。」
「ちょ、紅也！ストップ！！」
昼間の出来事を思い出したのか、一夏の顔が青くなる。セシリアは気にしてないみたいだけどな。それとも、織斑先生の前で一夏に狼藉は働けないか？
まあ、どっちでもいいや。話を続けよう。
「えーとですね、篠ノ之博士に吹っ飛ばされた荷物なんですけど。教師が預かったりしてませんか？」
「一つも無いな。」
ズバッ！
即答。情け容赦なく、あっさり斬り返された。
「じ、じゃあ……。ひょっとして……。」
「ひょっとしなくても、荷物は全滅だ。」
「なん……だと……。」
…そうか。やっぱり全滅か。
覚悟はしていたつもりだけど、いざ聞かされるとなるとやっぱり、なぁ……。
「あ、そうだ。保険が下りたりは……」
「――あの天災に対して有効な保険など、存在しないさ。…先に言っておくが、ＩＳ学園でも保証はせんぞ。」
はあ。全部自分で賄う必要あり、か。ちょっと手痛い出費になりそ

うだ。

「――で、お前らは何をやってんだ？」

さっきから意図的に見ないようにしていた、ベッドの上を見る。
そこにはセシリアがうつぶせで横たわっており、一夏がその背中に手を伸ばしているところだった。

「何って、マッサージだけど。」
「そ、そうですわ。昼間、お願いしていたんですの。」

昼間ぁ？『お願い』じゃなくて『ＯＨＡＮＡＳＨＩ』じゃなかった？

「じゃあ始めるぞ。」
「はっ、はいっ！」
「ん、しょっ……。」
「！？いたたっ、いたっ！い、い、いいっ、一夏さん！？な、な、なにをして――あううぅっ！」

……さっきも思ったけど、声だけ聞いてたら完全に「アレコレ」やってるように聞こえるよな。以下、俺は目をそむけているので、音声のみ抜粋してその全貌を伝えよう。

「す、すまん。もう少し優しくする。
これぐらいだったら大丈夫か？」
「ええ……。気持ちいいです……。」

「はぁぁ……。一夏さんって上手ですのね……。」
「まあ、昔から千冬姉にしてたしな。」

「おー、マセガキめ。
しかし、年不相応の下着だな。そのうえ黒か。」
「え……きゃあああっ！？」

…織斑先生がログインしたようだ。それにしても、目を逸らしておいて正解だったのか、失敗だったのか……。

「い、一夏さん、紅也さん、見てませんわよね！？」
「わ、悪いセシリア！悪気はなかったんd……」

バアン！！

唐突に、部屋のドアが開く。それと同時に人影が部屋に飛び込み、まっすぐに俺に向かって飛びかかってきた！

「…見た？」
「見たのは一夏だけだ。俺は見てない。だから、その手を放してくれよ、葵。」

喉に感じていた圧迫感が消える。
振りかえると、やはりというか、そこにいたのは葵だった。

「おい、ドアの影にいる４人も出てこい。」

ぎくっぎくっぎくっぎくっ。

「「「「「……」」」」」

沈黙は数秒。ややあって、開かれたドアの影から箒、鈴音、シャル子、ラウラの四人が出てきた。

「一夏、マッサージはもういいだろう。ほれ、全員好きな所に座れ。」

あっさりネタばらしをする織斑先生。ニヤリ、と笑うその貌を見て、俺は思う。

――ああ、コイツは確信犯だ、と。

四人はそれぞれ好きな場所に座り、俺と葵も皆の近くに腰かけた。

「ふー。さすがにふたり連続ですると汗かくな。」

「手を抜かないからだ。すこしは要領よくやればいい。」

「いや、そりゃせっかく時間を割いてくれてる相手に失礼だって。」

「愚直だな。」

「千冬姉、たまには褒めてくれても罰は当たらないって。」

「どうだかな。」

そんな会話を聞いて、ようやく事態を理解した4人は、それぞれ異なった反応を見せた。

「は、はは……はぁ。」

ずるり、と脱力する箒。

「ま、まあ、あたしはわかってたけどね。」

無意味に強がる鈴音。

「「……」」

いろいろと妄想していたとおぼしきラウラとシャル子は、真っ赤に

なってうつむいている。

「…で、葵は反応ナシ、か。」
「…紅也の焦りが伝わって来なかった。」
「そうかい。」

室内にいる俺が無反応だったことから、最初から勘違いオチだと見当をつけていた葵。
…とはいえ、俺がセシリアの下着を見たと勘違いして、最初に突っ込んできたのを、俺は忘れてない。

「…ところで山代。」
「「はい。」」
「……山代兄。」
「はい。」
「お前、風呂には入ったのか？」
「え？まだですけど……何か？」
「部屋を汗臭くされては困る。行って来い。…一夏、お前もだ。」
「？　わかりました。」

何だ？
わざとらしく俺と一夏――つまり、男子を部屋から追い出し、女子だけで残った理由は。

……ピキーン！閃いた！！

あれだ、これって、いわゆる「ガールズトーク」じゃないのか？あるいは、女子会？
……すっごくワクワクする響きだな。

8をつかみ、一夏と共に部屋を出る。
ドアを開けたときに振りかえったら、織斑先生と目があった。そして「しっしっ」と追い払うジェスチャー。…そんなに邪魔か？

（葵ー？聞こえるかー？）
（聞こえてる。）
（内容が気になるから、トーク内容の中継を……）

ぶちっ。
リンクを切られた。

◆

〈ｓｉｄｅ：山代　葵〉

（…馬鹿。）

仕事ならともかく、プライベートな女子トークなど、兄に聞かせられるわけがない。
しかも……と、葵は部屋にいるメンバーを見渡す。

一夏に思いを寄せていると思われる3人――箒、鈴、シャルロット。
紅也に気があるそぶりを見せるハイエナ――ラウラ。
どっちなのかわかんない――セシリア。
そして火中の男子の身内である、私と織斑千冬。

このメンバーで始まる話など、一つしかないのではなかろうか？

だから、通信を切った。

ここからは、男子禁制のガールズ・トーク。そこに紅也の出歯亀はいらない。

…と、思ってたけど。

「「「「「……」」」」」

沈黙が続く。誰も、何も口にしない。

別に、怒られるわけじゃないんだから、何かしゃべればいいのに。

…私？　私は、自分から話すキャラじゃないから、いいの。

「おいおい、葬式か通夜か？いつものバカ騒ぎはどうした。」

そんな空気に耐えかねたのか、いつもの調子で話し始めたのは、織斑先生の方だった。

それにより場に「しゃべっていい」空気が広がり、委縮していた生徒たちも次々に話し始める。

「い、いえ、その……」

「お、織斑先生とこうして話すのは、ええと……」

「は、はじめてですし……」

まずは箒、シャルロット、セシリアがそう切り出す。とはいえ、織斑先生に威圧されているのか、お世辞にも饒舌とは言えない状態だった。

「まったく、しょうがないな。私が飲み物を奢ってやろう。篠ノ之、

何がいい？」

あ、箒、驚いてる。
いきなり声をかけられたとはいえ、昔から知ってる人に対して、そこまで緊張しなくてもいいのに。いや、むしろ昔から「恐ろしさを」知ってるからこその反応かな？
返事がないことを気にしていないそぶりで、織斑先生が冷蔵庫を開ける。そしてくるりとこちらに振り返ったその手の中には、６本の飲料缶が。…どういうバランス感覚だ。

「ほれ。ラムネとオレンジとスポーツドリンクにコーヒー、紅茶にマサイの戦士だ。それぞれ他のがいいやつは各人で交換しろ。」

そう言いながら織斑先生は、箒・シャルロット・鈴音・ラウラ・セシリアに順にドリンクを渡していく。
最後に残ったのは私。余った一本は「マサイの戦士」。
…何で旅館に「マサイの戦士」なんてマニアックかつレアなアイテムがあるんだろう？

「鈴音、交か……」
「パス１で。」
「…じゃあ、ラウｒ……」
「パス２だ。」
「…ほうｋ……」
「すまん、無理だ。」
「言っておくけど、僕も。」
「わたくしも遠慮しますわ。」

…みんなひどい。
ドリンク交換は行われず、みんなは「これは私のものだ」と宣言す

るかのように、一斉に飲み物に口をつけた。

「どうした、山代。飲まないのか？」

織斑先生は私の口元――否、指先に注目している。

…おそらく、これは何らかの対価の先払い。これに手をつければ、何らかの義務を負わされることは想像に難くない。

とはいえ、ここで飲み物を飲んでおかなければ、私が織斑先生に不信感を持っていることがバレてしまう。そうなれば、後々の学園生活が面倒だ。

「…これ、苦手…です。」

とりあえず、言い訳をしてみる。…本当に言い訳だよ。本音じゃないから。

「そうか、じゃあ、こっちはどうだ？」

再び冷蔵庫を開き、出てきたのはドクターペッパー。某狂気のマッドサイエンティストも愛飲している、知的な飲料だ…って、紅也が言ってた。

「…いただきます。」

マサイの戦士を返品し、ドクペを受け取る。そして不信感をぬぐい去るかのようにプルタブを開け、一口飲む。

「…キンキンに冷えてやがる。」

始めて飲んだドクペは、なんだか不思議な味だった。

「飲んだな？」
「は、はい？」
「そ、そりゃ、飲みましたけど……。」
「な、何か入っていましたの！？」
「失礼なことを言うなバカめ。なに、ちょっとした口封じだ。」
「だから貴様は、アホなのだ～。」
「なっ、葵さん！？」
「…淡々と言われても、面白くないわよ、それ。」

鈴音からのつっこみはさておき。
この「買収」の目的は、どうやら口封じであったようだ。まあ確かに、ジュース一本で無茶な要求はできないとは思ってたけど。
そう考えている間に、織斑先生は三度（みたび）冷蔵庫へ。今度取り出したのは、日本の法律では子供は飲んじゃダメな２０禁飲料、ビールだった。

プシュッ！と景気のいい音を立てて飛沫と泡が飛び出す。それを自分の口に近付けた織斑先生は、そのままゴクゴクと喉を鳴らす。
私以外の全員が、その光景にあっけにとられている中で、織斑先生はどこか上機嫌な様子で自分のベッドに腰かけた。

「ふむ。本当なら一夏に一品作らせるところなんだが……それは我慢するか。」

いつもとは違う、傍若無人…いや、良く考えればそれはいつものことだったけど。他にも生徒の前でビールを飲んだり、姿勢を崩したり、そもそも浴衣だったりと、いつもの『堅苦しい織斑先生』の姿は、そこには無かった。一夏の呼び方も『織斑』じゃなくなってるし。きっと、こっちの方が本来の織斑千冬の姿なんだろうな。

――私の本来の姿っていうのは、いったいどっちなんだろう？

ふと、そのようなことを考えた。戦闘時の私と、普段の私。どちらも私だし、どちらも私じゃないと言える。…多分、本来の私は、あのときから――

「おかしな顔をするなよ。私だって人間だ。酒くらいは飲むさ。それとも、私は作業オイルを飲む物体に見えるか？」

「…飲むんですか？」

「飲むか、馬鹿者。」

私の思案顔をどう捉えたのか、軽口を叩く織斑先生。それに対して、私もまた軽口で返事をする。

「た、確かに意外ですけど……」

「でもその、今は……」

「仕事中なんじゃ……？」

「堅いことを言うな。それに、口止め料はもう払ったぞ。」

そう言ってニヤリと笑う織斑先生。私はその笑みに、悪だくみをする紅也の姿を幻視した。

「「「「「あっ！」」」」」

驚く女子一同。ようやく、ジュースの意味に気付いたみたい。

「さて、前座はこのくらいでいいだろう。そろそろ肝心の話をするか。」

いまだに呆然としているラウラに命令し、追加のビールを取りに行かせる織斑先生。…弟さんが、『人にあれこれやらせるクセがつくと人間バカになるぞ。』って言ってたけど、それってもしかして実体験からの言葉だったのかな？だとしたら…一夏、かわいそうな子！

「お前ら……一夏について、どう思う？」

ビールを飲みながら、とんでもない爆弾を投げてきた。

…いや、まあ、このメンツが集まった時点で、こういう話が出るのは分かってたんだけど。

「わ、私は別に好きとかではなく……以前より腕が落ちているのが腹立たしいだけですので。」

と、ラムネをちびちび飲みながら箒が。

「あたしは、腐れ縁なだけだし……。」

スポーツドリンクのふちをなぞりながら、もごもごと鈴音が。

「わ、わたくしはクラス代表としてしっかりしてほしいだけです。後、今のギャグキャラ扱いは――」

ツンとした態度で、そして後半は切実にセシリアが、そう告げる。

「ふむ、そうか。ではそう一夏に伝えておこう。それと、オルコットは諦めろ。」

「「言わなくていいです！」」

「わたくしだけひどくありません！？」

必死な感じで詰め寄る3人を、はっはっはっと笑い声で一蹴する織斑先生。そしてまたこちらを見ると、「お前らは？」と視線で問いかけてきた。

「僕――あの、私は……やさしいところが……好き、です……。」

――リアル回答ｋｔｋｒ。

うつむきながらそう言うシャルロット。…6月の紅也だったら、「だが男だ」とか言ってたに違いない。

「ほう。しかしなぁ、あいつは誰にでもやさしいぞ。」

「そ、そうですね……。そこがちょっと、悔しいかなぁ。」

あはは、と照れたように笑いながら、赤くなった頬をパタパタ扇ぐシャルロットの様子は、どう考えても照れ隠しだった。隠せてないけど。

「で、お前は？」

「……正直、最初はいい印象を持っていませんでした。しかし……教官の弟にふさわしい、芯の強い男だと思います。」

…へえ、ラウラって一夏のこと、そう思ってたんだ。

そういえば、相互意識干渉で、お互いに語り合ったって言ってたよね。

「ほう……意外な評価だな。最後になったが山代。お前はどうだ？」

そう話を振られ、6人分の視線が私に集中する。特にシャルロット。ガン見しすぎ。

一夏の印象、ねぇ……。

「…良く言えば熱血。悪く言えば直情的。でも――」
「「「「「でも？」」」」」
「――そういう男は、嫌いじゃないわよ。」

戦闘時のような、挑発的な口調で、さらなる爆弾を投下してみる。
誰とは言わないけど、この発言を聞いてあたふたする数人の態度が、すごく面白い。
その場の空気が、にわかに騒がしいものへと変化していく。織斑先生はその騒ぎをうっとうしげに見てから、パンッ！と手を叩いた。

「少しは落ち着け、お前たち。では、次の質問だ。…山代についてどう思う？」
「…私？」
「違う、兄の方だ。……というか、お前、わざとやっているだろう。」
「…お約束だから。」

それはそうとして。
やっぱりきたか、この質問。これも計算通りです。…なんてね。

「で、まずは篠ノ之。どうだ？」
「そうですね……。紅也は腕も立つし、剣の扱いも上手いし……。……普段のノリの軽さを除けば、尊敬できるやつです。」

…なんだか、高評価だ。箒は、一夏のことしか見てないと思ってたんだけど。…いや、でも、紅也に弟子入りしてるって話だから、やっぱりリスペクトしてるってことかな。

「うーん、一言で言うなら『悪友』ね。なんというか、からみやす

いというか……。」

『悪友』…ぴったりな言葉だと思う。普段から即興漫才をやってたりするし、妙に波長が合ってる感じがする。

「わ、わたくしも……。子供っぽいところはありますが、頼りになる方だと思いますわ。ただ、ギャグ要員扱いを止めて――」

セシリアは、6対4くらいで紅也の方に興味ありかな?でも、そんな半端な思いは許さない。もっと自分を磨いてから出直したら?それと、扱いに関しては、いい加減諦めたら?

「うーん、確かにみんなが言うことも一理あるんだけど……。なんていうか……黒い?」

「「あー。」」

シャルロットの発言を、先に言った三人が肯定する。

…確かに暗躍してるし、それは私も否定しない。特にたまに見せる『悪役笑い』から、そんな印象を持たれるのは当然だと思う。…私は、ああいう顔もかっこいいと思うんだけど。

「はい、嫁のことは好きでが……。どこが好きかといえば……わかりません。」

…分からない?

「ほう……。何故だ?」

「はい……。特定の『何か』があるわけではありませんが、紅也の言動、生き方、それらがどうしようもなく眩しく見えて、それで……。」

「…ふっ。変わったな、ラウラ。」
「はい。これも、紅也が教えてくれたことですから。」

…驚いた。一番驚いた。
ラウラ、それはね……『ベタ惚れ』っていうのよ。
見なおしたわ、ホント。もし私が紅也の母親だったら、たぶん二人の交際に反対なんてしないだろう。
でも……私は認められない。

だって、なんか嫌だから。

紅也には、私を置いていって欲しくない。
そりゃ、いつかは紅也も結婚するし、私以外の女を大事にするようになるだろう。
でも、その『いつか』は、今じゃなくてもいい。少なくとも今はまだ、私を大事にしてほしい。そのために、私は強くなったんだから。

「で、最後は山代妹だが……聞くまでも無いな。」
「…区別、反対。」
「そうは言ってもな。…山代、もし話すとしたら、どのくらいになる?」
「…今夜は寝かせない。」
「……と、いうわけで却下だ。異論は無いな?」
「「「「「はい、ありません。」」」」」
「…横暴。」

あおるようにドクペを流し込む。何とも言えない爽快な味が、喉を潤していった。

「織斑先生、こんな話をわざわざした、ということは、もしかして

一夏を――」
「言っておくが、やらんぞ。」
「「「「ええ～……」」」」

「女なら、奪うくらいの気持ちで行かなくてどうする。なあ、山代？」
「ええ、私もそう思いますよ、織斑先生。」

互いに口角を釣り上げた私と織斑先生は、どちらともなく乾杯をした。

――それにしても、織斑先生って、結構ブラコンだったんだ……。

第５５話　これは「女子会」ですか？　はい、エロゲ展開です。（後書き）

葵と千冬のブラコンコンビ、略してブラコンビが結成されました。

女子会なんて行ったことないです。心情描写が難しい……。

次回もお楽しみに！！

第５６話　新型（前書き）

はい、５６話になりました。
そろそろ、連投が厳しいです……。

第５６話　新型

「はあ……いい湯だなぁ。」
「……。」
「どうしたんだよ紅也、そんな不機嫌な顔して。」
「…野郎の入浴描写なんて、誰得だよ。」
「……は？」

◆

合宿二日目――の、朝。
皆さん忘れているかもしれないが、山田先生と同室だった俺は終始寝つけなかった。結局山田先生が眠ってから部屋を抜け出し、外で寝袋を出すことで睡眠は取れたんだが……。

――背中が、痛いです。

背中だけじゃない。枕にした石もサイズが合わなかったようで、頭が痛い。
そもそも、年が離れてるっていっても、山田先生は下手すれば同年代に見えるからなぁ……。そんな人と一緒に寝るなんて、俺には出来ない。まったく、一夏を尊敬するぜ。一ヶ月も箒と同室で、何のＴｏＬＯＶＥるも起こさなかったんだから。

「……で。そろそろ出てきたらどうっすか？」

思考を中断し、俺は虚空に向かって声をかける。
…別に、頭がおかしくなったわけじゃない。厨二な病気にかかった訳でもない。
ただ、気付いたのだ。目の前の芝生についた、人型にしては大きな足跡に。

「おっと、もうバレちまったか。相変わらず勘がいいなぁ、紅也は。」

何もないはずの空間から、どこか懐かしい声が聞こえる。
そして、俺の視界に変化が起こった。
まず、足が現れた。黒と金の、どこか高級感のあるＩＳの足。しかしそのつま先は、さながらピエロの靴のようにとがっていて、危険な感じがする。
次は脚。それから胴体。
同じく金と黒の配色。しかし、見る人が見ればわかるだろう。

この機体もまた――ＡＳＴＲＡＹだということが。

レッドフレームでは白かった部分が黒く、赤かった部分が金色になっている。細部は異なるものの、両者は間違いなく同一の機体だった。
だが、決定的に異なるのはここからだ。まず左腕。これはいい。肩アーマーを除けば、これまた同一の部品であった。問題は右腕。そこにあったのは、紅也にとっては懐かしい、数か月ぶりに対面した『奴』の右腕……『トリケロス』であった。
さらに頭部、バックパックが展開されると、機体の印象は一変する。
そこに立っていたのはまさに「悪魔」といった佇まいの、異形の全身装甲ＩＳ。

モノアイが追加され、三つ目になった頭部。背中に広がる、漆黒の2枚の翼。
しかしそれらは機体の品位を貶めることなく、むしろ高貴さを引き立たせていた。

「いやあ、例のパーツが完成したんでな？慌てて届けに来たって訳さ。」

そして最後に現れる、このＩＳの操縦者――否、操縦者という呼称は、はたして正しいのだろうか？
その男は、異形のＩＳの左腕に腰かけていた。断じて、機体を装着していた訳ではない。
だが、俺はそれに動揺しない。なぜなら、この機体は、そういうものなのだから。

「…はあ。まったく、あなたが直に届けに来なくてもいいでしょうに。」
「言うなよ。なんせ、俺以外に手が空いてたのは、ユンだけだったからな。」
「……あー。納得です。」

よっ、という掛け声をあげて、男が機体から飛び降りる。
茶色の髪を逆立て、青いバンダナを額に巻いた男。その格好もＩＳスーツなどではなく、藍色の作業着に、黄色いノースリーブの上着を羽織っただけのシンプルなものだ。

「…ところで、ここは関係者以外立ち入り禁止っすよ、師匠。」
「もちろん知ってるぜ。だからこうやって、姿を消してきたんじゃねぇか。」
「そういう問題ではなく……」

「まったく、固ぇこと言うなよ。」

そう言って男――いや、俺の師匠は、肩をすくめる。その態度から察するに、悪びれたところはみじんも無く、俺は思わずため息をついた。

「まあ、いいです。ホントは良くないんですが、いいです。
…で、実物を見せてもらいたいんすけど……。」

俺の中で『規則』と『好奇心』がケンカして、『規則』がＴＫＯで大敗北した。
故に俺は、新パーツ見たさに、師匠の存在を許容する。

「おう、いいぜ。じゃあ、ちょっと離れてろよ。」

そう言いながら、師匠は自分の左腕につけた、時計のような小型端末を操作する。すると黒いＩＳが剣道のような構えを取り、そこに光が集まり始めた。
握った手には柄が。そこから徐々に巨大な刀身が生えていく。
そして光が収まったときにそこにいたのは、身の丈を越える赤い大剣を構えた、黒いＩＳであった。

「…これが……！！」

「そう！オマエと８が設計して、俺が組み上げた新兵器！〈タクティカルアームズ〉だ！！」

そう言って、師匠はニカッと笑う。その表情は、いたずらを成功させた子供のようだった。
…変わってねぇなぁ、この人は。

◆

タクティカルアームズ。

かつて、学年別トーナメントに備えるために俺が発注し、そして間に合わなかった新武装。

ガーベラ・ストレートが『技』で斬る刀であるのに対し、これは『力』によって斬る剣。ビームサーベルのようにエネルギーに依存しない、実体を持つ剣だ。

…が、これはただそれだけの、つまらない普通の剣じゃない。

両刃の刀身のちょうど真ん中に、剣を割るかのようなつなぎ目がある。そこに隠し武器として、ガトリング砲を装備しているのだ。

これは、なかなか銃の命中率が上がらない俺が、遠距離の敵と戦うために考えた『答え』の一つ。下手な鉄砲数撃ちゃ当たる、って感じだ。

ちなみに、ガトリング砲発射の際には、刀身を折りたたんでコンパクトにしたり、伸ばしたままの刀身を地面に突き刺し、銃座代わりにすることもできる優れものだ。

そして第三の機能。この剣には強力なスラスターがついており、変形して背部に装着することで『翼』として使用できるのだ。推力は今のバックパックの1．5倍以上。ただし、今までと違って機体から直接エネルギーを吸い上げる使用になっているから、注意が必要だ。

さらに、この強大な推進力の副産物として、タクティカルアームズ自体を遠隔操作することも可能だ。剣の状態のまま飛行させ、相手を斬る。さしずめソード・ビットといったところか。この技術は、かつて拝借した〈ブルー・ティアーズ〉の制御データを参考にさせてもらった。もっとも、ＰＩＣを使っていないため、完全再現とはいかないが…。

◆

「…っと、忘れるところでした。タクティカルアームズ装着用の新バックパックと、制御用の新しい頭部も出してください。それがなきゃ、『完成』とはいえませんからね。」

「お、悪ぃな。忘れてたぜ。」

そして新たに現れる、２つのパーツ。新たな頭部は、Ｖアンテナを大型化し、索敵・制御能力を向上させるためのもの。そしてバックパックは……タクティカルアームズを乗せる台座であり、特にビックリ機能はない。残念。

「これが『レッドフレーム強化３点セット』だ。久々に面白い仕事をさせてもらったぜ。」

「ありがとうございます、師匠。思ってた以上にカッコイイです！」

「あったりまえだ！なんたって俺は、宇宙一の技術者だからな！」

そう言って、師匠は胸を張るのであった。

そうそう、今、俺の目の前にいる師匠は、あくまで『技術者』としての師匠だ。剣術の師匠は、いつか鈴音にも話した通り別の人。ちなみに師匠も、その人――蘊老師に指導を受けた一人であったようで、老師の弟子の中で唯一の『免許皆伝』だったとか。すごい話だ。

「じゃ、早速インストールを……。」
「…って、今からっすか!?無理っす。」
「はぁ?何かあんのか?」

頭に『?』を浮かべる師匠に対し、俺は説明を始めた。

「これから朝食(ちょうしょく)食って、すぐにビーチに集合しなきゃいけないんすよ。だから、そのときまでインストールはできないっす。」
「あ～。確か、『ＩＳの装備試験』だったか?じゃあ、そんときでいいな?」
「ええ、まあ。」

ならしょうがねぇな～。と、つぶやきながら師匠が端末を操作すると、３つの装備は光となって消えた。再び量子化して、目の前のＩＳに収納されたのだろう。

「んじゃ、俺はしばらくここにいるからな。飯がすんだらまた来いよ。」
「はい。じゃ、行ってきます。」

そう言って手を振り、俺は歩き出す。三歩ほど進んでから振りかえってみると、既に師匠とＩＳは消えていた。おそらく、またミラージュ・コロイドで隠れたんだろう。

…それにしても。

まさかこんな所に、ベクトルの異なる二人の天才が現れるなんて。

（もし、顔を合わせるようなことがあったら……）

そう思うと、思わず頭を抱えたくなる紅也であった。

◆

「うぇ、しくじった～！！」

朝食後。一度部屋に戻って、「あれ？追加パーツはどうやって持っていこうか？」とふと思い浮かんだ疑問の答えを探し、うんうん唸っていたのがいけなかったのか。

山田先生の「先に行きますけど、遅れちゃだめですよー。」という言葉を聞き逃し、気が付いたら集合時刻が迫っていた。

慌ててさっきの場所に戻り、３点セットを受け取った時点で遅刻は確定。それでも開き直る気にはなれない俺は、集合場所のビーチまで、全速力でレッドフレームを飛ばしていた。

…あ、ようやく集合場所が見えた。ハイパーセンサーのおかげで、イライラと足踏みをする織斑先生がはっきり見え、冷や汗が浮かぶ。生徒は、もう全員集合しているようだ。つまり、遅刻は俺一人。…俺、死んだかも。

人のいない場所を選んで着地。砂埃が舞い上がる。

そしてパーツをその場に置いて、俺は自分がいるべき場所へと走り

出した。

「ようやく全員集まったか。――おい、遅刻者。」

「は、はいっ！ごめんなさい！！」

織斑先生に睨まれ、俺は思わず頭を下げる。

内心では冷や汗タラタラだ。もし「罰として焼き土下座だ」とか言われたら、いくら俺でも耐えられない。

「何でＩＳまで展開していたのかは、この際目をつぶっておいてやる。

そうだな、ＩＳのコア・ネットワークについて説明してみろ。」

どうやら、焼き土下座は回避できたようだ。織斑先生が、兵藤のような性格でなくて良かった。厳しいには違わないけど。

「はい……。えーと、ＩＳのコアは相互情報交換のための独自のネットワークを持ってます。これは、ＩＳが本来、宇宙空間での活動を前提に作られたから、円滑に連携するためにも相互に位置を把握することが必須だったためです。えーと、他には……あ、操縦者同士の会話にもこのネットワークが利用されています。その他にも、ＩＳが自己進化するために、このネットワークを使って『非限定情報共有（シェアリング）』を行っているそうです。」

確か、こんな感じだったはずだ。満点ではないけど、及第点は欲しい所だ。

「まあ、いいだろう。この回答に免じて、遅刻の件はチャラにしてやる。」

「あ、ありがとうございます……。」

危機は去った。それと同時に、今日のメインイベントが始まる。

「さて、それでは各班ごとに振り分けられたＩＳの装備試験を行うように。専用機持ちは専用パーツのテストだ。全員、迅速に行え。」

はーい、と返事が聞こえる。そのタイミングがばらばらなのは、様式美というか、お約束というか。

俺は再びレッドフレームを展開し、先程置いてきたパーツの元に向かおうとするが――

「ああ、篠ノ之。お前はちょっとこっちに来い。」

「はい。」

その声が気になり、思わずそちらを向く。同時に、指向性の音声センサーを起動し、会話に耳を傾けた。

「お前には今日から専用――」

「ちーちゃ～～～～～～ん！！！」

先程俺が巻きあげた以上の砂埃。それがこっちに向かって近づいてきていた。

…しかし、「ちーちゃん」？影送りか？　それとも、誰かのあだ名……？

砂埃が近づく。それと同時に、８がセンサーの映像を補正し、砂埃の発生源を捉えた。

ＩＳの脚部のようなものを部分展開し、頭に付けたウサミミをぴこぴこ揺らしながら走る、フリフリドレスの変人。……やっぱりというかなんというか、篠ノ之博士だった。

「……束。」

織斑先生が、はぁ、と呆れたように呟く。

…ん？織斑先生……織斑千冬……ちふゆ……『ちーちゃん』。

ああ、ようやく理解。

「やあやあ！　会いたかったよ、ちーちゃん！　さあ、ハグハグしよう！　愛を確かめ――ぶへっ。」

……最近、女子の実態（というか醜態）を見るのには慣れてきていたつもりだったが、これは初めてみる光景だ。

織斑先生に飛びかかった篠ノ之博士が、片手で顔面を掴まれて宙づりになっている。まるで、某中学校の生徒会長と、新大陸発見部の部長のやりとりみたいに。

「うるさいぞ、束。」

「ぐぬぬぬ……相変わらず容赦のないアイアンクローだねっ！」

あわや輻射波動が放たれる……といったタイミングで、篠ノ之博士は拘束から抜け出した。慣れてるんだろうか？

無事に着地した博士は、今度は箒の方を向き、声をかけた。

「やあ！」

「……どうも。」

箒は、ずいぶんぶっきらぼうに答える。

前にも聞いたけど、姉妹仲はやっぱり悪いらしい。篠ノ之博士本人は、箒が大好きみたいだったけど……。まさか、小鳥遊さん家みたいに「可愛がり過ぎて嫌われた」とか？

「えへへ、久しぶりだね。こうして会うのは何年ぶりかなぁ。おっきくなったね、箒ちゃん。」

…うーん、やっぱり博士の方はフレンドリーだよな。ま、家族に対してフレンドリーってのは、微妙な表現な気がするけど。じゃあ、「ファミリリー」？…言いにくい。

「――特に、おっぱいが。」

がんっ！

フレンドリー過ぎたようだ。

「殴りますよ。」

「な、殴ってから言ったぁ……。し、しかも日本刀の鞘で叩いた！ひどい！箒ちゃんひどい！」

頭を押さえながら、涙目になって訴える篠ノ之博士（二十●歳）。

子供か、この人は。

すると、呆然状態から復帰した山田先生が、無謀にも博士に近寄っていった。

「え、えっと、この合宿では関係者以外――」

「んん？珍妙奇天烈なことを言うね。ＩＳの関係者というなら、一番はこの私をおいて他にいないよ。」

「えっ、あっ、はいっ。そ、そうですね……。」

巡視艦ヤマダ、撃沈。想定通りだけど。

…っていうか、「ＩＳの関係者」と「ＩＳ学園の関係者」は別ですよ？

「おい、束。自己紹介くらいしろ。うちの生徒たちが困っている。」
そこで現れた超ド級戦艦オリムラ。空母シノノノに対し、砲撃を開始する。その効果は確かにあったようで。
「えー、めんどくさいなぁ。私が天才の束さんだよ、はろー。終わり。」
博士はそう言ってくるりと回ってみせた。まるで、自己アピールをするかのように。他人に関心が無いくせに、何をアピールしてるんだか。
…が、その一言で博士の正体はバレたみたいで、生徒がにわかに騒がしくなる。
「はぁ……。もう少しまともにできんのか、お前は。そら一年、手が止まっているぞ。こいつのことは無視してテストを続けろ。」
いや、無視は無理でしょう。どう考えても。
……って、アレ？何で俺はさっきからツッコミばっかりやってんだ!?
「こいつとはひどいなぁ、らぶりぃ束さんと呼んでいいよ？」
「うるさい、黙れ。」
その時点で、これ以上話を聞いても得るものがないと悟った俺は、音声センサーを切ってから自分のパーツの元へ向かう。そしてソードフォームのタクティカルアームズを拾い上げると、刀身を折りたたみ、手作業でフライトフォームへと変形させていく。
そんな作業の中、不意に周囲の違和感に気付いた。全員が、上を見

上げているのだ。
なんだろう？涙がこぼれないようにしてるのか？

つられて俺も上を見る。――センサーが未確認飛行物体を捕捉。俺に向かって落下中……って、マジかよ！！

バックパックのスラスターをふかし、パーツを抱えて緊急回避。
その判断は正しかったようで、先程まで俺が立っていた場所には、ちょっとしたクレーターができていた。落下してきたのは、銀色のカプセルのような物体。なんか、エヴァに出てくるラミ〇ルのような形をしていた。
カプセルが開く。一瞬本気で砲撃を警戒して、思わず楯を構えるが――何もなかった。

「ちっ……。
……じゃじゃーん！これぞ箒ちゃんの専用機こと『紅椿（あかつばき）』！全スペックが現行ＩＳを上回る束さんお手製ＩＳだよ！」

楯をどかすと、俺にもカプセルの中身が見えた。レッドフレームよりもなお赤い、真紅の装甲に身を包んだ機体。それが動作アームによって、太陽の下へと姿を現した……。

第５６話　新型（後書き）

二つの「新型」……お待ちかね、タクティカルアームズの登場です！！

ついでに、紅也の「師匠」も……。名前は伏せておきます。

第５７話　終わる日常（前書き）

はい、第５７話です。
紅也が語ります。ぐだぐだ語ります。

第57話　終わる日常

紅椿。
ＩＳの開発者、篠ノ之束が作り上げた、最新にして最高性能のＩＳ。
十人中十人が欲しがるであろうそれを手に入れたのは、彼女の妹である篠ノ之箒であった。

――まあ、そうなるだろうな。
この人ほどのシスコンなら、このぐらいのことはやるだろう。現に俺も、かつて葵に似たような約束をしたことがある。それがいつ実現するかはわからねぇが……最新でも最強でも、作ってやろうじゃねぇの！！

◆

「さあ！箒ちゃん、今からフィッティングとパーソナライズをはじめようか！私が補佐するからすぐに終わるよん♪」
「……それでは、頼みます。」
「堅いよ～。実の姉妹なんだし、こうもっとキャッチーな呼び方で――。」
「はやく、はじめましょう。」

せっかくのプレゼントは、どうやら不評のようだ。あるいは、プレゼント自体ではなく、博士の方に不満を持っているのだろうが。

「…紅也。」

ちょいちょい、と葵に手招きされた。なにかないしょの話でもあるのか？

パーツを抱えたまま移動し、葵のそばでレッドフレームを解除。そして、ＡＳＴＲＡＹシリーズ専用の、特殊な通信回路を開き、葵の話を聞く。

（…あの機体。）

（ああ。とんでもないおたかｒ……爆弾だな。）

（…力を得た人間は、それに振り回される。）

（箒なら大丈夫じゃないか？武道の心得もあるし、心のコントロールが――）

（――コントロールが出来る人間が、むやみに暴力を振るう？）

（……不安になってきた。）

言われてみると、教室での一夏との過激なコミュニケーションや、トーナメント後の俺への八つ当たりとか、けっこう思い当たるぞ。

（ま、なんにせよ、これで箒は一足飛びに強くなる。……要警戒だな。）

（…うん。今まで持ってた属性に、『専用機持ち』が加わった。もう、鈴音やセシリアじゃ勝てない。）

（…何の話だよ……。）

そういや、前にも話したな。箒、鈴音、セシリアの三人は、一夏に対するアドバンテージが拮抗してるってことを。……って、今は関係ねぇよ、それ。

「――はい、フィッティング終了～。超早いね。さすが私。」

……早っ！早井くんの決断速度ばりに早ぇよ！！
さすがは開発者。ＩＳのことは知り尽くしているということか。
空中に呼び出した６枚のディスプレイを自在に操り、紅椿を箒に合わせて調節していく。

（…にしても、見てみろよ、あの武装。）
（…日本刀、二本。）
（微妙に語呂がいいな。…じゃ、なくて。ブレオンだぜ、ブレオン。いいなあ、アレ。）
（…そんなにいいなら、紅也も二本持てば？）
（…今のパワーじゃ、一度に二本も振れねぇよ。）

「あの専用機って、篠ノ之さんがもらえるの……？身内ってだけで。」
「だよねぇ。なんかずるいよねぇ。」

ふと、会話の合間にこんな声が聞こえた。
おかしなことを言うなぁ。むしろ、今まで専用機を持っていなかったことが不自然なのに。
それに――

「おやおや、歴史の勉強をしたことがないのかな？有史以来、世界が平等であったことなど一度もないよ。」

…と、言うことだ。
人は生きて死ぬ。その一点においては平等であっても、その生活の質、人生の質は千差万別。ホームレスになったマダオもいれば、戯れにギャンブルを開催する大富豪もいる。努力は報われないこともあるし、偶然成功することもある。ただ、全員に「チャンス」は与

えられる。少なくとも俺は、そう思っている。

「――そう思わないかい、キミも。」

「……ほえ？」

至高の思考から抜け出し、ふと顔を上げると、作業を続ける篠ノ之博士と目があった。

…何故？いきなり話しかけてきたんだろう。しかも的確に、俺を名指しで。

とはいえ、答えなければいけないだろう。無視すると、この人超不機嫌になるし。自分は人を無視するのに、どんだけわがままなんだ。実はわがまま星からやってきた、わがまま星人じゃねぇの？

「…確かに、法が無かった時代は力のあるものが、法がある時代には権力を持つものが、常に利益を得てきました。」

うわ、つまらなそうに聞いてる。真面目な話は好みじゃないみたいだ。

「…でも、そんな些細なことはどうでもいい。俺が最も不平等を感じる点。それは――」

一呼吸置き、目を閉じ、そしてカッと見開いて、万感の思いをこめて言わせてもらう――！

「――この世界には、妹を持つ人間と、持たない人間がいるっ！」

「「「「……は？」」」」

その場にいた一同が、ぽかん、とした表情になる。しかも、あの織

斑先生まで。
激レアだ。カメラがないのが悔やまれる。…昨日、壊れちゃったからなぁ。
そんな中でただ一人、篠ノ之博士だけが「うんうん」と同意しているのを見て、俺は続ける。

「そもそも、妹というのはただの血縁者にあらず！兄・姉・弟・親・子供その全てと違い、共に成長し、生涯守っていくべき存在！もし俺が昔の偉い人だったら、小野妹子を外国に遣ったりできないね！え？小野妹子は妹じゃない？そんなことはどうでもいいんだよ！話を戻すぜ。まあウチの場合は俺より葵の方が強いが、それは置いといて、妹を守るためなら、俺は代わりに刺されようが、撃たれようが、Ｘナンバーに追い回されようが、喜んで楯になってやる！そしてその際『お兄ちゃん…ありがとう』とか言われたら、それだけでもう世界と戦えるぜ！世界のための英雄に何かからなくていい！むしろ言葉（ことのは）…否、こころちゃん！ヤンデレなんて知ったことか！俺は桜の味方になるんだ！『抑止の守護者』なんて目じゃないぜ！俺は『妹の守護者』だ！さあ、天におわします妹神よ、我に力をさずけたまへぎょっ！？」

後ろから、延髄蹴りが放たれた。放ったのは葵だろう。
もしかして、照れ隠しか？かわうぃ～ね～。でも、お兄ちゃんとしては、もうちょっと手加減してほしかったというか、砂浜が熱いというか、意識が遠いっつーか……。

◆

〈ｓｉｄｅ：織斑　一夏〉

「まったく、相変わらずのシスコンぶりだよね、あの子。
あ、いっくん、白式見せて。束さんは興味津々なのだよ。」

突然始まった紅也の『妹語（イモウトガタリ）』にどん引きしていた俺は、唐突に束さんに話しかけられた。

「え、あ。はい。
……じゃ、なくて！昨日も思ったんですけど、束さんって紅也と知り合いだったり…？」
「紅也？誰？」

きょとん、と首をかしげる束さん。誰、って……。

「今、あんだけ話してたじゃないですか！あいつが紅也ですよ！」
「へえ。まあ、名前なんて興味ないんだよ。大事なのは、あそこにいるのが私と同等のシスコンだって事実だよ～。いや～、妹っていうテーマであんなに話したのは、後にも先にも一回きりだったね～。で、白式見せて。」
「は、はい……。」

どうやら、この話は終わりのようだ。
束さんと紅也の間に何があったのか、気にならないと言えば嘘になるけど、後で紅也に聞けばいいだろう。

（――来い、白式。）

右腕のガントレットに左手を添える。こうすることで、俺の中で白

式を展開するイメージがまとまるのだ。紅也は『マスクドライダーみたいだな』って言ってたけど、知ったことか！

視界が光に包まれ、俺は白式に包まれた。さすがに展開にも慣れたため、今の俺は一秒未満で展開できる。…紅也はもっと早いけど、展開するたびに『来い……レッドフレェェェム！』って言って指を鳴らしたり、『レッドフレーム、セェェットアップ？』って言いながらポーズを決めたりしてるからなぁ。ああはなりたくないものだ。

「データ見せてね～。うりゃ。」

いいですよ、とも言ってないのに、いきなり白式の装甲にコードを刺す束さん。まあ、この人はこういう人だ。再び、複数のディスプレイが空中に浮かびあがった。

「ん～……不思議なフラグメントマップを構築してるね。なんだろ？見たことないパターン。いっくんが男の子だからかな？……多分だけど、今の白式のコアを使えば、男の子でも起動出来るんじゃないかな？」

ちなみにフラグメントマップというのは、各ＩＳがパーソナライズによって独自に発展していくその道筋のことらしい。人間で言う遺伝子だそうだ。

「束さん、そのことなんだけど、どうして男の俺や紅也がＩＳを使えるんですか？」

「ん？紅也って誰？」

「だから……そこで寝てるシスコンです。」

そう言って指差した先には、葵に頭を踏まれ、砂浜で焼き土下座のような格好をする紅也。…哀れだ。俺は、ああはなりたくないな。

「ふ～ん。そんな名前なんだ。まあ、どうでもいいけど。」

わお、デジャブだ。

「…で、なんでいっくんがＩＳを使えるかって話だけど……どうしてだろうね。私にもさっぱりぱりだよ。ナノ単位まで分解すればわかる気がするんだけど、していい？」

「それって、俺も含めてますよね……。いい訳ないでしょ……。

……で、こ……シスコンは、どうしてＩＳが使えるんでしょう？」

ふ、と浮かんだこの疑問。

しかし束さんは、俺にとっても、誰にとっても予想外な答えを返した。

「ん？なにいってるのかな？あの子、ＩＳなんて使えないよ。」

「……へ？」

◆

〈ｓｉｄｅ：シスコン〉

…この間から思ってたんだけど、最近この『ｓｉｄｅ』表示が不本意なものばかりだ。

こんなにコロコロ変えるなよ。バーン・ノーティスかっつーの。

閑話休題。

最近こんなパターンが多い気がするが、気がついたら、俺は砂浜に倒れていた。

…正座し、頭だけが砂に埋まった状態で。

熱いいいいい！！…と、叫べたらどんなに楽か。口も開けない。

ばたばた。

無駄な抵抗と思いつつも、手足を動かして熱さをごまかそうと試みる。

「あ……紅也さん。今、助けますわ……。」

ん、この話し方は……セシリアか。なんでこんなに意気消沈してるのかは知らないが、助けてくれるならありがたい。けっこうしっかり埋まってて、自力じゃ抜け出せねぇんだ。

砂を掘る音が聞こえ、やがてセシリアの冷たい手が俺の頬をなでる。ひんやりしていて気持ちがいい。熱さが少し、和らいだ気がした。

「ありがとよ、セシリア。あやうく死ぬところだった。」

「どういたしまして……。はぁ……。」

顔の左側を固めていた砂が無くなったため、ようやく口を開くことができた。その隙間から力任せに頭を出し、立ち上がってからぷるぷると顔を振って砂を飛ばす。…そこ、犬とか言うな。

「…で、どうしたんだセシリア。何か、元気ねぇけど。」

「……あの、紅也さん。わたくし、篠ノ之博士に嫌われているのでしょうか？」
「…はあ？」

セシリア曰く。
初めて見た篠ノ之（シスコン）博士を前に興奮し、思わず話しかけたところ……

『はあ？誰だよ君は。金髪は私の知り合いにいないんだよ。そもそも今は箒ちゃんとちーちゃんといっくんと数年ぶりの再会なんだよ。そういうシーンなんだよ。どういう了見で君はしゃしゃり出て来るのか理解不能だよ。っていうか誰だよ君は。』

……と、冷たい言葉をかけられ、あげく『あっちへ行け』と追い払われたらしい。その態度が先程までと異なっていたため、自分が嫌われるようなことをしたのではないか……と。

「気にするな。ただ覚えとけよ。
篠ノ之博士は、自分の知り合い以外は本気で『認識』してねえんだ。安心院さんみたいに平等に見下してるわけじゃないけど、何て言えばいいのか……。セシリアも、初対面の人に話しかけられたら『この人、誰ですの？』って思うだろ？それがひどくなった感じだ。」
「……そうなんですの？私自身が嫌われてる訳ではないのですね？」
う……。
涙目になって俺を見上げるセシリアに、思わずキュン……と来た。
これを見てると……何というか、セシリアをいじめたくなって――
……いやいや！違う！俺はSじゃない！

「そうだぜ。だけど反面、自分が認識した人間には、ああいう風にフレンドリーになる。つまりツンデr……」

さくっ。

「変なことを言うねぇ、キミも。ツンデレはむしろウチの箒ちゃんだよ。」

「～～～～～～～！！」

作業中の篠ノ之博士が、唐突にプラグを投げてきた。

どんな超科学を使ったかは不明だが、それは俺の眉間に寸分違わず直撃し、俺を悶絶させた。…扱いひどくね？

「変なことを言ってるのはむしろ姉さんです。誰がツンデレですか、誰が。」

「ほ～ら、こんなことを言って、内心の照れを押し隠す……。テンプレ的ツンデレじゃないか！」

「篠ノ之博士。全然デレてないですよ。むしろ絶対零度のツン、つまりツンドラです。」

箒からの思わぬつっこみに、篠ノ之博士はその豊満な胸を張って得意げに話すも、俺はそれを否定する。

「こ、紅也ッ！…それより、こっちはまだ終わらないのですか？」

「んー、もう終わるよー。はい三分経った～。あ、今の時間でカップラーメンができたね、惜しい。」

ん、あれから三分も経ってなかったのか。どうやら、気絶からの回復は思ったより早かったらしい。紅椿の変化が止まり、第一次移行が終了する。

「んじゃ、試運転もかねて飛んでみてよ。箒ちゃんのイメージ通りに動くはずだよ。」
「ええ。それでは試してみます。」
……そこは、「はい、そのつもりです」じゃないの？
プシュッ、プシュッと空気の抜ける音と共に、ケーブルが外れていく。それから箒が意識を集中させると、次の瞬間、紅椿は『消えた』。
（疾い――！！）
もちろん、ブリッツのように姿を消したわけではない。あまりの急加速で、残像すら残さずに空へと飛び上がったのだ。
「で……デタラメですわ……。」
セシリアのつぶやきも尤もだ。瞬間的な加速力ですら、レッドフレームの全力をはるかに上回っている。…といっても、レッドフレーム自体がそこまで速いわけではないので、あまり比較対象にはならないが。
「どうどう？箒ちゃんが思った以上に動くでしょ？」
「え、ええ、まぁ……。」
…今のはオープン・チャンネルか。今はどこにいるかわからないけど、葵が中継してくれたんだろう。
「じゃあ刀使ってみてよー。右のが『雨月』で左のが『空裂』ね。武器特性のデータ送るよん。」

再びディスプレイを叩く篠ノ之博士。すると武器データが届いたのか、箒が二本の刀を抜き放った。その姿は、なかなかどうして、様になっている。

（二刀流の訓練でも受けてたのかねぇ……。）
（お？何の話だ？）
（…その声っ！）
（師匠！？なんで？）
（そりゃ、この回線は『ＡＳＴＲＡＹ』の回線だからな。当然、俺も受信できるさ。…で、だ。葵。俺にもオープン・チャンネルを中継してくれねぇか？）
（……わかった。）

しぶしぶ、といった感じで葵は承諾。何かが『繋がった』ような感じがしたことから、俺は回線接続が完了したことを理解した。

「親切丁寧な束おねーちゃんの解説つき～♪　雨月は対単一仕様の武装で打突に合わせて刃部分からエネルギー刃を放出、連続して敵を蜂の巣に！する武器だよ～。射程距離は、まあアサルトライフルくらいだね。スナイパーライフルの間合いでは届かないけど、紅椿の機動性なら大丈夫。」
（お、こりゃ、束じゃねぇか。久しぶりだな～。）
（し……師匠？こっち来るとか言わないでくださいよ？）
（え？何でだよ。）
（…あなた、あの人にめっちゃ嫌われてるでしょうがっ！）
（ん？そうなのか？）
（……。）

箒は雨月を構え、勢いよく突きを放つ。すると周囲の空間に高エネ

ルギーの赤い球体が出現し、そして光の弾丸となって漂う雲を穴だらけにした。

（かなりの威力だな。）
（…多分、ＰＳ装甲にも通用する。）
（おいおい、何が見えたんだよ。気になるじゃねぇか。）

「次は空裂ねー。こっちは対集団使用の武器だよん。斬撃に合わせて帯状の攻性エネルギーをぶつけるんだよー。振った範囲に自動で展開するから超便利。そいじゃこれ撃ち落としてみてね、ほーいっと。」

言うなり、篠ノ之博士は十六連装ミサイルポッドを召喚。紅椿に向かって一斉射撃を行った。標的となった箒は、刀を振りながら一回転する。それはまるでゼルダの○説。タメ無し、大妖精の加護なしにもかかわらず、刀から赤いレーザーが飛び出し、全てのミサイルを撃墜する。

（…ん？この光景、何かで見たことがあるような……？）
（…白騎士事件じゃない？一機のＩＳにミサイルが飛んでいくところなんか、そっくり。）
（それよりいいのかよ、紅也。あれ、空破斬より威力が高いぜ。）
（…上位互換。）
（…ハッ！）

そういえばそうだ。ただの衝撃波にすぎない空破斬に対し、あっちはエネルギー波。しかも空中、地上、オールレンジで使用可能。

（…じゃあ、俺が教えたことって……。）
（…無駄？）

（うわぁぁぁぁん！初弟子がぁぁぁ！！）

「たっ、た、大変です！お、おお、織斑先生っ！」

いきなり、山田先生が声を上げる。尋常ではないその様子に、俺は通信から意識を逸らしたうえで注意を傾ける。

「どうした？」

「こ、こっ、これをっ！」

山田先生が、織斑先生に小型端末を渡す。その画面を見て、織斑先生の表情が曇ったのを、俺は見逃さなかった。

――指向性音声センサー最大出力。対象は教師二人。

「特命任務レベルA、現時刻より対策をはじめられたし……」

「そ、それが、その、ハワイ沖で試験稼働をしていた――」

「しっ。機密事項を口にするな。生徒たちに聞こえる。」

「す、すみませんっ……」

「専用機持ちは？」

「全員揃っていますっ。」

……ちっ、気付かれたか？手話でやり取りを始めた。こうなっては、もう会話内容はわからん。

しばらくやりとりをした後、山田先生は旅館の方へと走り去っていった。そして織斑先生が手を叩き、俺達の方へ向き直る。

「全員、注目！

現時刻よりＩＳ学園教員は特殊任務行動へと移る。今日の稼働テストは中止。各班、ＩＳを片付けて旅館に戻れ。連絡があるまで各自室内待機すること。以上だ！」

その言葉を聞いて、静かだったビーチがにわかに騒がしくなる。
想定外の不測の事態。混乱するのも当然だろう。
葵も人込みをかき分けて、こちらにやってきた。

「…聞いた？」
「いや、わからねぇ。途中から手話に切り替えやがった。」
「…そう。」

どこか不安そうな葵の声。かくいう俺も不安だ。状況不明というのが、一番始末に負えない。

「とにかく、言われたとおり旅館に――」
「専用機持ちは全員集合しろ！織斑、オルコット、デュノア、ボーデヴィッヒ、凰、山代兄妹、更識！――それと、篠ノ之も来い。」
「…ですよねー。」

どさくさまぎれにとんずらしようと思ったが、そうは問屋が卸さないようだった……。

第57話　終わる日常（後書き）

…次回、福音編に突入です。
ここからは「原作乖離す開闢の星」って感じの話になるかも……。

第５８話　最新にして最高？ふざけんな！（前書き）

第５８話です。

今回、紅也がキレます。いつもの紅也と違う、と思う人もいるかもしれませんが、まあ、受け入れて下さい。

余談ですが、作者は最初、「銀の福音」と書いて「ゴスペリオン・シルバー」という、某銀術師の技を連想しました。

では、始めます！

第５８話　最新にして最高？ふざけんな！

「では、現状を説明する。」

旅館の一番奥にあった宴会用の座敷部屋。そこは現在、にわか仕立ての作戦司令室となっていた。照明を落とした薄暗い室内には、大型の空中投影ディスプレイが浮かんでいる。

「二時間前、ハワイ沖で試験稼働にあったアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型の軍用ＩＳ『銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）』が制御下を離れて暴走。監視空域より離脱したとの連絡があった。」

……軍用ＩＳだと？やっかいなモノを……。

そう思って周りを見てみると、全員が全員、厳しい顔でディスプレイを睨んでいた。

…いや、例外が二人。一夏と箒だけは、どこか危機感のない、呆然とした表情をしている。

「その後、衛星による追跡の結果、福音はここから２ｋｍ先の空域を通過することがわかった。時間にして５０分後。学園上層部からの通達により、我々がこの事態に対処することとなった。」

…ははん、何となく先が読めたぞ。

「教員は学園の訓練機を使用して空域および海域の封鎖を行う。よって、本作戦の要は専用機持ちに担当してもらう。」

織斑先生からの言葉は、予想通りのものだった。なにせ、ここにいるのは学生とはいえ、全員が専用機持ち。使わない手は無いだろう。

「それでは、作戦会議を始める。意見があるものは挙手するように。」
「はい。」
早速手を上げたのは、セシリアだった。先程までの落ち込み顔はどこへやら、その表情は真剣そのものだ。
「目標ＩＳの詳細なスペックデータを要求します。」
「わかった。ただし、これらは二カ国の最重要軍事機密だ。けして口外はするな。情報が漏洩した場合、諸君には査問委員会による裁判と最低でも二年の監視がつけられる。」
「了解しました。」
その言葉を受けた織斑先生が端末に何かを入力すると、空中に「福音」のデータが開示された。
「広域殲滅を目的とした特殊射撃型……わたくしのＩＳと同じく、オールレンジ攻撃を行えるようですわね。」
「攻撃と機動の両方を特化した機体ね。厄介だわ。しかも、スペック上ではあたしの甲龍を上回ってるから、向こうの方が有利……。」
「技術者として言わせてもらえば、燃費は悪そうだな。長期戦に持ち込んで、波状攻撃を仕掛けられれば、なんとか出来そうだがな。」
「この特殊武装が曲者って感じはするね。ちょうど本国からリヴァイヴ用の防御パッケージが来てるけど、連続しての防御は難しいかな。紅也の言う長期戦は、ちょっと……。」
「しかも、このデータでは格闘性能が未知数だ。持っているスキルもわからん。偵察は行えないのですか？」
セシリア、鈴音、俺、シャル子、ラウラの順に、意見を出していく。

一夏、箒、葵、簪はその成り行きを黙って見ていた。

「偵察は無理だな。この機体は現在も超音速飛行を続けている。最高速度は時速２４５０キロを超えるとある。アプローチは一回が限界だろう。」

「２４５０キロか……。葵、ハイスピード・ブースターは持ってるか？」

「…無理。大気圏内での使用は、スペック上は不可能。」

そりゃそうか。

ＡＳＴＲＡＹの追加装備、〈ハイスピード・ブースター〉は、ＩＳ単体が宇宙空間を高速航行するためのアイテム。地上での運用試験など、やるはずもない。

「一回きりのチャンス……ということはやはり、一撃必殺の攻撃力を持った機体で当たるしかありませんね。」

山田先生の一言で、俺と葵、それから一夏に注目が集まった。

「え……？俺！？」

一夏はまだ混乱しているのか、その場に合わないような素っ頓狂な声をあげた。

「一夏さん、あなたの零落白夜で落とすのですわ。」

「葵と紅のビーム兵器も有効よね……。」

「それしかないみたいだね。ただ、問題は――」

「……どうやって三人を、運ぶのか……。エネルギーは……節約しないと……。」

「それならば、ＩＳを抱え、なおかつ目標に追いつける速度が出せ

るＩＳでなければいけないな。超高感度ハイパーセンサーも必要だろう。」

「ちょっ、ちょっと待ってくれ。お、俺が行くのか？」

「「「「当然。」」」」

セシリア、鈴音、シャル子、ラウラ、簪の五人の声が見事に重なり、一夏の言葉を肯定する。俺と葵は無言。箒もまた、ただ黙って成り行きを見守っている。

「織斑、これは訓練ではない。実戦だ。もし覚悟がないなら、無理強いはしない。」

「……。」

一夏が黙り、顔を俯かせる。…怖気づいたか？いや、そんなはずはない。

「やります。俺が、やってみせます。」

だって、ここで家族の期待に答えなきゃ、男じゃない。

「よし。それでは作戦の具体的な内容に入る。現在、この専用機持ちの中で最高速度が出せる機体はどれだ？」

「それなら、わたくしのブルー・ティアーズが。ちょうどイギリスから強襲用高機動パッケージ『ストライク・ガンナー』が送られて来ていますし、超高感度ハイパーセンサーもついています。」

…『パッケージ』。

それは全てのＩＳが持っている、換装装備のことだ。

これは単純な武器だけではなく、追加アーマーや増設スラスターなど装備一式を指し、その種類は豊富で多岐にわたる。中には専用機

専用の機能特化専用パッケージ『オートクチュール』も存在するが……。俺が知ってる中で、そんなものを持っているのは一人だけだ。この『パッケージ』を装備することで、機体の性能と性質を大幅に変化させ、様々な作戦に対応できるようになっている。ちなみに、俺と葵の『ＡＳＴＲＡＹ』シリーズはパーツの互換性を高めており、ほとんどのパーツは交換できるようになっている。当然、パッケージも互換性ありだ。まあ、一部の例外はあるけどな……。

「オルコット、超音速下での戦闘訓練時間は？」
「二十時間です。」
「ふむ……。それならば適任か……。これで一人は決定だ。……で、次は？」

織斑先生にそう促され、今度は俺が手を上げる。

「山代兄か……。悪いが、お前にエネルギーを使わせるわけには―」
「その心配は不要です。俺のフライトユニットは、本体からのエネルギー供給を必要としない仕様なので。」
「……詳しく聞かせろ。」
「はい。俺のフライトユニットは、元々モルゲンレーテの量産機、『Ｍ１アストレイ』に採用予定のものです。が、これをレッドフレームに装備するにあたり、両サイドにプロペラントタンクを追加。そこの推進剤によって飛行する仕様に変更しました。」
「そうか。ならば山代兄が山代妹を運べば、３機が行動可能だな。」
「…申し訳ないんですけど、それは無理です。」

俺のその言葉に、一瞬、時が止まった。

「推進剤全ての燃料を使っても、レッドフレーム一機を飛ばすのが精一杯です。ブルーフレームまで運ぶとなると、速度が相当落ちることになります。なので、葵を運ぶのは、誰か別の人に頼みたいのですが……。」

「そうか。それならば――」

「待った待ーった。その作戦はちょっと待ったなんだよ～！」

突如響く、第三者の声。発生源は頭上であった。

慌てて上を見ると、そこにはなんと……部屋を逆さに覗き込む、篠ノ之博士の姿があった。

「……山田先生、室外への強制退去を。」

「えっ！？は、はいっ。あの、篠ノ之博士、とりあえず降りてきてください……。」

「とうっ★」

言葉に従ったのかどうかは定かではないが、とにかく博士は部屋に下りてきた。空中で一回転してから。見た目と違い、ずいぶんな運動神経だと思う。

「ちーちゃん、ちーちゃん。もっといい作戦が私の頭の中にナウ・プリンティング！」

「……出ていけ。」

頭を押さえる織斑先生をよそに、博士は騒ぎ続ける。

「聞いて聞いて！ここは断・然！紅椿の出番なんだよっ！」

「なに？」

「紅椿のスペックデータ見てみて！パッケージなんかなくても超高速機動ができるんだよ！」

その言葉と共に、織斑先生が数枚のディスプレイに取り囲まれた。

「紅椿の展開装甲を調製して、ほいほいほいっと。ホラ！これでスピードはばっちり！」

…展開装甲？聞いたことも無い技術だ。周りを見渡してみるも、誰一人心当たりがないらしい。特に一夏など、わかりやすく首をひねってる始末だ。

「説明しましょ～そうしましょ～。展開装甲というのはだね、この天才の束さんが作った第四世代型ＩＳの装備なんだよ！」

ガチャンッ！

俺は、思わず８を落としてしまう。…が、誰もそれを気にとめない。誰もが、それほどまでに、衝撃を受けているのだ。

「はーい、ここで心優しい束さんの解説開始～。まず第一世代というのは……」

篠ノ之束が何かを話しているが、既に俺には聞こえていない。

第四世代。

コンセプトは、『パッケージ換装を必要としない万能機』。これは未だに机上の空論にすぎず、モルゲンレーテですら研究中のものだ。師匠なんかは、複合武器を装備することで疑似的な第四世代機を開発しようとしていたが……。現物は、完成の見込みが立っていない。

それが。
そんなものが。
存在しないはずの、そんなものが。
今、この場に、存在するなんて。
それも――――。

この場にいる、たった一人の天才が、あっさりと組み上げたなんて。

各国は、未だに第三世代機を作り続けている。これは、第四世代機どころか、第三世代機ですら、まだまだ開発途中であるからだ。各国が多額の資金、膨大な時間、優秀な人材の全てを費やし、今回のように、時には国家の枠を超えて協力し、必死に開発競争をおこなっている。
モルゲンレーテもそうだ。
後ろ暗いこともたくさんやってきた。買収も、恐喝も、時にはまっとうな提携も。
そして裏切られた、あのＮ．Ｇ．Ｉの事件。
ビーム兵器の開発を巡り、水面下でしのぎを削り、最終的には命がけで盗み出した。そしてＡＳＴＲＡＹが製造され、モルゲンレーテが第三世代開発に成功した。その後すぐに起こった、Ｘナンバー強奪事件。追撃の任務を受けた俺達二人。

――全ては、第三世代兵装、「ビーム兵器」を巡って起こっている事件だ。

第三世代。
その言葉に、俺達は惑わされ、踊らされ、戦ってきた。
それ自体に納得はしていたし、だからこそ、命をかける意味があると信じていた。

――そう、信じていた。

それが何だ。

第四世代だと？

フザケルナ。

俺の。葵の。

今までの努力は、人生は、何だったのか――――！！

「…ふざけるな。」

「…紅也？」

「ふざけるなっ！！！」

気がついたら、俺は叫び声を上げていた。

「…何？キミ、どうしたの？あ、わかった！きっとお腹が痛いからトイレとか――」

「黙れ、篠ノ之束。」

吐き捨てるようにその名を呼び、俺はいつの間にやら目の前にいたふざけた科学者を睨みつけた。

「……そんなに悔しいかな？小さな技術者くん。悔しいよね。キミの夢、才能、努力。そういうものが全部まとめて否定されちゃったんだから。」

「テメェッ！」

思わず、右の拳を握る。…が、その腕は横合いから伸びた手によっ

て固定され、放たれることは無かった。

「…紅也。」

右手をつかんだ手の正体。
それは、俺の怒りを『感じとって』やってきた、葵であった。
その手の冷たさが、そして力強さが、俺の中の怒りの炎をゆっくりと消していく。

「…落ちついた。」
「…ああ。心配かけた。」

葵と目が合うも、それも一瞬。葵は俺の右手を開放し、そのまま後ろへ一歩引いた。
冷静さを取り戻した俺は、周囲の面々を見渡す。誰もかれも、『何事か』といった目で俺を見て――あるいは、見たことも無いほどの俺の怒りに、怯えていた。

「…すまない。醜態を晒した。
……山田先生。気分が悪いので、退室してもよろしいでしょうか。作戦開始までには戻ります。葵、代わりに聞いておいてくれ。」
「え？　あ、は、はいっ。」
「…わかった。」

羞恥と怒りがないまぜになったまま、８をも置き去りにして、俺は作戦司令室となった部屋を後にする。
……このままあそこに留まっていたら、自分がみじめでしょうがなかったから。

◆

「よう、紅也。派手に暴れたみてぇだな。」
「……師匠。」

頭を冷やすべく、俺は旅館のあちこちを歩き回っていた。
生徒には待機命令が出ていたため、俺以外の生徒は一人もいない。
先生たちも慌ただしく出撃準備をしているため、出歩く俺を注意する者もまた一人もいなかった。
そんな中、ふらりとやってきた中庭に、師匠はまだ残っていた。

「…何で知ってるんすか。」
「8が中継したからな。アイツも、お前が心配だったんだろうよ。」

機械（メカ）のくせに心配性な奴だからな～、と師匠。しかしそれを聞いて、俺の中の情けない気持ちはさらに膨れ上がっていった。

「……俺は、許せなかったんです。」

だから、だろうか。
気がついたら、俺は師匠に弱音を吐いていた。

「俺が強くなるために、成長するためにやってきた努力。その全てが、台無しにされたような気がして……。」
「……。」

師匠は何も言わない。ただ、黙って俺の目を見て、話を聞いてくれ

ている。
その、どこか余裕を見せつけるような態度に、俺は思わずいらだちをぶつけてしまう。

「だって、第四世代機ですよ!?誰も……師匠だって作れなかった、未知の領域。それが、あんなにあっさりと開発されるなんて!悔しくないんですか、師匠!」

すると師匠は、組んでいた腕をほどき、右手で頭をポリポリと掻き始めた。

「そりゃ、メカマンとしては悔しいけどよ。それ以上に嬉しいぜ、俺は。」
「は……?」

俺の予想を超えた答え。
嬉しい、などと……どうして、この人はそんなことが言えるんだろう?

「考えても見ろよ。今まで幻だった第四世代機が、実際にそこに『ある』んだぜ?どんな技術が使われたのか……くぅ〜っ!考えるだけでワクワクするぜ!」
「……。」

今度は、俺が黙る番だった。
誰が作ったとか、才能がどうとか、そんなことは関係ない。
この人は、純粋に、まだ見ぬ技術に喜んでいる。

「しっかし、第四世代か…。俺としては、あの白式の刀、雪片弐型を応用すれば、それに近いモンを作れると思ったんだけどな〜。ま

あ、勘だけどな！」

そう言ってまた、豪快に笑いだす。

言葉とは裏腹に、その声には、悔しさのかけらもない。

そこに込められたのはただ一つ。新たに生まれた技術への祝福のみだった。

「…っと、すまねぇな。真剣な話の最中に。新技術への興味の方が勝っちまった。」

「いえ……別に……。」

「まあ、話を戻すけどよ。紅也。

――お前が目指すモンは、一体何だ？」

「それは……。」

決まっている。

技術者として、葵の兄として。最高の機体を完成させ、葵に渡すこと。

それが、現在の俺の目標だ。

「それでいいんだよ。逆に言わせてもらうがな、第四世代機ってのは、最高の機体なのか？」

「！　それは……。」

「違うだろ？最先端の機体が、最高の機体じゃねぇ。メカニックが魂込めて作った機体が、そいつにとって最高の機体になるんだ。」

「魂、込めて……。」

「まあ、そういう意味じゃあの紅椿（あかつばき）は強敵だな。なんせ、あの束が、妹を思って作ったんだからよ。でもな――」

頭を掻いていた手を止め、人差し指をピン！と立てて俺を指さし、師匠は言う。

「――お前の葵に対する思いだって、負けちゃいねぇだろうが！」

――そうだ。

何を弱気になっていたんだ、俺は。

俺は、俺だけの最高の機体を作ればいい。

第三世代とか、第四世代とか、そんなものはどうだっていいんだ。

大事なのは、その思い。技術や知識は、この際後付けでいいんだ。

俺には――俺達には、まだ、先があるんだから。

「どうやら、ふっきれたみてぇだな。」

「……はい！」

「よし！じゃあ、まずは目の前の問題を片付けねぇとな。８から連絡が来たが、作戦会議は終わったようだぜ。…行って来い！」

「はいっ！行ってきます！！」

迷っていた俺は、一応の答えを得た。

葵のために。それを見失わなければ、俺はもう止まらない。

まずは――当面の厄介事を、ちゃちゃっと片付けますか！

第５８話　最新にして最高？ふざけんな！（後書き）

自分のやってきたことの全てが否定されたら、そりゃキレると思いますよ、私は。

そして、師匠が何気にチート的考察を……。

そうそう、外伝の方も更新しました。後継機編・その２です。

第５９話　出撃準備！どんな敵とだって、戦ってやるさ！（前書き）

今回は短めです。
出撃前の、幕間的な話。そして迫る、新たな影……。

それでは、始まります。

第59話　出撃準備！どんな敵とだって、戦ってやるさ！

師匠から発破をかけられた俺は、再び作戦司令室へと戻ってきた。閉ざされたドアの中では、突貫作業の音が慌ただしく響き渡り、作戦前の忙しさをあますことなく伝えてくる。迷ったのはほんの二、三秒。決意を胸に、俺は再び扉を開いた。

「失礼します！山代紅也、復帰しました！」

入ってすぐに、頭を下げる。その場の全員の視線が一瞬俺に集中し、すぐさま作業へと戻っていった。

「遅いぞ、馬鹿者。作戦内容は、山代妹から聞け。開始は２５分後だ。」

「り…了解！」

俺の返事に、どこか満足げな表情をする織斑先生。あんな顔でも、俺のメンタルを心配していたんだろうか？まあ、そのことは彼方に置いておいて、俺は作業準備をする葵の元へ急ぐ。

「葵。作戦の説明を頼む。」

「紅也！…わかった。

作戦要員は、一夏と箒と紅也。私は不参加になった。」

「セシリアはどうした？」

「高機動パッケージをインストールしてなかったから、出撃不可。

一夏は箒が運ぶ。

…続けるわよ。目標と接触したら、一夏と紅也のエネルギー兵器で福音を速やかに撃破。ただし、操縦者を傷つけちゃだめ。だから、全力は使えない。」

「了解だ。それで全部か？」
「…うん。じゃあ、早速あれを渡すから、こっちに来て。」
そう言って葵は、その場にあるパーツを出現させる。
『コンプリート・センサー』
かつてのブリッツ戦でも活躍した、超高性能センサーだ。
「…紅也も、レッドフレームを。」
そう言って葵は、俺に8を手渡す。《戻ったな！》と表示されたその言葉の意味を察し、思わず笑みが浮かんだ。
「よし、レッドフレーム、外部展開モード！」
いつかの整備室と同じように、8は手元に残った状態で、操縦者のいないレッドフレームが展開される。作業アームを呼び出した俺は、レッドフレームの頭部パーツをコンプリート・センサーにマニュアル換装し、そのまま配線のチェックや調整を進める。ふと、後ろを振り返ると、同じく作業アームを展開した篠ノ之博士が、超高速で紅椿の調整をしているのが目に入った。俺の速さとは段違いで、アームをあやつり調整を進めている。
（――焦らなくていい。）
無理もない。あの人は、俺なんかのはるか上を行く人間だ。
俺は、俺が出来ることを、全力でやるだけだ。
「紅也、大丈夫か？」

篠ノ之博士を見ていた俺に目ざとく気付いたラウラが、俺の方へやってきた。

「いいか、作業の早さが全てではない。時間は十分にあるんだ。慌てずに……」

「――わかってるよ、ラウラ。ありがとな、心配してくれて。」

「なっ……！」

俺は大丈夫。そういう意味を込めて、笑顔で返事をする。

するとラウラは顔を真っ赤にしてそっぽを向き、そのまま目線の先にいた葵と話し始めた。

「…葵。」

「…何？」

「嫁に、一体何があった？この短時間で、驚くほどの変わりようだぞ。」

「…当然。だって紅也は、私のお兄ちゃんだから。」

……そうだな。葵のお兄ちゃんは、いつも出来ることをやってきたからな。

今日だって、それは変わらない。それに、兄は期待してくれる妹がいる限り、何でも出来るんだぜ。

作業のスピードを上げる。さらにコンプリート・センサーのデータを8に送るパスを形成。俺と8で情報を分割処理するための、疑似神経も調節。レッドフレームのシステムを、高速戦闘へと対応させていく。

「……速い……！！」

同じく近くに来たらしい、簪の驚きの声を聞き流しながら、俺は作

業に没頭していく。
そして――
「できたっ！！」
十分後、無事に全ての作業が完了した。
自分でも、まさかここまで効率よく仕上がるとは思っていなかった。
正直、うまく行き過ぎている感が否めない。
まあ、上手くいってるなら、それはいいことだ。
レッドフレームを収納し、今度は8を持って、一夏達の作戦会議に加わる。
「待たせたな！レッドフレーム、準備完了だ！」
「紅也！もう大丈夫なのか？」
「言っただろ？『準備完了だ』って！変にナーバスになってたけど、そんな悩みは捨ててきた！」
「捨て……。はあ。どうやら、いつもの紅みたいね。」
「びっくりしたよ。あんなに怒った紅也って、初めて見たから。」
ラウラと同じ質問をする一夏に返事をし、その返答を聞いた鈴音とシャル子がほっとしたかのように息を吐いた。
「まあ、よくよく考えたら、篠ノ之博士の技術力がぶっ飛んでるのは、今更な話だしな。…まったく、もしあの人に理念があったら、ソレスタルビーイングだって結成できるのに。」
「束さんにイオリア的な役割を期待しないほうがいいぞ…。」
「…そのイオリアさんというのがどなたかは知りませんが、紅也さんが戻ったなら、作戦会議を再開しましょう。」

セシリアの一言により、生徒による作戦会議が再開される。

「……あのう、私もいるんですけど……。」

失礼。生徒たち＋ロリ教師による作戦会議が再開される。

「えーと、一夏の防御の話をしてたんだけど、紅也には何かいい案はある？」

「うーん、一夏の剣は両手持ちだからな…。俺がカバーして、なんとかしてみよう。幸い、さっき葵からシールドを借りたからな。一枚くらい壊しても大丈夫だ。」

「助かるぜ、紅也。被弾でシールドエネルギーを減らしたくはないからな。」

「でも、それだと、紅の攻撃力が生かせないわよ。せっかく3機で行くんだから、数の優位を生かさないと。」

鈴音の指摘に、うーん、と首をひねる一同。

「正直、3対1の戦闘だったら、三角形に囲んで、背後から本命を撃つってのが基本だよな。」

「あるいは紅椿が正面で気を引いて、残りの二機で遊撃というスタイルも……」

「新兵（ルーキー）に足止め役は酷だ。嫁が二枚の楯で防御しながら気を引くというのはどうだ？」

「防御に徹していると脅威が低いと判断されて、陽動になりませんよ……。山代くん、ビームライフルはどうですか？」

「一撃で倒せる威力は、ちょっと無いですね…。少なくとも、ビーム・マグナムくらいの威力がないと難しいです。」

「でも、あれは安定性に欠けるし……。」

「……そもそも、持ってるの……？」

「…ない。」
「じゃあ、もう近付いて、斬って、終了！でいいんじゃねぇの。俺も紅也も、どっちも一撃必殺なんだから。」
「…下手に考えるよりは、そっちの方がいいかもな。」

「よし、作戦開始5分前だ。全員、所定の位置に集合しろ！」

「よし、時間だ。葵！悪いけど、レッドの強化パーツを預かっておいてくれ。量子変換（インストール）してないから、外に置きっぱなしなんだ！」
「…わかった。行ってらっしゃい。」

◆

現在時刻、１１：３０。
俺、一夏、箒の三人は、海へと続く海岸に立っていた。
三人、交互に目を合わせ、軽く頷く。それが、合図となった。

「来い、白式。」
「行くぞ、紅椿。」
「８！レッドフレーム、展開だ！」
《合点承知！》

砂浜に光があふれ、それが収まるとそこには3機のＩＳが存在していた。

「お、レッドフレームはいつもと印象が違うな。」

「まあ、ブルー用のパーツをつけたからな。ここだけ色が違って、違和感があるだろ。」
「無駄口を叩くな、紅也、一夏。…行くぞ。」
「じゃあ、箒。よろしく頼む。」
「本来なら女の上に男が乗るなど私のプライドが許さないが、今回だけは特別だぞ。」

一見すると、いつもと同じ一夏と箒のやりとり。
しかし、箒の声色に、俺は違和感を感じていた。

（まさか……浮かれてんのか？）

だとすれば、今のうちに落ちつかせなければならない。さっきまでの俺のように、気持ちを乱した状態では、ロクなことにならないからだ。
…が、そんな俺の内心には気づかずに、箒は一夏に話し続ける。

「それにしても、たまたま私たちがいたことが幸いしたな。私と一夏、そして紅也が力を合わせれば、できないことなどない。そうだろう？」
「ああ、そうだな。でも箒、先生たちも言っていたけどこれは訓練じゃないんだ。実戦では何が起きるかわからない。十分に注意をして――」
「無論、わかっているさ。ふふ、どうした？怖いのか？」
「そうじゃねぇって。あのな、箒――」
「ははっ、心配するな。お前はちゃんと私が運んでやる。大船に乗ったつもりでいればいいさ。」
「……箒。落ち着け。そんなに興奮してたら、成功するものも失敗するぞ。」
「何だ？紅也も不安なのか？大丈夫だ、私は熱くなってなどいない。

」
「でもよ……。」
「そもそも、さっきあそこまでカッカしていた紅也に、そんなことは言われたくないな。」
「くっ……。」

何コレ。すごく腹立つ。
一夏も箒の説得をあきらめたのか、紅椿の背中に乗って、作戦開始を待っている。

『織斑、山代、篠ノ之、聞こえるか？』

オープン・チャネルの通信が、俺に転送されてくる。

『今回の作戦の要は一撃必殺（ワンアプローチ・ワンダウン）だ。短時間での決着を心がけろ。』
「了解。」
「肯定だ。」
「織斑先生、私は状況に応じて一夏のサポートをすればよろしいですか？」

三者三様の返事を返し、さらに箒が作戦の確認を取る。

『そうだな。だが、無理はするな。お前はその専用機を使い始めてからの実戦経験は皆無だ。突然、なにかしらの問題が出るとも限らない。』
「わかりました。できる範囲で支援をします。」

…ここでのやりとりも、一見すると普通だが、やはり違和感を感じる。
やはり、警告しておいた方がいいような気がするんだけど。

『では、はじめ！』

――無情にも、作戦開始のゴングが鳴った。

◆

同時刻。

封鎖されたはずの海域で、こんな会話が交わされていた。

「もうすぐ指定海域だ。奴は、間違いなくここを通るぜ。」

「…今、衛星からのデータを確認しました。距離にして8…7キロほどですか……。なおも接近中！近いですね。」

「そろそろ俺はヤベェな。テメェらのお守は終わりだ。先に撤退するぜ。」

「ご苦労様でした、エフ。後は我々にお任せを。」

「礼なんざいらねェ。テメェらは、仕事に集中しやがれ。」

男は、自身の名の由来となった独特の笑い声を上げ、ハッチを開放する。

そして突如、虚空にＩＳが出現した。

それと同時に、何もない空間に火が灯ったかと思うと、その炎は高速で飛び去っていった…。

◆

箒と一夏は、俺の想定以上の超高速で飛んでいく。データでは見てたけど……なんて速さだ！

（負けてらんねぇぜ！８、推進剤をもっと燃やせ！）

《負けず嫌いめ……勝手にしろ！》

俺もレッドフレームを加速させ、どうにかこうにか追いすがる。コンプリート・センサーのおかげで周囲の風景ははっきりと見えるが、加速のＧで眼球が悲鳴を上げている。そんな地獄にさよならを告げるべく、俺は必死に福音の姿を探す。

「暫時衛星リンク確立……情報照合完了。目標の現在位置を確認。――一夏、一気に行くぞ！」

「お、おう！紅也も、遅れんなよ！」

そう言って箒たちは、さらに加速をしていく。脚部と背部の装甲が開き、推進力を増したのだ。

「くっそう！待ちやがれぇぇぇ！！」

スラスターの向きを背部に一極集中させ、俺はロケットの如く加速する。

――まだ見ぬ敵との邂逅は、目前まで迫っていた。

第５９話　出撃準備！どんな敵とだって、戦ってやるさ！（後書き）

…と、いうわけで新キャラ登場でした！

正体についてはノーコメントで。

次回、福音との対決です！…が、連続更新は厳しそうです。申し訳ない。

一週間以内に書きあげます！

第６０話　みつどもえ！（前書き）

更新遅れて申し訳ないです。
一応、今後は３日に一話ペースで上げていきます。

第６０話　みつどもえ！

「見えたぞ、一夏！紅也！」
「！！」
「ま…待て！俺はまだ……！」

ようやく、箒たちの背中が見えてきた。こいつらによれば、もう福音はすぐそこだという。
しかし、俺の視界に、まだ目標は映っていない。…いや待て。コンプリート・センサーが異常な熱量を捉えた。これは……馬鹿な！？ビームだと！

「加速するぞ！目標に接触するのは――「待て、箒！」紅也か、何だ？」
「前方に、ビームを使ってる機体がある。確認してくれ！」
「何を馬鹿なことを……なっ！？何だ、あの機体は！」

やはり、福音とは別の機体か。
…騒ぎを聞きつけて、盗みにきたのか？コソドロがっ！
加速する俺のセンサーが、ようやく敵の姿を捉える。一機は、本来のターゲット『銀の福音』。その名にふさわしく、全身は銀色の装甲に覆われ、さらに頭部から一対の巨大な翼が生えている。その姿は、さしずめ狂った天使、といったところか。
問題なのはもう一機。白を基調とした装甲に、青い胴体の全身装甲機。左手に楯を、右手にビームライフルを持ったその機体を、見間違えるはずもない――！

《ＧＡＴ－Ｘ１０２　ＤＵＥＬ》
（見りゃわかるよ！！）

ちっ、もう一機だと!?
何のためのブリーフィングだ、馬鹿馬鹿しい!

「紅也、こりゃ作戦変更が必要じゃねぇか?」
「そうだな……。俺があの全身装甲を引きつける!あいつも、PS装甲だ!悪ぃが、福音の相手は任せた!」

そう言って、威力を最小にしたビームを放つ。要は、ビーム兵器を搭載していることをアピールして、デュエルの狙いを逸らそうというアイディアだ。

――が、意外や意外。
奴は、そのまま福音との戦闘を継続しつつ、スピーカーでこちらに呼びかけてきた。

「そのビームライフル……。貴公は、アーチャー……いや、ブリッツを倒したモルゲンレーテの操縦者に相違ないな?」
「それが、どうしたっ!!」

勢いそのままビームサーベルで斬りかかる。が、相手もビームライフルを消し、一瞬でビームサーベルに持ち替え、俺の刃を受け止めた。

「いい太刀筋だ……。ちょうどいい、協力していただこう。我が名はエッジだ。貴公の名は?」
「敵に名乗る奴が……いるかっ!」

デュエルを弾き飛ばす。と、同時に、箒と一夏が福音に突っ込んでいくのが見えた。

――仕方ない。福音は奴らに任せよう。俺は……

「お前を倒す！」

「ですから……話を聞きな、さいっ！」

空中で体勢を立て直したデュエルは、二本目のビームサーベルを引きぬき、交差させて俺の剣を受け止めた。そのままバーニアを吹かし、俺から距離を取る。

…くそっ！こいつ、格闘戦が上手い！

…とはいえ。

こっちの主目的は、あくまで福音の撃破。

一撃必殺作戦なら、今距離を取らせたことには、十分な価値がある。

そして決着がついた後、二人の助けを借りてこいつを――

「敵増援確認。迎撃モードへ移行。〈銀の鐘（シルバー・ベル）〉、稼働再開。」

唐突に聞こえた、垂れ流しの音声。

おそらく福音から発せられたであろうそれは、恐ろしく抑揚のない、平坦な機械音声だった。これなら、８に表示された文字の方が、まだ温かみを感じられる。

この声から感じられるのはただ一つ――敵意だけだ。

戦闘に備えて、箒や一夏とリンクを確立していたのが幸いした。この声を聞き逃していたら、俺は背後に気を配りはしなかっただろう。

戦闘状況を確認。

最初の一撃は回避されたみたいだ。零落白夜は出ているものの、敵に損害は見られない。

箒は一夏の背後を守りつつ、福音を牽制。一夏は刀を振り続けているも、ひらりひらりとかわされている。――どうやら、作戦通りに

はいかなかったか。
一瞬、後退したデュエルを見る。どうやら、俺に最接近する気は無いらしい。
ひょっとして、共倒れになるのを待ってるんじゃねぇか？姑息な手を使う！
でも……今なら、一夏たちの援護に入れる。

「一夏、箒！援護に入る！」
「紅也！だが……」
「零落白夜もそろそろ時間切れだろ？選手交代だ！」
「待てっ！あと少しで……」

一夏が、雪片弐型を大きく振りかぶる。
一撃で倒す。そんな一夏の信念が込められたかのような太刀筋だ。
だが――敵にとってその動きは、あまりにも遅かったらしい。

「！！」

一夏が息をのむ音が、リンクを通じて伝わってくる。
それもそのはず。福音の多方向推進装置（マルチスラスター）である、銀色の翼の装甲の一部が、花のようにゆっくりと開く。

否。ゆっくりに見えてるのは錯覚で、アドレナリンとかそういうもののせいなんだろう。

開いた翼の中。そこには数えるのも馬鹿馬鹿しくなるくらいの、おびただしい数の砲口が存在した。福音は翼をせり出し、すべての砲口を一夏へと向ける。それを俺の脳が知覚した瞬間――そこに、羽根が降りそそいだ。

「ぐうっ！？」

状況が違えば、それはそれは幻想的な光景に見えただろう。
しかし、その羽根の正体は、高密度に圧縮されたエネルギーの塊だ。
どこのファルザービーストだ！とか、ギャグを発する余裕もない。
羽根の雨は白式の装甲に突き刺さり、一斉に爆(は)ぜた。

《これが銀の鐘(シルバー・ベル)……。なんという連射速度だ！》
「ビームほどじゃねぇが、火力もな！一夏、無事か？」

その返事に答えるかのように、一夏が煙の中から現れる。ところどころにダメージが見られるが、どうやらまだ戦えるらしい。零落白夜も残ってる。
よし！まだ終わってな――

「ええい！どこを見ている！」

唐突に聞こえた第三者の声。確認するまでも無く、デュエルの操縦者だ。
くそっ！決着までは静観だと思ったが、読みが甘かったか！？
デュエルは左手に構えたシールドで体を隠しながら、こちらへ向けて突っ込んでくる。
あれはアンチ・ビーム・シールド。ビームサーベルでは効果が薄い。
ならっ……

ガーベラストレートを抜刀。正眼に構え、楯を切り捨てるべくカウンターの体勢に入る。

「紅也！」

箒の叫び声が聞こえたのは、そんなときだった。
その瞬間、迂闊にも俺は、デュエルから意識を逸らしてしまった。
そして――自分の愚かさを思い知ることになった。

（羽根――！？）

銀の鐘は全て、一夏を狙っているものだと思ってた。
その原因は、俺の脅威度が低いと判断されたためだと思い、油断していた。
それが何だ？抜刀したことで脅威が高まったのかどうか知らないが、奴は隠していた砲口の一部を俺に向け――発射してきたのだ。

《回避――》
（できねぇっ！！）

脚部の姿勢制御スラスターを作動させるも、直撃コースから逃げ出すには遅すぎた。
破壊をもたらす光の羽根が、ゆっくりと俺に近づいてきて――

瞬間。
視界が、何かに遮られた。

…。
……。
……。
……ダメージ無し、だって……？

「だから言ったでしょう！？『どこを見ている』と！」

「…は？」

機体の被害状況に呆然としていた俺を現実に引き戻したのは、そんな声だった。

周囲を確認。

一夏――戦闘中。〈銀の鐘〉の大半にロックされているも、逃げ切っている。

箒――俺に近づいてきたようだが、まだ距離がある。

じゃあ……この楯の持ち主は、誰だ？

「いつまで呆けている気ですか！離脱しなさい！」

「え？……なっ！？」

センサーに映った光景を見て、俺はようやく現状を理解する。

俺を狙って放たれた〈銀の鐘〉。それを防いだのが、あのデュエルのパイロットであると。

「な……何のつもりだ！？」

「最初に言ったでしょう？『協力していただく』と。」

「だから、それが『何のつもりだ』、って言ってんだよ！」

後退しながら、俺はスピーカーで話しかける。事情は分からないが、一応助けられた身だ。本当は今すぐにでも斬りつけてやりたいが、そうもいかない。

「まず一つ言っておきます。私の目的は、福音の捕獲です。」

後退しながら、奴もスピーカーで話しかけてくる。

どうやら、俺がオープンチャネルを使えないと思ったらしいが……好都合だ。

「何だ？Ｘナンバーの次は軍事機密か？お前ら、本当に強奪が好きだな！」

「どの口が言いますか、モルゲンレーテの操縦者。

…続けます。そして貴公らの目的も、福音の捕獲でしょう。」

「……ああ、そうだ。」

ようやく、安全な距離を取れた。

箒と一夏は連携を取り、左右から福音を挟み込む戦法をとっている。

「ですが、お恥ずかしいことに、私だけでは太刀打ちできない相手なのです、あれは。

そして……おそらく貴公らでも勝てないでしょう。」

――コイツ、今何て言った？

俺達３人が……いや、この際それは置いといていい。

こいつが……Ｘナンバーが、太刀打ちできない相手？

「そんなバカな！さっきのはエネルギー兵器だが、ＰＳ装甲を貫通できるほどの出力は無かった！それなのに、何故……。」

「……貴公なら、すでに予想が出来ているのでは？」

その言葉で、俺は熱くなった頭を、一旦冷やすことにする。

〈銀の鐘〉に、ＰＳ装甲を貫通するだけの出力は無い。

しかしこいつは、ＰＳ装甲でも太刀打ちできないと言う。

ならば、別の武装が脅威だということ。

ＰＳ装甲の脅威になりうるのは――

「どうやら、気付いたようですね。さて、貴公はどうしますか？」

センサーに映る福音は、すでに〈銀の鐘〉の発射を止め、距離を取ることに徹していた。

今までとは違う動き。今までとは違う、ナニカをするための――

「分かった、共闘だ！赤い方を守ってくれ！」

「承りました！」

もはや、話し合いの余地は無かった。

俺が一夏の方へ、あいつが箒の方へ、全速力で向かう。

「！　紅也、何で……」

「なっ、貴様は……」

「「話は後だ！！」」

俺は福音と一夏の間に立ち、アンチ・ビーム・シールド（赤）を実体化させる。刹那、福音から聞こえた機械音声が、その判断が正しかったことを証明した。

「敵機脅威度、大と断定。〈銀の祝福（シルバー・シャワー）〉、稼働開始。」

敵の翼から、さらなる砲口がのぞく。そして――

緑色の雨が、俺達へと降りそそいだ。

「やはりビーム兵器！」

「やはり？　紅也、一体どういう……」

「赤いお嬢様、楯から出ないでください！」

「そ、そういえば紅也！あいつと敵対してたんじゃ！？」

会話をしながら、俺達は福音から距離を取る。…よし。だいぶビームの密度が薄くなった。

左手にシールドを、右手にビームサーベルを構え、俺は福音の方を向く。

「今回限りの共闘だ！期限は、福音撃破まで！…アンタ、その後どうする？」

「アンタではなく、エッジと。撃破後は、私は本来の任務を果たします。止めたければ、貴公らが私を倒せばいい。」

「ずいぶんな自信だな……。ＯＫだ！一夏、箒！援護してくれ！」

楯を正面に構え、俺は福音へと突進。ビームが楯に命中するが、俺本体に致命傷は無い！

「私はビームライフルで牽制します。当らないでくださいよ。」

エッジは、福音の周りを円軌道で周回し、ビームを放つ。

福音はそれを紙一重でかわしているが、ビームの熱にやられて装甲がところどころ焦げている。

「私もいるぞ！」

そこへ箒の斬撃が飛来。〈空裂（からわれ）〉によって生まれたエネルギー帯と、〈雨月（あまづき）〉から放たれたエネルギー刃が、福音の動きを鈍らせた。

――好機！

「うおおぉぉぉぉ！！」

――斬ッ！！

非殺傷の範囲で出力を引き上げたビームサーベルは、福音の左足を、しっかりと斬り裂いた。

「外したっ！！」

「ならば私が。」

牽制は箒一人で足りると判断したのか、エッジまでもが格闘戦を挑む。

狙いは背後のウイングスラスター。敵の機動力と攻撃力、その両方を削ぐのが狙いだろう。

「Ｌａ……♪」

さらに砲口が増えた。左右合計、４８門。

そして全方位（オールレンジ）に放たれる、緑の光と輝く羽根。

至近距離にいた俺達二機はそれをもろに食らい、再び後退を余儀なくされた。

「くっ……楯が……。」

エッジが漏らしたように、俺のシールドもかなりヤバい。〈銀の鐘〉でシールド表面の対ビームコーティングを削られ、〈銀の祝福〉でシールド本体を削られた。

視界の隅で、ビームサーベル二本を構えたデュエルが見える。おそらく、ビームをはじきながら再接近するつもりだろう。打ち合ってみて分かったが、彼女にはそれだけの技量がある。

一方の俺は、アンチ・ビーム・シールド（青）を取り出すと、一夏

に呼びかけた。

「一夏、零落白夜は使えるか？」

「もう残り僅かだ！大事に使っても、もって後３０秒！」

「それだけありゃ十分だ！箒、また援護を頼む。」

「策があるのか？」

「ああ……。気は進まないけど、な。」

俺はエッジに接近し、彼女の前に出た。

「何のつもりだ？」

「俺が楯になるから、アンタが頃合いを見て奴を斬ってくれ！」

「…首級は私が獲ることになるが、いいのか？」

「構わねぇ！これしかねぇんだ！！」

「…貴公に感謝を！」

燃料は気にせず、瞬時加速。と、同時に、ぴったりとタイミングを合わせたエッジもまた、瞬時加速を始める。

二機が一体となり、矢のように福音に迫る。それに気づいた福音が、火線を俺に集中させるも、俺達は止まらない。

――不思議な感じだ。

エッジとはさっきまで敵同士だったのに、今は自然に背中を預けている。

こいつの人柄ゆえだろうか？どうしても、背後から不意打ちするような人間とは思えない。

同時に、卑怯な手を使うとも思わない。とても真っすぐで、いいヤツだ。

彼女は、今この瞬間だけは、とても心強い相棒だった。

光をばら撒きながらも、福音は上昇して逃げようとする。
しかし、さっきから斬撃を飛ばし続ける箒によって阻まれ、動くことが出来ないでいる。
……エネルギーは大丈夫なのか？
そして一夏は……よし、指示通りに動いてるな。

「俺は下がるぞ！決めろよ、エッジ！」
「了解した！！」

すっ……と推力を落とし、俺はエッジに追い抜かれる。
福音に迫る、二刀流のデュエル。それを見届けた俺は……

自身のビームサーベルに、エネルギーをこめる。

知ってるか？いいヤツってのは、寿命が短いんだよ。

×の字に振り抜かれる、ビームサーベル。しかし福音は、一瞬のうちに後方へと加速することで、その直撃を避けていた。

――今だ。

「行けぇぇぇ！一夏！！」

叫びながら、俺も瞬時加速。
狙いは、攻撃直後のデュエルの背中。共闘は、福音の撃破までだ。
後は、一夏が福音を落とせば……！

第61話　アンタが戦闘のプロだって言うなら、俺は火事場の天才だぜ！

「行けぇぇぇ！一夏！！」

タイミングは完璧。
ここで一夏が福音を撃破すれば、その瞬間に共闘は終了だ。

《瞬時加速の熱量を探知！》
（よし！行ける――）
《――白式、直下へ加速！！》
「何ぃ！？」

慌てて標的を変更。デュエルではなく福音の方へ、強引に加速する。
そんな雑な剣が当たるわけもなく、福音は再び俺をいなし、ビームとエネルギー弾を発射し始めた。
あ……危ねぇ！
今デュエルを斬ってたら、また三対一の状況に逆戻りするとこだったぜ！

「一夏！何をしている！？せっかくのチャンスに――」

箒の怒鳴り声が、リンクしたネットワーク越しに俺の鼓膜を振わせる。

「船がいるんだ！海上は先生たちが封鎖したはずなのに――ああくそっ、密漁船か！」

三度（みたび）シールドに隠れて、一夏を見やる。ちょうど、一夏の手の中で、雪片弐型が光を失うのが見えた。

――これで、一夏はもう使えない。

「馬鹿者！犯罪者などをかばって……。そんなやつらは――！」

「箒！！」

戦闘中だと言うのに、一夏と箒の雰囲気が険悪だ。

お前ら……

「説教は後にして、状況を見ろ！」

「彼の言うとおりだ。白い騎士殿、エネルギー切れだろう？そこの船に着地しなさい。」

「コイツに言われるのは癪だろうが、後は俺達でやる！」

「紅也、エッジさん……。すみません、任せます！」

一夏はＩＳを展開したまま、船に着地する。船に乗っていた密漁者らしき女は、突然のＩＳの襲来に動揺しているように見えた。

これでいい……。後は、俺の仕事だ。

「箒！さっきの発言は聞き流してやる。

今、エネルギーはどのくらい残ってんだ？」

「ま、待て！残り……５０を切った！持久戦は厳しいぞ。」

「私の残量も心もとないですね……。ＰＳ装甲も、持って後３分といったところでしょうか。」

「そうかい！じゃあ、何としても３分ギリギリで決着をつけねぇとな！」

「すでに倒した後の算段とは……。足下をすくわれますよ？」

俺のエネルギーも、そう多くは無い。

もしもビームサーベルを全力で使えば、３０秒以内に具現維持限界になっちまう。

しかも、その後デュエルを撃破しなきゃいけない……。これは、はっきりいって不可能だ。

撤退するか？

当初の作戦目的は、すでに達成困難だ。事前の情報も誤っていた。

この任務の失敗に、俺達の落ち度は全くない。

――だが。

成功すれば、Ｘナンバーを一機鹵獲できる。これは大きなメリットだ。

たとえそれが、特殊な兵装を一切持たないデュエルだとしても、Ｎ．Ｇ．Ｉに恩を売ることは可能。

さて、どうする？

ビームサーベルは、デュエルに対して使いたい。

ああは言ったものの、俺達２人は、後３分も戦闘を続けられない。

ならば、デュエルとはＰＳ装甲がある状態で戦うことになる。くそっ、葵がいてくれれば……。

しかし、福音のエネルギーをゼロにして、活動限界を迎えさせるためには、ビームでないと……。

――待てよ。

エネルギーをゼロにする必要はない。

ただ、奴の動きさえ止められれば――！

「策は成った！」

「な、いきなりどうしたんだ、紅也！」

「静かにしてください、お嬢様。――策とは、どのような？」
「基本的にはさっきと同じだ。ただ、箒に俺達を運んでもらう。――箒、残りのエネルギーを全て推進力に回せるか？」
「全て、だと？いいのか？」
「どうせ一回きりだ！…エッジ、これが通じなかったら、俺は任務失敗だ。福音は好きにしろ。」

攻撃を回避しながらの、一瞬の交錯。バイザー越しに、緑と緑のデュアルアイが視線を交わらせる。

「元より、私一人ではどうにもできんのだ。この刃、貴公に預けよう。」

…こいつ、本当に俺と敵対してるって自覚があるんだろうな？
任務のためだから、斬れと言われたら斬るけど、なんだか罪悪感が……。
前話の自分が、ひどく汚いものに見えるぜ。

「じゃ、説明するぜ！
…8、作戦データを転送してくれ！」
《リンク確立……転送完了だ！》

するとさっきまで別個に行動していた2機が、俺の元へと集まってくる。
それを確認した俺は二枚のシールドを構え、デュエルの前に立つ。

一機で駄目なら二機で。

デュエルはバックパックのスラスター噴射が当たらない位置に手を添え、俺を押し出すような格好になる。

二機で駄目なら三機で。

最後に箒がデュエルの背中に手を添え、準備が整った。

「「「突撃！！」」」

まずは箒が展開装甲を調節し、瞬間的に最高速度へと到達する。

急な加速度から生じる力により、体が悲鳴を上げているが、俺は歯を食いしばって耐える。

紅椿による加速が一段落した所で、今度はデュエルが加速する。箒はどんどん遠ざかっていき、代わりに福音が接近する。

加速中の防御は、全て俺が行っている。二枚の楯が削られるも、直撃はない。

あの急加速だ。いくら福音とて、ロックオンが追い付かなかったんだろう。光弾は全て、俺達の後方を狙っていた。俺はそれらを置き去りにし――福音すらも追い越していく。

二つの影が重なった刹那、エッジが背後から飛び出した。今度はクロスさせたビームサーベルではなく、二刀を使った手数による攻撃。それらは福音の装甲を大きく抉るも、未だ致命傷には至らない。

――作戦失敗？

いや、作戦通りだ！！

福音の背後に回った俺は機体を反転、減速させる。左手に構えたのはビームサーベル。ただし、そのエネルギー量はごく僅かだ。刃を維持するのが精一杯。だが、それでいい。どうせオトリだ。

ビームサーベルを振る。気付いた福音はデュエルに急接近し、蹴り飛ばすことで引き離し、俺の方を向く。
なんという早業。なんという技量。
俺はこれを作り出した技術者と、性能を引き出す操縦者に、心の底からの賛辞を贈ろう。

サーベルの刃が、福音に迫る。
すると予想通り、福音はわずかにスラスターを吹かし、ひらり！と刃を回避した。
俺の右手に武器は無い。
それを好機とみた福音は、翼の片方、２４の砲口を俺に向ける。

だが、俺はそんなものは気にしない。

残る推進剤と、ついでにレッドフレーム本体のエネルギーを込めて、瞬時加速を行う。
狙うは、むき出しの胴体。そこへ向け、俺は右手を開いて突撃した。

俺の右手は無手だ。武器は持っていない。
だが――武器など必要ない。俺にはあと一つ、使える切り札が残っている。

右手の掌。そこから、ビーム兵器にエネルギーを供給するためのプラグがせり出す。
そこにレッドフレームのエネルギーを送り込むと、黄色いエネルギー球が形成された。

――光雷球。

昔、ガーベラストレートにエネルギーを纏わせようとしたときに、

たまたま開発したこれは、対象にエネルギーの塊をブチ当てることで、システムダウンを引き起こす技だ。

ガキィィィン！！

俺の右手が、福音の腹に押しあてられる。

だが、福音は止まらない。――くそっ、効果が薄いのか？

「８！次の戦いに影響しない範囲で、限界までエネルギーを注ぎこめ！」

《右腕が壊れるぞ！》

「直しゃあいい！！」

今度は右腕全体から、光があふれる。

限界を超えたエネルギーが、エネルギーバイパスからあふれ出しているのだ。

光雷球は輝きを増し、福音の動きも鈍くなっていく。しかし輝きが増せば増すほど、右腕から出る火花は増え、装甲にもひびが入っていく。

数秒の接触。

そしてレッドフレームの右腕が砕け散る。

むき出しとなった俺の右腕は、ところどころＩＳスーツが切れて血が滲んでいるも、どうにか無事だった。

ちらり、と福音を見やると、福音は硬直したまま、ゆっくりと海面に向かって落下していくところだった。

「……やった。」

呟いたのは、誰だったか。そんなことはどうでもいい。

俺達の任務は終了した。同時に、奴との同盟も。

「協力は感謝する。だが、それもここまでだ。」

ビームライフルを俺に構えたデュエルが、俺の正面に浮かんでいた。
ＰＳ装甲はまだ生きている。装備も、シールド以外は無事。
圧倒的に優位な立場にいても律儀に待っているのは、やはり彼女が
「騎士の誇り」を重んじるからなのだろうか？

「あー、こっちは右腕壊れてんだけど、ハンデとかは……。」
「笑わせるな。貴公も、戦闘中に私を狙っただろう。そんな者に譲歩など…。」
「……だよな。」

無傷だった左腕で、再びビームサーベルの柄を握る。
刃は出さない。もう、エネルギーを無駄遣いする余裕はないからな。

「ま、待て！紅也、私も助太刀するぞ！」

箒の紅椿が、俺の隣に立つ。
エネルギーはわずかのはずだから、どこまでやってくれるかは分からないが……。

「…頼めるか？」
「ああ、任せろ！」
「…ってなわけだ。別にいいよな？」
「構わん。そういう約束だ。」

本当は一夏の助けも借りたかったが……今は遠くの船の上だ。諦めるしかない。

三人は、それぞれの得物を構える。

そして――

「仇討ちもまた、騎士の務め……。死んでもらいます！」

新たなる戦いの火ぶたが、切って落とされた。

第６２話　閃光の刻

「くそっ……。一体、どうなってんだよ……。」

密漁船の上。今や戦場からはやや離れた場所にあるそこから、一夏は戦闘を見ていた。

福音を紅也が撃破して、そしたらエッジさんが紅也に銃を向けて……。

（何でだよ！何で、戦うんだよ！）

さっきまで共闘していた者たちが、突然対立する。一夏にしてみれば、訳のわからない状況だった。

「あらあら、あかんなぁ。あんな状態で戦闘なんて。」

船にいた女が突然しゃべりだしたため、一夏は驚いてそちらを見る。女は口元に手を当て、どこか楽しそうに空の彼方を見ていた。

――いや、待て。

俺がＩＳのハイパーセンサーを使って見ている光景を、たかが密漁者が見ている！？

「兄さんも、あかんなぁ。鈍い男は嫌われるで。」

ドン！と腹部に衝撃が走る。それと同時に、白式のエネルギーが切れて、装甲が消えてしまった。

「お……お前は……？」

倒れた一夏が僅かに顔を上げると、そこには見たことのない、全身装甲のＩＳが立っていた……。

◆

〈ｓｉｄｅ：海上の戦闘組〉

「どりゃぁぁぁぁ！！」

先手を取ったのは俺だ。不意打ち同然の瞬時加速＆抜刀で、ビームライフルを切り落とす。

確かにビームライフル本体は貴重だが、機体の方が最優先だ！

「なんとっ！？まさか、武器を狙うとは……。」

「へっ！まさか武器までＰＳ装甲じゃあないからな！」

そして即座に距離をとる。その判断は正しかったようで、さっきまで俺がいた空間を、ビームの刃が薙いだ。

――いや、刃を伸ばしたのか？

レッドフレームの胸部装甲は、わずかに切り裂かれていた。

「言い忘れていたが、私は接近戦の方が得意だ。」

「見りゃ分かるっての！」

くそっ！厄介だな、ホント！

「紅也！援護を……」

「ダメだ！箒はエネルギーを使うな！やるなら、実体剣だけでやってくれ。」

「しかしっ……」

「いいか、『私なら倒せる』とか思うな！今俺が互角に戦えてるのは、あいつがお前を警戒してるからなんだよ！」

箒から入った通信に答えつつも、刃からは目を放さない。

ちょっと乱暴に返答しすぎたか？だけど、気を使う余裕はねぇ！

避けるべきものは避け、よけきれないものはシールドで防ぐ。

とにかく、今必要なのは時間だ。

奴のＰＳ装甲が切れれば、後はガーベラで……。

「――時間稼ぎなど、無駄なことだ。」

二刀を持ち、さらに手数を増やすデュエル。

嵐のような連撃を前に、俺は距離を取るしかない。

そろそろ、バックパックの推進剤が底をつきそうだ。

（くそっ……８！プロペラントタンクを分離後爆破！奴の視界を塞ぐぞ！）

《ガッテンだ！》

レッドフレーム本体のエネルギーを消費し、加速する。デュエルもそれに動揺はせず、正面から突っ込んできたが――俺はそれを回避する。

そしてデュエルの頭上に、推進剤をわずかに含んだタンクを投下。
奴はすぐに迎撃したが、それが災いした。

ドン！

小規模な爆発が起こり、デュエルの装甲表面を焦がす。
好機が、来た。

「今だ！箒！！」
「はあぁぁぁぁ！！」

〈雨月〉から、無数のエネルギー球が放たれ、煙に穴をあける。
そこに敵を見た俺は、ビームの刃を実体化させ、トドメを刺すべく動こうとしたが――

――ゾクリ。

不意に、脳の奥が冷たくなる。
何か、嫌な予感がする。俺は、攻撃を躊躇してしまった。
そして――

俺とデュエルの間を、黄色い閃光が走りぬけていった。

「ちょっと待ちぃ！こっからは2対2や。フェアプレーの精神でいこうや！」
「なっ！？新手？」

慌てて砲撃を行ったＩＳを探す。
発見。カーキ色の機体に、全身に搭載された火器。あれは――

「ＧＡＴ－Ｘ１０３、バスターか！」
「よう知っとるな、その通りや！」

自分の感覚に従って正解だった。
あのままあそこにつっこんだら、俺は焼け死んでただろう。

「一体、どこにいたのだ！？」

箒が叫ぶ。

「姉ちゃん、アホやなあ……。敵に『自分は船におりました』なんて言うわけないやろ！」

……言っとる。
じゃ、なくて！船だって！？

「まさか…さっきの……？」
「当たりや、兄ちゃん。迂闊やで？戦場で、敵の言葉に従うなんて……」
「チョッパー！あれは、あなたの船だったのですか？」
「……は？エッジ、自分何を言うとんねん！」

……もういいや。
デュエルは復活したが、装甲がところどころ抉られている。
さすがは第四世代か。ＰＳ装甲を貫通するとは……。

「ま、待て！では、一夏は……。」
「あの兄ちゃんか？今はおねんねしてるで？ホンマに間抜けやったな……」
「黙れ！」

箒が激昂し、バスターへと突っ込んでいく。
確かに、あの機体に接近戦武装はないけど……ちょっと待て！
策も無しに勝たせてくれるほど、相手はヤワじゃないぞ！
むしろこれは……

ハメられたか！！

バスターの両肩の６連装ミサイルポッドが開き、左右合計１２発のミサイルが箒を襲う。
が、箒はそれを紅椿の機動性でかわし、距離を詰めようとする。
俺が見ていられたのは、ここまでだった。

「なにをボサっとしている！」

俺の正面にはデュエルが。
とっさに赤いシールドを突き出すも、耐ビームコーティングを失っているそれは、あっさりと切り裂かれた。

「さっきの爆発は良かったが……こちらが一人と油断したな！」
「まったくだぜ！騎士が不意打ちとはな！！」

もう出し惜しみはしていられない。ビームサーベルから刃を出し、切り合いに応じる。

「ふっ、私は自分のルールを他人に課すほど、融通の効かん人間ではないさ！」
「その言葉、どこぞの教師に聞かせてやりたいな！」

一撃、二撃。
相手のビームサーベルも一本だ。どうやら、さっきのでだいぶエネルギーを減らしたらしい。――これなら、付け入る隙があるはずだ！
「互いにエネルギーが心もとないな！どうする？決闘でもするか？」
「三歩歩いてズドン！か？じゃあ俺は一歩目で撃つぜ！」
「では私は振りかえらんぞ。」
「そうかい！」

冗談の応酬をしてはいるが、斬り合いも続いている。
こっちとしては、斬られる＝死ぬだから、かなり気を使うんだが！？
いいよな！絶対防御って奴はよぉ！

…と、唐突にデュエルは俺から距離をとる。
見れば、ビームサーベルも輝きを失って……時間切れか！

「俺の……」
「勝ちだ、とは言わせへんよ。」

ガキィィィン！
俺の背中に、何かが衝突した。
レッドフレームは体勢を崩し、状況がつかめない。
手足を動かし、８がスラスターを制御してどうにか前を向くと――
正面には、合体させた二つの筒を腰だめに構えたバスターがいた。

「はん！そんなモンが当たるとでも……」
「ぐっ……紅也……。」

――冷やりとした。

背後から聞こえたのは、箒の声。
何故？
決まっている。
さっき激突した物体は、紅椿だったのだ。
成るほど。だからデュエルは撤退したのか。
俺を追い込んだから。
そうかそうか。

これは

まずい。

「二人まとめて、吹き飛びィ！」

ビーム・マグナムの比ではない。極太の火線が、俺達を呑み込もうとする。

――箒を連れて逃げられるか？

無理だ。

――俺一人なら？

ギリギリ間に合う。

――じゃあ箒は？

絶対防御がある。大丈夫だ。

――じゃあ、お前は……

――巻き込まれた一般人を、見殺しにするのか？

いや……

――なら、どうする？

決まってんだろ。弟子一人守れなくて、何が師匠だッ――！

「うおぉぉぉぉっ！！」

葵から借りた、ブルーフレームのシールドを構える。

損傷は、さっき壊れたレッドのシールドよりも、若干マシというレベル。

こんなんで大丈夫なのか？

――大丈夫だ、問題ない！！

着弾。

あまりの衝撃で機体が傾くが、スラスターを吹かしてふんばる。

シールドにひびが入っていく。やはり、限界なのか……？

「あ……紅也……。」

いや、限界なんて知るか！せめて箒だけでも、きっちり逃がしてや

る！

「箒……逃げ……」

そして――

暴力的な破壊の光が、俺の左腕を呑み込んでいった……。

第６３話　任務失敗

嘘だ、と思いたかった。

姉さんから与えられた第四世代機。これで私は、変わったはずだったのだ。

そう、一夏や紅也と肩を並べて戦えるように……。

でも、現実はどうだ？

福音は沈められず、乱入してきた敵機に翻弄され、そして――

「うおぉぉぉぉっ！！」

目の前には、満身創痍の紅也の背中。

切り傷だらけの装甲。焦げたスラスター、出血した右腕。

私より、よっぽどボロボロじゃないか。

なのに――

何で、私なんかをかばったんだ。

構えたシールドにひびが入り、少しずつ溶けていく。

それでも、私は動かない――いや、動けない。

「あ……紅也……。」

ようやく口に出せたのは、そんな言葉。

それをきっかけに体の硬直が解け、私はのろのろと動きだす。

「箒……逃げ……」

それが、紅也の最後の言葉だった。
彼の楯は光に呑み込まれ、腕もゆっくりと溶けていく。
白と赤の装甲が溶け、腕が露出し、皮膚が焼け、骨が燃え……
そんな光景を、私は幻視した。

「あ……ああっ……」

墜ちていく。
紅也が、墜ちていく。

「紅也ぁぁぁぁ！！」

慌てて加速し、紅也に追いつく。
無事な装甲は体幹のものだけ。左右腕部は完全に破損し、露出した両腕には無数の生傷が見える。
右手を伸ばし、左腕を掴もうとするも、その手は虚しく空を切る。

――私は、こんなにも動揺しているのか。

さらに接近し、今度は胴体を、両腕で抱きしめるかのように掴む。
流石に今度はつかみ損ねなかった。

「紅也！大丈夫か、紅也！」

必死に呼びかけるも、返事は無い。
どんな顔をしているのか。それすらも、バイザー越しでは分からない。

「まさか……大丈夫だよなぁ……こうや……」
「……遺言はそれだけか？」

至近から聞こえた声に気付き、私はのろのろと振り返る。
背後には、青と白の全身装甲を身にまとい、ビームサーベルを構えた女が浮かんでいた。

――ああ、今は戦闘中だったな。
――私の負け、か。

「覚悟無き者よ……消え去れ！」

背後に迫る刃を見ても、私は避けようとは思わなかった。
紅也は、私なんかを庇って傷ついた。なら、今度は私が罰を受ける番だ。

――葵に、怒られてしまうな。紅也を傷つけたんだから。

私は、まるで魅入られたかのように、迫りくる光の剣を見つめ続けた。

そして……

赤い光線が、私の視界を遮った。

「新手かっ！？」

光が収まると、そこには右手が溶解したデュエルの姿があった。
光線はさらにもう一発。慌ててデュエルは回避行動をとり、私たち

から離れていった。

「あら、外しましたか。ですが、逃がしませんよ！」

唐突にオープン・チャネルに響いた、初めて聞く女の声。
その声に対し、敵は過剰に反応していた。

「くっ……ストライク？まさか、ここまで追ってくるとは！」
「エッジ！福音は回収した。さっさと引き上げるで！」
「確かに分が悪い。こちらは手負いだ。引かせて――」
「あげるわけないでしょ？」

そして、私の目の前に現れた、赤・青（トリコロール）・白の機体。紅也や奴らと同じ全身装甲で、背中には黒と赤で彩られたバックパックが搭載されている。右手に持っているのは、ビームライフルだろうか？さっきの光線が、こんな小さな火器から放てるとは思えないが……。

「もちろん、ただで逃げられるとは思うてないわ！喰らい！」

砲撃型の攻撃が、トリコロールの機体に迫る。しかし、そいつはくるり、と回転して砲撃をかわし、即座にビームライフルで反撃する。ビームの色は緑。では、さっきの砲撃は……？
砲撃型はあの大火力を放ちながら、デュエルに牽引されて去っていく。トリコロールの機体もしばらくは追っていたものの、やがて諦めたのか射撃を中止し、ゆっくりとこちらへ戻ってきた。

「あーあ、アグニ2発にビーム6発、加えてここまで補給なしでの全力疾走だから、エネルギーが持たないわね。…そこの貴女、無事かしら。」
「え、ええ、はい……。……あの、あなたは？」

「私？　私はね……謎の女1号よ。……あら、それ、ひょっとしてコウくん？」

それ、と指さしたのは、私が掴んでいる紅也の身体だった。

「そ……そうだ！紅也が！意識が無いんです！助けてください！」

突如現れた救援に、私はすがるような思いで懇願した。

「落ち着きなさい。普通のＩＳには操縦者保護機能があるから、大丈夫よ。

……8、コウくんの状況を教えてくれる？」

《…命に別条はない。》

「……そう。」

装甲に覆われた顔では彼女の表情は分からないが、少なくとも紅也は無事みたいだ。

「良かった……本当に……。」

視界が滲む。おそらく、今の私は泣いているのだろう。

正直、紅也は助からないんじゃないかと思った。あんな攻撃を受けたら、絶対防御なんか当てにならない。そう思ってた。

でも……生きてる。

それが、とても嬉しかった。

「まあ、意識がないわけだから、早めに連れ帰った方がいいわね。貴女、エネルギーは残ってる？」

女のその問いに、私は首を横に振って答える。

実を言うと、紅也に追いついた時点で、もう紅椿はいつ消えてもおかしくなかったのだ。
本当に、紙一重の状態だった。
紅也や、目の前の彼女が助けてくれなかったら、きっと私は……。

「じゃ、エネルギーを補給するわね。コウくんはあなたが運んでちょうだい。」

そう言うと、女のＩＳの装備が変化した。
背中のスラスターは消え、両腕と両肩、さらに胴体に藍色の追加装備が搭載される。
そしてその機体が私に手をかざすと、尽きかけていた紅椿のエネルギーが回復していった。

「ライトニングストライカー、部分展開……。上手くいったわね。じゃ、コウくんよろしくね！私は漂流中の船を見つけたから、そっちを助けてから行くわ！」

船……。一夏か。
砲撃型の女はああ言ってたが、無事だったのか……。
それなのに私は、あんなに熱くなって……。
情けないな。まだまだ修行が足りない、か。

再びスラスターを装備したトリコロールは、そのまま飛び去っていった。
私も紅也を抱きかかえ、展開装甲を調節し、加速する。

目標は、花月荘――

◆

あれから、どれほどの時間が経ったのだろうか？
出発したときは無人だった浜辺には、作戦本部にいた人間が全員集合していた。
おそらく皆、戦闘をモニターしていたのだろう。ハイパーセンサーで見た全員の表情は、一様に暗く、そんな中へと紅也を抱えて下りる私は、とてもみじめな気分だった。

着地。辺りに砂がまき上がる。

そして砂浜に紅也を横たえたとき――人込みの中から、空のように青い髪の少女が、飛び出してきた。

◆

〈ｓｉｄｅ：山代　葵〉

箒が、紅也をつれて帰ってきた。

あの戦闘――
ブリーフィングでは、１対３を想定していた。
でも実際は、デュエルとバスターまで加わった乱戦になり、紅也が

撃墜された。
しかも……

紅也は、左腕を撃たれた。

ＡＳＴＲＡＹの装甲は、そこまで丈夫ではない。
だからこそ、分かる。

紅也が、五体満足な状態であるはずがない。

でも――
映像では、確かに――

そう思ったとき、私はすでに駆けだしていた。

「紅也！」

砂浜に足を取られそうになるけど、気にせず走る。
紅也はまだレッドフレームを装着してるから、表情までは分からない。
でも、私はあのとき、確かに感じとったのだ。
紅也が受けた、とんでもない苦痛を。
表情が周りに見えないのは、むしろ良かったとさえ思う。
もし見たら、みんな――紅也が無事だなんて、信じられなくなるから。

さらに近付き、紅也の腕を見る。
両腕共に傷だらけだけど、確かにそこにあるように見える。
だけど――

（…8。紅也の、左腕は…。）

《…紅也の判断で、偽装中だ。》

――やっぱり。

無事で済むわけが無かったのだ。バスターの超高インパルス長射程狙撃ライフルの威力は、強奪機体の中でも最強レベルなのだから。

それなのに。

あんなに、痛い思いをしたはずなのに。

周りの人に心配かけないようにするなんてっ……。

「お兄ちゃん！」

何で？

何で最後にすることが、周りの心配なの！？

あのときストライクが来なかったら、お兄ちゃん、死んでたんだよ？

「お兄ちゃん！しっかりして！」

お兄ちゃんの右腕を掴む。血が通い、確かにまだ温かみを持つその手は、お兄ちゃんが生きていることを証明してくれる。

でも、脈拍はすごく弱い。レッドフレームを解除したら、すぐに弱ってしまうに違いない。

ボロボロ、と涙がこぼれる。もし、お兄ちゃんがいなくなったら、私は――

ぎゅ。

握った右手は、他でもないお兄ちゃんの手で、確かに握り返された。

「お兄ちゃん……生きてて……良かった……。」

涙が止まらない。
意識は無いけど、私の声が届いたんだ！
大丈夫……お兄ちゃんは死なない。
私を置いて、死ぬわけがない！

「何をやってるの。早くコウくん運びなさい！怪我人でしょ？」

――そんな、空気の読めない無粋な声が、上空から聞こえた。
上を睨みつけると、エールストライカーを装備したストライクが、なぜか気絶している一夏を抱えて下りてきた。

「アオちゃん、ＩＳ使ってコウくんを運びなさい。いくら生命維持してるっていっても、早めに処置したほうがいいわよ。」
「…分かってる！」

その言葉に腹を立てながらも、ブルーフレームを展開。紅也を抱きかかえて、私は旅館の中、医務室へと紅也を運ぶのであった……。

◆

〈ｓｉｄｅ：残された人たち〉

「んー、コウくんはアオちゃんに任せましょう。…で、この子は…」
「ちょっと待て。」

砂浜に着地し、キョロキョロと辺りを見渡すストライク。
その様子を見て一歩前に踏み出したのは、我らが織斑千冬であった。

「貴様は、誰だ？顔を見せろ。」

その問いかけに、一同はうんうん、と同意するかのように首を縦に振る。

「いやですわ、ブリュンヒルデ。あの夜、遅くまで語り合った私の事を、もうお忘れですか？」

対するストライクの操縦者は、ちゃかしたような返答を返した。すると山田先生をはじめとする女性陣が、一斉にざわざわと騒ぎ始めた。

「あの夜……？まさか！」
「き……教官にそんな趣味が……。」
「人はみかけによらないと言いますが……」
「だからいい年して彼氏の一人もいなかったのね。」
「み……みんな？それ以上は止めたほうが……」

スパパパパァン！４Ｈｉｔ！

「「「「すいませんでした！」」」」
「だから言ったのに……。」

さておき。

「まあ、忘れているのでしたら、思い出させてあげましょう。」

すると、頭部を覆っていたバイザーは外れ、長いブロンドヘアーの女の顔が現れた。

「貴様は……確か、N・G・Iの。」

「エイミー・バートレットですわ。お久しぶりです。」

そう言ったストライクの操縦者、エイミーは、右手を差し出して握手……ではなく、脇に抱えた一夏を差し出した。

「……何だ？」

その意図がつかめず、問いかける千冬。

「いえ、コウくんはアオちゃんに渡したから、この子はあなたに、と。」

「はぁ……。別に運びたいとは思ってないが。」

「そうですか……では！」

エイミーは、専用機持ち達に目線を向け、恐るべきことを口にした。

「この子をだっこして医務室まで運びたい人、私の所に来なさい！早いもの勝ちよ！」

――ギラン！！

浜辺にいた数名の目が、怪しく輝いた。

「で、では、わたくしが……」

「ちょっとセシリア！ここはあたしの……」

「僕！僕が運ぶ！」

先程までの雰囲気はどこへやら。突如始まった騒ぎに、千冬はこめかみを押さえる。

そして、騒ぎを起こした元凶はというと……

「じゃあ、私はコウくんたちを見てきます。報告することもあるので、一段落したら連絡をお願いします。」

一転、真面目な表情に戻り、一夏を砂浜に下ろしてからＩＳを解除した。

「あ、わ、私も行きます！」

葵の動揺、エイミーの登場、同級生の醜い争い、という怒涛の展開であっけにとられていた箒は、慌ててエイミーの後を追うのであった……。

第６３話　任務失敗（後書き）

はい、福音戦第一試合、終了です。
最後がちょっとグダグダでしたが、まあ、区切りだと思って下さいな。

次回以降、ちょっとシリアス展開が続くかもしれません。
そろそろ紅也の秘密を明かしていこうと思います。

第６４話　レッドフレーム（前書き）

説明回です。
正直、当初の構想とはだいぶずれてしまったため、全ての説明にはなっていないかも……。

第６４話　レッドフレーム

医務室の中。
何でただの旅館にこんな設備があるのかは知らないけど、よくよく考えればここはＩＳ学園御用達の旅館。最新の設備があっても不思議じゃない。
とにかく、私はそこに紅也を運び込んだ。
そこにはすでに医師がおり、すぐに紅也の治療に取り掛かってくれた。
左腕は放っておいて、右腕の傷の消毒と火傷の治療。幸い軽度なものであったため、それらはすぐに済んだ。
問題は血液。砲撃を受けたことで大量出血こそ起こさずに傷が塞がったが、やはり輸血は必要らしい。輸血パックだけでは足りないと困るので、私からも血液を抜いてもらった。これ以上の治療は、現段階では不可能。意識が戻るまでは、絶対安静と言われた。

――そう。お兄ちゃんは、まだ目を覚まさない。

一夏なんか、砂浜についた後しばらくしたら勝手に目を覚ましたのに……。
箒なんか、無傷で帰ってきたのに……。
何でお兄ちゃんだけ、こんな目に……。

……。
止めよう。
ここにいても、紅也は目を覚まさない。
私自身も、血を抜いたせいか、すこし調子が悪い。
ここから出ないと、また悪いサイクルにはまりそう……。

医務室を出るために、扉を開ける。すると扉の周りにいた、鈴音たちと目があった。

「葵……。紅也の容体は……？」

俯いたまま、箒が聞いてくる。

実は、箒はエイミーさんと一緒に、一度医務室に来ている。

だけど、紅也が治療中だったから、悪いけど出ていってもらった。

質問に対し、私は無言で首を振り、答える。

「…まだ、意識不明。」

「……そうか。」

俯いた箒の表情は、私には分からなかった。

でも、おそらく沈んだ表情をしてるんだろう。自分のせいで、紅也が傷ついたと思いあがって。

そうだよ。

箒がちゃんとしてれば、紅也は無事だったはず。

情けない顔して、『悪ぃ！任務失敗だ！』って言いながら、それでも笑って帰ってきたはずなのに――

「葵！怖い顔になってるわよ。大丈夫？」

「そ、そうですわよ！紅也さんも、操縦者保護機能で意識を失っただけですから、回復したら目を覚ましますわ！」

――操縦者保護？それは、ＩＳにしかついてない機能でしょ？

ああ、そっか。

みんなが落ちついてるのは、そういう理由なんだ。

ＩＳに乗ってる限り、人は死なない。それを信じてるんだ。
馬鹿みたい。
知らないかもしれないけど、昔、ＩＳに人が取り込まれた事件だってあったのに。
それでも、ＩＳを信じ続けるなんて……。

「……葵？どうしたの？」
「嫁が心配なのは分かるが、今は回復を待つしかないだろう。」
「……信じて。紅也君は……強い。」
「…うるさい。」

紅也が死なない？いずれ目を覚ます？
そんなことは分かりきってる。問題は、そんなことじゃない。
ああ、紅也が隠した真相を、暴露してやりたい気持ちになる。
でもそれは、紅也の思いを踏みにじることになる。
わたしはどうすればいいの……お兄ちゃん。

「お兄ちゃんが目を覚ます？そんなの当たり前よ！でも…お兄ちゃんは実際に怪我をしたの！それは変わらないでしょ！？」

ああ……私はまだまだ弱い。
こんな風に、子供みたいにキレちゃうなんて。

ダメだ。
私がこんなに弱かったら、紅也はまた遠くへ行ってしまう。
私を置いて……。
それだけは、絶対に嫌だ！

「――なあ、葵。」

そんな中で。
一人だけ沈黙を保っていた一夏が、ポツリ、と呟いた。

「今の葵は、普通じゃないほど動揺してる。
それは――紅也のＩＳ、レッドフレームの秘密と、何か関係があるのか？」
「――え？」

レッドフレームの……秘密？
まさか。一夏が知ってるはずがない。
学園の誰にも気づかれないようにしてたし、エイミーさんも知らない…はず。勘づいてるフシはあったけど。

一夏は続ける。

「束さんから聞いたんだ。紅也が使ってるのは、ＩＳじゃないって。
確かにＩＳそっくりの機能を持ってるけど、一部の機能が無いって言ってた。そのうちの一つが――絶対防御。」

――バレてる。
さすがは篠ノ之束。ＩＳを開発しただけのことはある。
でも、どうやって？紅也が自分の機体を他人に見せるわけがないし、
そもそも８（ハチ）がハッキングされるわけがない。

「なん……で……。」
「それは分からない。でも実際に、紅也は左腕に大火傷を負った。
――それが、なによりの証拠なんじゃねぇか？」
「……。」

そうか。一夏は気付いてない。

絶対防御がない。

それが、どんな結果を生むのか。

――でも。

今の私の動揺で、レッドフレームが普通じゃないことはバレただろう。まったく、私らしくも無い…って、当たり前か。

こんなことがあったのに普段通りだったら、私は自分の正気を疑う。

さて、どうしよう？

ここまで気付かれたんだ。だからこそ、このまま解散する空気には成りえない。

きっと、紅也の状況、レッドフレームの秘密、その他もろもろを聞き出すまで、みんなはここを動かないだろう。

それは、困る。

私は、すぐにでも行かないといけないから……。

「……葵、話してくれないか？」

一夏のその言葉に、私はコクリ、と頷いた。

◆

長い話になる。

そう告げたところ、一夏は私たちを織斑先生の部屋へと連れていった。
織斑先生自身はまだ事態の推移を見極めるため、作戦司令室にいる。
だから、この話が外部に漏れることは無い。
ついてきたメンバーは、一夏、箒、セシリア、鈴音、シャルロット、ラウラ、簪、そして――

「で？どこまで話すんだ？」

突然現れた、この男。
一体、どこで話を聞きつけたんだろう？

「えーと……あなたは？」
「俺か？俺はレッドフレームの開発者だ。レッドの話をするなら、俺抜きってわけにはいかないぜ！」

ようやくシャルロットがつっこみを入れたけど、あいつは気にせずあしらった。
…確かに、同席する権利はあるんだけど。

「まあ、時間が限られている。まずは話してくれ。」
「…分かった。」

ラウラに促され、私はコホン、と咳払いをしてから、ゆっくりと口を開く。

「…まず始めに。これから話すことは、モルゲンレーテの重要機密。たとえ国から圧力をかけられても、決して口外しないことを誓って欲しい。それが誓えない者は、速やかに退席すること。」

みんなの顔を見渡す。誰もが真剣な表情で、どうやら退席する気はないみたい。

「…なら話す。

さっき一夏が言ったように、レッドフレームはＩＳじゃない。『男でも使えるＩＳ』を目指して作られた、ＩＳの劣化コピー。」

「劣化……？」

セシリアの呟き。それを聞いた私は視線をセシリアに向け、再び話しだす。

「そう。知ってのとおり、男はＩＳコアを起動できない。

だからモルゲンレーテは、ＩＳコアを使わずにＩＳを作ることを考えた。」

「それが…紅のレッドフレームなのね？」

「うん。

ＩＳに搭載されている機能のうち、量子変換だけは解析できた。だからそれは再現できてるけど、他の機能――例えばＰＩＣや絶対防御、コア・ネットワークなんかは搭載されてない。」

「…って、ちょっと待て！

俺達が訓練するときや模擬戦するとき、ちゃんとプライベート・チャネルでやりとりできてたぞ！？」

「それは、私が中継してたから。

ＡＳＴＲＡＹシリーズは、コア・ネットワークとは別の回線でリンクして、情報を共有してる。だから私が、二つのネットワークを常に繋いでたの。」

「そうだったのか……。」

「ところで、ＡＳＴＲＡＹシリーズとは何なのだ？」

…ん、そこに気付いたんだ。やるわね、ラウラ。

私はチラリ、とあの男を見る。…特に止める気はないようだ。
話す許可が下りたから、私は言葉をまとめるために数秒口をつぐんでから、再び話し始めた。

「ＡＳＴＲＡＹは、モルゲンレーテが開発した第三世代相当機……。これが表の事情。
　でも裏の目的は、非ＩＳ兵器の開発。紅也のレッドフレームは試作2号機で、コンセプトは『コアを持たないＩＳもどき』。私のブルーフレームは試作3号機で、コンセプトは『究極の汎用性』だった。…でも、実際の役割は……」
「……レッドフレームのカモフラージュ、だね。」

シャルロットが、素早く真相を口にする。それを首を縦に振って肯定し、私は話を続ける。

「私と紅也は双子。髪を切って胸をごまかせば、入れ替わっても気付けない。
　しかも機体も同型だから、昔の運用試験のときは、私一人が2機のテストを行ってるように見せかけてた。…でも、状況が変わった。世界初の男性ＩＳ操縦者、織斑一夏が現れたから。」
「そっか！男が動かしてるのをバレないようにしてたけど、俺っていう前例が出てきたから、紅也が表に出てきたんだな！」
「…そういうこと。」

一夏、意外と鋭いな。周りの好意には鈍感なのに。

「……質問。紅也くんが存在を明かした理由は……わかったけど、肝心の……レッドフレームは、コアがないのに何で動くの？」

……簪。話をぶり返さないでよ。

みんな納得して、解散する雰囲気だったんだけど。

「おっと！それについては、俺から説明させてもらうぜ！」

そう言って割りこんできたのは、やっぱりあの男だった。

「レッドフレームの動力は小型のバッテリーだ！これがＩＳでいうコアの役割を果たしてる。ビームへのエネルギーも供給できるんだぜ！

バックパックは推進剤だ。二基のプロペラントタンクから供給して、ＰＩＣに頼らない飛行ができるようになってんだ！どっちも、俺様の発明だぜ！」

そう言ってＶサインをする男。…はあ、ホントに紅也そっくり。

「なるほど……。だからレッドフレームに非固定浮遊部位（アンロック・ユニット）は搭載できなかったんだ。」

「そして、それをごまかすためにブルーフレームにも非固定浮遊部位がついてないのね。前から不思議だったんだけど、今ので納得したわ。」

「……だが、変だ。レッドフレームにはちゃんとシールドエネルギーがあったし、コアの信号も出ていた。それはどう説明するのだ？」

「…シールドエネルギーは、装甲が受けたダメージを８が計算してた。コアの信号は、装置を使ってごまかした。…このくらいなら、簡単に細工できる。他に質問は？」

そう言ってみんなを見渡す。それぞれ納得のいかないような表情をしているも、疑問は特にないらしい。

「…じゃあ、話はここまで。私は、紅也のところに戻るから……。」

返答は聞かず、部屋から出る。
これ以上、時間を取られたくはなかったから……。

◆

〈ｓｉｄｅ：篠ノ之　箒〉

一通りの説明を終え、葵と男は退室していった。
……確かにあの説明は、筋が通ったものだった。だが、肝心の葵の動揺の理由は聞けずじまいであった。それが、少し気になる。
何か、大事なことを見落としている気がして……。

「で、俺達はどうする？」

一夏が突如そう言った。
どうする……とは、おそらくあの二機のことだろう。私も一夏も、そして紅也も、あいつらにやられた身だ。正直、このままでは終われない。終わりたくない。

「どうする、って……。あたしは、紅にケガさせたあいつらが許せない。でも、紅の言葉を信じるなら、甲龍じゃＰＳ装甲には対抗できない……。」
「わたくしのブルー・ティアーズも効きませんわね……。悔しいですが、私には何もできませんわ。」

「僕のリヴァイヴも、まだビーム兵器には対応してないんだ。Xナンバーとは……戦えないよ。」

三人とも弱気な意見だ。
それはそうだろう。私だって……怖いんだ。
ビームを撃たれたあの時、死ぬかと思った。
目の前で直撃を受けた紅也の様子が、腕が蒸発した光景が、今も網膜に焼きついて離れない。
幻影（まぼろし）だと分かっていても、あれはあまりにもリアルで、生々しくて……。

「だけど、紅也は言ってたんだ！零落白夜や紅椿なら、ＰＳ装甲にも対応できるって！
だから、俺はあいつらにリベンジしたい！このままじゃ終われねぇ！！」

「――だが、無理だ。
ドイツ軍の衛星で追跡していたのだが、あの二機は福音を回収した後、突然消えたのだ。以後の消息は不明。……完全に手詰まりだ。」

消えた……？
まさか、前に紅也が話していたミラージュ・コロイドか？

「箒！お前も、このままじゃ嫌だよな！？」

一夏が、私に話しかけてくる。
でも、私は答えられない。
恐怖と怒りが頭の中をかき乱して、正常な思考ができない。

「……いい加減にして。いくらなんとかしたくても……私たちじゃ、

どうにもできない……。」

私の代わりに静かに返答したのは、今まで黙っていた簪だった。
でも、静かなのは声量だけだ。その声色には、わずかに怒気が含まれている。

「悔しいのは……みんな同じ……。なにか方法があるなら……みんなとっくに飛び出してる……。」
「……そっか。そうだよな。……ごめん。」

諭されて頭が冷えたのか、一夏の声も冷静さを取り戻す。
しかし、部屋には何とも言えない空気が漂っていき……

「あるわよ、方法。」

――そんな空気の中、聞き覚えのある女の声が、部屋に響いた。

◆

「…私。そっちから、海上の熱源反応を調べてほしい。
…うん、紅也がやられた。だから、お願い。力を貸して。

――私は、あいつらを許さない。任務なんて関係ない。
アレを倒して、強さを証明する。紅也が安心できるように。
…前もそうだった。私が強いって分かれば、紅也は必ず帰ってくる……。」

第６４話　レッドフレーム（後書き）

龍夜Ｍｋ２さん、いつも感想ありがとうございます。

次回は、第二ラウンドの予定です。

今回の話で分かりにくいところがあったら、いずれ改稿します。どんどん指摘してください。

でも……優しくしてね。

第６５話　「そして時は動き出す！」（前書き）

お待たせしました、６５話です。
最近、話を書けません。ポケモンＨＧにハマりだしちゃって……。
どうでもいいですね、はい。

第65話　「そして時は動き出す！」

太陽がさんさんと照りつける、真夏の砂浜。気がついたら、私はそこに立っていた。
周りには誰もいない。こんなにもいい天気なのに、誰一人。
それはそうだろう。
ここは、軍の敷地内なのだから。

「じゃあな、行ってくる。」

誰もいないはずだった、灼熱の砂浜。
いきなり聞こえたその声に驚き振り向いた私は、気がついたら空港にいた。
そして――

目の前には、小さい私が立っていた。

「待って！どうして行っちゃうの？」

いや――違う。
私の目線を追うように、くるりと後ろを振り返れば、そこには私がもう一人。
そうか……こっちが私で、さっきのが紅也。これは、私の昔の思い出だ。

「どうしてって……俺は、強くなりたいし、世界を見たいんだ。そうしていつか、師匠みたいに、自分の信念ってやつを見つけたい。だから…」
「そんなの、関係ない！何で、一人で行っちゃうの？何でお兄ちゃ

んは、私を置いて行くの！？」
「それは…お前に…強くなって欲しいからだ。」
「強く……？」

そうだ。
これは、つらかった別れの思い出。そして、私の原動力。

「そう、強く。お前も、いつまでも俺と一緒って訳にはいかないからさ。一人でも大丈夫になってほしいんだ。」

あのときの私は弱かった。
一人じゃなんにもできなくて、ずっと紅也の後を歩いてた。
だから、紅也は――お兄ちゃんは、私を置いていったんだ。

「じゃあ……私が強くなったら、お兄ちゃんは帰ってきてくれる？」
「もちろんだ！ただし、その頃には俺ももっと強くなってるからな！」
「じゃあ、約束！」
「ああ、約束だ！」

「紅也！搭乗の時間だ。置いてくぞ～。」
「あ、カンベンしてくださいよ、師匠！」

去っていくお兄ちゃんに、私たちは手を振り続ける。
もう泣き顔じゃない。だって、また会えるから。
私が強くなれば、紅也は帰ってくるから。

SO（だから），I（私は）――

◆

ビーッ！ビーッ！ビーッ！

緊急通信を知らせるブザーの音で、私は意識を覚醒させる。
どうやら、いつの間にか眠ってしまったらしい。こんな状況なのに。
自分で考えてる以上に、紅也の怪我のショックが大きいんだろうか、と自己分析するも、あいにく答えは出そうにない。というか、今はそんなことをしてる場合じゃない。

「…私。」
「《アメノミハシラ》が、日本近海にて不自然な熱源を探知しました。しかし、目視は不可能。推測ですが、ミラージュコロイドを使用した輸送機か何かだと思われます。」
「…そう。座標は？」
「Ｐ（プロト）－０３に転送しました。」
「…ありがとう。」

通信を切る。
なるほど。最初に紅也達が福音と交戦したとき、デュエルがどこから現れたか、ずっと気になってた。
でも、納得。きっともう一人味方がいて、接敵ギリギリまで潜伏してたんだろう。
誘拐に妥当な人数は３人。七実も不承島でそんなことを言ってたっけ。
それはさておき。

ブルーフレームに送られてきた座標を確認する。どうやら慎重に行動してるらしく、まだ遠くへは行ってない。

――今からでも、十分追いつける。

それを確認した私は、紅也の師匠の所へ向かう。

昔、私と紅也を引き離した、あの男の所へ。

確かに、あの男は気にいらない。でも、ＡＳＴＲＡＹを完成させたのはあの男だし、メカニックとしても一流なのは認めてる。

だから、好きとか嫌いとかそういう個人的な感情は全部無視して、頼んだ。

――紅也の力を、使うために。

生徒も教員もいない廊下を、静かに駆け抜ける。

おそらく、福音は見つからないけど、任務は継続中なんだろう。あるいは、Ｎ．Ｇ．Ｉあたりが圧力をかけてるのかもしれない。Ｘナンバーが二機もあったら、当然取り返したいと思うだろうし。エイミーさんとストライクまで駆りだしたんだから……。

「来たな、葵。」

中庭に出るやいなや、あの男の声が聞こえた。

その隣には、直立する私のブルーフレームの姿もある。

「…首尾は？」

「オイオイ、いきなりだな～。

まあ、パーツの規格自体は合ってるからな。装着は済んだぜ。…

…ただし、ＡＳＴＲＡＹの初期バックパックだけは外してある。ビームサーベルは拡張領域から直接呼び出してくれ。」

「…わかった。」

説明を聞きながら、私は新しくなった愛機を眺める。
新しくなった、といってもそこまで大きな改造をしたわけじゃない。
紅也から預かった新型バックパック、タクティカルアームズを装備したのだ。
青い機体が背負う赤い大剣を見ると、紅也の分まで私が戦う、という気持ちがどんどん強くなっていく。

「それと、紅也がシールドを壊しちまったから、持ってたＰＳ装甲材で代わりのシールドを作っておいた。いいか！レアモノだから、絶対壊すなよ！」
「善処する。…ありがとう。」

ブルーフレームに触れると、装甲が光となって、一瞬で私に装着される。
違和感は全くない。タクティカルアームズは、まるで最初からこの機体のものであったかのように、自然になじんでいた。
軽く上昇すると、バックパックが火を吹き、思ったよりも速く空に近づく。
その感覚に心地よさを覚えながら、私は例の地点へ、全速力で向かうのだった……。

＊

その一時間前……

〈ｓｉｄｅ：織斑先生の部屋の人々〉

「あるわよ、方法。」

葵たちが退室した後、突如響いた声。話を聞かれていたことよりも、女が言った言葉の方に動揺した一夏たちは、声の主を探してきょろきょろと視線をさまよわせる。

「ど、どこにいるんだ？見つからねぇぞ。」

「そりゃそうよ。部屋の外にいるんですもの。……入っていいかしら？」

一夏の言葉に突っ込みを入れた声の主は、そうことわってからドアをノックした。

「あ……どうぞ。」

その丁寧な物腰に、思わず敬語になってしまう一夏は、どこか滑稽である。

さて、こうして入室したその女は、あのストライクの操縦者、エイミーだった。

「……で、何の話をしてたのかしら？」

「あなた、絶対聞いてましたわよねぇ！？」

すっとぼけるエイミーに対して怒涛の突っ込みを入れたのは、今日も絶好調のセシリアだ。きっと、束に無視されたことや作戦からハブられたうっぷんが、全てツッコミ力（パワー）に転化されたんだろう。

「私が聞いたのは、Xナンバー2機が消えた、って話から後だけよ。それより前の、不抜けたセリフなんか聞いてない。……で、まず聞きたいんだけど、あなたたちはどうしたいの？」

そう言ってから、エイミーは皆の顔を見渡す。誰もが『行きたいけど、行っても役に立たない…』とでも言いたげな顔で悩んでいるが、一人だけ。真っ先に手を上げた者がいた。

「私は行く。紅也が怪我をしたのは、私が至らなかったせいだ。次は……絶対に負けない。なんとしても奴を……奴らを倒してやる。」

俯いていた顔を上げ、拳を作って宣言したのは、なんと箒であった。先程までの混乱は既に無く、その目には再び炎が灯っていた。彼女は思ったのだ。奴らを倒すことこそが、紅也に報いることに繋がると。そうでもしなければ、紅也に借りを返すことはできないと。

「そうだよな！俺も行くぜ。
このままじゃ終われねぇ……終われねぇんだ！」

続いて一夏が参戦を宣言する。元々、彼はリベンジに乗り気であった。敵の居場所が分かるのであれば、当然飛び出していくだろう。
そして――

「では、わたくしも参りましょう。たとえ攻撃が聞かなくとも、牽制くらいはできますわ！」
「あたしも行くわよ！セシリアばっかにいいカッコさせるわけにはいかないじゃない！」
「僕も。新しく防御用のパッケージが届いてるから、みんなを守ることならできる。」

「攻撃は効かなくとも、ＡＩＣは使える。私も行こう。」
「私にできることは……ない。……でも、紅也くんに怪我させた人達を……許せない。」

セシリアが。
鈴が。
シャルが。
ラウラが。
簪が。

その場にいた全員が、戦う意思を固めたのだ。

「どうやら、みんな、意志は固いみたいね。……後は、アオちゃんね……。」
「葵なら大丈夫だ！きっとすぐに立ち直って、来るに決まってる！」

エイミーが呟いた一言に、一夏が声を大にして反論する。
それは、仲間への信頼の表れか。それとも……

「……来るとか来ないとか、そういう意味じゃないのよ……。」

思案顔で呟いた一言に反応したものは、今度こそ一人もいなかった。

「じゃあ、みんなは準備をしておいてね。私は、織斑さんに作戦の許可を貰いに行くから。」

エイミーが指示を出し、その場は解散となる。

＊

再び現在――

〈ｓｉｄｅ：福音強奪部隊〉

「それにしても……ボロボロだったじゃねぇか、エッジ。」
「いくら2対1だったとはいえ、情けないで。自分。」
「面目ない……。モルゲンレーテの赤はともかく、もう一機の女を見誤っていた。」
「そのことなんだが……あの機体。どこのデータベースにも存在してねェぜ。」
「……！　相違ないか？エフ。」
「ああ。映像を見たが、間違いねェ。それにあの技術……。」
「……エフ？どうしたん？」
「何でもねェよ。」

そう言ってエフは、不快な声で笑い出す。
その声量に顔をしかめるエッジとチョッパー。だが、彼女らは気付かない。

――キュイィィン……

機体後部に固定された福音が、低い音を響かせていたことに。

◆

〈ｓｉｄｅ：花月荘：司令室〉

「山代さん!?何をやってるんですか!戻ってきてくださぁい!」

千冬によって司令室に呼ばれた一夏たちが最初に聞いたのは、葵に呼びかける麻耶の声であった。オープン・チャネルであれば声を出さずとも伝わるのだが……どうやら、それに気づかないほどテンパっているらしい。

「ちふ……織斑先生!何があったんですか?」

皆を代表して、一夏が千冬に声をかける。

「無断出撃だ!山代がここから飛び出した。理由はわからんが、おそらく……」

「奴らの場所をつきとめたのね。モルゲンレーテには、アメノミハシラがあるし。私達と同じく、熱源探知をしたんでしょ。」

それに対して、モニターの方を向いたまま答えたのは千冬とエイミーであった。

二人の表情はうかがえないが、おそらく苦い顔をしているのだろう。声の端々に、そのようなニュアンスが隠れている。

「それで、わたくしたちを招集した理由とは……?」

おそるおそる、といった感じでセシリアが問いかけると、返事はすぐに返ってきた。

「お前たちに命令だ。山代をつれ戻せ。
現状況下での指示は『待機』だ。山代と強奪部隊を交戦させるわけにはいかん。なんとしても、接触前に捕まえろ！」

「わ、わかりました。」

命令違反……下手をすれば、葵の今後に関わる問題だ。しかも、そんなことにも気付けない現在の葵は、明らかに正常な状態ではない。そんな状態でXナンバー2機と交戦したら、おそらく……

最悪の事態を想定して、全員の顔が青ざめる。

「――教官。」

そんな空気の中、ラウラがおもむろに口を開く。普段と違う様子が気になったのか、千冬は「何だ？」と言って続きを促した。

「作戦の詳細を確認したいのですが。万が一……葵と敵が交戦を始めた場合、我々はどうすれば？」

万が一……。果たしてそうだろうか？
仮に、自分たちが葵に追いつけず、戦闘中に遭遇した場合にどうするか。ラウラの聞いていることはそれだった。

「……命令は『山代をつれ戻す』ことだ。それ以上の指示は無い。」

「！　それって……。」

シャルが何かに気付いた。それを皮切りに、全員の表情が明るいものに変わっていく。

「いいんですか？織斑先生？」
「……『万が一』だ。わざと手を抜いたら承知せんぞ！」
「「「「「「「「「はい！！」」」」」」」」」

生徒７人の声が重なった。

「では、私もアオちゃん追跡に加わりましょう。……引率は必要でしょう？」
「そうだな……頼めるか？」
「任せてください。ただし、一つ頼めるかしら？」
「……何だ？」
「私が飛ぶとき、『ストライク発進、どうぞ！』……って言ってくれないかしら？」
「ふざけるな！！」

そんなやりとりの中……

「織斑先生！海上にＩＳの反応が……。」

麻耶が告げたこの情報により、事態は大きく動き出す……。

第６５話　「そして時は動き出す！」（後書き）

と、いうわけで！次話から第二ラウンド開始です。
戦力過剰かな？でもやりましょう。

第６６話　燃えるワン・マン・フォース（前書き）

はい、６６話です。どうにか書けました。

タイトルはまんまパクりです。「ｍａｎ」には「人」って意味もあるので、誤用ではありませんよ？

では、第二回戦を始めます！

第６６話　燃えるワン・マン・フォース

海上に、突如出現したＩＳの反応――それは、強奪された「銀の福音」のものだ。
次いで現れる、二つのコアの反応。それは紛れも無く、デュエルとバスターであった……。

◆

〈ｓｉｄｅ：強奪犯〉

「バカな！再起動やてぇ！？
エッジ！福音は機能停止してたハズやろ？」
「は、はい……。確かに、モルゲンレーテの操縦者が機能を停止させたと。私も確認しました。」
「とにかく、福音は排出（イジェクト）するぜ！このままじゃ機体がヤベェ。」
「構へん！でも、もし裏切ったら……分かっとるな？」
「コイツが爆発するんだろ？忘れちゃねェよ。」
「では、行きます！エフ、ハッチの開放を！」

エッジの声に答え、輸送機の後部ハッチが開く。そして飛び出すエッジとチョッパー。すぐにＩＳを展開し、拘束を解かれた福音へと挑みかかる。

――そのとき、福音に異変が起こった。

◆

〈ｓｉｄｅ：山代　葵〉

タクティカルアームズの性能は、想像以上だった。おかげで、当初の予定よりもはるかに早く、連中に追いつけそうだ。

「連絡です。」

そんな中、唐突に宇宙（ソラ）から通信が届く。私は意識をまだ見ぬ敵へと向けながらも、回線を開いてそれに答える。

「…何？」

「ＩＳコアの起動を確認しました。数は３。うち一機は、福音のものです。」

「…どういうこと？」

「おそらく、Ｐ－０２の攻撃によるシステムダウンから立ち直ったものかと。」

「…そう。」

これは予想通りだ。

先程医務室へ行ったとき、８から光雷球の説明は受けている。

なんでも、ＩＳのシステムを滅茶苦茶にするらしく、その影響でシールドエネルギーが残っていても『ゼロ』に見えるとか。おそらく、敵は福音がもう動かないと思って油断したんだろう。…獲物を前に

舌なめずりなんて、三流のすることだ。

――が、報告は続く。

「その後、福音の形態が変化。おそらく、第二形態移行（セカンド・シフト）と思われます。

――なお、この情報はＩＳ学園にも気付かれたはずです。注意して下さい。」

――ＩＳ学園に気付かれた。

ということは、エイミーさんやみんなが、追撃に出てくるかもしれない。

それは、ちょっと困る。

「…そう。ＩＳ学園に動きがあったら、また連絡して。」

「了解しました。」

通信が切れる。

…さて、情報を整理しよう。

福音の再起動＆第二形態移行により、敵はデュエルとバスターを起動。

ミラージュコロイドで隠れた輸送機は、おそらく逃げただろう。

――と、いうことは。

福音と連携できれば、２対２で戦える。

…とはいえ、相手は敵も味方もなしに暴れるだろう。だから、共闘なんて不可能。

だったら、こちらが利用するまでだ。

作戦を練り直した私は、再び加速して戦闘宙域まで向かう。
レーダーなど必要ない。私が向かう先に、強烈な感情のうねりを感じる。同時に、わずかな殺気も。
殺気が薄い、ということは、やはり目的は福音を再度鹵獲することとみていいだろう。ならば、付け入る隙は多分にある。

――センサーが目標を探知。接敵まで後1分。

そんな表示が、目の前に映しだされる。心が昂るのを感じた。
あと少し……あと少しで、私は力を示せる。
見てて、お兄ちゃん。
私は、強くなったって、教えてあげるから……。

光が見える。緑と白の光が。
その間を縫うように飛んでいるのがデュエル、射程外から砲撃を繰り出してるのがバスターだろう。両方とも私には気づいてるだろうけど、気にする余裕はないはず。

3、2、1……接敵。

私は、その場にいる全員の有効射程距離内に到達した。
目に入るのは、こちらをうかがうかのように顔を上げる福音。映像で見ていた時とは違い、装甲のいたるところから翼が生えたその様子は、やはり異様だ。
おそらく、乱入者――つまり私――の動向を観察している、と言ったところだろう。
ならば、と私は福音に背を向け、デュエルに向けてビームを放つ。
するとデュエルは、あろうことかビームサーベルでビームを弾き、そのまま私の方へと間合いを詰めてきた。

――その勝負、乗ってやろうじゃない。

福音から意識を外し、脚部のナイフシースからアーマーシュナイダーを抜き放つ。

瞬間、敵の心が乱れた。

『そんな鉄の塊でビームと斬り合うのか？』……と、あからさまな嘲りを感じる。

でも、それは隙だ。それも、致命的な。

振り下ろされるデュエルのビームサーベル。私は瞬時加速で距離を詰め、相手の手元に狙いを定める。

そう。ビームサーベルの本体へと……。

そして。

ビームとナイフが交差する。

刃は容易く両断され、消滅した。

「……馬鹿な……。」

その驚愕は、敵のもの。結果は分かりきっていたのだから、私はいちいち驚かない。

即座に敵を蹴り、距離を取る。その瞬間、デュエルのビームサーベルが小爆発を起こした。

「……貴公、何をした？」

それに対する私の返答は、当然無言。

なんで、好き好んで自分の秘密を話さなきゃいけないの？そんなのは、少年漫画の中だけで十分よ。

まあ、種は簡単。このアーマーシュナイダーには、対ビームコーテ

ィングが施してあるのだ。
私は、前からこう思ってた。
シールドは大きすぎて、格闘戦では扱いづらい、と。
だったら格納しておけばいい、とか思っても、相手がビームサーベルを持っている場合はそうはいかない。なぜなら、間合いに入る前に斬られる可能性が高いからだ。

ならば――
武器を楯として使えばいい。

ビームサーベルの一つを破壊した私は、即座に距離を取る。
アーマーシュナイダーでは、ＰＳ装甲に傷はつけられないからだ。
焦らなくていい。敵のビームサーベルは、後一本のはず。
その一本を失えば、格闘戦でのアドバンテージは私のものだ。
……相手が一人だけなら、ね。

「喰らいぃ！」

バスターから放たれる、黄色い閃光。それは数秒前まで私がいた空間を貫いていた。
まだ脅威は去っていない。次に私を襲ったのは、福音から放たれた光の雨だった。
今の一撃は、私とデュエルを同時に狙ったものだろう。いくら私の「優先順位」が低いとはいえ、放置など有り得ない。
右肩のスラスターを吹かし、タクティカルアームズの角度を調節することで、私はアクロバットに回避行動をとる。
ちらり、とデュエルを見ると、残念ながらあちらも回避に成功したようだ。切り落としたビームサーベルの代わりに、新たにビームライフルを装備し、福音に牽制射撃を行っていた。

……え、ビームライフル？
おかしい。
あれは、確かに紅也が破壊したはず……。
まさか……すでに量産されている？
強奪犯風情が、ずいぶんと立派なバックボーンを持ってるのね。

動揺は一瞬で消し去り、それすらも戦意に変える。
福音は、デュエルを狙って攻撃を続行する。ならば、私の狙いはバスターだ。
敵ははるか遠方。ならば、近接武器はふさわしくない。
右手にビームライフル、左手にはバズーカを装備。三機のスラスターをバランスよく吹かしながら、バスターへと高速接近する。

「なっ、速い！？…でも、甘いで！」

バスターは連結した砲塔を分離し、私に向けて腰だめに構えた。左腰の補助アームに接続された高エネルギー収束火線ライフルが、私にめがけて次々と発射される。
…でも、無駄。
ハイパーセンサーで銃口の向きを捉え、手足と翼を動かすことで、速度を落とさずに回避していく。
その一方で、私もバズーカをバスターに向けて発射し、やや遅れてからビームを放つ。
まあ、昔ＶＴ－ＩＳに使った技の改良版だ。バズーカで相手を狙い、回避したらビームに当てる。そんな戦法。
でも、相手はＰＳ装甲機。バズーカを回避しない可能性もある。だから私はバズーカを近接信管で発射し、弾頭も閃光弾にしておいた。
元々、私の本命はビームサーベルだ。ゆえに素早くバズーカを収納し、ビームサーベルを呼び出す。

バスターは、肩のミサイルポッドから3基の小型ミサイルを放ち、バズーカを迎撃した。その間にも私を狙い続けてるんだから、相手はやはり優秀な人間なのだと分かる。

光が炸裂した。

それに驚くバスターだが、すぐに右腰のガンランチャーを光の方へ向け、発砲する。

いい手だ。弾種はおそらく散弾。ＡＳＴＲＡＹの装甲では、おそらく耐えられまい。

格闘戦を諦め、私はビームを発射する。しかしそれが目標に命中することは無く、僅かに下降することで避けられてしまった。

「今のはいい手やったで。やるなぁ、姉ちゃん。」

「…そっちこそ。」

再び放たれるガンランチャー。この間合いでは反撃が難しい。

そう判断した私は一時距離を取り、次のチャンスに備えることにした……のだが。

「はあぁぁぁっ！！」

気合い一閃。

背後から恐ろしいスピードで迫るデュエルの剣技から逃れるため、前進するしかなかった。

しかもデュエルの後方からは、いたるところから光の翼を生やした福音が接近してきていた。

「どや！乱戦に持ち込めば、アンタが不利やで！」

私は未だにバスターの射程内。しかもデュエルはＰＳ装甲でダメージを無視できるため、散弾を気にせず斬りつけてくる。
こういう相手は厄介だ。

近接戦特化、傷つくことを恐れないデュエルと。
中・遠距離専門、味方の被害を考えないバスター。
――少し、まずいかもしれない。

しかも――

「ＩＳ学園に動きあり。ＩＳが出撃してきました。」

タイムリミットが近い。
みんなが来たら、こいつらは撤退してしまう。
それでは、私が命令違反をしてまでここに来た意味が無い。

嫌だ。
それだけは、嫌だ。

「しぶとい、ですね！」

もはや一本だけしかないビームサーベルで、私と打ち合うデュエル。
相手の目的も、おそらくは早期決着だろう。だというのに、その動きにはブレがない。
私もビームサーベルを展開しつつ、バスターへの更なる接近を試みるも、うまくいかない。デュエルの妨害も原因の一つではあるけど、それ以上に厄介なのが福音だ。
さっきから、私たち全員に向けて〈銀の鐘〉と〈銀の祝福〉を斉射してるのだ。狙いは荒くても、これだけの密度の弾幕の中じゃ、うかつに動けない。

……さて、狙うべきはどの機体だろう。

バスター？

……最優先で撃破したいところね。でも、現状では困難。

デュエル？

……いずれエネルギー切れで自滅しそうだけど、その前に私がやられるかも。

福音？

……ダメだ！倒したらこいつらに鹵獲されて、逃げられる！

なら――

覚悟を決め、デュエルに集中する。

武器はビームサーベルとアーマーシュナイダー。変則的なＣＱＣとも呼べる型で、デュエルの懐に飛び込む！

「一騎討ちか！望むところだ！」

敵もナイフの間合いから外れ、ビームサーベルだけが届く距離での格闘戦を挑んでくる。

私はバスターに背を向けないように注意しながら、デュエルを上下左右、様々な場所から斬りつけた。

でも、通らない。

完全にデュエルだけに集中できれば話は別だけど、やっぱり気が散ってしまう。

そして何回斬り合ったか分からないけど、戦いは、唐突に終わりを告げた。

「エッジ！」
「！　了解だッ！」

デュエルはビームサーベルの刃を消し、瞬時加速で離脱した。
そしてデュエルが消えたその先には、再び砲を連結したバスターが……。

「ほな、さいならッ！！」

超高インパルス長射程狙撃ライフルの黄色い火線が、私を射抜かんと発射されていた。
……そう、既に発射されていたのだ。
回避は間にあわない。アーマーシュナイダーじゃ防げない。仮にシールドがあっても防げないのは、すでに紅也が身を持って証明した。
ならば、どうする？
…被害を最小限に抑えるしかない！

仮に直撃を受けても、絶対防御がある限り私は死なない。
でも、ここで気絶なんかしたら、間違いなく私と福音は鹵獲されてしまう。

――そうなれば、もう二度と、紅也達とは会えない。

迫る火線を見つめ、私は肩のスラスターを全力で起動する。
当てるなら足だ。そこなら無くなったとしても、戦闘に支障はない。

光が迫る。
ブルーフレームはまだ動かない。
のろのろと、妙に引き延ばされた時間の中で、私はゆっくりと迫る「脅威」を見つめていた。

――負けたくない！

そう思ったとき、私の目の前に光が出現した。

とっさに、その光に手を伸ばす。しかし、手はゆっくりとしか動かない。

そして――

迫る光（きょうい）と目の前の光（きぼう）が衝突した。

その瞬間、時間の流れは元に戻り、私はとうとう光を掴みとった。

握ったそれは、剣の柄。それは徐々に形を成し、やがて青い刀身が姿を現した。

その瞬間。

私に衝撃が走る。

着弾の衝撃とは違う、電気のような衝撃。

それは全身を駆け巡り、私に力を漲らせた。

――この感覚を、私は知ってる。

初めてブルーフレームを装着したとき、しばらくしてから味わった感覚。

第一次移行と同じ感覚。

ならば、これは……

第二形態移行（セカンド・シフト）。

「なんや……。なんや！その剣は！！」

表情は見えないけど、おそらく驚愕してるであろうバスターの操縦者。

よっぽど、今の一撃に自信があったんだろう。

それはそうだろう。私だって、本気でやられると思った。

でも、現実はどう？

必殺の火線は、あろうことか剣一本に逸らされて、私は無傷。

ねえ、どんな気持ち？今、どんな気持ち？

ああ、気分がいい。力がみなぎってくる。

この力をくれたきっかけになってくれた貴女に感謝して、さっきの質問に答えてあげましょう。

「この剣の名前は、タクティカルアームズ。最高の技術者が作った、最高の剣よ！！」

――戦いは、これからだ。

第67話　actress again

「ハァァッ！」

切っ先をバスターに向け、私は今や自分のモノとなったタクティカルアームズにエネルギーを送る。するとタクティカルアームズに搭載されたスラスターが全力で稼働し、私は青い流星となってバスターに接近した。

「！　速い！！」

とっさにガンランチャーを構えたバスターだったが、反応は遅れ、刺突を直撃した。

勢いのままに吹き飛ぶバスター。しかし、姿勢制御スラスターを使ってすぐに姿勢を立て直し、再び二門の砲を構えた。

「……ハッ、ハハハハハ！！なんや！この程度かいな！」

ひどく耳障りな大声が、私の脳を刺激する。

「どうしました、チョッパー？……まさか、とうとう頭がおかしく……」

「『とうとう』って何や！しばくで、自分！

……姉ちゃん。その剣、実体剣やな？」

「…それが何？」

そう返答すると、バスターは肩をすくめるような動作をし、その後私に人差し指を向け、言った。

「つまり、その剣ではワイらには傷一つつけられへんってことや！」

……何だ。本当にそれだけか。

甘い、甘すぎる。

確かに、タクティカルアームズでは、ＰＳ装甲を傷つけることはできない。

でも、エネルギーを減らすことはできる。

なぜなら、ＰＳ装甲に想定以上のダメージが加わると、ＩＳは一時的に装甲強度を上げるために、更なるエネルギーをつぎ込むからだ。

そうして行きつく先は一つ――フェイズシフト・ダウン。

この剣の破壊力があれば、十分にそれを狙える！

「……とか、思っとるんやろうな。でも、無駄やで。」

敵がいきなり呟いたのと同時に、バスターのシールドエネルギーが回復していく。

先程までの消耗が嘘のように、あっという間に。

「……一体……？」

思わず口から出たのは、そんな言葉だった。

「簡単なことや。コイツの拡張領域には、追加のエネルギーパックが満載されてるんや。それも、〈ストライカーパック〉とは比較にならんほどの、なぁ！」

再び始まる砲撃。

…そうか。

妙だとは思ってた。

紅也と交戦してエネルギー切れ間近のデュエルが、なぜ復活したのか。
おそらく、輸送機の中でエネルギーを補給したんだろう。
……面倒臭い。

ならば、バスターにエネルギー切れを期待しない方がいい。
デュエルは……どうだろう？さすがに戦闘中の補給は無理だと思うけど、分からない。
ならば、決め手はビームサーベル。でも、タクティカルアームズの防御力がないと、接近戦は厳しい。

「私もいるぞッ！」

デュエルの言葉で、一旦意識を切り替える。
タクティカルアームズをフライトモードに変形させ、ＰＩＣを使って背中に固定。
第二形態移行を経て非固定浮遊部位へと変化したそれは、私が意識を向けるだけで瞬時加速を発動した。

両手に構えたのはビームサーベル。不意打ち同然でデュエルの懐に飛び込み、振りかぶられたビームサーベルを横に逸らす。
そのままもう一本で胴体を切ろうとした時、邪魔が入った。福音が攻撃を再開したのだ。
慌ててデュエルから距離を取るも、〈銀の鐘〉の爆発の余波で左手のビームサーベルの刃が消えてしまった。動作不良だろうか？
そして再び接近するデュエルと、砲撃するバスター。そして全体を爆撃する福音という、さっきと同じ状態にまで戻されてしまった。
違うのは、私の機動性。第二形態移行によってタクティカルアームズが最適化されたため、敵の攻撃をだいぶ楽に回避できるようになった。

そうはいっても、このままじゃジリ貧だ。何か、状況を打破する一手が欲しい。

――力が欲しいか？

ドクン！

不意に、そんな声が聞こえた。

外から、ではない。私の内面――いや、ブルーフレームから、確かにそんな声が聞こえたのだ。

――俺の力が必要か？

まただ。

聞き覚えのない、男の声。でも、どこかで聞いたことがあるような気がする。そんな矛盾。

――私、は……

返事をしようとしたそのとき。

「イィィィヤッホォォォォウ！！」

やたらとハイテンションな女の声が、戦場に響き渡った。

「増援！？」

「マズイ……アレは……」

「「ストライク！！」」

センサーが映し出した、トリコロールの機体・エールストライクは、ものすごい速度で私たちに接近すると、勢いそのままバスターを蹴

り飛ばし、海面へと叩きつけた。

「私、見☆参！アオちゃん、大丈夫？」

「……ちっ。」

「何故舌打ち！？」

やってきたのは、エイミーさん。私とデュエルの間に滞空し、ビームライフルを構えている。

……正直、あまり来て欲しくは無かった。

必要なのは、『私一人で』Ｘナンバーを鹵獲した、という結果だったから。

彼女個人のことは嫌いじゃないけど、Ｎ．Ｇ．Ｉの彼女の助けは、正直借りたくなかった。

「まあいいわ。

アオちゃん、手伝って！私たちが来たから、アイツらすぐに逃げちゃうわよ。」

「それが分かってるのに……。……たち？」

ふと漏らした一言に違和感を覚えた私は、アメノミハシラからのデータを参照する。

すると、やはりというかなんというか、いつものメンバーが全員来ていた。

……いないのは、紅也だけだ。

「今日こそ落とさせてもらうぞ、ストライクっ！！」

ストライクの登場から立ち直ったデュエルが、すぐにビームサーベルで襲いかかってくる。

「じゃ、私は手負いのデュエルを相手するから、アオちゃんは無傷のバスターをお願いね。……これなら、あなたたちの顔も立つでしょ？」

そう言い残して、エイミーさんはビームサーベルを引きぬき、そのままデュエルに格闘戦を挑みに行った。

…まったく、余計な気を回してくれちゃって……。

私に一斉射撃をしてくる福音から逃れながら、私はバスターの位置を確認する。

……下から熱源反応！？

その場で急停止し、目の前から空へと昇っていく光の柱を回避する。

「ちぃっ、外したか！」

海にぽっかりと空いた穴から、バスターが飛び出してきた。

当たり前なのだが、蹴りのダメージは全くないみたい。でも、足蹴にされたことでイラついたのか、攻撃自体はかなり雑だ。

……エイミーさん、ここまで狙ったのかな？

ううん、多分天然だよね。

火線をかわされたバスターは、続いて両肩のミサイルポッドを開放し、１２発のミサイルを同時発射してくる。そして同時に腰の二丁を連結し、私に向けて構えた。

今度はガンランチャーを前に。高エネルギー収束火線ライフルを後ろに。

先程までとは違うその形態は、対装甲散弾砲と呼ばれる、近・中距離砲撃形態だった。

このままつっこむのはまずい。でも、逃げるにしてもミサイルが邪魔だ。
さっきの私の攻撃の意趣返しってワケ？ムカつく！
とりあえず迎撃すべく、タクティカルアームズをガトリング形態に変形させ、手元に呼びだしたとき――
背後から、新たなミサイルが１２本飛来した。
１２本はまるで生きているかのように動き回り、バスターの放ったミサイルと正面衝突すると、辺りに爆発の花を咲かせた。
《マイスター、全弾命中です。》
「ありがとう、クリムゾン。」
そして現れたのは、打鉄弐式を纏った簪だった。意外な乱入に驚いたけど、私はすぐに平静を取り戻す。
「ありがとう、簪。私ひとりでも対処できたけど、助かった。」
「……ど、どういたしまして？……ねえ、クリムゾン。あれって……感謝してるってことで、いいの？」
《肯定です。クリエイター曰く、あれがツンデレだとか……》
「消すよ、駄ＡＩ。」
《アイ、マム。》
失礼なＡＩだ。一体、紅也は誰をモデルにしたんだろう。
「…それより、下がって。簪じゃ、有効なダメージは与えられない。」
「その通りやで、ねえちゃん！」
そう言ってバスターが、体を簪の方へと向ける。

そう、体だけを。

「なっ、なんや!?砲が動かん!」
「やはり、ＡＩＣは効くようだな。」
「…ラウラ。」

対装甲散弾砲を空間に縫い付けたのは、ラウラのシュヴァルツェア・レーゲンだった。
私はその好機を逃さず、散弾砲にビームライフルを放つ。しかしそれが直撃する瞬間に、敵は散弾砲を量子化し、ＡＩＣから逃れてしまった。
ビームは、バスターの足の一部をわずかに抉った程度だ。

「ちっ、ならばもう一度……」
「ラウラ。福音をお願い。こいつは……私一人でやる。」
「葵……分かった。お前も行くぞ!」
「……しょうがない。」

簪とラウラが離脱する。福音とは、既に一夏や箒たちが交戦していた。

「ええのか?3対1なら勝てたかもしれへんで?」

バスターは再び砲を実体化させ、今度は分離して私を狙う。
でも、当らない。このくらい、1対1ならなんてことはない。
だから。

「…私一人で十分。」
「ほざけぇ!」

◆

葵とバスターの一騎打ちが始まった頃。
ストライクとデュエルの戦いもまた、苛烈なものとなっていた。

「ストライク！いい加減にしつこいぞ！」
「アンタたちが逃げるからでしょ？まったく……。
私はただ、盗られた物を取り返したいだけ。依頼成功率ほぼ１００％の奪還屋なの。ＯＫ？」
「知るか！」

互いに距離を取り、ビームライフルを撃ち合う。緑の光が互いを目指して飛び交うも、それらはなかなか相手をとらえられずにいた。

「ふっ……やるな！」
「そっちこそ。チンピラにしては十分よ。」
「チンッ……！？許さんぞ、貴様！」

さらにスピードを増していく二機。その様子こそが、互いの技量の高さを証明していた……。

◆

「さて、リベンジさせてもらうぜ、銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）っ！！」

第二形態移行を果たした福音へと、一夏は果敢に飛び込んでいく。
迎え撃つ福音は一夏へとエネルギー翼を伸ばし、その体を抱きしめようとする。

「そう来ると思ったぜ！鈴！」
「命令すんじゃないわよ！くらえっ！」

が、一夏は即座に反転し、刹那、上空から炎の弾丸が雨の如く降り注ぐ。
――そう。鈴の衝撃砲だ。

機能増幅パッケージ、『崩山』を装着した甲龍は、衝撃砲の数を４門に増設し、しかも威力も増幅されていた。
銀の鐘に勝るとも劣らない弾雨。しかし福音は自らの体を光の翼で包み、それを防御する。
直後。
翼から、光の羽根と緑の光が、全方向へと放たれた。

衝撃砲を連射中の鈴に、それを回避するすべはない。
鈴は砲撃を中断するも、回避するそぶりは見せない。
何故か。

「まかせて、鈴！」

そう言って鈴の前に飛び出したのは、シャルのラファール・リヴァイヴ・カスタム?だ。
もちろん、普段のリヴァイヴではない。今の機体には、モルゲンレ

ーテとデュノア社が共同開発した、新型の多機能パッケージが装備されていた。
二枚の実体シールドと、二枚のエネルギーシールドが、鈴へと迫る弾丸をことごとく防御する。
さらに、福音の背後からは先端の尖ったシールドが飛来し、エネルギー翼を切り裂いて本体を切りつけた。さらに、福音の死角となっている足下からは、それと同じ形状をした砲台が、ガトリングを連射している。
――これが、モルゲンレーテが開発した複合武器、シールドソード。タクティカルアームズの原型とでも呼べるこの武器は使い手を選ぶものの、シャルほどのレベルであれば問題なく扱える。

「――いける！箒！」
「はあぁぁぁっ！！」

福音は二枚のシールドソードと鈴に注意を払っているため、一夏と箒は完全にノーマークであった。シャルが短く指示を飛ばすと、彼方から爆発的な推進力で箒が飛び出し、二刀を以って連撃を浴びせ始めた。
一方の福音は、ビームを切り裂くシールドソード相手に守勢に回ることは止め、本来の機動力を活かした戦法に切り替え、迎撃を開始する。赤と緑の光が空中を飛び交い、花火のような絢爛さで辺りを彩る。しかし、数では福音が上なのか、紅椿は徐々に押され始めた。

「ならば、こちらも数でいかせてもらいますわ！」

苛烈な攻撃を続ける福音に対し、箒は一度距離をとった。そのタイミングを狙い、通常装備のセシリアが六機のブルー・ティアーズを放ち、福音を囲むように配置する。
さらに鈴、シャル、箒も各々の武器を構え、一斉射撃を行った。

「……！！」

とっさにエネルギー翼で体を覆うも、既に手遅れ。衝撃を受け切れなかった福音が大きく体勢を崩した。

そこへ――

「らあぁぁぁっ！！」

瞬時加速を使用した一夏が、刹那の隙に肉迫した。

すでに雪片弐型の刀身は、あふれんばかりの輝きを放っている。

そして。

刃が、届いた。

「キアアアアア……！！」

獣の如く叫び声を上げ、福音は海面へと落下する。が、すぐに体勢を立て直し、無数の翼を発現させて再び飛翔した。

「いける！みんなで戦えば勝てるぞ！！」

その突撃をかわし、一夏がそう宣言する。

それを聞いてか聞かずか、福音は、静かに一夏を睨みつけていた……。

◆

ここは……どこだろう？
日差しが強い。まあ、夏だから当たり前だな。
足が熱い。ついでに、顔も熱い。日差しに加えて砂浜からの照り返しのコンボ。嫌になるぜ。
……って、アレ？俺、こんなに背ぇ低かったっけ？１６０ｃｍくらいはあるはずなんだけどな。

……。
……。
……。

――ちょっと待とうか。

俺、確かさっきまでＸナンバーと戦ってたよな？
そんでもって、左腕にシャレになんないような一撃をくらったハズだよな。
でも、実際の左腕はどうだ？確かに生傷だらけだけど、こんがりキツネ色になってる程度。

……まさか。
俺はまた、死後の世界に来ちまったのか！？
……って、『また』ってなんだ、『また』って。おかしいだろ、俺。

――アレ！？なんか、体が引っ張られる！
ちょ、待て！体が言うことを聞かねぇ！誰か、助けてくれ！

あ、あんなところに人が！おーい、助けて～。
……お、手を振ってくれた。おーい、助けてくれー。
よかった。どうにか伝わったみたいだな。こっちに向かって走って

きた。

ん、待てよ？
こんな訳のわからない世界にいる、俺以外の人間（？）。
よく考えりゃ、そんなのがマトモな奴であるはずがない！！
まさか、死神さん！？
ヤメテー。俺は虚（ホロウ）じゃないよー。鬼神の卵でもないよー。

……あ、なーんだ。葵じゃねぇか。
でも、やっぱり小さいよな？パッと見、１４５ｃｍくらいか？ついでに胸も……ゴホン。冗談だって。だから、そんな目で見ないでくれよ。

『おかえり、紅也。』
『ああ。ただいま、葵。……お兄ちゃん、とは呼んでくれないのか？』
『…うん。子供っぽいから。』
『ハハッ、そっか。』
『…紅也。見せたいものがある。こっちに来て。』
『ん？何だ。…まさか、プレゼントとか？』
『…そう。来て。』

あ、待てよ、葵。今行くから、走るなって。
ホントにいい笑顔で笑うよなぁ。こんな顔で笑ってくれたのは、あの時以来――

……え？

『嬉しいなぁ。迎えに来てくれたこともそうだけど、ちゃんと俺がいなくてもここまで来れたってことがな。』

『…当然。』

待て。

『良かった。葵も、ちゃんと強くなったんだな。』

『うん。』

行くな。

『……で？どこまで走るんだ？』

『…こっち。もうすぐ。』

止まれ。

『ここは……演習場？』

『うん。…紅也。』

扉を開くな。

『ここに……何があるんだ？』

開くな。

『…見ればわかる。』

開くな。開くな。開くな。開くな。

『じゃあ……開けるぜ！』

見るな――――――

『――――な。これは……』

――そこは、地獄だった。

痣だらけで地上に倒れ伏す、モルゲンレーテのＩＳ操縦者たち。

散らばるＩＳの破片。

ひび割れた壁。吹き飛んだ土。

そして、そして――

『紅也。約束通り私は、強くなった……。』

そう告げた葵の笑顔には、一点の曇りも無く――

第68話　私の、たったひとつの望み

『じゃあ……私が強くなったら、お兄ちゃんは帰ってきてくれる？』
『もちろんだ！ただし、その頃には俺ももっと強くなってるからな！』
『じゃあ、約束！』
『ああ、約束だ！』

＊

――葵は、昔から俺にべったりだった。
普通の人間とは違う自分。
それを強く意識しすぎたためか、人の輪に入れず、いつも一人だった。
必然、葵とちゃんと接するのは俺や父さん、母さんだけだったんだ。
特に、同じ存在である俺とは四六時中一緒にいて、俺もそれが嬉しかったから、そのままにしておいた。

気付いたときは、手遅れだった。
葵は一人で物を考えることができず、一人で外に行けず、一人で家にいられない。
そんな子になってた。
この頃、母さんは、モンド・グロッソに向けて世界中を飛び回ってたから、家にはほとんどいなかった。父さんもアメノミハシラ開発のほうにかかりきりで、だいたい留守にしてた。

俺達の面倒はモルゲンレーテの人達が見てくれたんだけど、それでも、葵の俺に対する依存度は高いままだった。

だから、考えたんだ。このままじゃ、ダメだって。
そして、中一の夏。
俺は、休学届を出した。

俺がいなくなれば、葵も自立するんじゃないか。
そう考えた俺は、当時モルゲンレーテに入ったばかりの天才技術者と一緒に、旅に出ることを決めたんだ。父さんもよく、『男は旅をするもんだ。俺が若いときもな、シュヴァルツバルドに隠された秘密の実験施設に潜入して……くどくど』とか言ってたし。
それに、旅に出れば、俺の技術や強さも向上するんじゃないか、って思ったんだ。

だから、俺は……

『待って！どうして行っちゃうの？』
『どうしてって……俺は、強くなりたいし、世界を見たいんだ。そうしていつか、師匠みたいに、自分の信念ってやつを見つけたい。だから…』
『そんなの、関係ない！何で、一人で行っちゃうの？何でお兄ちゃんは、私を置いて行くの！？』
『それは…お前に…強くなって欲しいからだ。』

俺が求めたのは、心の強さ。
葵は、俺がいなくても大丈夫なんだ。
葵には無限の可能性がある。それを、俺のせいで潰したくは無かった。
だから、置いていった。

俺は体を。葵は心を。
次に会う時までに、互いに強くなっていよう、と……。
それは――間違いだった。

＊

『紅也。約束通り私は、強くなった……。』
葵の笑顔は、どこまでも自慢げだ。その表情に曇りは無く、罪悪感の欠片も無い。
『…約束、守ってくれた。』
『……やく……そく……？』
『うん。』
――強くなったら、帰ってきてくれるって。
ああ。
俺は、間違えてしまった。
本当は、放っておくんじゃなくて、近くに置いておくべきだったんだ。
ゆっくりゆっくり時間をかけて、葵の自立を促すべきだったんだ。
それが。

俺の、せいで――

葵は、歪んでしまった。

『…ごめんな。』

『…紅也？』

『ごめんな、葵。』

『…何で、泣いてるの？』

一歩、二歩。

俺は葵に歩み寄り、その体を抱きしめる。

『ごめんな。本当に、ごめんな。』

『だから、何で泣いてるの？』

ああ、そんなことも分からないなんて。

もう、あの明るくて、元気いっぱいで、いつも笑顔を浮かべてた葵は、どこにもいないんだ。

俺が……彼女を、殺してしまったんだ。

「ごめんな…葵。あの時、気付いてあげられなくて。」

『ごめ……ん。あおい……。』

『謝ることなんて、ないのに…。』

あの時、俺は決めたんだ。

葵が無くしたものを、少しずつ取り戻していこう、と。

そして、葵が葵を取り戻すまで、ずっとそばで支えてやろう、と。

もう二度と、葵に寂しい思いはさせない、と……。

――そういえば。

また、葵に心配かけちまったなぁ。

ダメなお兄ちゃんだな、本当に。

……これ以上、心配かける訳にはいかねぇよな。

◆

目が覚めた。

目に映るのは、青い空に白い雲。そして、目線がさっきより少し高い。

――そう。

どういうわけか、俺は外に立っていた。

……まあいいや。

体を動かし、両手、両足のチェックをする。感触から判断するに、どうやら五体満足らしい。

らしい、というのは変な表現だけど、仕方が無い。

どういうわけか、自分の体が目に映らないのだ。

でも、触ってみると確かにそこにあるし、動かしてる感じは分かるし……。何なんだ？

とりあえず現状を把握するため、俺は中庭を歩き始めた。ほどなくして窓が見つかったため、俺は部屋の中を覗き込んでみた。

あれは……レッドフレームだ。
ひどい状態だ。両腕はぶっ壊れて、装甲のあちこちにヒビが入ってる。
バックパックは見つからねぇけど、壊れてねぇよな？
脚もボロボロ……。あーあ、こりゃ修理に3カ月以上はかかるだろうなぁ。泣けてくるぜ。

俺は窓から眼を逸らし、今度は作戦司令室を目指す。
そこに行けば、誰かに会えるだろう……と思ってたんだが、どうやら俺は運がいい。
ちょうど、そこに山田先生がいるじゃないか。

《山田先生！》

……が、山田先生は俺を無視して、小走りで司令部の方へと向かっている。
む。その対応は結構イヤだぞ。
意識をこちらに向けるために、俺は地面をダン！と踏み、再び呼びかける。
軽く地響きがしたような気がしたんだけど……気のせいかな。

《山田先生！みんなは……葵はどこに！？》
「えっ！？今のは……あ。あわわわわっ！？」

そう言って山田先生は俺の後方――空を指す。

《あっちですね！わかりました！じゃ、行ってきます！！》

そして、俺は――

静かに、飛び立った。

◆

怒り狂った福音は、一夏に狙いを定め、超高速で突撃する。
しかし、その動きは唐突に停止し、一夏にはまんまと逃げられてしまった。

「ふん。動きが単調すぎるのだ。」

その現象の正体はＡＩＣ。バスターを葵に任せたラウラが、そのまま加勢しに来たのだ。
さらに後方には、簪の姿も見える。これで1対7。いくら第二形態移行した福音といえど、勝てるはずが無い――！

『状況変化。最大攻撃力を使用する。』

――と、思っていた。

福音がその一言を発すると、それまでしならせていた翼を自身へと巻きつけ始めた。
エネルギーによる完全防御。福音は球状になった翼で自身を包み、ＡＩＣを力ずくで引きちぎると、そのまま生徒たちの方へ突撃していった。狙いは――

「シャルロット！行ったぞ！」
「大丈夫！」

そう、シャルだった。
この距離では、一夏も追いつけない。他の面々も、エネルギーシールドを貫通する手立ては無いため、シャルが自力でどうにかするしかないのだ。
が、シャルには手段があった。
二つのシールドソードを手元に戻し、その取っ手を握る。
この武器にはアンチビームコーティングが施されているため、エネルギーシールドを貫通することができるのだ。
二本の巨大剣を構え、福音を迎え撃つシャル。
――が、敵はそこまで甘くはなかった。

シャルと福音が接触する寸前、福音は翼をガバッと開き、球体の中にシャルを閉じ込めた。
そして響く、ナニカが削れる音。
時間にすれば一瞬だったが、一夏たちには永遠のように長く感じた。
ならば――当事者であるシャルにとっては、どれほど永かったのだろうか？

福音の翼が回転しながら一斉に開き、全方位に対してエネルギー弾とビームの嵐を巻き起こす。
シャルを助けるべく接近した一夏たちは、程度の差こそあるものの全員が被弾してしまった。そして、シャルが落ちていく。ＩＳは展開されているものの、あのダメージではもはや戦闘続行は不可能だ。

「くっ……油断した！ゴメン、みんな。先に戻るよ！」

これ以上とどまれば、足手纏いになる。

そう判断したシャルは、即座に戦闘空域を離脱した。

……これで、1対6。

福音は止まらない。

再び自身を光の球へと変えると、次の獲物を求め、恐ろしいスピードで加速していく。

◆

「きゃっ！？……無茶苦茶ね、もう！」

「よく言う！かすりもしてないくせに、なぁ！」

福音の攻撃の余波は、ストライクとデュエルの戦場にまで届いていた。

そのため熾烈な撃ち合いは強制的に中断され、今は両者共に回避に専念していた。しかしそんな中でも、彼女たちはゆっくりと接近し、互いの隙を窺っている。

そして、福音の弾雨が止んだとき――ほぼ同時に間合いを詰めた。

「「はあぁぁぁぁぁ！！」」

声が重なり、剣が重なる。

獲物は互いに一本。しかし……

「くっ……。何だ、その剣は！」

デュエルの剣は、普通のビームサーベルである。問題は、ストライクの方だ。
背中の赤い翼はすでに無く、代わりに、水色のバックパックが装着されていた。
さらに、左肩には追加装甲が。左腕には小さな楯が。そして何より目を引くのが、両手で構えた超大剣である。

「教えてほしい？この剣の名前は、シュゲルトゲベール。最高の開発陣が作った、最高の剣よ！」
「どこかで聞いたようなセリフをっ！」

再びビームサーベルを振るうデュエルであったが、間合いも威力も段違いのシュゲルトゲベールに振り払われ、かなりの距離を吹き飛ばされてしまう。
即座にエイミーは追撃し、体勢を崩したままのデュエルに向け、左腕を向ける。
そして――シールドの先端が分離し、クローのように二つに開く。
これこそ、ソードストライカーに搭載された武装の一つ。ロケットアンカー〈パンツァーアイゼン〉であった。
パンツァーアイゼンはデュエルの体を捕まえ、即座にエイミーの元へと引き寄せる。
デュエルの向かうその先には、ピンク色の光を放つビームの刃が待ち受けている。

絶体絶命……と思われたが、天はエッジに味方した。
唐突に拘束が外れ、ソードストライクが飛びのく。
直後、先程までいた空間を、黄色い光が通過していった。
そう。バスターの砲撃である。

「アオちゃん、何やってんの！」
「ゴメン！」

ソードフォームのタクティカルアームズを構えた、ブルーフレーム第二形態――ブルーフレームセカンドKが、バスターを切りつける。PS装甲が想定外の負荷を受け、一瞬だけ多量のエネルギーが消費される。しかし――

「効かへんで！ワイのバスターには！！」

バスターが持つ予備エネルギーパックにより、すぐに回復されてしまう。
まさに鉄壁。残りのエネルギーパックがいくつあるかは分からないが、チョッパーの口ぶりから察するに、まだまだ余裕なのだろう。
これに対抗するには、葵もビームサーベルを使うしかないのだが……盾のないこの状況で、タクティカルアームズを収納するのは自殺行為だ。
一応、自立砲台として遠隔操作もできるが……葵は、その手の武器を扱ったことが無い。
ぶっつけ本番で試す訳にもいかないので、このままやるしかないのだ。

「どうする？変わろっか？」
「…やれる。」

一瞬、葵とエイミーが背中合わせとなり、言葉をかわす。
初めて会ってから一年も立っていない二人だが、時に敵として、時に味方として何度も戦った二人のコミュニケーションは、これで十分。
再び互いの標的を見据え、目も合わさずに飛んでいく。

◆

〈ｓｉｄｅ：山代　葵〉

エイミーさんに告げたように、私にも策がある。
確かにＰＳ装甲に、タクティカルアームズは効果が薄い。
でも――武器に対しては？
バスターの二つの砲、〈高エネルギー収束火線ライフル〉と〈ガンランチャー〉は、ただの金属。ＰＳ装甲ではないのだ。そして現状、もっとも恐ろしいのは至近距離での対装甲散弾砲。ならば、どちらか一方を破壊、もしくは強奪すれば、ビームが使えるのだ。

でも……足りない。
剣のブースターを使った突撃でも、両肩のスラスターを使った加速でも、紙一重の所で避けられるか、武器を収納されてしまう。

なら、どうするのか……。
決まっている。
もっと速く、接近すればいいだけだ。

現在、バスターは二つの砲を連結せず、別個に放っている。
ならば、恐れることは無い。
タクティカルアームズで刺突の構えをとり、敵の側面に回り込む。
バスターはぐるり、と回転して左の高エネルギー収束火線ライフルを構え、こちらに向ける。

――でも、遅い。

右肩、左肩、タクティカルアームズ。
三基のスラスターに同時にエネルギーを送り――最大になった所でそれらを開放する。

そう。
三重瞬時加速（トリプルイグニッション・ブースト）。

その瞬間、意識が飛びそうになる。
人間の体ではおおよそ耐えきれないような、強烈なGが私を襲う。
でも……私は、ただの人間じゃない。
置き去りになりそうな意識を、意志の力でつなぎとめ、ただひたすらに敵を見据える。

ビームが放たれる。
でも、狙いははるか後方。それこそ、私を捉えきれていない証拠だ。
次いで、上空からビームが放たれる。バスターではない。おそらく、デュエル。
タクティカルアームズ、被弾。でも、これはアンチビームコーティングされてる。ビームライフル程度で壊れないし、体勢が崩れるほどでもない。
実体弾を受けてたら、また違った結果になったかもしれないけど。
バスターは私の狙いに気付いたのだろう。高エネルギー収束火線ライフルを収納しつつ、ガンランチャーでカウンターを狙うつもりのようだ。

でも、遅い。

剣先がスライドし、大剣が割れる。
その中心部から姿を現したのは、ガトリング砲だ。
ためらわず発砲する。狙いをつける暇は無い。
だけど、切っ先は確かにライフルに向けていたのだ。ならば、ガトリングもまたライフルに向かっていく。
機体の加速と発射の加速。それらによって爆発的な加速を得たガトリング弾は、驚異的な破壊力を持っている。

一発。二発。

弾丸がバスター本体と、ライフルに命中する。

三発、四発。

ライフルに弾痕が増える。

五発、六発、七発。

ライフルが消滅し始める。――間にあわない！？

九、十、十一、十二……

全弾命中。しかし、そこまでだった。
ライフルは完全に量子化し、破壊には至らない。

私は減速せずにそのままバスターを追い抜き、ガンランチャーによる追撃をかわす。
くっ……次こそは！

◆

〈ｓｉｄｅ：シャルロット・デュノア〉

うぅ～。全方位に対する完全防御なんて、反則だよ！
モルゲンレーテの設計データの中に似たようなものがあったけど、未完成だったハズだよね？それを実現するなんて……。これが、第二形態移行。

ふう……。一夏、大丈夫かなぁ。
確かに零落白夜は必殺の威力を持ってるけど、福音のあの攻撃も一撃必殺。
先に剣が当たれば一夏の勝ちだけど、翼に包まれたら僕らの負けだ。
一夏が負けたら、打つ手は無い。だから僕も、早く戻って補給しないと。

キィィィィン！！

……な、何！？
今、確かに何かがそばを通ったはずなんだけど、何の反応もない！
まさか……例の『ミラージュ・コロイド』を使うステルス機！？
まずい。今の一夏たちじゃ、絶対手が足りない！
一夏……僕が戻るまで、無事でいてね！

第69話　サーペント・テール

「おおお織斑先生！大変です！！」

やけに慌てた様子の麻耶が作戦司令室に飛び込んできたのは、シャルが撃墜される数分前であった。

「どうした、山田君？何かあったのか？」

空中に浮かぶモニターを睨みながら、声の主には振り返らずに答える千冬。画面の中では、ちょうど一夏の雪片弐型が福音を浅く斬りつけ、海面へと落としていた。

が、麻耶はそんな様子に気づきもせず、早口でまくしたてる。

「あ、ＩＳです！未確認の黒いＩＳが、中庭に！！」

「何だと！？」

今度こそ、千冬は振り返る。

顔を睨みつけられて怯える麻耶であったが、その目は嘘を言っている者の目ではない。

そう判断した千冬は、とにかく事実確認をしようと教師に指示を飛ばそうとした。

が、それは更なる乱入者によって中断される。

「織斑先生！」

「今度は姉ヶ崎教諭か……。何だ？」

息を切らせて入りこんできたのは、養護教諭の姉ヶ崎であった。

姉ヶ崎ははぁ、はぁ、と息を吐き出し、呼吸を落ちつけると、再び

話しだした。

「大変です！山代くんが、山代くんが……昏睡状態に陥りました！」

「何ぃ！？」

それに答えたのは、千冬ではなかった。

声は、彼女の頭上――天井から。

次いでガタン！という音と共に天井の一部が外れると、そこから作業着を着た茶髪の男が飛び出し、そのまま部屋から出ていった。

「……何なんだ、次から次へと……。」

痛む頭を押さえながら呟いた千冬のぼやきは、誰に聞かれることもなかった。

◆

一方、海上での戦闘もまた、変化を見せていた。

シャルを撃墜した福音は、次に脅威度の高い目標へ、狙いを定めたのである。

「このスピードは……」

「……速い！」

翼に包まれた福音は、簪とラウラの方へと突進する。
……が、先程シャルが落とされた折に福音の速さを見ていた二人は、どうにか回避に成功する。攻撃を外した福音は、そのまま彼方へと飛び去っていく。

――いや、果たして『外した』のか。

福音はなおも加速を続け、突如向きを変え、急降下する。
その先には――火花を散らし戦い続ける、バスターとブルーフレームセカンドKが存在していた。
福音は翼の一部を開き、一直線にバスターめがけて突撃する。
そう。
福音は、自らを打倒しうるのは、バスターの超高インパルス長射程狙撃ライフルであると判断し、その排除に動いたのだ。

が、チョッパーはそれに気づいていた。
回避するそぶりを見せないのは、あわよくば葵を巻き込んでやろうとでも考えているからだろうか。福音には目もくれず、中距離を保って交戦を続けていた。
もちろん、葵もそんなことは分かっている。
それでもこの勝負に乗っているのは、バスターに隙が出来るのを待っているためだ。
そう。これはチキンレース。
福音の圧力（プレッシャー）に耐えられなくなった者が敗北する、度胸試しであった。

福音が、両者の間に飛び込む。
そして先ほどと同じように翼を開き、全方位への無差別攻撃を開始した。

それに対する両者の行動は、まさに対極。

チョッパーが選んだのは回避――高度を上げ、弾幕の薄い福音の頭上へと逃げだす。
葵が選んだのは防御――タクティカルアームズを盾に福音に接近する。
そして、福音とブルーフレームセカンドKが接触した瞬間。
福音は、真上へと打ち出された。
葵は、平らに構えたタクティカルアームズを上へと振り抜き、力任せに福音を打ちあげたのだ。

「何やてぇ!?」

チョッパーは、葵の目的は福音の排除だとばかり思っていた。
しかし彼女は福音など無視し、使える駒の一つとして扱った。

一方、バスターに接近した福音もまた、狙いをバスターのみに絞り、攻撃を再開。
翼を開いて突撃し、死の抱擁をすべく高速で接近する。
至近の脅威を排除するためにガンランチャーを取り出すバスターであったが、そこに降りそそぐガトリング弾。
葵に武器を狙われ、福音に本体を狙われ、バスターは窮地に立たされていた。

「チョッパー!……くっ!」
「よそ見してるヒマがあるのかしら?」

エッジが援護に入ろうとするも、エイミーがそれを許さない。
時にシュゲルトゲベールで。時にビームブーメラン〈マイダスメッサー〉で。
たくみに繰り出される攻撃の嵐は、エッジが全身全霊をこめて集中しなければ、とてもさばききれない。

「あー、もう！しゃーないわ！！」

焦れたように叫んだチョッパーは、瞬時加速を使用した。
逃げるためではない。ここから逆転するための賭けに出たのだ。

加速した先にいるのは――ブルーフレーム。
ガトリングを避けながら突撃し、タクティカルアームズをソードフォームに戻す前に距離を詰め、ガンランチャーを発砲。
葵は即座に回避し、被弾こそしなかったものの、チョッパーの姿を一瞬見失う。

――そこに、福音が突撃してきた。

外したガトリング弾の一部が福音の装甲に命中したため、福音はブルーフレームを「敵性存在」と認識してしまったのだ。
前方に翼を展開し、面制圧を行う福音に対し、葵は再びタクティカルアームズの影に隠れる。

「…くっ。こんなことしてる、場合じゃないのに……！」
「なら、私に任せろ！」

葵が呟いた一言。それに答えるかのように箒が現れ、福音に向けて刺突を放った。
現れた真紅のレーザーは翼に阻まれたものの、射撃は止んだ。
その隙を見逃す葵ではない。
フライトフォームに変形させたタクティカルアームズで加速を行い、バスターに追いすがる。今逃げられたら、ここまでの戦い全てが無駄になる。そうなったら、紅也は戻って来ないんじゃないか？そんな思いが、葵の内面を満たしていた。

◆

〈ｓｉｄｅ：山代　葵〉

バスターは、思ったよりも近くにいた。と、いうより、足止めされていた。

「悪いけど、ここから先は……」

「一方通行だっ！」

そう。鈴音と一夏の手によって。

衝撃砲を連射し、バスターの進路を妨害する鈴と、零落白夜を使って格闘戦を挑む一夏。

――零落白夜。

その性質を考えると、確かにＰＳ装甲相手にも有効だろう。

バスターの操縦者にもそれが分かってるのか、間合いに入らせないために二つの砲を連射してる。そのせいか――私には、気付いていない。

ビームライフルを構える。

エネルギー残量をチェック。第二形態移行によって最大値が上がったのか、まだ余裕はある。だから、一撃で射抜くべく、限界までエネルギーを込める。

ピキュゥウン！！

発砲。

私の放ったビームは、人間が知覚できるはずのない速さで飛んでいき――

バスターの左肩を吹き飛ばした。

「ぐぅぅぅぅ！！いつの間に！？」

「待ってたぜ、葵！」

命中したビームがミサイルポッドを誘爆させ、ビームの余波が腕の一部を溶かす。

いくらエネルギーが回復しても、実体ダメージまでは回復しない。

こんな左腕では、両手で巨砲を使うことなんてできないでしょ？

でも、足りない。

きっと、紅也は――

もっと、痛かったに違いない。

だから――

「ありがとう、一夏、鈴音。福音をお願い。」

こいつを、ねじふせる。

「分かったわ。負けんじゃないわよ！」

「葵、頑張れよ！」

そう言い残し、二人は福音の方へと去っていく。

それを見送ることはせず、タクティカルアームズを再びソードフォームに戻し、突撃をかける。バスターもこっちに気付いたみたいだけど……手遅れ。

再び左腕。

むき出しになった左腕を切りつけたことで絶対防御が発動し、敵のエネルギーを大幅に減らす。

まあ、すぐに回復しちゃうんだけど。

それでも――

痛みまでは、消えないでしょ？

「やるなあ、ねえちゃん。今のは……効いたでぇ！」

至近距離から放たれたガンランチャーを、肩のスラスターを使って回転することで回避する。そしてその勢いを殺さないよう、回転しながら右足を突き出し、かかと落としの要領で生身の部分に追撃を行った。

ゴキン。

「がっ……はっ……！！」

散弾の掠める音とは違う、何かが壊れたような音が、私の耳元に響いた。

私は一度距離を取り、バスターを正面から見据える。露出した操縦者の左腕は不自然に「だらり」と垂れ下がり、ぴくりとも動いていない。

「どう？今のも、効いたでしょ？」
「……。」
相手は無言。骨をやられた痛みで、しゃべることもできないのかな？
……だらしない。紅也とは大違いだ。
とりあえず、もういいや。
私の気は晴れた。
――そろそろ、終わらせよう。
ビームサーベルを構え、無抵抗のバスターめがけて突き進む。
敵はノロノロと右手のガンランチャーを構え、私に照準をつける。
その動きには精細さのかけらも無く、完全な悪あがきに見えた。
「紅也の……敵（かたき）ぃ！」
最大出力で振りかぶったビームサーベルの刃が、私の意志に呼応して巨大化する。
あと数秒で刃は届き、敵を完全に葬るだろう。
このとき、私は。
そう確信していた。
「アオちゃん、逃げてぇ！」
響いた声。
これがエイミーさんの発したものだと理解したときには、すべてが遅かった。
ザシュッ！！

私の右手が切り裂かれ、宙を舞う。
絶対防御が発動し、エネルギーが大幅に減少する。
そして、ビームの刃は霧散し、ビームサーベルは海へと落ちていった。

「はあっ、はあっ……。間にあった、な……。」

私とバスターの間に割り込んだのは、満身創痍のデュエルだった。
右足を失い、胴体は斬られ、左腕も肘から先が消失し……それでも、右手に持ったビームサーベルだけは決して放すまいとしている。
そっか……。私は、コレにやられたのか。

「エッジ!?自分、何で……。」
「仲間を助けるのは当然だろう!……そいつをよこせ!!」

バスターに接近したデュエルは、右手を使ってバスターの腰の高エネルギー収束火線ライフルを掴みとり、私に向けて攻撃を開始する。
それはあまりに乱雑で、粗末な反撃だった。
でも、私は回避しきれずに、何発かもらってしまう。

――と、不意に後ろから肩を掴まれ、私はそのまま後退させられた。

「アオちゃん!しっかりして!」

私を引きずっていったのは、エール装備のストライクだった。
ナニカ言ってるようだけど、私には分からない。

傷を受けてしまった……。
強くなった。そう思ってたのに。

何をやってるんだ、私は。
これじゃあ……こんなんじゃ、私は……。

――力が欲しいか？

再び聞こえた、男の声。

力？力って、なんだろう？
決まってる。力は、強さだ。
そして、強くなれば、こいつらを一人で倒せる。
そうすれば、きっと、紅也も戻ってくる。
なら――

（…欲しい。私は、力が、欲しい。）

――そうか。
了解した。その任務、引き受けよう。

そして、私の意識は浮上する。

「来るわよ、アオちゃん！」

エイミーさんの呼びかけで前方を見やれば、そこには砲を連結したバスターとデュエルの姿が。一機では構えられなくなった超高インパルス長射程狙撃ライフルを二機がかりで構え、私たち二人を照準してる。

「こんな奴にぃ！！」

砲口が臨界する。
隣にいたエイミーさんは、私の手を掴み、エールのフルパワーで上昇しようとする。
でも、私はその手を振り払う。

「!?　アオちゃん!」

そしてそのまま姿勢を低くし、三基のスラスターに火をともす。
ビームサーベルは既に無い。ビームライフルでは効果が薄い。
なら、どうするか。

バスター最強の攻撃が放たれる。
でも、私は止まらない。
紙一重、ともいえる距離で砲撃をかわし、光に沿って全力で空を駆け抜ける。

――不思議な感覚だ。

時間が、とてもゆっくり流れてる。
すぐ右側にある光の柱にも触れられそうだし、敵も止まって見える。
違うのは、私だけ。私だけが、この空間を動いてる。
ふと、ブルーフレームに違和感を感じ、体を見てみる。
大きな変化はない。ただ、胸のあたりの装甲に、緑色の蛇のようなマークが刻まれていた。
それを見た瞬間、唐突に理解する。

そうか。

これが、力か。

目の前には、ボロボロのデュエルと、壊れかけのバスターが。
お馬鹿さん。
そこまでやられたんだったら、いっそ逃げればよかったのに。

「命を粗末にする奴は二流だ……。」

ふと、そんな言葉が飛び出す。
バスターは、まだ反応しない。

――これなら、十分狙える。

構えたのは、私が最も多用するナイフ、アーマーシュナイダー。
左手に構えたそれを、バスターの胸のやや下あたりに向け、力を込めて突き刺した。

ずぷり。

アーマーシュナイダーはさほど抵抗も無く目標に刺さった。

――そして、時間が動き出す。

「なっ……。」
「装甲（アーマー）と装甲（アーマー）の継ぎ目を狙ったやてぇ！？」

私が狙ったのは、ＰＳ装甲で覆われていない部分。
ここなら、ビームでなくても十分に破壊できる。

「くっ……。動け！動けっちゅーに！」

バスターの操縦者の声が聞こえてくるが、肝心のバスターは動かな

い。
それは当然だ。
私が狙ったのは、駆動制御系が集中している部分なのだから。

「チョッパー！バスターを解除して下さい！後は私が……」
「…させない！」

左手のエネルギープラグを起動。本来はビームに回すエネルギーを、直接手に纏わせる。
これは、光雷球やプラズマ手刀の応用だ。所詮付け焼刃だから、展開できるのはせいぜい数秒。でも――この距離なら、それで十分。

スラスターを使い、滑るように空中を移動する。
目の前には、デュエルの顔。
そして――

「…蒲公英。」

私はそこに、左手を突き出した。

「な……」

声は、そこで止まる。
放った手刀による突きが、デュエルのフェイスカバーを破壊したのだ。
頭から海面に落ちていくデュエル。
ああ、なんてあっけない。

さて……向こうはどうなったんだろう？
もはや動けないバスターの腕を掴み、私は一夏と鈴音が向かった方

向に目をやる。

正直に言おう。

今、私は完全に油断していた。

慢心は死を呼びよせる。それはついさっき、身をもって知ったばかりだったのに。

至近から、高エネルギー反応。発信源は、機能停止したはずのバスターであった。

「くっ……くははは！最後に勝つのはワイやぁ！！」

叫ぶバスターの操縦者。

エネルギー反応はさらに増幅していく。

これは……間違いない。

コイツは、自爆する気だ。

第７０話　戦場への帰還

一体、飛び始めてからどれほどの時間が経ったんだろう？
さっき、ラファールとすれ違ったから、交戦空域は近いはずだ。
体は……。うん、まだしばらくは大丈夫そうだ。

シャル子が飛んできた方向へ向かい、意識を集中する。すると――
見つけた。
ＩＳが５機、離れた所にもう４機。その近くに２機。今、４機のうち２機が移動した。
……多分、２機っていうのはＸナンバーと葵だろう。もう２機は……コアナンバーから察するに、エイミーさんのストライクと別のＸナンバーか。

なら――まずは、仕留めやすい方を狙わせて貰おうか。
まとまっている７機のＩＳの方へ、俺は飛んでいく。

それは、奇妙な光景だった。
光の繭に包まれたＩＳが、残り６機のＩＳを相手に互格以上の立ち回りを行っているのだ。
よく見ると、６機のＩＳの攻撃は、光の繭――おそらく福音――には一切効いていない。
どうやら、全てがあの光によって弾かれているようだ。

アレは……光波防御帯（アルミューレ・リュミエール）か？まさか、アメリカとイスラエルに先を越されるとはね。

厳密には違うか。
あれは多分、エネルギーを使って翼を形成し、攻撃と防御の両方に

転用できるようにしたんだろう。問題は、それらをまかなうだけのエネルギーがどこにあんのか、っつう話だけど、そこはこの際後回しだ。
重要なのは、アレがエネルギーの塊である、という事実。
ならば……
喰らうまで、だ。

◆

〈ｓｉｄｅ：篠ノ之　箒〉

福音との交戦を再開した私たちだったが、かなり厄介な状況に追い込まれた。
なにせ福音にこちらの攻撃は一切届かず、逆に福音はこちらに一方的な攻撃ができるのだ。
これを、不利と言わずしてなんと言うのか。
しかし、勝機はある。
エネルギーを切り裂く、一夏の零落白夜。あれならば、翼を貫通してダメージを与えられる。後は、シャルロットのようにアンチビームコーティングされた武器があれば対抗できるようだが、あいにく私たちにそんなものは無い。
「やはり、一夏が鍵になるな。」
「そうですわね。スターライトも、インターセプターも効果があり

ませんし。」
「あるいは、エイミーさんや葵の助けを借りるか？」
ラウラ、セシリア、一夏がそれぞれ提案する。
確かに、ビームもエネルギー兵器に対しては有効だろう。でも――
「それでは意味が無い！これは、私たちの任務だ！」
「箒。気持ちはわかるけど……」
鈴の言うことは分かる。でも、心情的に納得できるかと言えば、話は別だ。
私は、力を手に入れた。なのに、それを活かせずに他人任せの戦いをするなど、言語道断だ。最強ではなかったのか？この機体――紅椿は。
「みんなで戦えば勝てる……。勝てるはずなんだ！だから頼む！まだ……諦めないでくれ！！」
これは、私のエゴだ。
でも、旅館を飛び出した時の、全員の思いでもあったはず。
勝利条件は揃っているんだ。ならば、やってやれないことはない！
「箒……。そうだな！ここで諦めたら、男じゃねぇ！」
「少し、弱気になっていましたわね……。」
「そうね。福音だって同じＩＳだもの！」
「……いずれ、限界が……来るはず……。」
「しかし、まずはあの翼をどうにかしなければ……。」
ラウラの指摘に、全員が沈黙する。確かに、あれをどうにかしなければ、一夏以外に出来ることは何も――

《任せろ。》

『!?』

紅椿のモニターの右下に、そんな四文字が表示される。
発信源は不明。でも、私には確信できた。
彼が――やって来たのだ、と。

同時に、福音の背後で雷が迸る。
そして福音を包んでいたエネルギーの翼が消滅し、福音の姿が露わになる。

「これは、一体……。」
「何にせよ、大チャンスよ!」

その言葉を皮切りに、一斉攻撃が始まる。
セシリアが、鈴が、ラウラが、簪が、各々の持つ射撃武装で、一斉に攻撃を開始する。

「キアァァァァ!?」

ところどころから黒煙を上げ、姿勢を崩す福音。
美しかった銀の装甲はすでに黒ずみ、翼は折れ、まさに満身創痍。

でも、まだ動いている。
ならば――トドメをさすのは、私たちの仕事だ。
そう考えると、自分の内側から力が溢れてくる。
そして――紅椿から金色の光があふれ、エネルギーが回復していく。

「行くぞ、一夏。」
「箒！その光は……。」
「話は後だ！手を握れ！」

私は一夏へと手を伸ばし、白式の手を掴む。
すると、光が白式にも移っていく。見ると、やはりというか、エネルギーが回復した。

「！　エネルギーが回復した！？何で！？」
「そんなことはどうでもいい！――行くぞ！」

雨月、空裂を構え、瞬時加速を行う。
隣を見ると、一夏も同様に加速し、零落白夜を発動していた。

福音は、空中に縫い付けられたかのように、その場から動かない。
ＡＩＣだろうか？とにかく……これなら、外さない！

「これで……」
「この一撃で……」
「「私（俺）達の勝ちだ！！」」

刃が、福音の胴体を捉える。
今度は、両方とも直撃だ。福音の装甲が光となっていき、ゆっくりと消滅する。
そして操縦者の姿が露わになり、ゆっくりと落ちていく。

「――ったく、ツメが甘いのよ、ツメが。」

そこへ鈴がすぐさま降下し、意識を失っている操縦者を確保する。

――これで、私の任務は終了だ。

「よし！じゃあ、鈴はその人を連れて先に戻ってくれ。俺は葵たちを……なっ！？」

「どうした、一夏……あれは！？」

一夏とラウラが見たナニカの正体が気にかかった私は、つられて同じ方向を向く。

そこには……バスターの装甲にナイフを突き刺し、手刀でデュエルの頭部を破壊するブルーフレームの姿があった。

「今……消えましたわよね？」

「……うん。」

どうやら私が振り向くまでの間に、決定的な何かが起こったようだ。

何があったのかは分からないが、皆がそれに衝撃を受け、硬直していた。

デュエルが落ちていく。

そして葵がこちらを振り返る。

しかし、バスターだけがまだ動いていた。

装甲を解除し、生身の右腕で葵の腰にがっちりと張り付き、ブルーフレームを拘束する。

そして――

「最後に勝つのはワイやぁ！！」

限界を超えたエネルギーが、バスターのコアからあふれ出す。

攻撃のためではない。これは――自爆のためだ。

「葵！！」

思わず叫び声を上げる。あまりのことに、葵も反応できていない。
助けようにも、この距離からでは間に合わない。
近くにいたはずのストライクも、デュエルを回収するべく海面ギリギリまで下がっていたため、救援は間にあわない。

もうだめだ……と、思わず目を閉じたとき。
バスターの背後の空間が、ゆらり、と動いた。

◆

〈ｓｉｄｅ：山代　葵〉

迂闊だった。
まさか、装甲を解除してまで私を拘束しようとするとは。
たとえ振り払っても、この距離で爆発を受けたら、ただではすまないだろう。

油断した。

ああ、駄目だ。全然ダメだ。
勝利の余韻に浸るのは、勝ちを確認してからにすべきだった。

そんなことも、忘れてたなんて……。

（ゴメン……お兄ちゃん。）

《謝るなよ。お前は、本当によくやった。》

……！？

突然、ブルーフレームのウィンドウに表示された文字列。

それが、暗闇に引きずり込まれかけていた私の意識を、現実世界へと呼び戻した。

そして急激に減衰する、バスターのエネルギー。

見ると、バスターは首を絞められたような格好で空中に浮いており、その周囲の空間には電撃が迸っていた。

「がぁぁぁぁぁっ！！！」

バスターの操縦者の右腕から力が抜ける。

放電現象はなおも続き――やがて、バスターの装甲から色が消えた。

フェイズシフトダウン――つまり、エネルギー切れである。

装甲が光となり、空気に溶けるように消えていく。

そんな中で操縦者だけが、不自然に空中で横たわっていた。

――再び異変が起こる。

空間がゆらり、と動き、何もない空間に手が現れたのだ。

次いで腕が。体が。翼が。脚が。何もなかったはずの空間に出現し、最後に現れた顔が、私を見つめる。

――知っている。

私は、この顔を知っている。

黒い頭部には、ＡＳＴＲＡＹに特有のデュアルアイに加え、第三の目である単眼（モノアイ）が。
装甲は金と黒で彩られ、右腕だけが漆黒。
さらに背後に存在する、悪魔のような一対の翼。

この機体……間違いない。

「ゴールドフレーム……。」
《おっと。今の正式名称はＭＢＦ－Ｐ０１：Ｒｅ　ゴールドフレーム天（アマツ）だ。
……間に合って良かったぜ、葵。》

そして、このしゃべり方。このタイミングの良さ。

「……お兄ちゃん。」

間違いない。紅也が――お兄ちゃんが、来てくれたんだ。

「ふうん……。やっぱりアナタが持ってたのね、右腕。」

そう言いながら上昇してきたのは、デュエルを抱えたエイミーさんだった。
いきなり現れたゴールドフレームに特に動揺したりせず、堂々とした佇まい。
やはり、只者ではないと思い知らされる。

《…なんのことやら。》
「とぼけないで。それ、ブリッツのトリケロスでしょ？何が『戦闘中に破損』よ。」

《ハハハ。これはモルゲンレーテでコピーしたトリケロスです。オリジナルは壊れちゃいました。》
「まったく……。じゃ、そういうことにしておくわ。」
ふふっ……と、笑うエイミーさん。そして――
「……って、コウくん!?意識戻ったの!?」
遅れて叫ぶ。
なんだか、すごく今更な感じだ。
《まあ、訳あって声は出ませんけどね。》
「ふーん、へーえ、ほーう。ま、無事でなによりよ。」
そう言って、再び笑い出すエイミーさん。その姿に、思わず私もつられて……
リイィィィィン!!
笑う前に、何かが飛んできた。
三機が散開する。
これは――レーザー砲!?
照射され続けるレーザーは、デュエルを抱えており、一番動きの鈍いストライクを追う。
そしてすぐに、敵の正体が明らかになった。
それは、前進翼と三面カナードを持ち、規格外の大型エンジンを搭載した、異形の戦闘機。

そう、黒い戦闘機だ。
キャノピーは無く、無数のセンサーとおぼしき光点が存在する機首が上方にせり上がり、そこからレーザーを照射し続けている。

「あれは……ＦＡＬＫＥＮ！？何でこんな所に……。」

驚愕の声を上げるエイミーさん。その声に反応し、デュエルの操縦者の顔が、ぴくりと動いた。

――まずい！

「《エイミーさん！》」

私と紅也が、同時に警告する。
しかしそれも無駄に終わり、いきなり暴れ出したデュエルはストライクを振り払い、漆黒の戦闘機へと接近していった。
そして巧みな機体操作で相対速度を合わせると、そのまま戦闘機とドッキングした。

「！　…逃がさない！」
《オープン・ファイア！》

タクティカルアームズをガトリングフォームにし、攻撃開始。
一方、紅也のゴールドフレームも、トリケロスを構え、ビームによる攻撃を開始した。
でも――当たらない。
ビームは的外れの方向へ飛び、ガトリング弾は不自然に逸れ、かすりもしない。

「葵さん！援護しますわ！」
「逃がさんぞ！」
「……落とす！」

セシリアたちが援護にやってきた。
でも、状況が変わらない。
レーザーは照準が合わず、レールガンも外れ、ミサイルは命中直前であらぬ方向に飛んでいく。

「ならば、接近戦でッ！！」

そう言いながら展開装甲を稼働させ、化け物じみた加速力で追いすがる箒。
敵のスピードも相当速いけど、これなら追いつけそうだ。
……と、思ったとき、敵が後方に向け、何かを発射した。

「……！いけない、逃げて！」

エイミーさんが警告を発するも、箒は止まらない。接近するミサイルを、空裂から発した帯状レーザーで迎撃する。
レーザーは弾頭を切り裂き、そのまま敵へと向かっていく。

でも、私が見れたのはここまでだった。

ミサイルが炸裂する。
そして通常弾頭では考えられないほどの圧倒的な破壊が、箒を包み込んだ。
閃光が紅椿を呑み込み、その姿を隠す。
それと同時に敵の姿もまた、空に溶けるように消えていった……。

第71話　おかえり、をあなたに。

「エッジ、無事か？」

ＦＡＬＫＥＮ内部……。

コックピットに座る男が、機体にドッキングした女に問いかける。

「痛い……。痛い！痛い！痛い！痛いぃぃぃ！！」

対するデュエルの操縦者の返答は、苦悶の叫びのみ。

エッジの顔面では、葵につけられた決して浅くはない傷が、未だに赤い血を流し続けていた。

「そうか。じゃ、急ぐぜ。」

「ぐぅぅぅ……。許さんぞ……ブルーフレェェェム！！」

誰もいない、何もない空間に、復讐者の叫び声が木霊した……。

◆

〈ｓｉｄｅ：山代　葵〉

爆発が止み、光が収まる。

そこにいたのは、紅椿を展開した箒のみ。……つまり、逃げられたのだ。

《箒、無事か!?》

ゴールドフレームから、その場にいる全員に対してメッセージが送られる。それに対し、箒は「あ、ああ……。」と返答し、そのままのろのろとこちらへ戻ってきた。

《とりあえず、減ったエネルギーを回復してやるよ。》

ピロピロリン♪

そんな効果音と共に、ゴールドフレームから紅椿に、エネルギーが譲渡される。

それが一段落したのを見計らって、私はエイミーさんに声をかけた。

「…あれは、何?」

「……。」

「…エイミーさん!」

語気を強め、ストライクに詰め寄る私。

それを静止したのは、成り行きを見守っていたゴールドフレームだった。

《まあ、まずは帰還しようぜ。また逃げられても困るだろ?》

そう言われては、下がるしかない。機体を旅館の方に向け、そのまま加速させる。

「ゴメンね、アオちゃん。向こうに着いたら、必ず話すから……。」

その声を置き去りにし、私は空を駆け抜ける。
こうして、激しかった戦闘は、なんとも後味の悪い結末を迎えた……。

◆

――花月荘

《じゃ、俺は先に戻るぜ。みんな、心配してるだろうしな。》

意味不明な言葉を残し、ゴールドフレームは姿を消した。
……でも、よく考えれば、ゴールドフレームは無人機だ。
きっとミラージュコロイドを使った後、機体の遠隔コントロールを切ったんだろう。

砂浜に着陸し、ＩＳを解除する。
そしてバスターの操縦者を拘束してエイミーさんに預け（すごく嫌な顔をされた）、そのまま旅館の門をくぐった。そして鈴音もまた、気絶した福音の操縦者を医務室に連れていくため、一度別れることとなった。
てっきり織斑先生からのお叱りでもあるかと思ってたけど、意外にも出迎えは一人もいない。しょうがないので、帰還報告、および作戦の詳細を報告するために、私たちは一団となって作戦司令室へと向かった。

「そういえば……」

歩いてるさなか、セシリアがポツリ、と呟く。

「結局、乱入してきたあのＩＳは、何者でしたの？少なくとも、敵ではないようですけど。」

その質問に、私は言葉を詰まらせる。

正直、あのとき何が起こっていたのか、私にだって正確には分からないのだ。

結果、その質問に答えることができる人物はこの場にはおらず、廊下には６人分の足音だけが静かに響く。

「……あれって、ミラージュコロイドだろ？だったら、Ｎ．Ｇ．Ｉの機体じゃないのか？」

沈黙に耐えかねたかのように、一夏が言葉を紡ぐ。

「では、彼女から説明があるだろう。今話していても仕方があるまい。」

ラウラの言葉で、再び沈黙が戻る。

そして廊下には、再び静寂が……

静寂が……

……静かすぎる？

妙なのだ。

扉一枚隔てた先が、作戦司令室だったはず。

なのに、話し声どころか、人の気配すらしない。

「……。」
「……葵さん、勝手に開けたら……！」
簪の咎めるような声を無視し、部屋に入る。
やはり、というかなんというか、中は……
「な……無人！？」
「山田先生も、千冬姉もいないぞ？」
……と、いう感じ。
モニター類は電源が切ってあり、明かりも付いておらず。
人っ子ひとりいない、完全な無人部屋だった。
「みなさん、どちらへ行かれたのでしょう？」
「待て。シャルロットと連絡を取ってみる。」
そう言ってから、オープンチャネルを開くラウラ。
……その手があったか。私もオープンチャネルを開き、情報を聞くことにした。
（シャルロット、今どこにいる？）
（ラウラ！戻ってきたんだ……。）
（司令室に誰もいないのですが、どちらにいらっしゃるかご存じですか？）
（あ……大変なんだ！紅也が……。）
（何！？紅也に何があったんだ！？）
（ちょ、箒、落ちつけ！）
向こうから聞こえるシャルロットの声が、にわかに緊張感を帯びる。

何？
紅也は、意識を取り戻したんじゃないの？
だって、そうじゃなきゃ、ゴールドフレームを動かせるわけが……。

（紅也が、昏睡状態になって……。目を覚まさないんだ！）
（……え？）
（昏睡……？）
（そんな！医師の話では、時間がたてば目覚めると……。）
（とにかく、医務室に来て！みんなそこにいるから！）

通信が切れる。
でも、知りたかったことはわかった。今はそれで十分。

「…行こう。」
「あ、葵！」

一夏たちの声を置き去りにして、私は早々と退室する。
もう、ここに用は無い。早く、紅也の所に行かないと……。

◆

「姉ヶ崎教諭、山代の容体は？」
「変わりません！心拍数も呼吸も正常なのに、なんで意識だけが……。」
「脳波も正常！瞳孔反射も正常です！肉体は回復してるのに……！」

医務室の中の状況は、一変していた。
依然としてレッドフレームを装着したままの紅也の身体からは、様々なコードが伸びてモニターにつながっている。
その周囲では医師やＩＳ学園の教員が慌ただしく動き回り、状況の報告や専門家への連絡などにいそしんでいた。

「！　葵、来たのか。」

そんな中、ひとり取り残されていた男が、私に話しかけてきた。
そう。紅也の師匠である、あの男が。

「…紅也は？」
「心配しなくても、無事……なんだけどな。ちょっと見てくれ。」

そう言ってこいつは、腕に付けた端末を起動する。
そして専用のコードを入力してＡＳＴＲＡＹの回線にアクセスすると、チャット画面のようなものが表示された。

「こいつは、ＡＳＴＲＡＹ専用回線に外部からアクセスするためのモンなんだけどよ。」

言いながら、カチカチとキーボードを叩く。すると、私の中の何かが「繋がった」ような感じがして、頭の中に文字が浮かんできた。

《どうだ？見えてるか？》
「…うん。」

でも、これが何だというのか？

《お、葵。良かった、繋がって。》

「…紅也!?」

先程までとは違う文字。これは、あの男の言葉ではない。

紅也の……言葉だ。

しかし、発信源はレッドフレームではない。このメッセージは、ゴールドフレームから送られてきている。何で?

紅也は、確かにここにいるのに……。

「これは、俺の推測なんだけどよ。」

《何すか、師匠?》

「紅也の意識が、回線を通じて外部に――ゴールドフレームに移ったんじゃねぇのか?」

《そんな、馬鹿な……って言いたいところですけど、そうかもしれません。

なんか、遠隔操作とは感覚が違う、というか。もっと直感的に動かせる感じですね。》

「直感的……?」

違う。

あの動きはもっと、なんていうか……

「人間……みたいだった。」

《……確かに。翼以外は、まるで自分の体みたいに動かせたな。》

「じゃあ、やっぱり意識が戻らない原因は……。」

《ああ、ちょっと待ってくれ。みんな集まってるか?》

「え?うん……。」

《じゃ、戻るわ。回線を逆走すれば、レッドフレームに戻れるはずだしな。》

紅也はあっさりとそう告げる。そして――

「！　意識レベル上昇！昏睡状態から回復しました！」
「ヤマは越えましたね……。後は、目を覚ますのを待つだけです。」
紅也がいる方から、そんな声が聞こえてくる。
…あっさりしすぎじゃない？何で今まで戻らなかったんだろう。
（いやあ、ゴールドフレームをどこに隠すか、迷ってたんだよ。）
いつもの通信と同じ感覚。それが今度は、レッドフレームから発せられていた。
…心配かけさせないでよ、馬鹿。
「先生！紅也は、もう大丈夫なんですか！？」
「意識、戻るんですよね！」
「いつごろ目を覚ましますの？」
「よかったぁ……。本当に、良かった……。」
「うむ、私は信じていたぞ。……あいつも、大丈夫だと言っていたしな。」
「……ボーデヴィッヒさん？」
「ホラ、感動するのはいいけど、葵が困ってるわよ！」
鈴音がそんなことを言うと、みんなの注目が一斉に私に集まる。
…困ってたのは、みんなのせいじゃないんだけど。まあ、せっかくだから言葉に甘えておこう。
未だに眠っている紅也に近づき、むき出しの右手を握る。
出血は止まってるけど、傷だらけの右手。でもそこには、確かに、生きている者だけが持つ“熱”があった。
その感触に安堵しつつ、今度は両手で、紅也の右手を握る。

すると――気のせいじゃない。その手は確かに、握り返された。

「おかえり……紅也。」

そうつぶやくや否や、紅也の全身を覆っていた装甲は解除され、光となって消えていく。

頭部のフェイスカバーが消えて露わになったのは……しっかりと両目を開いた、紅也の顔。

「ただいま、葵。…ついでにみんなも。」

そう言って紅也は右腕一本で体を持ち上げ、起き上がる。

その様子を見た教師はただただ驚き――私たちは、とにかく喜んだ。

「紅也ぁ！心配、したんだぞ！！」

「つーか、俺達はついでかよ。」

「しょうがないんじゃない？紅（ホン）って、超シスコンだし。」

「……なんだか、鈴さんが大人っぽく見えますわ。」

「同感だな。背丈は小さいが。」

「そこの二人、黙ろうか。」

……まあ、すぐにいつものノリに戻っちゃったんだけど。

「紅也……。戻ってきたら意識不明だったから、すごく心配したんだよ？」

「……私、も。すごく、不安だった……。」

「おーう、こんな美少女たちに心配されるなんて。幸せ者ね、コウくん！」

「あ、エイミーさん。戻ってきたんですか。……犯人は？」

…気付かなかった。
いつの間にかエイミーさんが、私たちの環の中に入ってきてたみたい。

「ああ、あの『チョッパー』さんね。ＩＳは回収して、手錠かけて、ついでに脚をコンクリで固めてる最中よ。」
「…ヤクザか。」

コンクリ詰めとか……海に沈める気じゃないでしょうね？
ただでさえ肩が外れてるんだから、この扱いはあまりに非道だと思うんだけど。

「――さて、山代が目覚めたところで、今回の件の報告（言い訳）を聞こうか。」

そんな状況に茶々を入れたのは、忘れた頃にやってきた織斑先生だった。
その言葉を聞いて、私はエイミーさんを見る。……そろそろ、話してもらいたい。あの疑問の、答えを。

「じゃあ、場所を変えましょうか。作戦司令室でいいですね？」
「ああ、構わん。」

それだけ言うと、織斑先生はさっさと歩き始める。
それを追うのは私と紅也とエイミーさん。他の面々も、状況の変化にとまどいつつも、しっかりと着いてくるのであった……。

第７１話　おかえり、をあなたに。（後書き）

さて、福音二回戦はこれにて終了！
次回は、章末恒例のお茶会（ネタバレ）です。

さて、私事ですが、お気に入り登録が３００件を超えました。本当にありがとうございます！お礼といっては何ですが、投稿ペースを二日に一回に変更しました。…ちょっと大変ですが。

いつもならこの辺で外伝を投稿するのですが……実はまだ、一つも書いていません。一応、ＩＦ編ひとつと過去編ふたつを準備中です。気長にお待ちください！

第７２話　男たちのＦＡＬＫＥＮ（前書き）

第７２話。予告通りの説明会ですが……予想以上に長くなった！
分割します。

第７２話　男たちのＦＡＬＫＥＮ

花月荘内、作戦司令室。そこに、私たちは集まっていた。
メンバーは１１人――私と紅也、一夏、箒、セシリア、鈴音、シャルロット、ラウラ、簪、織斑先生。そして、エイミーさん。

「紅也、もう動いても大丈夫なのか？」
「ああ。ただし、左腕には触るなよ。死ぬほど痛いから。いいな、絶対に触るなよ！」
「それって、ネタ振りかしら？」
「違う！違うから手を伸ばすな、鈴音！」

……。

「……えっと、話してもいいかしら？」

何だろう？前回、あんなにシリアスに締めたのに、なんか色々台無しだ。
ここで私が言うべきことは、ただ一つ。

「…紅也、シリアスが台無し。」
「まだそのネタ引っ張ってんの！？」

◆

「…エイミーさん。まずは、あの戦闘機のことを、話してほしい。」

私がそう切り出すと、エイミーさんは椅子に腰かけ、話し始めた。

「アレの正式名称はＡＤＦ－０１、通称ＦＡＬＫＥＮ……。ＩＳ以前にアメリカが開発していた、次世代型の戦闘機よ。」

ＩＳ以前……と、いうことは１０年以上前。

そんな昔に、ＩＳ９機から逃げおおせるような戦闘機が開発されていた……？

「有り得ねえ！そんな昔に、あんな超兵器が開発されてたなんて！」

紅也も同じことを考えたようだ。確かに、有り得ない。あまりに現実離れしてる。

「まあ、落ちついて。もちろん、最初からあんなにハイスペックだった訳じゃないわ。

当初の設計では、レーザーとＣＯＦＦＩＮシステムだけが搭載された試作機だったんだから。」

「ＣＯＦＦＩＮシステム……？」

聞きなれない単語に、ラウラが小さく首をかしげる。その姿は、無垢な子供みたいで可愛い……じゃなくて。

「キャノピーを排除してコックピットを装甲で覆い、機体各所に配置されたセンサーで外部の状況をモニターして、コックピット内の全天球スクリーンに投影するシステムよ。」

「へえ。旧来のコックピットだと後ろや真下は見づらかったから、当時のものとしてはかなり画期的だな。察するに名前の由来は……

コックピットがCOFFIN（カンオケ）みたいになったことか？」

「そんな感じよ。

……続けるわね。アメリカが開発した当時のFALKENのスペックは、さっき話した通り、そこまで高いものじゃなかった。しかもその試作機は“白騎士事件”の時に白騎士にちょっかいかけて中破。……覚えてらっしゃらない、織斑先生？」

「知らんな。」

そういえば、ブリーフィング中に紅也が出ていった後、篠ノ之博士が言ってたっけ。『白騎士の操縦者は織斑千冬だ』…って。でもエイミーさん、その時にはいなかったはずだよね？

「で、では、何でそんな、『あるはずのない』機体が現れましたの？」

「そんなの、決まってるじゃない。もう一機作ったからよ。」

「……もう……一機……？」

セシリアが発した問いに、エイミーさんはさらりと答え、簪が更なる問いを口にする。

「そ。白騎士にFALKENが負けちゃって、ISが世界に広まって。それが女にしか使えないことが分かって。そうして社会は女尊男卑の傾向が日に日に強くなっていった……。

そんな状況が許せない人たちが、ISを打倒するために新しいFALKENを作った……らしいのよ。」

「えーっと……『らしい』っていうのは、どういうことなんですか？」

私が――そしておそらくこの場にいる誰もが聞きたかったことを、シャルロットが尋ねる。

その問いを受けて、エイミーさんはたっぷり十秒ほど考えてから、
「まあ、いいか。」と前置きをして、再び話し始めた。

「らしい、って言うのはね。この話が噂話に過ぎなかったからよ。新型ＦＡＬＫＥＮの設計データがあったのは本当らしいけど、本体は作られた形跡も無いし、そもそも設計者だって誰なのか分からない。でも……。」

「ＦＡＬＫＥＮは実在した。ならば、技術者たちが技術を持ち逃げしたのだろうな。」

「そんでもって、どっかの国なり組織なりに合流して、機体を完成させた……。気持ちはわからんでもねぇけど、技術者の風上にも置けねぇ奴らだな！」

織斑先生も紅也も、同時に結論に至ったようだ。
特に紅也は、技術を持って逃げた、という行い自体にあからさまな嫌悪感を示している。
……同族嫌悪？

「それで、開発までの経緯は分かったからさ。あれがどのくらい強いのか話してくれませんか？」

そして一夏が、やや焦れたように本題をきりだす。
『開発までの経緯は分かった』って言ってるけど、絶対分かってない。目が泳いでるもん。
一夏って、歴史とか苦手なタイプだよね、多分。

「うーん、映像を見返した限り、目についた装備は４つね。
まず一つ目。初期型にも装備されてたＴＬＳ……つまり、レーザー砲ね。もっとも、威力は桁違いに上がってたけど。セシリアちゃんのスターライトくらいはあるんじゃないかしら？もしかしたら、

同じ技術で作られてるのかもね。」
「！　ま、まさか……。でも、いえ、そんなハズは……。」
エイミーさんが漏らした言葉で、セシリアの態度が急におかしくなった。
でも、そんなことはお構いなしに、話は続く。
「で、二つ目。ＭＰＢＭっていう、多用途炸裂弾頭ミサイルよ。アイツが逃げるときに撃ってきたやつ。」
「あれ、ですか……。ただの戦闘機が持つ武器にしては、恐ろしく高威力でした。満タンだった紅椿のシールドエネルギーも、一瞬で二桁まで減らされてしまいましたし……。」
「むしろそれだけで済んだＩＳって兵器が規格外なのよ。あれって本来、普通サイズの軍基地程度だったら一発で破壊できるくらいの威力があるんだから。……だから『逃げて』って言ったのに。」
「うっ……。」
ジト目で睨むエイミーさんに怯えたのか、それともあまりの威力に愕然としたのか、箒がたじろぐ。心なしか、額からはタラタラと冷や汗がたれているようにも見える。
「次はＥＣＭＰ。……これが一番厄介なのよね。」
「厄介！？あのミサイルより強力な武器が、あの戦闘機に積んであるんですか！？」
鈴音が驚愕するのも分かる。一番目がＩＳ武装と同じ威力のレーザー。二番目が基地一つを易々と灰にするミサイル。…と来れば、次は核が来てもおかしくない。
…でも、エイミーさんは首を横に振った。

「ＥＣＭＰは武器じゃないわ。超強力なＥＣＭポッドよ。あれが逃げたとき、射撃武器が一切当たらなかったでしょ？ＥＣＭＰが発動してる限り、現行の照準・誘導システムの全てが妨害される……。」

その言葉に思い当たる節があり、私は思わず顔をしかめる。

私と紅也の射撃も、セシリアのレーザーも、ラウラのレールガンも、簪のミサイルも、あれにはかすりもしなかった。なら、私たちじゃあ勝てない――？

「待ってくれ！たかがＥＣＭ程度で、あんな結果になるわけがない！」

ネガティブな思考に陥りかけた私たちを、紅也の一言が現実に引きずり戻した。

「簪。打鉄弐式の戦闘ログを、モニターに表示してくれ。」

「……わかった。」

言うが早いか簪は打鉄弐式を展開し、モニターと機体とをコードでつなぐ。

そしてモニターに〈ＣＯＮＮＥＣＴ〉の表示が出ると、先程の戦闘の映像が表示される。

ちょうど、私のガトリングが外れ、簪がミサイルを撃つシーン。１６発のミサイルが別々の軌道を描いてＦＡＬＫＥＮへと襲いかかり……不自然に軌道が逸れ、爆発した。

「クリムゾン！ここでストップだ。もう一度再生してくれ。スローでな。」

《了解、クリエイター。》

映像が巻き戻される。爆発したミサイルが元の形に戻り、バックして再びＦＡＬＫＥＮのそばへ近づいていく。そして映像は再び停止し、今度はゆっくりと再生され始めた。

「よし。ここに、ミサイルのコントロール時の観測データと、入力した軌道データ、それから空間そのもののデータを重ねて表示するんだ。」

《ラージャ。》

ウィンドウ端の文字が消えると、映像に線が入る。これが、ミサイルの軌道データなのだろう。

さらに画面が分割され、小さなウィンドウが二つ増える。そこに表示されたのは、ＦＡＬＫＥＮの立体模型と、座標軸のようなもの。

「まず、これがマルチロックミサイル〈山嵐〉の軌道。４発が敵機正面に回り込み、２発が後部エンジン。残りの１０発が胴体と主翼を狙うコースだ。……で。」

どこからか取り出した指し棒で、紅也が座標軸の書かれたウィンドウを叩く。するとその画面が拡大され、原点のところにＦＡＬＫＥＮの立体模型が表示された。

「これが、ミサイルに搭載された小型センサーで捉えた、ＦＡＬＫＥＮの立体像だ。

……分かるか？センサーは、正確にＦＡＬＫＥＮを捕捉している。」

「！　確かにその通りね……。これは、ＥＣＭＰの影響を受けてない。」

エイミーさんが驚愕の表情を浮かべる。他のみんなも同じような感じの表情だろう。
私はというと……見えないから分からないけど、多分、緩んだ表情をしてるに違いない。
だって、こんなふうに生き生きと解説してる紅也をまた見れて、すごく嬉しいから。

「でも、ミサイルは……外れた！」

映像が進み、ミサイルの軌道が逸れたところで一時停止する。

「そのときのＦＡＬＫＥＮの周囲の空間データが……これだ！」

別の小さいウィンドウが拡大される。見たところ、空気の流れを示したデータのようだけど……どこかおかしい。
そして、それに一番早く気付いたのは――鈴音だった。

「え！？この空間圧……。ひょっとして、衝撃砲！？」
「ピンポーン！ほぼ正解だ！」

そう言ってから紅也はモニターに近づき、投影されたキーボードに何かを入力していく。
…何で８を使わないんだろう？

――いや、そもそも８はどこにあるの？少なくとも、今の紅也は持ってないし……。

考えている間に画面が切り替わり、ディスプレイに二つの映像が投影される。
一つは、さっきまで表示していた空間データ。もう一つは、新たに

表示された甲龍の衝撃砲のデータだ。

「似ているな。」

「ええ、そっくりですわ。」

まさにその通り。

ＦＡＬＫＥＮ周囲に生じていた不自然な空間圧は、衝撃砲の砲身形成時の空間圧とほぼ同じだった。

「なるほど……。ＥＣＭによるシステム面の防御と、この異常な圧力による物理防御。それが、先程の違和感の正体か。」

「それだけじゃないですね。この異常な高圧力は、あちらこちらに生じています。おそらく、それによって風を操作し、軌道をずらしたんでしょう。

でも……こんなのまともな人間じゃ、まず使わない……。」

映像は続く。

直撃こそしなかったけど、爆風にあおられるＦＡＬＫＥＮ。一歩間違えば、あっさり大破してただろうことは想像に難くない。

そこで紅也は映像を止め、回線を切断した。

「……つまり、これはただのＥＣＭじゃねぇ。ＩＳの技術をも取り込んで作られた、最強の盾だ。」

「そうみたいね……。」

紅也とエイミーさんが俯き、互いに無言になる。

その雰囲気に呑まれたのか、誰一人口を挟まず、部屋全体が沈黙に呑まれていく。

…はあ。こういう空気、あんまり好きじゃないんだけど。

「…最後の一つは？」

空気を変えるべく、私は新たな問いを投げかける。

まあ、見当はついてるんだけどね。

「…４つ目の兵装は、ミラージュコロイドよ。最後に機体が消えたのは、これが原因だと思うわ。今思えば、デュエルやバスターを運んでた輸送機ってのも、この機体だったのかもね。」

「なるほど……。機体に兵員輸送コンテナとかを外付けしたんだろうね。」

「おそらく、な……。」

……。

再び沈黙。

「……圧倒的だな。」

「……ええ。」

一夏とセシリアが、疲れたような調子で呟く。

「…同感。こんなの、射撃じゃ仕留められない。」

「しかも、格闘戦を挑もうにも、あのミサイルがある。……ままならないな。」

「――いや、そうでもないわよ。」

弱気になる私と箒に対し、そう呟いたのは、なんと鈴音だった。

「…何か、手があるの？」

そう言った私に対し、鈴音は無い胸を逸らすと、人差し指を立ててこう言った。

「いくら空気のバリアーを作ったって、衝撃までは消せないわ。だから、こっちも大火力で応戦するか、爆弾が撃てない距離まで近づけばいいのよ。だって、もしそんな至近距離でアレを使ったら、あいつもタダじゃ済まないはずよ。」

どうだ！とでも言わんばかりに自慢げな鈴音。

確かに、有効な対策だろう。弾道をどの程度逸らせるかは知らないけど、逸らせる範囲以上の爆風なら、ダメージは通る……！

「だが、相手は姿を消すのだろう？逃げに徹したらどうする気だ？」

「う……それは……。」

ラウラの指摘により、鈴音の声から自信が失われていく。

――が、ここで意外な意見が飛び出した。

「……逃げられたら……追わなきゃ、いい……。」

「なんだと？」

意味のわからない主張をしだした簪に、ラウラがいらだった声を上げる。

多分、見逃すとかそういうのが嫌なんだろう。もちろん、私も嫌だ。

でも……簪が言おうとしてることは、多分そんなことじゃないと思う。

「面白いことを言うわね、更識のお嬢さん。聞かせてくれるかしら？」

「私たちは……アレが逃げたら、対処できない……。でも、アレも……私たちは……倒せない。」
「うん、それもそうね。」
「正面切って戦えば、凰の言ったような戦術でどうにでもできるからな。」
「だから……カウンター。攻められたとき、倒す……。」
「――だってよ、ラウラ。」

簪の言葉を受けて、紅也がラウラに意見を求める。

「なるほど……悪くは無いな。」

どうやらラウラも納得したみたい。……なら、もう話すことは無い。この場はここで解散だ。幸い、みんなゴールドフレームのことは忘れてるみたいだし。

「では、この場は解散だ。交戦の報告は後でいい。
……そうだ、山代妹は残れ。まだ無断出撃の言い訳を聞いていないからな。」

……こっちのことも、忘れててくれればよかったのに。

第７２話　男たちのＦＡＬＫＥＮ（後書き）

えー……舌の根も乾かぬうちに申し訳ないんですが……二日に一話は厳しいです。
１１月分だけで終わりですかね？ごめんなさい。…こんなことやってるから、お気に入り登録が減るんだろうなぁ……。

次も説明……の予定です。
そうそう、予告していた外伝を投稿しました。過去編その２です。
エイミーさんと、本編未登場のアノ人が出ます！

第７３話　ファントムペイン（前書き）

私事で更新が遅れてしまい、申し訳ありませんでした。
本日から、更新を再開します。

第73話　ファントムペイン

「……で、何でお前まで残っているんだ、山代兄。」
「そりゃ……この場で話さなきゃいけないことがあるからですよ、織斑先生。」

私だけが呼び止められ、他のみんなは部屋に帰った……はずだったんだけど、紅也だけは残っていた。
この場にいるのは四人――私と紅也、織斑先生とエイミーさん。

「話すこと？……何かしら、コウくん。」
「またまたぁ……。エイミーさんなら、見当ついてるでしょ？……バスター鹵獲の功績について、ですよ。」

そう言って紅也は、たまに浮かべる企み顔で笑う。それを見たエイミーさんも、不敵に笑い……

「そんなの、全部あなたたちにあげるに決まってるじゃない。」
「そうですよね。それが当然の反応だと……へ？全部？」

不敵な表情が一転、間抜けな顔で口を『ぽかーん』と開ける紅也を見て、エイミーさんはケラケラと笑う。その表情は……そう、イタズラを成功させた子供みたいだった。

「全部？ホントに？」
「ホントに。」
「……マジですか？」
「大マジ。これはおねーさんからのご褒美よ。……実際、私がやったことなんてコウくん救出くらいだしね。」

「俺としては、そこを考慮して折半くらいが落とし所だと思ったんですけどね。
…まあ、ありがたくもらっておきます。」
話し合いは一瞬で終了。成果としては紅也の大勝利だけど、エイミーさんに一本とられた形になったわね。
…さて、私としてはここからが本題かしら。
「話はもういいな？では、今回の山代妹の命令違反について、言い訳を聞こうか。」
――命令違反。
あのときの私の行動は、一歩間違えれば作戦全体を破綻させかねなかった。それは分かってる。
実際、無断出撃をしたのは私のエゴであって、そんなのは理由にならない。
じゃあ……どういう結論に持っていくか？
――そんなの、決まってる。
「…私には、Ｘナンバーの鹵獲任務があった。Ｘナンバーが出現した以上、その鹵獲、ないし破壊は全てに対し優先される。」
「……まあ、そう来るだろうな。」
こういう切り返しをすることは、流石に予想されてたみたい。
まあ実際、クラス対抗戦でも同じような理由で介入してたから当然かな。
「だが、私たちはお前をつれ戻すために人員を割き、結果として交戦に巻き込まれ、ＩＳ一機が損傷した。……この責任はどう取るつもりだ？」

ＩＳ一機……シャルロットのリヴァイヴね。

「損傷したＩＳの操縦者、シャルロット・デュノアはモルゲンレーテの準社員であり、私達同様Ｘナンバー鹵獲任務を受けていました。その任務中の怪我については、私に責任はありません。また、私の追跡任務は志願制であったと聞いています。…ならば、自己責任では？」

「……そうだな。これならば、お前を罰する必要はないだろう。だが……けじめは必要だ。山代妹にはＩＳ学園に帰還後、すぐに反省文の提出と懲罰用の特別トレーニングを用意してやる。逃げるなよ。」

「…はい。」

さて、これでこの問題は決着だ。ただ…こっちから話さなきゃいけないこともある。

紅也の方を見る。目と目が交差すると、紅也はこくり、と頷き、私の近くに来てくれた。

「…織斑先生。」

「何だ？不服か？ならば――」

「違います。…敵、のことです。」

私の言葉で、空気が一気に張り詰める。

「何？アオちゃん、あいつらの正体分かったの？」

「…ううん。」

エイミーさんの声に対し、私は首を横に振る。

織斑先生も腕を組み、興味深そうに聞いてる。そしてタイミングを

見て、今度は紅也が話し出す。

「ＦＡＬＫＥＮに使われてる技術一つとっても、アメリカ、中国の最先端のものが使われています。……Ｘナンバーを強奪した組織の規模は、思っていたよりも大きいようです。」

「…しかも、敵はビームライフルを量産していました。つまり、それだけ大きな設備を持っているはずです。」

紅也が、私が、交互に自分の意見を語る。それを聞く二人の意見は真剣そのもので、彼女らが事態を正確に把握していることを雄弁に語っていた。

「しかも……現在、奴らの興味は男性操縦者である俺と一夏。そして……情報が漏れれば、箒の紅椿も狙われるでしょう。」

「……何が言いたい。」

ぞくり。

思わず、背中に冷や汗が流れる。

目の前の女性から放たれる威圧感は、それほど凄まじいものだった。

「……近いうちに、また、ＩＳ学園は襲撃されるでしょう。」

そして紅也は、絞り出すような声で予言する。

織斑先生の表情は厳しいままだ。エイミーさんも表情こそ笑顔だけど、目は笑ってない。

「何が、言いたい。」

再び――今度ははっきりと言葉を紡ぐ織斑先生。

威圧感は数段増していた。

喉が渇く。手の平に汗がにじむ。
紅也の顔色も相当悪い。多分、私の前でなければ、とっくに気絶してるんじゃないかな？
でも、倒れてはいない。その双眸はただひたすらに、織斑先生を見据えている。
――それ以上のことは、出来なそうだけど。
じゃあ……私が切り出すしかないか。
「…織斑先生。もう一度現役に戻っていただけませんか？」

◆

〈ｓｉｄｅ：山代　紅也〉

葵が、とうとう本題を切りだした。
……正直、助かった。情けないけど、もう限界だったんだ。
部屋に満ちる緊張感と威圧感で、頭はグラグラ、冷や汗ダラダラ。
麻酔が効いてる筈の右腕が痛み出し、感じるはずのない痛みが左腕を駆け巡る。
８を装着して生体制御を任せてなければ、とっくにぶっ倒れてたに違いない。
だけど――あと少し。

あと少し、我慢しなきゃいけない。

「――無理だな。私は、既に力を失った。」

「力、を……？」

その返答は、俺にとっては半分想定内で――半分は予想外だった。

力……それはつまり、〈暮桜〉のことだろう。てっきり、織斑先生が持っているものだと思っていたが……。どうやら、事態は思っている以上に複雑らしい。

「まさか、あなた……。暮桜を手放したの!?何で……。」

やはりこれは衝撃的な事実だったようで、エイミーさんが織斑先生に詰め寄る。が、先生はそれを無視し、そのまま話を続ける。

「私は、詳しいことを話すことはできない。だから、その疑問には答えられん。」

『話さない』じゃなくて『話せない』、ね。

なーんか、きな臭いね。

「わかりました。ならば、もう聞きません。

……でも、一つ聞かせてください。貴女は……俺達の味方ですか？」

渾身の問い。

現役復帰はしないだろう、と予想していた。おそらく、先生――いや、ブリュンヒルデにも事情があったのだろうから。

だけど、これだけははっきりさせなければいけない。

ＩＳに代わる兵器と成りうる、俺という異端。ＩＳ学園が……いや、

世界が俺を認めないとき、彼女はどう動くのか。
それがはっきりしなければ、俺は……。

◆

〈ｓｉｄｅ：山代　葵〉

会談は終わった。
織斑先生の返答は、保留だった。まあ、織斑先生の立場を考えれば、軽々しく返答は出来ないだろう。
でも織斑先生は、一夏とは敵対しないだろう。そう考えると、紅也が一夏と共にある限り、すぐさま敵になる可能性は非常に低いと考えられる。

「……だといいけどな。」

先程の緊張がまだ抜けきってないのか、紅也の顔は青白い。
…いや、本当に緊張のせいかな？今の紅也は、まるで何かに耐えているような……！

「紅也！」

隣を歩く紅也が、急によろけた。
あわてて肩を貸すと、紅也はつらそうな様子を隠しもせず、身体を預けてきた。

いつもより、はるかに軽く感じるこの身体。おそらくそれは、私の気のせいではないのだろう。

「ああ……やべぇ、麻酔が切れてきた……。くそっ、体中が痛ぇ。お……俺の身体は……モロモロだぁ……。」

「…無理しないで。」

いつものように冗談めかしてごまかそうとしてるけど、どう見ても大丈夫には見えない。

「とりあえず、また医務室に……。」

「ああ、頼む。」

それっきり紅也は口をつぐみ、私も黙って歩き続ける。

コツ、コツ、コツ……

二人分の足音は、やがて――

ズル、ズル、ズル……

何かを引きずる音へと変わり。

「なあ、葵……。」

「…何？」

「左腕が、な。痛いんだ。」

「！　……うん。」

「麻酔も、効いてる気がしないんだ……。」

「……うん。」

「何で、なんだろうな？痛むはずが、ないのに……。」

「……。」
「ははっ。痛覚残留ってか？」
「…笑えない。」
「…そうだな、悪かった。」

◆

「ね、ね、結局何だったの？　教えてよ～」
「……ダメ。機密だから。」

あれから数時間後。私たちは、再び大広間に集合し、夕食をとっていた。
手元のおかずから眼を逸らし、ちら、と騒がしい辺りに視線を向けると、そこには今日の事件の顛末について根掘り葉掘り聞かれているシャルロットの姿があった。

「ちえ～。シャルロットってばお堅いなぁ。」
「あのねえ、聞いたら制約つくんだよ？いいの？」
「あー……それは困るかなぁ。」

流石はシャルロット。話すな、と言われたことは話さない。まさに模範生。

「ねえねえ山代さん。山代君はどうしたの？」
「あ、そうそうー！ラウがー、意識不明になったってー、言ってたんだけどー。」

「……ラウ？」
「えっとねえっとね、ラウラさんのことだよ。ラウラ、だからラウなんだって。私も私も、『美代子』だから『ミヨ』って呼ばれてるんだ。」
……一瞬、白い仮面をつけて「フハハハハ！」とか笑うラウラの姿を幻視した。
ヤバい。似合う。……出自的にはぴったりすぎて笑えないけど。
「…意識は戻った。でも、まだ医務室。」
「え～。やまぴー、だいじょーぶなの～？」
この子は……確か布仏さんだっけ？紅也は、『マスコット』とか言ってたけど。
「…検査入院。夕飯食べられなくて、本気で泣いてた。」
「あ、あはは…。ありえるかもー。」
「そ～だね～。」
そう言って彼女らの話題は、別のことに移っていく。
悲しいほどにいつもの風景。ただここには、紅也だけがいない。
彼女たちには『無事』と言ったが、それは半分嘘だ。
今の紅也は、麻酔でぐっすり眠ってる。だけど、その表情は穏やかで、私は少し安心した。
――今日はいろいろ大変だった。
そして、紅也が言ったように、学園に戻ったらまた新たな騒動が起こるんだろう。
でも、今だけは……。

この平穏を、満喫しよう。

◆

〈ｓｉｄｅ：織斑　一夏〉

夜。

静寂に包まれた夜の海で、波の音だけが耳に届く。

「ふうっ……。」

とんとん、と頭を叩く。耳の中に入り込んだ水のせいで、叩いた振動が頭の中でエコーのように響く。さらに左右に頭を傾けて耳の中の水を抜くと、俺は近くの岩場に腰を下ろした。

そう。俺は今、海に来ていた。

夜の闇を吸い込んだかのように黒く輝く海に、空で輝く満月が光を投げかける。

昼間に大規模な戦闘があったことなど信じられないほど、今のこの海は穏やかだった。

――結局、俺は何をやったんだろうか。

最初はエネルギー切れで離脱した揚句、敵の操縦者に不意をつかれ、拘束された。

そして目覚めてみれば紅也は怪我で意識不明。箒も、あのアメリカの操縦者が来なければやられていたという。
そして二戦目。７機がかりで挑んだ福音には軽々と翻弄され、シャルを撃墜され。とどめは刺したものの、それはあの黒いＩＳがいたからこそ。

……そう言えば、結局、あのＩＳは何だったんだろう？
ＦＡＬＫＥＮについての話が長引いたせいで、完全にうやむやになってたな。

「い、一夏……？」
「うおっ！？」

いきなり名前を呼ばれ、俺は驚いて振り返る。
月明かりに照らされて姿が浮かんだのは、水着姿の箒だった。

「……その反応は傷つくんだが……。」
「あ、ああ、悪い。まさか、人が居るとは思わなくてな。
…そういえば、昨日海で見かけなかったけど――」
「あ、あんまり、見ないで欲しい……。お、落ち着かないから……。」
「す、すまん。」

慌てて身体の向きを元に戻す。
……でも、俺の意識の中には、どうしても箒の姿が浮かんでしまう。
白い、ビキニタイプの水着。縁の方に黒いラインが入ったそれは、箒にしては珍しく、なんというか、セクシーで……って、何を考えてんだ！俺は！

悶々と考えている間に、箒が俺の隣に座った気配がした。

…み、見るなとか言いながら近くに座るなよ！気になるじゃねぇか！

「……。」

「……。」

「え、えーと……だな。」

「……一夏。」

とりあえず、この気まずい雰囲気を払拭するために話を切り出す俺を、箒の声が遮った。

「私は……強くなれるのだろうか？」

「……え？」

箒が口にしたそれは、奇しくも俺がさっきまで考えていたことと同じだった。

「あのとき……紅椿を手に入れたのに、紅也に怪我を負わせてしまった。福音も、紅也が来なければ倒せなかった。敵にも逃げられてしまった。そして何より……奴らは、私を敵とも思ってなかった。」

その言葉に、ハッとする。

確かに、葵やエイミーさん、そして敵の二機の技量は俺達よりもはるかに上のレベルだった。そして――俺達は、それを外から見ていることしかできなかった。せいぜいが足止め役。路傍の石程度の役割。

「全て――私が弱かったせいだ。」

そう告げた箒は、そのまま面を俯かせる。

再びの沈黙。先程までとは違う種類の沈黙に、俺も迂闊に言葉を発

することが出来ない。

「……強く、なりてえなあ。」

「……ああ。」

強くなりたい。葵のように強く。そして、紅也のように、誰かを守れるように。

……いや、紅也のように、じゃダメだな。誰かを守って意識不明だったら、今度は守られた誰かに心配かけることになる。

そう、あの時の箒みたいに……。

「……そうだ。さっきお前、二度目の戦いの時に紅也が来た、って言ったよな。

あの黒いＩＳ……紅也の機体だったのか？」

「わからないが……なんとなくそんな気がしたんだ。あれは、紅也だって。」

うーん、『そんな気がした』って言われてもなあ。

……なんか、面白くねえなぁ。

「……っと、そうだ。――箒。」

「ん？何だ？」

「これ。」

そう言って俺が渡したのは、新しいリボン。この間、シャルと一緒に買い物に行ったときに買ったものだ。

「今日、誕生日だろ？こんなことになっちまって、渡すのが遅れたけど……誕生日おめでとう、箒。」

「一夏……。ありがとう、覚えていてくれたんだな。」

「当たり前だろ？」
「ふふっ……そうか、当たり前か。」

先程までの表情はひっこみ、代わりに笑顔が戻る箒。
……そうだな。俺はみんなにこうやって笑って欲しいから、守りたいんだ。
強くなろう。自分を傷つけず、誰かを守れるように。
闇に響く波の音を聞きながら、俺は改めて決意した……。

◆

〈ｓｉｄｅ：雑種ども〉

「……って、→の言い方！アンタはどこぞの英雄王か！」
「次までに有象無象を間引いておけ、ということだな。それには同感だが……。」
「鈴さん、ラウラさん！何を言ってらっしゃいますの？それに、そんな大声を出したら気付かれてしまいますわ！」
「セシリアも十分五月蠅いよ……。っていうか、ラウラは何でここに？」
「うむ。教官の部屋に行こうと思ったら、一夏が抜け出していたのでな。監視でもしようかと。」
「な、なーんだ、そうなんだ。……良かった。」
「セシリアとシャルロットは……聞くまでも無いわね。…で、どうする？なーんか、いい雰囲気だけど。」
「鈴さんにはそう見えますの？あれは、何というかもっと別の……。

」
「何やら覚悟を決めたような眼をしているな。ああいう所は教官に似ている。」
「うーん……。出て行きづらいなぁ……。」

第73話　ファントムペイン（後書き）

次回、3巻終了です。

第７４話　家政婦は見た！真夜中の密会（前書き）

３巻終了編、第７４話です。
珍しく、冒頭がかなり長くなりました。

第７４話　家政婦は見た！真夜中の密会

「うーん、紅椿（あかつばき）の稼働率は絢爛舞踏（けんらんぶとう）を含めても２９パーセントかぁ……。ちょーっと、予想よりも低いかな。」

空中投影ディスプレイに浮かび上がった各種パラメータを眺めながら、兎は一人、無邪気に微笑む。

その表情は、さながら子供のよう。月明かりに照らされたその顔は、いつもと変わらず、どこか退屈そうだった。

「んー……ん、ん～」

鼻歌を歌いながらディスプレイを操作。すると新たなモニターが表示され、昼間に行われた戦闘の映像が再生される。

「一度は停止した福音の再起動。第二形態移行した青いＩＳ、そしてその単一仕様能力。さらに正体不明の戦闘機かぁ……。ちょっと不確定要素（イレギュラー）が多かったかな。

――そう思わない、ちーちゃん？」

兎は虚空へ言葉を投げかける。それに答えるものは誰ひとりとしていない、と思われたが。

「お前は違うかもしれんがな。全てが思い通りにいくことなど、普通はあり得んさ。」

返事は、岬の背後の森の中から聞こえてきた。

しかし、ふたりは互いの方を向かない。仲が悪いのではない。いちいち顔を合わせる必要が無いほど、互いを知り尽くしているのだ。

「……本当にそうなら、世界はもっと面白いはずだよ。」
「そうかもしれないな。――なあ、束。一つ、たとえ話をしてやろう。」
その一言を聞き、退屈そうだった彼女の表情がわずかに変化する。
「へえ、ちーちゃんが。珍しいねぇ。」
……とはいえ、ほんのわずかな変化。傍目には彼女は、先程までとなんら変わりは無い。
「例えば、とある天才が一人の男子の高校受験場所を意図的に間違わせることができるとする。そこで使われるＩＳを、その時だけ動けるようにする。そうすると、本来男が使えないはずのＩＳが使える、ということになるな。」
「ん～？　でも、それだと継続的に動かないよねぇ。」
「そうだな。お前は、そこまで長い間同じものに手を加えることはしないからな。」
「えへへ。飽きるからね。」
「……で、どうなんだ？　とある天才。」
「どうなんだろうねー。うふふ、実のところ、白式がどうして動くのか、私にもわからないんだよねぇ。いっくんはＩＳ開発とは無関係のはずなのにね。」
「ふん……。まあいい。次のたとえ話だ。」
「多いねぇ。」
「嬉しいだろう？」
「違いないね。」
「とある天才が、大事な妹を晴れ舞台でデビューさせたいと考える。

そこで用意するのは専用機と、そしてどこかのＩＳの暴走事件だ。」

今度は、束は答えない。沈黙し、次の言葉を待つ。

「暴走事件に際して、新型の高性能機を作戦に加える。そこで天才の妹は華々しく専用機持ちとしてデビューというわけだ。」

「へえ、不思議なたとえ話だねぇ。すごい天才がいたものだね。」

「ああ、すごい天才がいたものだ。かつて、十二カ国の軍事コンピュータを同時にハッキングするという歴史的大事件を自作した、天才がな。」

そして、静寂が辺りを包む。

「――最後に一つ。世の中に男でも使えるＩＳがあふれ、再び世界が変わったとき……

この世界は、どうなる？」

「さあねぇ。興味ないよ。」

「おいおい、冷てぇなぁ。自分が作った今の世界（おもちゃ）を、そんなにあっさり放棄するなんてよ。」

「！　誰だ？」

聞こえるはずのない、第三者の声。

それに千冬は動揺し、声の聞こえた方向――すなわち、上を睨む。

「おっと、悪ぃな。盗み聞きする気はなかったんだけどよ。」

再び響く、男の声。
そして夜の闇が姿を変え、ゆらぎ、やがて一人の男の形を露わにした。

「ん～、誰かな？私とちーちゃんの愛の語らいを邪魔する、無粋で不細工で無神経な奴は――って、お前は！！」

いつもの調子で、しかしわずかに怒りをにじませ、束は空を見上げた。
そして千冬は珍しく――そう、本当に珍しく、だ――驚愕した顔の束を目撃した。

「何でお前がこんなところにいるんだよ。束さんは本当に……ほんっとうに、お前なんかお呼びじゃないんだよ。塩でもくらえ！二度と来るな！」
「うわっ、しょっぱ！やめろ！」

男はぺっぺと唾を吐きだし、顔をしかめる。
しかも心なしか、その表情は若干涙目だ。

「ったく、ずいぶんと嫌われたもんだなぁ。俺、何かあんたに嫌われることしたかい？」
「つーん。」

慣れ慣れしく話を続ける男を、束は無視し続ける。
その流れから完全に置いてきぼりになった千冬は、どこか面白くなかった。

「……で、貴様は一体誰だ。私の記憶が正しければ、作戦本部に忍

び込んでいた気がするのだが？」
「ああ。そういや、自己紹介がまだだったな。俺は――」
「ちーちゃん。コイツの名前なんてどーでもいいから、もっとお話しようよ。」
「――はぁ。今更だけどよ、お前って結構嫌な奴だよな。」
場の転換を図った千冬の試みは、ほかならぬ束の手によってあっさりと台無しにされた。

「ところで、『この世界がどうなるか』だったよな？
安心しな。きっと、何も変わらねぇよ。」
「……なんだと？」

あっさりと。
あまりにあっさりと、その男はそう言い放った。
何故だろうか。と、千冬は思う。
この男は、今の世界を変えるために、紅也という存在を世に送り出したのではなかったのか……？

「何勘違いしてんだ？」
それなのに、こいつは。

「俺がレッドフレームを作ったのは、それを作れるだけの技術があったからだ。
別に、それで何かがしたかったわけじゃねぇ。そもそも、アレをどう使うかも紅也の自由だ。」

作れるから作った。
なんて無責任で、なんて簡単な答え。

……ああ、束がこいつを嫌う理由が分かった。

「一人ひとりが自分の信念を持って、ただそれに従い続ける。世の中ってのは、そうやってできてんじゃねぇのか？だから、世界は変わらねぇ。

――元々、世界ってのはそういうもんなんだから、変わりようがねぇよ。」

こいつはきっと。

束と同じ天才で。

束と同じく自由奔放で。

束と同じくハタ迷惑で。

――束と違って、今の世界に満足している。

「まったくもー！だから、束さんはお前が大！大！大っ嫌いなんだよ！

何にも考えてないのに！バカなのに！結論だけは私とおんなじなんだからさー！！」

千冬の表情を感じとったか。はたまた男の言葉でこらえきれなくなったのか。

束は、夜空に向かってそう叫んだ。

だからさー……

からさー……

らさー……

さー……

……

……

……

……

エコーが波に呑まれたとき、既に束の姿はそこにはなく。

「じゃ、そろそろ俺も帰るぜ。」

男の姿も、闇の中へと消えていき。

残された千冬は、たまった息を長々と吐き出した。

◆

〈ｓｉｄｅ：山代　葵〉

私とバスターの戦いは、私の勝利という形で決着した。

結果だけをみると言うことなしだけど、その過程は問題ありだ。

2対1という状況での敗北。あわやという所でのブルーフレームの第二形態移行（セカンドシフト）。エイミーさんやＩＳ学園のみんなの援護。偶発的に起動した単一仕様能力（ワンオフ・アビリティー）。

私の実力なんかじゃない。今回の結果は、完全に運によってもたらされた。

ぎゅっ……と、首にかかる蒼いロケットを握りしめる。

アクセサリーにしか見えないこれは、ブルーフレームの待機状態だ。

見た目は前と同じ。でも、少し変化があった。

ロケットを開く。

かつては無地だったそこには、緑色の線で描かれた蛇（サーペント）のマークが刻まれていた。

…これが、第二形態移行の証なのかな？

まあ、昨日の話はもう止めよう。これ以上思い出してると、思い出したくないことまで思い出しそうだから……。

そう。『昨日』だ。

あの事件から一夜明け、今日は校外特別実習の三日目。

私は今、出しっぱなしになっていたブルーフレーム用の装備の撤収作業を進めてる。

…結局、これらを使うことは無かった。

というのも、第二次移行の際にタクティカルアームズがブルーフレームの標準装備（デフォルト）として組み込まれたから、背中につけるタイプの装備は使えなくなったのだ。

私自身が開発依頼をしておいたスナイパーパックも、使われることなくお蔵入りだ。

それはあまりにもったいない。今度、紅也になんとかしてもらおう。

「まったく、せっかく量子変換（インストール）したのに、一日で外すなんて……。」

「なんだか、もったいないよね。」

私と同じように作業してる鈴音とシャルロットが、そうぼやく。

二人とも本国から送られたパッケージを使用したので、わざわざ外してから片付けなきゃいけないのだ。そんなわけだから、さすがのシャルロットもめんどくさそう。

「一夏さんと箒さんはいいですわね。追加装備が無くて。」

「〈パンツァー・カノニーア〉のデータは取れなかったな。上層部になんと報告すればよいものか……。」

「……追加装備どころか、標準装備も足りてない私への……当てつけ？」

上から順にセシリア、ラウラ、簪だ。

ちなみに簪だけは、機体のプログラムをいじってる。どうも、戦闘中のスラスター出力が不安定だったみたい。鈴音ほどじゃないけど、忙しそうにプログラムを走らせてる。

「でも、よ。俺達だってＩＳの撤収作業はやってるし……。」

「一番楽なのは……あいつだろう。」

そう言って箒が睨む先――その視線の先には――

「えーっと、こっちがクリムゾンの戦闘ログ、こっちがブルーのログ、これがゴールドが記録した映像で、こっちはラファールの……。うひゃひゃ、笑いが止まらねぇぜ！」

嬉々としてコンピュータをいじくりまわし、時折気持ちの悪い笑顔を浮かべる兄の姿が。

「紅(ホン)！ちょっとは手伝いなさいよ！男でしょ！？」

「むーり。俺、怪我人だから。」

そう言って挙げたのは右腕。でも、包帯は右腕どころか、全身に巻かれている。

外見は、さしずめ赤髪のマミーといったところか。ちょっと、某最後のファンタジーを彷彿とさせる姿だ。

「紅也！お前、そんなに怪我してなかったろ！」

「いーや！昨日の撃墜で全身大火傷で複雑骨折で意識不明だ！」

「じゃあ、何で会話ができるんだ！」

「会話してると思ってるのはお前の妄想が生んだ幻だ！」

「ならその幻想をぶち壊す！」

「…二人とも、仕事。」

口論を始めた一夏と紅也を軽くいさめ、私は作業を再開する。

……あの後紅也は、朝になったら普通に目を覚ました。

それこそ、あれほど心配した私が馬鹿みたいに思えるほど、あっさりと。

でも、やっぱり両腕は痛いみたい。

今はああして普段通りにふるまってるけど、８とのリンクは依然継続中。

もし８の管理下から外れたら、即座に激痛が襲ってくるって言ってた。

それでも、今はああやって普段通りを演じ、笑ってる。

そんな紅也は、本当に――強い。

◆

そうして時刻は十時過ぎ。
全ての作業が終了し、ここから去る時間がやってきた。
旅館の女将、清州さんに感謝の挨拶を述べ、私たちはバスへと乗り込む……はず、だった。

「じゃあ、俺はここでお別れだ。」

唐突に。
そう、本当に唐突に、紅也は告げた。

「――え？」
「紅也！どういうことだ！？」

呆然と、呟くような返事しかできなかった私の後に、箒が声を荒らげた。

「いやぁ、昨日、俺、意識不明になったじゃん？
…そのせいで、本国に戻って精密検査を受けることになってな。
今すぐ帰って来い、だと。」
（まったく、原因ははっきりしてるのにな。）

前半は声に出して。後半は私だけに聞こえるように、返事をする。

「で、では、やっぱり怪我のせいで……。私の……」
「お前のせいじゃねぇよ。」
いつもとどこか異なる調子で話す箒の言葉を、紅也は即座に遮った。
「あれは、俺がやりたくてやったことだ。箒が気に病むことじゃない。
それに、こうして無事に復帰したんだ。それでいいじゃないか。」
「……それのどこが無事に見えるのさ。」
シャルロットの言うことも一理ある。
紅也は、相変わらずの赤マミー状態だったのだから。
「だ、だが！それでは私の気が……」
一度は変わりかけた雰囲気が、なおも食い下がる箒によって再び元に戻る。
……空気読めよ、武士娘。
「ああもう！面倒くせぇな！
…箒！そこまで言うなら、お前にはペナルティを与える。俺が復帰したら、徹底的にしごいてやるから覚悟しろ！」
「……分かった。覚悟しておく。」
箒はそれ以上何も言わず、バスへと乗り込む。
それに続いて一夏、セシリア、シャルロット、ラウラも一号車へ。
残る私たちも、それぞれ自分のバスへと移動する。
それを見送るのは、ここに留まる紅也だけ。

紅也を置き去りにして、バスは走り出す。
こうして……長かったこのイベントは、あっさりと幕を閉じた。

◆

〈ｓｉｄｅ：山代　紅也〉

「……あーあ、行っちまったか。」
「あら、寂しいの？」
去りゆくバスを見送ってたそがれる俺に声をかけたのは、同じく居残り組のエイミーさんだった。
「そりゃ、まあ。一人ぼっちですからね。」
「奇遇ね。私も一人ぼっちなの。……どう？寂しい同士、慰め合わない？」
「はは、遠慮します。後が怖そうです。」
「そう、残念。」
さほど残念がってもいない様子で、エイミーさんは空を見上げる。
つられて俺も空を見ると……遥か彼方から、二機のヘリがゆっくりと接近してくるのが見えた。
「――ねえ。」
「はい？」
「福音のデータ、盗ったでしょ？」

ぶふっ！
何かを口に含んでるわけでもないのに、激しく吹き出してしまった。
「……その根拠は？」
既に俺の態度が根拠みたいなもんだけど、言わないでほしい。
そんな俺の内心を察してか、エイミーさんはまともな根拠を話し始めた。
「だって、コウくん医務室で寝てたでしょ？福音の操縦者、ファイルスさんも同じ部屋で寝てたでしょ。
……隣のベッドで美人（IS）が寝てるなら、襲っちゃう（データ盗む）のがコウくんクオリティじゃない。」
……訂正。全然まともじゃなかった。しかも下品。
つーか、信用ないな、俺。
「ひでぇや。……ところで、エイミーさんって初見の人でもファーストネームで呼ぶのに、どうしてファイルスさんだけファミリーネームで呼んだのさ。」
あまりにも苦しい話題転換だったが、エイミーさんは乗ってくれるようだ。
「それはね、コウくん。あの人のファーストネーム、家のママと似てるのよ。……何か気まずいでしょ？」
「ああ～、分かります。」
やっぱり、この人と話すのは楽しい。

――やっぱり、この人は欲しい。

ヘリが近づいてくる。一機はアメリカ、一機はモルゲンレーテのもの。

「じゃ、私は行くわね。バイバイ！」

「ええ、さよなら。次会うときも、どうせ戦場なんでしょうね。」

「そうでしょうね。じゃあ……」

「ええ……」

「「また会う日まで！」」

別れの言葉は、これで十分。

でも、エイミーさん。

次は、案外思いがけない所で会うかもしれませんよ？

◆

「ずいぶん嬉しそうだな、紅也。」

「ええ、まあ。自分の当座の目標を、再確認できましたから。」

モルゲンレーテ所属ヘリ、アラストル内部。

俺と師匠は後部座席に座り、雑談を交わしていた。

「……で、紅也。いつまでそうしてるつもりだ？」

「…バレてますか？」
「当たり前だ！そいつは誰が作ったと思ってんだ。」
「…それもそうっすね。」
「安心しろ。ここなら、外部にはバレない。８のバッテリーもヤバいんだ。もうそろそろ解除しとけ。」
「分かりました。じゃあ、解除します。
……俺が倒れた後のことだけ、よろしくお願いしますね。」

第７４話　家政婦は見た！真夜中の密会（後書き）

…うーん、久しぶりなので、うまく書けた気がしません。

ここでお知らせです。

今回の話からしばらく、紅也は本編には出ません！

しばらくは外伝（あっち）でがんばってもらいます。

原作４巻での紅也の活躍を期待した方、申し訳ありません！

しばらく本編では葵が主人公です。

第７５話　彼の去った後（前書き）

原作四巻……よりは前ですね。
紅也不在のＩＳ学園。この章では、葵だけが主人公です。

ちなみにタイトルに関しては、「Ｄ　ＡＳＴＲＡＹ」の小説版から拝借しました。
あの話は大好きですね。

……コホン。では、どうぞ！

第７５話　彼の去った後

暖かな夏の日差しが、教室にさんさんと降り注ぐ。
あの臨海学校から学園へと戻り、土日を挟んでやってきた月曜日。
いつもと変わらぬ朝。
いつもと変わらぬ教室。
そこに……

彼だけが、いない。

◆

〈ｓｉｄｅ：山代　葵〉

７月１１日。
１週間も経っていないはずなのに、妙に懐かしく感じる校舎に、私は足を踏み入れた。
学園の雰囲気は何一つ変わっていない。
紅也がいなくなったのに、何一つ。
まるで、紅也の存在など大したものではないのだ、と言われているかのようで、意味も無く腹が立つ。
それは仕方のないことなのに。
紅也の離脱を知るのは、一年生だけなんだから。

◆

〈ｓｉｄｅ：織斑　一夏〉

『じゃあ、俺はここでお別れだ。』

その言葉通り、本当にあっさりと紅也は去った。

久しぶりに入った一組の教室は、たった一人欠けただけなのに、妙に違和感を感じる。

「えーと、全員……は、そろいませんよね。ごめんなさい。ＨＲを始めます。」

例えばそれは、どこか憂鬱な山田先生であったり。

「やまぴー、大丈夫かなぁ～。」

「そんなのそんなの、私にも分かんないよ……。」

例えばそれは、不安げな声で話すクラスメイトであったり。

「……。」

通夜のような雰囲気でうつむく、箒の存在であったり……。

とにかく、数え出したらきりが無い。

「そういえば、山代君ですが……。」

だから、山田先生が発したその言葉に、クラスメイト全員が反応してしまうのは当然の結果だろう。

「え？なになに？」

「こ、紅也さんがどうかしましたの！」

「無事なのか？無事なのだな！？」

「早く教えて～！」

「きゃぁぁぁぁ！み、みなさん、落ち着いて！今話しますから！！」

最後に聞こえた山田先生の叫び声を聞き、俺達はようやく落ち着きを取り戻した。

「え、え～とですね、先程学園の方に連絡がありまして……『検査が長引くので、今学期中には復帰できない』、と。それから……」

またクラスメイトが騒ぎだしそうな雰囲気を察したのか、山田先生はすぐに言葉を続ける。

「皆さんに伝言だそうです。『テスト乙。ざまぁｗｗｗ』……以上です。」

「「「「「えええええーーーっ！！！」」」」」

思ったより余裕のある伝言を聞いて、クラスの雰囲気はガラリと変わった。

「そうだった！期末テスト！」

「山代くん、試験免除かぁ……。」

「臨海学校でいろいろありすぎて、すっかり忘れてたわ！」

「……というか紅也、ホントはそこまで重傷じゃないんじゃ……。」
「ちゃっかりしてるな。さすが我が嫁。」
「あなたの、じゃありませんわよ！」

先程までのしんみりした雰囲気はどこへやら。
今やクラスは、いつもどおりの騒がしさを取り戻していた。
ふと、箒を見る。
朝から変わることのなかった悔恨の表情も多少は和らぎ、わずかに笑みを見せている。

……良かった。これで俺達も、いつもの自分に戻れるはずだ。

「……あ、あともう一言。『そんな勉強で大丈夫か？』。」
「「「大丈夫じゃない！問題だ！」」」

◆

〈ｓｉｄｅ：山代　葵〉

ＨＲで、紅也はそこまで重傷ではないと発表された。だから、大騒ぎしないでほしい、とも。
これは、紅也の意志だ。自分のせいで学園の雰囲気を壊したくない、という心遣い。
そのメールを昨日受け取ったときは、思わず「自分の心配をして！」と怒ってしまったものだ。
そのせいで、紅也の制服が一着減った。謝る気は無いけど。

そして時間は昼休み。
食堂には専用機持ちが集まり、紅也についての話題で盛り上がってた。

「ともかく、思ったより元気そうで何よりよ。」
「まあ、本人も検査入院だって言ってたしね。」
「しかし、今学期中に戻って来れないとは……。何かあったんじゃないか、葵？」
「…何もない。少なくとも、聞いてない。」
「ほらな、箒。心配し過ぎだって言ったろ？葵がこう言ってるんだから、間違いないって。」
「だが、見舞いくらいは行った方がいいのだろうか……。」
「……あなたの立場じゃ……それは、難しい……。」

簪の言う通り、今の箒の立場はかなり微妙なものだ。
何せ、今まで存在しなかった４６８個目のＩＳコアを持ち、しかもその機体は前代未聞の第四世代。そのうえ所属は決まっていないとなれば、ＩＳ学園を出たとたんにどこぞの国家や組織に拉致されても不思議じゃない。
言うならば、鴨がネギと鍋とガスコンロを持って歩いてるような状態。

「…というわけ。」
「なるほど……。そこまでは思い至らなかった。」
「…でも、方法はある。」
「！　何だ！？」
「何となく予想はつくけどね……。」

…シャルロット、失礼。

「…モルゲンレーテの操縦者に」
「お前やっぱり紅也の妹だな！！」

…一夏も、失礼。
イラッとしたので、つま先を踵で踏みつけた私は悪くない。そう、悪くない。
だって、紅也と似てるって言われるのは嬉しいけど、どう考えてもバカにしてるニュアンスだったんだもん……。

「なるほど。安全に移動する手段があればいいわけか……。」

箒も箒で、なんか妙な所に着地したみたい。
別に、大きな問題を起こさなければ、それでいいんだけど。

「ま、まあ、それはともかくとして……問題は期末テストだ。」

痛みで涙目になっている一夏が、唐突に話題を転換する。
…でも、期末テストが問題？何で？

「何が問題なのだ？」
「……あんなの、形式だけ。」
「普段通りにしていればいいのですわ。」
「あ、もしかして一夏って……。」

シャルロットが何かに気付いたかのようにポン！と手を叩く。

「そう。こいつは昔っから……」
「勉強はそこまで得意ではないな。」
「……あ、そう。」

鈴音や箒から告げられたのは、ある意味期待を裏切らない真実だった。

「な……何だよ、みんな。そんな呆れたような、見守るような眼で俺を見て……。」

あ、こういう視線には敏感なんだ。普段の、箒や鈴音やシャルロットから受けるＬＯＶＥ×２ビームには鈍感なのに。

そんなことを考えながら、ワッフルにわさびをつけ、一口。形容しがたい味が舌から伝わってくる。

すると……

「なあ、葵！お前は……お前だけは、俺の味方だよな！？」

「……」

あろうことか、一夏は私に話を振ってきた。

…うっすら涙目の一夏、ちょっと可愛い。

でも、この場面で私に頼ったのは、失策だと思う。具体的には、校舎内に逃げるべき所で屋上に逃げるくらいまずい。最初のデッドエンドだ。

なぜなら――

「一夏。何故、そこで葵に泣きつくのだ？」

「まったく、困った一夏ね……。」

「なんのつもりなのかな、かな？」

ないがしろにされた三人が、いつものように一夏に迫る。

……『いつものように』って認識してる私は、正直末期なのかもしれない。

「な、なんだ？どうしたんだよ、みんな……。こころなしか、さっきと雰囲気違うんだけど……？」

それは、気のせいじゃない。良くないサインだよ。

まあ、私にとばっちりが来なくてよかった。

「……テストの日は、授業が無いから……楽。」

「…簪、授業嫌い？」

「……打鉄の調節ができる。」

「私も一般教養は苦手だ。大体、歴史や独文学など何に使うのだ。」

「いくら軍人でも、常識は必要だと思いますわ。」

「うん。さもないと、どこぞの軍曹みたいになる。」

「……軍曹？」

一夏を無視して、私たちは雑談を再開する。

最初はテストの話をしてたけど、話すうちにどんどん話題は逸れていった。

でも……後ろから聞こえる断末魔のようなＢＧＭは、いつまでも消えなかった。

◆

ダァン！

校舎から離れた林の中に、銃声が木霊する。

そして飛び散る赤い飛沫。
目の前の少女は、信じられないものを見たかのように目を見開きながら、胸を押さえてゆっくりと倒れ伏した。

「な……何故、私の位置が……？気配は……消して、いた……はずなのにっ……！」
「…おかしな話。生きているのに、何で気配が消せるの？」
「で……出鱈目ね……。」

それだけ言って、少女の手から力が抜ける。
カランッ！と乾いた音を立て、その手から銃が地面に落ちた。

「そこまで！勝者、Ｂチーム！！」

瞬間、辺りに響く声。
同時に目の前の少女は起き上がり、パン！パン！とズボンについた土を払う。
さらに、周りに倒れていた人達も次々と起き上がり、私たちの方へと寄って来た。

「いやぁ、やっぱり山代さんはすごいわねぇ。手も足も出なかったわよ。」
「せっかくの奇襲だったのに、自信なくしちゃうな……。」
「同じモルゲンレーテでも、全然違うわね。私、先輩なのに……。」
「ちょ、エルシア！？いじけないで！」

…やっぱり、褒められると、嬉しい。

さて、そろそろ状況を離した方がいいのかもしれない。
時間は放課後。私は今、自分の所属する『射撃部』の活動に参加し

ていた。
今日のイベントは、適当なチームに分かれてペイント弾を撃ち合う……要はサバイバルゲーム。
私の所属するBチームは、先程Aチームの最後の一人を打倒し、勝利を勝ち取ったのだ。

「まったく、部長の私を差し置いて、なんて強さだい？……妬けるねぇ。」
「…あなたも、強い。混戦でなければ、多分……。」
「はいはい、その先は止めな。過度な謙遜は相手を傷つけるよ？」
「…分かった。ありがとう。」
「よくできたじゃないか、このこの～。」

そう言って部長は、グリグリと私の頭を撫でる。
嫌な感じはしないけど……くすぐったい。

「じゃ、撤収！武器弾薬、トラップはすべて撤去！終わったら射撃場で練習だよ！」
「「「「はい！！」」」」

そう言って、てきぱきと片付けを始める部員達。もちろん、私もサボってないよ。
地雷を撤去し、ワイヤートラップを解除し、陣地に残ってるペイント弾のケースを部室に運ぶ。

◆

いつもと変わらない。何も。

夜。
寮の部屋で、私は一人。
…いつもと違う。
紅也も８もいない。多分、今頃モルゲンレーテで治療中だろう。
……私は、こんなところでじっとしててもいいのかな？
ここで、何一つ変わらず、日常を続けても……。
コンコン。
仄暗い水の底に沈むかのように思考し始めた私を、ノックの音が現実へと呼び戻す。
誰だろう、こんな時間に。
気になった私は、相手を確認せずにドアを開けてみた。
すると、そこには――
「よ、葵。」
「…一夏？」
「だけじゃないぜ。ほら。」
意外な客人、一夏が指さした先には……箒にセシリア、鈴音、シャルロット、そしてラウラの姿が。
「……簪は？仲間はずれ？」
つまり、いつものメンバー（－１）がそこにいた。

「簪なら、ＩＳの調整が終わったら来るそうだ。」
「そうなんだ。でも……何で？」
そう、それが疑問だ。
特に用などないはずなのに、何でこれだけのメンバーが、ここに集まったの……？
「いや、一夏がね。紅也がいないからアンタが寂しがってるって言ってね。」
「子供じゃないんだから、そんなことはないって言ったんだけど……。」
「まあ、わたくしたちも退屈でしたので。」
「アポ無しで押し掛けたわけだ。入るぞ。」
「…どうぞ。」
ドアを完全に開き、中にみんなを招き入れる。
「おじゃましまーす」というばらばらな声と共に、一夏たちが部屋に入ってきた。
さっきまでひたすらに静かで、モノクロだったこの部屋に、一気に色がついた気がする。
「あら、思ったよりも片付いていますのね。紅也さんの部屋は。」
「あれ？あんた、紅の部屋に来たこと無かったっけ。」
「へ？鈴さんは来たことがありますの？」
「そりゃ、葵の所に遊びに行くことなんてザラだし。……それに、私だけじゃないわよ。」
そう言って鈴音は、一夏の方を見る。

「ああ。俺と箒も、セシリア対策を話し合うときに何度か来たぜ。」
「うむ。……まさか、一夏にあのような下心があったとは知らなかったがな。」
「え？下心？それを言うなら、セシリアだって面白そうにしてたじゃねえか。」

下心……？
ああ、あれか。紅也と私を混同して、性別確かめに来た一件。

「い、一夏？まさか、そのときから葵を意識してたとか……？」
「なっ！？何の話だ！何の！
あのときは、ちょっと紅也に興味があっただけだって！」

……はあ。
一夏、残念な子。なんでそんな言い回しをするんだろ？
そんなことを言ったら……。

「い、一夏さん！どういうことですの！？」
「ちょっと！きっちり説明しなさいよ！！」
「いちかァ……。どういうことなのかなぁ？」

修羅、再臨。
メンバーこそ変わったものの、昼間と同様の惨事が、私の部屋で始まろうとしていた。

「まったく、一夏も何故わざわざ誤解されるようなことを言うのか……。」
「半分は箒のせいではないのか？」
「…言えてる、かも。」
「なっ！違う！あれは一夏の自爆だ！」

私刑（リンチ）に参加しなかったメンバーは、私の近くに集まって会話し始めた。
この流れも、昼間と同じ。でも――

「そもそも、あの一件で一夏をけしかけたのは、セシリアじゃないか？」
「と、なると、あれはただの責任転嫁という訳か。」
「あるいは、本気で忘れてるのかも。」
「「ありえるな。」」

こんな雰囲気は、嫌いじゃない。むしろ好きだ。

「……おじゃましま……何の、騒ぎ……？」

私のために、これだけの人が集まってくれる。
やってきて数カ月の、この日本で。
それは、今まででは考えられなかったこと。

（みんな……ありがとう。）

心の中でお礼を言いながら、とりあえずお茶菓子の準備でもしようと思った。

第７５話　彼の去った後（後書き）

ちなみにこの章は、あんまり長くならないと思います。

さて、紅也の方の話は、明日の昼ごろＵＰします。

こっちじゃなくて外伝の方に投稿するので、よろしくお願いします。

第７６話　レッツ勉強会！（前書き）

またまた日常編な第７６話です。
登場キャラ数、過去最少。ボリュームも少ないですが、ごめんなさい。

とりあえず、どうぞ！

第７６話　レッツ勉強会！

「……と、いうわけで、勉強教えてくれ！」

→

火曜日の昼。
珍しく一人で食事していた一夏を見つけた私は、わずかな興味を持って声をかけてみた。
何せ、一夏は昼食時にはだいたい一組の女子と一緒らしい（紅也から聞いた）から、一人で食事をするなんて初めてのようだ。
しかも、その背中が煤けて見えて……なんだか放っておけなかった。

「…珍しい。」
「ああ……葵か。珍しいって、何が？」
「一人で食事とか、気のない返事とか、その虚ろな表情とか……」
「わかった……。もういい。」

そう言って、再びため息を吐く一夏。
繰り返しになるけど……珍しいこともあるものだ。

「…どうしたの？」

だから、だろう。
気がついたら、私は一夏の対面に座り、話を聞く気分になっていた。

「……。」

でも、一夏は何も話さない。

じっと私の両目を見つめ、ぽかーん、とだらしなく口を開けている。

（…イラッ）

ぺちん。

思わず、その無防備な額にデコピンを飛ばす。

やる気のなくなるような音が出たけど、威力はばっちり。現に一夏はおでこを押さえ、涙目になりながら上目遣いで私を見てる。

――ヤバイ。何か新しい世界が開けそう。

…とまあ、そんな戯言は西尾維新あたりにツケておこうかな。

「痛った!?いきなり何だよ!」

「…何か、表情が不快だった。」

「表情……?……ああ、葵が自分から話しかけるって結構レアだなって思ったら、つい。」

ぺちん。

「～～～!!　今度は何で!?」

「…理由が不快。」

失礼だ　ああ失礼だ　失礼だ

私だって、友達となら普通の会話くらいするのに。

「……はあ。まあ、いいや。俺の話、聞いてくれないか？」
「…うん。」

こくり、と。
頷きながらそう答えると、一夏は話し始めた。
事の発端は、昨日の他愛のない会話。私の部屋での、あの話。
それで……その、一夏とシャルロットたちの会話がヒートアップしすぎて、外に漏れてたらしい。
具体的には、「一夏は紅也が好き」という、恐ろしく脚色された内容が。
そのことで朝の一組の教室は大騒ぎだったらしい。

…だから朝から、あんなにバシンバシン音がしてたんだ。納得。

話を戻す。
尾ひれがつきまくった噂や、それを裏付けるかのような証拠写真（多分、紅也が提供したんだと思う）が出てきたため、箒やラウラまでもが一夏のことを完全に誤解。
晴れて、今の孤立状態が出来上がってしまったのだそうだ。
しかも間の悪いことに、一夏は専用機持ちの誰かに勉強を見てもらおうと思ってたから、この状況は大変によろしくないらしい。

そして、話は冒頭に戻る。

←

「…勉強は別にいいけど。噂の方はいいの？」

まあ、私にはどうにもできないし、する気も無いけど。
だって、この噂が原因で一夏がさらに困った表情をすることを想像すると……ねえ？

「そっちはもう諦めた。今はテストに集中するよ。」
「…あ、そう。」

思いっきりがいいのか、馬鹿なのか……。いや、真っすぐなだけなんだろうな。
ともかく、こういう態度が出来る人間は好きだ。利害とかそういうのがないかぎり、できるだけ協力したくなる。

「…じゃあ、引き受ける。」
「なっ、ホントか！？」
「…嘘を言ってどうするの？」
「いや、紅也だったらそこで『いや、嘘。』とか言いそうだったからな。」
「紅也と私は双子だけど、同じ人間じゃない。そこは誤解しないで。」

確かに私は、自分が紅也に似ていると言われると嬉しいし、誇らしい。
でも、相手が紅也と自分を同一視してるっていうのは、なんか嫌だ。
複雑な乙女心ってやつ？…いや、『私』という個人として見てほしいという、極めて単純な思いだ。
私が不快そうなのが伝わったのか、すぐに一夏は謝ってきた。

「いや、勘違いしないでくれ！俺は葵のこと、ちゃんと一人の人間として見てるから……。」
「…ならいいけど。次に同じことをしたら、『一夏は紅也にフラれて、私に告白しようとした』っていう、木下姉弟もびっくりの嘘を言いふらすから。」
「ごめんなさい。それだけは勘弁して下さい。」

この日、私は初めて……土下座する人間を見た。

◆

時は進んで放課後。
第二形態移行した自分の愛機、ブルーフレームセカンドKに慣れるための訓練を終えた私は、部屋に戻ってシャワーを浴びていた。
タクティカルアームズの遠隔コントロールには、まだ慣れない。ただ単に飛ばして相手にぶつけるなら簡単なんだけど、分離中にガトリングフォームに変形したりさせるのはなかなか難しく、うまくはいかない。
そうはいってもコツは掴んだ。夏休みに入る前には完全に自分のものにできると思う。
…紅也に見せたら、褒めてくれるかな？

もう一つの問題は、単一仕様能力。
あの時――バスターとデュエルを倒したときの感覚。
あれは間違いなく、普通じゃなかった。
一秒が何倍にも引き延ばされ、全てが静止して見えた。

その現象から、私はこの力を「固有時制御（タイム・アルター）」と名づけようと思ったけど……さすがにまずいと思った。著作権的に。

それはそれとして。
あの力には、何らかの発動条件があるに違いないと思う。
でも、それが分からない。
ヒントはあの声。

『力が欲しいか？』

力を貸すと言った、あの声。
でも、何度呼びかけても、何度力を欲しても、声は聞こえなかった。
ひょっとすると、心からの呼びかけでないと答えてくれないのかな？
……でも、私が心から力を欲する場面なんて、もうないと思う。
というか、あったらまずい。
それはきっと、紅也が傷ついて、みんなもピンチで……そんな状況だと思うから。

（ねえ、ブルー……。あなたはどう思うの？）

ブルーフレームは答えない。
でも、首から下げたロケットが、キラリと輝いた気がした。

キュ……と蛇口を絞り、シャワーを止める。
夏だから風邪を引くことも無いとは思うけど、髪が濡れたままなのは嫌だから、すぐに脱衣所で身体を拭く。
特に、髪は念入りに。

春先までは紅也に合わせてショートにしていた髪は、今や完全にうなじを覆い、すでに肩までかかっていた。

紅也に褒められた長い髪。母さんと同じ綺麗な青。
…やっぱり、私もこっちの方が好き。

下着を身につけ、服を着るために脱衣所から出る。

――ここで、嫌な予感がした。

本能、いや第六感とでもいうべきもの。特に私のそれは、生まれながらに強化されてるため、かなり良く当たる。
部屋を見渡す。この『ヤな感じ』は、扉の方からだ。
異常をサーチ……発見。部屋の鍵が、開きかけている。
そしてもう一つ……足音。
廊下の方から、まっすぐ私の部屋へと向かってくる。
女子なら問題はないけど……そんなはずはないと私の勘が告げている。
一瞬で扉の前に移動し、鍵を完全にかける。
直後、足音が止み、ドアノブがガチャリ、と動いた。

……セーフ。
前に、紅也が言ってた。
今現在ＩＳ学園に存在する唯一の男子――織斑一夏には、男なら誰もが欲しがる希少技能（レアスキル）があると。
その名は――ラッキースケベ。

ガチャ、ガチャ……。

鍵が間にあったから、ドアノブは回り切ることなく何度か音を立てる。

「ん？鍵がかかってる。……留守かな？」

一夏はそんなことを呟き、今度はノックを始める。
……いきなりドアを開けるって、どんな教育受けてきたんだろう？
いや、織斑先生の前じゃ絶対口に出せないけど。

「待ってて。今、着替え中。」
「！　お、おう！悪い！！」

とりあえずハーフパンツとTシャツだけを着て、教科書を取り出し机に出しておく。
準備が出来たので鍵を開け、一夏を招き入れることにした。

「…いい。入って。」
「じゃ、失礼します……っと。」

着替え中、という発言が効いたのかどうかは知らないけど、一夏はおそるおそるといった感じで扉を開いた。
まったく。これに懲りたら、もう少し慎重な行動を心がけて欲しい。

「机は紅也のを使っていい。私も自分の勉強をするから、質問があったら聞いて。」
「お、おう。よろしくな。」

キャスターのついた机を動かし、一夏の机とくっつける。
一夏もすぐにカバンから教科書を取り出し、机に並べ始めた。
教科は国語、数学？A、英語、物理、世界史。
…国語以外なら教えてあげられそうだ。

「国語は無理だけど、他の教科なら見れる。」
「お、それはありがたいな。

……でも意外だな。葵って、国語が苦手だったのか。」

……ハァ。

思わずため息をつく。まさか、日本が世界の中心だとでも思ってるんだろうか？

「違う。私の出身はオーストラリアだから、授業で『国語』は無い。代わりにあるのが、『英文学』。…流石に、習ってないものは教えられない。」

「あっ……。そういや、そうだったな。

いや、悪い。葵って名前は日本人だからさ、出身のことはつい忘れちまうんだよ。」

そう言いながら一夏が開いたのは、英語の教科書。

英語は外国人に……という算段なのかな？だとしたら、あまりに安直だ。

だって、英語圏に住んでる人の話言葉って、文法滅茶苦茶だし。日本のジュニアハイで例文として載ってるような話し方をする人なんて、まずいない。

まあ、見れないわけじゃないから、別にいいけど。

「なあ、葵。」

「…質問？」

早い。早すぎる。

もし初歩の段階で躓いているなら、私は面倒を見切れない。

――が、そんな心配は杞憂だった。

「いや、英語のことじゃないんだけど。葵って、どうして日本の名前なんだ？」

ああ、私についての質問か。

「…父が日本人。」

「そっか。名前は？」

「山代　勇也。」

雑談をしながらも、互いに手は止めない。

「へぇ。どんな人なんだ？」

「優しくて、思いっきりが良くて、面倒見がいい。」

「……ふうん。いい人なんだな。」

手は止めない。

でも、一夏の声にわずかに影が差したのを、私は聞き逃さなかった。

…そういえば、一夏の両親は行方不明だとか。

いや……オブラートに包まないで言うなら、一夏たちを捨てて逃げたらしい。

そっか。一夏、私が羨ましいのかな？

何となく微妙な雰囲気になる。こんな空気じゃ、集中なんてできやしない。

「…でも、欠点もある。」

「そりゃ、どんな人だって欠点はあると思うぜ。」

「…ロリコン。」

「……は？」

さすがに、手が止まった。

「え？ロリコンって……親父さんが？」

「…うん。」
「……何で？」
「…２０歳だった父さんは、当時１４歳だった母さんに一目惚れ。２年後に結婚した。」
これをロリコンと言わずして何と言うのか。
「ああ、何というか……ゴメン。」
「……。」
さっきとは違う意味で微妙な雰囲気に。
互いに無言のまま、再び自習を再開する。
――それにしても、妙だ。
一夏は勉強ができないと言ったわりには、手が止まってる箇所はほとんどない。
しかも、ちらっと見た限り、特に大きなミスをしてるわけじゃなさそうだ。
……これで、何で成績悪いのかしら？
気になって聞いてみた私に返ってきたのは、ひどく単純な内容であった。
「ああ、どうも一人だと勉強に集中できないんだ。」
なるほど、納得。
……それにしても。
紅也や鈴音以外とここまで饒舌に話すなんて、珍しいこともあった

ものだ。

他愛のない会話を続けながら、夕食の時間まで、私と一夏の勉強会は続いた……

第７６話　レッツ勉強会！（後書き）

外伝の方の入院編２話が書き終わらない……。
明日投稿する予定ではありますが、難しいかもしれません。

本編はそろそろ夏休みに入ろうかな？

第７７話　試練の終わり（主に一夏にとって）（前書き）

遅れてごめんなさい！
どうにかこうにか更新します。

今回で一学期は終わり……の、予定です。

第77話　試練の終わり（主に一夏にとって）

「お～～わったーーっ！！」

昼休み。一人で昼食を食べてると、食堂の入り口の方から男の声が聞こえた。

「その様子だと、問題無かったようだな。」
「まあ、わたくしがあれだけ丁寧に教えて差し上げたのですから、当然ですわ！」
「そうよ。この結果がアンタひとりで出せたとは思わないことね。」
「わかってる。みんなには十分感謝してるって。」
「でも、再試がなくて良かったよ。補習なんて入ったら、一緒に出かけることだってできないし……。」
「ん？何か言ったか、シャル？」
「な、なんでもない！なんでもないよ！！」
「それより、早く席を探した方がいいのではないか？」

声の主は、一組と二組の専用機持ち連合軍。
席を探していたようなので、こっちに来るようにと手招きをする。
まあ、気付いたのは箒とラウラだけだったみたいだけど。

……寂しくなんて、ないもん。

「葵、早かったな。」
「3組は、問題回収後にすぐ解散したから。」
「そうか。すまないが、6人分の席を確保してくれないか？見ての通りの大人数でな。」

そう言ってから、箒は食券を買いに小走りで去っていった。
…なんか、便利に使われた気がする。まあ、いいけど。

することも無しにみんなを眺め、こっちに来るのを待ってみる。
そして「そろそろ食べ始めようかな?」と思った頃になって、ようやく食器を持った鈴音がやってきた。

「あ、葵!アンタの言った方法、効果てきめんだったわよ。ありがと!」
「…どういたしまして。でも、みんなに伝わるとは思ってなかった。」
「う……。うっかり口を滑らせて、セシリアにバレちゃったのよ。そしたら……」
「…そこから先は想像できる。」

さて、何の話をしてるのか、と思う人もいるでしょう。
実は先日の勉強会の後、鈴音にこう話したのだ。

――勉強を教えるという口実なら、一夏と二人きりになれる、と。

それを聞いた時の鈴音の目は、たいそう妖しく輝いていた。
そして一夏に勉強を教えると言って部屋に上がり込み、そのまま楽しくお話ししたまでは良かったんだけど……。次の日の様子を不信がられて、セシリアに詰問され、抜け駆けがばれたらしい。
それ以降、箒、セシリア、シャルロット(とついでにラウラ)、鈴音のローテーションで一夏の部屋に交替で上がり込んでたらしい。
その成果は……一夏の安堵の声を聞く限り、よいものだったのだろう。

「……にしても、よく思いついたわねぇ。そんな方法。」

「…紅也が持ってたラノベに書いてあった。」

これは嘘。

確かに、紅也の持ってたラノベ（いわゆるハーレム系）に、『勉強会シチュ』というのはあった。でも、このアイディアはそこからとったものではなく、私の実体験によるものだ。

ここまで言えば気付くだろう。私は、一夏の勉強を見た話を、みんなに隠してる。

何故かって？

…話したら、今の鈴音のポジションが私に引き継がれることは自明だから。

なんで、どうでもいい人のことで『抜け駆け』などと非難されなければいけないの？

いや、どうでもいいっていうのは嘘か。

あの日は、ただの気まぐれっていうのもあったけど、その前にみんなを連れてきてくれたお礼の意味もあったし。

だから、別に他意は……って、誰に何を話してるんだろ、私は。

「あ、待たせちゃってゴメンね。先に食べててくれてもよかったのに。」

「…気にしないで。」

おっと、いけない。

気がついたら、シャルロットが私の目の前に座ってた。

「お待たせしましたわね。」

「すまない、遅くなった。」

「待たせてしまったか？」

「悪いな、みんな！」

次いでセシリア、箒、ラウラ、一夏も到着。全員が揃ったところで、ようやく食事と相成った。

「じゃ、いただきます。

……ふう、これで一学期も終わりだな。」

「気が早いですわね、一夏さん。まだ授業は残ってますわよ？」

「テストは終わったんだ。残りは大したことないって。」

一夏は、既に夏休みの事を考えてるみたい。この間の慌てようはどこへ行ったのかしら？

「まったく、気楽なものだな。もし再試験になったらどうするつもりだ？」

「夏休みが減っちゃうよ。大丈夫なの？」

「だ、大丈夫だ……多分。」

あ、ビビリ復活。

「まあ、あたしがあれだけ見てあげたんだから、大丈夫よ！ね、一夏！」

「な、何を！それを言うなら、わたくしだって教えて差し上げましたわ！」

「貴様は教官の弟なのだ。もし、再試なんぞに引っかかってみろ……（ゴゴゴ）」

うわっ、ラウラの背後で炎が燃えてる。

今のラウラ、学年別トーナメント前に戦ったとき以上の迫力があるわね。

「ラ、ラウラ！怖いって！大丈夫だから、多分！」

「多分、だと……？」
「ああ、いや、絶対！絶対大丈夫！！」
…いやあ、平和よのぉ……。
と、黙って食事をしながら成り行きを見守ってたら、不意に箒が近づいてきた。
「なあ、葵。紅也は、まだ入院しているのか？」
「…うん。」
「……そうか。」
それは、久しぶりに聞いた紅也の話題だった。
最近はこのメンバーでも紅也の話題が出ることは少なく、最後に聞いたのは先週……簪と会話した時だったっけ。
それが箒の口から出たことに軽く驚きつつも、私は続きを聞いた。
「紅也は、本当に検査入院だったのか？それにしては、期間が長すぎると思うのだ。」
「…本国で新型のテストを請け負ってる。仕事を優先してるだけ。」
「そう言えば、あいつは技術者だったな。うむ、その設定を忘れていた。」
「…設定じゃない。」
確かに、3章では戦闘者としての面が押し出されてたけど。
「わかった。それならいいんだ。ありがとう、葵。」
「…ん。」
離れる箒を見ながら、私は食事を再開する。
これで、この話題は終わりだと思ってた。

部分的に真実を交えた、私の嘘。それで箒が納得したと思ってたのだ。
このときは。

◆

そして放課後。
私は、第六アリーナにいた。
私だけじゃない。他にも一夏に、箒に、セシリアに……要は、専用機持ち全員が集合してる。
それが周りの目を引くのか、すでに周囲には人だかりができてる。
さて、これから何をしようとしているのか？
答えは一つしかない。

模擬戦だ。

実は、私たちは福音戦以降、一切戦闘演習の類をせず、ただただ自己鍛練を積んできた。
なので、夏休み前にその成果をぶつけ合おう！……というわけだ。
まあ、セシリアとラウラには別の思惑があるみたいだけど……。

「じゃあ、組み合わせは私達全員ＶＳ葵で――」
「異議あり。」

鈴音、いくらなんでも無茶ぶりすぎ。

「…何で、その組み合わせ？」
「だって、葵と互角だった福音は、私達と簪の7人を相手に圧倒したのよ？だったら……。」
「…無理。あれは、三つ巴の状況を利用しただけだし、福音も全力じゃなかった。
いくら私でも、出来ることと出来ないことがある。」
「それが普通はできないと思うけど。……しょうがないわね。じゃ、希望ある人。」

何故か仕切りだした鈴音。誰もそれに異議を唱えない中、セシリアが挙手をする。

「わたくしとしましては、葵さんと一対一で戦いたいですわね。その方がテストの汎用性は高まりますし。」

ちょっと、セシリア。そのセリフはダメでしょ。
いつか逆流するわよ。

「ちょっと待った。それならば、私も同意見だ。葵とは、一対一でやらせてもらいたい。」

その意見に異を唱えたのはラウラだ。でも、そんなことを言ってたらきりがない。

「まあまあ、セシリアもラウラも、落ち着いて。
二試合する時間なんてないんだから、二対一でやってみたら？」
「…それくらいなら、可能。」
「し、仕方ありませんわね……。」
「いいだろう。それでやってやる。」
「じゃ、対戦カードは決まりだな。」

そうと決まれば、時間は有限。急ぐに限る。
私とセシリア・ラウラは各々のＩＳを展開し、空中で向かい合う。

私は、ブルーフレームセカンドＫで。
セシリアとラウラは、それぞれブルー・ティアーズとシュヴァルツェア・レーゲンで。

でも、二人の装備は違っていた。

セシリアの６機のビットは腰部に接続され、スカートをはいたような形状になっている。
手に握られたのもいつもの〈スターライトｍｋ．？〉ではなく、それよりもさらに大型のＢＴレーザーライフル――〈スターダスト・シューター〉。
――ストライク・ガンナー。それがこの装備の名称であった。

一方のラウラも、八〇口径レールカノン〈ブリッツ〉を二門、左右の肩に装備している。さらに、四枚の物理シールドを左右、正面に展開したその様子は、さながら色違いのデュナ〇スといったところか。
これが砲戦パッケージ、パンツァー・カノニーアである。

二人は、福音戦で使わなかった装備のテストをするために、この模擬戦を組んだのだ。

一方、私としても、自分がどの程度この機体を使えるのか試しておきたかった。
夏休みになって、紅也に見せるときには、完璧にしておきたいから……。

「よし、準備はいいな？」

地上にいる箒が、オープンチャネルで全員に呼びかける。

その声に対し、誰も返答をせず、代わりに武器を構えた。

「では……始め！」

「喰らえっ！」

開始早々、シュヴァルツェア・レーゲンの両肩に装備されたレールカノンが火を吹く。

その結果を半ば予想していた私は、左右スラスターの出力とタクティカルアームズの角度を調節し、加速しながら不規則な軌道で回避する。

「――この程度？」

「では、ありませんわよ！」

肩部スラスター逆噴射。急制動をかけ、そのまま身体ごと上を向いた私の視界に入ってきたのは、〈スターダスト・シューター〉を発射したブルー・ティアーズであった。

（そんなものが、通用するとでも？）

即座にビームライフルを呼び出し、エネルギーを込める。

……が、ブルー・ティアーズは予想を超えた加速でこちらに接近し、そのまま私を蹴り飛ばそうとした。

なるほど、速い。

瞬間的な加速度なら福音と同じか、それ以上か。

まさしく驚異的だ。
ならば。
その速さ、利用させて貰う。

ビームライフルを構えたまま、タクティカルアームズを誘導する。
空中でソードフォームに変形させ、私とセシリアの間で待機させる。
相手からすれば、いきなり刃が出現したように見えただろう。セシリアの慌てた顔がはっきり見える。

――が、唐突にセシリアの動きが停止した。
そう、まるで、慣性を奪われたかのように……

次いで、タクティカルアームズの腹に向け、砲弾が飛んでくる。
超高速に加速された弾丸――ラウラのレールカノンだ。
私はタクティカルアームズを下降させながら、ガトリングフォームへと変形させる。
剣先が二つに割れ、その間を弾丸が通り抜けていく。
その弾道を見送りながら、即座にガトリングを起動し、未だに静止しているセシリアへと弾丸を発射する。

「甘い！」

叫んだのはラウラ。
左眼を覆う眼帯を外し、金色の瞳でこちらを睨むラウラは、発射されたガトリング弾を静止させていく。
ＡＩＣ……。これほどの距離からでも発動できるなんて。
侮れないわね、あの左眼……ヴォーダン・オージェだったかしら。
人間に疑似ハイパーセンサーを埋め込むなんて、どういう頭をしてんのかしら？
まあ、手っ取り早く他人を超えたいなら、肉体改造が一番かもしれ

ないけど。

……とまあ、戦闘中にもかかわらず私がこれだけ余裕なのには、実は理由がある。

「なっ!?止まってませんわよ!」

そう。セシリアに向かったガトリング弾は、すべて静止している。
でも、もう一種類……緑色のビームガトリング弾は、休むことなくブルー・ティアーズの装甲を抉り続けていた。

ラウラは即座にセシリアを開放し、セシリアも持ち前の機動力で緊急離脱する。
負ったダメージは最小限……いい判断だ。

「驚きましたわ。まさか、ビームを撃てるなんて……。」
「…バスター戦で学んだ。」

あの時、ビームが使えればもう少し楽に戦えていた。
そう思って紅也に相談したら、8を使って新しい設計データを送ってくれた。
早速そのシステムを試してみたら……結果は上々だったというわけだ。

「…今度は私から行く。」

返事を待たずに、私は新たに編み出した技術で、ラウラへと肉薄する。
左肩、背中、右肩、そしてまた左肩……という順で、絶え間なく瞬時加速を行う。

これは、訓練中に思いついた技。こうすることで、常時瞬時加速のスピードを出しながら戦闘できる。
三基の高出力スラスターを持つ、ブルーフレームだからこそできる反則技だ。

「くっ、速い……とでも言うと思ったか！」

しかし、阻まれる。
ラウラの前に展開した、ＡＩＣの網。それが私の行く手を阻んだ。

――でも。

「！　バックパックが……無い！？」
「剣までは……阻めなかったわね？」

さっき、伏線を張ってあげたのに。
タクティカルアームズは、誘導兵器として使えるって。
でも、驚いた。ラウラは、前にやり合ったときよりもだいぶ腕を上げてる。
これは、将来が楽しみね……。

スラスターへの直撃を受け、黒煙を吹き出すシュヴァルツェア・レーゲンを見ながら、私はそう思った。

「…で、セシリアはどうするの？」
「……はあ。ギブアップですわ。
確かその剣、アンチビームコーティングされてますもの。レーザーライフルでは太刀打ちできませんわ。」

そう言って、セシリアは悔しそうに地上へ降りていく。

…これで、私の勝ち。

――それにしても。

さっき、セシリアがＡＩＣで停止した後の私の動き。

周囲の景色がゆっくりと流れていって……まるで、あの時みたいだったな。

やっぱり、実戦の中でのみ発揮されるタイプの能力なのかな？

セシリアを追って地上に降りながら、私はそんなことを考えていた……。

第７７話　試練の終わり（主に一夏にとって）（後書き）

・葵は、個別連続瞬時加速（リボルバー・イグニッション・ブースト）を思いついた

次こそ夏休みです！

第７８話　８月。多くにとって突然に、それは起こった……（前書き）

久々の定時投稿！な第７８話です。
まだ四巻には入りません。

第７８話　８月。多くにとって突然に、それは起こった……

８月。ＩＳ学園は、遅めの夏休みに入った。
これは、普通の学生ならば喜ぶべき所なんだろう。
現に、クラスの女子のほとんどは国に帰る予定を立てたり、友達と遊びに行く予定を立ててる。
でも、私はそうはいかない。
だって私は、代表候補生だから。
夏休みといえば、日ごろのデータを国や企業に届けたり、それらが主催するイベントに出たり、雑誌の撮影があったり……とにかく、仕事が多いのだ。
ただ、いいこともある。
オーストラリアに戻れば、久しぶりに紅也に会える。
普段から話したいことは全部電話で話してるけど、最近はなかなか電話に出てくれない。
何でも、モルゲンレーテのＩＳ開発で大きな動きがあったとかで、紅也はそっちにかかりきりみたいだ。
だから……やっぱり直接会って、話したい。

◆

部屋に戻った私に、まるで見張っていたかのようなタイミングでメールが届く。
差出主はモルゲンレーテ。件名は「帰還命令」。

…そら、来た。

あまりに早かったその連絡に辟易しながらも、メールを開く。

『ＩＳ学園も夏季休業に入ったようなので、明後日までにオーストラリアに戻ってこい。
　第二形態移行したブルーフレームの性能評価、単一仕様能力の解析、およびデータ取りを行う。なお、デュノア社から出向している専用機持ちも連れてこい。新型ＡＳＴＲＡＹのテストパイロットをやってもらう。』

……とまあ、内容はざっとこんな感じ。
正直非常にめんどくさいうえに急だったけど、命令だからしょうがない。
それに、こういう事態も想定してた。だから、準備は出来てる。
後は、シャルロットにも伝えないと……

コンコン。

私の思考は、控えめなノックの音で中断された。
……あらまあ。噂をすればなんとやら。
相手に確信を持ちつつ扉を開けると、果たしてそこにいたのはシャルロットだった。

「葵、急にゴメンね？あの……僕のところに、こんなメールが来たんだけど……。」

という言葉と共に差し出された携帯の画面を、私は注視する。
このアドレスは……エリカさんか。文面は一言。

『待ってるわよ。』

……はあ。これじゃ、何を言ってるか分からない。

「ね、ねえ。これ……嫌がらせとか、呪いのメールだったらどうしよう？」

「…シャルロット？」

あれ？ひょっとして、エリカさんのアドレスだと気付いてない？

「じ、実は昨日ね。ラウラに勧められて、一緒に日本のホラー映画を見たんだけど……。

ちょうど、映画の中にも同じようなシーンがあったんだ……。」

「……。」

へえ、意外。

シャルロットって、普段からしっかりしてるけど、ホラー（こういうの）は苦手なんだ。

そんなんじゃ、この先生きのこれないぜ。…なんちゃって。

「で、でね？次の日の深夜に、ドアの外で水の滴る音がしてね……」

「…シャルロットさーん？」

「そしたら、ケータイが鳴るんだ。電源を切って、水に沈めたはずなのに……！！」

…ダメだ、早くなんとかしないと。

しょうがない。こうなったら、最後の手段だ。

……え？何もしてないのに『最後の手段』はないだろ、だって？

そう言われても……こういうのは、お約束だから。

「『落ちつけよ、シャル。』」
「ふえっ!?　い、一夏!?」

シャルロットが飛び上がり、私の方を向く。
そして……視線をキョロキョロと左右に走らせた後、どこか呆けたような表情で私を見た。

「あれ……一夏は？」
「『俺は、最初からいないぜ。』…さっきのは、私。」
「え？また一夏の声……って、葵!?今の、声真似だったの！」
「…うん。」

こんどこそ驚愕の表情を浮かべるシャルロット。それを見た私は、ちょっとだけいい気分になった。

「…で、落ち着いた？」
「う、うん……。恥ずかしいところをお見せしました……。」

そう言って小さくなったシャルロットは、どこか小動物みたいだった。
…可愛い。

「…さっきのメールの差出人は、エリカさん。」
「えーっと……確かエリカさんって、モルゲンレーテのＩＳ開発主任だったよね？」
「そう。さっき私にもメールが来て、明後日までにモルゲンレーテに行くことになった。
…シャルロットと一緒に。」
「……え？ぼ、僕と!?何でまた……。」

「…新型ＡＳＴＲＡＹ、ＭＢＦ－Ｐ０６。そのテスト操縦者に、あなたが抜擢された。」

ＭＢＦ－Ｐ０６。
オレンジフレームとも呼ばれるその機体は、ブルーフレームのコンセプトをさらに発展・実戦向けにした仕様らしい。
ブルーフレームが多くの装備を整えることで多様な状況に対応するのに対し、オレンジフレームは複合武器を持つことで様々な状況に対処する。
この機体を使いこなせるのは、私以外ではシャルロットしかいない。

……と、いうのが、シャルロット抜擢の理由だそうだ。
しかも、推薦文は紅也が書いたものらしい。…何か、おもしろくない。

「あ、あはは……。ちょっと、照れるなぁ……。」

シャルロットなんか、見るからに嬉しそうだし。
あなたは黙って一夏の尻でも追いかけてなさい。

「……って、ちょっと待って。葵の機体がＰ－０３で、紅也の機体がＰ－０２だったよね？」
「…うん。」
「で、例のゴールドフレームがＰ－０１だから……Ｐ－０４とＰ－０５は無いの？」
「…ある。でも、二機ともＩＳじゃない。」
「ＩＳじゃない、って……。
……ああ！レッドフレームみたいなパターンか！」
「そう。」

もっと厳密に言うなら、Ｐ－０４、グリーンフレームが『男でも使えるＩＳ』で、Ｐ－０５、パープルフレームが『無人機』だ。
アイツ曰く、青＋黄である緑は、赤の後継。赤＋青である紫は、黄の後継。黄＋赤である橙は、青の後継なのだそうだ。
とはいえ、ただコンセプトを受け継いだわけではない。それぞれの機体は、ベース機が持っている長所を最大限引き出しているらしい。
特にＰ－０５……パープルフレームは、無人であることを活かした簡易変形機構を採用するらしい。あくまで予定だけど……紅也曰く、
「変態的」な仕上がりになるそうだ。

…コジマはまずいわよ？

「それにしても……オレンジか。リヴァイヴと同じ色だね。偶然かな？」
「…さあ？」

ひょっとしたら、それをも考慮しての抜擢かもしれない。
……それにしても。
オレンジフレームがシャルロットの機体になるんだったら、今の専用機――ラファール・リヴァイヴ・カスタム？はどうなるんだろう？

◆

シャルロットに荷造りをするように伝えた私は、少し寮内をふらつくことにした。
深い意味は無い。ただ、ヒマだっただけだ。

周りを見渡せば、楽しげに談笑する女子の姿。誰もが夏休みの予定の話題で盛り上がってる。教室と同じだ。

……はあ。私も昔は、そういう話題で盛り上がってた気がするけど、もう違う。

専用機持ち特有の悩みか……。贅沢に思われるかもしれないけど、けっこう深刻だ。

そんな、若干恨みがましい目で周りを見てたからだろうか。私の視界に、周囲の会話から取り残された、水色の髪の女子が映り込んだ。

あれは――簪か。

ちょうど話し相手が欲しかった。この際、簪でもいいや。

そういう結論に達した私は、なんとなく気配を消して簪に忍び寄る。

簪はぼーっとしていて、何を考えてるのか分からない。

そこで、そーっと耳元に顔を近づけ、唇をとがらせ……

フッ、と。

簪の耳に、息を吹きかけた。

「うにゃあ!?」

どこぞの金髪ツインテール合法ロリ理事長のような叫び声を上げ、簪が飛び上がる。

一方、周囲も突然叫び声を上げた簪を見て、何事かとうわさし始める。

その反応を見た簪の顔は、羞恥で真っ赤に染まっていき……

ここで、ようやく私の存在に気付いた。

「葵！何するの！」

「何って……。ため息ついたら、たまたま簪がそこにいただけ。」

驚いた。
簪が、こんなにアグレッシブな話し方をするなんて。
しかも、名前を呼び捨てにしてるし……。
まあ当の本人は、今の行動でさらに周囲の注目を集めたことに気付いて、また顔を赤くして俯いてるけど。
「……うう、恥ずか……しい。」
あ、簪デストロイモード（命名：私）が解除された。
もうちょっと見てみたかったのに……。つまらない。
「で……本当に、何の用……？」
「…特に用は無い。でも、話し相手がほしかった。」
「……そう。」
一言、そう呟いてから、簪は私の方を見た。
それを肯定の意と受け取った私は、そのまま話を始めた。
「…みんな、夏休みで浮かれてる。」
「そう、だね……。」
「でも、専用機持ちは、素直に楽しめない。」
「……それ……私への、当てつけ？」
「…違う。簪だって、打鉄弐式の戦闘データ提出とか、偉い人へのあいさつとか……あるでしょ？」
「……うん。あれは……拷問。」
「…同感。息が詰まる。」
「私の場合……専用機も未完成だし。……しかも、倉持技研は……稼働データだけは持っていくし……。」

「…せこい。」
「はあ……いっそのこと……白式なんて、無くなっちゃえばいいのに。」
「……もし無くなっても、一夏には別のコアが与えられると思う。」
「……そうだね。ずるいや。」

私と簪。
二人とも、元々そんなに口数が多い方ではないから、どうしても会話が途切れがちになる。
でも、こうやって愚痴を言うときだけは、なぜだか会話が長続きする。…不思議だ。

「不思議だ、じゃないわよ!!」

横合いから、聞きなれた元気な声が聞こえてくる。

「……凰(ファン)さん?どうし、たの……。」
「どうしたもこうしたもないわよ!廊下を歩きながら、みんな楽しそうだなーって思ってたら、一か所だけ暗いオーラが出てたから近寄ってみたら……。話題が暗いわ!!」

そう言って、がおーっ、と吠える鈴音。
おまえはどこぞの虎か。

「…鈴音は、夏休みの予定は?中国に帰ったりとか……。」
「いずれは帰るけど、しばらくはこっちにいるわ。……セシリアやシャルロットは国に帰るだろうから、今のうちに……。」
「……鈴音?」
「うへ、うへへ……」

……駄目だ。トリップしてる。
鼻にジュースでも突き刺すか。それとも、持ち物を取り上げるか。
あるいは……

「む、三人とも、そんなところで何をやっているのだ？」

……あ、ラウラだ。ちょうどいいところに。

「…ラウラ、ちょっとこっちに来て。」
「む、何だ？」
「いいから、ここに立ってて。鈴音が起きるまで。」
「……それが何になるというのだ……。」

文句を言いつつもやることはやる。それがラウラクオリティーだった。
さて、後は物陰に隠れて、様子を見物させて貰おうかな。
だって、これでしばらくこのメンバーとは会えないんだもの。
少しくらい、遊んだっていいでしょ？

◆

〈ｓｉｄｅ：篠ノ之　箒〉

明日からは、夏休み。
だというのに、私の気分は一向に明るくならない。
原因ははっきりしている。……紅也だ。

葵は、なんともないと言ってる。でも、何かが引っかかるのだ。
福音と戦ったあの時……。
何か、大事なことを見落としてた気がする。
それがここ数日、ずっと気になっていた。

だから、私は……

「もしもしー、箒ちゃん！そっちからかけてくるなんて珍しいね。どーしたのかな？」
「……姉さん。一つ、頼みがあるんだ……。」
「んー、何かなー？今ならお姉ちゃん、何でも聞いちゃうよー！ぶいぶい！」
「明日……私を迎えに来て欲しいんだ。」

第７８話　８月。多くにとって突然に、それは起こった……（後書き）

……さて、このままだと四巻が原作そのままになりそうだ。

とうとう出しました、オリジナルアストレイ！

まだ実用化はされてませんが、期待しないで待ってて下さい。

第７９話　世界には、自分そっくりな人が３人いるって言うけどな……（前書き

久々の本編です。
外伝は佳境に入ってきました。この話は、入院編第５話と同じ日の出来事です。

主役がみんなオーストラリアに行っちゃったので、メインは一夏です。

第７９話　世界には、自分そっくりな人が3人いるって言うけどな……

「では、わたくしはここでお別れですわね。葵さん、シャルロットさん、ごきげんよう。」
「うん、またね。」
「…バイバイ。」

空港で、私とシャルロットはセシリアに別れを告げる。
どうやら、帰還命令が出たのは私たちだけじゃなかったみたい。セシリアもまた帰国すると言ってたから、時間を合わせて一緒に行くことにしたのだ。
でも、それもここまで。現在時刻は１０：３０。
セシリアの乗るイギリス行きの便は、もうすぐ飛び立つ。
私たちの乗るオーストラリア行きは、その３０分後だ。

「あーあ、行っちゃったね。」
「…うん。」

シャルロットと二人。空き時間をもてあまし気味。

「葵は、もう紅也には連絡したの？」
「…昨日のうちに。」
「そっか。じゃあ、今度は『今、空港』とか送ってみたら？」
「…子供じゃないんだから。」
「あ、アハハ……。そうだね。
でも、そのくらいいいんじゃないかな。……せっかく、兄妹仲がいいんだから。」

…ふう。シャルロットは、なんか誤解してるみたい。

「私たちは、深い所で繋がってる。連絡は、昨日の分だけで十分。」
「深い所……？それって、いわゆる双子どうしのテレパシーってやつ？」
「…そんな感じ。」
本当は、それだけじゃない。
後天的な遺伝子強化を施された母から生まれた双子。それが私と紅也。
その精神の結び付きは非常に強く、離れていても互いの気持ちを確認できるほどだ。
でも……何だろう？
この、胸に感じる、“焦り”の正体は……？

◆

〈ｓｉｄｅ：織斑　一夏〉

夏休み二日目。
昨日はいろいろ大変だった。
昼過ぎに箒と一緒に呼び出されたと思ったら、紅椿や白式の登録に関するいろいろな書類を読んだり、署名したり……とにかく疲れた。
そのせいで、今日は完全に寝坊。
まあ、休日だからいくら寝ててもいいんだけどさ……。

で、今日。
とりあえず久々の休日を楽しみたくなった俺は、実家に帰ろうと思って、箒に声でもかけていこうかと思ったわけだけど……

「あれ、箒は留守なのか？」
「う、うん。なんだか、今朝早くに出ていったけど……。」

ルームメイトの子（名前は覚えてない、ゴメン……）が言うには、剣道部の朝練が始まるような時間に出ていって、そのまま帰って来なかったらしい。
簪の言ったように、拉致されたわけじゃないよな？
まあ、千冬姉が動いてないなら、外出届は出てるんだろうけどさ。

「そっか。ありがとな。」
「え、う、うん。こっちこそ。」

軽く挨拶をして、再び寮の廊下を歩く。
……うーん、鈴あたりを誘ってもいいけど、代表候補生って忙しいらしいからな。
しょうがねぇ、今回は一人で行くか！

◆

久しぶりに歩く、ＩＳ学園の外。
周りの男女比を見て、改めてここが学園外なのだと実感する。
基本、ＩＳ学園って女子しかいないもんな。例外は俺と紅也だけど、

紅也はとうとう戻って来なかったし……。
あいつ、元気にしてるかな？便りが無いのは元気の証拠、っていうけど。
ここまで連絡してこないとなると、逆に心配だ。
まあ、葵は『心配いらない』って言ってたし、だったら大丈夫だろ！

バスに乗り、住み慣れた街を目指す。
最後に家に戻ったのは、学園に入学する前だった。
実に４カ月ぶりの帰宅。なんだか、ずいぶんと久しぶりに感じる。
のろのろ走るバスに揺られること十数分。中学の通学路にあったバス停で降車した俺は、徒歩で自宅へと向かう。
……懐かしいな。４カ月前まではここを、五反田と一緒に帰ってたんだな。
もっと前は、鈴も含めて三人で。
そういや、あの時から気になってたんだけど、鈴の家って微妙に方向違うんだよな。
何で、いつも一緒に帰ろうとしてたんだろ？
ううむ、謎だ。今度聞いてみようかな。

なんてくだらないことを考えていたら、あっという間に家に着いた。
家の中は無人……千冬姉はまだＩＳ学園にいるから、当たり前だ。
カバンから鍵を取り出し、少しだけ緊張しながら扉を開ける。

ガチャッ、バタン！

そして、すぐに扉を閉める。

……間違えた。どうやらここは、俺の家じゃなかったようだ。
まったく、うっかりしてたぜ。久々に帰ってきたら、家を間違えるなんて。

そうだよな！
表札は『織斑』だったけど、織斑なんて名字、俺達だけじゃないし。
最後に帰って来たのは４カ月も前だから、住所間違えたのかもしれないし。
鍵だって、家と同じ奴を使ってる家があってもおかしくは……
おかしくは……

……いや、おかしいだろ！！

ああ、認めよう。
ここにある『織斑家』は、間違いなく俺の家だ。
見た目は全然変わってないし、当然住所も合ってる。
じゃあ、何だ？
俺は答えを得るために、もう一度玄関を開ける。

「何で、こんなに散らかってるんだぁーーーー！！」

記憶のままだったのは、家の外観のみ。
肝心の中身は、知らないうちに魔窟と化していた。
まあ、魔窟と言っても、別に結界張ったり悪霊放ったり廊下の一部を異界化させてる訳じゃないけどさ。
でも室内は、劇的にビフォーアフターされていた。
ある意味異界。

廊下には、無造作にゴミ袋が３つ。しかも、一枚は穴があいてる。
台所には、茶碗が一つと大量の小皿。ついでにスチロールトレーが山盛り。
机の上には、２０禁飲料の空き缶……何を思ったか、タワー上に５本重ねてある。

ホント……なにやってるんだ、千冬姉！！

はあ……。これじゃ、今日一日は片付けで潰れるかな。

文句を言いながらも、俺は片付けを始める。

……そういや、燃えるごみの日は昨日だったな。アルミ缶も先週。

かろうじて、資源ごみの回収だけは間に合いそうだけど……やる気、出ねぇなあ。

ため息を吐きつつも、俺は実家の清掃を始めるのだった……。

◆

４時間後。

あらかたゴミを片付け、床に掃除機をかけ、ついでに途中で発見した洗濯物類も洗い終えた俺は、ようやく一息つくことができた。

ああ、これぞ我が家。

この家の本来の姿は、こうやって掃除が行きとどいた状態だ。

断じて、千冬姉が作り出した異界ではない。

つーか、ゴミ箱の裏で変なきのこを見つけたときは、マジで驚いたぞ。

……っと、話が逸れた。

家に帰って来たのが１１時頃で、それからずっと片付けをしてたわけだから、当然、俺は昼飯を食べてない。

とりあえず食事だ。あるもので何か作ろう。

そう思った俺は、冷蔵庫を開く。

……レタスが腐って、ドロドロになってた。

しまった。

こっちの片付けを忘れてた。

いや、それはいい。

よくは無いんだけど、この際置いておく。

問題は、食料が一つも無いってこと。

しょうがない、今日はコンビニ弁当とかで我慢するか。

家に着いたのはいいけど、全然休めてない気がする。

かくして、俺は再び外を歩く。

太陽はあいかわらず地球全土に光を送り続けて、大地を温め続けてる。

まさに、夏の太陽さまさま、って感じだ。

ちなみに、今のは夏とサマーをかけた洒落だ。シャルあたりがいたら即座につっこんでくれるんだろうけど、あいにく今は留守……らしい。

なんでも、葵と一緒にオーストラリアに行ったとか。代表候補生も大変だな。

――と、そんなことを考えてたからだろうか。

何となく周囲を見ながら歩いていた俺は、見覚えのある青い髪に目を惹かれた。

簪？

違う。あれは……葵の髪だ。

人込みの中に消えたその姿を、俺は思わず追いかけた。

葵は、決して背が高い方ではない。だからこそ、俺は彼女の姿を見失わないように歩く。

そして――見つけた。

「葵！お前、どうして……」

声に気付き、葵が振り返る。
肩までかかる長い髪、日系にしては白い肌、紅也と同じ、緑色の瞳、
そして――

「……あれ？」

違和感を感じた。
具体的には、その……胸元に。
目の前にいる葵は、普段と比べて……なんというか、スレンダーな体型だった。

「んー、君は……ひょっとして、織斑一夏くんかな？」
「え？は、はい、そうですけど……。」

やばい。
やっぱり、人違いだ。
恥ずかしさで、顔がかあっと赤くなる。
それと同時に、俺は葵とそっくりなこの人が何者なのか、考えていた。
うーん……。やっぱり、葵と似すぎてるような。

「……あ、もしかして、紅也と葵のお姉さん……とか？」
「あらあら、嬉しいことを言ってくれるわね。」

そう言って、目の前の葵みたいな女性は、手で口元を隠して笑う。
その、落ち着いた大人のような動作に、思わずくらりときた。

「……で、お姉さんはどうしてこんなところに？」
「そうねぇ。キミに会いに来た、って言ったらどうする？」
「えっ！？いや、その……」

再び慌てる俺。その動作を見て女性は満足したのか、「冗談よ」と言って言葉を続ける。

「葵に会えるかと思ってここまで来たんだけど……。一夏くん、葵がどこにいるか知ってる？」
「あ、はい。なんでも、今日、オーストラリアに出発したとか。今はもう日本にいないはずです。」
「そうなの。ま、キミに会えただけでも幸運だったかな？」

うーん、この人と話してると調子が狂うなぁ。
こういう人は今まで俺の周りにいなかったから、変な感じだ。
タイプ的には束さんに近いんだけど、どこか掴みどころがないっていうか。

「じゃ、私はもう行くわね。また会いましょ、織斑一夏くん。」

バイバーイ！と一方的に手を振り、女性は去っていった。
そういえば、結局名前を聞かなかったな。今度、葵に聞いてみようか。
そこまで考えて、俺は先月の事を思い出した。

『あ……葵って、国家代表だったのか？スゲーな。代表候補生より上じゃねえか。』
『ああ、ただのハッタリよ。これは母さんの身分証。』
『そっくりだな……』

「……あれ、お姉さんじゃなくて、母親……？」

思い至ったその結論に、俺は愕然として立ちつくすのだった……。

第７９話　世界には、自分そっくりな人が３人いるって言うけどな……（後書き

……と、いうわけで新キャラ登場。
再登場はだいぶ先ですかね。
明日の８時には外伝を更新します。葵分が足りない人はそちらへどうぞ。
ただ今、絶賛シリアス中です。

第８０話　それぞれの夏休み。ある日の一夏（前書き）

第８０話をお届けします。
久々に紅也登場です。外伝では主役だったけど、こっちでは……
それと前回、「葵分が足りない方は～」って書きましたが、ごめんなさい。
葵の出番、ゼロでした。

タイトル通り、メインは一夏。ほとんど原作のコピーですけど、それでも良い方はどうぞ！

第８０話　それぞれの夏休み。ある日の一夏

オーストラリアに着いた私達が最初に向かったのは、紅也の病室だった。
シャルロットと二人でドアの前に行き、ノックをする。
最低限の礼儀……ってわけではない。もし紅也が着替え中だったり、アレを使ってなかったら、困るからだ。……主にシャルロットが。

「…入っていい？」

念押しで、言葉をかける。
紅也なら、もう私達の気配に気づいてるはずだけど、念のためだ。

「いいぜ。二人とも、入ってくれ。」

肯定の意を受けて、私はドアを開ける。
「何で二人って分かったんだろう……？」って、シャルロットが呟いてたのが面白かった。
そして、そんなシャルロットを見て、紅也は不思議そうな顔をしてた。

「久しぶりだな、二人とも。」

右腕を上げ、紅也が挨拶する。
その表情は、どこかほっとしたような感じで……。
何かあったんだろうか？

「久しぶり、紅也。入院してるってわりには、元気そうだね。」
「まあな。元々検査入院だったし、今となってはいつでも退院でき

るからな。」
「へえ。じゃ、何でまだ病院にいるのさ?」
「ここの方が、職場に近いんだよ。おかげで、毎日仕事漬けだ。」
「……早く退院したら?」

シャルロットと言い合いをしている紅也は、見事なまでに「いつも通り」だった。
そのわざとらしさに不安を感じつつも、私は本題を切りだすことにした。

「…レッドフレームは?」

ぴたり。
紅也の動きが、止まった。

「……9月までの修復は困難だ。」
「…じゃあ、グリーンフレームに乗るの?」

もしグリーンに乗るなら、そろそろパーソナルデータを入力しなきゃいけないはずだ。

「……断られました。」
「…え?」
「だ・か・ら!断られたんだよ!『グリーンフレームには俺以外を乗せる』ってよ!」
「えーと、それってつまり……今の紅也には、専用機が無いってこと?」

私の発言に対し、紅也がふてくされた表情で答える。
そしてシャルロットの核心をついた言葉により、とうとう紅也はそ

っぽを向いてしまった。
…子供か。
まあ、いつまでもこの空気なのはいたたまれない。何か、別の話題を探すことにしよう。
さて、何かいい話題があるかな。
……あ。
「そういえば、この間、シャルロットがエリカさんからメールを受け取ったときに……」
「ちょっ!?あ、葵!その話は秘密にして、って言ったよね、僕!」
「…兄妹に秘密はなし。」
「昔約束したんだよ。『僕たち兄弟は、互いに嘘をつかない』って。さあ、話せ。」
「違うよね!?多分だけどそれ、紅也と葵の話じゃないよね!?」
シャルロット、正解。
某帝国の９８代皇帝と、その兄の会話だ。
まあ、正解しても何が変わるわけじゃないんだけど。
「メールを見たとき、シャルロットが……」
「わー！わー！わー！」
「シャル子が?どうしたんだ?」
「紅也も聞かないでぇぇ！」
先程までの空気は一転、にぎやかな雰囲気に変わる。
これが、紅也が秘密を隠してまで守りたかった、日常。
願わくば……こんな日が、永遠に続きますように。

◆

〈ｓｉｄｅ：織斑　一夏〉

あの、衝撃的な出会いから一週間。
家にいてもやることがなくなってきたから、俺は一度ＩＳ学園に戻ることにした。
だって、なあ。
初日で片付けを終えて、二日目以降にダラダラしたり、五反田のとこに遊びに行ったり。
早い話が、やることがなくなったのだ。

（……まあ、ＩＳ学園なら、誰かしらいるだろ。）

というわけで４カ月使った自分の部屋へと戻り、家から持ちこんだ私物や、逆に持ち帰るものを選び、整理してると、荷物の隙間からパサリ、と何かが落ちた。

（ん、このレポート……提出期限が今日までだったっけ。）

おっと、一応ことわっておくが、未提出ってだけだ。
レポート自体に手をつけてない、って訳じゃない。
勉強教わったとき、葵に散々言われたからな。「課題は早めにやっておけ」って。
あいつと紅也を見てると、ときどきどっちが兄なのか姉なのか、分からなくなる。

いや、そもそも双子なんだから、明確な違いは無いんだろうけど。

（ま、とりあえず、やることやっとくか。）

そう思いなおした俺は、レポートを手に持ち、職員室へと向かった。

そして、その帰り道。

部屋に向かってゆっくり廊下を歩いていると、目の前を歩く見慣れたツインテールが。

――そういや、最近鈴と話してねえな。

そう思った俺は、ちょっとした悪戯心を持って、足音を消して鈴に近づく。

後ろから肩でも叩いて、驚かしてやろうかと思ったんだが……。

あと少しで手が届くその距離。そこで、突然鈴が振り返った。

まあ、そりゃばれるか。

ＩＳが使えるといっても、それを除けば俺はごく普通の一般人。

それに対して鈴は、こんなナリでも代表候補生だ。

素人の尾行くらい、簡単に気付くってことか。

理屈じゃわかるけど、なんか面白くねえな。からかい甲斐がないというか、なんというか。

「い、い、一夏!?な、なんでアンタここにいんのよ!へ、部屋じゃないの!?」

あれ、予想外の反応。

まさか、たまたまUターンしたところに俺がいた、とか？
いやいや、それこそ有り得ないだろ、確率的に。

「いや、レポートの提出忘れてたから。ん？何持ってるんだ？」

話してる最中、俺は鈴が何かを握りしめてる事に気付いた。
あの形状からいって……レシート？あるいは、福引券とか？

「な、なんでもないわよ！」

正体を見極めるため、もう少し良く見ようと顔を近づけると、鈴はそれをさっと背後に隠してしまった。
うーん……何してんだ、コイツは。
そう思ったのが伝わっちまったのか、鈴は急に咳払いを始めた。
……ホントに何なんだ？

「きょ、今日は暑いわね。」
「ん？そうか？涼しい方だぞ。」
「暑いのよ！この国の夏は昔から！」
「あー、そういやお前昔から暑いのダメだっけ。」

そうだった。
こいつは家に来るたびにクーラーをガンガン効かせて、涼んでたっけ。
そういや、なんか顔も赤くなってるし……暑いんだろうな。

「そんなに暑いなら、俺の部屋でも行くか？エアコンつけるぞ。」

この廊下、あんまりエアコン効いてないからな。
確か、設定温度は２８度までだったか？エコはいいけど、人間ガマ

ンは良くないぜ。

「ま、まあ、そうね。じゃああんたの部屋に行ってあげる。飲み物出しなさいよ？」

「へいへい。麦茶でいいよな。」

「冷たけりゃなんでもいいわよ。」

やれやれ。何で無意味に偉そうなんだ、こいつは。

まあ、それが鈴らしさなんだろうな。

鈴と二人、並んで部屋まで歩きながら、俺はそんなことを考えた。

ちなみに、鈴も鈴でなにやら考え事をしてるらしく、急に俺から距離をとったり、腕組みしながら歩いたりと忙しそうだった。

そうこうしてる間に、部屋の前までたどり着く。

俺はそこで止まったけど、鈴は気付かずに歩き続ける。

そのまま放っておいたら、どこまでも歩いていきそうだ。

「鈴。」

名前を呼ぶも、聞こえてない様子。

「鈴？」

今度は近くで名前を呼び、ついでに顔を覗き込む。

「なっ、なによ！」

ようやく反応があった。

「なによって、部屋ついたぞ。入れよ。」

「わ、わかってるわよ、バカ……。」

バカ、って。
俺はまっとうな発言をしただけだけど？
部屋のドアを開けながら、俺はそんなことを考えた。

◆

それからしばらく、鈴と昔の話をした。
一緒に撮った記念写真のこととか、アルバムを見ながらの思い出話とか、後、何故かビンタされた。
俺、何かしたか？
あ、それと、明日遊びに行く約束をした。
なんでも、新しくできたウォーターワールドのチケットが手に入ったらしい。
その値段、なんと２５００円。二枚でディ○ニーランド一回分に相当する。
まあ、せっかく誘ってくれたから、購入することにした。

……それにしても、明日か。
ちょっと急じゃないか？

とにかく、先週家に持って帰ってしまった水着を取ってこようと思い、こうしてＩＳ学園の外へ出ようと思い立ったわけだけど。
そこで俺は、意外な人物と顔を合わせることになった。

「ん？お、セシリア。」

その人物とは、イギリスに帰省していたはずのセシリアだった。
スーツケースを持ってるってことは、残りの休みは日本で過ごすのか？
それにしても、後ろにある白い車って、セシリアの実家で用意したんだよな。
見るからに高級そうだ。普段は実感ないけど、ホントにお嬢様なんだな。

俺に気付いたようで、セシリアはぎこちなく振りかえる。
何ていうか、「ぎぎぎ」って擬音が似合いそうなくらい、不自然に。
ゆっくりと。

「よっ。」
「一夏さん、一週間ぶりですわね。ごきげんよう。」

ちょこん、と。
スカートをつまんで挨拶をするセシリア。その様子も、どこか不自然で……
……あ、わかった。きっと、帰ってきて早々に俺と会うとは思わなかったから、驚いてるんだな。
確かに、今のセシリアはぼーっとしてるし、心の準備が出来てないってのがよくわかる。
いや、分かるぜ、その気持ち。
俺だって、予想外の場所で友達に会ったら、ちょっとは動揺するし。
まあ、いつまでも無言ってのもダメだな。向こうが緊張してるんだったら、こっちから声かけねえと。

「セシリア？」
「――はっ！？」

「大丈夫か？ぼーっとして、もしかして熱射病か？気をつけないとダメだぞ。夏の熱射病は危ないんだ。」
「い、いえっ！大丈夫です！その、さっきまで車の中でしたから、すこし立ちくらみをしただけです！」
……なんでそんなに必死そうなんだ？
まあ、こっちの方が『いつものセシリア』っぽいな。

「そうか。それならよかった。」
「ええ、まったくです。」

しかし返事をしたのは、セシリアではなかった。
唐突に響いた、聞いたことのない女性の声。
シチュエーション的に紅也とのやりとりを連想し、とっさに後ろを振り返った俺が見たのは、やっぱり見たことのない女性だった。

「ん？えーと、どちら様でしたっけ。」
「お初にお目にかかります。セシリア様にお仕えするメイドで、チェルシー・ブランケットと申します。以後、お見知りおきを。」
なんと、本物のメイドさんだ。……って、待てよ。どっかで聞いたことのある名前のような。

「ああ！前に一度、セシリアからお話は聞いていましたけど、あなたがそうだったんですか。初めまして、織斑一夏です。」
「はい。織斑様。――ときに、ご無礼を承知の上でおたずねしますが、私のことをお嬢様はなんと？」
「ええ。とてもよく気が利く方で、優秀で、優しくて――美人だって言ってました。」
「まあ。」

にっこりと、柔らかな笑みを浮かべるチェルシーさん。
そうそう。セシリアにしては珍しく、この人のことをベタ褒めだったからな。そのおかげで印象に残ってた。
……そのとき、一緒に話を聞いてた紅也が不用意な発言をして、セシリアにぶっ飛ばされたことも含めて、よく覚えてる。
いや、だって、なあ。女同士って……。何考えてるんだよ、あいつは。

「私も織斑様のお話はよくお嬢様から耳にしております。」
「へえ、そうなんですか。ちなみに俺のことはなんて言ってました？」
「くすっ。それは……」

言いながら、チェルシーさんはセシリアの方をちらり、と見る。
つられて俺もそっちに目線だけを向けると、セシリアは動揺ＭＡＸ、いっぱいいっぱいな感じになっていた。
それを見て茶目っ気のある笑みを浮かべたチェルシーさんは、ゆっくりと人差し指を自身の唇に持っていき――

「女同士の秘密、です。」

男女問わず釘付けにするような表情で、そうおっしゃった。

◆

あの後チェルシーさんは車に乗って去っていき、俺とセシリアは学園内のカフェへと移動していた。
そこで一緒に話でも……と思ったんだけど、なんだかセシリアの様子がおかしい。

「……。」

なんだか、ずっとふてくされた表情で、しかも無言のまま、ひたすらアイス・カフェラテをかき回してる。
な……何だ？俺、何かしたのか？
先程までの行動を思い出す。
……うーん、特に問題になるような行動はしてないと思うんだけど。
まあ、いくら鈍感といわれる俺でも、こんな雰囲気は嫌だ。
気は進まないけど……聞いてみるしかねえよな。

「はぁ……。」

「いや、あのな？セシリア。どうしてそんなに機嫌が悪いんだ？……も、もしかして、俺のせいか？」

「そうですわ。」

「即答かよ……。」

思わずうなだれる。
なんだ？ひょっとして俺が誘ったこと自体が嫌だったとか？
言われてみると、ここに来てから――いや、来るちょっと前から、セシリアは不機嫌だった。
それは今でも変わりなく、セシリアは黙ってカフェラテを飲み続けてる。

「……。」

「……。」

お互いに、気まずい沈黙が続く。
……はあ。俺が悪いんだったら、俺がどうにかするしかないよな……。
所在なさげにポケットにつっこんだ手が、何かに触れる。
さっき鈴から買ったチケットだ。
なんでも、俺以外にも買い手がいくらでもいるほど、手に入りにくいチケットだとか。
……これだ！

「セシリア。」
「……はい。」
「ここに行かないか？」
「――はい？」

某特命係の警部のような返事が返ってきた。
うーん、けっこう高かったんだけど、仕方がない。
俺は当日券を買えばいいだろう。
念のため、開場1時間くらい前に買いに行くか！

第８０話　それぞれの夏休み。ある日の一夏（後書き）

えー、一夏は鈴の話をほとんど聞いてませんね。見事にフラグが立ってます。
ウォーターワールドに関しては、ほぼ原作どおりなので、一部省略します。

なお、外伝は明日の９時に更新します。噂のロリコン親父、登場です。

第８１話　事件は、リアルタイムで起こっていた（前書き）

お待たせしました、本編８１話です。
そういえば、角川コミックスから新しいガンダムが出ましたね。
いきなり効とフォンが無双してて興奮しました。

今回はガンダムのガの字も出ませんが、どうぞ。
例によって一夏が主役です。

第８１話　事件は、リアルタイムで起こっていた

さて、翌日、土曜日。
俺は、自分の甘さを思い知った。

「嘘だろ……こんなに混んでるなんて……。」

念には念をと、ウォーターワールドの開場１時間前に来たにもかかわらず、チケット売り場には長い行列ができていた。

とりあえず並んではいるものの、この人数だ。
チケットを買うことができるだろうか？いや、できない。
しかも……

（もうセシリア来てるし……。）

先程、どこかで見たような白い高級車がゲート前に止まり、中からセシリアが出てきた。
待ち合わせは１０時だったのに。まだ３０分くらい時間があるぞ！？
気まずい思いをしながら、俺はひたすら前だけを見ていた……。

◆

「はい、本日のチケットは完売です！ここより後ろの方、残念でした～！」

そう言って係員さんが看板を立てたのは、俺の目の前……だったら、どんなに良かったか。
あいにく、声は遥か前方から聞こえてきた。
つまり、ギリギリセーフでもアウトでもなく、完全なアウト。Ｊ１に昇格したいのにＪ２最下位みたいな状態だ。
ちなみに、現在時刻は１０：２０。既に鈴もゲート前に着いていて、微妙に距離を開けながら待ち人――つまり俺――を待ち続けてた。

どうしよう……。
このままノコノコ顔を出して、一緒に行けないなんて言ったら、鈴にボコされるに決まってる。
かといって、何も言わないのは論外。そもそも鈴には、セシリアも一緒に行くことを伝えてなかった気もするし。このままだったら、二人とも長い時間待つことになるだろう。

よし、決めた。
とりあえず、電話で話そう。

携帯を取り出す。
……って、あれ？シャルから着信があったのか？全然気付かなかった。
まあ、後でかけ直そう。今は鈴への言い訳が最優先だ。
メモリから鈴の名前を呼び出し、コール。

「もしもし！？あんた何してんのよ！今どこ！？」

なんと、ワンコールで出てきた。

「あー、それより、今日は急用が入って……」

「急用って何よ！そんなものが、あたしとの約束より大事なの！？」
「いや、その、だな。実はキサラギって企業が、俺に新開発の射突型ブレードを試して欲しいって言ってきて……」
「嘘おっしゃい！そんな変態企業、この世界にあってたまるか！」
う……。とっさに嘘が出ちまったけど、全然通用してないし。
つーか、鈴。声がここまで聞こえてきたぞ。周りの人も何事かと注目してるじゃないか。
「……って、あれ？何で、あたしの声がそっちから聞こえんのよ！」
……ｗｈａｔ？
「さてはあんた、近くにいるわね！？」
……バレた。
頭の中で、警報が鳴り響く。
慌ててキョロキョロと周囲を見渡し、逃げられそうな場所を探す。
が……その動作が、逆に人目を引いてしまったようだ。
たまたまこっちを見てたセシリアと、ばっちり目が合ってしまう。
見過ごしてくれるかとも思ったが、あろうことかセシリアは一直線に俺の所へ歩いてきた。
当然、鈴もその動きを見てるだろう。つまり……詰んだ。
「……見つけた。」
ぷつっ、と無情な音をたて、電話が切れる。
……はあ。覚悟を決めるしかないか。

せめてもの意地で、セシリアと鈴の方へ自分から歩いていく。

「よ、よう……鈴、セシリア。おはよう。」

「おはようございますわ、一夏さん。それで、これはどういう状況ですの？」

どうやら、セシリアはまだ何がどうなってるのか分からないようだ。

問題は、鈴。

「い、ち、か～っ！何でセシリアがここにいて、何でアンタがここにいるのよ！」

「あら、鈴さん。わたくしは一夏さんに誘われてここに――」

「そのチケットは！あたしが一夏のために用意したものなのよ！」

「――鈴さん。それは、どういうことですの？」

「どういうこともなにも、一夏はあたしが誘ったってこと。」

うお、やばい。

これ以上続けさせたら、ＩＳでも持ち出して暴れそうだ。

「だから、一夏にチケット返しなさいよ。そうすれば、あたしと一夏の二人で遊べるから！」

「そういう鈴さんこそ、チケットを差し上げてはどうですか？なにせわたくしは、一夏さんの方から誘われたのですから。」

「なあ、二人とも。いったん落ち着けって……」

「貴方のせいですわ！」「あんたのせいよ！」

バチーン！

二人の平手が、俺の頬を打った。

「ふん。なんだか、馬鹿らしくなっちゃった。怒鳴ったら喉も乾い

たし。」
「それでしたら、中で何か飲みませんか？せっかくチケットがあるんですから。」
痛みにもだえる俺を放置して、二人はウォーターワールドへ行ってしまった。
いや、説明する前にぶたれるって。
確かに俺が悪かったんだろうけど、ひどいな。
しかも……
「あの子、二股かけてたみたいよ。」
「えー。サイテー。」
「男の敵だな、リア充め。」
「女の敵よ。」
……何だか、誤解されてるし。
◆
結局その後、俺は寮に戻った。
早起きと理不尽な暴力によって疲れ果てていた俺は、私服のまま二度寝を開始。
そして気がついたら、時刻は3時。
……寝過ぎたな。
とりあえず、朝方着信があったことを思い出し、シャルに電話して

みるも、繋がらない。
忙しいのかな？
おとおい帰って来たときも、結構疲れた顔してたし。
きっとモルゲンレーテの方から、何か言われてるんだろうなぁ……。
がんばれ、代表候補生。

ヒマだったので、とりあえずテレビをつける。

「……えー、では、現場から中継します。佐久間さん？」
「はい、こちらは@クルーズ前です。ただいま、こちらには銀行強盗が立て籠っており、それを警察が包囲しています。」
「現場の状況はどうですか？」
「先ほど、大きな銃声がありました。それから……と、店内に何か動きがあったようです！」

ダダダダンッ！

「またしても銃声です！一体、中で何が起こっているのでしょうか？」

うわ～……大変なことになってるな。
中のお客さん、無事だといいけど。

「……速報です。未確認情報ですが、今月オープンしたウォーターワールドにて、ＩＳ二機が暴走を起こした模様です。詳しい情報が入り次第、続報をお伝えします。」

……何やってんだ、あいつら。
学園内のノリで暴れたら、人様に迷惑がかかるに決まってるだろうが！

「おっと、人質が解放されていきます！やはり、店内で何かがあったようです！」

画面は再び、強盗のニュースを映し出す。
どうやら、怪我人はゼロだったらしい。
しかも、なんか美少女メイドと美少年執事が強盗たちを無力化したとか……。
まるで漫画だな。綾崎ハ○テでもいたのか？

◆

それから数時間後。
俺は、シャルとラウラの部屋の前にいた。

実は、あれから何度も電話をかけてみたんだけど、一向に繋がらなかったのだ。
そのため、用件を聞こうと思ったわけだが……。

「ラウラ可愛い～っ！写真撮ろう！ね、ねっ！？」
「き、記録を残すだと！？断固拒否する！」
「そんなこと言わずにさ～。」

……なんか、楽しそうだな。
正直、この雰囲気の中に入っていくのは気が引けるけど……ええい！男は度胸だ！

コンコン。

とりあえずノック。

「はーい、どうぞ～。」

許可は下りたみたいなんで、入室。

ドアを開けると、ニコニコ笑顔のシャルと、困惑顔のラウラがじゃれあってた。

沈黙。

シャルの表情が笑顔から一転、パニックでも起こしたかのように真っ赤になる。

「おっす。お、なんか変わった服着てるな。黒猫と白猫だ。」

そう。二人の服装がそれだった。

シャルは白猫パジャマで、ラウラが黒猫パジャマ。両方とも着ぐるみパジャマで、パジャマから顔だけ出てる状態だ。

いくら夜に近いとはいえもうパジャマを着て、パジャマパーティでもしてたのか、白猫パジャマのシャルは黒猫パジャマのラウラを膝にのせて、それはそれは嬉しそうだった。

しかし、ラウラの黒猫パジャマの目は、なんていうか……ネコ○ルク・カオスみたいだな。

にしてもラウラって黒いパジャマが似合うし、シャルも白いパジャマがぴったりで……って、いかん。パジャマって字がゲシュタルト崩壊しそうだ。

ところでみんな、『パジャマ』って十回言えるか？俺は途中で言え

なくなったけど、それこそどうでもいいな。

「あ、え、う……。」

おっと、いかん。ラウラはともかく、シャルがいっぱいいっぱいな感じになってる。
早く用件を済ませたほうがいいよな……。

「今日、なんか電話してくれたみたいで、出れなくてごめんな。ちょっと……まあ、いろいろあったんだよ。出かけたり、二度寝したり。……ともかく、何度かかけ直しても繋がらなかったから、こうして用件を聞きに来たんだ。」
「そうか。うむ、理由は感心できんが、心がけは感心だ。」
「それはどーも。」

シャルから逃げ出したラウラは、腕を組んで仁王立ちしてそう言う。
たち振る舞いは偉そうだが……格好がそれを台無しにしていた。
なんていうか……可愛らしい？子供が無理してカッコつけてるみたいなちぐはぐさだ。

「あ、け、ケータイね。ま、ま、マナーモードにしたまま、カバンに入れっぱなしだったみたい。あ、あはは。」

シャルが携帯電話を取り出しながらそう言った。
うーん、まだ正気とは言い難いかなあ？
しかも、普段しっかりしたお母さんタイプのシャルが、白猫パジャマって。

「ぷっ。なんか、二人揃って面白いっていうか、可愛いな。」
「か、可愛い……。」

「わ、私もか……？」

シャルもラウラも、顔を赤くしてそう呟く。

うーん、二人のこういう表情はレアだな。特にラウラは、普段からキリッとしてるし。

「で、結局用件はなんだったんだ？」

「う、え、えーとね、一緒に出かけようかと思って電話したんだけど……」

「結局私と出掛けたのだ。これも今日買ったのだ。」

「へえ。そういや、知ってるか？」

――今日、強盗事件があったらしいぜ。街、騒がしくなかったか？

俺がそう言った途端、二人の表情がこわばる。

――な、なにもなかったよ。

――う、うむ。いたって平和な一日だった。

その返事を聞いて、深くつっこむのは止めようと思った俺であった……。

第８１話　事件は、リアルタイムで起こっていた（後書き）

一応、８日の１０時で入院編は完結です。
そうしたら、本編も３日に一度の更新ペースに戻します。
年末はちょっと忙しいので……。

第８２話　き～み～がぁ～いたな～つ～は～（前書き）

お久しぶりの第８２話です。
舞台は夏祭り。長いので分割しました。いつも以上にネタが多いです。

とうとう、彼女が本編に登場です。

第８２話　き～み～がぁ～いたな～つ～は～

八月のお盆週。その週末に、私はある神社の前にいた。
その神社の名は――篠ノ之神社。私が転校する前の家であり、生家でもある場所だ。

（……はあ。）

だというのに。
そんな場所に帰って来たというのに。
私の心は、一向に晴れなかった。

いや、ここにいい思い出がないと言っているわけではない。
ここは一夏と一緒に剣術を学んだ場所だし、家族そろって暮らしていた場所なので、楽しかったことはたくさんある。

だというのに、ため息ばかりが出る理由は一つ。
ここにはいない、一人の男のことが頭にひっかかっているからだ。

山代紅也。
オーストラリア国営企業、モルゲンレーテのＩＳ操縦者。
私の剣の師匠のような存在。

私は彼に会うために、姉さんに頼んでオーストラリアに連れて行ってもらった。
そうして着いたは良かったものの、紅也が入院している病院の警備は非常に厳重で……正直、普通じゃないと思った。姉さんがいなかったら、私はすごすご引き返す羽目になっただろう。
……いや、あるいは、その方が良かったかもしれない。

紅也が私達に隠していた秘密。
それは私にとってはあまりに重く、大きいものだった。

――なのに。
何で、紅也は私を怨まないのだろうか。

「……箒ちゃん、どうしたの？」
「……少しぼーっとしてました。すみません、雪子叔母さん。」
「あら、いいのよ。そうよね、元々住んでいたところだもの。懐かしくて当然よね。」

声をかけてきたのは、四十代後半の女性。年齢相応の落ち着いた物腰と柔らかな笑みは、まるで相手を包み込むかのような安心感を与えてくれる。
この人は雪子叔母さん。私達がここを離れた後、篠ノ之神社の管理を受け継いでくれた親戚の一人だ。

「それにしても、よかったの？夏祭りのお手伝いなんてして。」
「め、迷惑でしょうか？」

叔母さんの言葉を聞き、自然と身体に緊張が走る。
――私はまた、余計な事をしてしまったのだろうか？

「そんなことないわよ。大歓迎だわ。でも、箒ちゃん？せっかくの夏祭りなんだから、誘いたい男の子の一人もいるんじゃないの？」
「そ、そんなことは……」

その言葉と共に、自分の脳裏を一人の少年の姿がよぎる。
織斑一夏。
箒の今なお続く初恋の相手であり、四月に劇的な再会を果たした…

…運命の人。
でも……

「……私は、そんなことをしてはいけない。」

小声で、そんな言葉が自然と発せられた。
一夏のことを思い出すと、どうしてももう一人の方を思い出してしまう。
そしてその度に、私の心は締め付けられるのだ。

「……箒ちゃん？」
「はっ、はい！」
「神楽舞は六時からだけど、大丈夫？今のうちにお風呂に入らないと間に合わないわよ。」
「はい。では、入ってきます。」

確かに、急いだ方がいいだろう。
私は自分の思考を放棄して、静かに風呂場へと向かうのだった……。

◆

〈ｓｉｄｅ：山代　葵〉

「…夏祭り？」
「ああ。箒の実家……あー、篠ノ之神社なんだけどな。そこで毎年やってるんだ。

葵は日本の祭りって初めてだろ？良かったら来ないか？」

オーストラリアから戻ってきて、数日。
唐突に一夏からかかって来た電話は、祭りへの誘いだった。

祭り……。昔、父さんに聞いたことがある。
ミコシをかついでワッショイって言ったり、ヤクザがお店を出してたり、ミコが踊ったりするそうだ。
正直、当時の説明だけでは分からなかったため、確かに興味がある。
でも……もしつまらなかったら、はっきり言って時間の無駄だ。

「……ちょっと考えさせて。」
「え？あ、そうだな。予定とかがなかったらまた電話してくれ。じゃあ。」

一夏との電話を切り、私は別の相手に電話をかける。
アメリカと日本では時差があるけど、この時間なら通話できる……はず。
数回のコールの後、電話が繋がった。

「もしもし、葵？どうした？」
「…久しぶり、紅也。」

私が相談を求めた相手は、紅也。
先日退院したのはいいけど、リハビリのためとか言ってすぐに国外へ行ってしまった、私の兄。

「何か、緊急事態か？でなければ、後にしてほしいんだけど……。」

どうやら、取り込み中のようだ。

電話の向こうからけたたましいサイレンの音や、銃声が聞こえる。
ついでに、聞くに堪えないようなスラングだらけの英語も。
……ただのホームステイじゃなかったの？

「…緊急、じゃない。」
「アルマンド！そこを右に曲がれ！
……そうか。でも、電話してきたってことは何かあるんだろ？話してみなさい。」

今度は大きなブレーキ音。
……本当に何をやってるんだろう？

「…祭りって、楽しいの？」
「え、祭り？そうだな……スピード上げろ！ベリックの野郎、もう追いついてきやがった！」
「Ｓｈｉｔ！急げアルマンド！」
「てめえもしっかり撃て、ヘンリケ！……くそっ、警察は何をやってやがる！」
「お兄ちゃん！？」

警察？外国に行って警察沙汰って、何やってるのよ！？

「悪い、余裕が無くなった！気になるなら行ってこい！ただし、デートだったらおにーちゃん許しま……」

爆音。そして、電話が切れる。
……まあ、ＩＳも持ってるし、大丈夫でしょ。紅也なら。
とにかく、方針は決まった。
再び一夏に電話し、誘いに応じることにする。
それにしても……デート？あの一夏が、そんなことするわけないで

しょ。
心配しすぎだよ、お兄ちゃん。

◆

「よっ、おつかれ。」
ほら、ね。

場所は篠ノ之神社、境内。その中の、アミュレットを売ってるところ。
一夏とは入り口で待ち合わせ、ミコさんの舞い（神楽舞、というらしい）を見に行った。
そしたらそのミコさんの顔に見覚えがあったため、一夏に尋ねたところ、やはり神楽舞をやってたのは箒だったそうだ。
どうやら一夏はもともと箒に会いにいくつもりであり、そのついでに、いつぞやの勉強会のお礼を兼ねて私を誘ったのだそうだ。
ね？デートじゃなかったでしょ、お兄ちゃん。

「葵？何で夜空に向かって話しかけてんだ？」
「…なんでもない。」

星になった（推定）紅也に話していた様子が、一夏に気付かれたらしい。…ちょっと恥ずかしい。

「それにしても、すごいな、箒。様になってて驚いた。」

そうそう、言い忘れてたけど、私達の目の前には巫女服を着た箒がいて、アミュレットを売ってる。どうやら、予期せぬところで一夏と会ったから動揺して石化してるみたい。

「それに、なんていうか……キレイだった。」

「っ――――!?」

石化→赤化。

箒の顔は、いまや赤い彗星もかくやという勢いで真っ赤になり、巫女服を着たその姿はクラースナヤや真紅の稲妻を連想させる。

…自分で言ってて意味がわからない。紅也に感化されたのかも。

「夢だ!」

「な、なに?」

「…邪眼?」

どうやら箒は、一夏の瞳術にでもかかってたらしい。

ジャスト一分……ってところかしら?

一夏は箒のバインドヴォイスを直撃し、間の抜けた声を上げてる。

「これは夢だ。夢に違いない。はやく覚めろ!」

ここで「おい、マジかよ。夢なら覚め……」とか言ったら、空気読めない子扱いなんだろうな、私。

……え?臨海学校で紅也が同じネタをやってた?

…いいじゃん、別に。

「まあまあ箒ちゃん。大きな声を出してどうしたの?……あら?」

奥から出てきたおばさんが、箒と一夏、そして私を見渡す。
そしてなにやら考えるようなそぶりを見せた後、「ああ」と言いながらぽん、と手を打った。
……何か、誤解を受けた気がする。

「箒ちゃん、あとは私がやるから、夏祭りに行ってきなさいな。」
「なっ！？……くっ、さすがは夢だ。あり得ないことばかり起きる。ならば……。」

邪眼、継続中。
あるいは明晰夢？夢魔に浸食されないようにね。
……と、まあおふざけはここまでにしておこう。
なぜだか、箒は私の存在に気付いてないみたいだし。

「『篠ノ之、これは現実だ。』」
「「！？」」

織斑先生をまねた私の声を聞き、ビクッと体をこわばらせる一夏と箒。
…躾けられてるわね、二人とも。

「…いい夢見れた？」
「えっ！？なんだ、葵か……。……って、葵！？」

私の姿を見て、急に箒がテンパり始める。
私、箒を動揺させるようなことをしたっけ？
記憶を探ってみるも、そんな覚えはない。

「雪子叔母さん、着替えてきます。後を頼んでもいいですか？」

「もちろんよ、行ってらっしゃい。」

私から目を逸らし、箒が去っていく。

…もしかして、私と一夏がデートしてるようにでも見えた？

安心して、箒。一夏はとらないから。

…まあ、それはそれとして。

「…一夏。一つ聞きたいんだけど。」

「えーと、なに？」

「…不幸を遠ざけるようなアミュレット……お守りって、ある？」

◆

時間にして３０分くらいか。お守り売り場から離れ、鳥居のところで箒を待ってた私達は、とうとう待ち人の姿を発見した。

「おーい。遅いぞ、箒。」

「い、一夏。それに葵も……。待たせてすまなかったな。」

「…別にいい。準備に時間がかかるのは当然。」

箒の今の服装は、臨海学校のときのように浴衣だった。

それなら時間がかかるのも頷ける。シャワーまで浴びたんだから尚更だ。

特に、髪は洗うのに時間かかるもんね。

「へえ、浴衣か。似合ってるな。」
「そ、そうか！？…嬉しいぞ。」

一瞬はしゃぎそうな表情を見せた箒。でもその表情は、私の顔を見たとたんに曇る。
……やっぱり誤解してる？

――いや、違う。
この、箒の目を、私は知ってる。

『…ごめんな。』

あのときの紅也と同じ、強い後悔を宿した目。
……もしかして。
……いや、考えすぎよね、きっと……。

「…それより、時間。」
「っと、そうだな。さて、色々見て回ろうぜ。いやー、しかし夏祭りに来るのも二年ぶりか。去年は受験勉強してたしなあ。」
「あ、ああ、回ろう！三人で行こう。」

妙な雰囲気の箒と、それに全く気付かない一夏。そして、それらを無視する私。
どこかいびつな三人組は、こうして神社を歩きだした。

「わたがしに焼きそばに焼きもろこしに、一通りあるな。さすがは篠ノ之神社。」
「…射的もある。」

そう言って私が指さした先には、「射的ＪＵＤＡＳ」の看板が。

もっとも、ハトがやたらと集まってるせいで、どういう景品があるのかは分からないけど。

「お……カタヌキか。こんなものまであるんだな。な、箒。」

「……。」

「箒？」

「な、なんだっ！？」

先ほどから黙りっぱなしだった箒を気にかけ、一夏が顔を覗き込む。

それに動揺した箒は慌てて一夏から距離を取り、周りの人にぶつかりそうになっていた。

「こら、暴れるなよ。人にぶつかるぞ。」

「う、うむ。すまん。」

「…それより、どこへ向かってるの？」

「そうだな。箒、どっか行きたいところはあるか？」

「わ、私は……別に……。」

なんと、三人ともノープランだった。

三人寄れば何だって？だからことわざは当てにならない。

「…あれ。」

とりあえず何か面白いものはないか、と思って周りを見てみると、一つの屋台が視界に入った。

食べ物を扱っている屋台ではない。

なにか、子供が集まって、どことなく楽しそうな雰囲気の場所。

「お、金魚すくいか。そういえば、箒って金魚すくい苦手だったよな。」

「い、いつの話だ！いつの！」
「…金魚すくいって、難しいの？」
あんな子供も挑戦してるくらいだし、簡単そうに見えたんだけど。
「お、葵は初めてか。まあ、実際に体験する方が早いぜ。」
「そ、そうだぞ。私がおごってやろう。」
「…自費でやるから、大丈夫。」
まったく。ただの学生と違って、こっちは給料貰ってるんだから。
馬鹿にしないでね、箒。
……そういえば、篠ノ之博士の研究費用って、誰が調達したんだろう？
いえ、それこそまったくどーでもいいことだったわね。
話しながらも私達は、金魚すくいの屋台へと向かう。
「なあ箒。勝負でもするか？負けたほうが食べ物おごりな。」
「いいだろう。望むところだ。」
どうやら一夏と箒で、どっちが多く金魚をとれるか勝負するみたい。
……面白そう。そこで初心者である私が二人より多くの金魚を取っちゃったら、どんな顔をして悔しがってくれるのかしら。
屋台のおじさんにお金を渡し、三人一緒にポイを受け取る。
「じゃあ、勝負！」
「望むところ！」
ふふ、覚悟しなさい。二人とも！
水面を見つめる。

金魚の数はざっと２０匹以上……よりどりみどりだ。
その中で、特に目を引く存在がいる。
他のやつらより一回り大きい、黒いデメキン。
……あれなら、動きも遅くて、狙いやすそうね。

さりげなくそいつのそばに移動し、ポイを構える。
ちらり、と一夏たちを見ると、小物ばかりを狙っていて、しかものろのろとポイを水につけている。
そんなにトロいと、逃げられるわよ！

私は感覚を総動員して、デメキンの行動を予測。
その進路上に向け、水面を切るようにしてポイを走らせる――！
予測は完璧。
ポイはデメキンの目の前に現れ、それに気付かぬデメキンはまっすぐに罠へと突き進み……そのまま通過した。

「…あれ？」

ポイを引き上げる。
張ってあった紙が溶けていた。

「…おかしい。」

とりあえず、もう一回やってみよう。……今度は負けない。

◆

「…今度こそ。」
「まだ居たのか……。」
「おーい、葵。もうやめとけって。」

背後に聞こえた箒と一夏の声に驚き、私はまたも紙を破ってしまった。
…おかしい。何で、正面にいたはずの箒たちの声が、背後から聞こえるんだろう。

顔を上げる。
箒も一夏もいない。
代わりに、小学生くらいの子供たちが、私の方をじーっと見ていた。

「いや、だからこっちだって。」

後ろを振り返る。
そこには、焼きそばを食べている一夏と、何故か顔を赤くした箒の姿が。

「…ワープ？」
「「いや、違うから。」」

二人同時の、驚異のシンクロナイズドツッコミだった。

「…コホン。とりあえず時間を見てみろ、葵。」

箒に言われるがままに、時計を見る。…なぜか、最後に見たときから15分も経っていた。

「…あ、ありのまま今起こったことを「話さなくていいから。」…むぅ。」

一夏に先を越された。

「葵。祭りの楽しみは金魚すくいだけではないぞ？他の所に行こう。」

「…分かった。」

まただ。

また、箒の態度に違和感を覚える。

「いやぁ、しかし……ハハッ。」

私を見て、一夏が不快な笑い声をあげる。

「…何？」

「いやぁ、葵って何でもできる完璧超人だと思ってたからさ。苦手なこともあるんだなーって思って。」

「…完璧？私が？」

その認識は間違いだ。

確かに、私はＩＳの扱いや勉強面は良く出来る方だろう。

でも、決して完璧ではない。いや、完璧な人間なんていない。

「まあ、確かに。ここまで負けず嫌いだとは思わなかった。」

「…箒まで。」

今度は二人して笑う。

その様子が『いつも通り』で、私は少し安心した。

「ふふふ……。と、喉が渇いたな。一夏。」
「ははは……。そうだな。葵も行こうぜ。」
「…うん。」

まあ、こういうのも悪くは無い。
去り際、あの黒デメキンを睨みつけた後、私は先を歩きだした二人についていった。
そして、しばらく他愛のない会話をしていると――

「あれ？一夏……さん？」
「お？」

私の背後から、一夏を呼ぶ声。私の記憶には無い声だ。
…一夏の友達？
木になって振り返ってみると、そこにいたのはヘアバンドをつけ、短くは無い髪を結いあげた、可愛らしい浴衣の女の子だった。

「おー、蘭か。」
「き、奇遇、ですね……。」
「そうだなー。案外、知り合いに会わないと思ってたらばったりだったな。弾は？」
「さ、さあ？家で寝てるんじゃないですか？」

蘭、という名前らしいその女の子は、顔を赤くしながら一夏と話している。
弾というのは兄弟か何かか。
……ははーん。紅也にとってのセリアと同じようなパターンの子ね。
一夏、すごいわ。流石は恋愛原子核。
…あれ、違う？まあいいや。似たようなものでしょ。

そうこうしてる間に、女の子の背後にいた友達らしき四人がキャイキャイとはしゃぎだし、狙ったかのようなタイミングで去っていった。

その後も一夏と女の子は楽しそうに話し続ける。

…はあ。一緒にいる子をほったらかして、別の女の子と会話なんて。

私はいいけど、ほかの子だったら怒るわよ。

例えば……一夏の隣にいる和服姿の武士娘とか。

「あー……ゴホンゴホン！」

とうとうしびれを切らした箒が、わざとらしい咳払いで自分の存在をアピールする。

「お、悪い。紹介がまだだったよな。えっと、こっちが五反田蘭。ほら、前に話した弾ってやつがいただろ？あいつの妹。」

「五反田蘭です。」

そう言って、私と箒に事務的なお辞儀をする蘭。

「で、こっちが篠ノ之箒。俺のファースト幼なじみ。

こっちは山代葵。オーストラリアの代表候補生で、頼りになる友達だ。」

「し、篠ノ之箒だ。よろしく。」

「…山代葵。平仮名みっつであおい。呼ぶときは葵ちゃん。」

「え？えーっと……よろしく。」

とりあえず、某ぼんやり天才少女の真似をして自己紹介してみる。

すると効果てきめん。蘭は混乱したみたいだ。

「…冗談。普通に葵でいい。」
「わ、わかりました……。」

そう言った後、数秒、気まずい沈黙が流れる。

「……。」
「……。」

箒と蘭は、何かを期待してるかのように一夏に視線を向ける。
でも、そこはさすがの鈍感一夏。

「な、なんだよ。」

多少の狼狽を見せながらも、なぜ睨まれてるのかは気付かなかったようだ。

「いや。」
「別に。」

そう簡潔に答えた二人だったけど、相変わらず視線は鋭い。
特に蘭。その目で私を見ない方がいいわよ?うっかりアレしてああなっちゃうわよ。
そして、そんな中……

「お。」

何かを思いついたように、一夏が手を打つ。

「一緒に回るか?」

その言葉を聞いて箒はがくっとうなだれ、蘭の表情は輝いた。

かくして。

奇妙な三人連れは、人数を増やし、祭りを回ることになったのだった……。

第82話　き～み～がぁ～いたな～つ～は～（後書き）

蘭、なにげに初登場です。
そしておかえり、葵。

あと3話くらいで五巻に入ります。
……紅也、生きてるかなぁ……。

第８３話　決して捕まえることのできない光（前書き）

８３話をお届けします。
前回の更新で、ユニークアクセスが８万超えました。ありがとうございます。

タイトルはまたしても歌詞から。このくらいならセーフ……だよね？
ちょっと暗い話になるかもしれません。ＦＡＴＥ／ＺＥＲＯを見た後はいつもこうだ……。

第83話　決して捕まえることのできない光

「きゃっ！？」
「あ、ごめんなさい。」
「い、いえ、私もちゃんと見てませんでしたから。」
「大丈夫か、蘭？」
「あ……。」

えーと、今の状況。
一夏に誘われて、大はしゃぎだった蘭が、歩いてる人とぶつかった。
そして体勢を崩した蘭は一夏に抱きとめられ、そのまま顔を赤くしてる。
するとそれを見た箒が、蘭とは違う意味で顔を真っ赤にさせ、私はそれを静かに見てる。

――何このカオス。

「えっ、うっ、あっ……！」

とうとう蘭は暴走を始め、一夏の胸でばたばたと手を動かす。
一夏も一夏で、そんな様子には気がつかないし……。ホントに鈍感なんだから。
ああ、夏なのに寒い。
前の一夏たちからは熱気が、後ろの箒からは寒気が発せられてる。
…ほんとに、誰かどうにかしてちょうだい。

「あ、あ、――アレですっ！」

ここで、状況に変化が起きる。

もがく蘭が苦し紛れに指さしたのは、さっきのとは違う射的屋だった。

「お。もしかして得意なのか？」

「え、ええっ、まあっ。」

そう言って、蘭は一夏から離れ、少しだけ着崩れた浴衣をなおす。

その表情はまだ真っ赤で――動揺から立ち直っていないのは明らかだった。

「というわけで、行こうぜ。……ん？箒、あんまり離れてるとはぐれるぞ。ほら。」

言うなり一夏は箒の手を掴み、射的屋に向けて歩き出す。

…私？もう一夏の前を歩いてるけど。

「へい、らっしゃーい。」

「おじさん、四人分ください。」

「お。モテモテじゃないの、若いの。よしっ、おまけ無しだ！」

「ええっ？いや、まけてくださいよ。せめて女子の分だけでも。」

「がっはっはっ。無論断る。」

一夏は屋台につくなりすぐにお金を払ってしまった。……私の分まで。

「…一夏。自分の分くらい、自分で出す。」

「いや、いいって。こういうのは、男が出すもんだ。それに……葵、さっきので結構お金使っただろ？」

さっき……。そう言われて、金魚すくいのことを思い出す。

ついでに、一夏に笑われたことも。

ガスッ！

受け取った鉄砲の銃床で一夏を殴る。

「痛って！？なんだよ！」

「…別に。」

箒や蘭よりも先に構え、獲物を狙う。

うーん……どれにしようかしら？

はっきり言おう。射的は得意だ。

実銃使ってるんだもの、当たり前だ。

だけど……そんな「プロ」の私が遊びに本気を出すって、どうなんだろう？

カッコ悪いよね、絶対。

でも、問題が一つ。

欲しいものが、一つも無いのだ。

……と、いうわけで。

「…何か、欲しいものはある？」

コルクの弾を込めている三人に振り返る。

「え？いや、別に……。」

「馬鹿にするな。」

「……。」

三者三様の返答。
特に蘭は、とても真剣な表情で鉄砲を構えている。
…まあ、お手並み拝見ね。

「おー、なんか本格的だな。がんばれ、蘭。」
「はい、そのつもりです。」

……ネタ？ネタなの、今のは？

それはともかく。
蘭は真剣な表情のまま鉄の札を睨み続け……コルクを発射した。

「お。」
「おお？」
「おおおっ！？」
「…Ｈｉｔ！」

べしっ。――ぱたん。

「そ、その鉄の札を倒すとは……！え、液晶テレビ当たり～～～～っ！」
「え？えっ？え……？」

――すごい。
あれを、一発で倒すなんて。
少なくとも、紅也以上の腕前だわ。

「すげえな、お嬢ちゃん！絶対に誰にも倒せないようにして――ああ、なんでもない。」
「…上手。」

「は、はぁ……。」
「液晶テレビを狙うなんて、すげえな。しかもゲットしてるし。いや、驚いた。」
そう言って、一夏は拍手する。つられて周りの観客も手を叩き始め、その輪は次第に大きくなっていく。
……そんな中。
「なっ、また……！」
箒はというと、今三発目の弾丸を外し、四発目を装填しているところだった。
…さっきの私も、はたから見たらこんな感じだったのかしら。
あ、四発目を外した。何を狙ってるんだろう？
蘭は液晶テレビを受け取ったものの、なぜか沈んだ面持ちだった。
……他に何か狙ってたのかしら？
「ぐっ……。」
五発目、外れ。そして残弾はゼロとなる。
「箒、相変わらず下手だなぁ。」
「う、うるさい！ゆ、弓なら必中だ！」
「…紅也みたいなことを言う。」
紅也は、あの悪い癖があるせいで、銃はあまり使わない。
そのため、よくこう言ってた。

『くっそ～。いっそのこと、ビームボウとか発明できないかな？』

……と。

「……紅也、か。」

「？　箒？」

「いや、なんでもない。」

「そうか？……ったく、しょうがねぇなあ。」

一夏は一瞬怪訝そうな顔をしたものの、すぐに元通りの表情に戻った。

そして自分の残りの弾を箒にあげつつ、すでに弾込めを済ませてある鉄砲を渡す。

「大体、構え方がおかしいんだよ、お前の場合。こうやって、腕をまっすぐにしながら、射線に対して真っ直ぐに視線を置いてだな――」

「……うむ。」

……あら？また違和感が。

そうだ。

一夏と身体が密着してるのに、まったく動揺してないどころか……

沈んでる？

一体何故？

そうこうしている間に一夏によるレクチャーは終わりを告げ、箒は弾を発射する。

ぺしーん。――ぽとり。

「お！ぬいぐるみが当たったな。」
「おー、嬢ちゃんもうまいことやったなあ。がっはっはっ、今日は大損だ。」
「……隣のだるまがよかったのだが……」
「うん？」
「いえ、なんでも。」

……だるま、ね。箒らしいわ。

「――と、葵は撃ってないのか？」
「…今、やる。」

一夏に返事をしつつ、片手で銃を構える。
そしてそのままロクに狙いも定めず――発砲。
コルクはまっすぐに進み、隣にあっただるまの眉間を撃ち抜き、そのまま転落させた。

「おお、こいつはすげえな。ほい、どうぞ。」
「…ありがとう。」

どこか晴れ晴れとした顔になった店主から、だるまを受け取る。
…これのどこがいいのかしら？確かに、妙な愛嬌はあるけど。欲しがるほどのものじゃないわね。

「…で、どうするの？」

だるまを持ったまま、後ろの方を見る。
そこには、女子中学生が持つには大きすぎる荷物を持ち、ふらふらしてる蘭の姿が。

「だ、大丈夫です！このくらい……！」
「でも、確かに邪魔だよなあ。……弾に取りに来させるか？」
「そうですね！じゃあ、お兄に電話します！」

そう言って携帯電話を取り出す蘭。私はそこに黙って近づき、テレビを持ち上げる。

「あ……。」
「…持ってあげる。」
「いや、葵。そういうのは俺が――」
「…大丈夫。」

それを示すかのように、私はテレビを片手で持ち上げる。
普通の人間とは身体の作りが違うのだ。このぐらい、造作も無い。

「わ！すごい……。」
「…どうも。」

自分が両手で支えきれなかった荷物を片手で持ち運ぶ私を見て、驚嘆の声を上げる蘭。
それがなんだか照れくさくて、私はあいまいな返事を返す。

「あ、葵……。すまないな。」
「…箒が気にすることじゃない。今は二人で回って。」
「……いいのか？」
「…別に。」
「だが、私は――」
「箒、せっかく葵がこう言ってくれてるんだ。また合流するまで一緒に回ろうぜ。」
「…一夏の言うとおり。行ってらっしゃい。」

妙に食い下がる箒をとどめたのは、一夏の言葉だった。
二人が去っていくのを確認した私は、傍らでしょんぼりとした様子の蘭に声をかけた。

「…じゃあ、行こ？」
「ああっ、一夏さん……。」

空いてる方の手で彼女の手を握り、半ば引きずるような形で、私は出口へと向かった。

歩く私達は、互いに無言。
それはそうだ。
最近忘れられてる設定だけど、私は本来口数が多い方ではない。
……まあ、戦闘中は例外。あれは、私であって私ではない。
なんというか……コンバット・ハイの結果だと思ってくれればいい。
話が逸れた。
最近セリフの数が多くなってきたのは、一夏をはじめとする学園のメンバーと打ち解けたことが原因だ。
実際、オーストラリアの友達とも、私は普通に話す。
初期のころに無口だったのは、環境の変化に慣れていなかったためだ。
つまり、何が言いたいかというと。
一夏という共通の知り合いを失った今、私と蘭との間で会話が成立する訳が無いのだ。

――そう。

「あの、葵さん。」

彼女の方から話しかけてこない限りは。

「…何？」

「えっと、その……葵さんと一夏さんはお友達……ですよね？」

「…どういう意味？」

私は、あえてとぼけてみせる。

どういう意味で聞いてるのか、なんて分かり切ってる。

友達なのか、それ以上に思ってるのか……ということだ。

でも、あえて聞く。

だって、そっちのほうが面白いから。

「どういうって、いえ、その。他意はなくてですね、知り合って間もないのに、ずいぶんと仲が良さそうに見えたので……。」

いや、それは乙女アイで補正をかけてるからでしょ？

確かに、仲がいいほうだとは思うけど……。一夏にとって、それは当たり前なんじゃない？

「…一夏は、誰にでも優しいから。」

「あっ、そ、そうですよね！困っちゃいますよね、あれ！」

「まあ、そこがいいんだけど。」

「そうですよね！分かります。……って、ええ！？」

ばっ、と手を離し、大げさに反応する蘭。

…なにこれ、面白い。

「あれ？何で驚いてるの？」

「だって、『いい』って、それって……」

「あら？いい人って意味よ。誤解した？」

「あ、え、違います！私も一夏さんは、いい人だと思ってます！」
「ふーん、蘭ちゃんにとって一夏は、ただの『いい人』なんだ。」
「え！？そ、そんなことは……」

いじればいじるほど赤くなっていく蘭。
なんだか、その必死さが可愛らしい。
…紅也とは別の意味で、新しい扉が開きそうだ。

「じゃあ、逆に聞くわね。蘭ちゃんと一夏は、ただのお友達？」
「ち、違う……いえ、違わないんですけど、えっと、その……！」

あらあら、いっぱいいっぱいになっちゃって。
今話すことじゃないけど、片思いの相手から『ただのお友達』扱いされるって、つらいでしょうね。
近所のファミレスに勤めてる、海賊漫画に出てきそうな金髪コックも、それが原因でよく胃薬飲んでるらしいし。
…ホントに今話すことじゃないわね。失敗したわ。

話している間に私達は、神社に面した道路に着いていた。
そんなことにも気付かない様子の少女は、あわあわと両手を振って、頭から湯気を出している。

「わ、私は、一夏さんのことが――」
「おーい、蘭。」
「――って、お兄！？」

残念、タイムアップだ。
もうちょっといたずらしたかったんだけど、まあ、いっか。

「一体何だよ、荷物って。見たところお前手ぶらじゃん。」

「えっと、それは……。」
「…これ。」
横合いから口を出し、自転車に乗って来た少年にテレビを渡す。…もちろん片手で。
「あ、どうも。」と礼を言った少年は片手でそれを受け取ろうとして……案の定バランスを崩した。
「――って、重っ!?こんな重いもの片手で持ってるなんて、いったいどんな……。」
そう言いながら顔を上げた少年は、私を見る。
そして、まるで何か信じられないものを見たかのように目を見開き……。
「は、初めまして!蘭の兄の五反田弾といいます!」
「…山代葵。よろしく。」
なんだろう、このテンションの高さ。
「いやあ、家の蘭が迷惑をおかけしまして。」
「ちょっと、お兄!」
「…別に、迷惑じゃない。」
「そうですか。それはよかった。」
…何がよかったんだろう?
「それはそれとして……蘭!一夏と一緒にいる、って……学校の友達と一緒じゃなかったのか?」
「え、いや、それは、たまたま……」

「たまたまでも何でも、ダメだ！生徒会のみんなと行くっていうから許可したけど、一夏と一緒など認めん！帰るぞ！」
「お兄！」

…兄妹って、どこでもこうなのかな？
紅也曰く、「すべての兄はシスコンであり、すべての妹はブラコンである」。
前者はともかく、後者は違うと思う。

「いいから帰るぞ！」
「待って！せめて一夏さんに電話を……。」
「いーや、お前はすぐそういうことを……」
「…そのくらい、いいんじゃない？」

弾が妹を思う気持ちは、よく分かる。
でも、束縛しすぎるのはよくない……と、思う。
だからこそ、このタイミングで口出しさせてもらった。

「う……で、でも……。」
「連絡しないと、一夏たちも困る。」
「ですよね！じゃ、ちょっと電話します！」

蘭はぱあっと笑顔になると、携帯を取り出して私たちから離れた。
残されたのは、私と弾の二人だけ。

「えーと……山代さん？」
「…何？」
「ごめんなさい。あなたの言うように、ちょっと厳しくしすぎたみたいです。」
「…謝る相手が違う。」

それは、私じゃなくて蘭に言うべきセリフでしょ？

「そ、そうですよね。
……あの、山代さん。一夏とはどういう関係で？」

…またか。
どうもこの兄妹は、一夏が気になるらしい。

「ただの友達。…それだけ。」
「そ、そうですか。よかった～。」

？

二度目になるけど、何がよかったんだろう？

「いやぁ、前に街で見かけたときは一夏と楽しそうに話してたんで、てっきり付き合ってるのかと……。」
「――前？」
「はい。８月の初めころだったかな？」

８月？
一夏と一緒に出かけたのは、今月ではこれが初めてだったはず……。

「……それは、私だったのかしら？」
「え？どういう……」
「お兄！」

蘭が戻ってきた。
どうやら、帰ることには納得したようだ。

「では、俺は蘭を送っていくので。またいつか会いましょう！」
「…うん。」
「さようなら、葵さん。」
「…またね。」

この場でこれ以上追及することはできず、私は二人を見送るしかなかった。

――このとき問いただしておかなかったことを、私はひどく後悔することになる。

◆

「…待った？」
「いや、そんなに時間経ってないぞ。」
「は、花火までの時間はまだある。大丈夫だ。」

あれからしばらくして、私達三人は神社裏の林で合流していた。
……ちょっと不用心じゃない？こんなところで襲撃されたりしたら、ＩＳ奪われるわよ？

「…で。何でこんなところで花火？」

虫がいっぱいいる……。気持ち悪い……。

「ああ、この先にいい場所があるんだ。俺達しか知らない秘密の場

所が、な。」
「……まあ、葵ならいいだろう。」
一夏は得意げに、そして箒はどこか申し訳なさそうにそう言う。
そんな対照的な二人に連れられて向かった先は、林の中に存在する、自然が作った広場だった。
延々と空を覆い尽くしていた針葉樹林も、この場所だけは木が生えておらず、まるで空を円形にくりぬいたかのように見ることができる場所。
…なるほど。たしかに、これはいい。
「おー、変わってないな。ここも。」
一夏はそう言いながら、懐かしそうに周りを見渡す。
一方、箒は……黙ったまま空を見ている。
――今が、チャンスかな？
「箒。」
一夏に聞かれないようにしながら、私は小声で箒に呼びかける。
その声に気付いて振り返る箒の目の前に、私は例のだるまをかざしてみた。
「…これ、欲しかったんでしょ？」
「あ、ああ。確かに狙っていたのはそれだが……。」
「…あげる。」
「！　いいのか？」
それを聞いた箒は、だるまへ向けてばっと手を伸ばすが……私はそ

れを制した。

「ただし、こっちの質問に答えて欲しい。」
「な、なんだ!?そんなに改まって……。」

――箒の空気が変わった。
なんていうか……ひどく焦ってるような気がする。

じゃあ
やっぱり
箒は……

「…紅也のこと、どこまで知ってる?」

ドーーーーーン!!

「……え?」
「おおっ?はじまったな、花火!」

無邪気にはしゃぐ一夏をよそに、私は箒に話しかけ続ける。

「答えて。紅也に何があったのか、気付いたんでしょ?」
「……ああ。」
「…箒の口から、聞きたい。」

私は箒の目をじっと見つめる。
箒は、もはや隠しきれないほどに動揺していた。
このときばかりは、一夏の鈍感さに感謝したい。もしここにいたのが一夏以外の人物だったら、すぐに異変に気付いてしまっただろうから。

「知ってしまったんだ、全部……。
入院のことも、怪我のことも、それから……腕のことも。」

花火に照らされた箒の表情は、具現化した「闇」そのものだった。
強い後悔、懺悔、憐憫、そして自身に対する憎しみが凝縮されたかのような、暗い顔。

「…だから、私に対して申し訳なくて、あんな態度を?」
「そうだ。私は――」
「ふざけないで、箒。」

ピシャリ、と言い放つ。
花火が発する轟音を切り裂くかのような冷たく、鋭い声。
それを受けた箒の瞳が、さきほどよりもはるかに大きく揺れ動く。

「同情も、憐憫も、謝罪もいらない。きっとお兄ちゃんは、すべての結果に納得してる。
――あなたはただ、誰かに叱ってもらいたいだけなんじゃないの?」
「……!」
「代償行為で罪を償いたいの?それこそ馬鹿よ。
お兄ちゃんならこう言うわ。『今まで通りにしててくれ』って。
…貴女が後悔して足踏みすることなんて、決して望まないわ。」
「……ははは。紅也にも同じことを言われたよ。」

そう言って箒は、乾いた笑いをもらす。
その表情は、今にも壊れてしまいそうなほど儚くて――

「でも、無理なんだ。私は、自分を責めることを止められない。き

っと……ずっと……。」

――壊してしまいたいほど、悲しかった。

「お～い、すげえぞ、花火。」

「…同感。

…話は終わり。じゃあ、今を楽しみましょう。」

そして私はだるまを箒に渡し、一夏のそばへ歩いていく。

紅也の守りたかった日常は、もう元には戻らない。

そんな予感を、胸に秘めたまま――

第８３話　決して捕まえることのできない光（後書き）

もう一回、もう一回～♪

次で４巻完結予定です。

第８４話　備える者たち（前書き）

えー、すみません。
今回の話は、かなり短くなっております。

では、第四章最終話です。

第８４話　備える者たち

「ふぅ……。」

くわえた煙草を一気に吸い、思い切り息を吐く。
ため息と共に漏れた白い煙は瞬く間に部屋を満たし、すぐに頭上の換気扇へと吸い込まれていった。

「入るわよ……って、なによこのタバコ臭さ！信じらんない！」
「あー、ブレイズ。どしたの？」

突然ドアを開けて入って来た眼鏡の女性を、部屋の主は嫌な顔一つせず迎え入れた。

「どうしたの、じゃないでしょ。未成年がタバコ吸っちゃいけません！」
「えー？知らないわよ。
たとえどっかの国にそんな法律があっても、私達には関係ないもの。」
「法律とか関係ないわよ。いい？タバコを未成年者が吸うとね、成長に悪影響が……」
「いいっていいって。私がこれ以上大きくならないのは、もう決まってるんだし。
それよりもー、何の用？」

そう言って首をかしげる部屋の主。
その頭の動きに合わせ、さらさらとした青い髪が肩のラインをなぞった。

「ああ、そうだった！
エッジが暴れ出したのよ。今はF（エフ）が押さえてるけど、ワイズも手伝ってくれない？」
「いいの？私が行っても逆効果だと思うんだけど。」
「だいじょーぶよ。さっさと殴って気絶させちゃえば。」
「ん、オッケ。」

タバコを灰皿にダイブさせ、ワイズと呼ばれる人間は部屋を後にする。
後に残されたのは、ゆらゆら漂う煙だけ。

◆

〈ｓｉｄｅ：山代　葵〉

今日は、妙な日だった。
学園のゲートの近くで自主トレをしてたら、知った顔が次々とゲートを通っていったのだ。
まずはシャルロット。次にセシリア。少し遅れて鈴。
しかもみんながみんな、別々のタイミングで出ていった。

…これは、昨日一夏が実家に帰ったことと無関係ではないんでしょうね。
多分、みんなが他の人を出し抜いてやろうと考えた結果だと思うけど。
そして一夏の家でニアミスし、大騒ぎするに違いない。

後は行きそうなメンバーは箒くらいかな？でも、箒は花火大会以来、なんだかふさぎがちになってるし……。今日も外出はしないかもね。

そんな思いでぼーっとしてると、またも見知った顔がゲートをくぐる所が見えた。

…と、いっても、学園から出ていったわけじゃない。

その逆。

今まで学園外にいた人物が、今になって学園に帰って来たのだ。

さて、問題。

ここ数話登場してなくて、なおかつ感想欄である人物に「もっと出してあげてください」と書かれてしまうほど影が薄い原作ヒロインといえば？

星海社……じゃない、正解者には、もれなく私との模擬戦をプレゼント。

…なんてね。回答者がいるわけでもないし。

メタな発言はここまでにしておきましょう。

みんな、忘れて。

じゃあ、答え合わせをしましょう。

日本製の高級車から降りてきたその子は、水色の髪をしていた。

前の私みたいなセミロングの髪は、内側に向かってややはねた癖っ毛になってる。

他の大きな特徴は、キャラ作りのためにかけてる眼鏡。

それから、胸は……ぷっ。

「……。」

その人物――更識簪は立ち止まり、誰かを探すかのようにキョロキョロと左右を見渡す。
何だか怒ったような、不機嫌な表情をしてるけど……何故かしら？

「簪ちゃん、どうしたの？」

次いで、ゲートをくぐる人物がもう一人。
簪と同じ髪色の持ち主だけど、髪型は微妙に違う。
スタイルも結構いいけど……お姉さんかな？

「……別に。」

簪は、まるで誰かの記者会見を再現したかのようにそっけなく答え、そのまま足早に去っていく。残された簪のお姉さん（仮）は伸ばしかけた手を引っ込め、「はぁ……」とため息をついた。

「……で、いつまで隠れてるつもりかな？キミは。」

顔を伏せたまま、その人は呟く。
……私に気付いた？
いえ、そんなはずはない。ハッタリだ。
あの人はきっと、数年ぶりに厨二病が再発してるだけだ。

彼女が顔を上げる。
その瞳は、まっすぐにこちらを射抜いていた。

……本物だったか。

でも、この距離だ。
私のような存在か、マサイ族でもなければ、顔までは見えまい。

ならば、ひとまず撤収する。

何故だろうか。

彼女にかかわるとロクなことにならない。

そう、私の勘が告げているのだ。

「……あれ、行っちゃったか。誰だったんだろ、あの子。」

少女の独り言は、誰に聞かれることも無く、風に乗って消えていく。

◆

「…簪――」

ヒュン！

寮の中へと戻り、背後から簪に声をかけた瞬間、オートでカウンターが発動した。

とっさに飛んできた右手を掴み、そのまま締め上げる。

「――久しぶり。」

「……痛い。」

かたや右腕を締め付けられ、かたや技をかけている二人組の図は、かなりシュールだと思う。

とりあえずいつまでもこのままというわけにもいけないので、簪を

開放する。

「…何で殴りかかって来たの？」

「何か……失礼なことを、言われた……気が、した。」

うーん、そんなあやふやな理由で八つ当たりされても困るんだけど。

私には思い当たるフシはないし……。

「…とりあえず、おかえり。」

「……ただいま？」

「…ちょっと違う？」

「……何、が？」

「…簪は実家にいたのに、『ただいま』は、変かな？」

「……実家……ね。」

相変わらず、簪との会話はこんな感じ。

ストッパーになりうる鈴音はいないから、延々続くに違いない。

「……葵は、実家に……帰ったの？」

「…うん。休みの頭に。…簪と、同じ。」

「紅也……くん、とは……会った？」

「…もちろん。」

「……そう。……元気に、してた？」

「…元気……だった。」

「……良かっ……。……だった？」

私の発言に引っかかりを持ったらしき簪が、いぶかしげな表情で尋ねる。

「…今は、分からない。」

実はこの間話して以来、電話が繋がらないのだ。
８やＩＳコアの反応はあるから、生きてることはわかるんだけど…
…どういう状態かまでは不明。
ＡＳＴＲＡＹの専用回線を使えば会話はできるけど、そんなことをしたら怒られる。
部分的とはいえ、ＩＳの機能を無断で使うのは、いけないことなのだ。
私の表情から、とりあえず紅也が無事だとの確証を得たらしき簪は、この話題を流すことに決めたらしい。

「……新学期には、間にあうの……？」
「もちろん。」
「……即答、だね。」

それはそうだろう。
今は言えないけど、二学期の始業式ではあるイベントが企画されてる。
その段取りを取るのが紅也だ。何があっても復帰するに決まってる。

「……じゃあ、待つ……。」
「…頑張って。」

部屋に向かう簪を見送り、自分の部屋へと戻る。
ドアを開くと、当然の如く待ってる人はいないけど――
――部屋の左側、紅也のスペースに、ダンボールが積まれていた。
これは、私の荷物じゃない。
紅也が家でまとめて、モルゲンレーテに発送を頼んだもの。

それが今届いたということは、アレの予備が入ってるんだろう。だとしたら、早めに隠しておかないと。

すぐにダンボールを開封し、荷物を分けていく。
服は衣装ケースへ。制服はハンガーに。小物は机の中へ。
それぞれ分類し、紅也が使いやすいように配置していく。
やがて、肝心のモノが姿を現す。
厳重にロックのかけられた、シルバーのアタッシュケース。
見た目通りの重さを誇るそれは金庫にしまいこみ、しっかりと鍵をかける。
……これで、私と紅也以外には開けられないはずだ。

最後に残っていた日本刀を、紅也のベッドに立てかける。
ようやく、部屋は完全に元通りになった。

そう――私と紅也が一緒に暮らしていた、あの状態に。
後は、足りないのは一つだけ。
もう一人の部屋の主である、私のお兄ちゃんだけ。

◆

「――以上が、織斑一夏、ならびに山代紅也の報告になります。」
「そろそろ動くべきかしらね。」
「正直、この件に関しては、対応が遅すぎる気がします。」
「各方面からの苦情も相当数……。もう、待つべきではないかと……。」

「そのことなんだけど……少しだけ待てないかしら？」
「妹、ですか？」
「ええ。……どうやら、強いだけの人形ではなかったみたい。探るだけの価値はあるわ。」
「では……。」
「動くわよ、我らが我らであるために。そして機を見て接触します。」
「りょ、了解しました！」
「承知……。」

薄暗い部屋。女たちの話し声だけが、部屋を満たす。

「覚悟してもらいましょう。織斑一夏。山代紅也。そして――」

満月を背に、女は微笑む。
そして――
ぱちん、と扇子を閉じる音が静かに、しかし確かに響いた。

様々な陰謀と思惑を孕みつつも、物語は進んでいく。
たったひとつの、決して避けられぬ別れへと向かって……。

第８４話　備える者たち（後書き）

ラストのセリフ、完全にパクリですね。
でも、好きなセリフだったし、彼女にはそのフレーズが似合うと思ったんです。

次回から新章突入です！
おかえり、紅也！もう退場するなよ！

第８５話　三年生？初めて見た……。（前書き）

お待たせしました！
第５章、原作五巻相当の内容に突入です！
オリジナル展開もそれなりに多くなるので、ご注意ください！

それでは８５話、どうぞ！

第85話　三年生？初めて見た……。

9月になり、IS学園の新学期が始まった。
久々に顔を合わせた人も、そうでない人も、皆が楽しそうに思い出話に花を咲かせてる。
当然、私も例外じゃない。
久しぶりに会ったクラスメートたちの話を聞いたり、紅也の話をしたり、ついつい口が軽くなってしまう。

……驚いた？ちゃんと友達いるのよ、私。

それはさておき。
今は全員で校庭に集まり、クラス毎に分かれて整列してる所。
何で校庭かって言うと、これから起こるちょっとしたイベントが原因だ。
……と、いっても、それを知ってるのは、この学園内ではごく僅かなんだけど。
私と、紅也と、エルシアさん、クリスさん、三咲（みさき）さんくらいかな？
後は学園の教師と、生徒会などの一部生徒。
ともかく、私が言いたいのは、これがサプライズだってこと。

「えー、以上、学園長のお話でした。では、次は――」

さて、そろそろだ。
次の学園主任からの話が終われば、そのタイミングで行動が起こる。
私の役目はないけど、観客として楽しませて貰おう。

「――特に3年生の皆さんは、今学期のうちに国家や企業から――」

後少し。
予定では、あと2分後。

「――ですから、最上級生として、世界に羽ばたく人材として……」
「先生！不明機が3機、学園内に侵入しました！」
「なんですって！？」

――始まった。

マイクによって全校生徒に届いてしまったその報告により、周囲がにわかに騒がしくなる。
特に一年一組。
あのクラスには、紅也を除いても5人の専用機持ちがいる。
その全員が集合して、即座に迎撃態勢を整えてる光景は、やはり圧巻の一言に尽きる。

「映像、出ます！」

誰かの声と共に、空中に巨大なディスプレイが浮かび上がる。
そこに映ったＩＳを見て、誰もが驚愕の表情をする。

モニターに映し出されたその機体は、珍しい全身装甲タイプ。
白と赤で彩られた手足に、黒い胴体。
背部には真っ赤なフライトユニットが装着されており、左腕にはシールドが。
そして、特筆すべきは、右腕に握られたビームライフル。

「レッドフレーム……？」
「紅也……なのか？」

ざわめく開場の中で、誰かがこぼした呟き。なぜかその声だけははっきり聞こえた。
が、その声も、続く映像によって引き起こされた騒ぎにより、あっさりとかき消される。

「ねえねえ、見て！あの機体……。」
「えー！？レッドフレームが、三機……？」
「うっそー！紅也くんが三人？どうなってるのよー！」

そう。
モニターに映し出された機体は、一機ではない。
三機。
最初の一機に続き、後ろから二機が随伴していたのだ。

「ＩＳが三機も……。」
「先生！何故専用機持ちを出撃させないんですか？」
「大丈夫だ。何も問題はない。」
「え……？」

騒ぐ生徒たちとは対照的に、教師たちはあくまで冷静だ。

「あれは……。みんな、多分戦う必要はないよ。」
「シャルロット……？」

一組のみんなも、映像を見て何かに気付いたシャルロットの言葉により、警戒態勢を解く。
それにより、一部生徒たちの騒ぎはだんだんと小さくなっていった。

……あーあ、もっと盛り上がると思ったんだけど。
しょうがない。じゃ、セカンドステージを始めましょうか。

「…そろそろ出てきて。」
「極めて了解！」

ごく短い通信。
でも、相手は私の意を酌み取って、即座に行動を開始する。

「！　織斑先生、校内に不明機の反応が……。」
「なんだと？予定と違うぞ……。」

織斑先生の言葉を皮切りに、教師の間にも動揺が広がる。
…計画通り。

「すぐに映像を出せ！」
「待ってください！今出しま……あ、あれ！？」

増えたモニター。しかしそこに映し出されたのは、白色の光の残滓のみであった。

「な、なんて速さですの……。」
「信じられん。紅椿と同等か、それ以上か……。」

専用機持ちから漏れる、驚愕の叫び声。
これだ。これが聞きたかった。

そして間もなく、三機の不明機が肉眼で見える位置に現れる。
三機とも全力でスラスターを吹かし、かなりのスピードで校庭に接近している。
しかし――
それを嘲笑うかのように、新たな不明機が三機を追い越していった。

なるほど。
データでは知っていたけど、確かに速い。
知っている私でもこうなのだ。他の人から見た衝撃は、どれほどのものなのか。

「……。」

現に、簪なんか固まってるし。
それだけ、この機体は非常識なのだ。

生徒たちの上空で、不明機は静止する。
まず目についたのは、真っ赤な胴体。そしてそこから伸びる、すらっとした白い手足。
さらに背中にはとても短い赤い翼と、そこから伸びる光の翼。
既存のどの機体とも違う、ＡＳＴＲＡＹ（王道から逸れた）のフォルム。
その姿に、ここにいる誰もが目を奪われた。

不明機を囲むように、三角形（デルタ）のフォーメーションを展開する三機のレッドフレーム。
…そろそろいいだろう。
私は、学園長に向かって合図を送る。

「えー、ここで皆さんにお知らせがあります。」

緊迫した状況の中、突如響き渡った学園長の声により、生徒たちが正気を取り戻す。

「このたび、オーストラリアの国営企業、モルゲンレーテより……第三世代相当の量産機が提供されることになりました！」

「「「「えええええええっ！？」」」」

その一言で、生徒たちは再びざわめく。

「だ、第三世代……？」

「学園の打鉄やラファールは、第二世代機なのに……。」

「どういうこと？戦力増強？」

「あー、だから三咲たちいなかったんだ。」

一方、専用機持ち達も。

「やっぱり……。」

「やっぱり、って。どういうことだよ、シャル？」

「あの機体、夏休みに見かけたんだよ。モルゲンレーテで。」

話し声が徐々に大きくなる中、学園長の言葉は続く。

「もっとも、提供されたのはフレームのみで、コアは学園で用意しましたが……。

それでも、この機体の性能は驚異的なものです。では、紹介しましょう！学園専用の新たな練習機……その名は、『Ｍ１アストレイ』です！」

その言葉に応じるかのように、三機のレッドフレーム――Ｍ１アストレイが降下する。

やや遅れて中央の不明機も、光の翼を広げながらゆっくり下りてきた。

「Ｍ１、アストレイ……？」

「そういえば、嫁の機体も『アストレイ・レッドフレーム』だった

な。道理で似たような機体であるわけだ。」
「……あ！葵の専用機も『アストレイ・ブルーフレーム』だったわ。」
「なるほど。だから葵さんだけは動じてなかったんですわね。……で、シャルロットさん。最後の一機は何者ですの？」
「それは……僕にも、分からない。でも、状況から考えるなら、あれは……」
「――紅也に違いない。」

一夏、ラウラ、鈴音、セシリア、シャルロット、そして箒が話し合い、答えを導き出す。
すると、答え合わせをするかのように、中央の不明機から声が発せられた。

「――以上、モルゲンレーテの新型量産機、および最新鋭機のお披露目でした！
ＩＳ学園の皆さま、ご協力に感謝いたします！」

聞こえてきたのは、まぎれもなくあの声。
一ヶ月以上、この学園内では聞かれなかった、あの声だ。

同時に、不明機の姿が霞み始める。
手足は崩れて光の粒子となり、崩壊は腕や脚へと及ぶ。
そんな幻想的な光の中に、人間の手足が見え隠れしている。
やがて、身体の全てが光となり、その光が消え去ったとき――

そこに、一人の少年が立っていた。
夏を経て日焼けし、褐色がかった肌。
いつの間にやら染め直した紅い髪と、今までには無かった白いヘッドバンド。

手足には僅かに傷跡も。なんだか最後に会ったときより、ワイルドになった気がする。
そして、最大の特徴。それは、私と同じ黒みを帯びた碧眼。
――私の兄、山代紅也がそこにいた。

◆

そのまま全校集会は終わり、私は体育館裏へと急いだ。
全力を出すまでも無くすぐにたどり着いた私が見たのは、三機のＭ１と紅也の姿だった。

「よう、葵！どうだ？成功か？」
「…バッチリ。」

親指をグッ、と上げることで、計画の成功をアピールする。
あれだけのことを、ＩＳ学園の始業式でしでかしたのだ。
ビーム兵器搭載型量産機の情報は、すぐに各国政府や企業に伝わるだろう。

「先輩方も、お疲れさまでした。すみませんね、こんな茶番につき合わせてしまって。」

次いで紅也は、Ｍ１に向かって挨拶をする。

「いいっていいって！こっちも、上からの命令だからな！」
「気にしないで、紅也くん、葵ちゃん。私も、Ｍ１に乗れて嬉しか

ったし。」
「残念なのはー、コレがウチらの専用機じゃないことだよねー。」
すると三機のＭ１から返事が返ってくる。
…当然だ。普通のＩＳは、人がいなければ動かない。

このＭ１に乗っているのは、私達と同じくモルゲンレーテのテストパイロット。
上からクリスティーナ・キャンベル、エルシア・グリーンフィールド、観布子三咲の三名だ。
モルゲンレーテ社内では、「新・三人娘」なんて呼ばれてる。
ちなみに、三人とも２年生。私達の先輩だ。
でも、専用機は持ってない。私より弱いから。

「それでも、ありがとうございます。俺にも見せ場を作ってもらって。」
「律儀だなー、紅也は。」
「えっと、カッコ良かったよ、紅也くん。」
「それにはどうかーん。ま、冬木ほどじゃないけど。」
「ちょっと三咲、また彼氏自慢!?」
「ハハハ……。とりあえず、そのまま学園の倉庫まで行ってください。Ｍ１を届けるまでが、俺達の仕事ですよ。」

長くなりそうだった話を途中で切り、紅也は三人を追い払う。
それに不平をこぼす三咲さんをエルシアさんとクリスさんがなだめ、三人は倉庫へと飛んでいった。
紅也は、それを見送るかのように、じっと空を眺めてる。

「…で。そろそろ出てきたらどうだ?」

でも、唐突に。
私の後ろをこっそりついてきた数名に向かって呼びかけるかのように、そんな言葉を発した。

「あ……バレてたか……。」

一夏の言葉を皮切りに、ぞろぞろと人が出てくる。
その数、総勢8名。

――8名?

「えっと……そちらの3年生は、どなたでしょうか?」

そう言って紅也が指さしたのは、紅也以上に褐色肌の女子生徒。
私も見たことが無いけど……ホントに誰?

「私か?私はダリル・ケイシー。アメリカの代表候補生だぜ。」

どことなく紅也と似たしゃべり方の女は、荒っぽい口調でそう答えた。

「で、そのケーシィ先輩はどのようなご用件でしょうか?
……ま、まさか!後輩を体育館裏に呼び出して、この人数でリンチする予定とか!?」
「んなわけあるか!こいつらとは別件だ、別件!お前ら二人に礼を言いに来たんだよ!」
「礼……?アメリカ……?褐色肌……!
うわぁぁぁぁ!命だけは……いや、いっそサクッと殺してくれぇぇぇ!!」
「…紅也?」

何か変なスイッチが入ったかのように、紅也が取り乱し始める。
その様子に私は勿論、ケイシー先輩や一夏たちもあっけにとられていた。

「バ、違ぇよ！お礼参りじゃねえ！
純粋なお礼！Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕって言いに来たんだよ！だから落ちつけ！！」
「…ホント？ホントに、あいつの手先じゃないのか？」
「あいつってのが誰かは知らんが、違うから安心しろ！」
「…良かった。」

そう言いながら、涙をぬぐう紅也。
…夏休みの間に、新しいトラウマでも増えたのかしら？

「グスッ……で、ケーシィ先輩、俺達、礼を言われるようなことはしてませんけど。」
「…同意。」

これは本当。
確かにＮ．Ｇ．Ｉに恩は売っていても、アメリカ自体には何もやってない。
少なくとも、私達個人としては。

「ああ、確かに、直接的には何もないけどよ。間接的に、お前らは私のためにしてくれたことがある。」

言うなり胸元に手を突っ込み、何かを探し出すケイシー先輩。
それを見た私は――

「えーと、葵？頭が痛いんだけど……。」
「見ちゃダメ。」

反射的に紅也にアイアンクローを決め、視界を塞いでいた。
一方……。

「シャルに……鈴か？前が見えないんだが。」
「いいの！見えなくて！」
「むしろ、見たら殺すわよ！」

一夏の方も、似たり寄ったりの状況だった。

「何やってんだよお前ら……。ホラ、これ、見てくれよ。」

先輩の手に乗るそれを確認した私は、紅也の拘束を解く。
未だに頭を押さえ続けている紅也は、薄く開けた目でそれを見て、なにやら納得したようだ。

「カーキ色のペンダント……。成程、これは……」
「…ＩＳの、待機形態。」
「そうだ！お前らが奪還した機体。それが私のモノになったんだ！」

…やっぱり。
なんとなくそんな気はしてたけど、間違いない。
この色合い、このタイミングを考えると、これはあの機体に違いない。

「はあ……。じゃ、礼は葵に言ってください。奪還作戦でコイツと戦ったのは、葵だったんで。」
「いやあ、紅也の活躍も大きかったって言ってたぜ。Ｎ．Ｇ．Ｉの

テストの人が。」

……エイミーさん。

「では、ありがたく受け取っておきます。
…もう奪われないで下さいよ。俺、死ぬかと思ったんですから。」
「奪われたのは私じゃなくて、Ｎ．Ｇ．Ｉにいた誰かだろ？ま、せいぜい気をつけるよ。」
「…ホントに、気をつけて。」
「ああ。じゃあ、ありがとな、紅也！葵！」
「どういたしまして、ケーシィ先輩。」
「…礼には及ばない。」

私達は先輩に手を振り、その後ろ姿を見送る。
――が、突如その後ろ姿が反転したかと思うと、ケイシー先輩は唐突に紅也を指さし、言った。

「それから紅也！お前、私のこと『ケーシィ先輩』って言ってるけど、『ケイシー』だからな！」

――ああ、今更ツッコムんだ。それ。

第８５話　三年生？初めて見た……。（後書き）

三年生。タイトルがフェイントでした。
みんな大好きたっちゃんさんの出番はもう少し先です。

第８６話　お昼休みはウキウキウォッチン♪（前書き）

ひたすら説明会！な第８６話です。
紅也が進化しました。得意なタイプが増えたと同時に、トラウマも増えました。

では、どうぞ！

第８６話　お昼休みはウキウキウォッチン♪

「……と、いうわけで。」

ユニオンのフラッグファイター先輩を見送った後、俺は空気を変えるために咳払いをし、一夏たちの方へ向き直った。

「ＩＳ学園よ！私は帰って来た！
……みんな、ただいま。不肖山代紅也、地獄の淵から帰って来たぜ。」

そう言って、バッ！と両手を広げる。

……広げた。

……。

……おかしいな？

「――って、アレ？ここは『紅也！お前、生きてたのか！』とか『ホントに、ホントに、幽霊じゃないんだな！？』とか『バッカやろう！心配かけさせやがってぇっ！』とか言って、みんなにもみくちゃにされるシーンじゃないか？普通。」

同意を求めてみんなを見ると、ほぼ全員が白い目で見てる。

「いや、だって、なあ……。」
「最後に会ったときは、普通に元気そうでしたし。」
「葵も『大丈夫』って言ってたし。」

「僕に至っては本社で会ったし。」
「諜報部が無事を確認していたからな。」
「……そもそも、そういうセリフは……『敵機の自爆に巻き込まれて死んだと思われていた味方のパイロットが、仲間のピンチに天から颯爽と表れて敵を不殺。そのまま安全圏まで退避してヘルメットを脱いだ後』……に、かけられる、言葉……。」
「ええー……。」

あーあ。帰ってきて早々滑ったのか、俺。
池袋の紀田くんじゃないんだから、まったくもう……。
後、簪。ゴメン、せっかく長台詞をクーガー兄貴ばりの早口で噛まずに言いきったのに、聞きとれなかったぜ。

……それにしても。

「箒？お前のつっこみだけまだ終わってないぞ。どうした？」

箒は、さっきから一言も発していない。
やばいな。まだ、この間俺が言ったことを引きずってんのか？

「……無事なんだな？」
「へ？あ、ああ。見ての通りだ。」
「もう、無理はしてないのだな？」
「あ、ああ。昨日まではちょっと大変だったけど、もう命の危険は……」

そこまで言うと、突然箒は俺に向かって駆け寄ってきて――

唐突に。
そう、本当に唐突に。

俺に抱きついてきた。

「……へ？」

あまりの事態に俺は、そんな間抜けな声を上げるしか出来ない。
が、そんな俺の戸惑いをよそに、箒はそのまま俺の腕やら脚やらに触り始めた！

「腕もある、脚もある、身体もある……。……幽霊じゃ、ないんだな？」
「も、もちろん。幽霊じゃ……ナイヨー？」

その気になればそれっぽいことができる、というのは隠しておこう。
まだ、身体が無くなっても生きていられるかどうかまでは分からないし。

「そうか……。本当に、戻ったんだな……。良かった……！」

抱きついた姿勢のまま、すすり泣きを始める箒。
その様子を間近で見せられた俺は、昔葵にやっていたように、ポンポンと頭を軽く撫でる。

「ほーら、泣くな。泣くな。」
「うう……グスッ……」
「泣くなー。泣くなー。」

子供をあやすように頭を撫でながら、ふっと顔を上げると……

「「「「「「「「「「……。」」」」」」」」」」

そこには、生温かい目でこちらを見守る三人と、憤怒の形相を浮かべる四人の姿が。

「怒るなー。怒るなー……」

撫でる手を止め、箒から離れ、「まあまあ」と両手を前に突き出す。

「紅也さん？いきなり見せつけてくれますわねぇ。」
「浮気は許さんぞ。」
「……紅也、くん？」
「…弁解は？」

うわあ。みんな、いい笑顔。
これで額に井形が浮かんでなければ、最高のシチュエーションなんだけどね。

「…いやあ、こういう流れだと、ああするのが一番自然……」
「…みんな、判決は？」
「「「Ｇ（有罪）ｕｉｌｔｙ！」」」

葵の問いに対し、セシリア、ラウラ、簪が審判を下す。
するとラウラと葵は、一瞬だけ足に力を溜め――爆発的な加速力で俺の胸に飛び込んできた！

「Ｓｈｉｔ！」

とっさに後方に飛んで相対速度を減少させるも、葵の方が一枚上手だった。
なんと、ラウラを踏み台にして更なる加速をかけてきたのだ。

「なんだか、この光景……。」
「デジャヴ、ですわね……。」

鈴音とセシリアが何か言ってるが、気にしてる余裕はない！
葵の手を傷めないように右腕でガードし、その勢いでさらに後方へ。
そして体勢を立て直すべく、俺は左腕を地面につき――そのまま跳んだ。

「は……？」
「え？どうなってるの！？」

どうなってるもなにも、普通じゃない力を使って、普通に跳ねただけだ。
空中で身体を起こし、右手で体育館の突起を掴む。
そして地上を見下ろしてみると、そこには憮然とした葵の姿と、唖然とする他のみんなの姿が。

「こ、紅也さんって……あんなに力がありましたっけ？」
「分からない……。でも、あたしが同じことやろうとしても、難しいと思う。」
「……ただの、技術者？あれで……？」
「馬鹿な……あり得ん！」
「そうか……。今度は、大丈夫なんだな。」

セシリア、鈴音、簪、ラウラ、箒が、それぞれ思ったことを口にする。

「ま、長い休みを経て俺も成長したってことで。じゃ、話は後で！早くいかないと遅刻するぜ！」

ひょい、っと手を離し、俺はそのまま着地する。
そして拡張領域にしまってあるスケボーを取り出し、そのまま教室へと急いだ。

「げっ！もうこんな時間だ！」
「次の授業、誰だっけ？」
「山田先生ですわ！」
「教官でないなら、まだマシだ！」
「よし、急ごう！」
「……ま、待っ……。」
「…簪、お先。」

後方から聞こえる、怨嗟とも焦りともとれる声を無視しながら。
俺は久々に、校舎内に足を踏み入れた。

◆

「…と、いうわけで……ただいま！山代紅也、帰ってきたぜ！」
「「「「おかえりー！山代くーん！！」」」」

教室に戻り、挨拶を終えた俺を待っていたのは、相も変わらずノリの言いクラスメートと、そんな彼女らに気圧された副担任、山田麻耶であった。
先生、授業潰してごめんなさい。

「やまぴー、何かワイルドになったね～。」

「ホントホント！前はもっと白かったのに。」
「完治しやがったのか？おめでてえな。」
「あの、みなさん……。」
「日焼けしただけだよ。俺、オーストラリア出身だから。」
「なるほどなるほどね！」

いきなり浴びせられた質問に答えてる間に、専用機持ち達も教室に入って来た。
間にあって良かったな、みんな。

「ねえねえ！あのＩＳ、なに？モルゲンレーテの新型？」
「授業を……。」
「どうして量産機を提供したの？」
「私の話を……。」
「検査の結果、どうだった？」
「ストーーップ！そろそろ山田先生泣きそうだよ！
質問は休み時間に聞くから、今は待ってくれよ。な？」
「「「「はーーーい！！」」」」

俺がそう言うと、ようやく騒ぎは収まった。
それを見計らい、俺は山田先生に声をかける。

「すみませんね山田先生。では、授業を始めてください。」
「ううう……何で？私、先生なのに……。」

あれ？せっかく騒ぎを押さえたのに、何で残念そうな顔をしてるんだろう。山田先生は。
そういう表情してると、本当に子供みたいですよ。

◆

「では、これより『第一回！コウヤにおまかせ！』のコーナーを始めます！」

「「「「イエーーーイ！！」」」」

授業も半分終わって昼休み。

宣言通り俺は、みんなからの質問を受け付けることにしていた。

「紅！あんた、やけにテンション高いわね。」

「そりゃそうだ。一か所に留まってても狙われない。食事に毒も入ってない。水が飲める。

こんな環境に戻れたら、誰だってテンション上がるって！」

「……ホントに、何があったのよ……。」

この会話で分かるように、今や一年一組には、クラス内外問わず多くの人が集まっていた。

「はいはーい、新聞部でーす。帰って来た男性ＩＳ操縦者、山代紅也君にインタビューに来ました～！」

「おっ、質問ですか？何でも聞いてください！」

「じゃ、まずは一つ目～。篠ノ之さんと抱き合った感想は？」

ピシリ……。

空気が、凍った。

「だ、抱き合ったって……どういうこと？」
「どういう意味？ねえ、どういう意味？」
「それは……もちろん男女の……」
「きゃーーっ！聞きたくない聞きたくない！」

「……あーあ。みんな誤解してますよ。どう収拾つけてくれるんですか、これ。」

騒ぎだす妄想女子（ガールズ）を無視し、俺は黛先輩に問いかける。
しかし、彼女は相変わらずニコニコ――いや、ニタニタした笑顔。
くそう！謀りおって！

「質問に答えたらいいんじゃない？感触も、感想も、ありのままを、全部！さあさあ！」

くっ……。何故だ！
押されている！？この俺が？
……！なんだ、あれは！奴の頭にメカっぽいウサミミが見える！
馬鹿な。天災が乗り移ったとでもいうのか？

「…いえ、とっさに抱きとめてあやしただけなんで、よく覚えてませんよ。」
「ちぇっ、つれないなー。」
「まあ、箒は紅也の姿を見て安心したんだろ。だから抱きついただけですって。」
「……ホントにそうかなあ？」

俺の弁明と、一夏の援護によって、とりあえずこの質問は流れた。
黛先輩もこれ以上聞く気が無いみたいだし……良かった。

「まあ、いいや。
じゃ、第二問！夏休みに何やってたの？ひょっとしてぼっちだったとか？」
「夏休み……？」

そう言われて、俺はひと月前の出来事を思い出す。（入院編第1～8話）
えーと、確かしばらくは検査で、面会も全部断ってたな。
だからチャットしたり、葵と電話したり、仕事したりしてたけど……。

そういや、シャル子と箒以外は家族としか会ってねぇな。
セリアやソフィアの見舞いも、腕の件があったから断ってたし。
モルゲンレーテの関係者たちは……話すのがダルいから拒否ってたな。

……あれ？つまり、俺ひとりぼっちだった？

「あれ……？ひょっとして図星だったとか……？」

いや、そんなことはない。
思い出せ、あの後を。
父さんが地球に下りてきて、俺の抱えていた問題が解決して、それから……

それから……

「うあぁぁぁぁぁぁっ！！忘れてえーーーっ！！」
「え？ヤバッ、私地雷踏んじゃった？
ゴメン、山代君！ジョークのつもりだったの！ゴメンね～！！」

いやだ……。
もうあんな町、二度と行きたくねえ。
そもそも、奴に狙われたのに無事に帰ってこれたのが奇跡だったんだ。
「ザ・ロスト」のジョニーや、ユセフに助けてもらえなかったら、俺はとっくに……。

「じゃ、じゃあ最後の質問！
山代君が操縦してたあのＩＳ。アレは一体なに？」
「よくぞ聞いてくれました！」
「きゃあっ！」

どこからか技術関連の質問が飛び出たため、俺のライフはディアン・ケトを使ったかのように回復した。
いきなり身体を起こしたため、心配して寄って来たとおぼしきセシリアを相当驚かせちまったようだが……そんなの関係ねぇ！

「アレは我がモルゲンレーテが開発した次世代高機動試験型のＩＳ！その最大の特徴は……」
「紅椿以上の加速力だろう？」

横から茶々入れてきた箒をジト目で睨む。
すると箒は小さく「うっ……」という呻き声を上げた後、黙ってしまった。

「へえ。それ、新型じゃなかったんだ。前にそっちに行ったときは無かった機体だから、てっきり紅也のために造られた物だと思ってたよ。」
「何！？シャルロットは嫁の家に行ったことがあるのか！？」
「な、なんですって！？」

「ちょっとラウラ、セシリア！近い！顔が近いって！！」

騒ぐ三人はさておき。

「加速力もそうだけどな。コイツは、実際に宇宙で活動してた機体なんだ。」

「え！？モルゲンレーテって、そんなことまでやってたの？」

俺の言葉に大きく反応したのは、鈴音だ。

「てっきり、ＩＳ開発のみの企業だと思ってたんだけど。」

「それもあるけど、ＩＳってのは元々、宇宙開発のために造られたものだろ？

その理念を追い続けてる部門だってあるんだよ。」

「ふーん。なんか、珍しいわね。」

「…それだけＩＳってモノの存在理由が歪んじまったんだよ。」

鈴音の認識は、正しい。

でも、それゆえに、現在の世界はＩＳという存在を誤解しているのだ。

ただの兵器に、意志はいらない。

なのに、ＩＳコアには意識が宿る。その理由を、誰一人として考えない。

……まあ、これは「彼女」の受け売りなんだけどさ。

「で。そろそろ質問に答えてくれない？」

「ああ、そうでしたね。

あの機体の名称はデルタアストレイ。三機の試作機の後にＡＳＴＲＡＹの名を与えられた、四番目のＡＳＴＲＡＹです。最大の特徴

王道から逸れた者

は、なんといってもあの光の翼！元々は単騎で月まで行くための機体だったので、その加速性能は折り紙つきですよ！」
「へえ。それはずいぶんと面白いね。……で、何で月なの？月に何かあるの？」
「いえ。月まで行けたらすごいなーって。そんなノリで作られた機体ですから。」
「……。」

俺は開発者から聞いたコメントを思い出し、黛先輩に伝える。
そのあんまりな内容に、さすがのうるさい先輩も沈黙してしまった。

「…まあ、男には例え無意味と分かっていてもやらなきゃいけないことがあるんですよ。」
「それ、今言うべきセリフじゃないよね……。もっといい場面で使うべきだよね。」

ん？うまくまとめたつもりだったんだけど……まあ、いっか。

「はーい！じゃあ質問タイムは終了！俺もそろそろメシ食いたいから、ここは解散ね！」
「ちぇーっ。」
「まあ、いっか。」
「私達もご飯にしよ。」
「私私、ハンバーグ！」
「子供か、アンタは！」

俺の言葉で、集まっていたみんながぞろぞろと解散する。
うん、このノリの良さこそＩＳ学園だ。

ようやく「帰って来た」と実感しながら、俺も専用機持ちを伴って

食堂へと向かうのだった……。

第８６話　お昼休みはウキウキウォッチン♪（後書き）

夏休み……具体的にはアメリカに行ってからの出来事は、描写する予定がないのであしからず。
ただ一つヒントとしては……「ニコ・ベリックとトラブルになった」とだけ言っておきましょう。
分かる人にはわかります。

さて、宣伝です。
活動報告の方にも書きましたが、クリスマスイヴの２４日、２３時にクリスマス記念短編を投稿します。
ＩＳじゃなくてＦＡＴＥ／ｚｅｒｏです。興味がある人はそちらも見て下さい。

第87話　失われた誇りを取り戻せ！（前書き）

タイトルはシリアス、でも内容はアレな感じの87話です。
鈴と紅也の掛け合いは書いてて楽しいです。でも、鈴はヒロインじゃないです。
まだ、ね……。

では、どうぞ！

第87話　失われた誇りを取り戻せ！

九月三日。
二学期初の実戦訓練の日。
そして、俺が初めてデルタで戦闘する日……の、はずだったんだけど。

「でやあああああっ！！」
「くっ……！」
「逃がさないわよ、一夏！」

状況は見ての通り。クラス代表同士ということで始まったのは、一夏と鈴音のバトルだった。
二人がこういった「公」の場で対決するのは、実にクラス対抗代表戦以来だ。
そのため、両クラスの生徒たちは盛り上がっているのだが……。

「…一夏、押されてるな。」
「ああ。機体性能では白式の方が上なのだが。」
「でも、白式は燃費悪いからね。それに対して、鈴の甲龍は安定性重視。相性の差もあるんじゃない？」

先ほどまでは拮抗していた勝負も、今や流れは完全に鈴音のもの。
俺達実戦経験組から言わせてもらえば、既に勝敗はほぼ決まっていた。

「せめて、一夏にも遠距離武装があれば、状況が違ってたと思うが。」

「仮にあったとしても、エネルギー配分を考えなければ同じことになりかねませんわ。」
「そうだな。
アーリヤ以上の燃費の悪さと、月光以上の攻撃力。地上限定なら相当強いけど、空飛ぶとなるとなぁ……。文字通り、次元が違うというか。」

そうこう話してる間にも、状況は動いていく。
五度目の瞬時加速をかけたところで、雪片弐型のエネルギーが切れたのだ。

「しまっ――」
「切り札を連発しすぎたわね！それがあんたの敗因よ！」

連発される衝撃砲。
それにより、一夏と鈴音の距離は開き始める。
そして白式のバランスが崩れた瞬間、鈴音は連結した大剣、月牙天衝を投擲した。

「だから、双天牙月だってば……。」
「？　何言ってんの、シャル子。」
「二度ネタはよくないって話。」
「？」

うーん。シャル子の言うことは、たまによく分からねぇな。

投擲された双天牙月によって体勢を崩された一夏は、ついに鈴音を見失ってしまった。
姿を消した鈴音の居場所は、セオリー通りの後ろ……ではなく、一夏の直下。

三次元戦闘では、これが厄介だ。死角が非常に多い。
鈴音は一夏の足を掴み、そのまま地面に向かって放り投げる。
もちろん、そんなものに大したダメージは無いが……位置が悪い！
鈴音は、太陽を背に立っていた。
故に、一夏は眩しさで目がくらみ――
「もらい！」
「！？」
足を天に向けた姿勢のまま、衝撃砲の連射を受ける一夏。
それが立て続けに浴びせられ、すぐさま試合終了のアラームが鳴り響いた。

◆

その後一夏と鈴音はもう一度戦ったんだが、結果は変わらず。
二連勝を果たした鈴音は、一夏に昼飯をたかっている。
ここにいるのはいつもの面々。
……とはいえ、箒と簪は来てないけどな。
「ラウラ、それおいしい？」
「ああ。本国以外でここまでうまいシュニッツェルが食べられるとは思わなかった。
食べるか？」
「わあ、いいの？」

「うむ。」

シャルロットとラウラは、聞いてた通り仲が良さそうで。

「あー、ドイツってなにげに美味しいお菓子多いわよね。バウムクーヘンとか。中国にはあんまりああいうのが無いから羨ましいっていえば羨ましいかも。」

「ドイツのお菓子だとわたくしはあれが好きですわね、ベルリーナー・プファンクーヘン。」

鈴音&セシリアコンビがその話題に乗っかって。

このへんはだいたいいつも通り。

そりゃそうだ。

彼女たちは、何も知らない。

知らないから。

知られていないからこそ、いつも通りに接してくれる。

「こ、紅也は……何か、好きな菓子はあるのか？」

「……ん、俺か？」

問題は、ここ。

チートな姉がいるせいで俺の秘密を知ってしまった、この子。

篠ノ之　箒。

「そーだな……。ジャーマンポテトとか好きだぜ。」

「おいおい、それはお菓子じゃねえって。」

「ま、まあ一夏。大学イモと間違えたのではないか？」

ほら、ここ。
俺を会話に参加させたがったり、不自然なフォローをしたり。
ここだけ、不協和音が生じてる。
今のところは、鈍感一夏が無意識にフォローしてるおかげで、かろうじて「いつも通り」だけど、どうなることやら……。

「いや、ジャーマンポテトだ。じゃ○りこの。」
「スナック菓子かよ！」
「あはは……。今はスイーツの話をしてたんだよ。」
「うーん、それじゃあ、ミルフィーユかな？」
「ミルフィーユか！うん、あれはいいものだ。」
「嫁も、なかなかいいセンスをしているな！」
「だから、嫁になったつもりはねえっての。」

軌道修正。
何で、こんなに会話に気を使わなきゃいけないんだよ。
「いつも通り」にしてくれ、って。言ったハズなんだけどな……。

「紅也さん？どうかなさいましたの？」
「え？ああ、女の子はみんな甘いもの好きだな、って思ってね。」
「一概に女性＝スイーツ好きとは言えませんが、そういう人が多いのは確かですわ。」

ふうん。確かに、葵ってあんまり甘いもん食べないよな。
……というか、「甘い」とか「辛い」とか、そういう感覚を超越した物を好むよな。
お兄ちゃん、ちょっと心配。

「はぁ……。それにしてもなんで二回とも勝てなかったんだ……。」

「だから、燃費悪すぎなのよ。アンタの機体は。ただでさえシールドエネルギーを削る仕様の機体なのに、瞬時加速までバカバカ使うから……。」
「まったくだ。最大加速を使うとどんどん耐久力が減っていくから、慎重にな。」
「それ、ゲームの話だよね？今真面目な話をしてるから、ちょっと自重してね。」
「む、何の話だ？」
「デュバル少佐の話だ。」

……と、冗談は言ってみたものの、確かに白式は使いづらい。
自分の体力を喰って起動する切り札、『零落白夜』を使うには、どんな敵にも接近できるような機体操作能力と、一撃を確実に決めるだけの腕前が必須だ。
織斑千冬にはそれがあり、織斑一夏にはそれがない。

ただし、『今のところは』という条件付きだが。
だってそうだろ？
織斑千冬がＩＳを動かしてきた時間と、一夏がＩＳを動かした時間。
それは決定的に違うのだから。

まあ、時間が全てとは言わないし、ＶＴみたいな反則もあるけど、やはり経験というのは大きなファクターだ。

「うーん、白式にＡＩＣでも積んでみれば、それだけで問題解決しそうだけどな。」
「白式が受け付けてくれればな。」
「そうですわね。白式には、後付武装が一切ありませんし。」
「機体の好みによって装備できない物もある。白式はよっぽどワガ

ママみたいね。」
「なあ、ひょっとすると、紅也の『ガーベラ・ストレート』ならいけるんじゃないか？」
そう言って、ちらり、と俺の脇に目を向けたのは、箒。
目線の先には、俺の愛刀が――あるわけねぇだろ！
どこぞのウェイトレスみたく、年中帯刀してないんだよ。俺は。
「……まあ、仮に白式が気にいったとしても、ダメだ。ガーベラはやらん。」
あれは師匠から貰った、いわば免許皆伝の証。
そうやすやすとあげるわけにはいかんのだよ！
「ま、そうだよね。」
「うむ。嫁といったらあの刀、だからな。」
「だから嫁じゃねーっての。」
ラウラのこの押しの強さは懐かしいが、やめてくれ。
恋愛ならともかく、学生結婚はごめんだ！
「エネルギー、か……。そういや、あの時――福音と戦ったとき、な。箒からエネルギーを貰ったことがあったんだ。」
「え!?どういうこと？」
「わっ！いきなりどうしたんだ、シャル！」
ポツリ、と一夏が漏らした一言に、シャル子が大きく反応する。
そりゃ当然だ。エネルギーの移動ってのは、そんなに簡単にできることじゃない。
現に、ＶＴ－ＩＳと戦ったときにシャル子が一夏にエネルギーを譲

渡したときは、あんなに時間がかかってた訳で。

「――つまりＩＳ間のエネルギーの譲渡っていうのは、そんだけ難しいのよ。」

「……って！俺の説明＆独白が喰われた！？」

鈴音に肝心なところを掻っ攫われた。

「こ、紅也さん？何か……？」

「いや、気にするな。

…悔しいから補足しておくと、シャル子がやったコアバイパス経由のエネルギー譲渡だって、普通じゃ出来ないことだ。それを、手を握っただけでやってのけた？石破ラブラブ天驚拳でも撃つ気か？」

まあ、完成したゴールドフレーム天なら手すら触れずにできるがな、と心の中で補足する。

だってこんなこと言ったら、絶対質問責めになるし。

「ら、ラブラブ……？一夏と、私が……？」

「ちょっと紅！今の言葉、訂正しなさい！」

「そ、そうだよ！それに、僕だってそのくらい……。」

おっと、話が大幅に逸れてる。

「じゃあ結局、エネルギー問題を解決するには、一夏と箒が組むのが一番ってことで。」

「いや、私が一夏と組むわけには……」

「じゃあ、あたしに譲りなさい！」

「ちょっと待てって！俺が組むとしたら、やっぱりシャルかな。」

「えっ……。」

その言葉は、一体誰が発したものだったのか。
だって、あの一夏が、『ペアの相手を指定』だぞ？
ありえるのか、こんなことが。

「え、えっと、ど、どうしてかな？」

どきどき。
そんな心境が完全に態度に出ているシャル子に対し、一夏は――

「前に組んだから。」

――バッサリ。
無抵抗の相手を、後ろから零落白夜で斬りつけるようなマネをしやがった。

「あ、そう……。」

天国から煉獄の檻へ叩き落とされたシャル子は、とたんに虚ろな表情になり、食事を再開する。
カルボナーラの上に乗る半熟たまごをかき混ぜるシャル子は、なんというか……怖かった。

「あんたってひどいわね……。」
「女心をなんだと思っているのだ、まったく！」
「一夏さんの唐変木ぶりは時折許せませんわね。」
「お前、ケリィ以上に酷い奴だな。」
「シャルロット、カフェオレをおごってやろう。だから気を持ち直せ。」

一夏に放たれる、誹謗中傷の数々。
悪いが弁護する気はない。むしろ俺も加わった。
……にしても、ラウラは成長したな。こんな気遣いができる子になるなんて。
きっと、ルームメイトのシャル子が、いい影響を与えたんだろう。
そしてリライブ完了して、今に至る……と。

「あ、ありがとう、ラウラ。それとみんなも。」

感激した様子のシャル子は、一夏以外の全員に微笑みを返す。
うん、ヤンデレ化の兆しは完全に消えたようだ。

「べ、別にあんたのために言った訳じゃないわよ。」
「王道のツンデレだな。……9点。」
「紅(ホン)？それ、何点中か言ってごらんなさい？」
「…14点中？」
「何でそんなに半端なのよ！」

がーっ、と吠える鈴音。それを見た俺は、ふと『あること』を思い出し、隣を見る。
隣に座ってるのは、金髪縦ロールが似合うプロレス好きのお嬢様。

――あれ？情報が混線してる？

「…セシリア、いいのか？」
「？　何がですの、紅也さん。」
「相方(リンイン)にギャグキャラ枠盗られてるけど。」
「いつからわたくしがギャグ要員になりましたの！？」

いや、ねえ……。
帰ってきてからセシリアいじってないなぁ、って思ってね。

「…っていうか、あたしがいつからギャグキャラになったのよ！」
「ん、今ですかね？」
「何で丁寧口調なのよ！」
「気になりますか？」
「あと、なんで疑問形！？」
「なんででしょう？不思議ですね？」
「あーっ！イライラするぅ～！！」
「大丈夫ですか？薬を持ってきましょうか？」
「薬はいいから、そのしゃべり方をやめなさい！」
「わかった、これでいいのか？」
「疑問形も禁止！」
「今のは違うだろ！？」

……と、まあここまで話してから、俺と鈴音はセシリアを見る。
否、見つめる。

「ど、どうしましたの？わたくしの顔に何かついていますか？」

その様子にただならぬものを感じたのか、しどろもどろになるセシリア。
それを見て、俺達は――

「「はぁ……。」」

長い、長いため息をついた。

「え？ええ？」

「セシリア……俺達がボケ倒してるのに、何でつっこまないんだ？」
「はあ！？」
「あんたね……。そんなキャラじゃ、この先生きのこれないわよ！」
「え、えーと、先生……？」

お。ちょっとボケた。
これは……いい傾向か？

「思い出せ、セシリア！輝いていたあの日々を！栄光の日々を！」
「そうよセシリア！プールで踏み台になって、みんなの笑いをさそったあの日を忘れたの！？」
「で、ですから、わたくしは……」
「「くどい！！」」
「ひっ！？」

……はあ。どうやら、ダメだったようだ。
夏休みという長いブランクは、彼女の魂を完全に眠らせてしまったらしい。

「行こうぜ、鈴音。これ以上俺達ができることなんて、ない。」
「そうね。じゃ、先に行くわよセシリア。……私の言葉の意味、考えておいてね。」
「え！？ちょっ、紅也さん？鈴さん？」

騒ぐセシリアを置いて、俺達は昼食を片付ける。
その心の中に、形容しがたいモヤモヤを抱えたまま……。

◆

一方。
食堂に……というか、会話に置いていかれた者たちはというと――
「…紅也と鈴は、本当に仲がいいな。」
「もう付き合っちゃえばいいのに。」
「なっ!?そのような暴言、いくらシャルロットとはいっても許さんぞ!」
「まあ冗談はそれくらいにして……。確かに、息はピッタリだな。さっきの話じゃないけど、もしまたタッグトーナメントを組むとしたら、紅也のペアは鈴が一番だと思うぞ。」
「いや、ここは私だろう。紅也が言っていたではないか。ＡＩＣと刀は相性がいいと。」
「うーん、やっぱり葵じゃない?ずっと組んでるわけだし。ヘリックス姉弟以上にできるって紅也が言ってたよ。」
「誰だ?ヘリックス姉弟って。」
「さあ?」
「…私が組むのもやぶさかではない。」
「箒?どうしたんだよ?」
「珍しいね。箒が一夏以外と組みたがるなんて。」
「いや、なんとなく、だがな……。紅也の機体の両手を掴んで、命がけでエネルギーを渡しに行くというビジョンが……。」
「何だよ、それ?」
こんな会話が繰り広げられたとか、なかったとか。

第87話　失われた誇りを取り戻せ！（後書き）

最後に箒が言ってるアレは、Δアストレイのラストシーンです。分かる人には分かります。

第８８話　生徒会長の一存（前書き）

投稿時刻が遅れて申し訳ありません！第８８話です。
かいちょーさんの登場です。それでは、どうぞ！

第８８話　生徒会長の一存

セシリアたちを置いて食堂を離れ、さっきのやりとりのことで一通り笑ってから数分。
鈴音と別れた俺は一旦部屋に戻った後、次の授業の準備のため、男子専用のロッカールームへと向かった。
まあ、男子……っていっても、俺と一夏の二人しかいないわけだから、無駄に広い。
俺、ここに住もうかな……なんてバカなことを考えながら、俺は新調されたＩＳスーツに着替え始めた。
デザインは今までと同じで、手足の先まですっぽりと覆うダイバースーツのようなもの。
これは装甲と皮膚の間の接触を防ぐためのものだから、変更しようがないのだ。
大きな変化は、その外見。
ヴォワチュール・リュミエールによる超加速に耐えるために造られたこのスーツの生地は二層構造になっており、二層の間には衝撃吸収のためのジェル状物質が存在するのだ。
つまり、なんていうか、その……

身体が、ね。一回り大きくなったように見えるんだよ。

着ぐるみほどじゃないけど、見て分かるほどふっくらした自分の身体を見ながら、少し肩を落とす。
機能は知ってるんだけど、デザインって大事だよね。

「……と、いうわけで、再設計を提案する！」
《あきらめろ。これでも薄くした方だ。》

さっき部屋からとって来た8に提案したところ、あっさりと棄却された。

「いや、モルゲンレーテが本気出せば、スーツの改良くらい……」

《これ以上薄くするとなると、お前の身体を改造する必要があるな。》

「やだな、冗談だって。この年でリンクスにはなりたくねぇよ。」

《Ｌａ＋プログラムも無いしな。》

「そっちのリンクスじゃねえよ！」

機械相手にギャーギャー騒ぐ。このやりとりも久しぶりだ。

向こうじゃ、遊んでる余裕なんて一切なかったからな。あー、貧乏ってヤダ。

そんなことを考えていたときだろうか。

ロッカー室の入口。そこのドアの近くに、違和感を感じた。

何かが入って来たわけではない。

まるで、『ドアは開いたのに、誰も入って来なかった』ような、そんな違和感。

殺意も無く、意志も無く、圧倒的な『無』。

それが俺に向かって迫ってきているのを認識し、自覚したとき、それは姿を現した。

「あっ、バレちゃった？勘が鋭いんだね、キミ。」

発せられた声により、『無』が『有』に変わる。

聞き覚えのある声だ。

新学期が始まる前に、電話越しに聞いた声。

ＩＳ学園生徒会長。

その名は――

「…更識簪姉（さらしきかんざしねえ）。」
「何でそんな古文の作者みたいな名前で呼ぶのかは知らないけど、それで合ってるよ。」
そう言って目の前の二年生は、『見事』と書かれた扇子をヒラヒラさせる。
あんなの売ってるんだ。日本って。
「…で、その生徒会長が、何で男子更衣室にいるんですか？実は男だったとか？」
「あ？そんなこと言うんだー。それじゃ、証拠でも見せて……」
「分かりました、覗きですね。今から織斑先生呼ぶんで、動かないでください。」
「……やだなー、冗談だって。」
学園最強の称号を持つ、生徒会長。
しかし、それはあくまで『生徒たちの間で』という限定がつくらしい。
「話を戻しますよ。…実は男だったとか？」
「そこに戻すんだ？おねーさんちょっとびっくり。」
「冗談です。
さて、表向きの目的は俺の着替えを覗きに来たってことで合ってるとして……裏の目的は？」
「表も裏も無く、私の目的はただ一つ。キミとの顔合わせだよ。」
うん、いじり甲斐のない反応だ。
さすがに、深い所で長く活動してるだけのことはある。経験も能力も、俺とは段違いだ。

「顔合わせ？何のためですか？」
「決まってるじゃない。あんな無茶なことを認めさせた厚い面の皮を、直接見に来ただけのことだよ。」
「あー、モルゲンレーテのデモンストレーションですか……。あのときは失礼しました。本当は、電話じゃなくて直接交渉したかったんですけど、入院中でして。」
「それは知ってるわよ？その原因も含めて、ね。」

そう言って、挑発的な表情で俺を――正確には、俺の左腕を見つめる。
なるほど。どうやら、俺を驚かせたいらしいな。
確かに、部外者以外には秘中の秘である『俺の入院の原因』を知っていると言われ、俺は動揺してる。
その事実を突き付けて、悦に入りそうなところで悪いけど……斬り返させてもらうぜ。

「そうですか。妹さんにでも聞きましたか？事情を知ってる人となると、そのくらいしか思いつかないんですけど。」
「ッ！ええ、そうよ。ＩＳと戦って怪我した、ってね。」
「まあ、それは隠すほどのことでもないんで、広めないでくだされば結構です。
……そろそろ、この話止めませんか？」
「ふふふ、そうね。ここでこれ以上話しても、時間の無駄でしょ？」
「はい。織斑先生に怒られちゃいます。」

そう言ってから扇子を開くと、そこには『再見』と書かれていた。
……『ここで』、ね。一矢報いた代償は、どんな形で帰ってくるのやら。
一抹の不安を胸に抱きつつ、俺はアリーナへと向かうのだった。

……あ、もちろん時間には余裕があるぜ。
途中ですれ違った、全力ダッシュ中の一夏とは違ってな。

◆

「では、午後の実習を始めるが……織斑はどうした？」
実習開始時刻。
そこに一夏の姿が無いことに目ざとく気付いた織斑先生は、俺に向かってこう尋ねた。

「一夏なら、俺が着替え終わったころにロッカーに来ましたけど。おおかた、狸にでも捕まったんじゃないですかね？」
「……まあいい。とりあえず実習を始めるぞ。今日は空中制動訓練を行うから、各班、練習機を取りに行け。『打鉄』が3機に『ラファール・リヴァイヴ』が2機、それから――『M1アストレイ』が1機だ。早いもの勝ちだぞ。」
「各班のリーダーは、専用機持ちが勤めてくださーい。班分けは出席番号順でーす！」

織斑先生と山田先生の言葉によって、女子たちが一斉に駆け出す。
彼女たちの狙いは、最近になって配備された1機。
そう。モルゲンレーテ製量産機、M1アストレイだ。

「山代。お前はM1の班を見てやれ。この中で一番M1に詳しいのはお前だろう。」

「そりゃそうですけど。……いいんですか、そんなこと言っても？」
「何故だ？」
「そりゃ、あれ……」

言いながら俺が指さした方向を、織斑先生が見る。
その方向――山田先生がＩＳを持ってきたカートのある所は、戦場のような様相を呈していた。

「新型、新型……。」
「山代くんと同じ班になるのは私よ！」
「第三世代機、乗りたい！」
「山代君の機体……ハアハア。」

うぬぼれる気はさらさら無いが、俺は貴重な男性操縦者（偽）。
そんな俺と無条件で同じ班になれると知った女子たちは、血眼になってＭ１を手に入れようとしていた。

「馬鹿野郎が……。」

こめかみを押さえつつ、出席簿を片手に織斑先生は進む。
さあ、ドラを鳴らせ！将軍様の出陣だ！

「いい加減にしろ、馬鹿どもが！」

スパパパパパパパパパパパ……

（測定不能）Ｈｉｔ！　Ｎｅｗ　Ｒｅｃｏｒｄ！

目にもとまらぬ、マトリックスな速さで振り抜かれる出席簿。
前に一夏が織斑先生を「関羽」と評していたが、「呂布」の方が正

しいのではあるまいか。
ガチで一騎当千とかできるんじゃ……って、ミサイル相手にやってるか。白騎士で。

「…って訳で、織斑先生は呂布だと思うんだけど、そこんとこどう思うんだ、一夏？」
「げっ、気付いてたのか、紅也！」

俺が呟いた一言に反応するのは、どさくさまぎれにアリーナへの潜入を果たした一夏。
織斑先生にバレないように入ったつもりらしいが……俺程度にバレてるなら、何の意味も無い。

「――織斑。遅刻とはいい度胸だな。」

ほら。
一人三国無双を終えた織斑先生が、仁王立ちして待ってるよ。

「お、織斑先生！じ、実は見知らぬ女生徒に話しかけられて、気がついたら授業が――」
「……遅刻の言い訳は以上か？」
「いや、あの……あのですね？だから、見知らぬ女生徒が――」
「ではその女子の名前を言ってみろ。」

そこまで聞かれて、一夏が急に焦り出す。
……ああ、名前を聞いてないんだな。

「だ、だから！初対面の二年生……って待てよ。そういえば箒に似てたような……。」
「箒？一年四組の更識か？」

「は、はい！そうです！」
「と、いうことは……。……分かった。織斑、白式を展開しろ。」
「あ、はい！」

どうやら織斑先生には、それが誰なのか見当がついたようだ。
にしても更識先輩……帰ったんじゃなかったのか？

織斑先生の指示に従い、一夏が白式を展開する。
これにどんな意味があるのか？その答えを、俺はすぐさま思い知ることになる。

「デュノア、ラピッド・スイッチの実演をしろ。的はそこの馬鹿者で構わん。」

それが遅刻の罰だった。
いきなりの指示を受けたシャル子は混乱すると思いきや、二つ返事でそれを了承。

――ああ、一夏が知らない女の子と楽しく『お話』してたのが気に入らなかったんだね。

すっごくイイ笑顔のシャル子を見て、俺はこの子を怒らせないようにしようと心に決めた。

「あ、あの、シャル……ロット、さん？」
「なにかな、織斑くん？」

うわぁ。なんか、某少年跳躍の不定期連載漫画を彷彿とさせる場面だ。
良かった、対象が俺じゃなくて。

「はじめるよ、リヴァイヴ。」
「ま、待っ――」

一夏の言葉が終わる前に、放たれる弾丸。
これは両肩の部分に浮遊する〈シールドソード〉から発射されたガトリング。
それを避けつつ上空に逃げた一夏に対し、進路を塞ぐかのようにアサルトカノン〈ガルム〉を放つ。
一夏は回避に成功したものの、その足を止めてしまう。
その刹那、シャル子の右腕の〈ガルム〉は消失し、代わりに握られているのはアサルトライフル〈ヴェント〉。さらに左腕には連装ショットガン〈レイン・オブ・サタディ〉を構え、ぐんぐん一夏に接近する。

――うん、やっぱり器用だな。シャル子は。

マディガン氏が設計した複合武器を使いこなし、高速切替も行う。
これなら、安心してオレンジフレームを使いこなせるだろう。
武装を減らして、全部複合武器に変えれば、拡張領域はだいぶ空くはずだし。
そうすれば、あのシステムを組み込むことくらい……

「さようなら……一夏。」
「シャル！話せば分か――」

状況終了。
一夏の懐に潜り込んだシャル子は、〈ＭＣハンドガン〉を呼び出し、銃身の下に取り付けられたナイフ〈アーマーシュナイダー〉を『白式』の装甲に突き立て、銃を固定。

そしてそのまま……何度も何度も引き金を引いた。
……あれ、一応ビーム兵器なんだけど。オーバーキルじゃない？
しかも、とどめとばかりにシールドソードを掴むと、刃の部分で一夏を斬りつけた！
うわぁ、容赦ねぇ。
「さて、余興は終わりだ。授業を始めるぞ。」
こっちも容赦ねぇ！！

◆

「えーと、じゃあまず機体の装着だけど、胸部の装甲の脇にボタンがあるだろ？それを押すんだ。」
さて、実習中。
無事Ｍ１を手に入れた一組の田島さんの班に加わった俺は、早速Ｍ１の装着方法を教えていた。
「あっ、装甲が開いた！」
「こうしてみると、他のＩＳと変わりませんね。」
「ニールセンさん、大正解！後は普通のＩＳと同じ。
脚部に足を入れて……ブーツを履くみたいな感じで。それから背中を背面に預けて。
……よし、起動した！」

「山代くーん？次はどうするの？」
「ああ、両腕を腕部装甲に通して。……終わったか？
なら次は両腕をぎゅっと握って拳を作ってくれ。そうすれば装甲が閉じる。」

M1が操縦者の動きをトレースし、拳を作る。すると開いていた装甲が閉じて、操縦者である愛姫さんの姿が見えなくなった。

「……とまあ、これで後は自由に動かせる。次は武器だけど……そっちから見て右側にあるのがビームライフルで、左腕に装備されてるのがシールド。で、バックパックにマウントされてる二本の白い棒がビームサーベルだ。とりあえず、ビームライフル構えてみて。」
「う、うん。分かった！」

立ち上がるM1アストレイ。
そのまま右手を下ろし、大地に置かれたビームライフルを掴んだ瞬間、銃口に緑色の光が集まり始め――

「…って！危ない！」
「えっ！？……キャッ！！」

声に驚いた愛姫さんは、ビームライフルを空へと向ける。
放たれる光。
それを見ながらも俺はデルタを展開し、ヴォワチュール・リュミエールを起動する。
そしてビームの射線上に先回りし、腰の左側へと手を伸ばす。
そこにあるのは、もう一つの俺の相棒。
レッドフレームより受け継がれた、唯一無二の一振り。

「てぇい！」

――その銘は、ガーベラ・ストレート。
熟練者が使うことで、ビームすら断ち斬る刀。

「言い忘れてたけど、ビームライフルは引き金を引かなくても発射できる！
第三世代武装だから、イメージ・インターフェースで動いてるんだ！注意してくれ！」
「ご、ごめんなさいっ！」
「分かればＯＫだ！ビームってのは強力な兵器なんだ。それを扱ってるっていう自覚を持ってやってくれよ！……みんなもいいか！」
「「「「は、はいっ！！」」」」

ふう。
誰もいないから良かったものの、もし誰かに当たってたらちょっとした惨事だ。
俺の教え方も悪かったけど、『兵器』を扱ってるっていう自覚は持ってもらわないとな。

「やー、山代くん、怖かったぁ……。」
「普段ふざけていますけど、やっぱり違いますよね。」
「うんうん！今のも、すごく速かったし！」
「『プロ意識』ってやつかな。すごいよね～。」
「…お前ら！ホントに俺の言ってること分かってるんだよな？」

……あるよな？自覚……。

第８８話　生徒会長の一存（後書き）

さて、ようやくヒロインズ（仮）がそろった……。
次話が今年最後の更新……って、当たり前ですね。年末なんだから。

第８９話　カッとなってやった。正直、後悔してる。（前書き）

今年最後の本編です。
皆さん、よいお年を。

では、急転直下（？）の第８９話、どうぞ！

第８９話　カッとなってやった。正直、後悔してる。

「よし。じゃあ行こうか、葵。」
「…うん。」

朝練を終えて食事を取り、部屋に戻って制服に着替える。
たったそれだけのことなんだが、妙に懐かしく、そして嬉しく感じるのは何故だろう。
どうやら通い始めて数カ月で、俺はこの、ＩＳ学園での生活に愛着を持ってしまったようだ。
箒と話したときも感じたけど、俺にとってこの『日常』は、失いたくないと思うほど重要なものへと変わってしまったらしい。
……最初は、スパイもどきの行動だったのにな。不思議なもんだ。

自分たちの部屋である１０１７室に鍵をかけ、二人揃って教室へと向かう。
そして、階段を一歩踏み出そうとしたところで――葵に制服を引っ張られた。

「ぐえっ……。」

見かけからは想像もできないような力で引っ張られ、一瞬息が詰まる。
潰れたカエルって、こんな感じの声を出すんだろうなぁ……じゃ、なくて！

「どうしたんだ、葵？」
「…今日は、こっち。」

左腕一本で俺を引きつつ、葵が指さしたのは校庭――の、向こうのホール。
…ああ、そういや。
「今日のＳＨＲと一限で、全校集会やるんだっけ。」
コクリ。
葵が頷く。
それにしても、この時期に全校集会とは。
先生……じゃ、ないよね。原因は。
脳裏に浮かぶのは、一人の先輩の姿。
最初の依頼人にして、一人の友人とよく似た、その姿。
……性格は真逆だったけどな。
そんなことを考えながら、俺は葵と共にホールへと向かうのだった。

◆

〈ｓｉｄｅ：山代　葵〉

全校集会が始まった。
内容は、今月にある学園祭についての説明。
…退屈だ。そんなの、みんなとっくに知ってるのに。
「ねー、葵ちゃん。今日の山代くんどんな感じだった？」
「…間違って、教室行こうとしてた。」
「へー。そんなうっかりさんなところもあるんだねー。」

「でもさ、完璧超人よりはそういう『弱点』みたいなのがある方がかわいいよな。」
「あ！分かる～。そういえば葵ちゃん。」
「…何？」
「葵ちゃんが好きなタイプって――」
「それでは、生徒会長から説明をさせていただきます。」
「…話はおしまい。」
「そーね。」
生徒会役員らしき司会者が告げたその言葉をきっかけに、周囲が静まっていく。
その様子に合わせるかのように会話を止めた私達は、ただ静かに壇上を見つめた。
そして――
「やあみんな。おはよう。」
「…あ。」
現れたその人物を見て、私は間抜けな声を上げてしまう。
そこにいたのは、先日スコープ越しに見た、簪のお姉さんらしき人物だったのだ。
「ふふっ。」
その様子に気付いたのか、彼女は薄い笑みを浮かべる。
でも……すぐに気付いた。
あれは、私に向けられたものじゃない。具体的には一組の誰か……
紅也か一夏だろう。

そう思ってさらに注意していたら、今度は私の方を向く。
視線が一瞬交錯する。
瞳の奥に垣間見えた彼女の感情は……興味？
ひょっとして、今ので、前に監視してたのが私だと気付かれた？
…墓穴掘った。

が、そんな私の内心を気にも留めない様子で、彼女は話し始める。
生徒会長として。

「さてさて、今年は色々と立て込んでいてちゃんとした挨拶がまだだったね。私の名前は更識楯無（さらしきたてなし）。君たち生徒の長よ。以後、よろしく。」

そう言って再び頬笑みを浮かべる彼女……更識楯無。
その表情に魅了されたのか、列のあちこちから熱っぽいため息が漏れた。

「あの人こそ本当の完璧超人だよな。」
「『弱点』、あるのかなー？」

先ほどまでのやりとりを思い出したのか、メリッサとりんごが小声でつぶやく。
…自粛しなさいよ。周りに聞こえるわよ？

「では、今回の一大イベント学園祭だけど、今回に限り特別ルールを導入するわ。その内容というのは……」

言いながら、更識先輩は懐から扇子を取り出し、横へとスライドさせる。
するとそれに応じるように、空間投影ディスプレイが浮かび上がっ

た。

「……名付けて、『各部対抗織斑一夏争奪戦』！」

閉じた扇子が、ぱんっ！と開く。

それに合わせて、ディスプレイには一夏の写真が大きく映し出された。

「え……」

「えええええええええ～～～～～～っ！？」

その宣言に。

会長の言葉に。

それに返事する叫び声で。

世界が、揺れた。

「静かに。」

それでも、たった一言で静寂が訪れる。

この会長。やることなすこと突拍子なくても、求心力だけは抜群らしい。

「学園祭では毎年各部活動ごとの催し物を出し、それに対して投票を行って、上位組は部費に特別助成金が出る仕組みでした。しかし、今回はそれではつまらないと思い――」

びしっ、と扇子を前に向ける会長。その先にいるのは……おそらく一夏だろう。

「織斑一夏を、一位の部活動に強制入部させましょう！」

そして、再び巻き起こる歓声。
…うるさい。

「うおおおおおおおっ！」
「素晴らしい、素晴らしいわ会長！」
「こうなったら、やってやる……やぁぁぁってやるわ！」
「「「ＯＫ！忍！！」」」
「今日からすぐに準備はじめるわよ！秋季大会？ほっとけ、あんなん！」

何だか、空を断つ牙を連想させるような声が上がったのは、まあ無視するとして……。
いくらなんでも、最後の一人はまずくないかしら？
しかも、なんか聞き覚えのある声だったような。…部長？

「よしよしよしっ、盛り上がってきたぁぁ！」
「今日の放課後から集会するわよ！意見の出し合いで多数決取るから！」
「あれ？そういえばもう一人の子……山代君はどうするの？」
「そうだ！山代君もついてくるとか？」
「ええ～～っ！一位の所が織斑君で、二位の所に山代君が行くの！？」
「それ本当！？だったら、ウチにもチャンスが……。」

突然、誰かから飛び出した疑問。
それが誤報となって会場内を飛び交い、ホールを満たすのに一分もかからなかった。

「ちょっと待てぇぇぇ！一位が一夏で二位が俺ってのはどういうこ

とだ！俺が一夏より劣ってるってか！？ざっけんなちくしょぉぉぉぉ！」

そして聞こえてきた、そんな声。

…何やってるのよ、紅也。

「あら？山代君は、織斑一夏くんより下に見られるのが嫌なのかしら？」

「あったり前田のクラッカーパーティだぜ、更識先輩！そもそも、俺とあの未熟者を比べるんじゃねぇっすよ！」

「ちょっ、紅也！なんかいろいろ酷くないか！？」

それを会長と一夏があおり、紅也の声はどんどん大きくなる。

あまりの剣幕に、先ほどまで騒いでいた周りの子も全員黙ってしまい、その顛末を見守る。

「ひどくねぇよ！鈴音ごときにフルボッコたぁ……。情けなくって涙が出らぁ！てやんでい、べらぼうめぇい！」

「もはや意味不明だっ！？」

「――ふーん。じゃ、一位の部活に山代くん、二位の部活に織斑くんなら文句ないわけね？」

「ああ！その条件ならいくらでも……はっ！？」

普段の冷静な紅也なら、ここまで熱くはならなかっただろう。

でも、タイミングが悪かった。

久々に帰って来た学園の懐かしさにテンションが上がり、夏休み中の出来事のせいで『当たり前のこと』でも無上の喜びを感じるようになってしまった、今の紅也には。

冷静さなど、期待できなかった。

結果――

「……と、いうわけで今年の学園祭では山代紅也を一位の部活動に、織斑一夏を二位の部活動に強制入部させることが決定しました！」

「「「「わぁぁぁぁぁぁ！！！」」」」

「だぁぁぁぁぁぁっ！？」

藪からバジリスクが飛び出した。

◆

〈ｓｉｄｅ：山代　紅也〉

失敗した。

失敗した。失敗した。

失敗した失敗した失敗した失敗した失敗した失敗した失敗した――ッ！

あの全校集会の後。俺は一人、ホールの中で打ちひしがれていた。

「……で、何か言い訳はありますか？山代紅也。」

「まさか、その場の勢いだけであんなこと言ったわけじゃありませんよね？」

「うっ……ごめんなさい。名護屋河先輩、天白先輩。」

訂正。一人ではなかった。

打ちひしがれていた俺を見下ろす……否、見下す二人は、俺が所属

する部活動、弓道部の部長・副部長コンビであった。

「本気ですか。本気でのーぷらんなのですね。ならば……」
「身から出た錆です。仕方ありませんけど……」
「「喰らいなさい！！」」
「ぎゃあぁぁぁぁぁぁ！！」

降りそそぐ矢の嵐。
俺は何となく、英雄王と対峙する贋作者のような気分になりながら、
今度こそ崩れ落ちた。

◆

何もない空間に浮かぶ、四角い砂嵐。
その場にいた誰もがそこに注目し、その場にいた誰もが声を発せず
にいた。
そんな、沈黙を。

「――ねえ、パパ。どうして何も映ってないの？もっと見たいよ、
宇宙。」

ただ一人、無垢故に何も知らぬ幼子の声が、破り捨てる。
注意の沈黙も、緊迫した空気も気にせずに。
年相応の好奇心で目を光らせるその子は、ぐいぐいとスーツの袖を
引く。

「――ッ！そうだ、乗組員へ連絡を！」
「無線！赤外線！何でも試せ！」
「コアを使った量子通信を！……通じない！？」
「クラウス！クロウ！ニコラス！マリア！――ロバーク！！」
「〈ｔｙｐｅ－００〉は無事か？あれには多額の資金を……」

にわかに騒がしくなる室内。でも、彼にはそんなことは関係ない。

「ねえ、パパ……。」

このとき、彼は。
目の前の景色の意味を理解するには、あまりに幼すぎた。

◆

「……あ？うぅ……。」

西日が差す保健室で、俺は目を覚ました。
どうやらあの嵐のような弾雨を喰らい、気絶したらしい。
布団をはがし、自分の身体の具合を見る。

…制服に穴は空いてない。どうやら二人とも手加減してくれたようだ。
身体にもあざ一つ残ってないのに、痛みだけはある。
そんな、絶妙な手加減を。

「……あ、気がついた？」

微塵もありがたくない配慮に感動して涙が出そうになるが、次いで聞こえた声に気付いてそれをこらえる。

――この事態の元凶に、見せる涙など無い。

「……何しに来たんですか、更識簪姉（さらしきかんざあねえ）。」

「だから、普通に呼んでってば。山代紅也くん。」

近場の椅子に腰かけ、どこか楽しげな――しかし薄っぺらな――笑みを浮かべているのは、この学園の生徒会長、更識楯無その人であった。

「…じゃあ、更識先輩と。」

「うむ、よろしい。で、用件なんだけど、ちょっと一緒に来てくれない？」

「何故ですか？ひょっとしてさっきの馬鹿げた提案、取り消してくれる気になったとか？」

「ん、察しがいいね、キミ。」

「え？本当に……」

そうだよな。

あんなの、売り言葉に買い言葉。その場の勢いに流された発言に、強制力なんてあるわけがないじゃないか！アンタもそう思うだろ？

「その件に関しては、先程の職員会議で正式に決定したから。もう覆らないよ。」

…思わないのか？

そうか。

俺だけ、なのか……。

「なんで、思わせぶりな発言をしたんですか？」
「そりゃ、そっちの方が面白そうだったから。」
「それだけっすか！？」

酷い、あんまりだ。
というか、誰か止めてくださいよ。
……え？自業自得？

「とまあ、それは置いといて。」
「あっさり流された！？」

またも扇子を取り出し、ばっと勢いをつけて開く更識先輩。
そこには、『本題』の二文字が。……また新しい扇子か。もう驚かねぇぞ。

「実は、一夏くんは『強制入部』に不満があるらしくてね。」
「まあ、そうでしょうね。」
「そこで私と勝負して、一夏くんが負けたら従うことになったのよ。」
「……はあ？無茶苦茶じゃないですか、そんな条件！？」

一夏の提案。
それは、あまりに公平性を欠いたものだ。
負けたら、っていうのは、実は非常に微妙なルールだ。
ならば、何を以って負けと定義するのか……。それを決めていなければ、勝負にならない。
そう――

「そんなルールで、一夏が勝てるわけが無い！」
「あら、知ってるのね。私のこと。」

この人に勝つには、そんなあいまいな条件ではいけない。
『敗北』を定義し、『勝利条件』を提案し、その上で裏をかく。
そのくらいしなくては、『格下』の一夏では勝てない相手なのに。

「そりゃあ、まあ。『ＩＳ学園の生徒会長。それ即ち学園最強』ってのは有名ですから。
ま、一夏みたいに部活やってない人間じゃ、知らないのも納得できますが。」
「本人にも説明したんだけどね。どうやら誰かさんみたいに、うっかり口を滑らせたみたいだよ？」

……ぐうの音も出ない。

「…で？何でそこに俺が関わってくるんですか？」
「それはね、どうせならキミにも挽回のチャンスをあげようと思って。」
「ちゃんす？」
「そ、チャンス。機会ってこと。
キミが私と勝負して、負けたら私の言うことに従う。それでどう？」

そう言いながらも、笑みを崩さない更識先輩。
その表情に浮かぶのは、慢心でも油断でもなく、実力に裏付けされた笑顔。
自分が負けるとは微塵も思っていない。
そんな、冷たくも美しい笑み。

「…俺の『勝利条件』は、俺が更識先輩を『倒す』こと。で、『敗北条件』は俺の降伏か、俺の身体が動かなくなること。……それでいいですか？」

「うん、いいよ。どうせ私が勝つから。」

果てしなく不利な条件なのに、笑みを崩さない更識先輩。

…本当に、自分が負ける所など想像していないのだろう。

面白れぇ。

『学園最強』を名乗るこの先輩で、試してやろう。

夏を経て生まれ変わった俺の、新しい力を。

そして――

進化の現実ってやつを教えてやる。

第８９話　カッとなってやった。正直、後悔してる。（後書き）

と、いうわけで次回は紅也ＶＳかいちょーです。
紅也の力の一端が明かされます。

最後になりますが、皆さん。
一年間、お疲れ様でした。
来年も、良い一年になりますよう、祈っています。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8600u/

IS～RED&BLUE～

2011年12月31日16時15分発行